東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告

— 平成12年度 —

平成13年3月

東大阪市教育委員会

例　言

1．本書は、東大阪市教育委員会文化財課が、東大阪市建設局下水道部の委託を受け、平成12年1月～12月末日まで実施した公共下水道管きょ築造工事に伴う埋蔵文化財調査の概要報告である。

2．本書には西代遺跡、日下遺跡、馬場川遺跡、千手寺山遺跡、鬼塚遺跡、辻子谷遺跡、鬼虎川遺跡、神並古墳群、暗峠越奈良街道、下六万寺遺跡、神並遺跡、若宮古墳群、段上遺跡、出雲井遺跡群、岩滝山遺跡、みかん山古墳群、水走氏館跡、半堂遺跡、馬場遺跡、芝ヶ丘遺跡、縄手遺跡、上六万寺遺跡、額田寺跡、衣摺遺跡、西ノ辻遺跡の概要を収録した。

3．現場は才原金弘・東徹志・木村健明・東朋子・吉田綾子・松田留美、遺物整理は現場担当者と槇原美智子がおこない、報告の分担は各章の表に記した。

4．本書に収録した現場写真は、各担当者が撮影し、遺物は株式会社アステムに委託して実施した。

5．西ノ辻遺跡第43次調査に収録した遺構図の一部は、株式会社アコードに委託して実施した。

6．土色名に数字が入っているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じている。

7．調査の実施にあたっては、東大阪市建設局下水道部のご協力のもと、施工業者ならびに近隣市民の方々のご協力を賜った他、現場作業および整理作業には井上成、田中実、国分陽介、高畑慎太郎、松田亮一、村上昇、坂野正典、中谷圭伸、磯崎雅弘、宮浦和也、西川美奈子、大山えりか、大畑洋恵、川田純子、朝平琴、八田美代子、西村慶子、永井佐都子、堂阪加奈、釜田友里恵、久詰裕代、大久知子、宮田佳代が従事した。これらの方々に記して感謝いたします。

目　次

第１章　平成12年度の下水道関係調査について …… 1
第２章　西代遺跡の調査 …… 4
第３章　日下遺跡の調査 …… 6
第４章　馬場川(第11次)・西代遺跡の調査 …… 8
第５章　千手寺山遺跡の調査 ……15
第６章　鬼塚遺跡の第24次調査 ……17
第７章　辻子谷遺跡の調査 ……25
第８章　鬼虎川遺跡の第51次調査 ……27
第９章　神並古墳群の調査 ……34
第10章　暗峠越奈良街道・鬼塚遺跡(第25次)の調査 ……37
第11章　鬼塚遺跡の調査 ……42
第12章　下六万寺遺跡の調査 ……45
第13章　神並遺跡(第28次)・若宮古墳群の調査 ……47
第14章　段上遺跡の調査 ……52
第15章　出雲井遺跡群の調査 ……54
第16章　岩滝山遺跡の調査 ……56
第17章　みかん山古墳群の調査 ……58
第18章　水走氏館跡の調査 ……60
第19章　半堂遺跡の第２次調査 ……62
第20章　馬場遺跡の調査 ……70
第21章　鬼塚遺跡の調査 ……72
第22章　芝ヶ丘遺跡の第10次調査 ……74
第23章　岩滝山遺跡の調査 ……80
第24章　縄手(第15次)・上六万寺遺跡(第５次)の調査 ……82
第25章　額田寺跡(第２次)・鬼塚遺跡(第26次)の調査 ……86
第26章　衣摺遺跡の調査 ……90
第27章　西ノ辻遺跡の第43次調査 ……92

第１章　平成１２年度の下水道関係調査について

東大阪市教育委員会が下水道管埋設工事に伴う発掘調査を実施して、3年目も終わろうとしている。下水道工事は前年と同様に東地区を中心におこなわれた。

今年度の調査件数及び調査内容の概略は下記の調査一覧表に記した。調査にあたり下水道部と文化財課で協議したが、工事は道幅の狭い旧集落内や道路の迂回路が確保できない場所が多かった。種々の条件により立会調査が大部分を占めた。西ノ辻遺跡では、付帯工事に伴い広範囲で発掘調査を実施した。また、交通量の問題から夜間工事になり、調査を断念した遺跡もある。

今年度の調査成果は西ノ辻遺跡で弥生時代の集落を検出したことや鬼塚遺跡の範囲がさらに東に伸びることを確認したことなどが上げられる。

今回の収録した調査は平成12年１月１日より12月31日までに実施したものを対象とし、それ以後のものは次年度に報告することにした。

平成12年度下水道工事に伴う埋蔵文化財の調査一覧表

（平成12年12月31日現在）

	届出番号	下水番号	遺跡名	届出の工事名称	調査場所	調査	調査期間	調査結果・所見
1	11-128	下設-47	西代遺跡	平成10年度公共下水道第33工区管きょ築造工事	横小路町５丁目	立会	12.3.1～12.3.15	第２章で報告。
2	11-413	協-11-8	日下遺跡	平成10年度公共下水道第67工区管きょ築造工事	日下町７丁目	立会	12.1.20～12.1.28	第３章で報告。
3	11-415	協-11-67	西代遺跡	平成10年度公共下水道第78工区管きょ築造工事	横小路町４丁目	立会	11.8.23～12.2.22	第４章で報告。
4	11-416	協-11-67	馬場川遺跡	平成10年度公共下水道第78工区管きょ築造工事	横小路町４丁目	立会	同上	同上
5	11-496	下設-131 協議追加	鬼虎川遺跡	平成11年度公共下水道第３工区管きょ築造工事	弥生町	慎重		夜間工事のため慎重工事に変更。工事実施。
6	11-497	下設-131 協議追加	西ノ辻遺跡	平成11年度公共下水道第３工区管きょ築造工事	弥生町	慎重		同上
7	11-498	下設-130 協-11-70	千手寺山遺跡	平成11年度公共下水道第１工区管きょ築造工事	上石切町２丁目～東石切町４丁目	立会	11.11.22～12.1.11	第５章で報告。
8	11-499	下設-129 協-11-54	鬼塚遺跡	平成10年度公共下水道第77工区管きょ築造工事	南荘町～新町	立会	11.11.15～12.4.20	第６章で報告。
9	11-500	下設-128 協-11-42	辻子谷遺跡	平成10年度公共下水道第75工区管きょ築造工事	中石切町２丁目	立会	12.3.1～12.5.15	第７章で報告。
10	11-501	下設-127 協-11-22	鬼虎川遺跡	平成10年度公共下水道第69工区管きょ築造工事	西石切町４丁目～５丁目	立会	12.1.6～12.1.31	第８章で報告。
11	11-589	下建-425	神並古墳群	平成11年度公共下水道第11-4工区管きょ築造工事	上石切町1丁目	立会	12.4.12～12.7.14	第９章で報告。
12	11-657	下設-171 協-11-14	暗峠越奈良街道	平成10年度公共下水道第68工区管きょ築造工事	立花町地内	立会	11.11.25～12.1.6	第10章で報告。
13	11-657	下設-171 協-11-14	鬼塚遺跡	平成10年度公共下水道第68工区管きょ築造工事	立花町地内	立会	同上	同上
14	11-689	下設-175 協-11-52	鬼塚遺跡	平成11年度公共下水道第９工区管きょ築造工事	豊浦町	立会	12.1.26～12.3.8	第11章で報告。
15	11-690	下設-176 協-11-65	下六万寺遺跡	平成11年度公共下水道第11工区管きょ築造工事	下六万寺町２丁目地内	立会	12.1.24～12.3.1	第12章で報告。
16	11-691	下設-177 協-11-47	神並遺跡	平成11年度公共下水道第20工区管きょ築造工事	東山町地内	立会	12.3.13～12.5.15	第13章で報告。

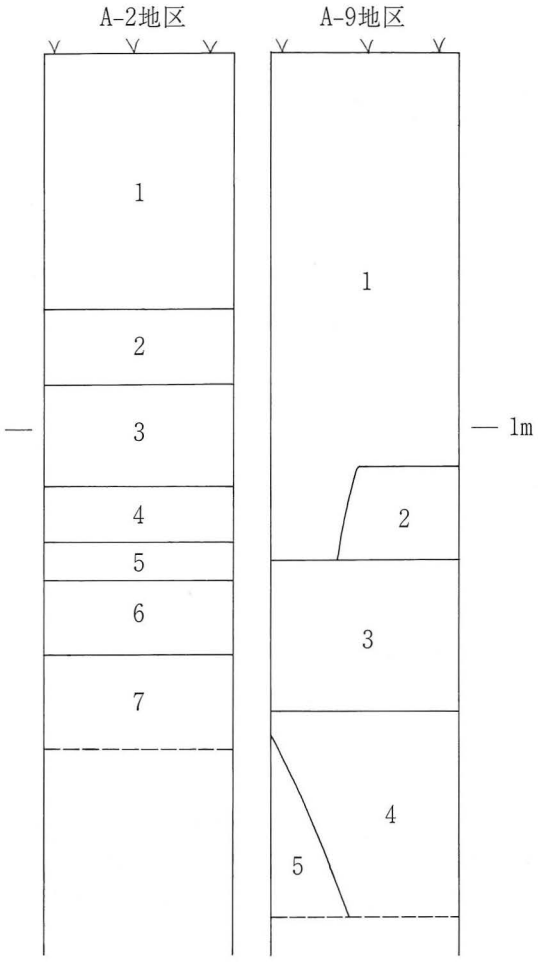
	届出番号	下水番号	遺跡名	届出の工事名称	調査場所	調査	調査期間	調査結果・所見
17	11-692	下設-178 協-11-47	若宮古 墳群	平成11年度公共下水道第 20工区管きょ築造工事	東山町地内	立会	12.3.13 ～ 12.5.15	第13章で報告。
18	11-693	下設-179 協-11-35	東高野 街道	平成11年度公共下水道第 25工区管きょ築造工事	善根寺町５ 丁目～２丁 目	慎重		工事実施。
19	11-694	下設-180 協-11-65	中垣内 遺跡	平成11年度公共下水道第 25工区管きょ築造工事	善根寺町５ 丁目	慎重		同上
20	11-695	下設-181 協-11-75	段上 遺跡	平成11年度公共下水道第 32工区管きょ築造工事	下六万寺町 ３丁目	立会	12.1.25 ～ 12.1.28	第14章で報告。
21	12-20	下設-5 協-11-72	市尻 遺跡	平成11年度公共下水道第 24工区管きょ築造工事	神田町内	慎重		夜間工事のため慎重工事に 変更。工事実施。
22	12-21	下設-３ 協-11-72	東高野 街道	平成11年度公共下水道第 24工区管きょ築造工事	四条町・南 四条町	慎重		同上
23	12-22	下設-４ 協-11-20	縄手 遺跡	平成11年度公共下水道第 24工区管きょ築造工事	南四条町地 内	慎重		同上
24	12-23	下設-２ 協-11-60	五合田 遺跡	平成11年度公共下水道第 10工区管きょ築造工事	御幸町地内	立会	12.4.19 ～ 12.6.5	延べ10日の立会調査を実施。 工事は既設管の入れ替えで あり、埋蔵文化財への影響は なかった。
25	12-24	下設-６ 協-11-16	出雲井 遺跡群	平成11年度公共下水道第 26工区管きょ築造工事	出雲井本町 地内	立会	12.5.15 ～ 12.7.7	第15章で報告。
26	12-25	下設-７ 協-11-63	岩滝山 遺跡	平成11年度公共下水道第 31工区管きょ築造工事	六万寺町１ 丁目	立会	12.5.17 ～ 12.5.25	第16章で報告。
27	12-38	下設-12	みかん 山古墳 群	平成11年度公共下水道第 11－２工区管きょ築造工事	山手町～豊 浦町11	立会	12.4.7 ～ 12.8.2	第17章で報告。
28	12-39	下設-13	水走氏 館跡	平成11年度公共下水道第 11－３工区管きょ築造工事	五条町	立会	12.9.4 ～ 12.9.22	第18章で報告。
29	12-124	下設- 協-11-18	瓜生堂 遺跡	平成11年度公共下水道第 18工区管きょ築造工事	中小阪４丁 目～下小阪 ４丁目	慎重		夜間工事のため慎重工事に 変更。工事実施。
30	12-134	下設-37 協-11-66	半堂 遺跡	平成11年度公共下水道第 27工区管きょ築造工事	下六万寺町 １丁目～横 小路町１・ ２丁目	立会	12.4.12 ～ 12.6.2	第19章で報告。
31	12-170	下設-52 協-11-40	馬場 遺跡	平成11年度公共下水道第 35工区管きょ築造工事	日下町２丁 目	立会	12.7.11 ～ 12.7.27	第20章で報告。
32	12-171	下設-53 協-11-25	鬼塚 遺跡	平成11年度公共下水道第 41工区管きょ築造工事	南荘町地内	立会	12.10.26 ～ 12.12.18	第21章で報告。
33	12-172	下設-54 協-11-41	芝ヶ丘 遺跡	平成11年度公共下水道第 43工区管きょ築造工事	日下町３丁 目・中石切 町４丁目	立会	12.7.27 ～ 12.10.6	第22章で報告。
34	12-173	下設-55	山畑古 墳群	平成11年度公共下水道第 44工区管きょ築造工事	上四条町	立会	12.9.6 ～	調査中。
35	12-174	下設-56 協-11-62	岩滝山 遺跡	平成11年度公共下水道第 46工区管きょ築造工事	上六万寺町	立会	12.8.1 ～ 12.11.22	第23章で報告。
36	12-175	下設-57	池島東 遺跡	平成11年度公共下水道第 48工区管きょ築造工事	池島町	慎重		工事実施。
37	12-176	下設-47 協-11-64	縄手 遺跡	平成11年度公共下水道第 28工区管きょ築造工事	南四条町地 内	立会	12.7.12 ～ 12.8.1	第24章で報告。
38	12-177	下設-46 協-11-46	上六万 寺遺跡	平成11年度公共下水道第 28工区管きょ築造工事	南四条町地 内	立会	同上	同上

	届出番号	下水番号	遺跡名	届出の工事名称	調査場所	調査	調査期間	調査結果・所見
39	12-178	下設-48 協-11-49	額田寺 跡	平成11年度公共下水道第 29工区管きょ築造工事	立花町	立会	12.9.25 ～ 12.10.13	第25章で報告。
40	12-179	下設-49 協-11-49	鬼塚 遺跡	平成11年度公共下水道第 29工区管きょ築造工事	立花町	立会	同上	同上
41	12-180	下設-50 協-11-311	段上 遺跡	平成11年度公共下水道第 33工区管きょ築造工事	六万寺町３ 丁目地内	慎重		工事実施。
42	12-181	下設-51 協-11-311	縄手 遺跡	平成11年度公共下水道第 33工区管きょ築造工事	南四条町	慎重		同上
43	12-279	下建-107	西ノ辻 遺跡	平成11年度公共下水道第 11-1工区管きょ築造工事	弥生町・東 山町	発掘	12.5.9 ～ 12.10.18	第27章で報告。
44	12-333	下事-５	船山 遺跡	平成11年度公共下水道第 １-４工区管きょ築造工事	六万寺町２ 丁目	慎重		工事実施。
45	12-334	下事-４	コモ田 遺跡	平成11年度公共下水道第 １-４工区管きょ築造工事	六万寺町２ 丁目	慎重		同上
46	12-358	下事-９ 協-12-56	神並 遺跡	平成11年度公共下水道第 1-３工区管きょ築造工事	東石切町１ 丁目	立会	12.9.6 ～ 12.10.16	延べ17日の立会調査を実施。 遺構・遺物は確認できなかった。
47	12-363	下事-11 協-12-２	衣摺 遺跡	平成11年度公共下水道第 17工区管きょ築造工事	衣摺３丁目	発掘	12.12.14 ～ 12.12.15	第26章で報告。
48	12-364	下事-12 協-12-57	暗峠越 奈良街 道	平成11年度公共下水道第 1-６工区管きょ築造工事	松原１丁目	慎重		工事実施。
49	12-365	下事-13 協-12-24	額田寺 跡	平成11年度公共下水道第 １-８工区管きょ築造工事	東山町～立 花町	立会	12.10.16 ～	調査中。
50	12-366	下事-14 協-12-44	北島 遺跡	平成11年度公共下水道第 １-12工区管きょ築造工事	中石切町７ 丁目	立会	12.6.20 ～ 12.6.26	延べ2日の立会調査を実施。 現況が水路であり、埋蔵文化財への影響はなかった。
51	12-470	協12-10	植附 遺跡	平成11年度公共下水道第 1-10工区管きょ築造工事 (夜間工事)	西石切町１ 丁目～３丁 目	慎重		工事実施。
52	12-471	協12-28	和泉 遺跡	平成11年度公共下水道第 １-７工区管きょ築造工事	中石切町５ 丁目～６丁 目	発掘	12.8.8	調査を実施したが、工事予定地は既存の基礎杭で撹乱を受けており、遺構・遺物は確認できなかった。
53	12-637		鬼虎川 遺跡	平成12年度公共下水道管 きょ築造工事	弥生町	立会		平成12年10月20日届出
54	12-665	下事-64 協12-8	芝ヶ丘 遺跡	平成11年度公共下水道第 1-5工区管きょ築造工事	中石切町４ 丁目～２丁 目	立会		平成12年11月2日届出
55	12-666	下事-63 協12-7	河内寺 跡	平成12年度公共下水道第 ５工区管きょ築造工事	本町・河内 町	立会		平成12年11月2日届出
56	12-667	下事-66 協12-10	東高野 街道	平成12年度公共下水道第 ７工区管きょ築造工事	喜里川町	慎重		平成12年11月2日届出
57	12-668	下事-65 協12-K-7	みかん 山古墳 群	平成12年度公共下水道第 12-1工区管きょ築造工事	山手町	立会		平成12年11月2日届出
58	12-669	下事-62 追加	孤塚 遺跡	平成12年度公共下水道第 202工区管きょ築造工事	喜里川町	立会		平成12年11月2日届出
59	12-683		出雲井 遺跡群	平成12年度公共下水道近 鉄奈良線横断部管きょ築造 工事(夜間工事)	出雲井町	慎重		平成12年11月20日届出
60	12-684		河内寺 跡	平成12年度公共下水道近 鉄奈良線横断部管きょ築造 工事(夜間工事)	客坊町	慎重		平成12年11月20日届出
61	12-685		神並古 墳群	平成12年度公共下水道第 12-2 工区管きょ築造工事	山手町	立会		平成12年11月20日届出

第２章　西代（にしんだい）遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成10年度公共下水道第33工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市横小路町５丁目
3	調 査 面 積	88㎡
4	調 査 期 間	平成12年３月１日～３月15日（延べ11日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事範囲は外環状線（国道170号線）と旧170号線の間に位置する。予定地の東約１/３は西代遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は幅約0.9～1.0mで長さ88mの間であり、開削工法である。

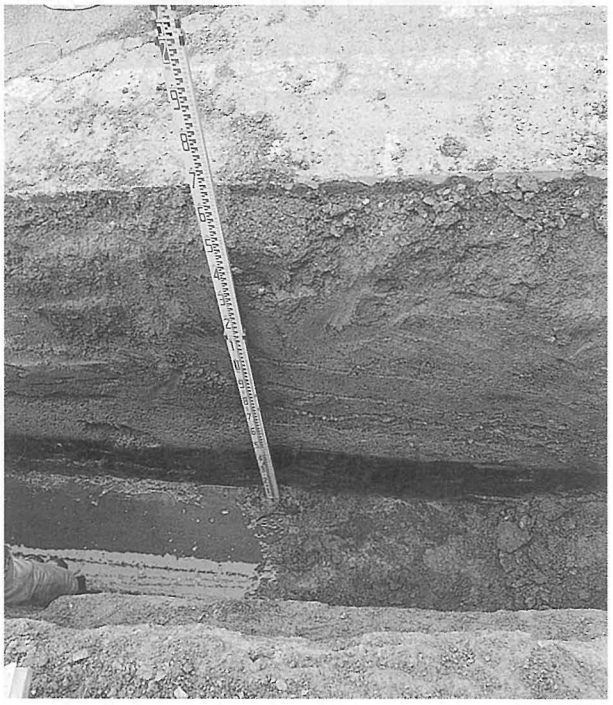
調査地点位置図（1/2500）



土層断面柱状図

調査地遠景

調査状況



土層断面

1．調査の概要

A－2地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土。

第3層　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。

第4層　褐灰色(10YR4/1)粘質土。

第5層　黒褐色(7.5YR3/1)礫混じり粘質土。

第6層　オリーブ黒色(5Y3/1)細砂。

第7層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)極細砂。

A－9地区の層序

第1層　盛土。

第2層　灰色(5Y4/1)細礫混じり中粒砂。

第3層　黄灰色(2.5Y4/1)細～中粒砂。

第4層　暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫。

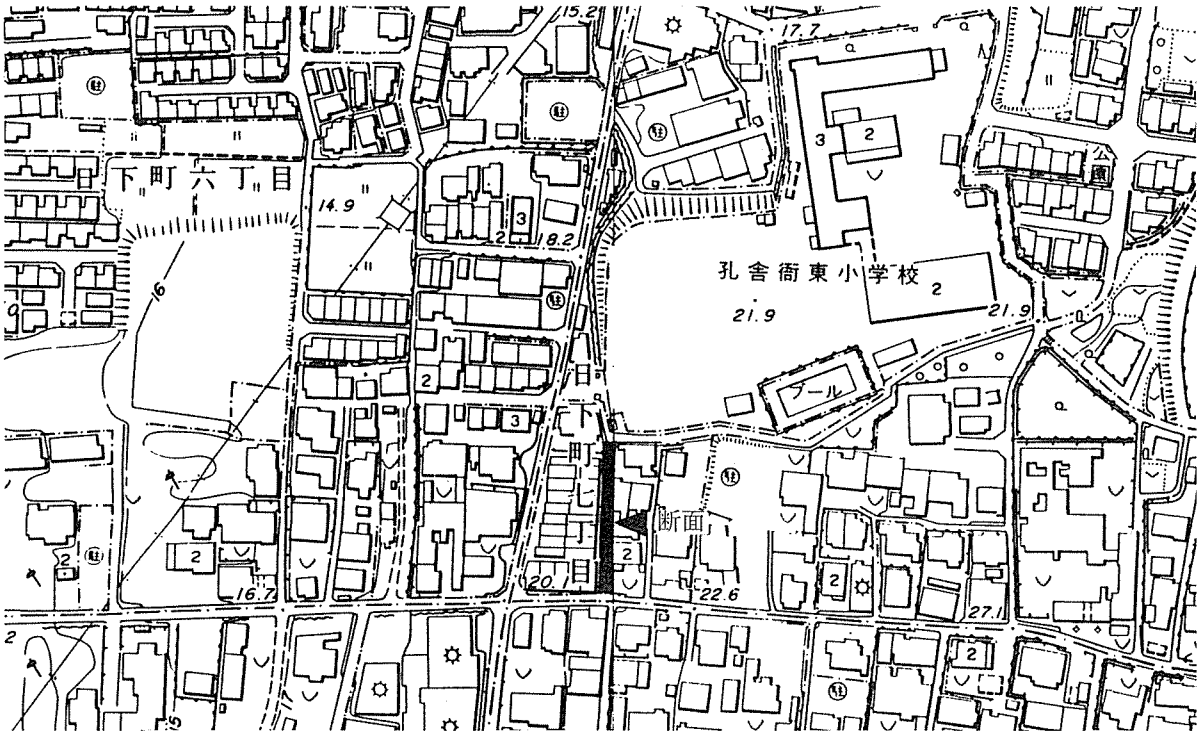
第5層　黒褐色(2.5Y3/1)粘土。

2．まとめ

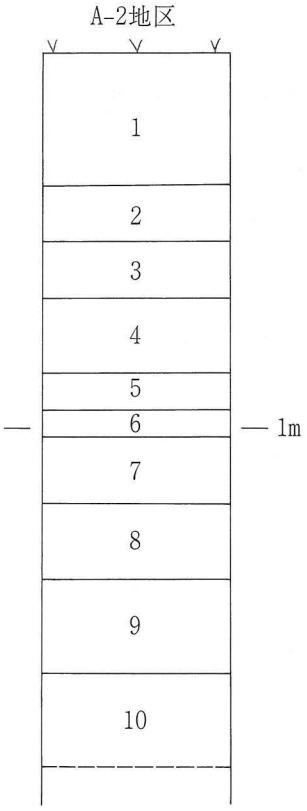
立会調査を実施したが、遺構、遺物は検出できなかった。

第３章　日下（くさか）遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成10年度公共下水道第67工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市日下町７丁目
3	調 査 面 積	52㎡
4	調 査 期 間	平成12年１月20日～１月28日（延べ４日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は孔舎衙東小学校の西になる。南側部分が日下遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ52mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1／2500）



土層断面柱状図

調査地遠景

掘削状況

土層断面

1．調査の概要

A－2地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ黒色(5Y3/1)細砂混じり粘質土。

第3層　黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂。

第4層　灰黄褐色(10YR4/2)細～中粒砂。

第5層　黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂。

第6層　黒褐色(7.5YR3/2)中粒砂混じり粘質土。

第7層　青灰色(10BG5/1)中粒砂混じり粘質土。

第8層　オリーブ褐色(2.5Y4/6)小礫混じり中粒砂。

第9層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)小礫混じり細粒砂。

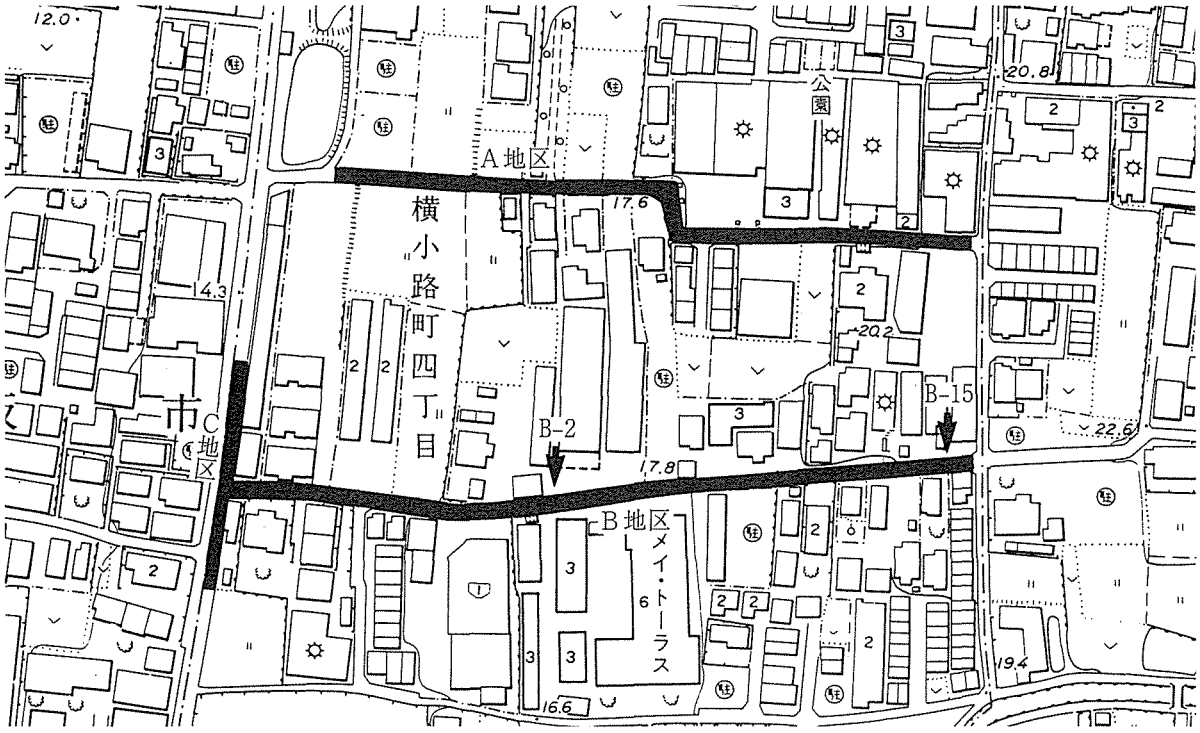
第10層　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土。

2．まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第４章　馬場川(第11次)・西代遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成10年度公共下水道第78工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市横小路町４丁目
3	調 査 面 積	125㎡（Ｂ地区のみ）
4	調 査 期 間	平成11年８月23日～12年２月22日（延べ40日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	Ａ地区は平成11年度に調査を終了し報告済である。今年度はＢ地区が立会調査の対象である。Ｂ地区はＴ字形を呈する。西側の約1/3は夜間工事のため、立会調査はできなかった。工事範囲は幅約0.9ｍで長さ約139ｍの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/2500）

1．調査の概要

立会調査は西側より実施した。Ｂ－１～３地区では遺物包含層は確認できなかった。Ｂ－４地区より東では庄内式期～弥生時代後期の遺物包含層が広がっている。庄内式期のものは微量であり、弥生時代後期のものが多い。Ｂ－８地区より東では下層に縄文時代晩期の遺物包含層を確認した。また、Ｂ－16地区では人骨を採集した。

2．層序

Ｂ－１地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(10YR3/1)中礫混じり粘質土。中礫は多量に含む。

第３層　黒褐色(2.5Y3/2)中礫混じり中粒砂。

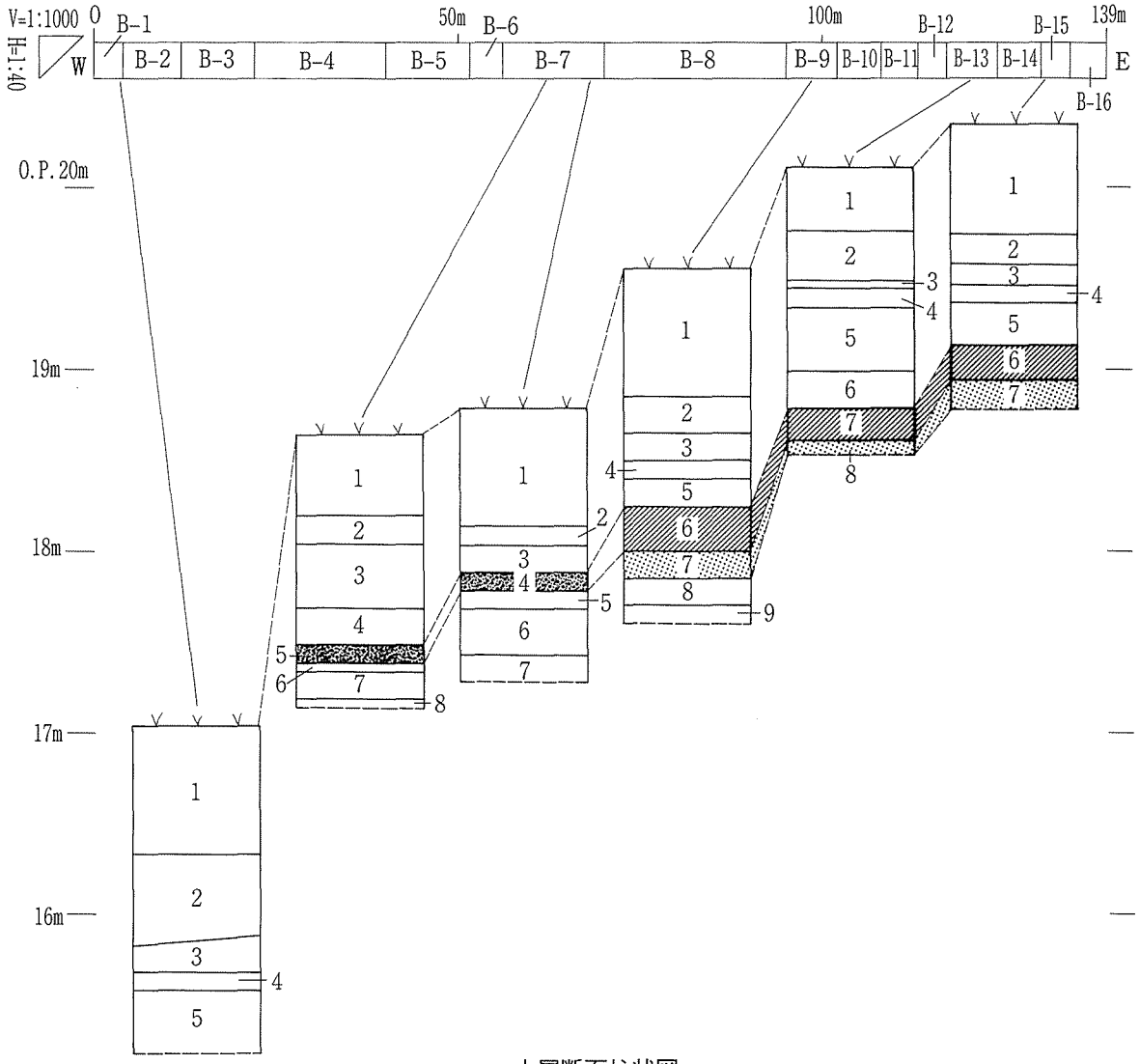
第４層　黄褐色(2.5Y5/3)細礫混じり細粒砂。

第５層　黄褐色系のラミナ堆積。極細粒砂からなる。

Ｂ－７地区（西）の層序

第１層　盛土。

第２層　にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂混じり粘質土。



土層断面柱状図

第３層　黄褐色(2.5Y5/6)中～粗粒砂。
第４層　黒褐色(7.5YR3/2)粘質土。
第５層　暗灰黄色(2.5Y4/2)中～粗粒砂混じり粘質土。庄内式期～弥生時代後期の遺物が出土。
第６層　青黒色(10BG2/1)粗粒砂混じり粘質土。粗粒砂は少量含む。
第７層　暗緑灰色(10GY3/1)細～中粒砂。
第８層　暗オリーブ灰色(5GY3/1)細～粗粒砂。

Ｂ－７地区（東）の層序
第１層　盛土。
第２層　黄灰色(2.5Y4/1)中～粗粒砂混じり粘質土。
第３層　褐灰色(7.5YR4/1)粗粒砂混じり粘質土。マンガンを含む。
第４層　黒褐色(7.5YR3/1)細粒砂混じり粘質土。庄内式期～弥生時代後期の遺物が出土。
第５層　黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂混じり粘質土。
第６層　黄褐色(2.5Y5/6)細～中粒砂。
第７層　暗緑灰色(5G4/1)細粒砂。

Ｂ－９地区の層序
第１層　盛土。
第２層　オリーブ灰色(2.5Y4/3)砂質土。
第３層　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土。
第４層　褐色(10YR4/4)中礫混じり粗粒砂。
第５層　にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫混じり粗粒砂。
第６層　黒色(2.5Y3/1)細礫混じり粘質土。庄内式期～弥生時代後期の遺物が出土。
第７層　黒色(7.5Y2/1)細礫混じり粘質土。縄文時代晩期の遺物が出土。
第８層　暗青灰色(10BG3/1)細礫混じり粘質土。
第９層　灰色(7.5Y4/1)細～中礫混じり粗粒砂。

Ｂ－13地区の層序
第１層　盛土。
第２層　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土。
第３層　黒褐色(7.5YR3/2)中粒砂。
第４層　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土。
第５層　にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂混じり砂礫。
第６層　黄褐色(10YR5/6)細～中礫。
第７層　黒色(2.5Y3/1)細礫混じり粘質土。庄内式期～弥生時代後期の遺物が出土。
第８層　黒色(7.5Y2/1)細礫混じり粘質土。縄文時代晩期の遺物が出土。

Ｂ－15地区の層序
第１層　盛土。
第２層　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土。
第３層　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土。
第４層　にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂混じり細礫。
第５層　黄褐色(10YR5/6)細礫混じり粘質土。
第６層　黒色(2.5Y3/1)細礫混じり粘質土。庄内式期～弥生時代後期の遺物が出土。

第７層　黒色(7.5Y2/1)細礫混じり粘質土。縄文時代晩期の遺物が出土。

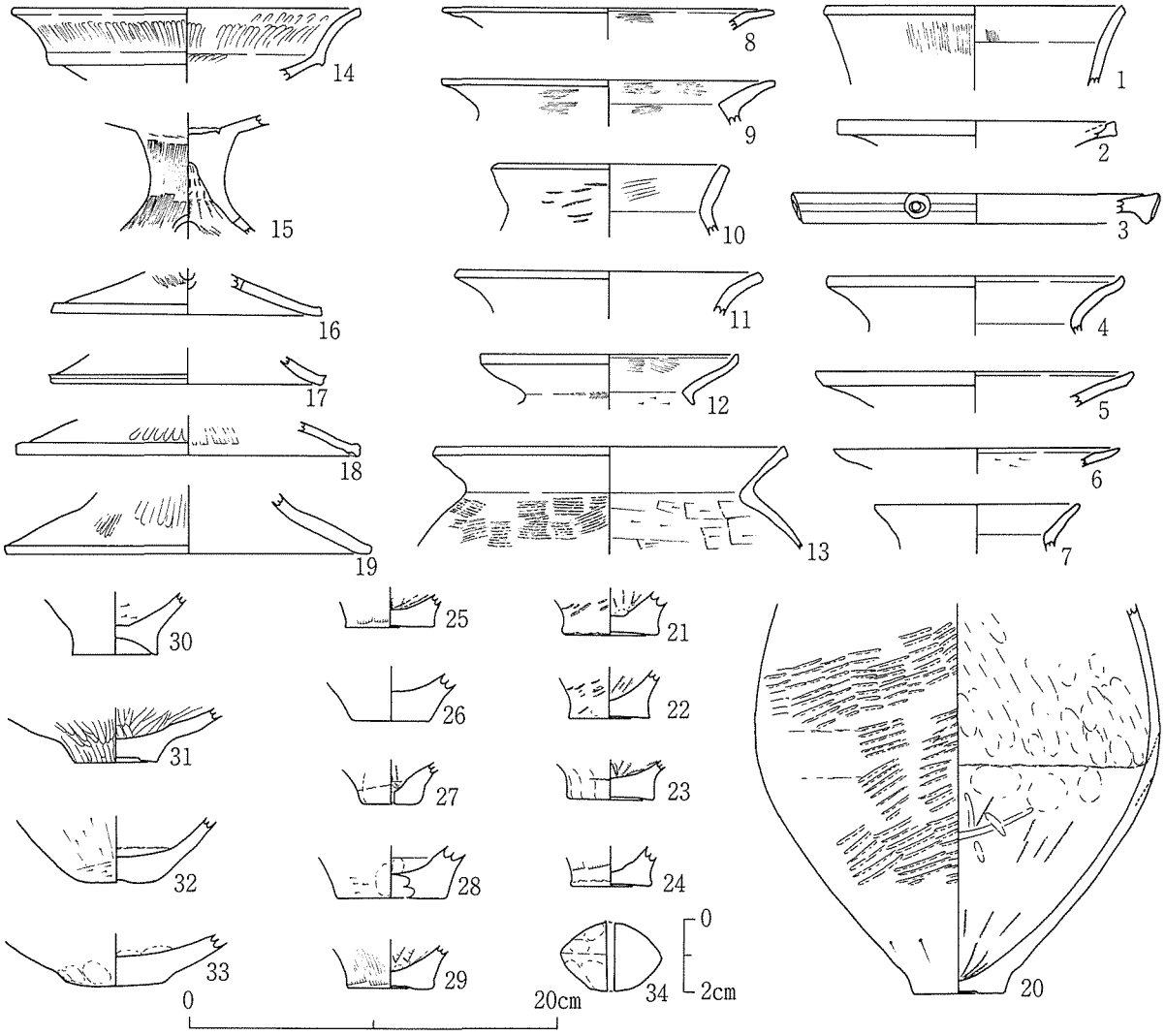
３．出土遺物

縄文時代～庄内式期の土器と土製品が出土した。量的には弥生時代後期のものが多い。

縄文土器　形状の判るものはないが、底部(32・33)がある。丸底に近い平底で、外面をケズリ調整する。胎土は生駒西麓産である。晩期の時期と考えられる。他に図化しなかったが、口縁部や体部の破片がある。

弥生土器　壷・甕・高杯・底部の器種がある。いずれも後期の土器である。１～３は壷である。１は口頸部がやや外上方に伸び、口縁端部が面をもつ。２・３は口縁端部であり、面をもつ。３は端面に２条の擬凹線を施し、その上に竹管文を押した円形浮文を貼り付ける。４～11は甕である。口縁端部が受口を呈するもの(４・５)、丸く終わるもの(６～８)、面をもつもの(９～11)がある。10は体部外面にタタキ調整が残る。14～19は高杯である。14が杯部、15が柱状部、16～19が裾部である。14は中位に明瞭な段がつき、口縁部が外反する。15は柱状部が短く、裾上部に円孔を穿つ。16～19の裾部は立ち上がりが緩い。端部は面をもつ。20～31は底部である。底部は平底と上げ底のものがある。20は甕の底部であり、外面をタタキ調整する。

庄内式土器　12・13は甕である。張りのある体部より口縁部がくの字状に外反する。口縁端部は上

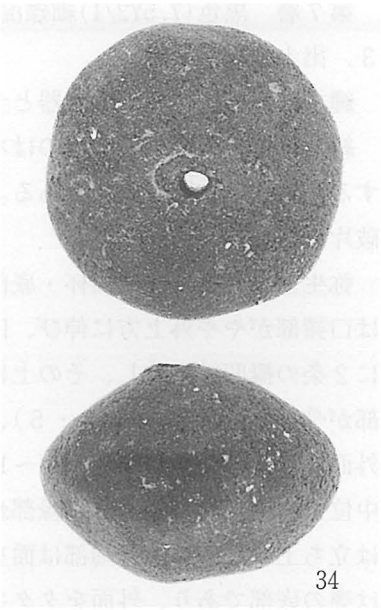


出土遺物実測図

方へ拡張し、受口を呈するもの(12)と面をもつもの(13)がある。体部外面は細いタタキ調整し、内面はヘラケズリ調整する。胎土は生駒西麓産である。

土製品　34は土製品である。算盤玉形を呈し、中央に小孔を穿つ。幅2.8cm、高さ1.9cmを測る。弥生時代後期～庄内式期の時期と考えられる。用途不明。

人骨　写真図版に人骨を掲載した。部位は大阪市立大学医学部の安部みき子氏にご教授を受けた。1は左大腿骨(殿筋粗面周辺)、2は大腿骨(左右不明・骨幹)、3・4は大腿骨(左右不明・骨頭)、5は尺骨(右近位部)、6は側頭骨(左錐体の一部)、7は側頭骨(右錐体)、9～21は頭頂骨である。縄文時代晩期の可能性が高い。



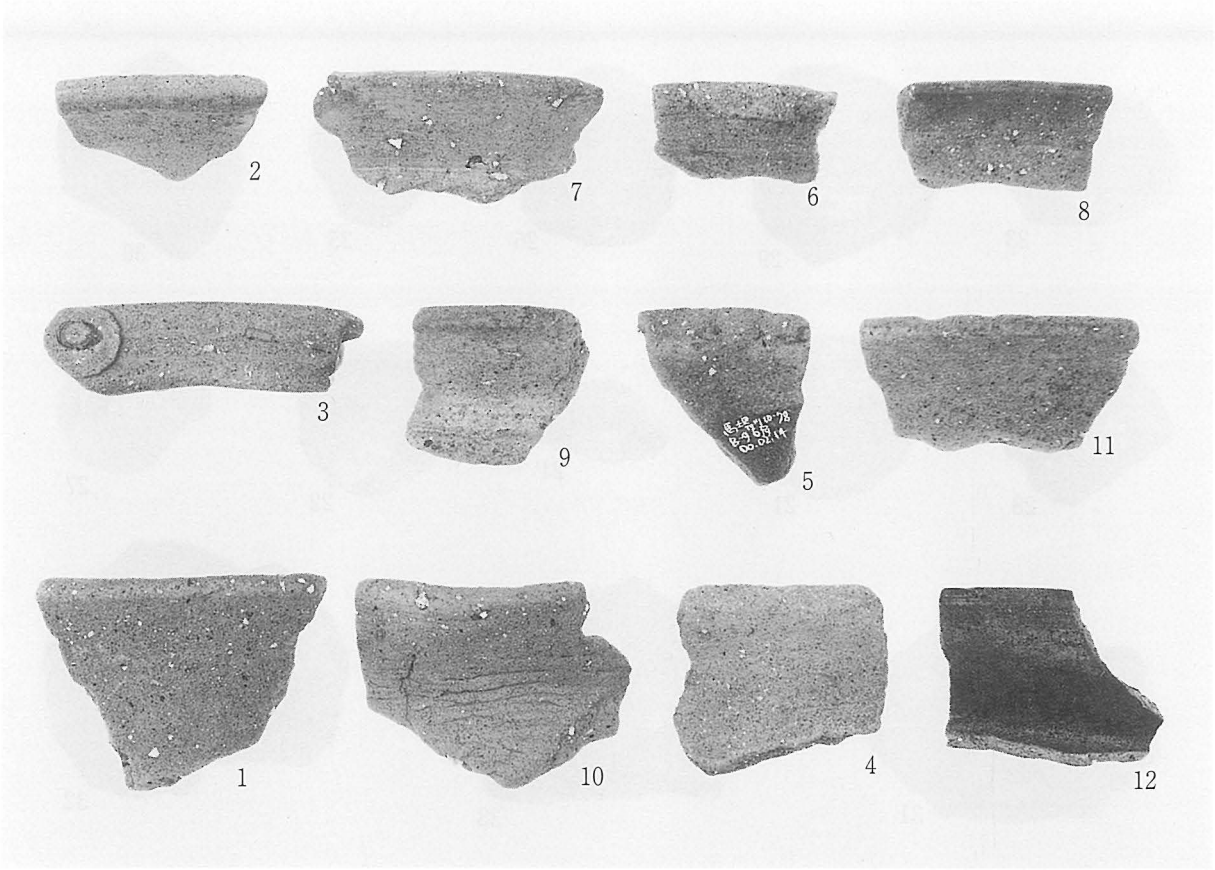
土製品

4．まとめ

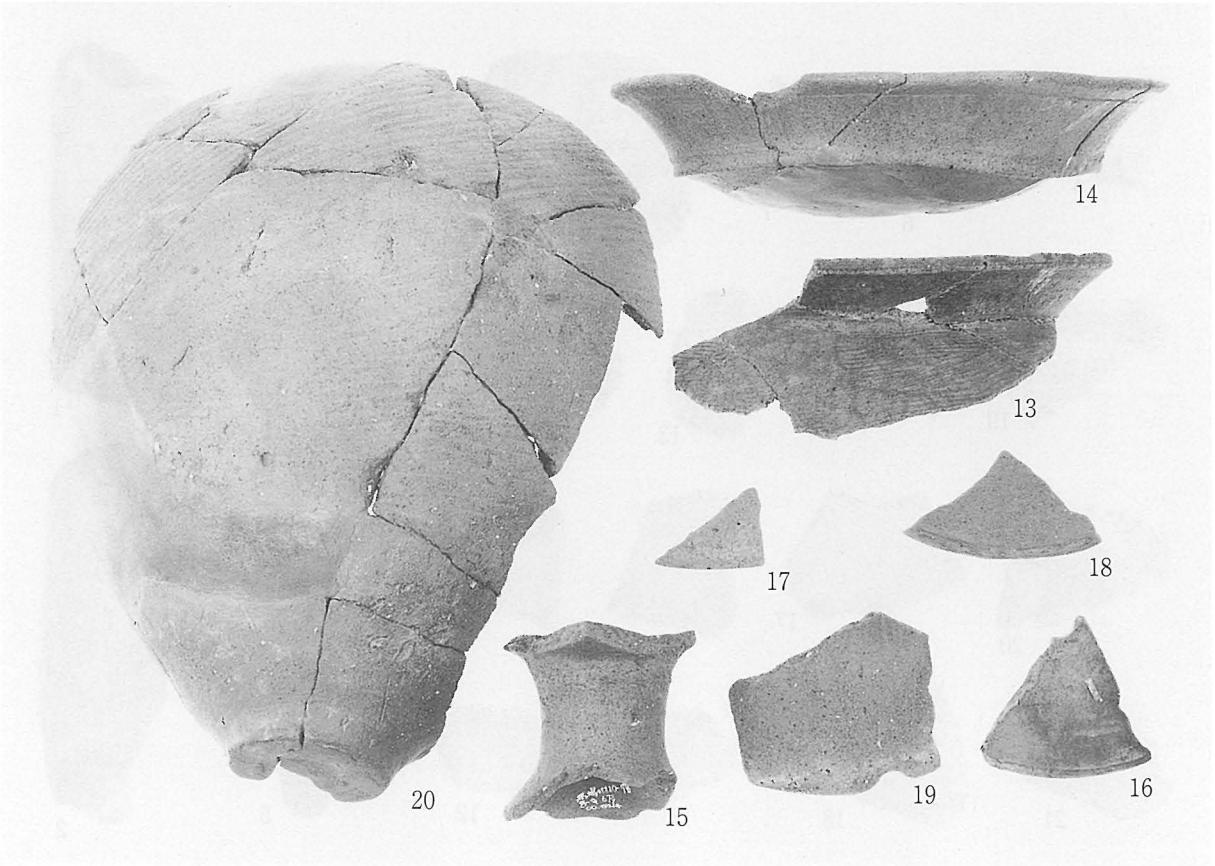
今回の調査は、工事等の都合により、立会調査であったが、庄内式期～弥生時代後期と縄文時代晩期の遺物包含層を確認できた。特にB－16地区で採集した人骨は大腿骨や頭骨などがあり、1体分と考えられる。また、出土状況は確認できなかったが、断面精査から縄文時代晩期の所産と思われ、周辺に当時期の墓がある可能性が高い。

調査地遠景

土層断面



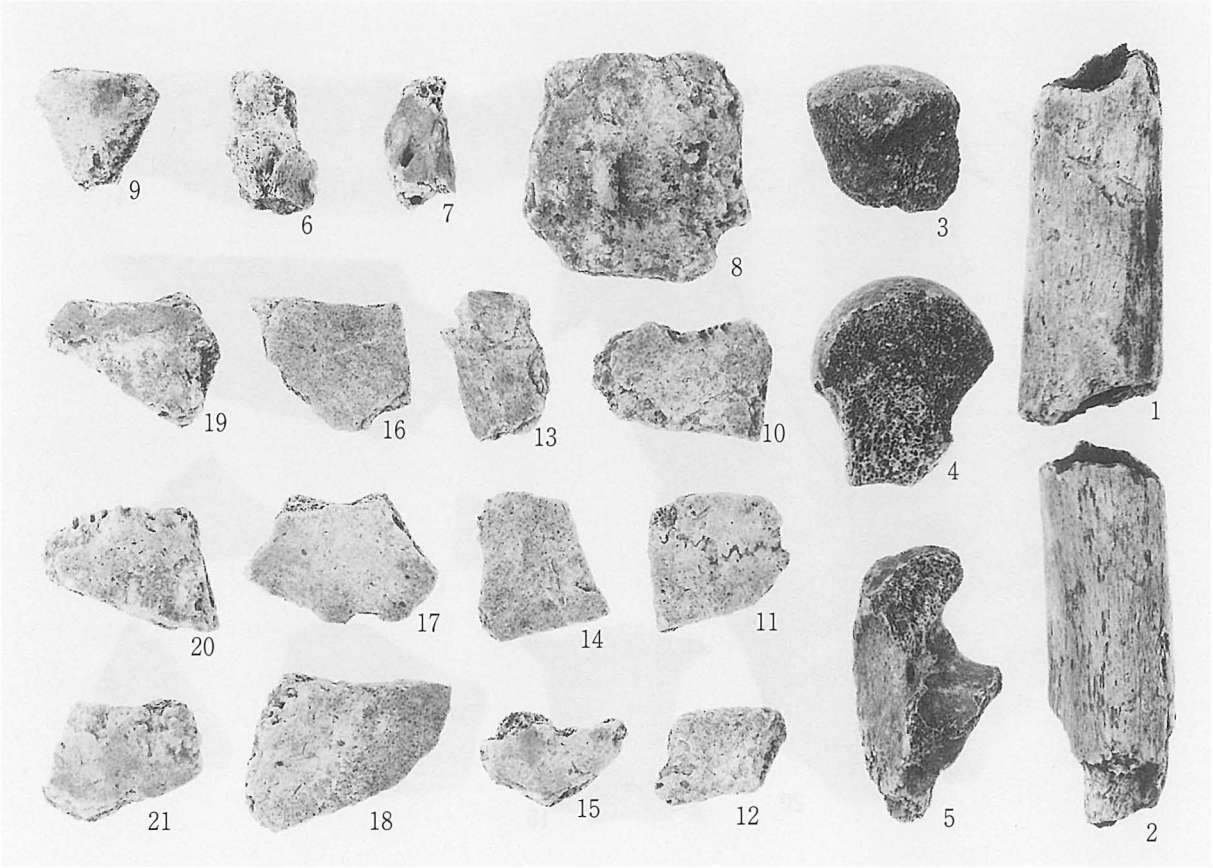
出土遺物（弥生土器・庄内式土器）



出土遺物（弥生土器・庄内式土器）

23
29
26
25
30
28
21
24
22
27
31
33
32

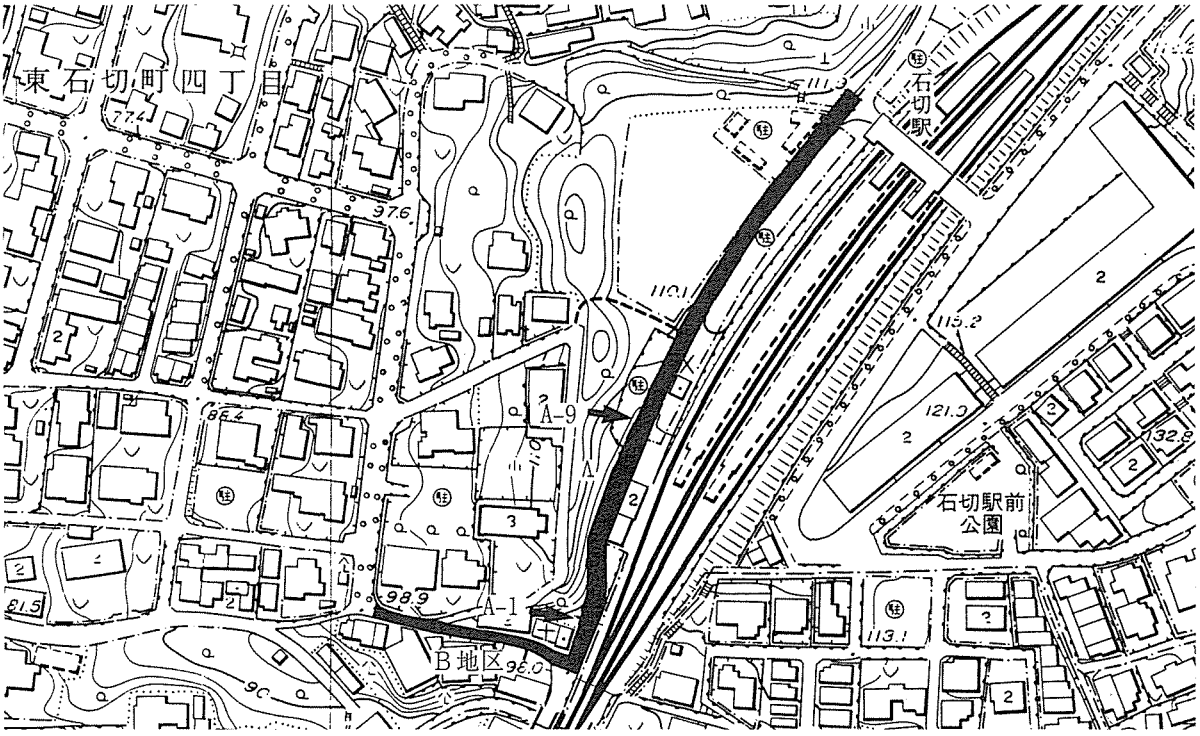
出土遺物（弥生土器）


9
6
7
8
3
19
16
13
10
4
1
20
17
14
11
21
18
15
12
5
2

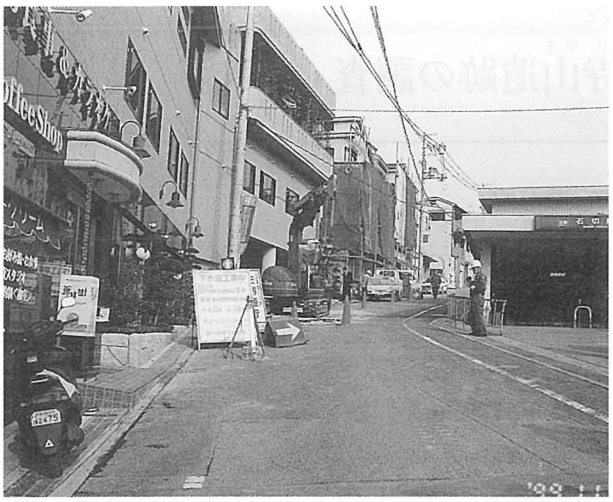
人骨

第５章　千手寺山遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第１工区管きょ築造工事
2	調査地点	東大阪市上石切町２丁目～東石切町４丁目
3	調査面積	281m²
4	調査期間	平成11年11月22日～12年１月11日（延べ16日）
5	報告担当	才原金弘
6	調査の経過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線石切駅の西側道路である。当地点は千手寺山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ281mの間であり、開削工法である。



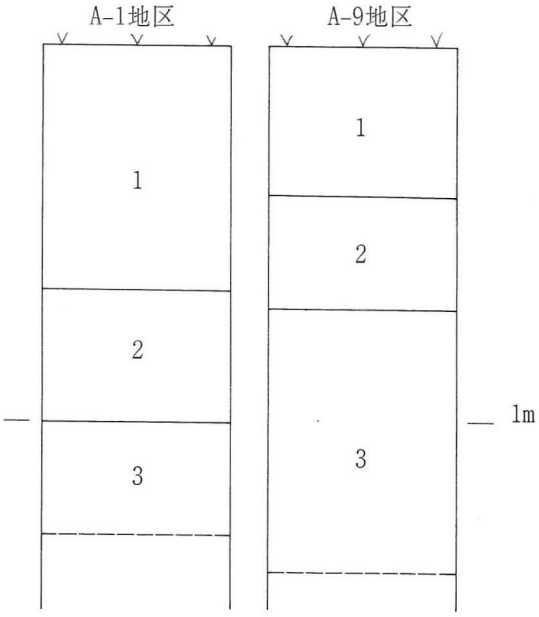
調査地点位置図（1/2500）



調査地遠景

掘削状況

土層断面



土層断面柱状図

1．調査の概要

A－1地区の層序

第1層　盛土。

第2層　明黄褐色(2.5Y7/6)シルト。

第3層　黄橙色(10YR7/8)シルト。

A－9地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土。

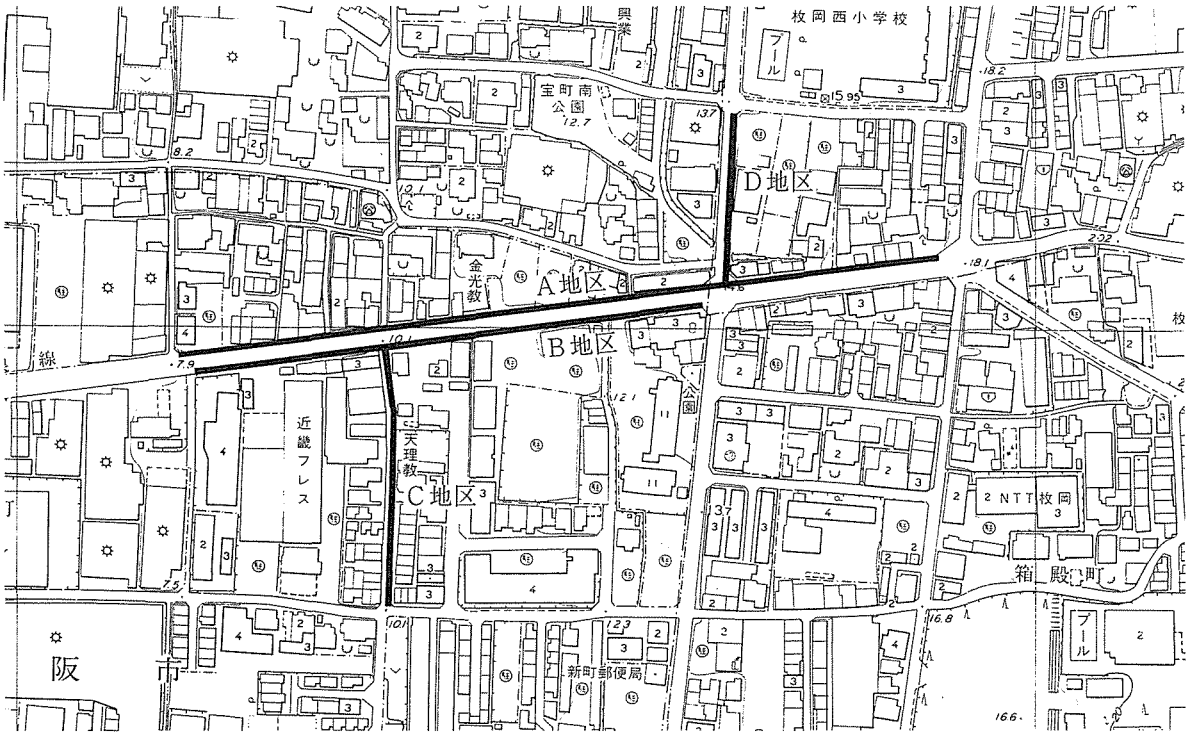
第3層　灰黄色(2.5Y6/2)シルト。

2．まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第６章　鬼塚（おにづか）遺跡の第24次調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成１０年度公共下水道第77工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市南荘町～新町
3	調 査 面 積	1190m²
4	調 査 期 間	平成11年11月15日～12年４月20日（延べ67日）
5	報 告 担 当	吉田綾子
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪枚岡奈良線と旧170号線の交差点付近に位置する。当地点は鬼塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事区をＡ～Ｄ地区と仮称した。Ｄ地区は夜間工事のため立会調査を実施することはできなかった。工事範囲は幅約0.8～1.0ｍで長さ1337ｍの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/3300）

1．調査の概要

A－3地区の層序

第1層　盛土。

第2層　青灰色(5B5/1)シルト。

第3層　青灰色(5B5/1)粘質土。

第4層　青灰色(5PB5/1)シルト。黄灰色(2.5Y5/4)のしみこみあり。

第5層　灰オリーブ色(5Y5/2)シルト。

B－5地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ黄色(5Y6/3)粘土。

第3層　黒褐色(10YR2/3)細粒砂混じり粘質土。

A－5地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗紫灰色(5P3/1)小礫混じりシルト。炭化物を含む。

第3層　暗青灰色(5B3/1)粘質土。

第4層　暗青灰色(10BG4/1)粘質土。

第5層　暗緑灰色(10G4/1)細粒砂混じり粘土。

第6層　黒褐色(2.5Y3/1)粘質土。

第7層　暗紫灰色(5P4/1)シルト。古墳時代の遺物が出土。

第8層　暗紫灰色(5P3/1)粘質土。弥生時代の遺物が出土。

B－8地区の層序

第1層　盛土。

第2層　青黒色(5PB2/1)粘質土。

第3層　緑灰色(5G5/1)粗粒砂混じり粘質土。粗粒砂を少量含む。

第4層　灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土。

第5層　暗青灰色(5BG4/1)中～粗粒砂。

第6層　灰オリーブ色(5Y5/3)シルト。

第7層　オリーブ黒色(5Y3/2)シルト。古墳時代の遺物が出土。

第8層　黒褐色(2.5Y3/1)粘質土。古墳時代の遺物が出土。上面でピット1を検出。

ピット1　オリーブ黒色(5Y3/2)粘土。白色粗砂を含む。

C－14地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)中礫混じり粘質土。古墳時代の遺物が出土。

第3層　暗緑灰色(7.5GY4/1)細粒砂混じりシルト。

第4層　緑灰色(7.5GY5/1)粗粒砂混じりシルト。

第5層　暗緑灰色(7.5GY3/1)シルト。

C－6地区の層序

第1層　盛土。

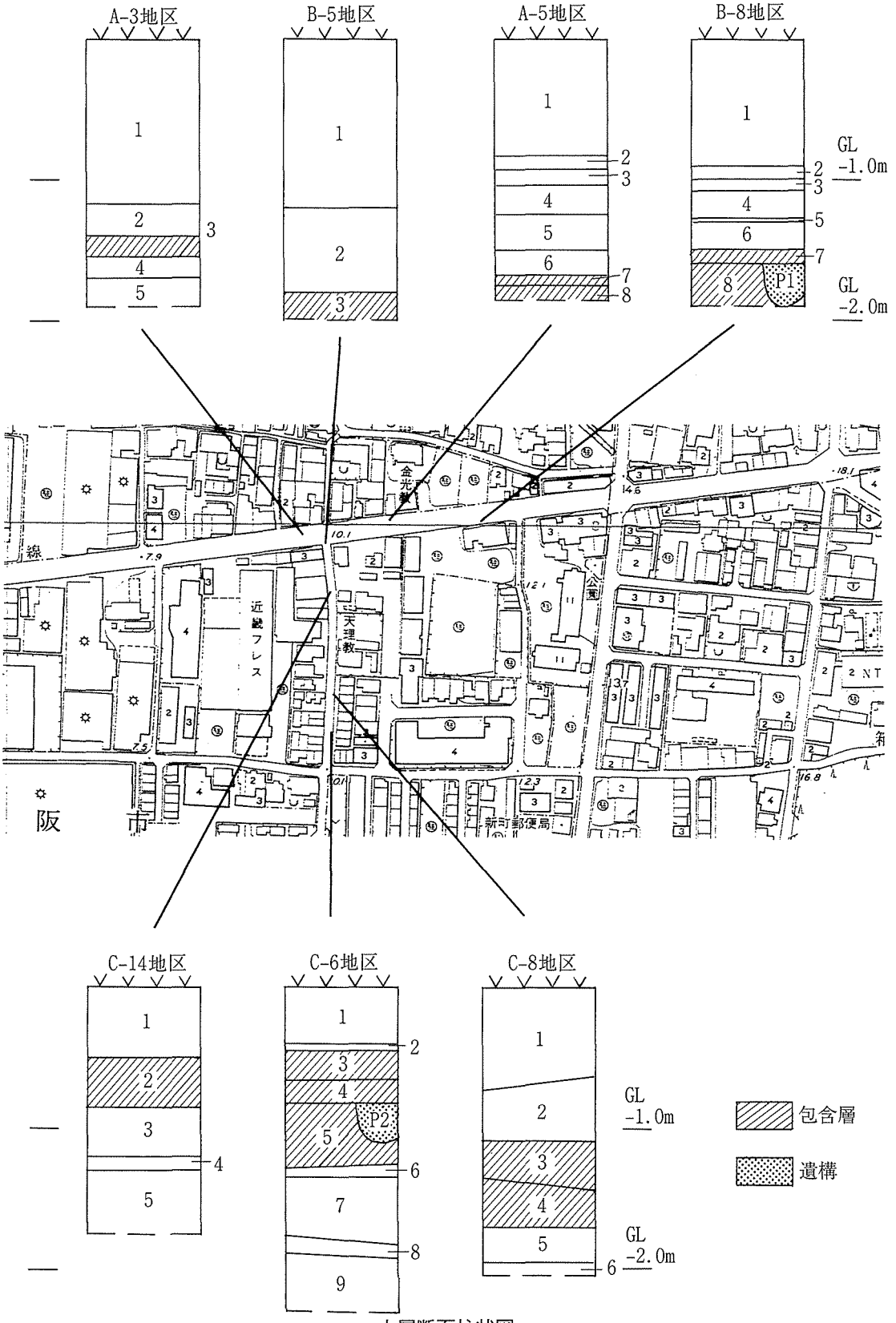
第2層　オリーブ黒色(5Y3/1)粘質土。

第3層　オリーブ黒色(5Y3/2)シルト。褐色(10YR4/6)粘質土を含む。古墳時代の遺物が出土。

第４層　灰色(7.5Y4/1)小礫混じりシルト。小礫を少量含む。古墳時代の遺物が出土。

第５層　灰色(5Y4/1)小礫混じり粘質土。小礫を少量含む。上面でピット２を検出。古墳時代の遺物出土。

ピット２　オリーブ黒色(5Y3/1)粘質土。暗褐色(10YR3/4)粘質土を含む。古墳時代の遺物が出土。



土層断面柱状図

第６層　オリーブ黒色(5Y2/2)小礫混じり粘質土。小礫を少量含む。

第７層　黒色(10YR1.5/1)細粒砂・小～中礫混じり粘質土。

第８層　暗青灰色(5BG3/1)細粒砂。オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土をブロック状に含む。

第９層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト。

Ｃ－８地区の層序

第１層　盛土。

第２層　灰色(7.5Y4/1)シルト。

第３層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質細粒砂。弥生～古墳時代の遺物が出土。

第４層　黒色(7.5Y2/1)礫混じり粘質土。直径0.3～２cm大の礫を含む。弥生～古墳時代の遺物が出土。

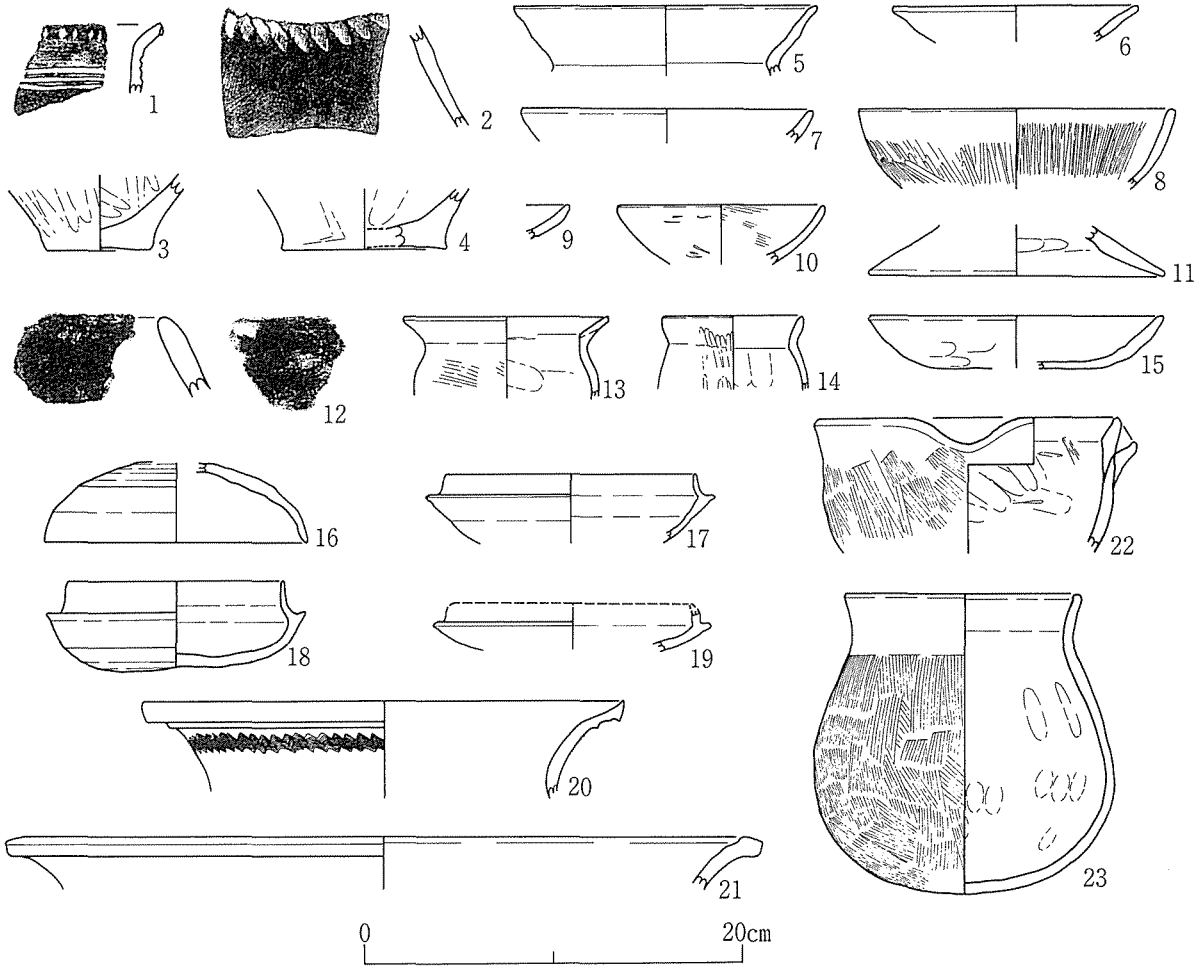
第５層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細粒砂。

第６層　黒色(10Y2/1)礫混じり粘質土。直径0.2～1.5cm大の礫を含む。

２.出土遺物

今回の調査では、弥生土器、土師器、須恵器などがコンテナ１箱分出土した。

弥生土器は１～４である。１は鉢である。横方向のナデ調整で、外面体部には櫛描直線文、口縁部に刻み目が施されている。２は壷で、内外面に縦方向のハケメ調整が見られ、外面にはハケによる列点文が施されている。３、４は平底の底部である。３の底部径は5.4cmで、内外面に縦方向の粗いヘ



出土遺物実測図

ラミガキ調整が見られる。外面底部には指頭圧痕が、また外面には黒斑も見られる。４の底部径は8.5cmを測る。内面と外面底部に指頭圧痕が見られる。外面は縦方向の工具痕が見られ、おそらく縦方向のハケメ調整と思われる。いずれも生駒西麓産である。

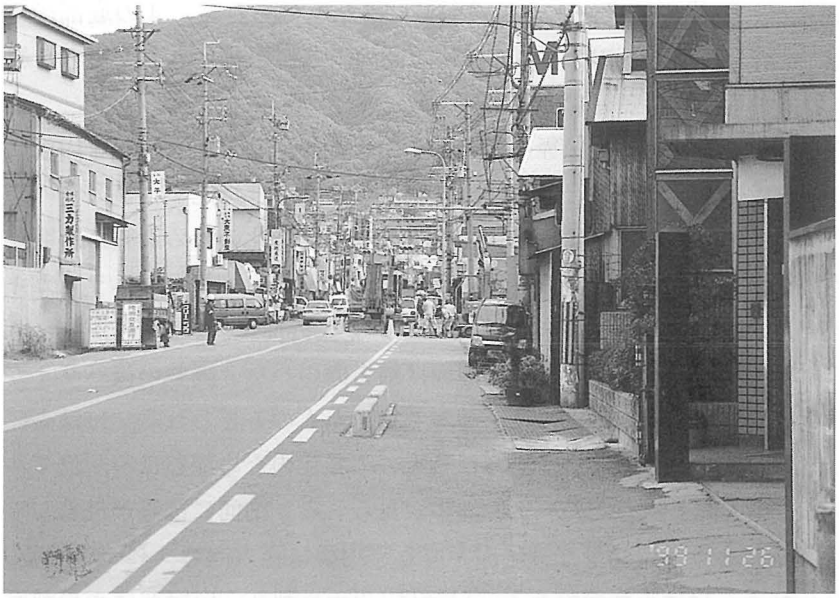
５～14、22、23は土師器である。５は甕である。口径は16.0cmを測り、横方向のナデ調整と内面に横方向のヘラミガキ調整が見られる。６も甕で、口径は12.6cmを測る。口縁端部は丸く、横方向のナデ調整が見られる。７～10は高杯の杯部である。７は口径15.2cmで、内面は風化のため調整が不明瞭であるが、外面に横方向のナデ調整が見られる。８の口径は16.4cmを測り、内面に細かいヘラミガキ調整、外面にもヘラミガキ調整が施されている。９は横方向のナデ調整と外面に1条の沈線が見られる。10は口径10.6cmで、風化のため調整はやや不明瞭だが、内面は横方向のハケメ調整の後ヘラミガキ調整を、外面は不定方向のヘラケズリ調整の後ヘラミガキ調整を行ったものと思われる。11は高杯の脚部である。裾部径は15.4cmで、内面には指頭圧痕が見られるものの風化のため調整は不明瞭である。12は竈形土器の口縁部である。横方向と縦方向のハケメ調整が見られる。内面には煤が付着している。13は小型壷で、口径は10.8cmである。口縁端部は平面を有し、内面に横方向のユビナデ調整、外面に横方向のハケメ調整が見られる。14は小型壷である。口径は7.2cmを測り、口縁部はやや肥厚である。内面にユビオサエ、外面に縦方向のヘラミガキ調整が見られる。23は内面に稜を有する甕である。口径は12.3cmを測るが、ひずんでいる。内面はナデ調整、外面は縦方向のハケメ調整である。内面に指頭圧痕、外面に黒斑が見られる。22は片口の鉢で、口径は15.6cmである。内面にユビナデ調整と一部工具痕が、外面に２種類のハケを用いた縦方向のハケメ調整が見られる。おそらく細かいハケによる調整の後に別のハケでもう一度ハケメ調整を行ったものと思われる。

16～21は須恵器である。16は杯蓋で、口径は13.9cmである。明瞭な稜を有さず、内面には回転ナデ調整と一定方向のナデ調整が、外面には回転ナデ調整と回転ヘラケズリ調整が見られる。回転方向は時計回りである。17は口径13.2cmの杯身で、たちあがりはやや内傾し、短い。回転ナデ調整で、外面には自然釉がゴマ状に付着する。18は杯身で、口径は11.5cmを測る。たちあがりはやや内傾し端部を丸く仕上げている。内面に回転ナデ調整と一定方向のナデ調整が、外面に回転ナデ調整と回転ヘラケズリ調整が見られ、回転方向は時計回りである。19は有蓋高杯である。口径は12.5cmで、たちあがりはやや内傾して真上に立ち上がり、短い。内外面ともに回転ナデ調整である。20は壷である。口径は25.4cmで、回転ナデ調整である。外面には1条の突帯と櫛描波状文が施され、自然釉が付着している。21は口径38.0cmを測る甕で、口縁端部が肥厚し、断面は方形を呈する。回転ナデ調整である。

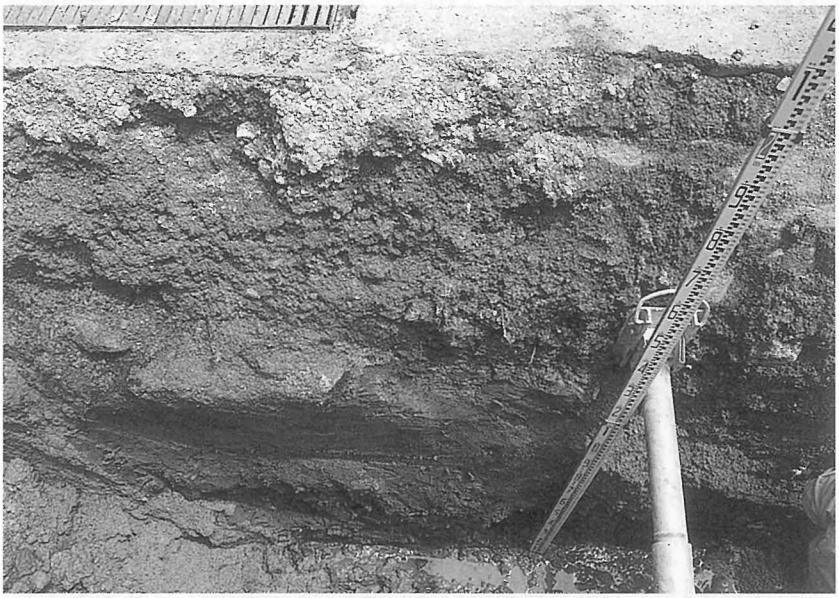
15は土師器皿で、口径15.4cmである。内面に不定方向のユビナデ調整、外面に指頭圧痕が見られる。

３．まとめ

当遺跡は縄文時代晩期から平安時代に至る複合遺跡である。当調査地より西方で行われた第８次調査では、古墳時代の掘立柱建物や土坑、溝が検出され、集落の中心の一つであることが判明している。弥生時代では方形周溝墓が３基検出され、墓域と考えられている。今回の調査で古墳時代の包含層の確認とピットの検出ができたことから、当調査地にも古墳時代の集落がひろがっていた可能性が考えられ、集落の東限を考える上で重要になってくる。またわずかではあるが弥生土器も出土したことは、弥生時代の墓域を考える上でも注目したい。第８次調査では出土した縄文土器が当調査地では出土していないことも今後の参考にしておきたい。



A・B地区遠景

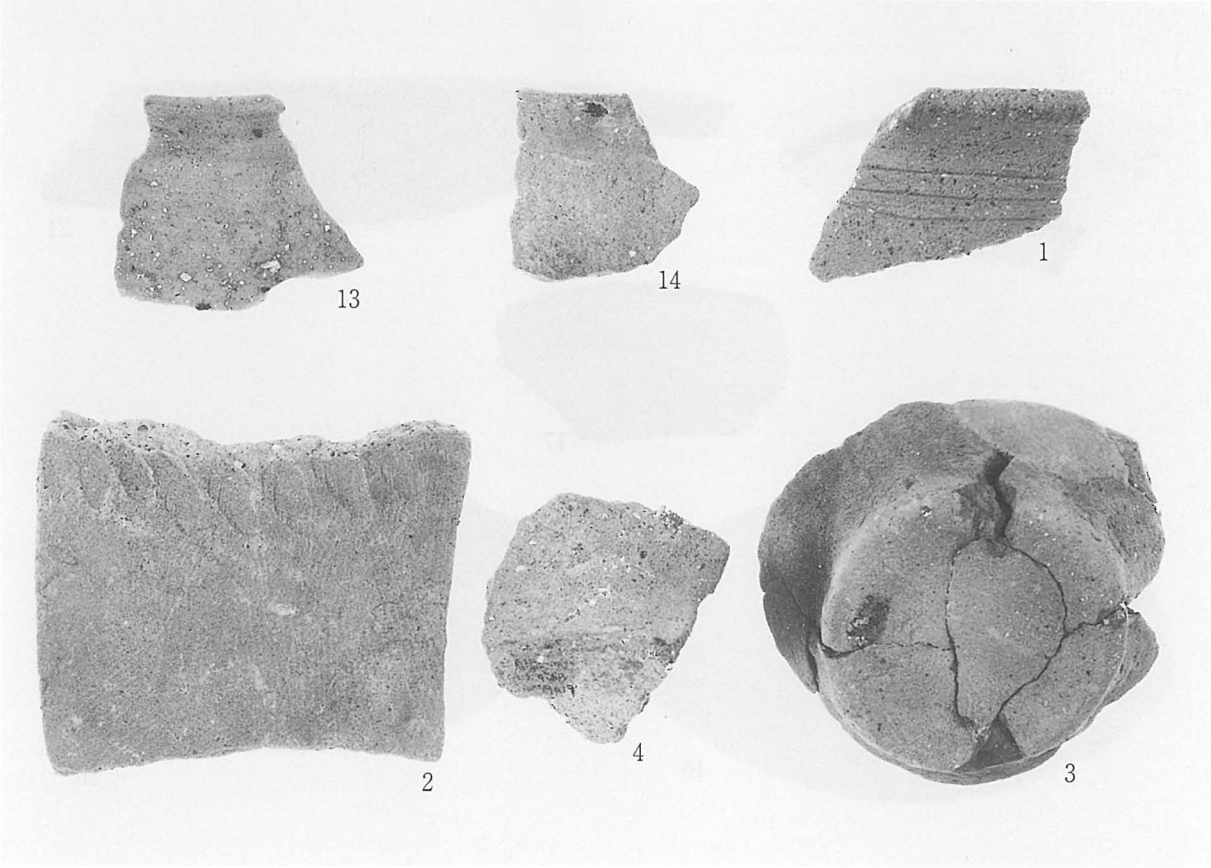


C－8地区土層断面

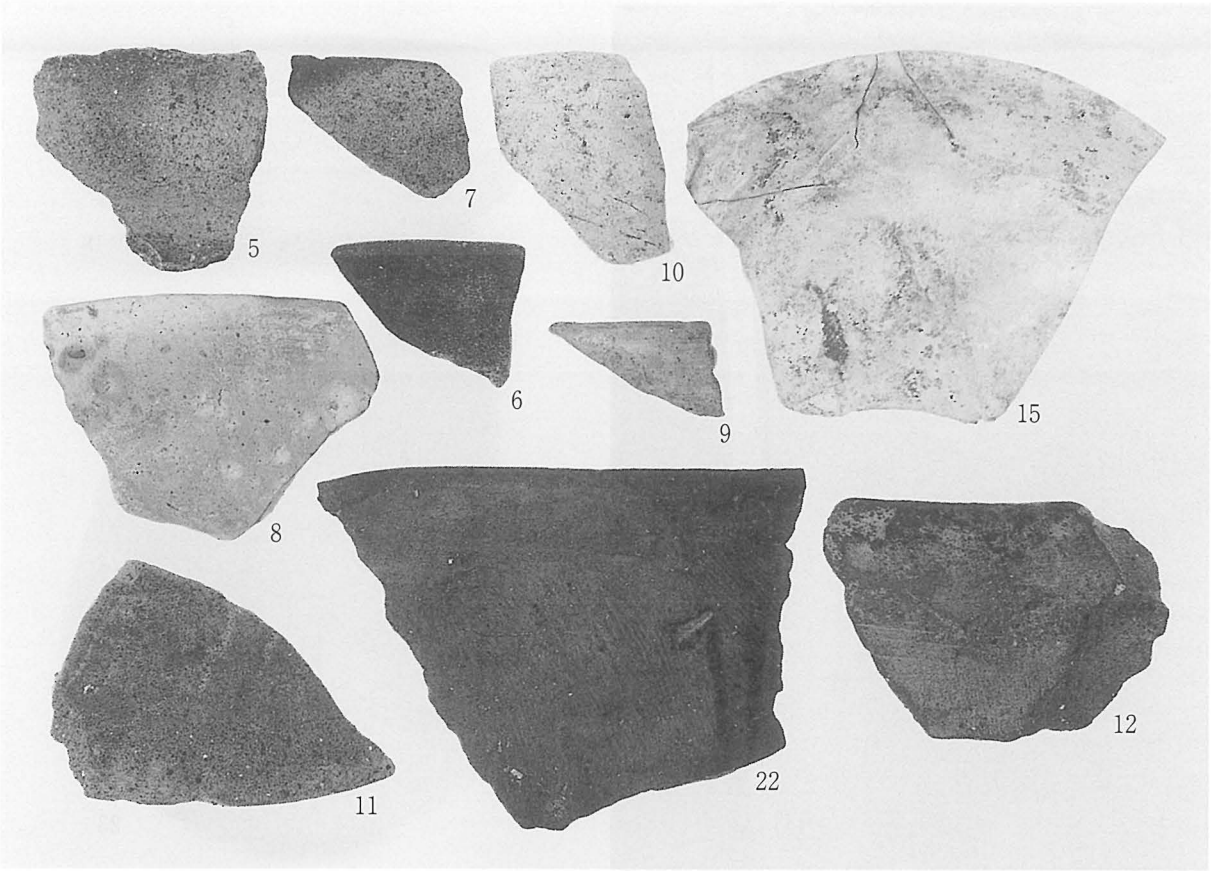
ピット1検出状況

B－8地区土層断面

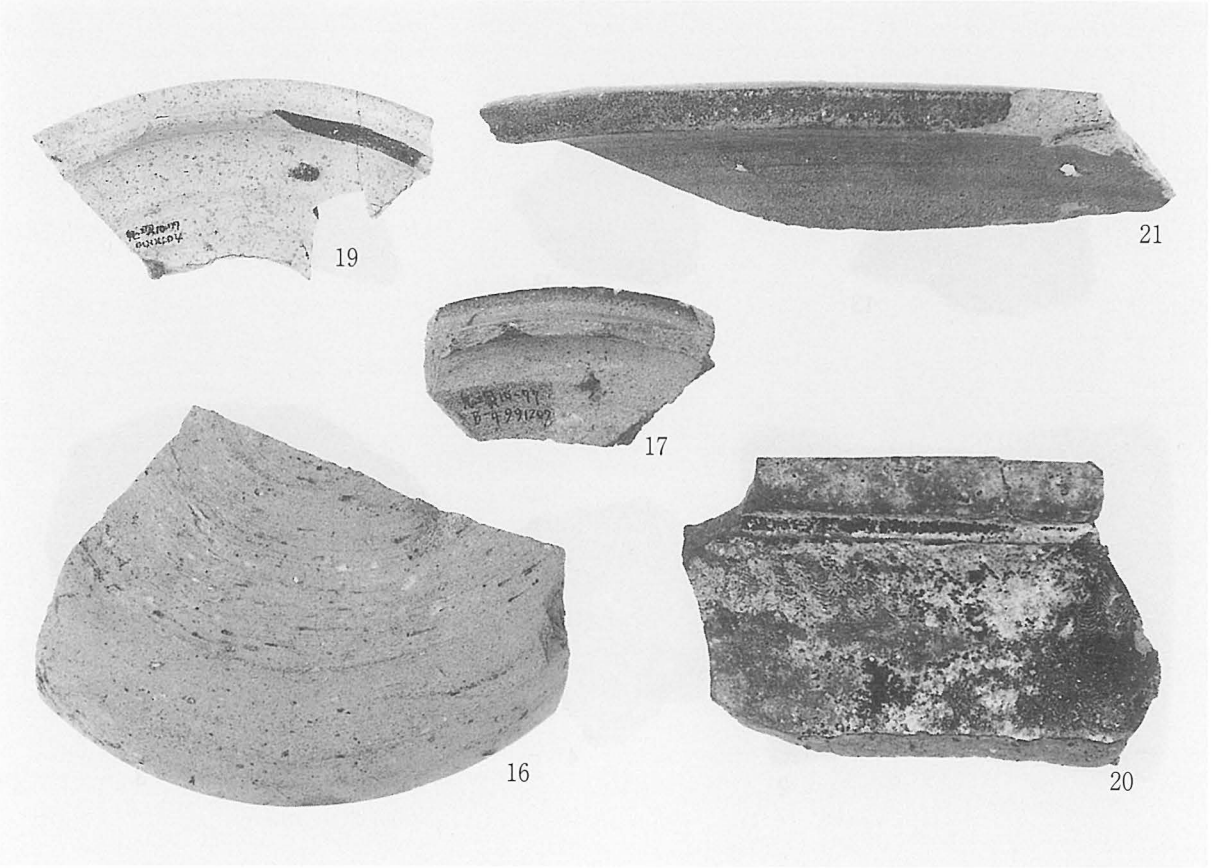
出土遺物（須恵器・土師器）



出土遺物（弥生土器・土師器）



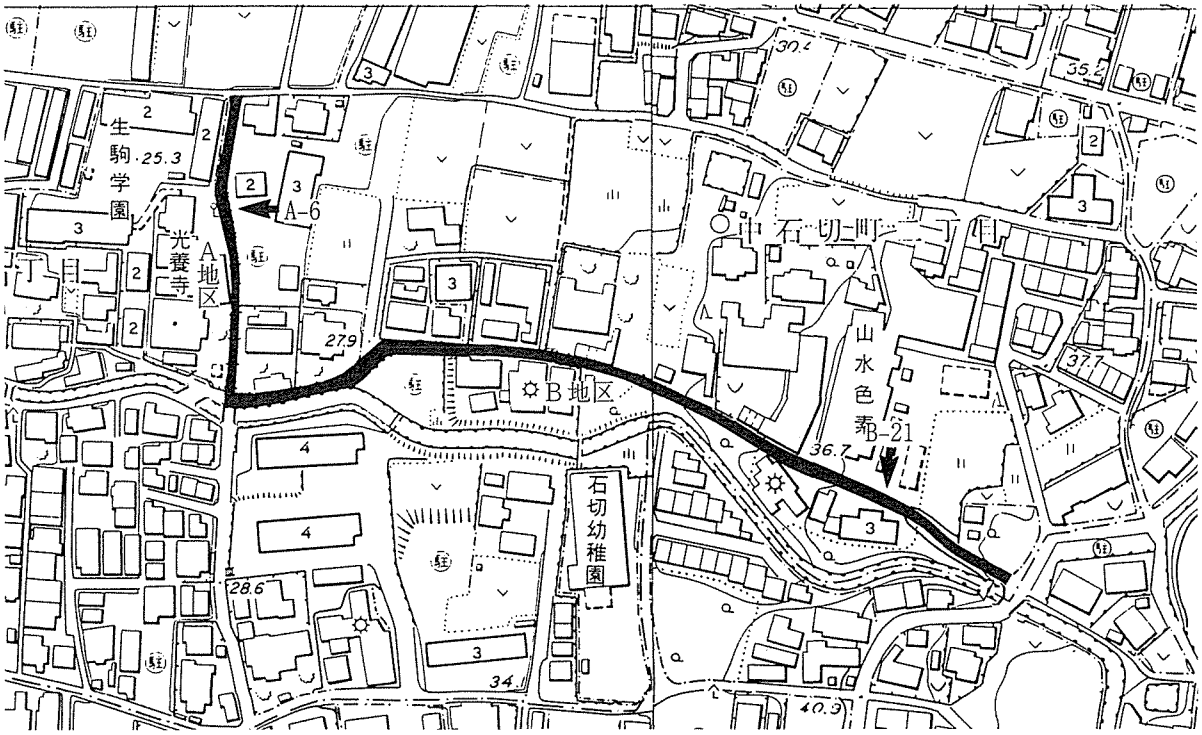
出土遺物（土師器）



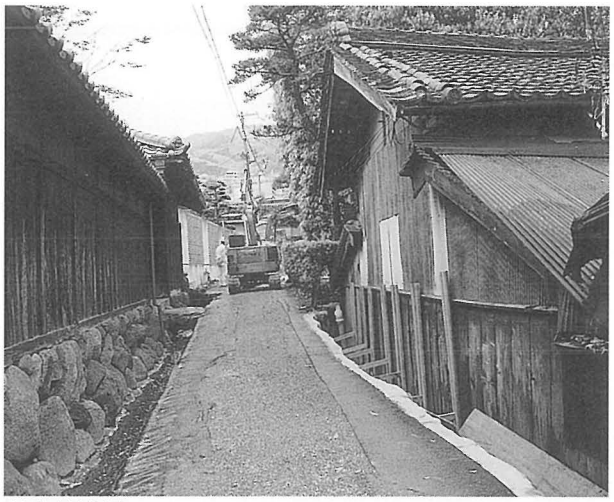
出土遺物（須恵器）

第７章　辻子谷遺跡の調査

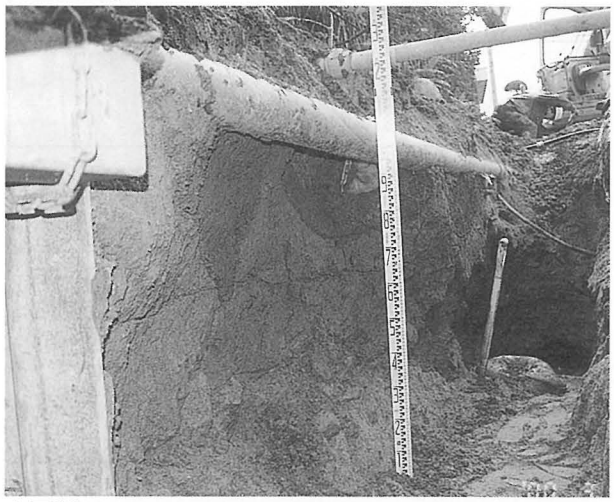
	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成10年度公共下水道第75工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市中石切町２丁目
3	調 査 面 積	328㎡
4	調 査 期 間	平成12年３月１日～５月15日（延べ36日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は音川の北側道路である。当地点は辻子谷遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9ｍで長さ387ｍの間であり、開削工法である。



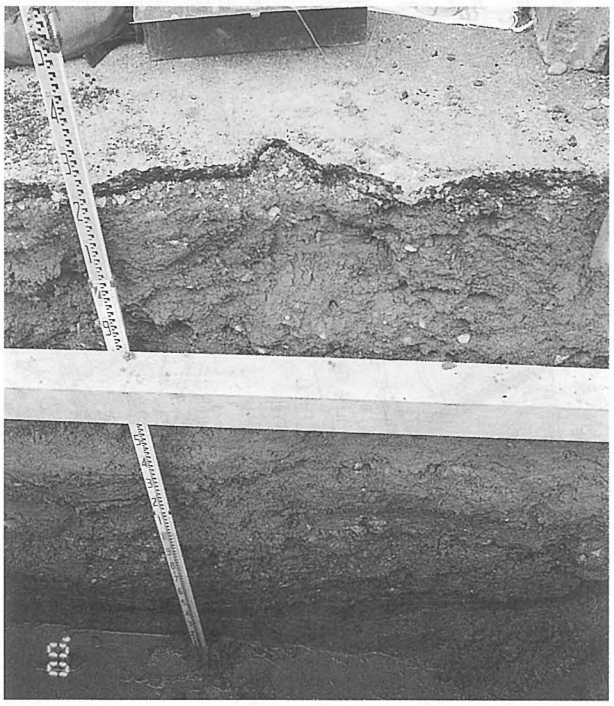
調査地点位置図（1/2500）



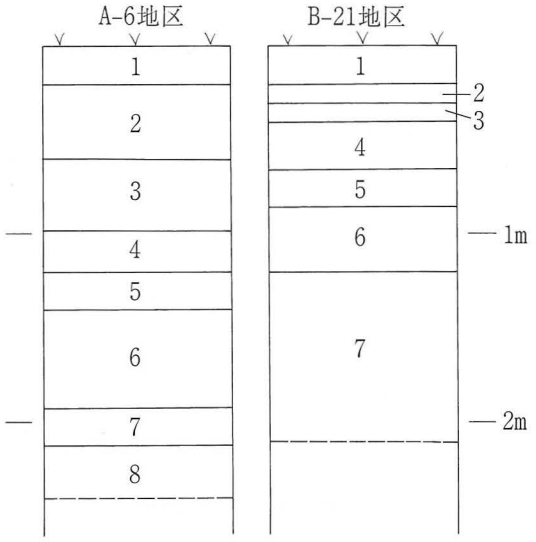
調査地遠景



土層断面



土層断面



土層断面柱状図

1．調査の概要

A－6地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂。

第3層　黄褐色(2.5Y5/3)粘質土。

第4層　黄褐色(2.5Y4/1)粘質シルト。

第5層　黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。

第6層　暗褐色(7.5YR3/3)粘質土。

第7層　にぶい黄褐色(10YR2/3)砂質土。

第8層　灰黄褐色(10YR4/2)粘質土。

B－21地区の層序

第1層　盛土。

第2層　褐灰色(7.5YR5/1)粘質土。

第3層　灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂。

第4層　灰色(5Y5/1)粘質土。

第5層　にぶい黄橙色(10YR7/2)細～粗粒砂。

第6層　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土。

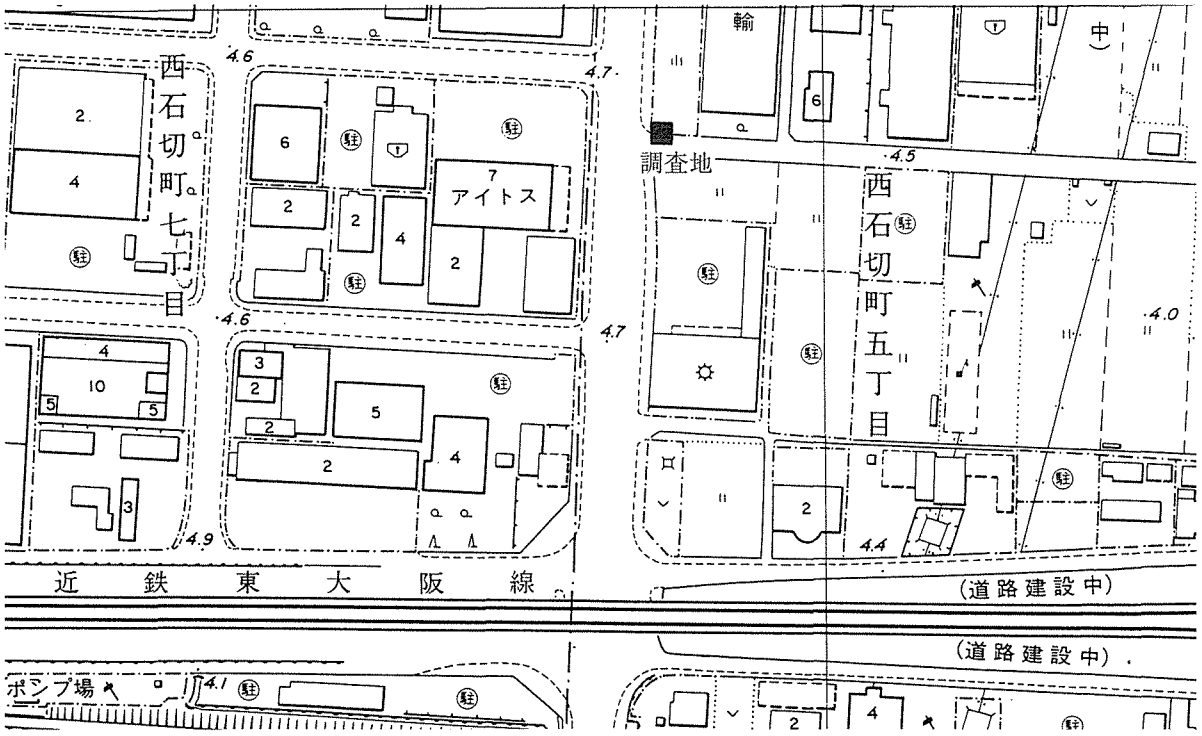
第7層　灰黄褐色(10YR6/2)粗粒砂～細礫。

2．まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第８章　鬼虎川（きとらがわ）遺跡の第51次調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成10年度公共下水道第69工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市西石切町４丁目～５丁目
3	調 査 面 積	39㎡
4	調 査 期 間	平成12年１月６日～１月31日（延べ15日）
5	報 告 担 当	東朋子
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は外環状線（国道170号線）と国道308号線の交差点より北に位置する。工事は推進工法でおこなわれることになり、発進立坑が鬼虎川遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、発掘調査をおこなうことになった。調査範囲は6.4×6.0mである。



調査地点位置図（1/2500）

1．調査概要

本調査は、国道170号線(外環状線)と国道308号線の立体交差に伴う工事に先行して下水管を移動、埋設するため発掘調査を実施することとなった。工事は推進工法による下水管敷設のため、協議の結果、４つの人孔部分のうちの一つを発掘調査、残りを立会調査とすることとなった。

2．層序

調査は盛土部分を機械で掘削した後、最終掘削深度まで人力による掘削を行った。調査区の南半分は地表下2.2mまで既設の下水管によって撹乱されていた。第１層から第33層は掘り上げ田に伴う溝の堆積土である。T.P.-0.6mまで面による調査を行い、T.P.-1.5mまで確認掘りを行った。

調査地は、同時期に調査が行われた鬼虎川第49次調査のほぼ東向かいに位置しており、多少のT.P.値の違いはあるが基本的な層序は同じであることを確認した。

3．出土遺物

出土遺物のすべてが掘り上げ田の中から出土した。遺物には瓦、陶磁器、瓦質土器がある。

１・２は平瓦である。共に凹面に布面が残る。１は凸面に縄目、２は格子のタタキが残る。

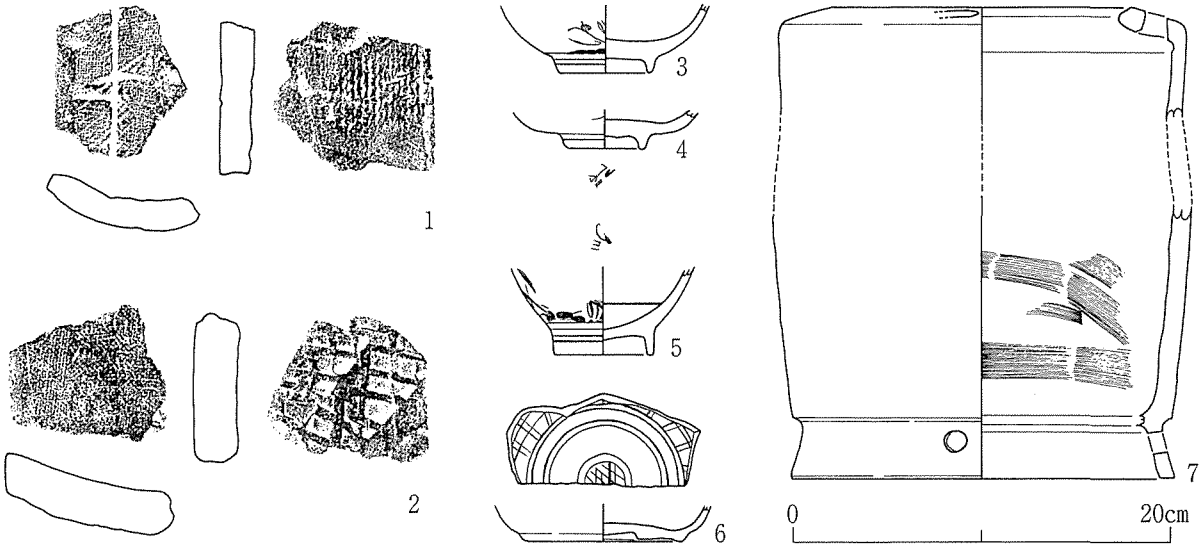
３～５は染付碗、６は染付皿である。３の外面は淡い紺色で文様が施され、内面の見込みには蛇の目釉ハギが見られる。高台端部に離れ砂が付着する。４は高台見込みに銘らしきものが黒に近い紺色で入れられている。高台端部には離れ砂が付着する。５は広東碗である。内面見込みには淡い藍色で文様が施され、外面は半輪と草花文様が濃い藍色と淡い藍色の二色によって描かれている。６の内面は淡い紺色で格子状の文様が施され、内面見込みと高台とに蛇の目釉ハギが見られる。

７は瓦質の火舎である。全体が黄褐色で外面をナデ、内面をナデとハケで仕上げている。

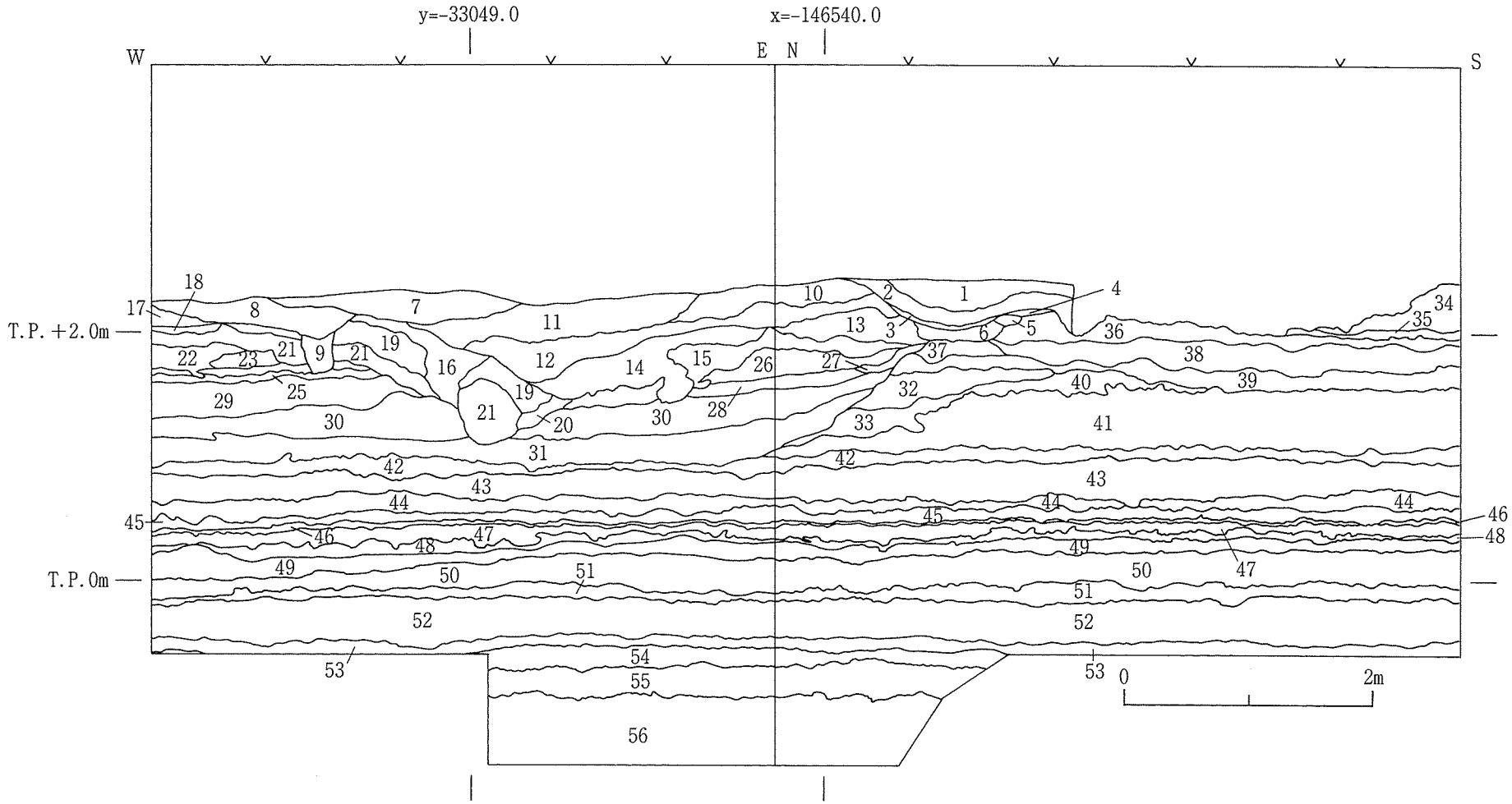
4．まとめ

今回の調査では近代のものと思われる掘り上げ田を確認したが、それ以外の時代の遺構や遺物包含層は確認出来なかった。調査面積が狭かったこともあるが、調査地の南西で落ち込みを確認したのみである。弥生時代の生活域は当調査地までは至っていなかったと考えられる。

立体交差に伴う発掘調査は引続き続行中である。本調査地を含む調査が平成12年度現在実施されており、その調査によって鬼虎川遺跡の北限がより明らかになるであろう。詳細な報告が近々なされるので検討は後の調査報告に委ねたい。



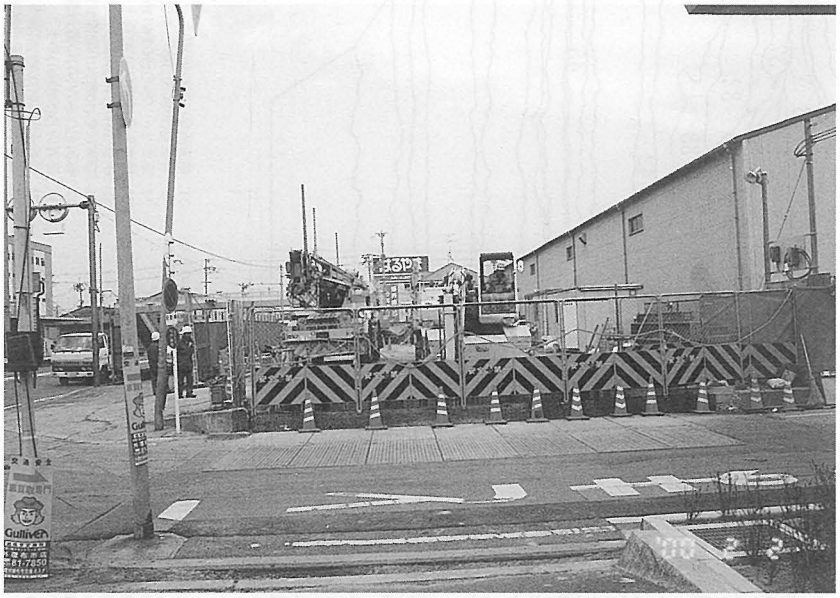
出土遺物実測図



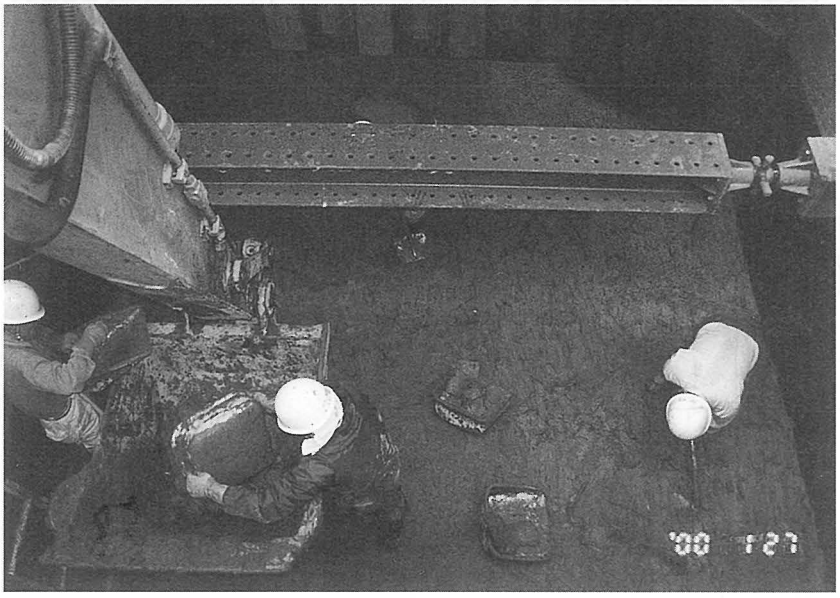
1. 暗緑灰色(5G4/1)粘質土
2. 暗緑灰色(10G4/1)粘土
3. 青灰色(5BG5/1)中粒砂混粘質土 水分多く含む
4. 暗青灰色(10BG4/1)粘質シルト
5. 灰オリーブ色(5Y4/2)中礫
6. 暗青灰色(10BG4/1)細礫混粘質土 植物遺体を含む
7. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土 シルトがブロック状に混じる
8. 灰オリーブ色(5Y4/2)中礫混粗粒砂 ラミナ堆積
9. 暗緑灰色(10GY4/1)細礫混粘質土
10. 緑灰色(5G5/1)中礫混粘質土
11. 暗青灰色(10BG4/1)細礫混粘質土
12. 暗青灰色(10BG4/1)細粒砂混粘質土
13. 暗青灰色(5B4/1)細礫混粘質土
14. 青灰色(10BG5/1)粘質土と灰オリーブ色(5Y4/2)粗粒砂との互層
15. 暗青灰色(5BG4/1)粘土
16. 暗緑灰色(7.5GY4/1)粘質土と灰オリーブ色(5Y4/2)粗粒砂との互層
17. 暗緑灰色(7.5GY4/1)細礫混粘質土
18. 灰オリーブ色(5Y4/2)中礫混粗粒砂
19. 青灰色(10BG5/1)中礫混粘質土 水分多く含む
20. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土とシルトとの互層
21. 青灰色(10BG4/1)粘質土
22. 暗青灰色(5BG4/1)粘質土とシルトとの互層 ラミナ堆積
23. 灰オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂
24. 灰色(5Y4/1)シルトと粘質土との互層
25. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土
26. オリーブ灰色(2.5GY5/1)中礫混中粒砂
27. 暗青灰色(5BG4/1)粘質土
28. オリーブ灰色(2.5GY5/1)極細粒砂
29. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土とシルトとの互層
30. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘質シルト
31. 暗青灰色(10BG4/1)粘土
32. 青灰色(10BG5/1)粘土 黒色斑点混入
33. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質土 植物遺体を含む
34. 暗青灰色(10BG4/1)粘質土
35. 灰色(10Y4/1)中礫混中粒砂
36. 暗青灰色(10BG4/1)細礫混粘質土
37. 緑灰色(7.5GY5/1)粘質土 黒色斑点混入
38. 暗青灰色(5BG4/1)粘土
39. 暗緑灰色(10GY4/1)粘質土 黒色斑点混入
40. 暗青灰色(5BG4/1)細礫混粘質土
41. 灰色(5Y4/1)粘質土 水分多く含む
42. 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細礫混粘土
43. 暗緑灰色(10GY3/1)多量の中礫混粘質土
44. 暗緑灰色(5G4/1)粘土
45. 暗緑灰色(10G4/1)シルト質粘土
46. 暗緑灰色(10GY4/1)極細粒砂
47. 黒色(7.5Y2/1)粘土
48. 黒色(5Y2/1)粘土 炭と植物遺体を多量に含む
49. 黄褐色(2.5Y5/3)粘土
50. 黒色(2.5Y2/1)粘土
51. 黒色(2.5Y2/1)粘土 植物遺体を多量に含む
52. 灰色(5Y5/1)粘土 上層からの巻きこみがみられる
53. 灰色(10Y5/1)粘土
54. 灰色(5Y4/1)シルト質粘土 ブロック状にシルトが混じる
55. 灰色(7.5Y4/1)シルト 粘性あり
56. 暗オリーブ灰色(5G4/1)極細粒砂

北・東壁断面実測図

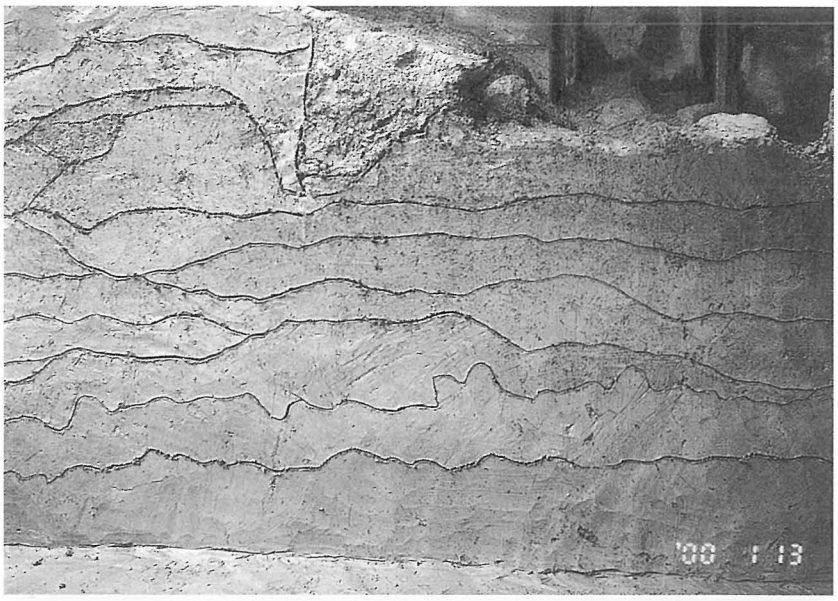
調査地遠景



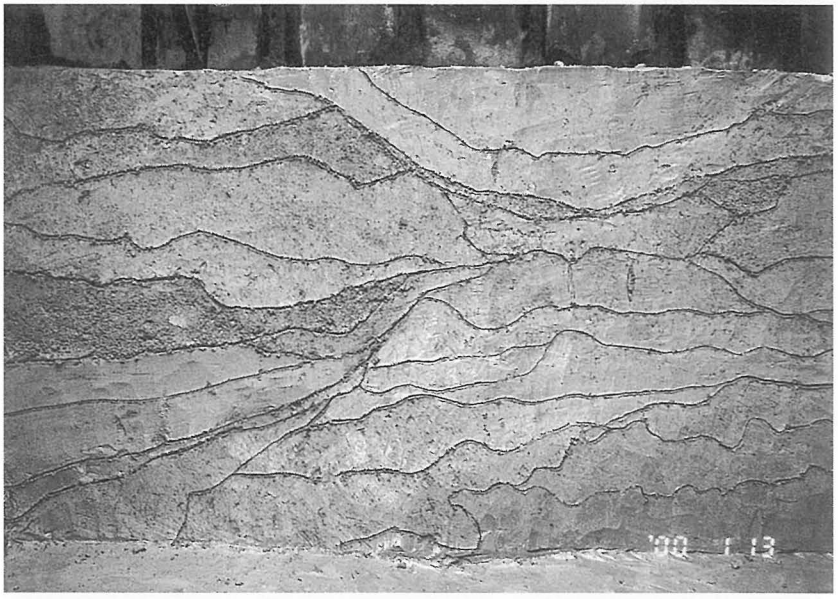
調査地近景（南より）



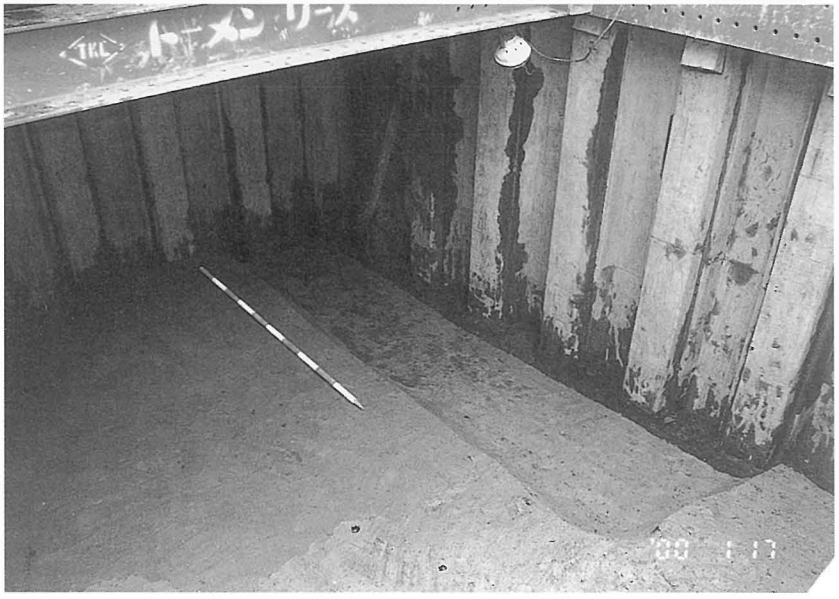
調査風景



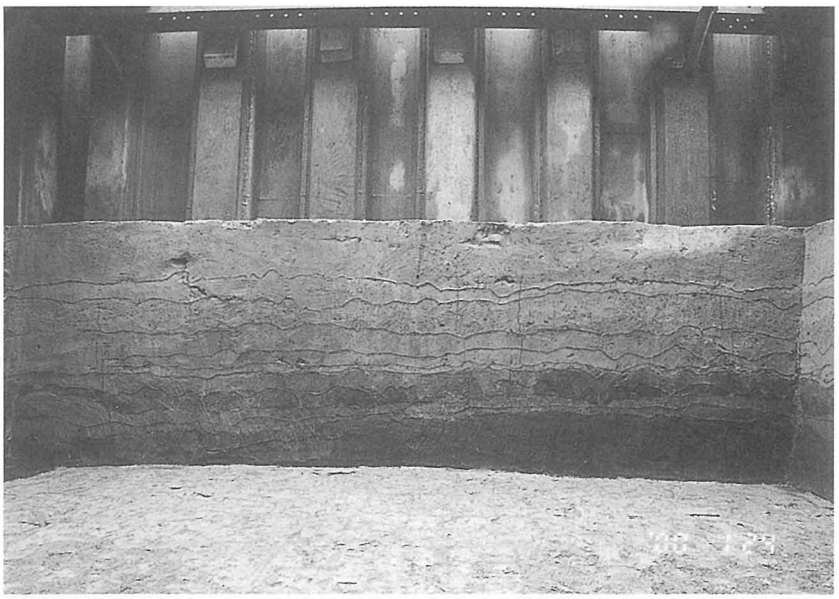
北壁土層断面



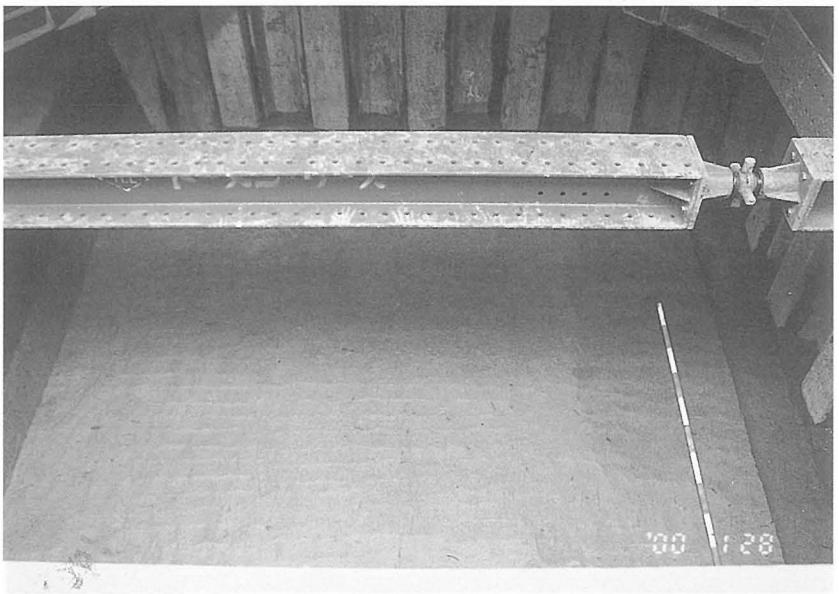
掘り上げ田の構内堆積状況



落ち込み（南西部）

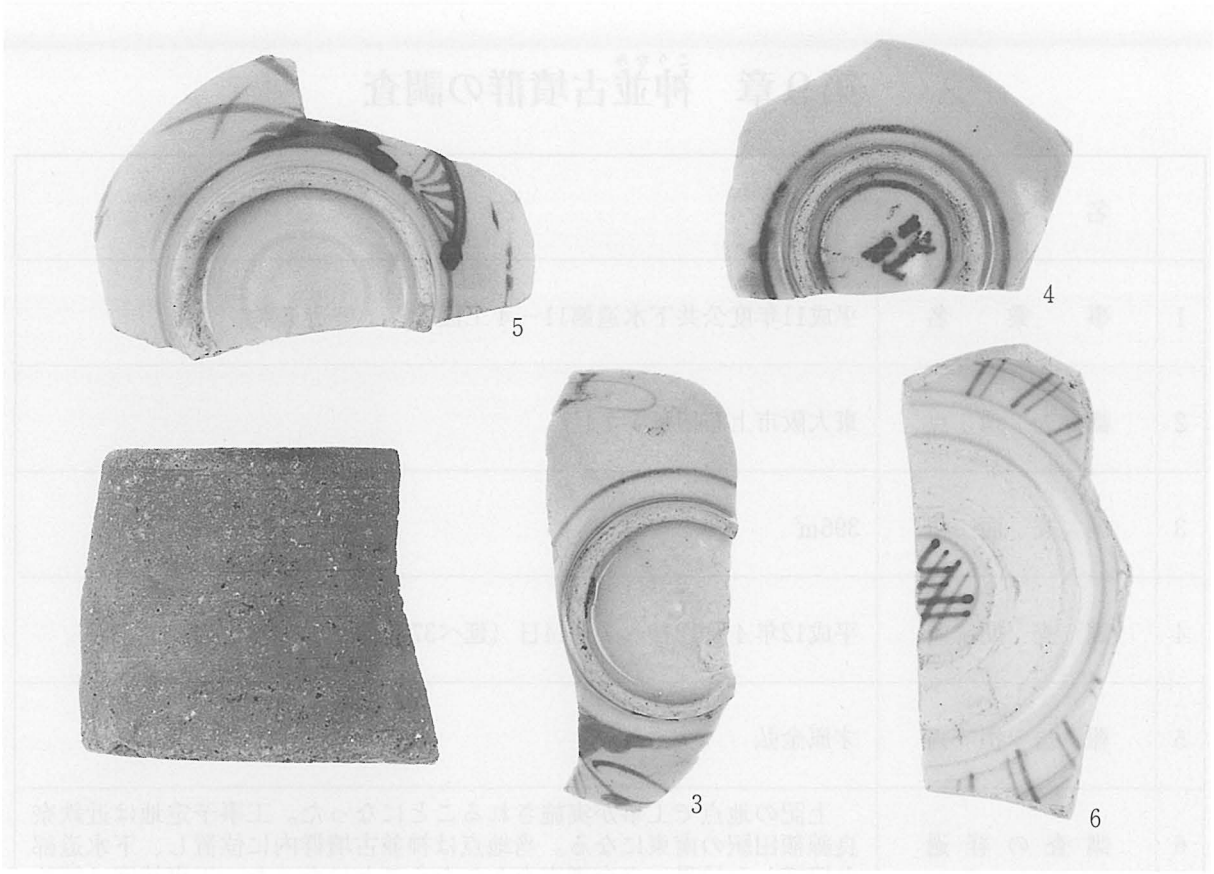


北壁土層断面

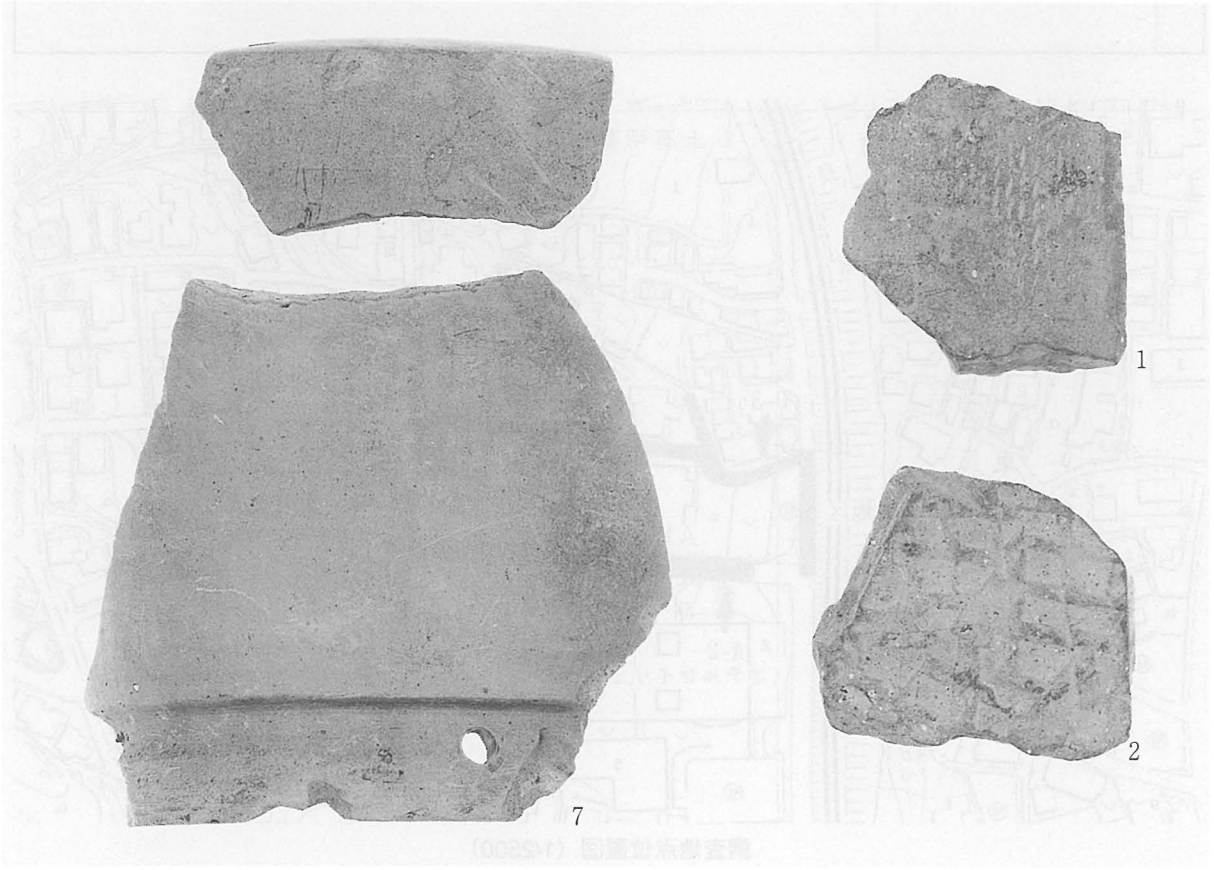


完掘状況

確認掘り北壁土層断面



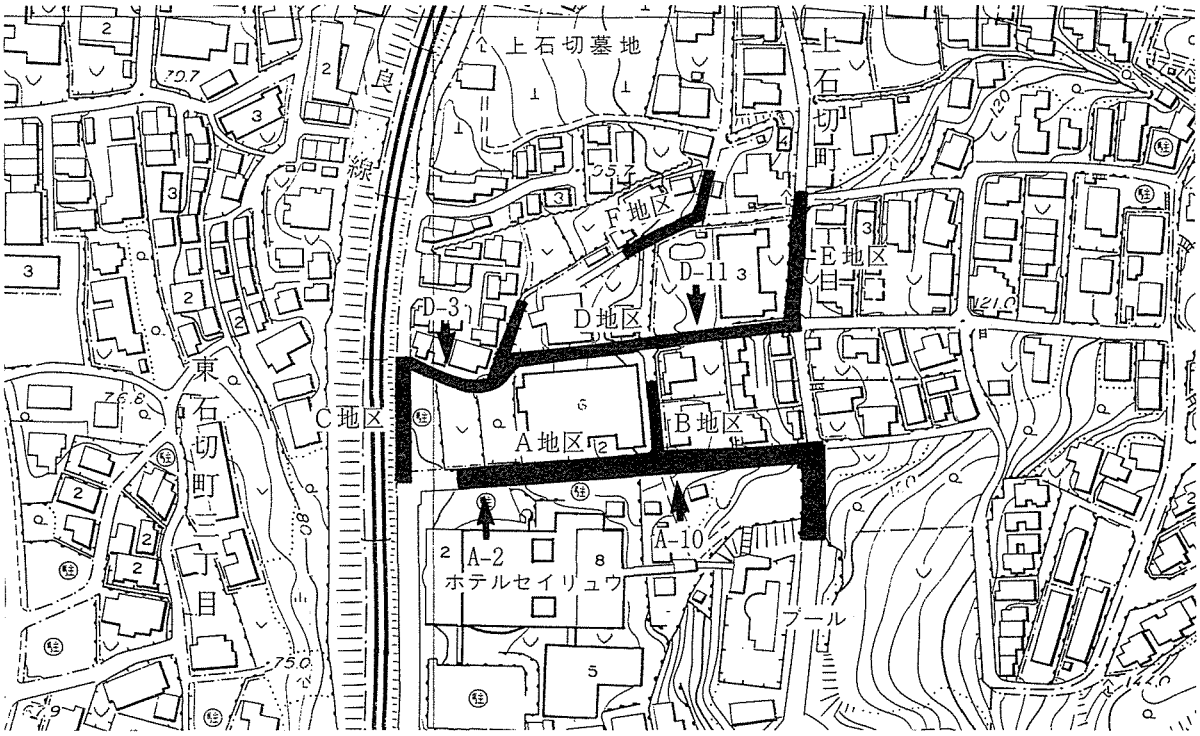
出土遺物



出土遺物

第９章　神並（こうなみ）古墳群の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第11－４工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市上石切町１丁目
3	調 査 面 積	396㎡
4	調 査 期 間	平成12年４月12日～７月14日（延べ37日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線額田駅の南東になる。当地点は神並古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ466mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/2500）

1．調査の概要

A－2地区の層序

第1層　盛土。

第2層　褐色(10YR4/4)小～中礫混じり粘質土。

第3層　明褐色(7.5YR5/8)粘質土。

A－10地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土。

第3層　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。

第4層　黄褐色(2.5Y5/4)粘質土。

第5層　黄褐色(10YR4/6)粗粒砂混じりシルト。

第6層　灰白色(10YR8/2)小礫混じり粗粒砂。

D－3地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黄褐色(10YR5/8)小礫混じり粘質土。

第3層　明黄褐色(10YR6/8)小礫混じり粘質土。

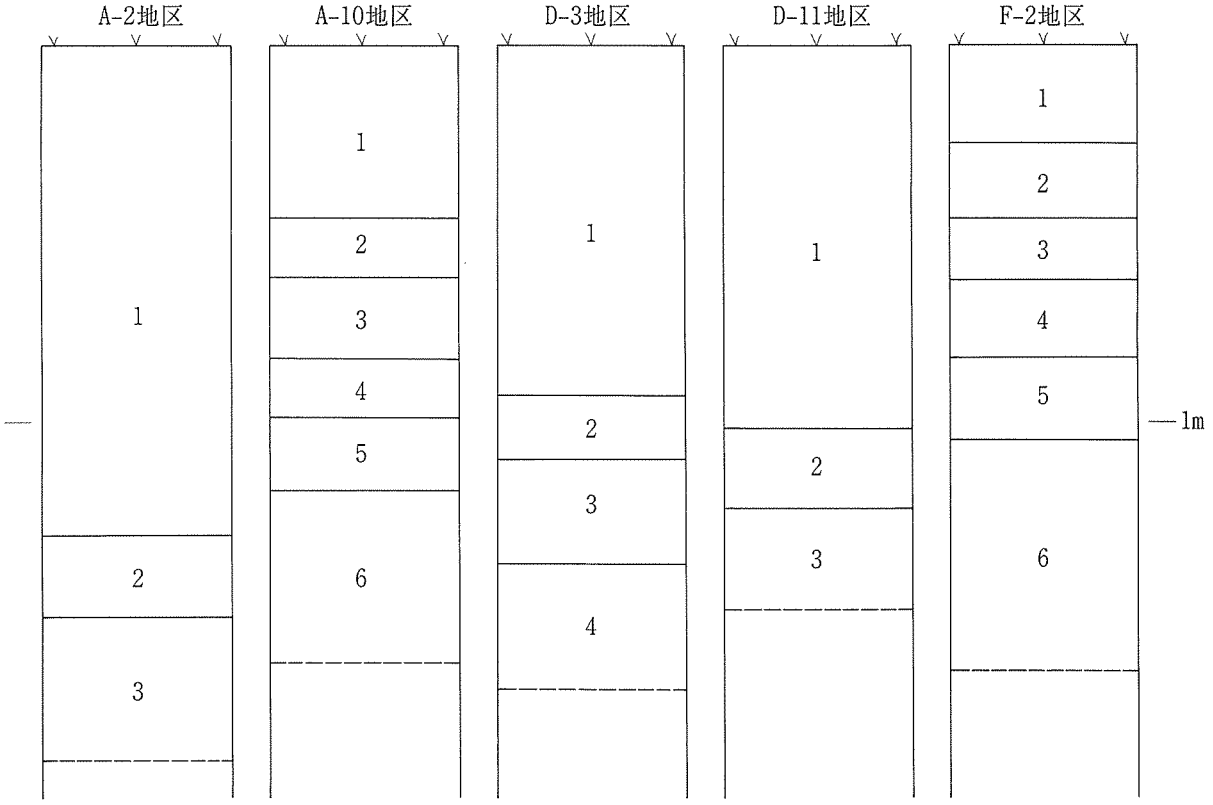
第4層　明黄褐色(10YR7/6)微粒砂混じり粘質土。

D－11地区の層序

第1層　盛土。

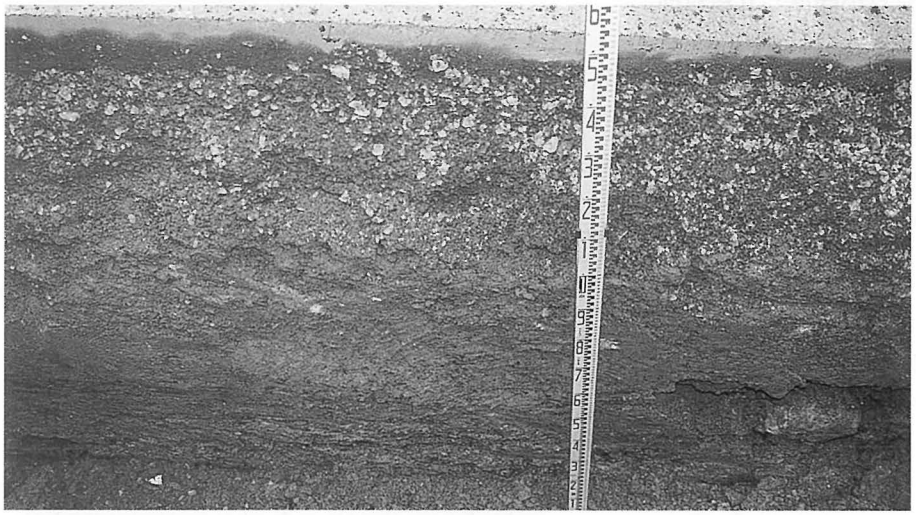
第2層　黄褐色(10YR5/8)粘質土。

第3層　明黄褐色(10YR6/8)小～中礫混じり粘質土。

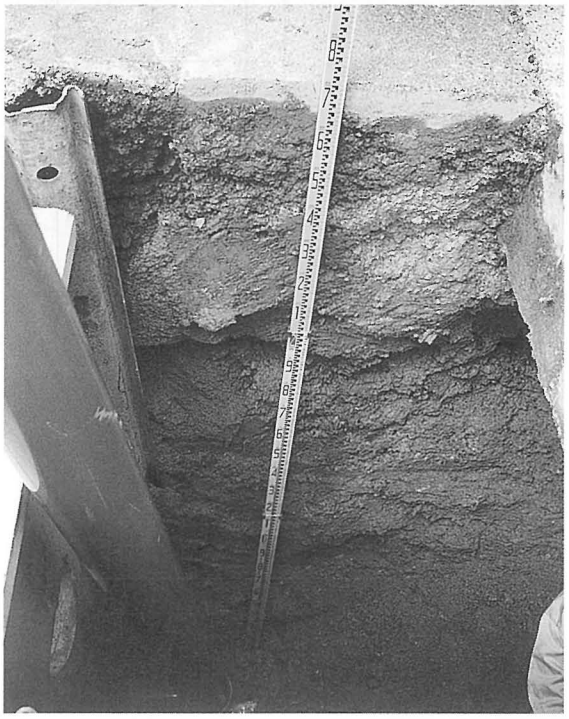


土層断面柱状図

調査地遠景



土層断面



土層断面

Ｆ－２地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黄褐色(10YR5/6)小礫混じり粘土。

第３層　暗黄褐色(2.5Y5/3)小礫混じり粘土。

第４層　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土。

第５層　黄褐色(10YR5/6)粘土。

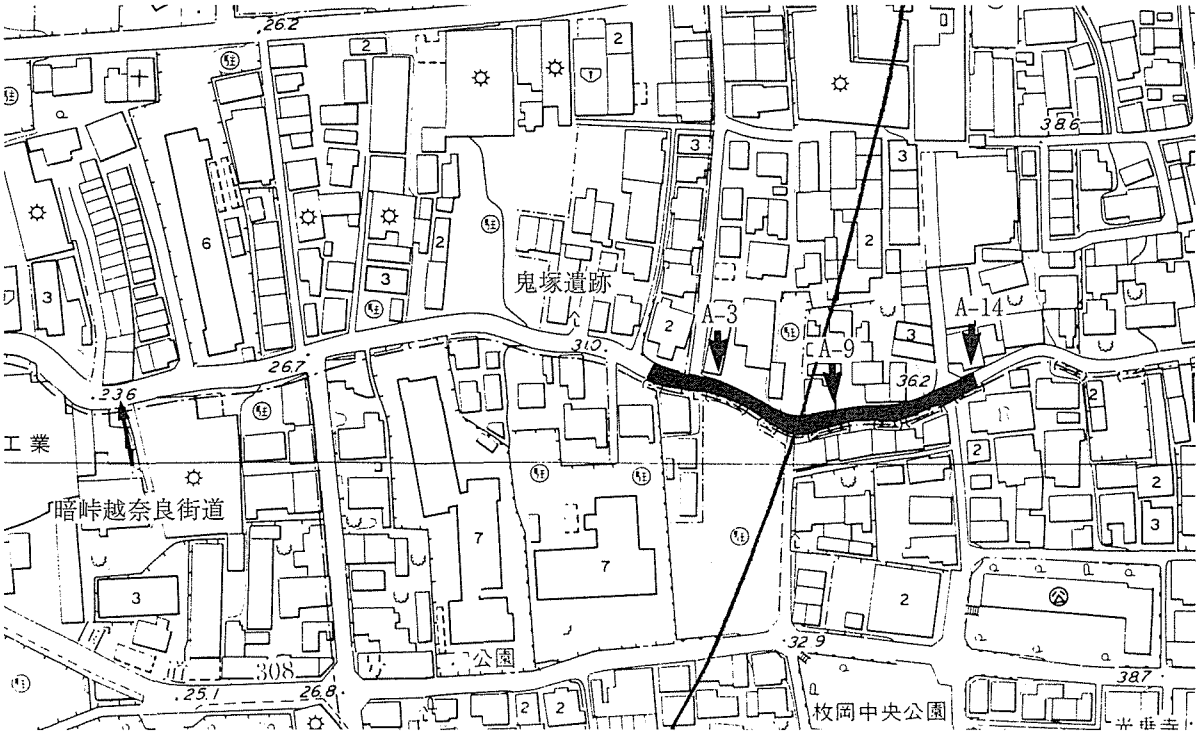
第６層　明黄褐色(10YR6/6)巨石混じり粘土。

２．まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第10章　暗峠越奈良街道・鬼塚遺跡(第25次)調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成10年度公共下水道第68工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市立花町地内
3	調 査 面 積	588㎡
4	調 査 期 間	平成11年11月25日～12年１月６日（延べ14日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は暗峠越奈良街道にあたり、また、西側の一部が鬼塚遺跡内に位置する。下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9～3.9mで長さ314mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/2500）

１．調査の概要

工事予定地は暗峠越奈良街道上で鬼塚遺跡の東端に位置するので立会調査を実施した。立会調査は西側よりおこなった。

２．層序

Ａ－３地区の層序

第１層　盛土。

第２層　暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂混じり粘質シルト。

第３層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)大礫混じり中～粗粒砂。

第４層　暗青灰色(5B3/1)粗粒砂混じり粘土。古墳～奈良・平安時代の遺物が出土。

第５層　暗青灰色(5PB3/1)粗粒砂混じり粘質土。

第６層　紫黒色(5P1.7/1)粗粒砂混じり粘質土。弥生時代の遺物が出土。

Ａ－９地区の層序

第１層　盛土。

第２層　灰オリーブ色(7.5Y6/2)細粒砂混じり粘質土。

第３層　灰色(5Y4/1)中礫混じり細粒砂。

第４層　灰オリーブ色(7.5Y4/2)細～粗粒砂。

第５層　オリーブ黒色(5Y3/2)小礫混じり粘質土。中世期の遺物が出土。

第６層　暗オリーブ色(5Y4/3)粗粒砂混じり粘質土。

第７層　暗緑灰色(7.5GY4/1)細～中粒砂混じり粘質土。古墳～奈良・平安時代の遺物が出土。

第８層　青黒色(5PB2/1)中～粗粒砂混じり粘質土。弥生時代の遺物が出土。

第９層　暗オリーブ色(5GY4/1)小礫混じり粘質土。

Ａ－14地区の層序

第１層　盛土。

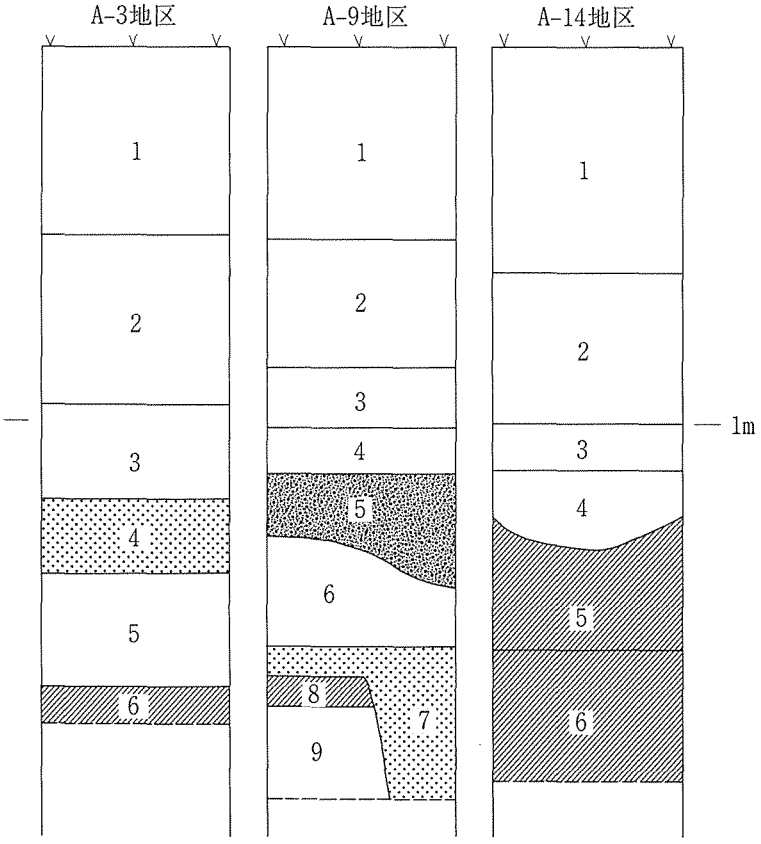
第２層　緑灰色(10GY5/1)シルト。

第３層　暗青灰色(10BG4/1)粘質シルト。

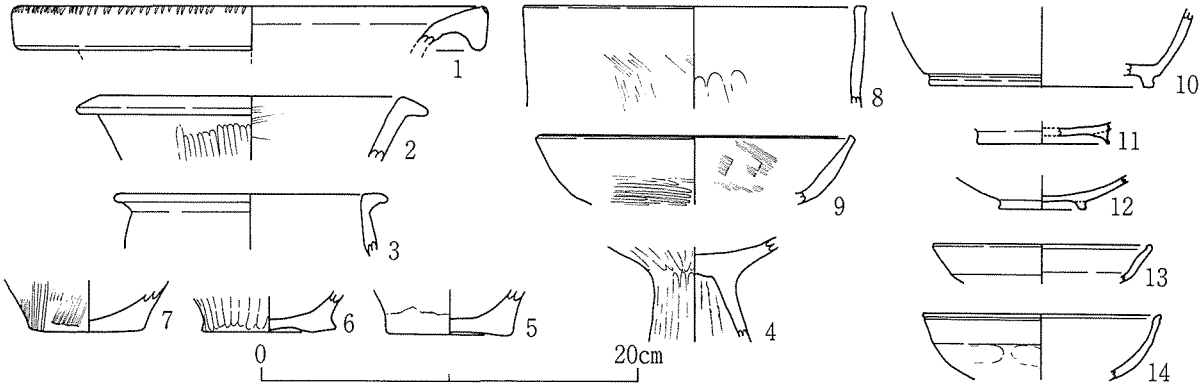
第４層　暗青灰色(5PB4/1)小礫混じり粘質土。

第５層　暗青灰色(5PB4/1)粘質土。弥生時代の遺物が出土。

第６層　暗青灰色(5PB3/1)粘質土。弥生時代の遺物が出土。



土層断面柱状図



出土遺物実測図

3．出土遺物

弥生時代～中世期の遺物が出土した。

弥生土器　壷・甕・高杯・底部の器種がある。1・2・15・16は後期の壷である。1は口縁端部を下方へ拡張し、幅広の面をもつ。上端にキザミ目を施す。2は頸部が外上方に広がり、口縁端部を下方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメの後ナデ調整する。15・16は口縁端部に擬凹線を施し、その上に竹管文を押した円形浮文を貼り付ける。3は前期の甕である。口縁部が逆L字形を呈する。調整法は不明。胎土は生駒西麓産である。4・17は後期の高杯である。4は柱状部であり、外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。17は杯部であり、外面に赤色塗料を施す。5～7は中期の底部であり、平底を呈する。

土師器　古墳時代(8・9)と奈良～平安時代のもの(13・14・18)がある。8は甑である。体部が上方へ伸び、口縁端部が面をもつ。9は高杯である。杯部が皿状を呈し、口縁端部がやや面をもつ。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメの後ナデ調整する。13は皿である。口縁部がやや外反し、口縁端部を内側へ巻き込む。14は口縁端部が内傾する杯である。18は皿か杯の高台である。

須恵器　10・19は高台のある奈良時代の杯である。

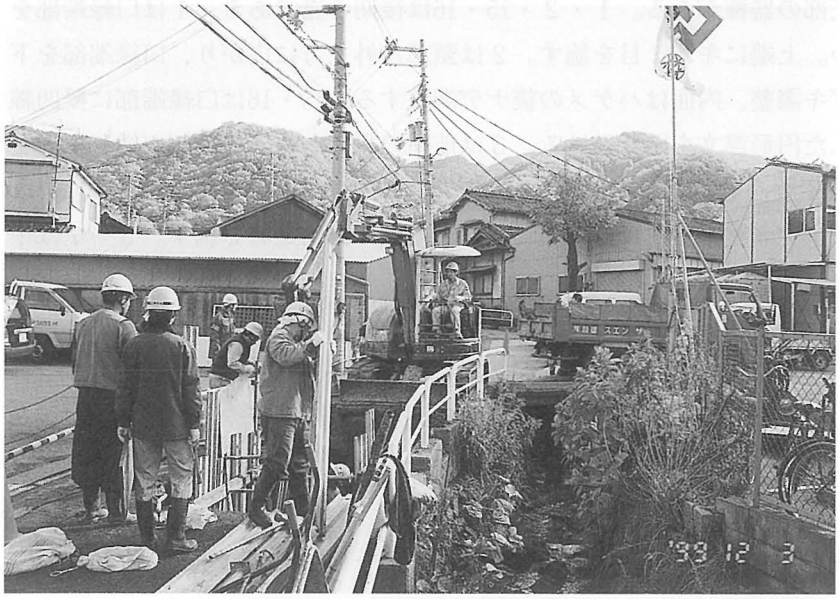
黒色土器　11は平安時代の黒色土器である。器種は椀であり、断面三角形の高台を貼り付ける。内面が黒色を呈する。

瓦器　12は中世期の瓦器椀である。断面が台形を呈する高台を貼り付ける。内外面は風化が著しく調整法は不明。

4．まとめ

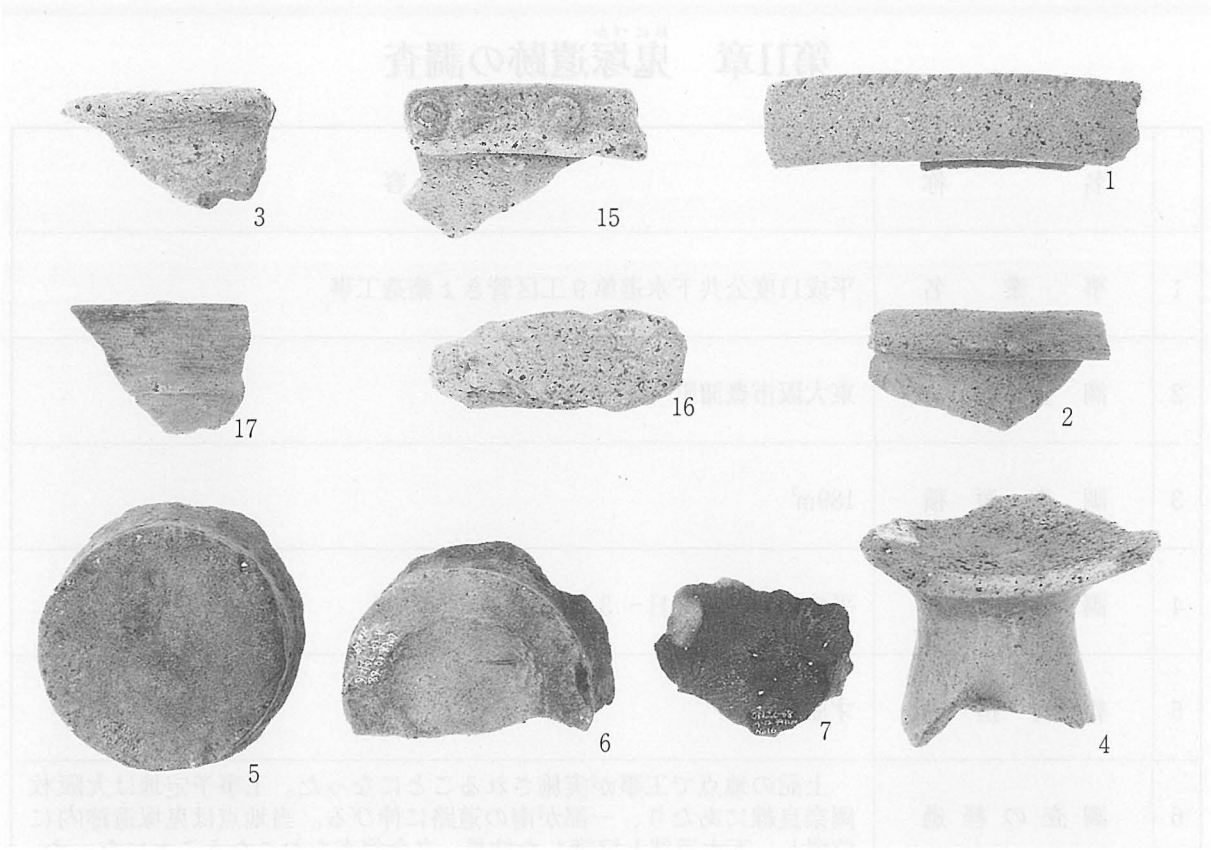
今回の調査地は暗峠越奈良街道であるが、立会調査を実施した。調査区間の全域で古墳～奈良・平安時代と弥生時代の遺物包含層を確認した。出土遺物や周辺状況から鬼塚遺跡の続きと考えられ、当遺跡の範囲をさらに東へ拡張する必要がある。

調査地遠景

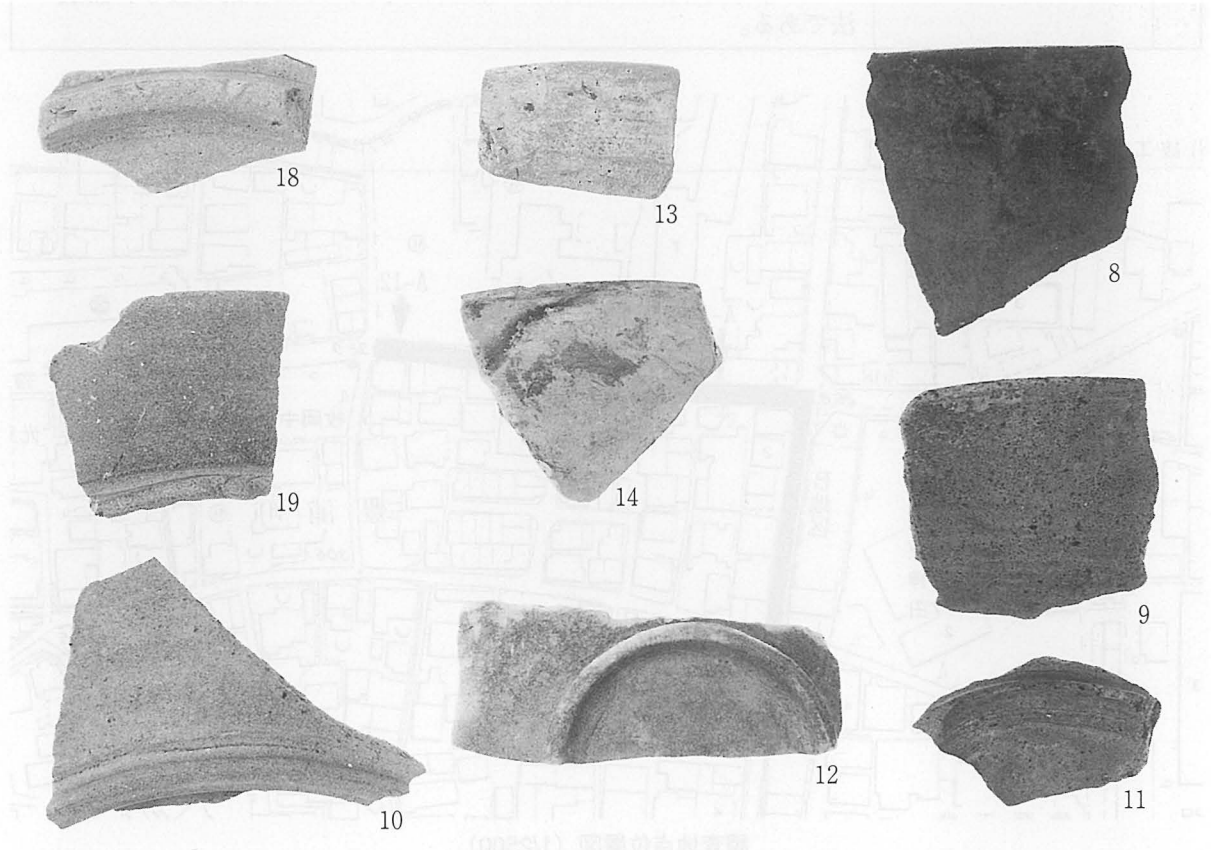


掘削状況

土層断面



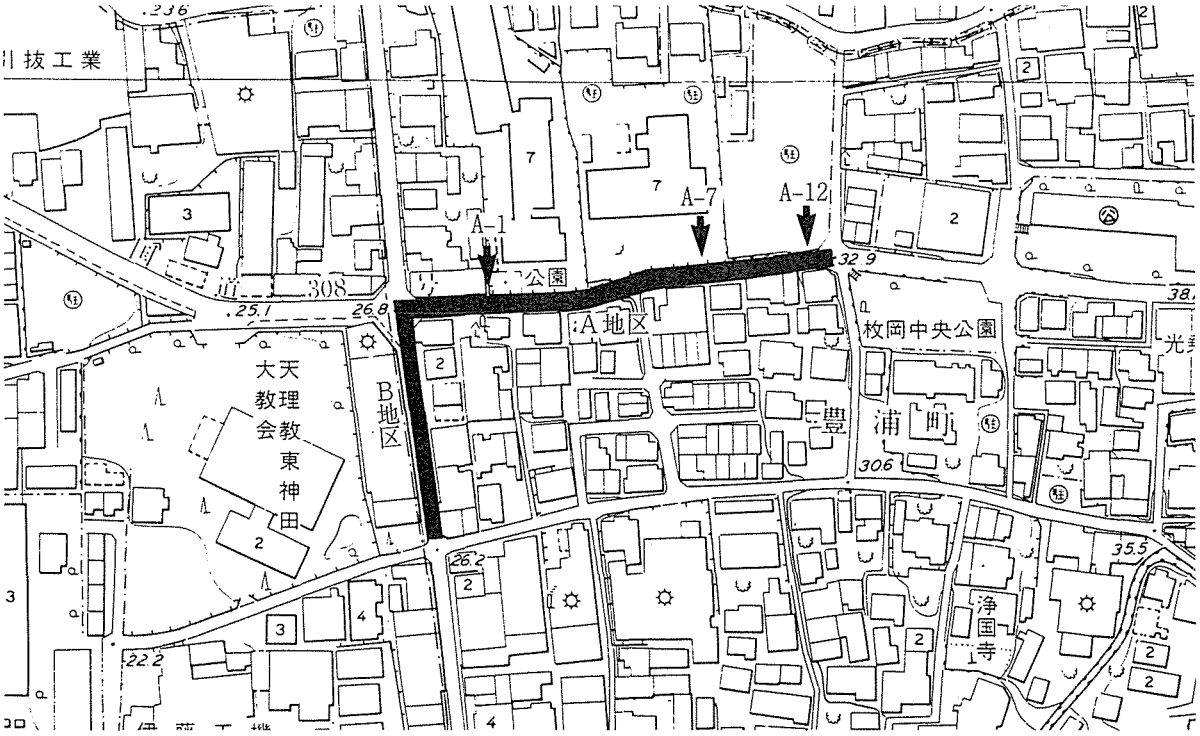
出土遺物（弥生土器）



出土遺物（土師器・須恵器・黒色土器・瓦器）

第11章　鬼塚（おにづか）遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11度公共下水道第９工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市豊浦町
3	調 査 面 積	189㎡
4	調 査 期 間	平成12年１月26日～３月８日（延べ26日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪枚岡奈良線にあたり、一部が南の道路に伸びる。当地点は鬼塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。南の道路部分は工事の都合により、立会調査を実施することができなかった。工事範囲は幅約0.8～0.9ｍで長さ222ｍの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/2500）

1．調査の概要

西側より順次、立会調査を実施した。工事区域の道路は交通量が多く、短時間しか観察することはできなかった。

2．層序

A－1地区の層序

第1層　盛土。

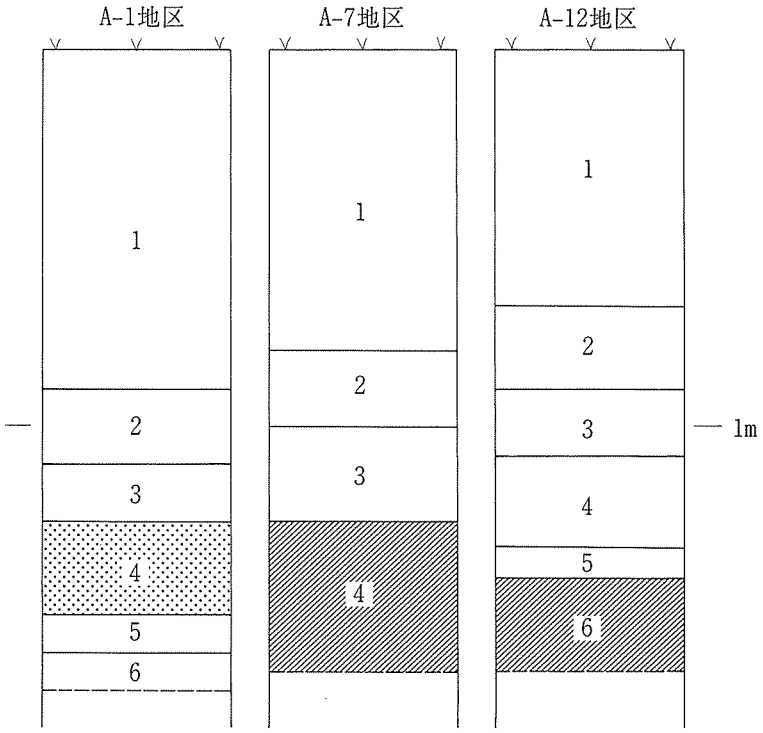
第2層　灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土。

第3層　オリーブ黄色(5Y6/3)粘質シルト。

第4層　黄灰色(2.5Y4/1)砂混じり粘質土。中世期の遺物が出土。

第5層　オリーブ色(10Y5/2)砂混じり粘質土。

第6層　オリーブ色(5Y5/4)砂混じり粘質土。



土層断面柱状図

A－7地区の層序

第1層　盛土。

第2層　灰色(10Y4/1)中～大礫混じり粘質土。

第3層　オリーブ黒色(10Y3/1)中礫混じり粘質土。炭化物を含む。

第4層　黒褐色(2.5Y3/1)中礫混じり粘質土。炭化物を含む。弥生時代の遺物が出土。

A－12地区の層序

第1層　盛土。

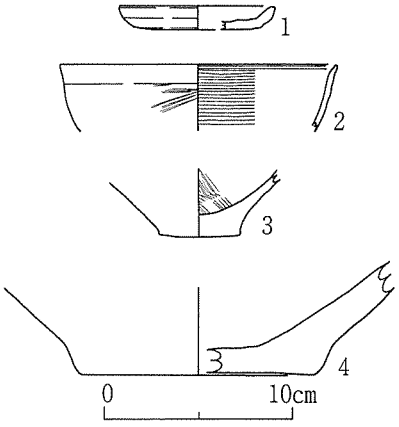
第2層　黒褐色(10YR3/2)小礫混じり砂質土。

第3層　オリーブ黒色(5Y3/1)砂質土。炭化物を含む。

第4層　オリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルト。

第5層　暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘質土。

第6層　黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト。弥生時代の遺物が出土。



出土遺物実測図

3．出土遺物

弥生時代～中世期の遺物が出土した。

弥生土器　3・4は底部である。平底を呈する。

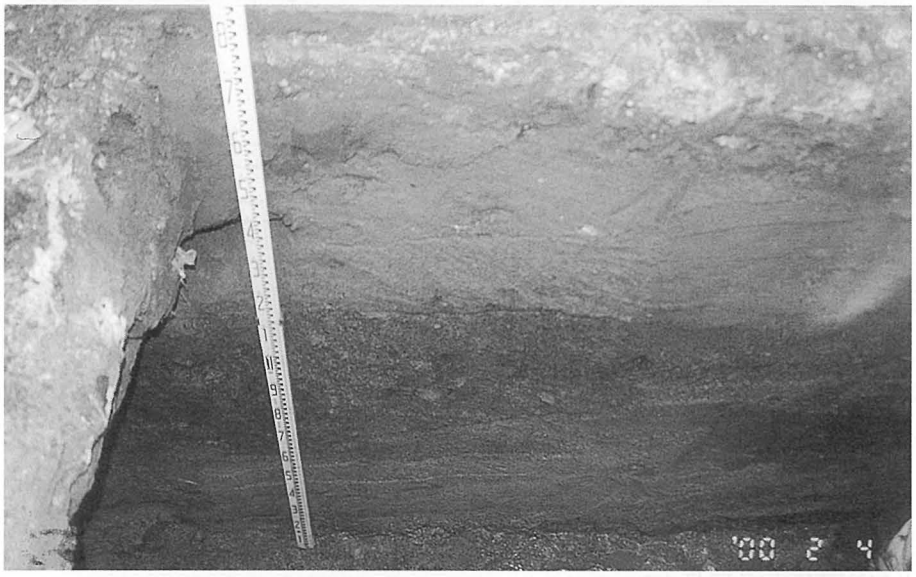
土師器　1は皿である。平底の底部より口縁部が内傾する。口縁端部は丸く終わる。底部と口縁部の境に稜がつく。

瓦器　2は大和型の椀である。体部はやや深く、口縁部が緩く外反する。口縁端部の内面に1条の沈線を施す。内面は密、外面はやや密なヘラミガキ調整する。

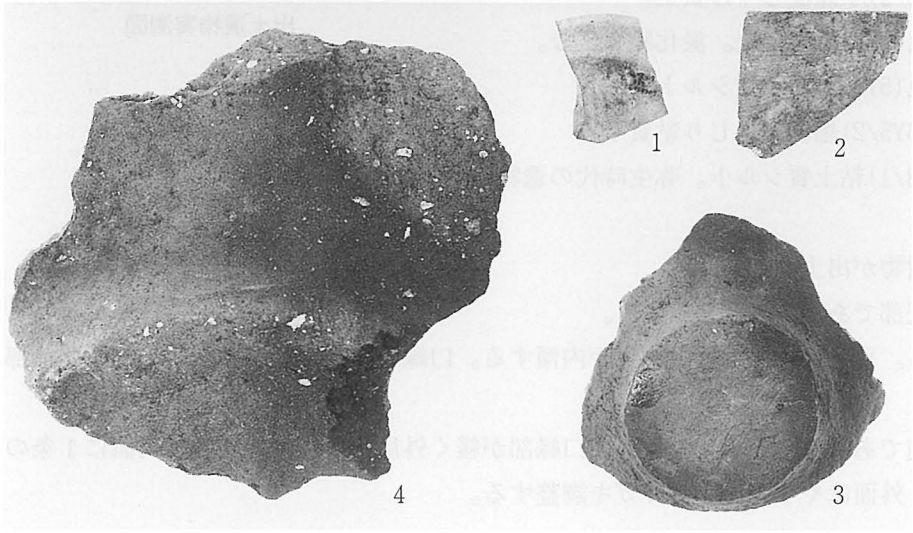
4．まとめ

工事の都合で短時間しか立会調査をできなかったが、弥生時代の遺物包含層は良好な状態で残っていることが確認できた。

調査地遠景



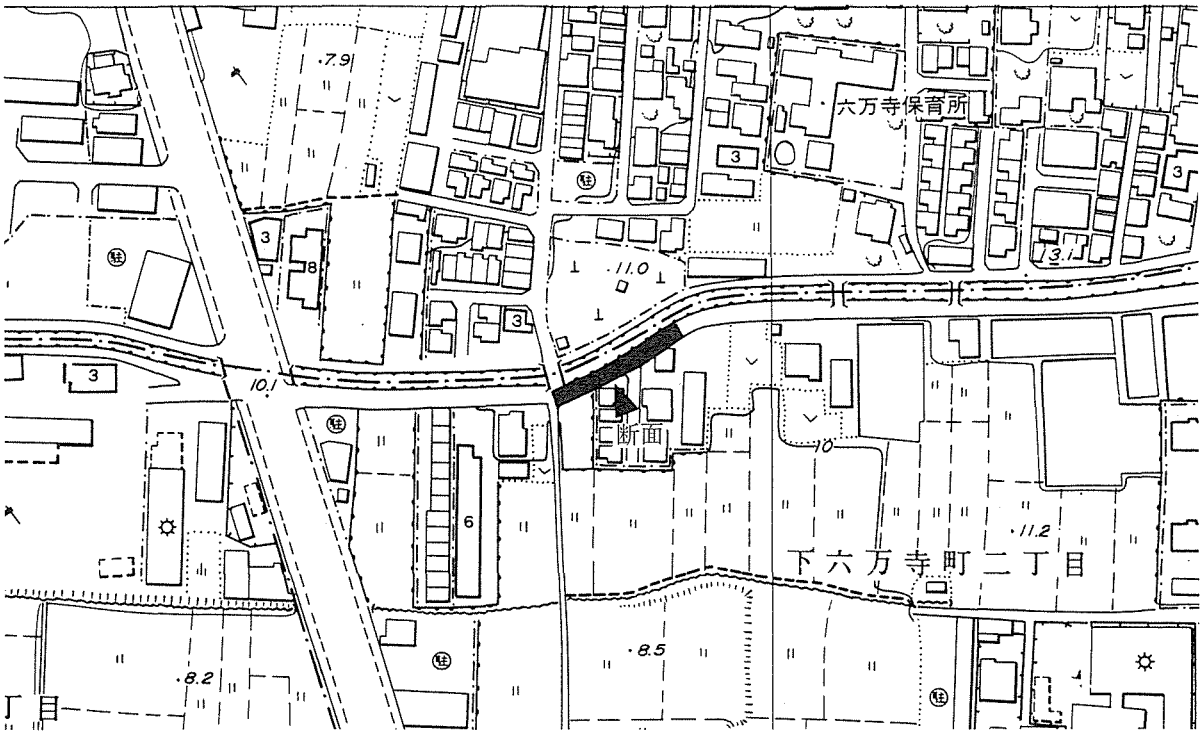
土層断面



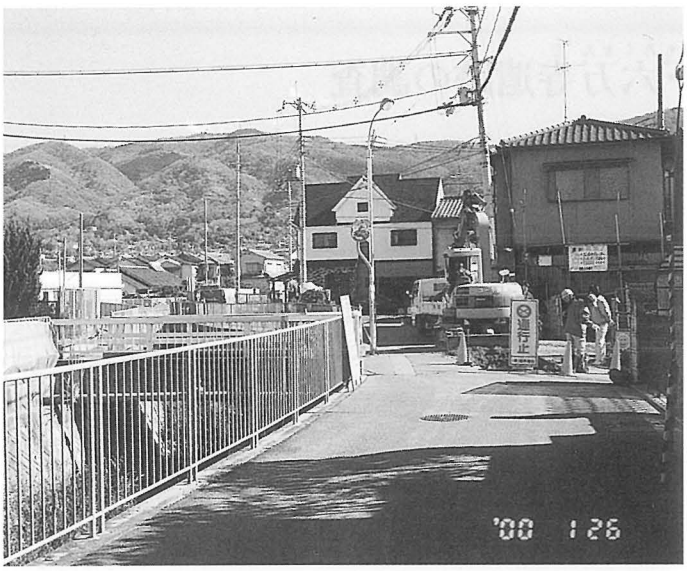
出土遺物

第12章　下六万寺遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第11工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市下六万寺町２丁目地内
3	調 査 面 積	83m²
4	調 査 期 間	平成12年１月24日～３月１日（延べ11日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は長門川の南堤防上である。当地点は下六万寺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約1.8mで長さ46mの間であり、開削工法である。



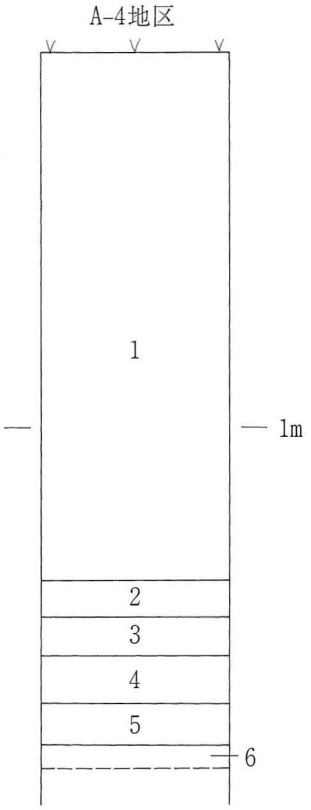
調査地点位置図（1/2500）



調査地遠景

掘削状況

土層断面



土層断面柱状図

1．調査の概要

A－4地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗紫灰色(5P3/1)中粒砂混じり粘質土。

第3層　青灰色(10BG5/1)細粒砂混じりシルト。

第4層　暗青灰色(5PB4/1)細粒砂。

第5層　青灰色(5BG5/1)粘質シルト。

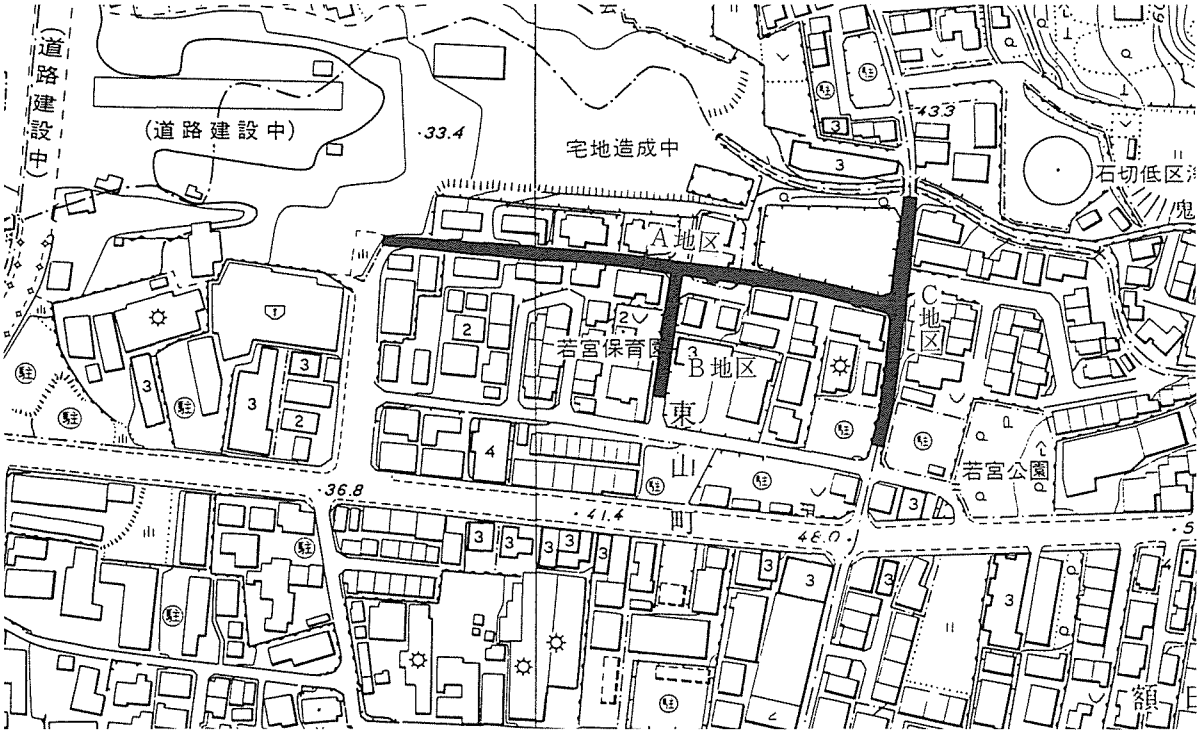
第6層　緑灰色(5G5/1)小礫混じり粘質土。

2．まとめ

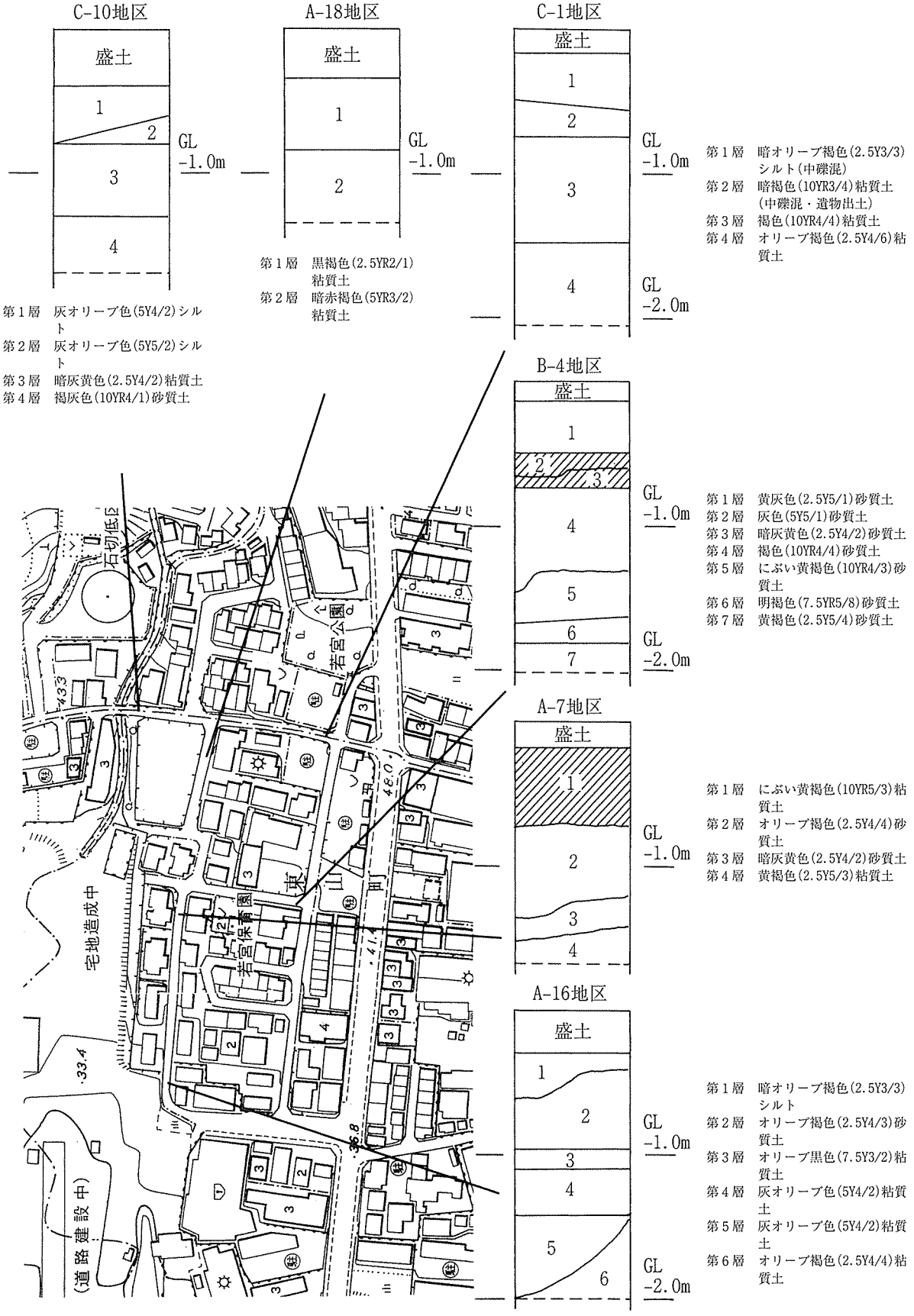
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第13章　神並(こうなみ)遺跡(第28次)・若宮(わかみや)古墳群の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第20工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市東山町地内
3	調 査 面 積	229m²
4	調 査 期 間	平成12年３月13日～５月15日（延べ34日）
5	報 告 担 当	木村健明
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は旧市営若宮住宅内である。当地点は神並遺跡・若宮古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ264mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/2500）


C-10地区
盛土
1
2
3
4
GL
-1.0m
第1層　灰オリーブ色(5Y4/2)シルト
第2層　灰オリーブ色(5Y5/2)シルト
第3層　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
第4層　褐灰色(10YR4/1)砂質土
A-18地区
盛土
1
2
GL
-1.0m
第1層　黒褐色(2.5YR2/1)粘質土
第2層　暗赤褐色(5YR3/2)粘質土
C-1地区
盛土
1
2
3
4
GL
-1.0m
GL
-2.0m
第1層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト(中礫混)
第2層　暗褐色(10YR3/4)粘質土(中礫混・遺物出土)
第3層　褐色(10YR4/4)粘質土
第4層　オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土
B-4地区
盛土
1
2
3
4
5
6
7
GL
-1.0m
GL
-2.0m
第1層　黄灰色(2.5Y5/1)砂質土
第2層　灰色(5Y5/1)砂質土
第3層　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
第4層　褐色(10YR4/4)砂質土
第5層　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
第6層　明褐色(7.5YR5/8)砂質土
第7層　黄褐色(2.5Y5/4)砂質土
A-7地区
盛土
1
2
3
4
GL
-1.0m
第1層　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土
第2層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土
第3層　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
第4層　黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
A-16地区
盛土
1
2
3
4
5
6
GL
-1.0m
GL
-2.0m
第1層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト
第2層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土
第3層　オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘質土
第4層　灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土
第5層　灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土
第6層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土
若宮公園
若宮保育園
東山町
宅地造成中
(道路建設中)
43.3
33.4
36.8
41.4
46.0

土層断面実測図

1．調査の概要

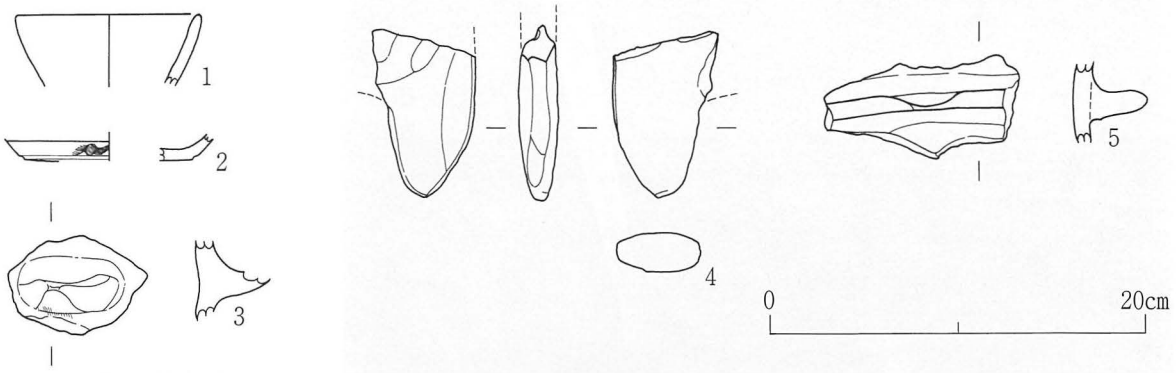
調査は便宜上Ａ～Ｃ地区に分けて行った。Ａ・Ｂ地区が神並遺跡、Ｃ地区が若宮古墳群の範囲内に位置する。各地区で調査開始地点を１とする通し番号をふっているが、Ａ地区では工事の進行状況上の理由により、西端に16～20区が位置している。遺物はほとんどが深さ50cm付近から出土している。Ａ・Ｂラインでは深さ50cm付近に包含層が存在することが確認できた。しかし、Ａ地区の東半分とＣ地区では包含層を確認することができなかった。また、Ａ地区西半部の両側で下水工事終了後、神並遺跡第26次調査が行われ、奈良～平安時代の遺構と遺物が出土している。

2．出土遺物

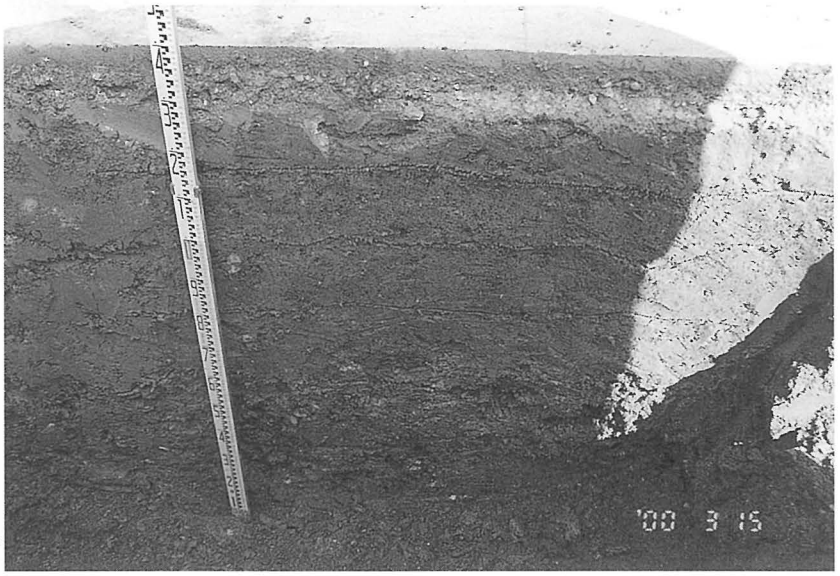
須恵器・土師器が出土した。いずれも細片であり、図化できたのは５点に留まる。このうち、１～３が神並遺跡、４・５が若宮古墳群での出土遺物である。１・２は須恵器である。１が提瓶、２が高杯である。２には波状文と凹線文が施されている。３・４・５は土師器である。３は把手、４は移動式竈の下端にある突起部分で、５は羽釜の鍔である。いずれも古墳時代後半に属すると思われる。

3．まとめ

今回の調査ではＡ・Ｂ地区で包含層を確認できた。隣接地の調査成果として奈良～平安時代の遺構・遺物が出土していることから、この時期に該当する層であると考えられる。ただし、今回図示することのできた遺物はいずれも古墳時代に属するものである。周辺にはかつて古墳が存在していたことから、これに関連する遺物であることも考えられる。



出土遺物実測図

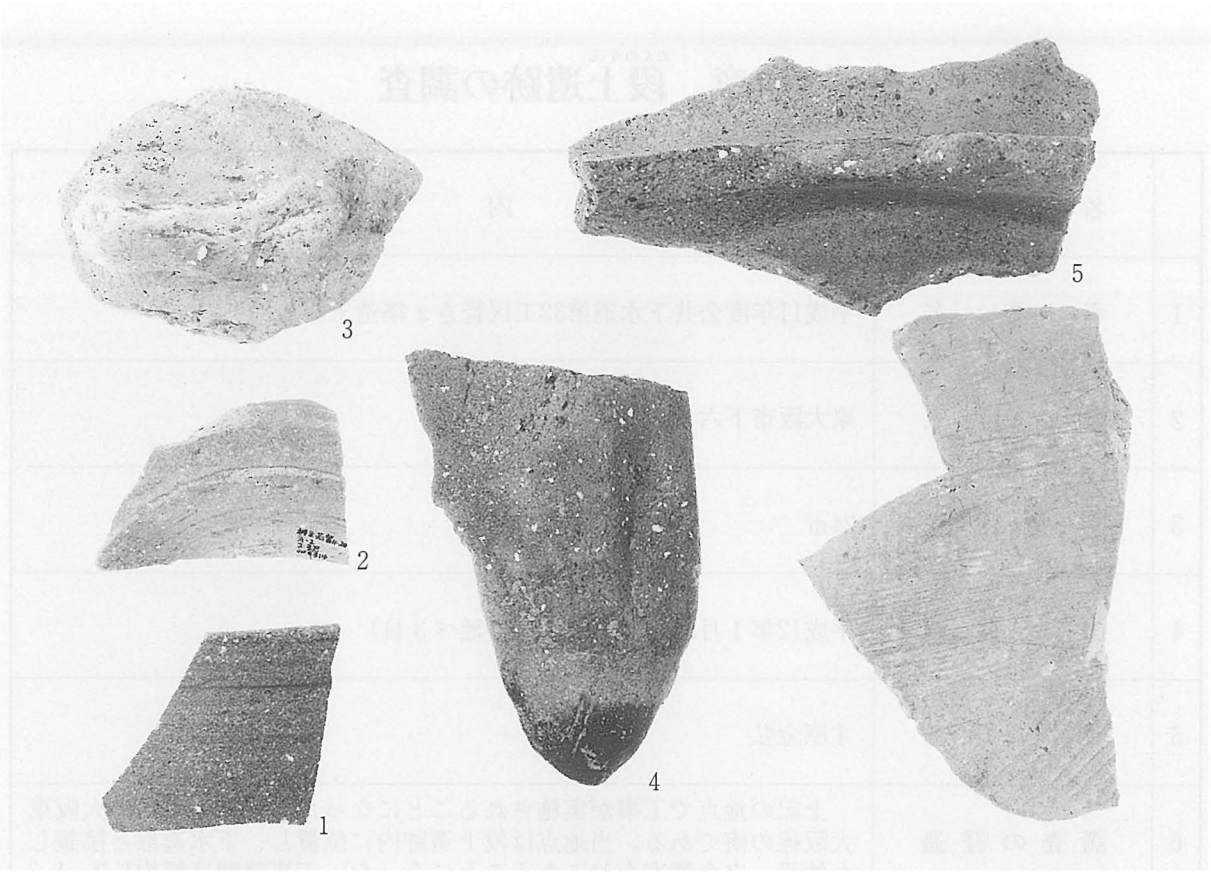


Ａ－３地区土層断面

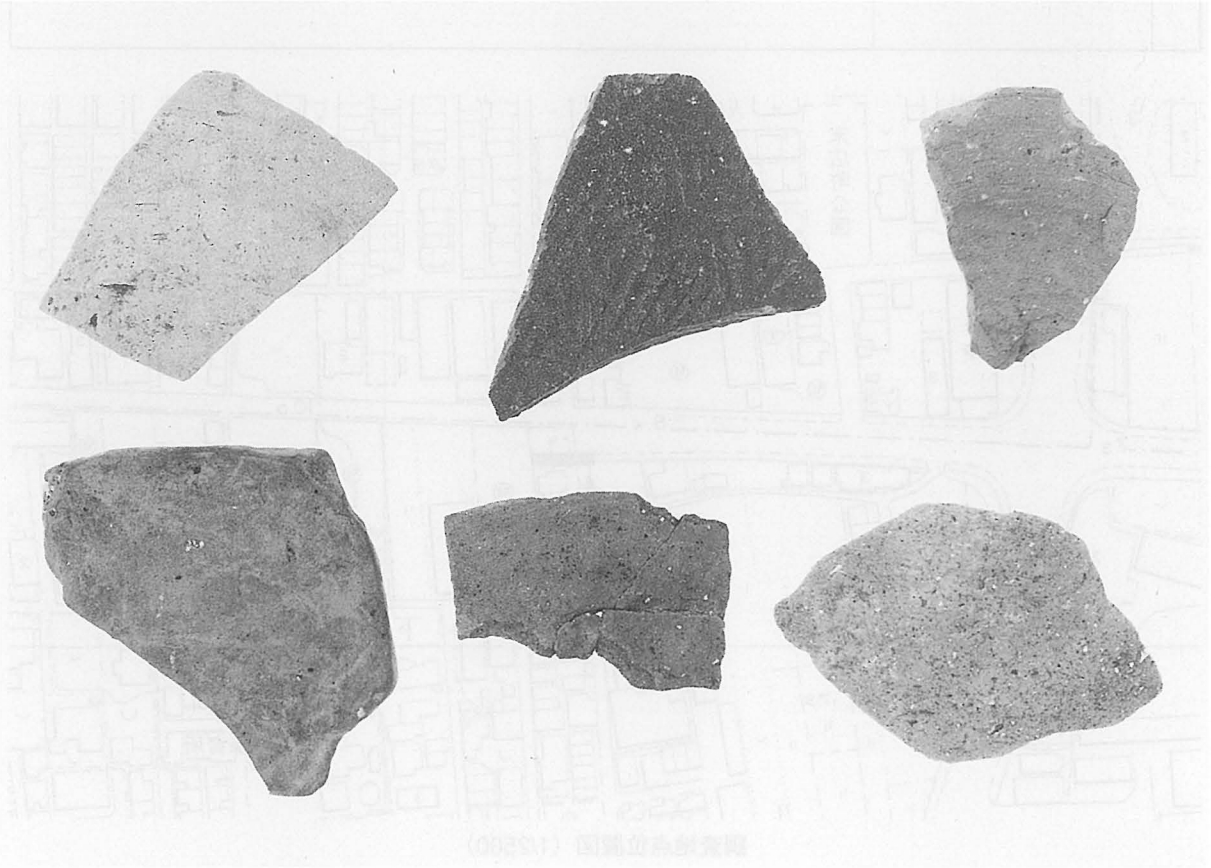
Ａ－11地区土層断面

Ａ－16地区土層断面

掘削風景



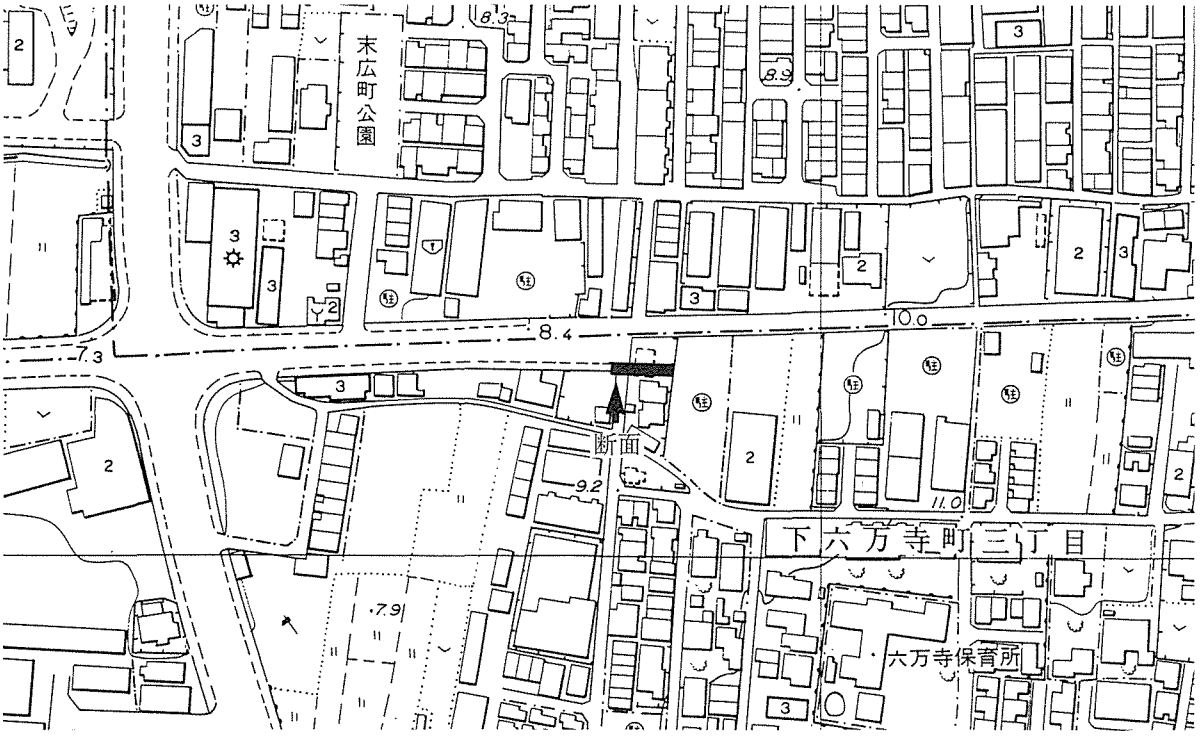
出土遺物（土師器・須恵器）



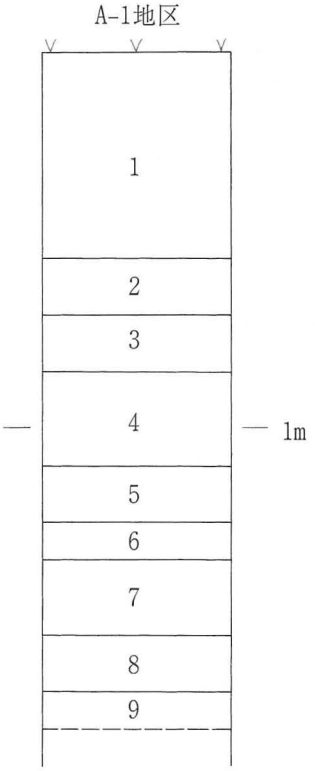
出土遺物（土師器・須恵器）

第14章　段上遺跡の調査

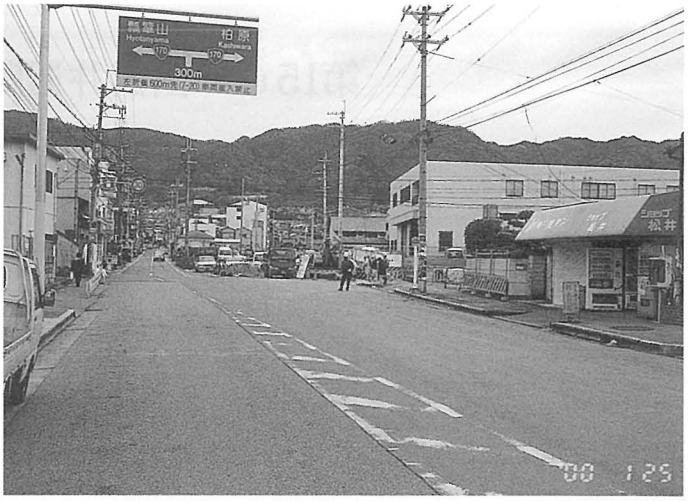
	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第32工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市下六万寺町３丁目
3	調 査 面 積	24㎡
4	調 査 期 間	平成12年１月25日～１月28日（延べ３日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪東大阪線の南である。当地点は段上遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約1.2～1.3ｍで長さ19ｍの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/2500）

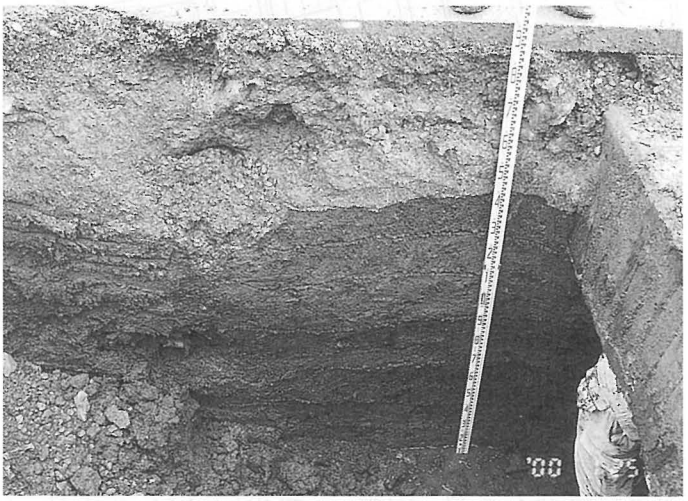


土層断面柱状図



調査地遠景

掘削状況



土層断面

1．調査の概要

A－1地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗青灰色(5B3/1)中粒砂混じりシルト。

第3層　暗青灰色(5B4/1)粗粒砂混じりシルト。

第4層　青灰色(5B5/1)粗粒砂と粘質シルトの互層。

第5層　暗青灰色(5B3/1)粗粒砂混じり粘質シルト。

第6層　青灰色(5B5/1)粗粒砂混じり粘質シルト。

第7層　青黒色(5B2/1)中粒砂混じり粘土。遺物出土。

第8層　青黒色(5PB2/1)中粒砂混じり粘土。遺物出土。

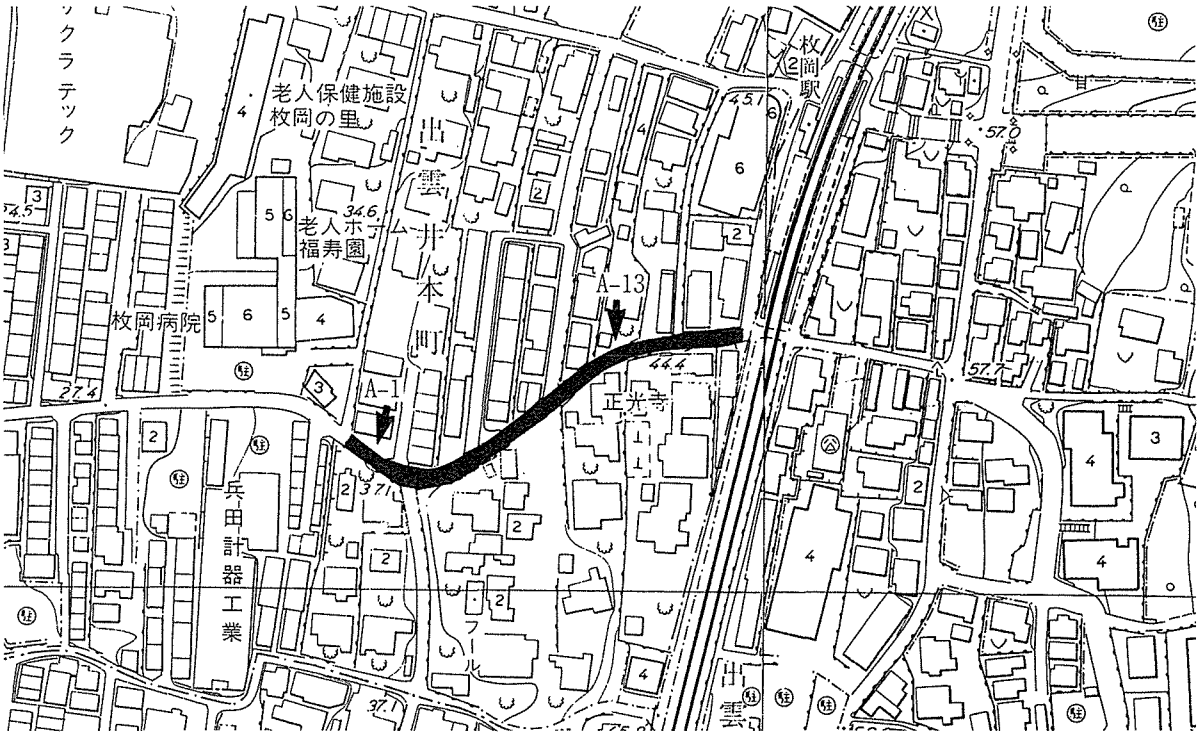
第9層　紫黒色(5P2/1)粗粒砂混じり粘土。遺物出土。

2．まとめ

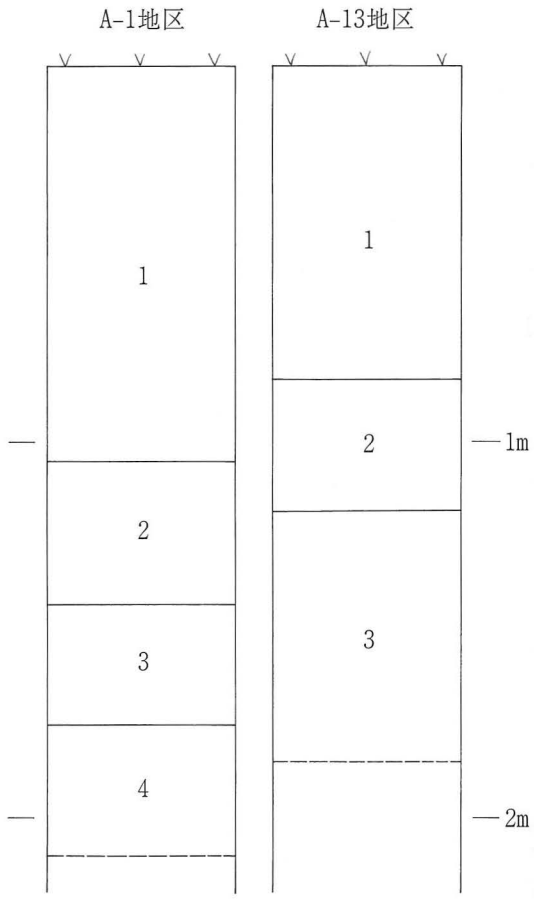
第7～9層より古墳時代の土師器が出土したが、細片のため、形状の判るものはなかった。立会調査の範囲が狭いため、詳細は不明であるが当時期の遺跡が周辺に広がっていると考えられる。

第15章　出雲井遺跡群の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第26工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市出雲井本町地内
3	調 査 面 積	107㎡
4	調 査 期 間	平成12年５月15日～７月７日（延べ26日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線枚岡駅の南西である。当地点は出雲井遺跡群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ107mの間であり、開削工法である。

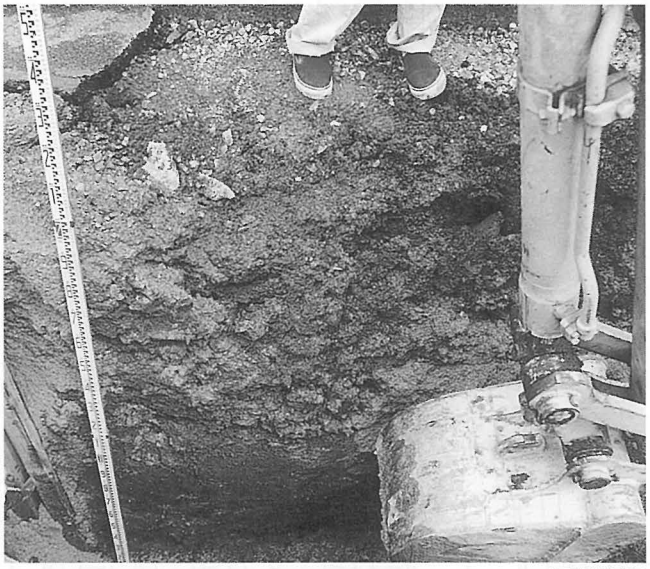


調査地点位置図（1/2500）



土層断面柱状図

調査地遠景



掘削状況

土層断面

1．調査の概要

A－1地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒色(2.5Y2/1)中礫混じり粘土。

第3層　黒褐色(2.5Y3/1)粘質土。

第4層　黒色(10YR1.7/1)粗粒砂混じり粘質土。

A－13地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂。

第3層　黒色（N2/0）粘土。

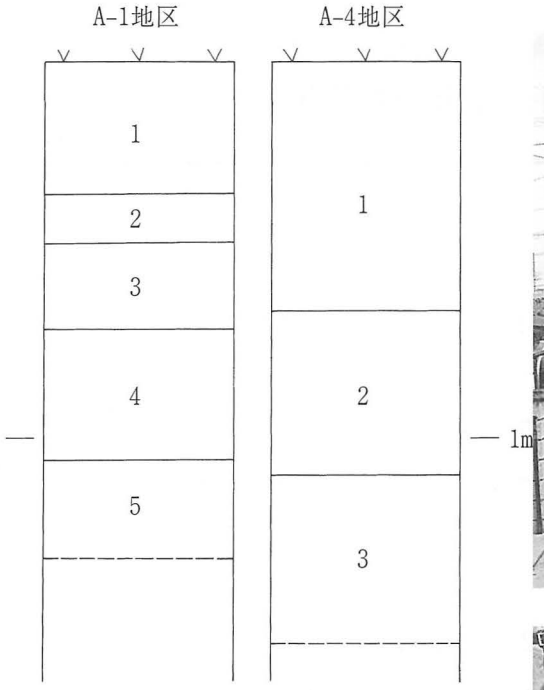
2．まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

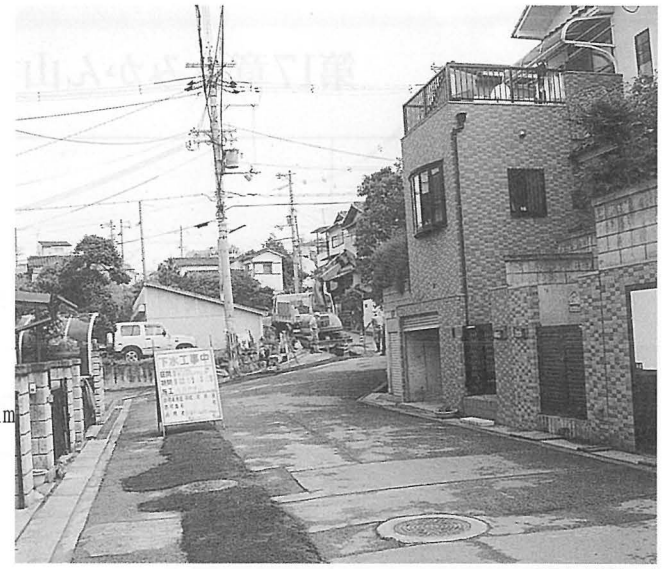
第16章　岩滝山（いわたきやま）遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第31工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市六万寺町１丁目
3	調 査 面 積	118m²
4	調 査 期 間	平成12年５月17日～５月25日（延べ７日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調査の経過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪府立東大阪養護老人ホームの南西である。当地点は岩滝山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ139mの間であり、開削工法である。

調査地点位置図（1/2500）

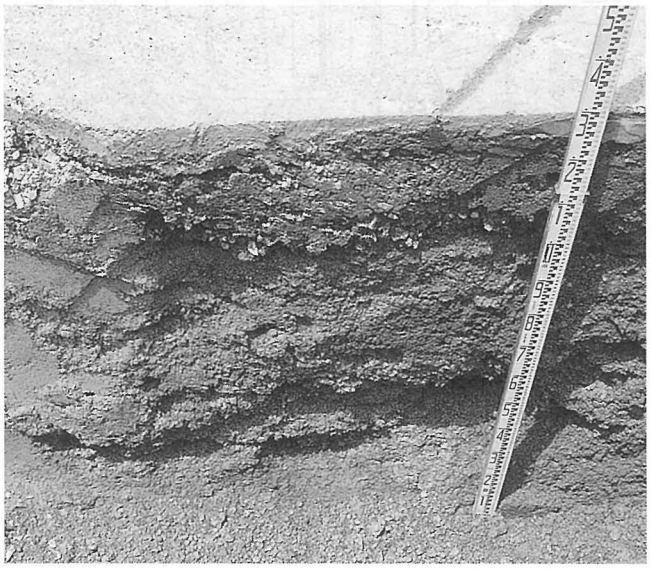


土層断面柱状図



調査地遠景

掘削状況



土層断面

1．調査の概要

A－1地区の層序

第1層　盛土。

第2層　褐灰色(10YR5/1)砂礫。

第3層　暗灰色(N3/0)砂礫。

第4層　灰色(N5/0)砂礫。

第5層　褐色(7.5YR4/4)シルト。

A－4地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗青灰色(5BG4/1)粗粒砂混じりシルト。

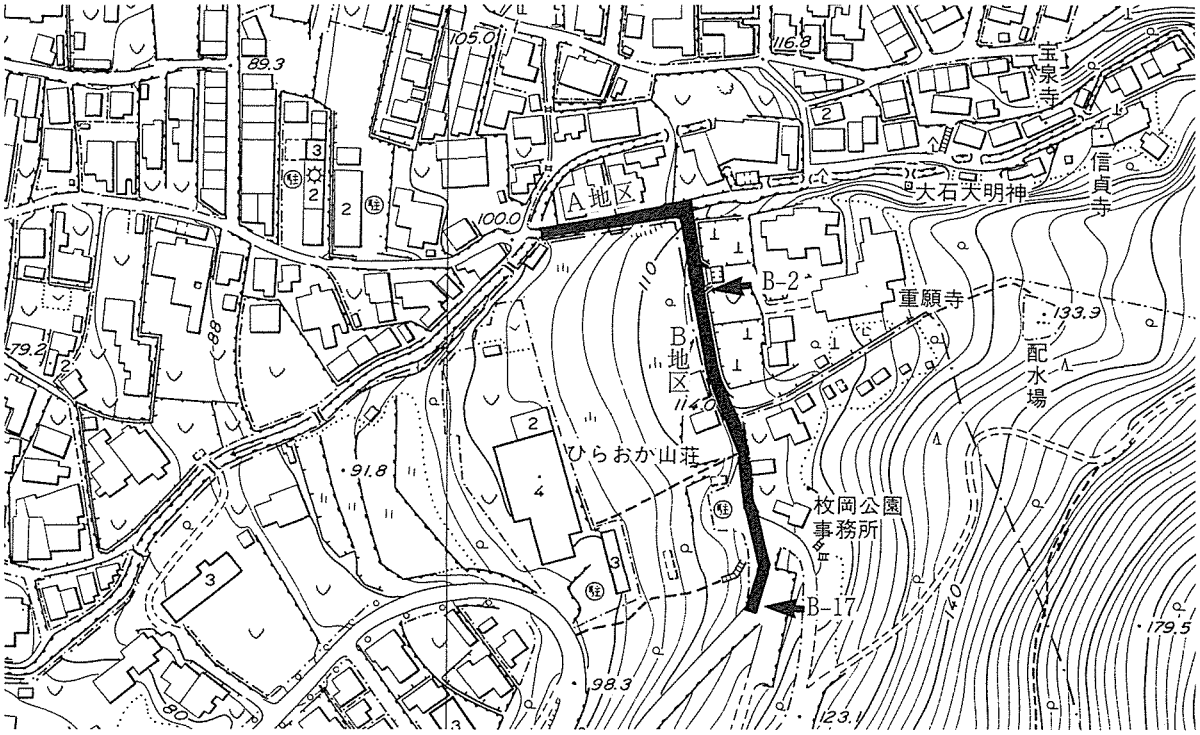
第3層　暗緑灰色(5G3/1)シルト～粗粒砂。

2．まとめ

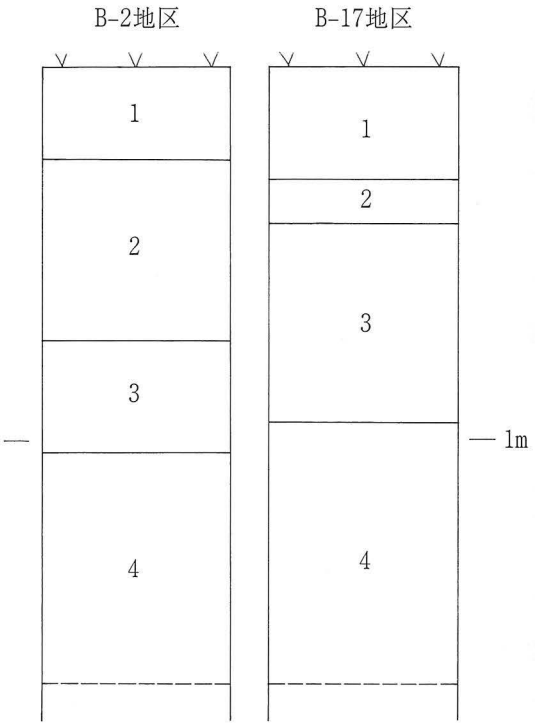
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第17章　みかん山古墳群の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第11－２工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市山手町～東豊浦町11
3	調 査 面 積	329㎡
4	調 査 期 間	平成12年４月７日～８月２日（延べ19日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は府営枚岡公園内である。当地点はみかん山古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～1.1mで長さ353mの間であり、開削と一部推進工法である。



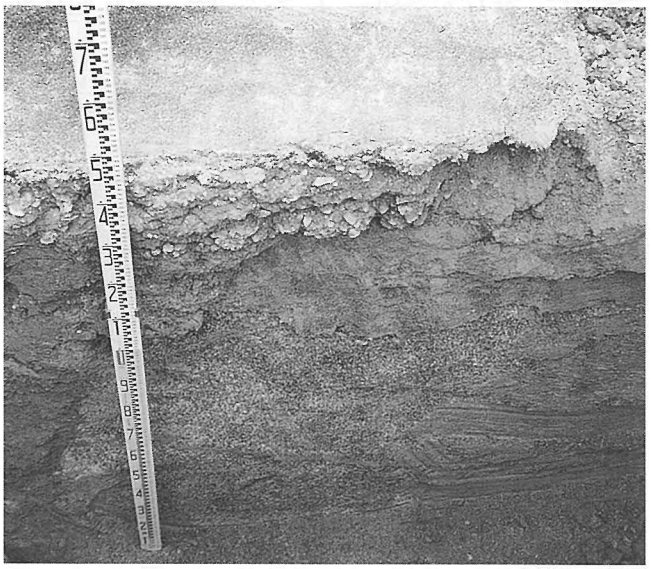
調査地点位置図（1/2500）



土層断面柱状図

調査地遠景

掘削状況



土層断面

1．調査の概要

B－2地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土。

第3層　黄褐色(2.5Y5/3)細砂。

第4層　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルト。

B－17地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土。

第3層　黄褐色(2.5Y5/4)砂質土。

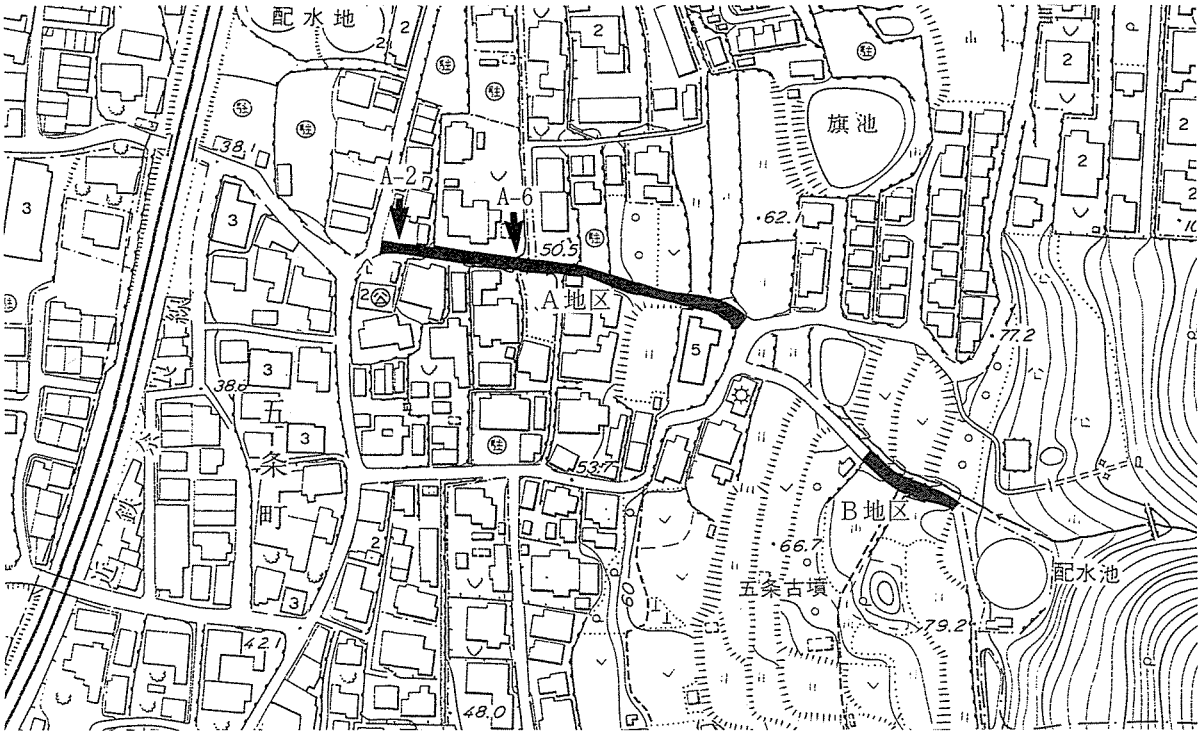
第4層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土。

2．まとめ

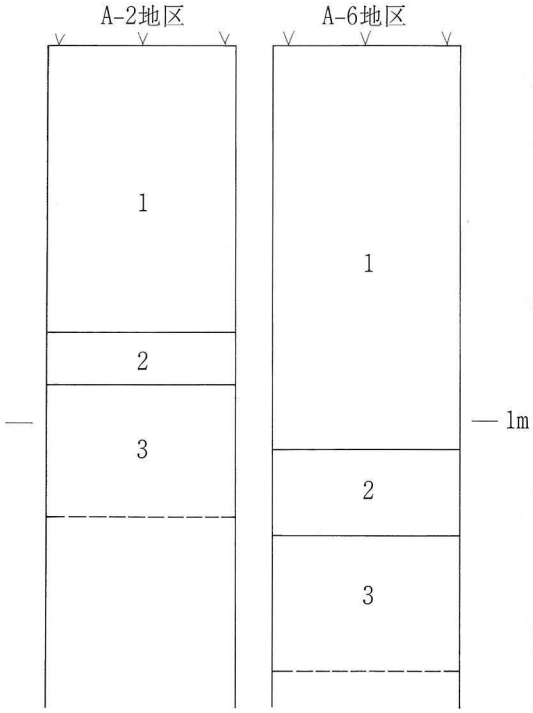
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第18章　水走氏館跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第11－３工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市五条町
3	調 査 面 積	142㎡
4	調 査 期 間	平成12年９月４日～９月22日（延べ９日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線枚岡駅の南東である。当地点は水走氏館跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ166mの間であり、開削工法である。



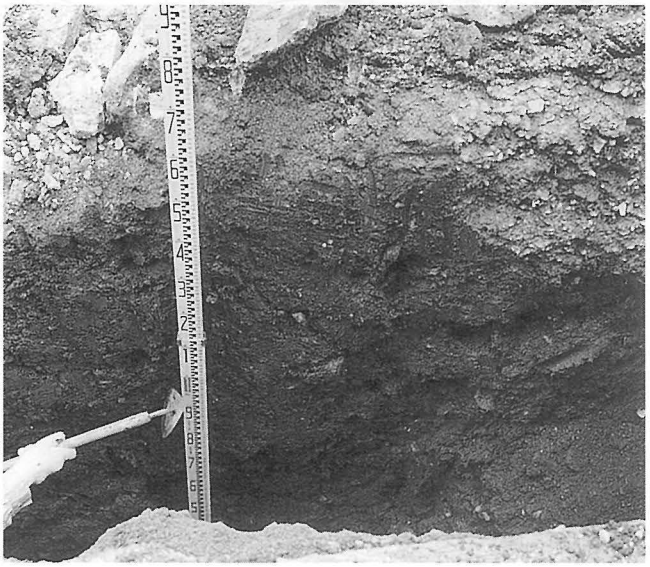
調査地点位置図（1/2500）



土層断面柱状図

調査地遠景

掘削状況



土層断面

1．調査の概要

A－2地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗青灰色(5B4/1)シルト。

第3層　灰オリーブ色(5Y5/2)粘質シルト。

A－6地区の層序

第1層　盛土。

第2層　暗オリーブ褐色(5GY3/1)粘質土。

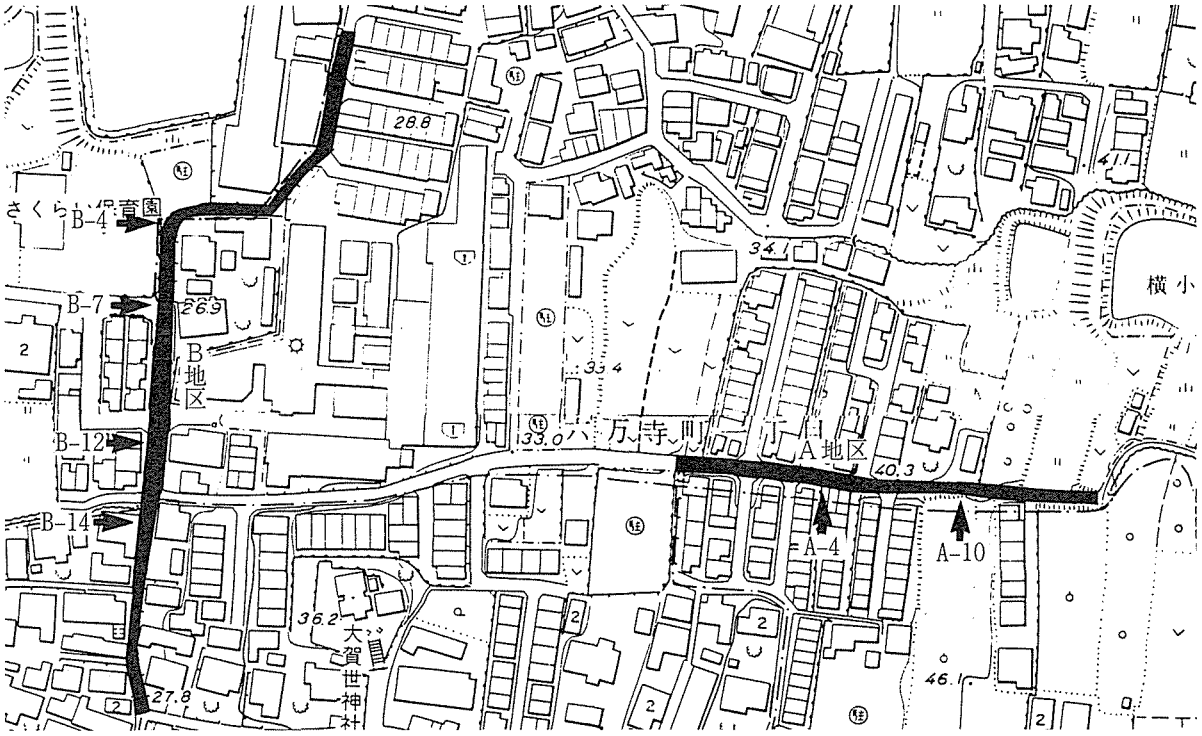
第3層　暗緑灰色(10GY3/1)粘質土。

2．まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第19章　半堂（はんどう）遺跡の第２次調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道27第工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市下六万寺町１丁目～横小路町１・２丁目
3	調 査 面 積	316m²
4	調 査 期 間	平成12年４月12日～６月２日（延べ28日）
5	報 告 担 当	松田留美
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は六万寺半堂池の南と東の２路線である。当地点は半堂遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～1.4mで長さ328mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/2500）

1．調査の概要

本調査地は生駒山地の西側に広がるなだらかな丘陵上に位置する。南北をＢ地区、東西をＡ地区と呼称して調査を行った。各地区の断面図の詳細を以下に記す。

Ａ－４地区の層序

第１層　盛土および撹乱。

第２層　褐色(10YR4/4)砂質土。30～40cmの巨礫を含む。

第３層　暗褐色(10YR3/3)砂質土。小礫を多く、中礫を若干含む。

Ａ－10地区の層序

第１層　盛土。

第２層　褐色(10YR4/4)粘質土。中世の遺物が出土。

第３層　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土。明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じる。

第４層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土。明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じる。10cm程度の中礫を若含む。

Ｂ－４地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土。中世の遺物が出土。

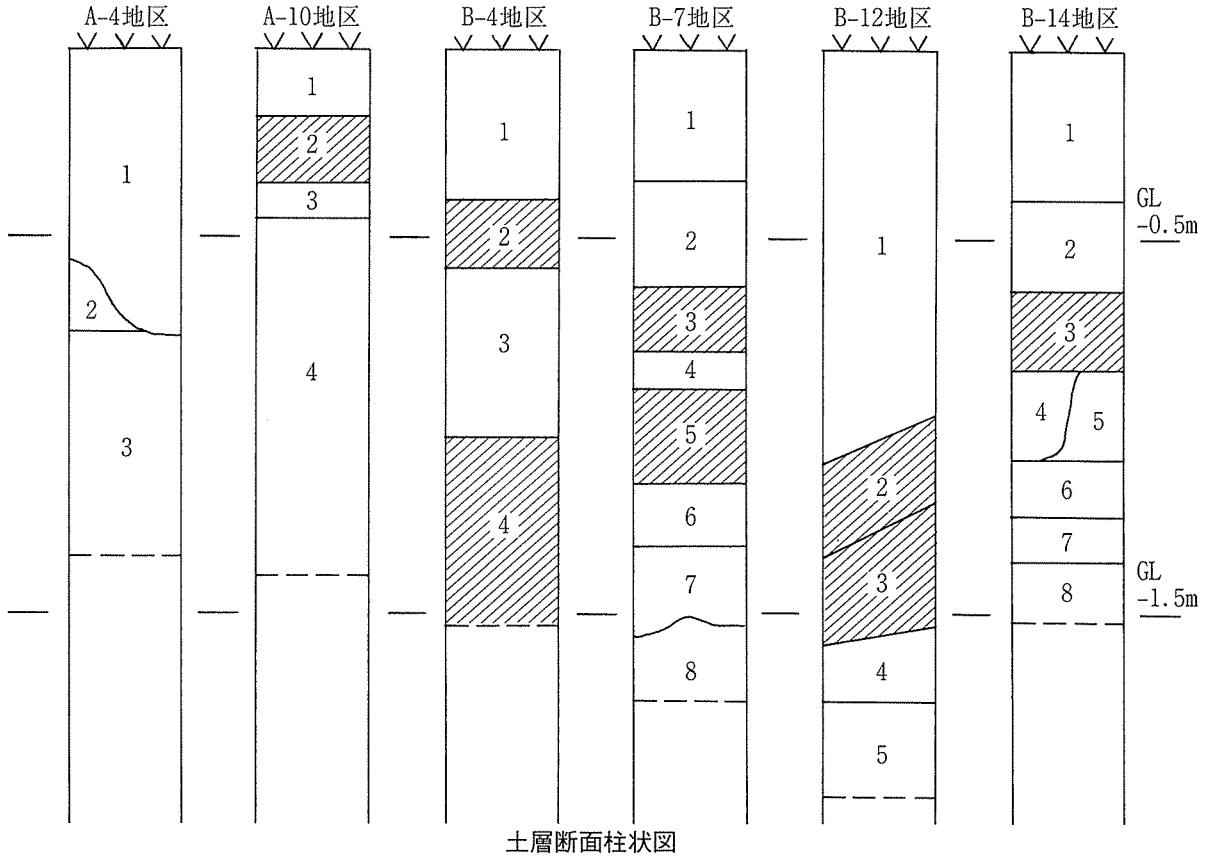
第３層　オリーブ黒色(5Y3/2)砂質土。酸化鉄沈着。

第４層　オリーブ黒色(10Y3/1)粗砂混じり粘質土。中礫を含む。中世の遺物が出土。

Ｂ－７地区の層序

第１層　盛土。

第２層　暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂。暗褐色(10YR3/3)砂質土がブロック状に混じる。小礫を多く含



土層断面柱状図

む。炭を含む。

第３層　灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂。褐色(7.5YR4/4)砂質土が混じる。大礫を若干含む。中世の遺物が出土。

第４層　黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂。

第５層　暗褐色(10YR3/3)粘質土。小～中礫を含む。弥生時代後期～中世の遺物が出土。

第６層　黒褐色(7.5YR2/2)粘質土。小礫を含む。

第７層　黒褐色(10YR2/2)粘質土。暗褐色(7.5YR3/4)砂質土が混じる。

第８層　黒褐色(2.5Y3/1)粘質土。細粒砂を含む.

Ｂ－12地区の層序

第１層　撹乱。

第２層　灰色(7.5Y4/1)細粒砂。

第３層　灰色(5Y4/1)細粒砂。小～中礫を含む。第２～３層から中世の遺物が出土。

第４層　黒色(5Y2/1)粘土質シルト。小礫、木片を含む。

第５層　灰色(10Y4/1)細粒砂。小礫を含む。

Ｂ－14地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト。

第３層　オリーブ黒色(5Y3/2)シルト。中世の遺物が出土。

第４層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト。木片を含む。下記遺構の埋土。

第５層　黒褐色(10YR3/1)シルト。粗粒砂を含む。上面において遺構検出。

第６層　灰色(5Y4/1)細粒砂。

第７層　灰色(7.5Y4/1)粗粒砂。

第８層　暗褐色(N3/)シルト。

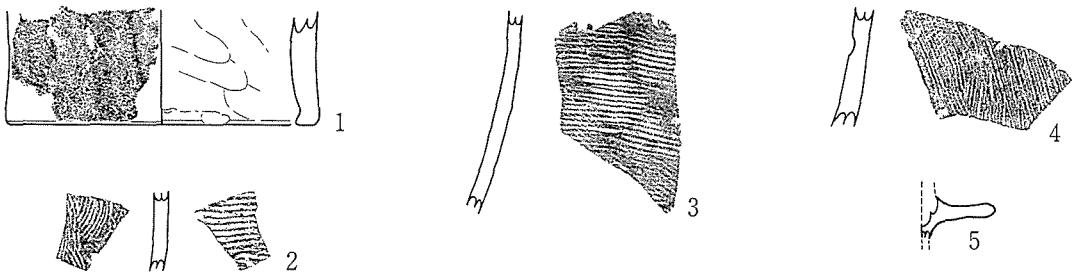
２．出土遺物

出土遺物には弥生土器、古墳時代の須恵器、埴輪、中世の土師器、瓦器椀、陶器、そのほか近世の石製品などがある。出土総数はコンテナで約1/2箱あり、そのうち図化しえたものは27点である。以下、概要を述べる。

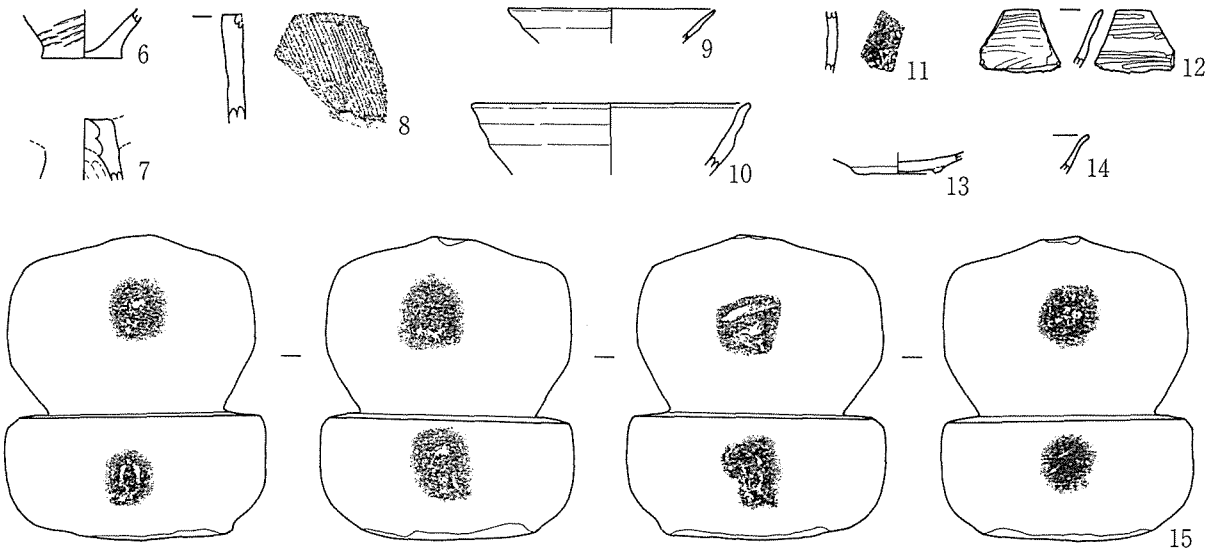
弥生土器（６）甕の底部である。外面に叩き目がみられる。底径は4.1cmを測る。後期の所産である。生駒西麓産。

埴輪（１・８・16）１・16は基底部、８は口縁部である。外面調整は１・16がナデで、１はわずかに面をもつ。８は外面を斜め方向に刷毛で調整する。内面調整は１が指ナデ、８は内面をナデ調整する。16は下端は指オサエ、それより上はナデ調整である。基底部径は１が14.2cm、16は16.6cmを測る。色調は淡黄色～浅黄橙色を呈し、胎土には長石、石英、クサリ礫を含む。

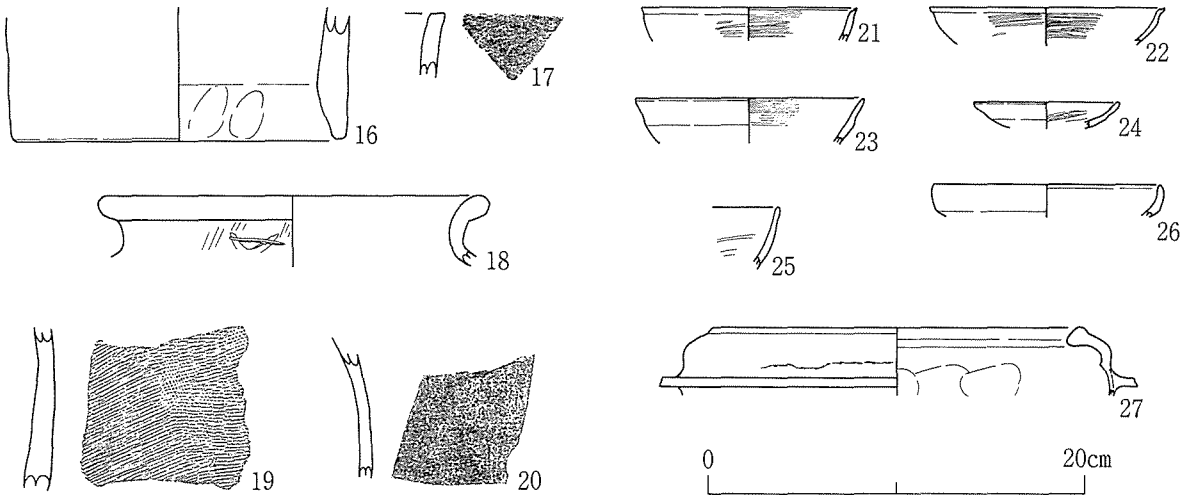
土師器（５・７・９・10・17・26・27）７は高杯の脚部である。杯部との接合部分で剥離している。胎土には長石、石英、雲母、クサリ礫を含み、色調はにぶい黄橙を呈する。古墳時代以前の所産であろう。９・10は杯の口縁部である。外面の調整は口縁部をヨコナデ、以下は不調整のもので、10は２段のナデを施す。26は皿の口縁部である。口縁端部に内傾する面をもつ。17は甑の口縁部である。口縁端部に面をもつ。外面は刷毛調整で、内面はナデ調整である。５・27は羽釜である。５は鍔部である。27は羽釜の口縁部である。外に折返しておさえた口縁端部をもつ。肩に幅の狭い鍔をめぐらす。鍔より下には炭化物が付着する。14～15世紀の所産である。



A地区出土遺物



B地区出土遺物



出土地区不明遺物

出土遺物実測図

須恵器（2・3・11・18～20）18は甕の口縁部である。短く立ちあがる頸部の外面にヘラ記号がある。2・3・11・19・20は甕の体部である。外面は2・3・19が平行叩き、11・20は格子叩き痕が残る。内面は2には同心円の当て具痕が残る。それ以外は当て具痕をすり消しているもので、5世紀の所産である。

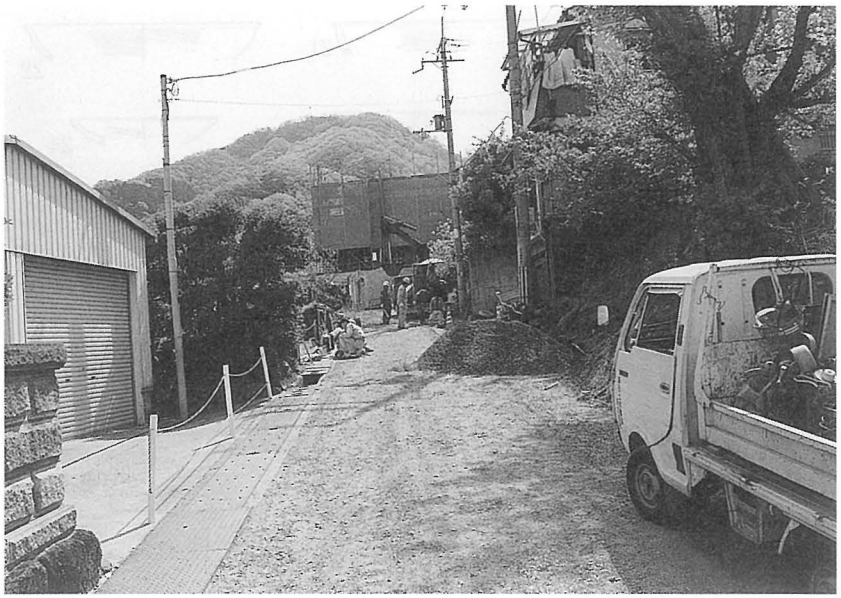
瓦器（12～14・21～25）12～14・21～23・25は椀である。12は口縁端部が内傾するもの、14は外弯するもの、21・22は内面に沈線を施し端部が短く外側に折れるもの、23・25は丸くおわるものである。12は外面に幅の広いヘラ磨きをまばらに、内面には密に、25は内面にまばらに施す。21・22は細いヘラ磨きを外面と内面に、23は内面に施す。13は底部である。断面三角形の低い高台が残る。24は小皿である。幅の広いヘラ磨きを内面に施す。

陶器（4）甕の体部である。外面を刷毛で調整し、内面はナデ調整である。色調は灰黄褐色～褐灰色を呈する。

石製品（15）一石五輪塔の空輪および風輪である。4面には刻した梵字と思われる痕跡がわずかに認められるが、表面が風化しているため文字は判別できない。残存高は16.3cm、最大径は空輪で13.0cm、風輪で13.7cmを測る。

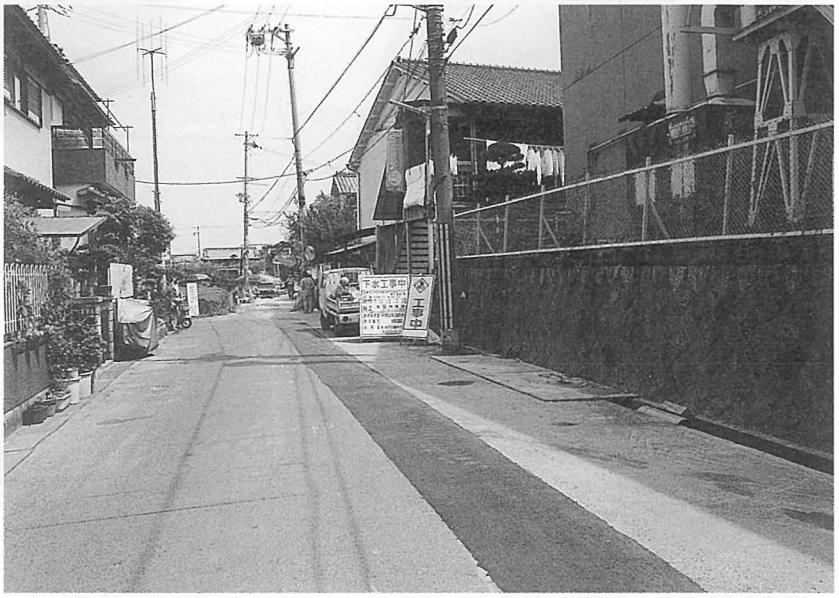
3．まとめ

今回の調査ではA地区からB地区にわたって中世の包含層を検出し、B－14地区において第3層（中世包含層）直下で遺構と思われる落ちを検出したが、矢板のため狭い範囲での確認にとどまった。出土遺物については、中世以降の遺物に混じって弥生土器や古墳時代の須恵器、埴輪が出土した。このうち埴輪はA地区の東側とB地区の北側で出土した。半堂遺跡は弥生～古墳時代にかけての遺跡で、周知されている範囲ではこれまでの調査によって古墳が3基みつかっている。B地区は昭和35年の調査で須恵器、埴輪が大量に出土したことから大賀世2号墳とされた工場敷地の西側に接しており、出土した埴輪片は大賀世2号墳に伴うものと思われる。A地区の東側でも埴輪片が出土しているが、当地周辺に古墳が存在した可能性も考えられる。



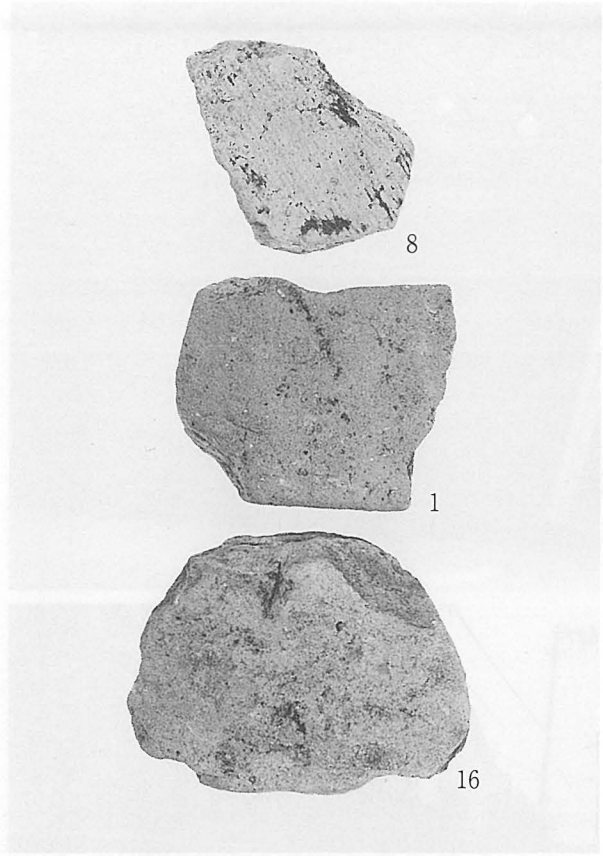
A地区遠景

A－10地区土層断面

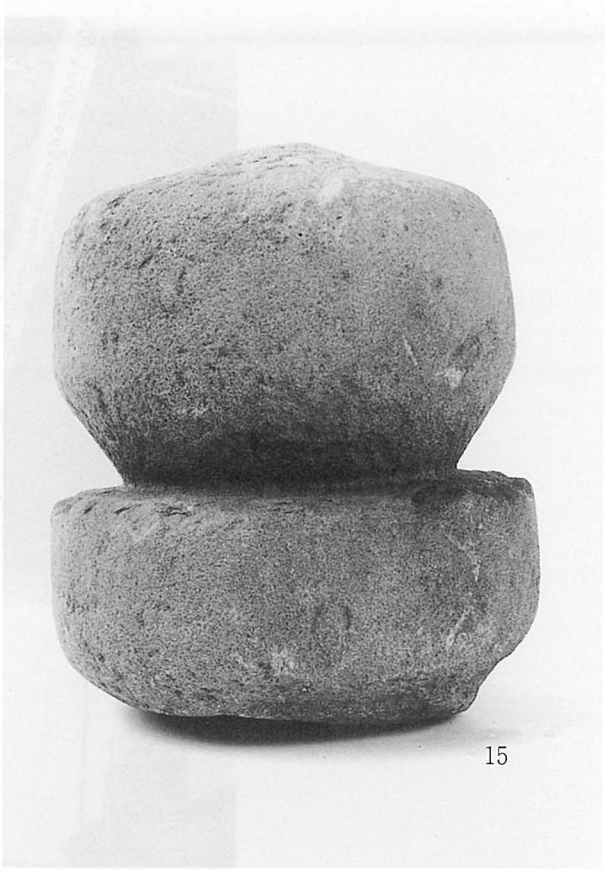


B地区遠景

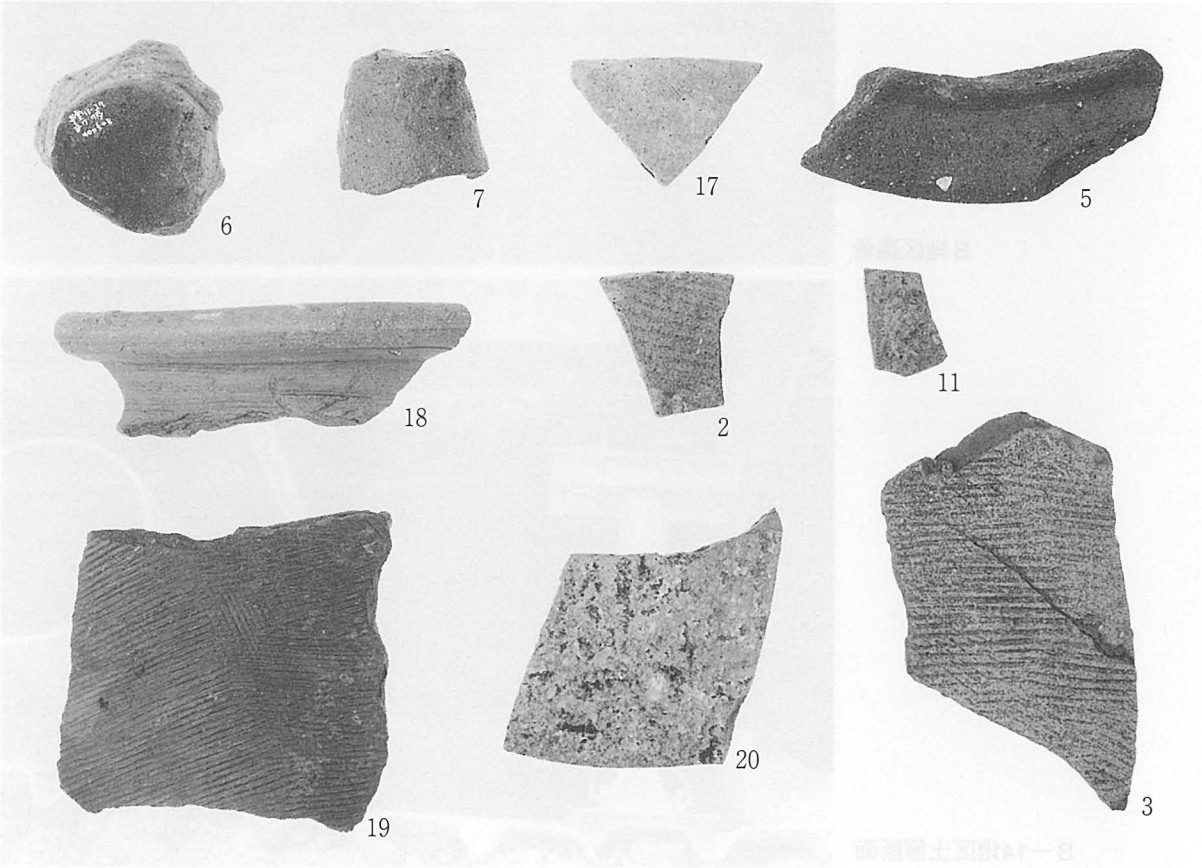
B－14地区土層断面



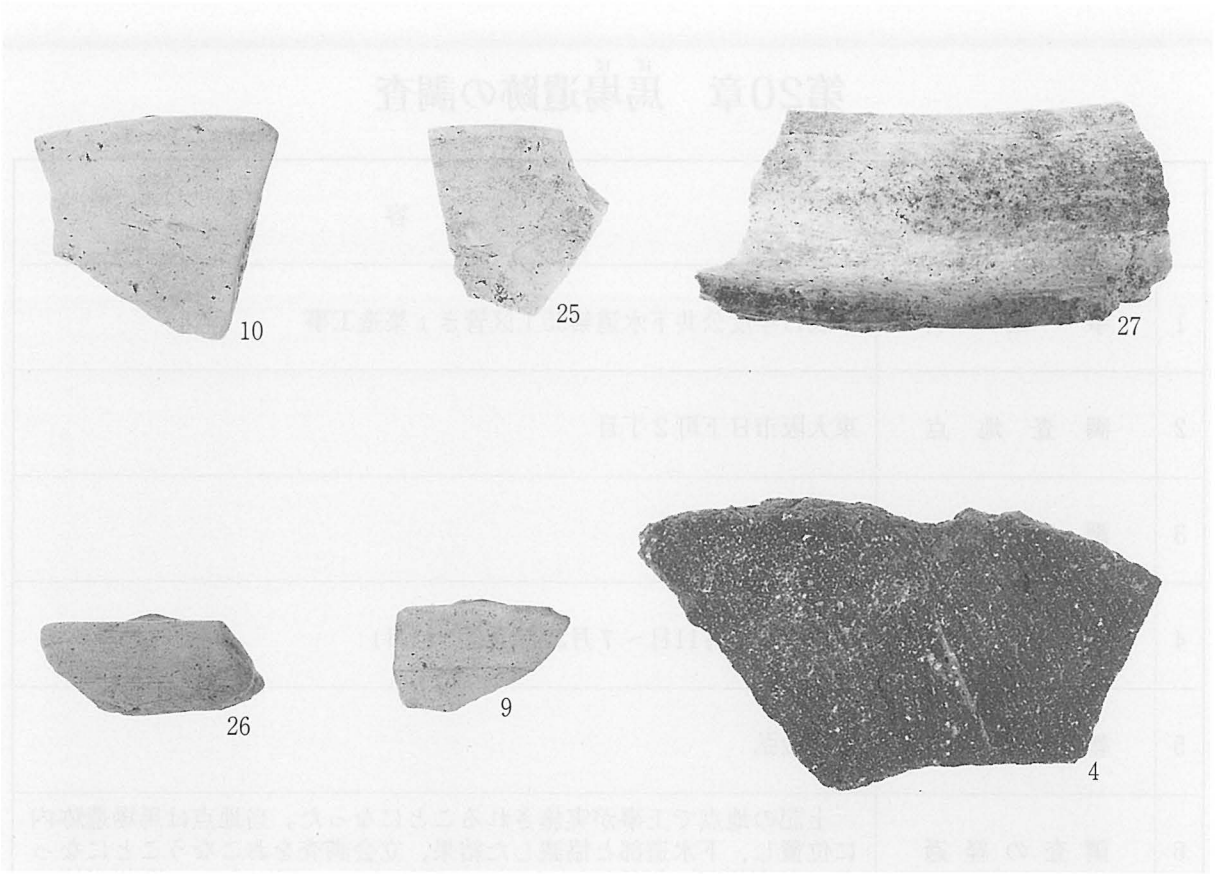
出土遺物（埴輪）



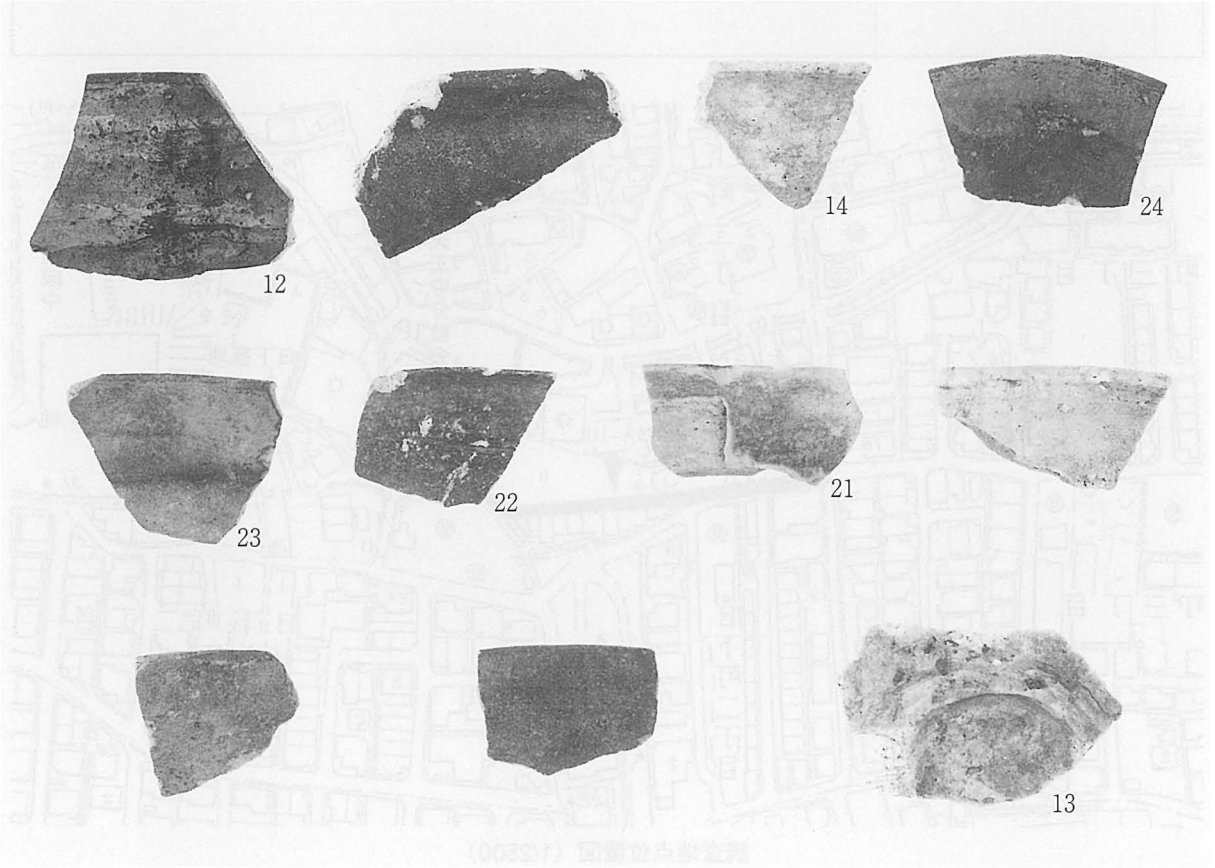
出土遺物（一石五輪塔）



出土遺物（弥生土器・土師器・須恵器）



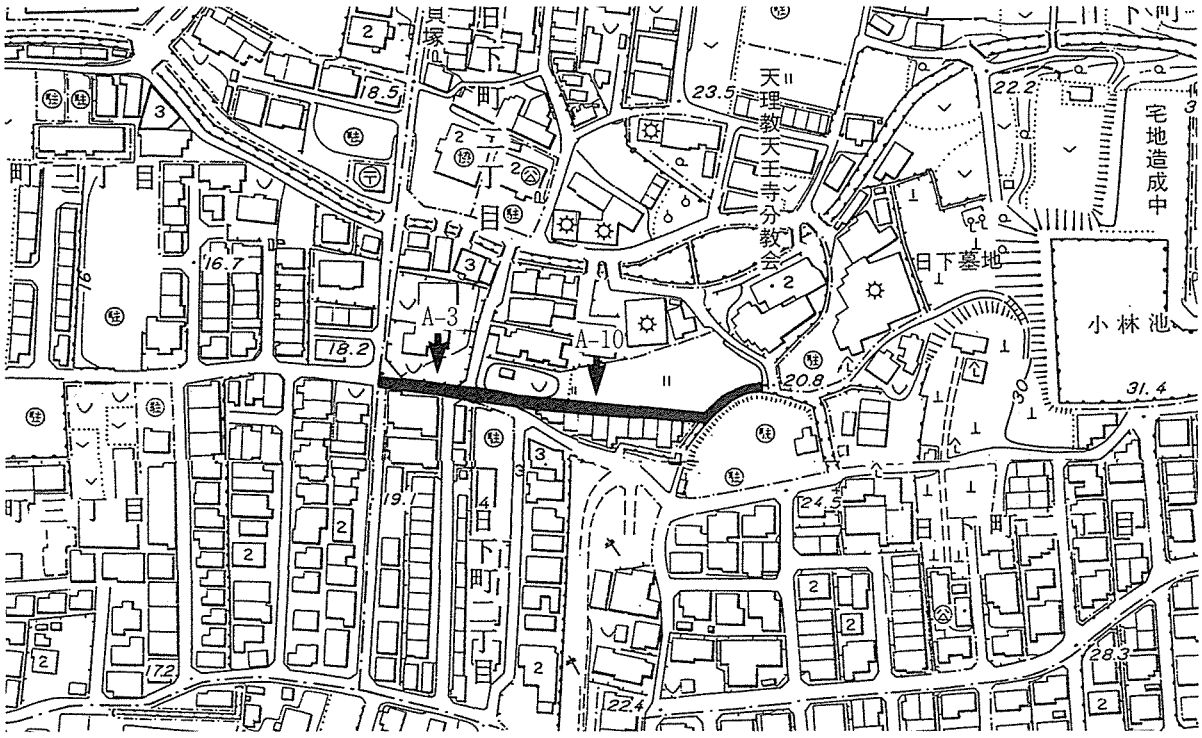
出土遺物（土師器・瓦器・陶器）



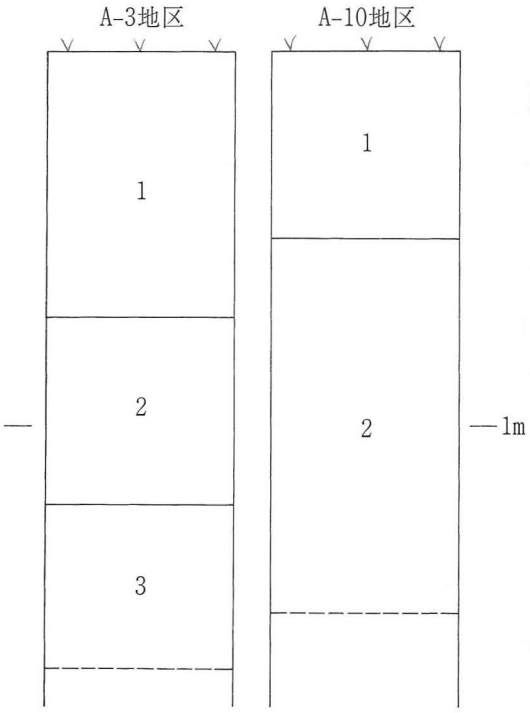
出土遺物（瓦器）

第20章　馬場（ばば）遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第35工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市日下町２丁目
3	調 査 面 積	117㎡
4	調 査 期 間	平成12年７月11日～７月27日（延べ11日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は馬場遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ137mの間であり、開削工法である。

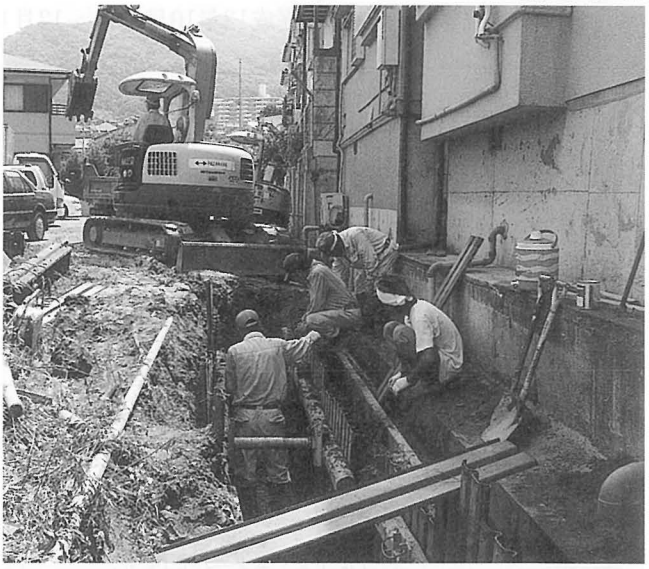


調査地点位置図（1/2500）

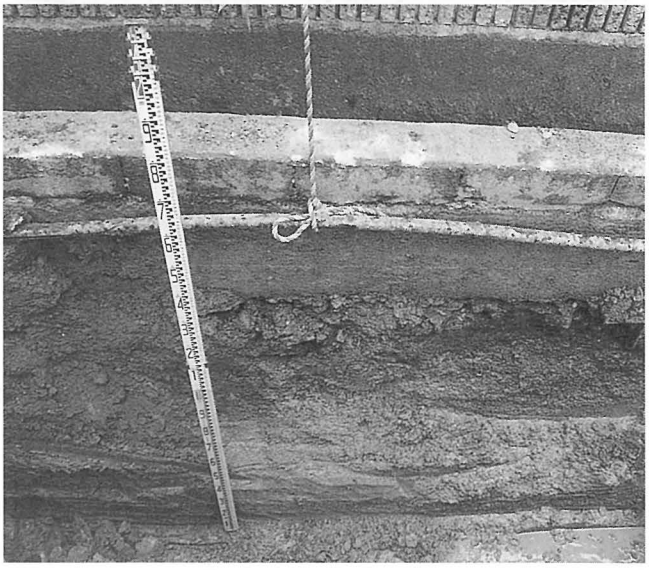


土層断面柱状図

調査地遠景



掘削状況



土層断面

1．調査の概要

A－3地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土混じり粗粒砂。

第3層　黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂。

A－10地区の層序

第1層　盛土。

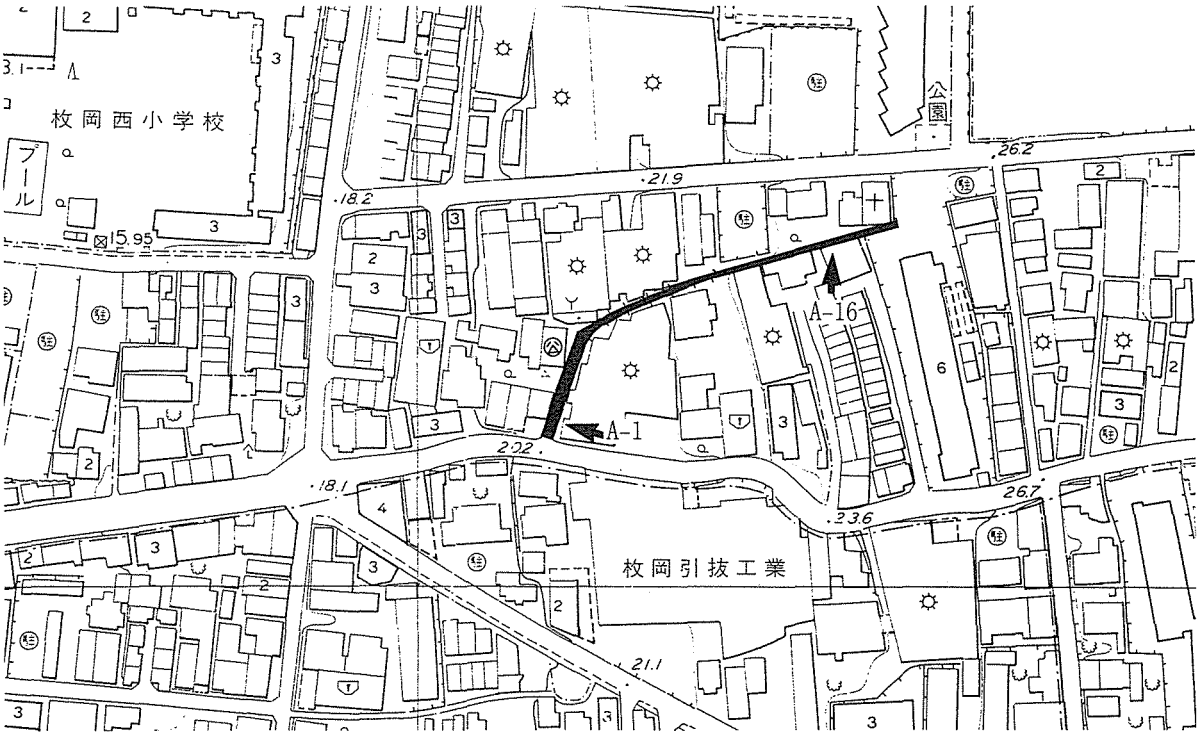
第2層　青灰色(5BG5/1)細～粗粒砂。

2．まとめ

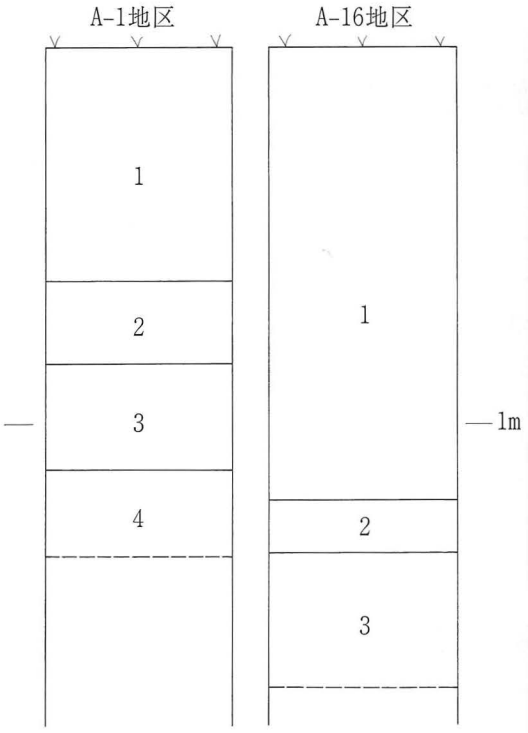
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第21章　鬼塚（おにづか）遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第41工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市南荘町地内
3	調 査 面 積	114㎡
4	調 査 期 間	平成12年10月26日～12月18日（延べ25日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は鬼塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ134mであり、開削工法である。

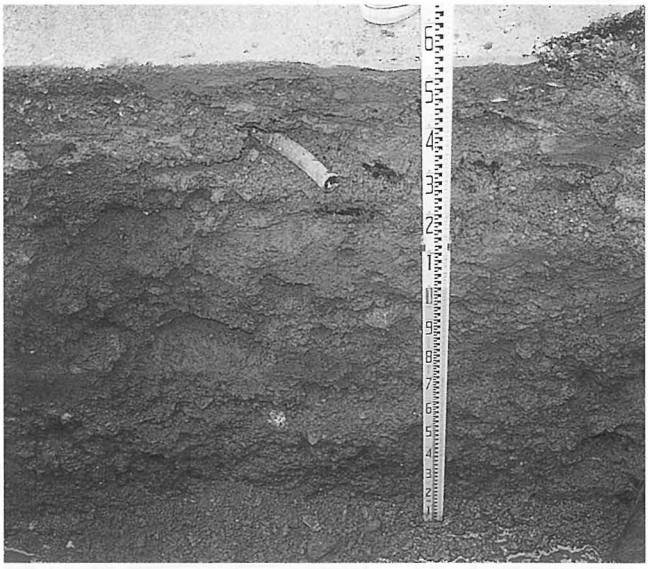


調査地点位置図（1/2500）

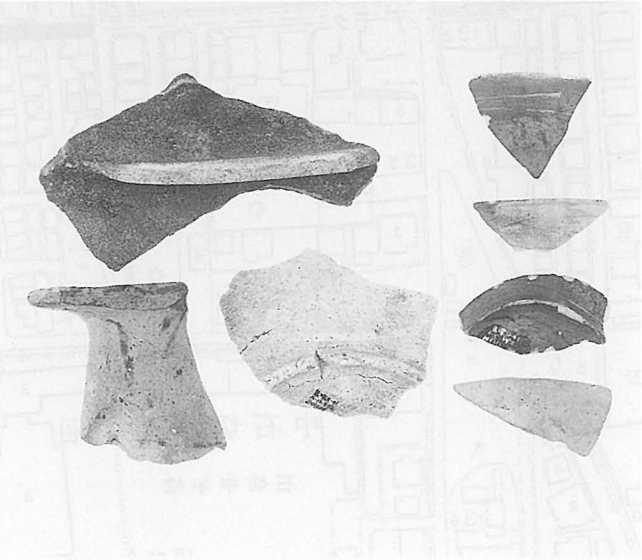


土層断面柱状図

調査地遠景



土層断面



出土遺物

1．調査の概要

A－1地区の層序

第1層　盛土。

第2層　黒褐色(2.5Y3/2)砂混じり粘質土。中世期の遺物が出土。

第3層　オリーブ黒色(5Y3/2)砂質土。

第4層　オリーブ黒色(5Y3/1)砂質土。

A－16地区の層序

第1層　盛土。

第2層　オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂。中世期の遺物が出土。

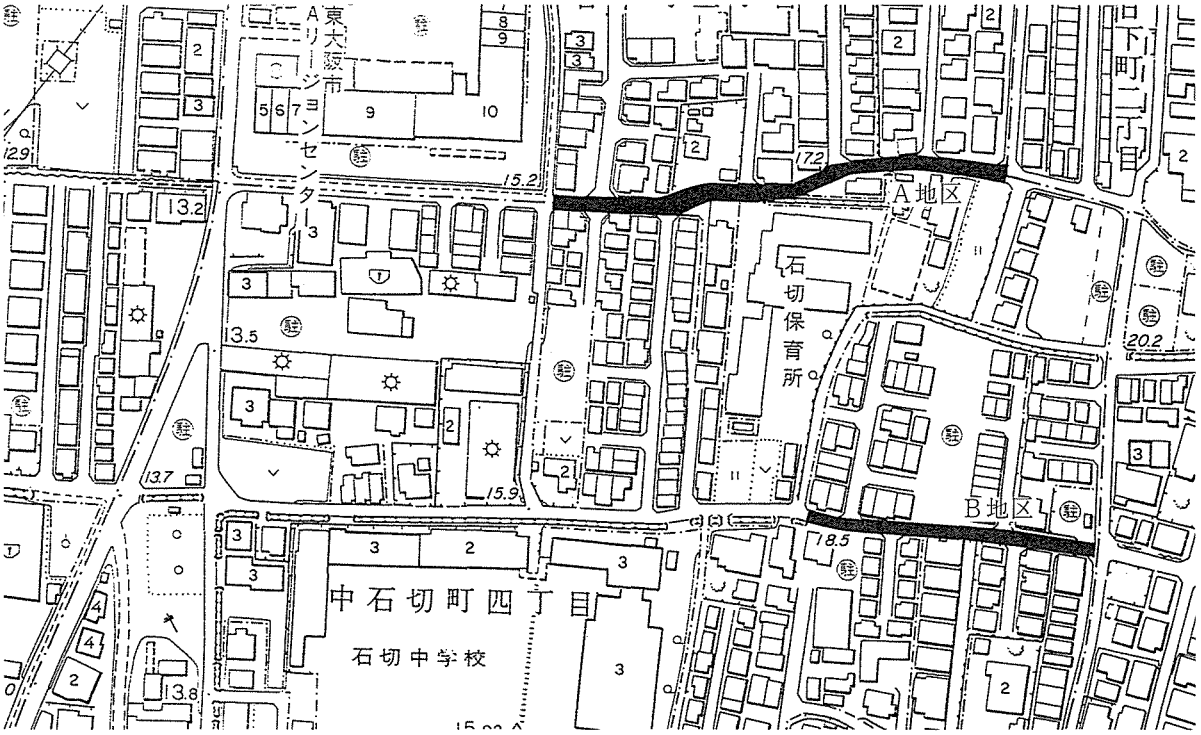
第3層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト。

2．まとめ

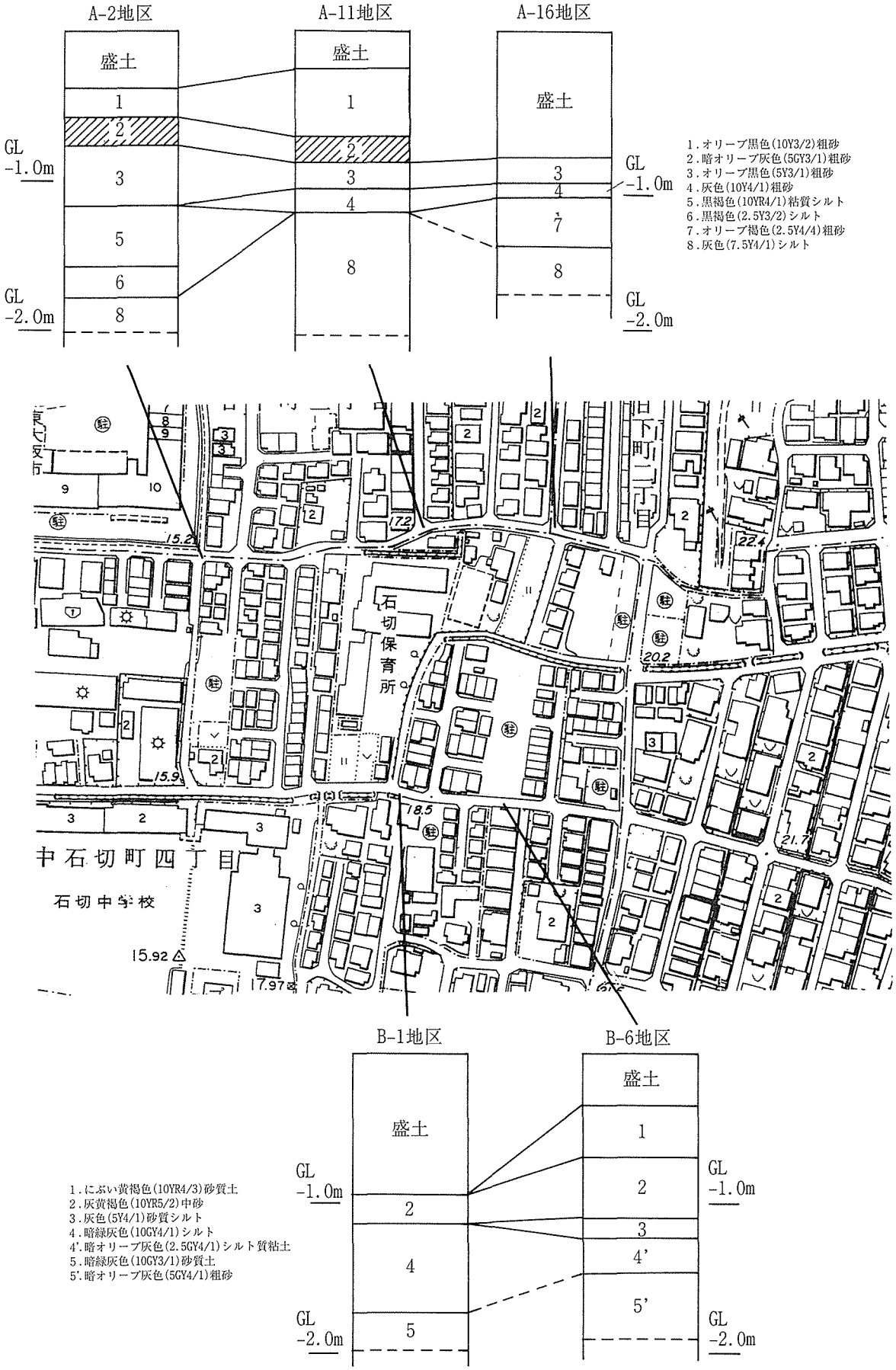
中世期の土師器・瓦器などが出土したが、谷筋内などの二次堆積の可能性が高い。

第22章　芝ヶ丘遺跡の第10次調査

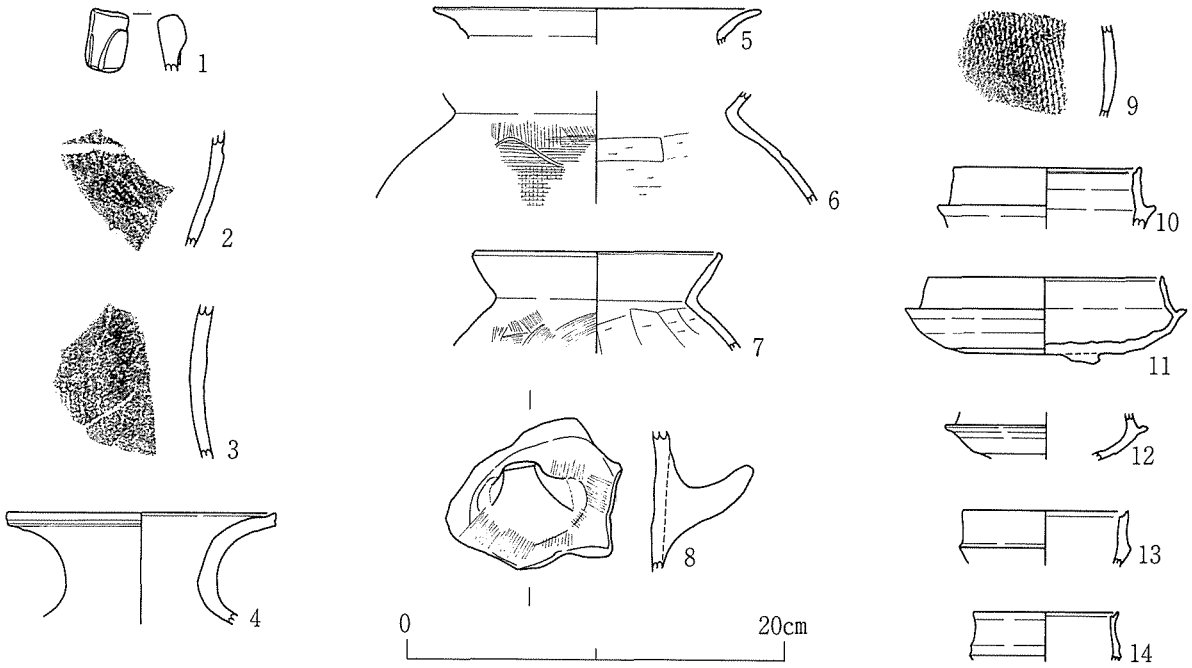
	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第43工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市日下町３丁目・中石切町４丁目
3	調 査 面 積	209㎡
4	調 査 期 間	平成12年７月27日～10月６日（延べ32日）
5	報 告 担 当	木村健明
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は石切中学校の東と北の２路線である。当地点は芝ヶ丘遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9ｍで長さ246ｍの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/2500）


A-2地区
A-11地区
A-16地区
盛土
GL
-1.0m
GL
-2.0m
1.オリーブ黒色(10Y3/2)粗砂
2.暗オリーブ灰色(5GY3/1)粗砂
3.オリーブ黒色(5Y3/1)粗砂
4.灰色(10Y4/1)粗砂
5.黒褐色(10YR4/1)粘質シルト
6.黒褐色(2.5Y3/2)シルト
7.オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗砂
8.灰色(7.5Y4/1)シルト
石切保育所
下町二丁目
中石切町四丁目
石切中学校
B-1地区
B-6地区
1.にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
2.灰黄褐色(10YR5/2)中砂
3.灰色(5Y4/1)砂質シルト
4.暗緑灰色(10GY4/1)シルト
4'.暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土
5.暗緑灰色(10GY3/1)砂質土
5'.暗オリーブ灰色(5GY4/1)粗砂

土層断面柱状図



出土遺物実測図

1．調査の概要

調査は石切保育所を挟んで北側をＡ地区、南側をＢ地区と呼称して行った。Ａ地区ではＡ-11地区までは明瞭な包含層が確認でき遺物も多数出土したが、それ以東では撹乱がひどく包含層は確認できなかった。またＢ地区は現水路に沿って掘削が行われたため、水路による撹乱で深さ１ｍ付近まで堆積を確認できない部分もあり、遺物もほとんど出土しなかった。土層断面は図に示した通りであり、Ａ地区の２層が包含層である。この層からは、縄文土器や、古墳時代の遺物が出土している。さらに、若干ではあるがそれ以外の層からも遺物の出土が認められる。

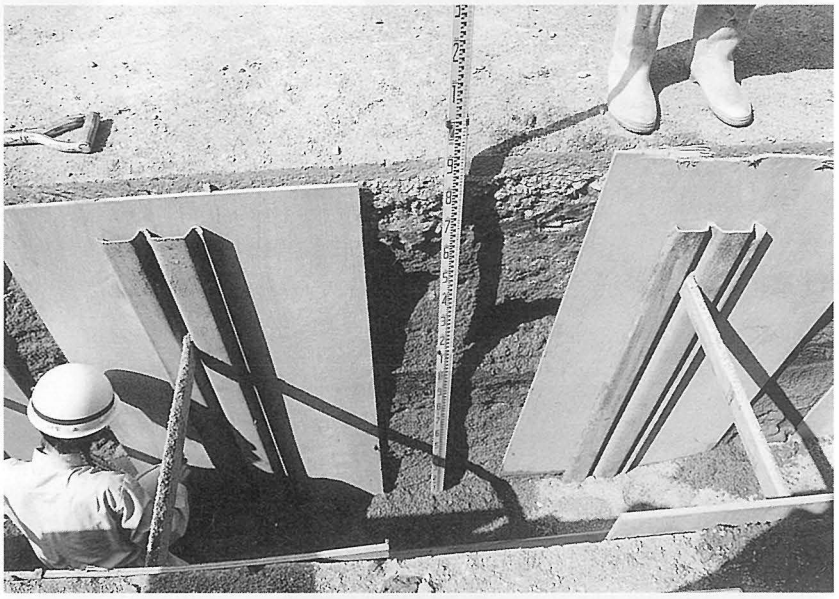
2．出土遺物

縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が出土した。図示したものの内、12のみがＢ地区からの出土で、他は全てＡ地区からの出土である。１～３は縄文土器で、縄文時代中期のものである。１は口縁部分と考えられる。２・３は器種は不明であるが、いずれも外面に施された縄文が明瞭に残っているものである。２には一条の沈線も認められる。４・５は弥生土器で、４は壺、５は甕である。いずれも摩滅がひどく、調整などは不明である。６・７は布留式土器の甕である。６には肩部に波状の文様が施されている。８は土師器の把手である。９は軟質の韓式系土器である。外面に縄蓆文タタキによる調整がなされている。10～14は須恵器で10～12が杯身、13・14が高杯である。いずれも６世紀代のものである。

3．まとめ

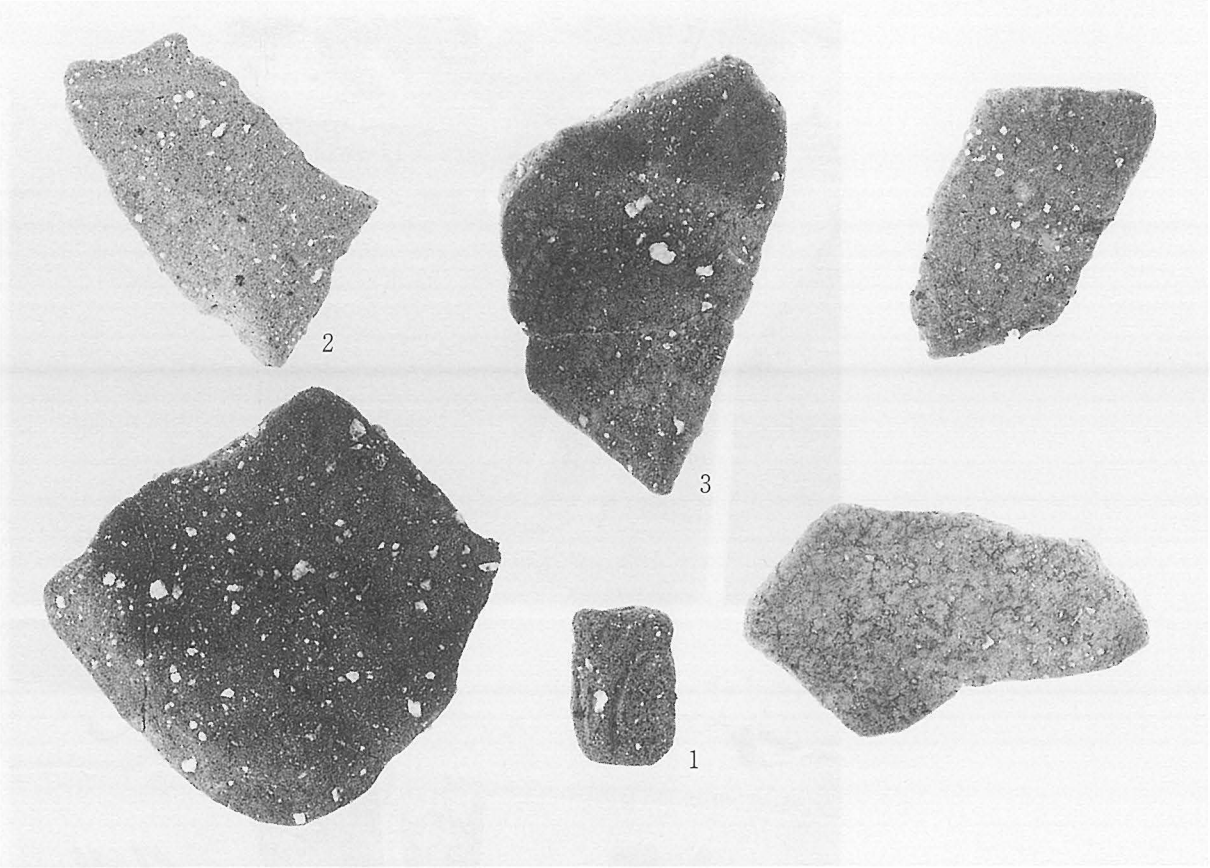
今回の調査では主に北側のＡ地区で包含層を確認し、遺物も多数出土した。遺跡指定範囲の端から調査を始めたがそこでも明瞭な包含層が確認できたことから、更に遺跡範囲が広がることも可能性として考えられる。また、これまで主に調査が行われてきた石切中学校は今回の調査地の南西になる。出土した遺物の時期には従来の成果との差異はない。過去の調査においても出土しているが、韓式系土器の出土は注目される。

Ａ－11地区土層断面

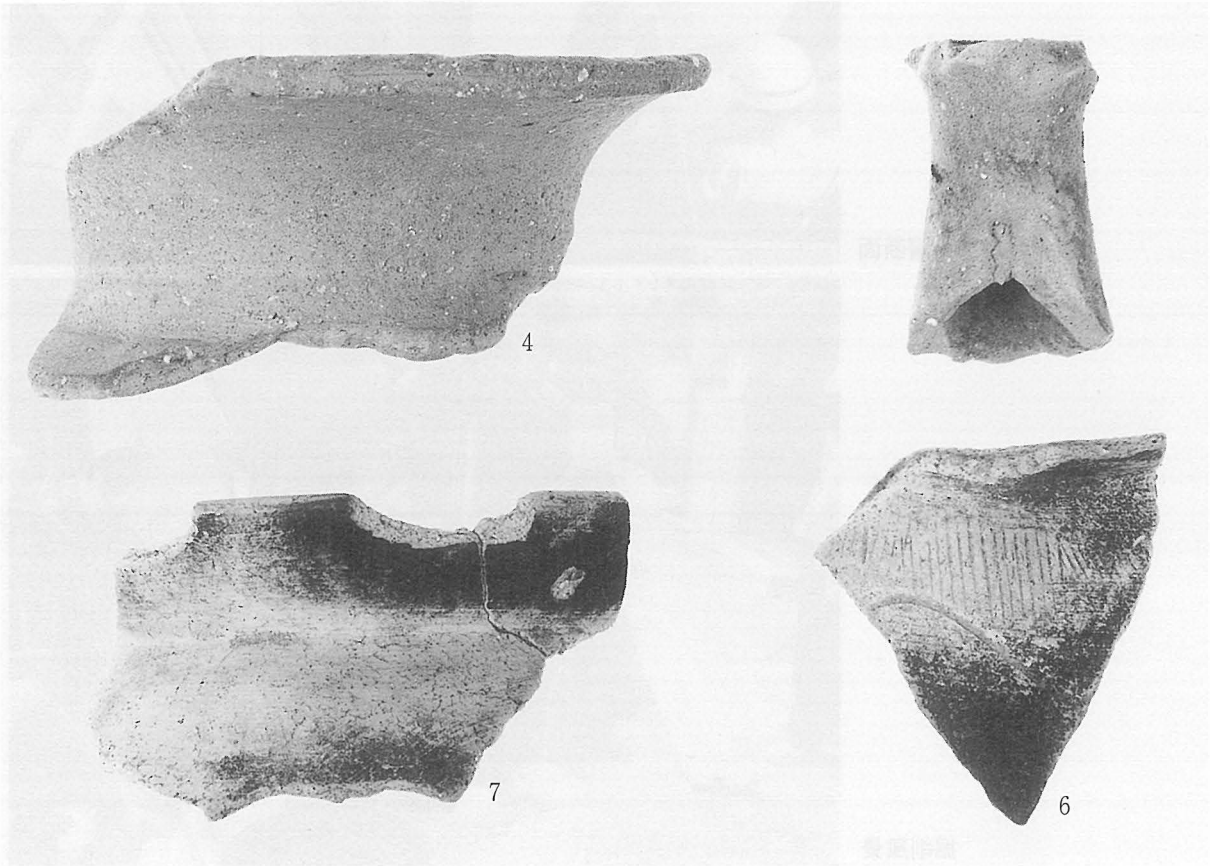


Ａ－16地区土層断面

掘削風景

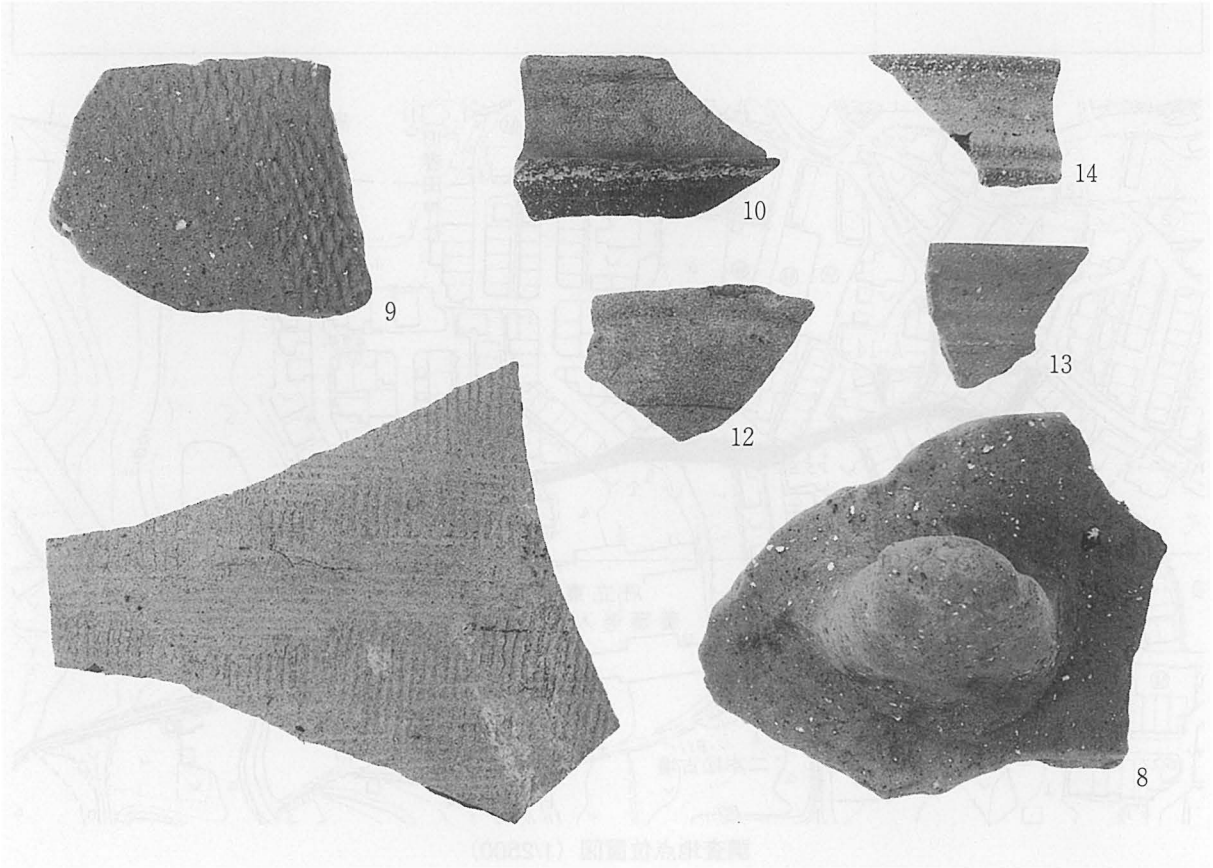


出土遺物（縄文土器）



出土遺物（弥生土器・土師器）

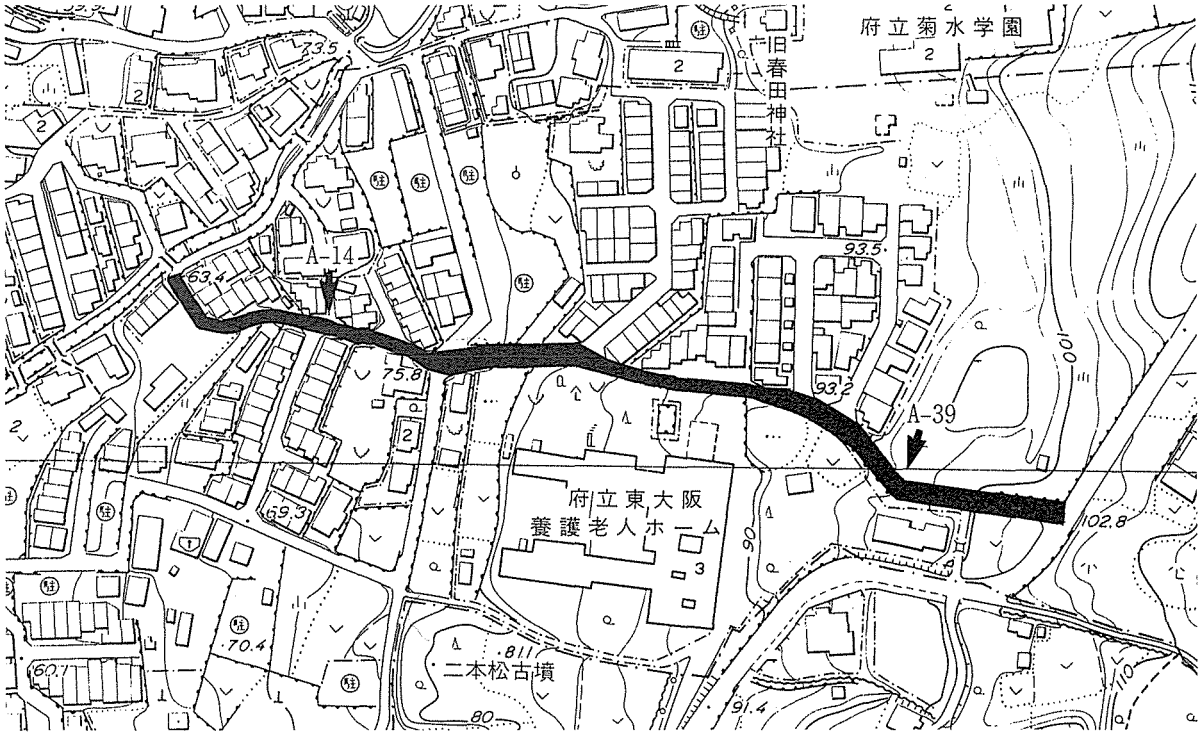
出土遺物（須恵器）



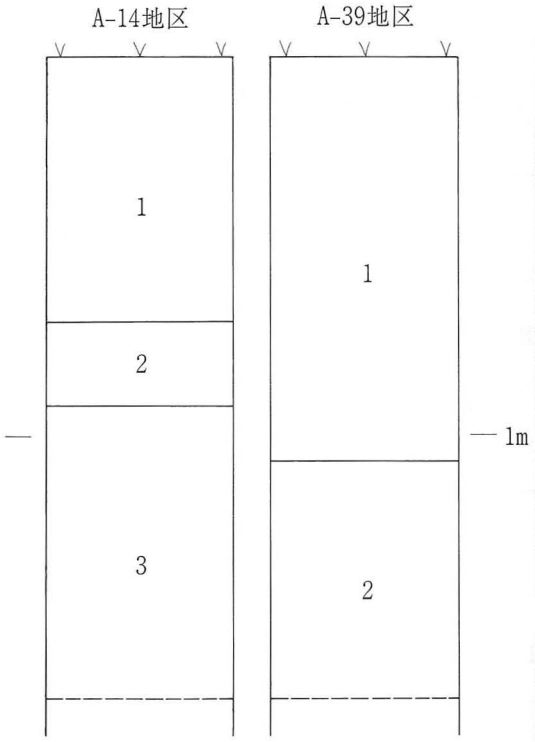
出土遺物（韓式系土器・土師器・須恵器）

第23章　岩滝山（いわたきやま）遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第46工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市上六万寺町
3	調 査 面 積	624m²
4	調 査 期 間	平成12年８月１日～11月22日（延べ45日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は府立東大阪養護老人ホームの北である。当地点は岩滝山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～1.2mで長さ616mの間であり、開削工法である。



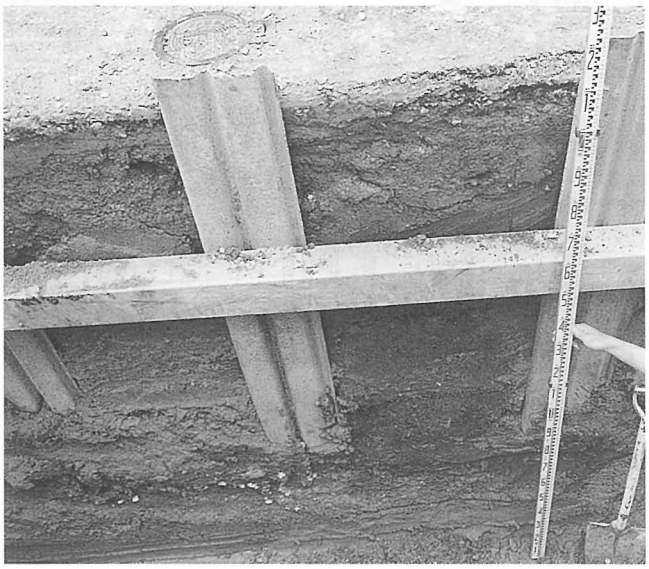
調査地点位置図（1/2500）



土層断面柱状図

調査地遠景

掘削状況



土層断面

1．調査の概要

A－14地区の層序

第１層　盛土。

第２層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)小～大礫混じり砂質土。

第３層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)小礫混じり砂質土。

A－39地区の層序

第１層　盛土。

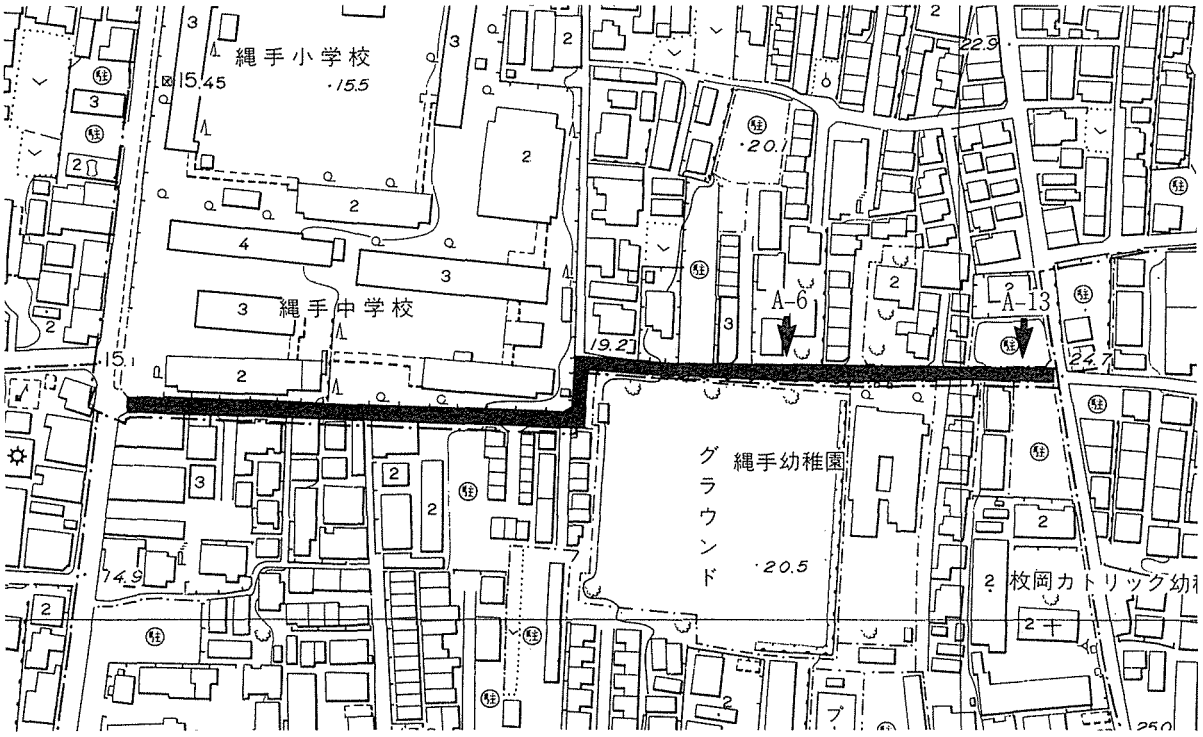
第２層　にぶい橙色(7.5YR7/4)粗粒砂混じり粘土。

2．まとめ

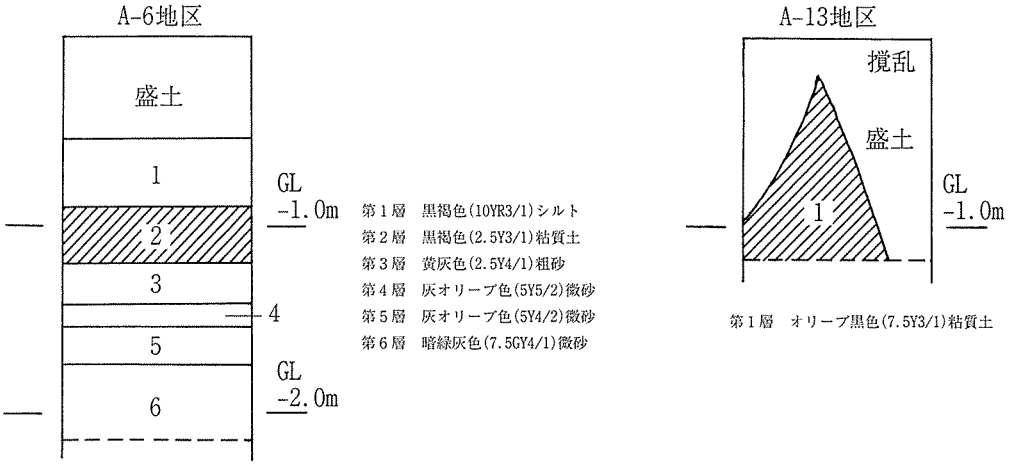
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第24章　縄手（なわて）（第15次）・上六万寺（かみろくまんじ）遺跡（第５次）の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第28工区管きょ築造工事
2	調査地点	東大阪市南四条町地内
3	調査面積	264m²
4	調査期間	平成12年７月12日～８月１日（延べ９日）
5	報告担当	木村健明
6	調査の経過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は縄手中学校の南である。当地点は縄手・上六万寺遺跡内に位置し、調査をおこなうことになっていたが、連絡漏れにより工事区間の約1/2が事前着工されていた。下水道部と協議した結果、残りの部分を立会調査することになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ311mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/2500）



土層断面柱状図

1．調査の概要

調査地点は、縄手中学校の南側であるが、中学校沿いの部分は事前着工のため調査することができなかった。調査範囲の大部分は縄手遺跡の範囲内であり、縄手幼稚園以東が上六万寺遺跡である。

調査範囲が２つの遺跡にまたがっているが、地区割は通し番号で行っており、事前着工区間をA-１地区とし、全体で13区を数えた。土層断面は図に示す通りである。包含層としてはA-６地区の第２層およびA-13地区の第１層があげられる。

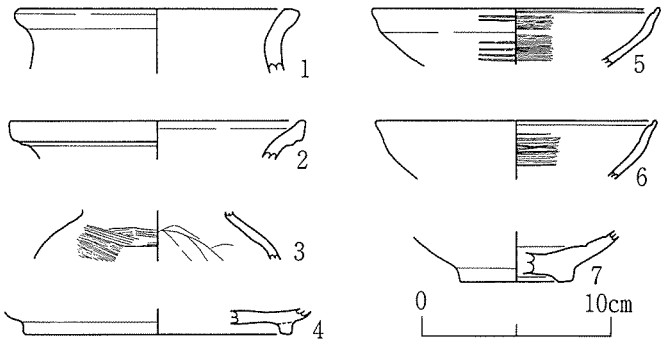
2．出土遺物

須恵器・土師器・瓦器椀などが出土した。いずれも出土層位の確認はできていない。１・２は須恵器の壺、３は土師器の壺、４は須恵器の高台部分である。５・６は瓦器椀である。５は楠葉型で内面には密に、外面には疎らにミガキがほどこされている。６は大和型で内面には密にミガキが施されているが外面には認められない。７は白磁碗Ⅳ類の底部である。内面体部の立ち上がり部分に一条の沈線が入れられている。いずれも細片であるため確実なことは言えないが５～７は12世紀頃のものと考えられる。

3．まとめ

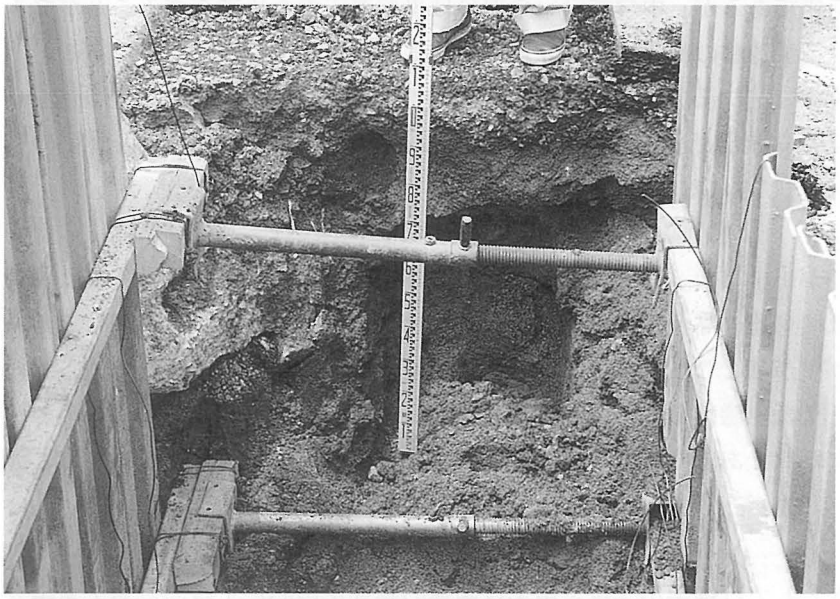
縄手遺跡でのこれまでの調査としては縄手小学校・中学校関連の調査を中心に十数回におよぶ調査が行われており、縄文時代後期および弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が出土している。

また、上六万寺遺跡では過去の調査で弥生時代後期の遺物および中世の遺構・遺物が出土している。今回の調査では、立会調査という制約および、一部分の事前着工ということもあって古墳時代および中世の遺物の出土の確認に留まってしまい、周辺の調査で出土している縄文時代に関するものは全く確認できなかった。

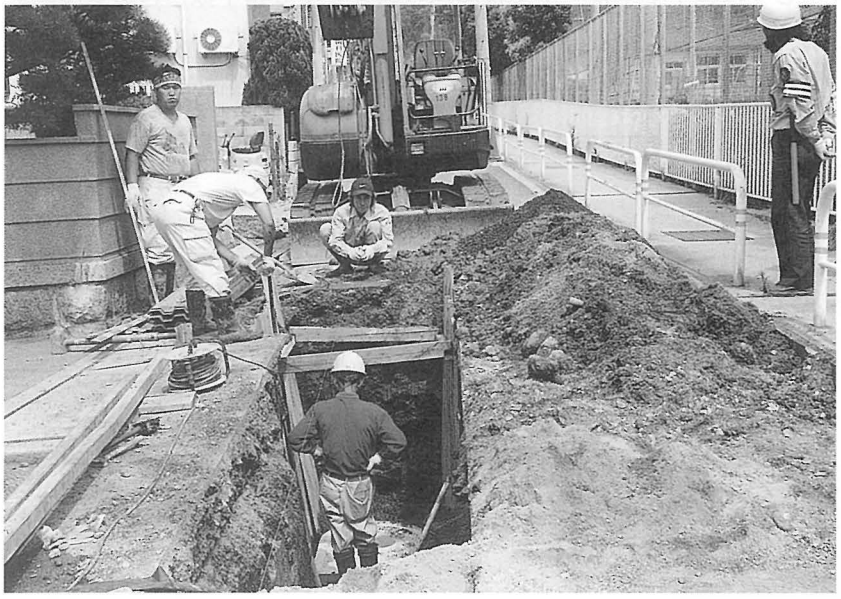


出土遺物実測図

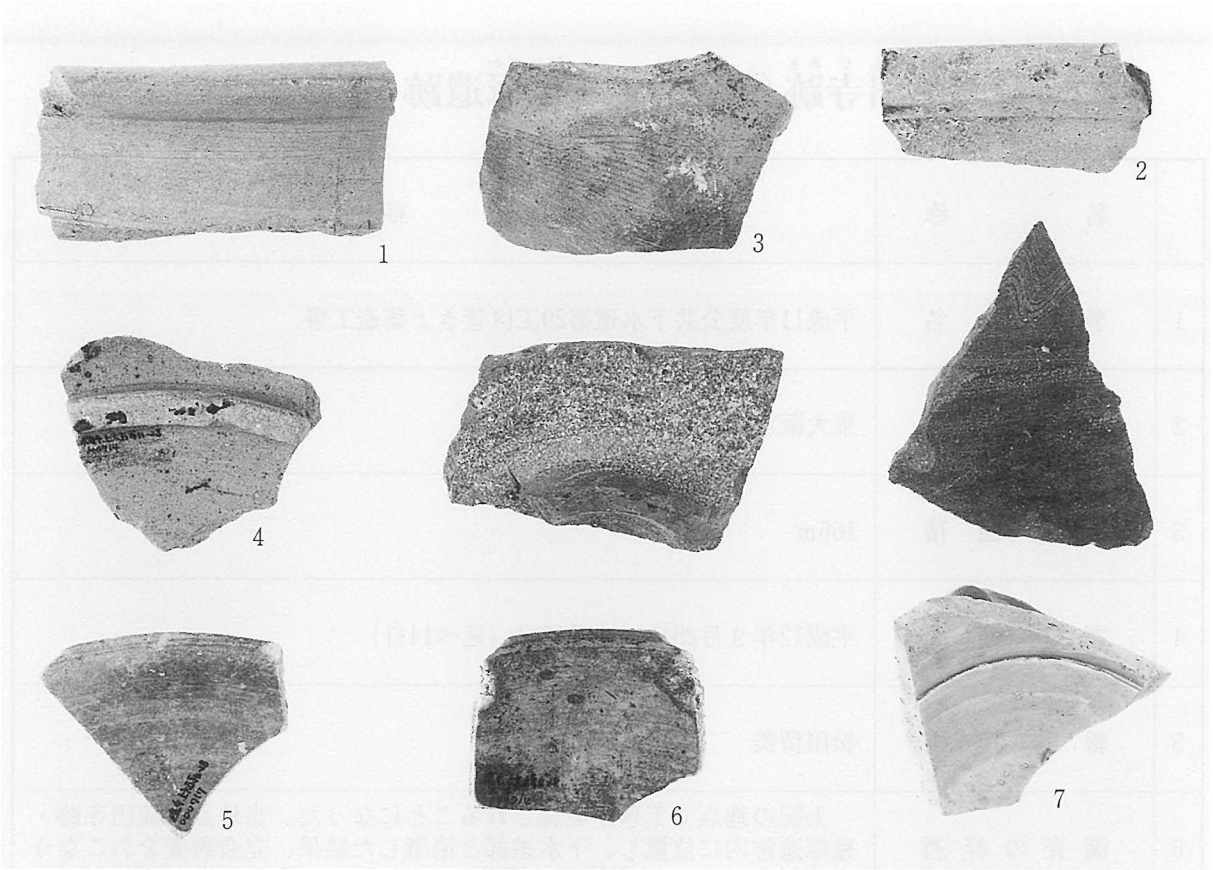
A－4地区土層断面



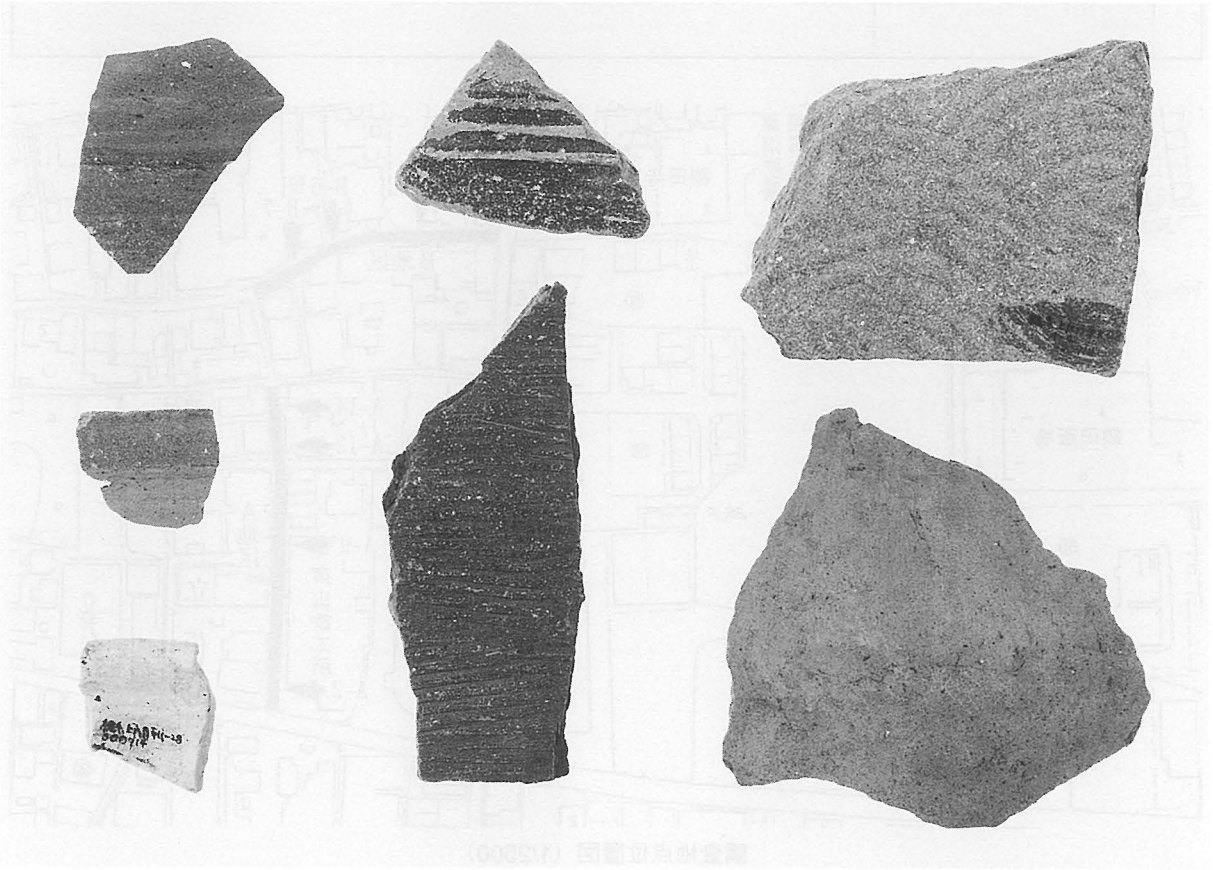
A－13地区土層断面



掘削風景



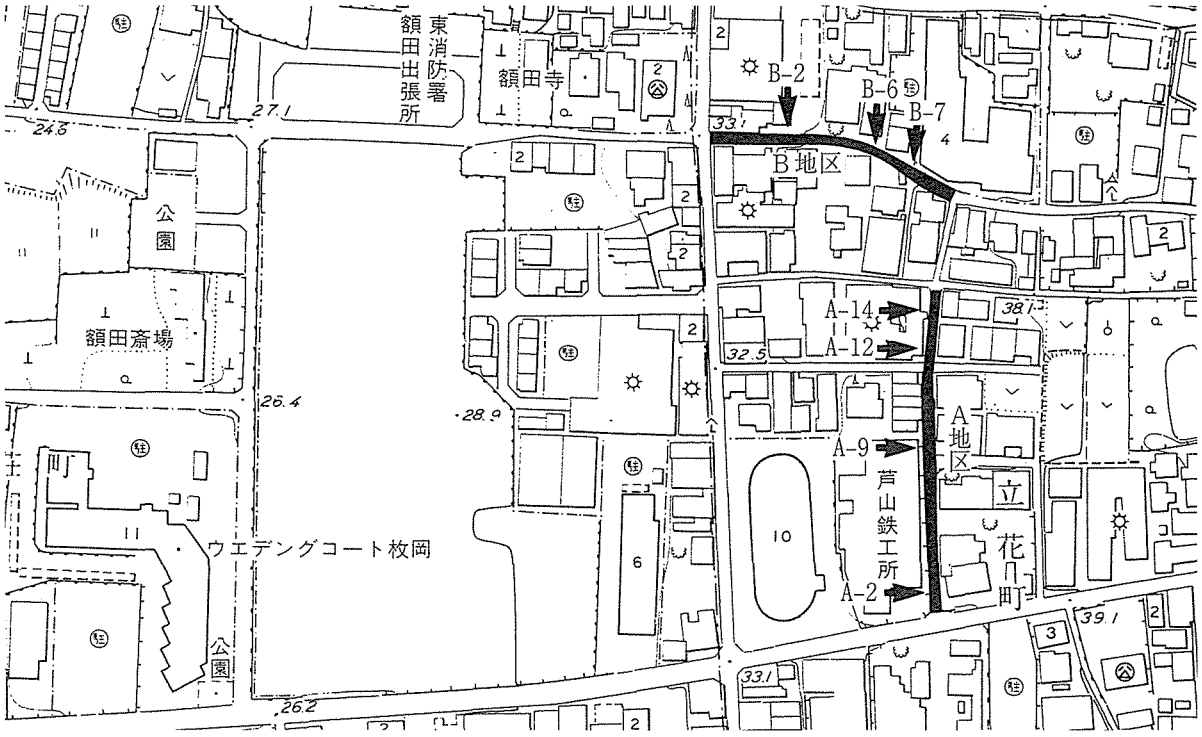
出土遺物（土師器・須恵器・瓦器・白磁）



出土遺物（土師器・須恵器）

第25章　額田寺跡（第２次）・鬼塚遺跡（第26次）の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第29工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市立花町
3	調 査 面 積	166m²
4	調 査 期 間	平成12年９月25日～10月13日（延べ14日）
5	報 告 担 当	松田留美
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は額田寺跡・鬼塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ196mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図（1/2500）

1．調査の概要

調査地は生駒山地の西麓の扇状地上に立地する。南北をＡ地区、東西をＢ地区と呼称した。包含層は現地表面から-0.2～１ｍの範囲に分布する黒色シルト層を主体とする。各地区の断面図の詳細を以下に記す。

Ａ－２地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/2)土。

第３層　灰黄褐色(10YR5/2)土。人頭大礫を含む。

Ａ－９地区の層序

第１層　盛土および撹乱。

第２層　灰色(5Y4/1)シルト質細砂。細～中礫を含む。

第３層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト。細～中礫を含む。

第４層　黒褐色(10YR2/3)シルト。細～中礫を含む。

第５層　黒色(10YR2/1)シルト。

Ａ－12地区の層序

第１層　盛土。

第２層　オリーブ黒色(5Y3/1)粘質シルト。中世の遺物が出土。

第３層　黒色(10YR2/1)シルト。

第４層　オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂混じり中粒砂。

第５層　暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。

Ａ－14地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(10YR3/1)粘質土。

第３層　黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。中世の遺物が出土。

第４層　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土。

第５層　灰黄褐色(10YR4/2)粘質土。

Ｂ－２地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土。中礫を多く含む。

第３層　オリーブ黒色(5YR3/1)シルト。酸化鉄沈着。

第４層　黒色(5Y2/1)シルト。

第５層　黒色(2.5GY2/1)粗粒砂。

Ｂ－６地区の層序

第１層　盛土。

第２層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト。

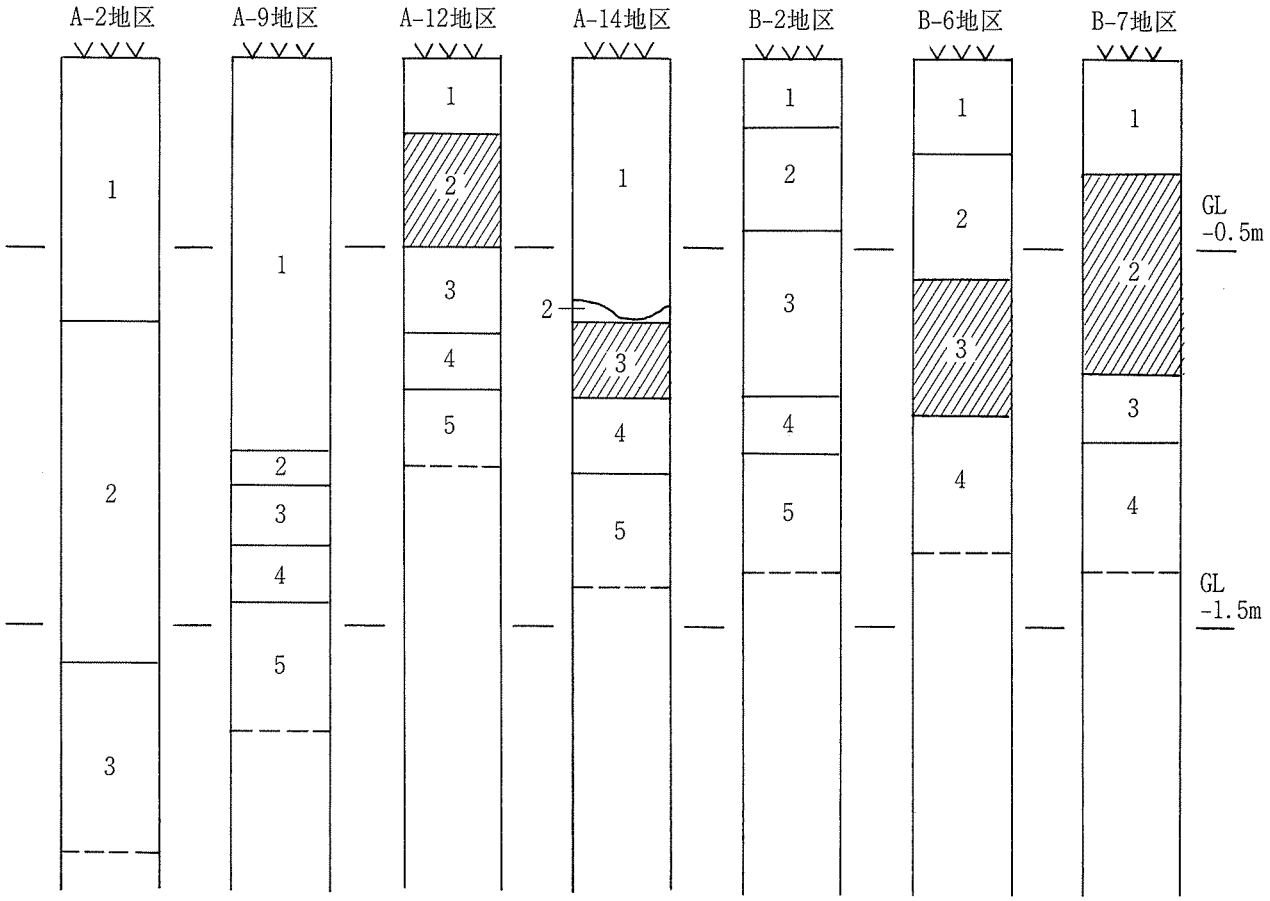
第３層　黄灰色(2.5Y4/1)シルト。

第４層　灰オリーブ色(5Y4/2)シルト。

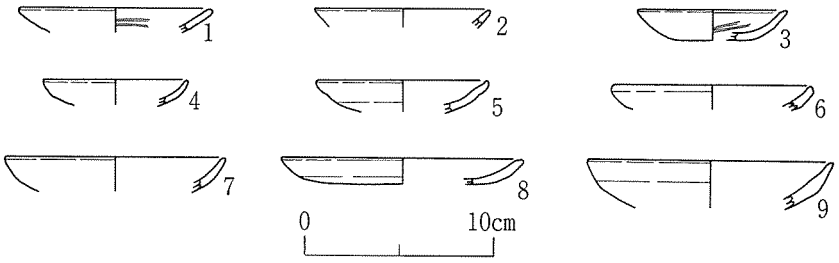
Ｂ－７地区の層序

第１層　盛土および撹乱。

第２層　黒褐色（10YR2/3）土。細礫を含む。酸化鉄沈着。中世の遺物が出土。



土層断面柱状図



出土遺物実測図

第３層　黒褐色(2.5Y3/2)粘質土。細～大礫を含む。

第４層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土。細～大礫を多く含む。

２．出土遺物

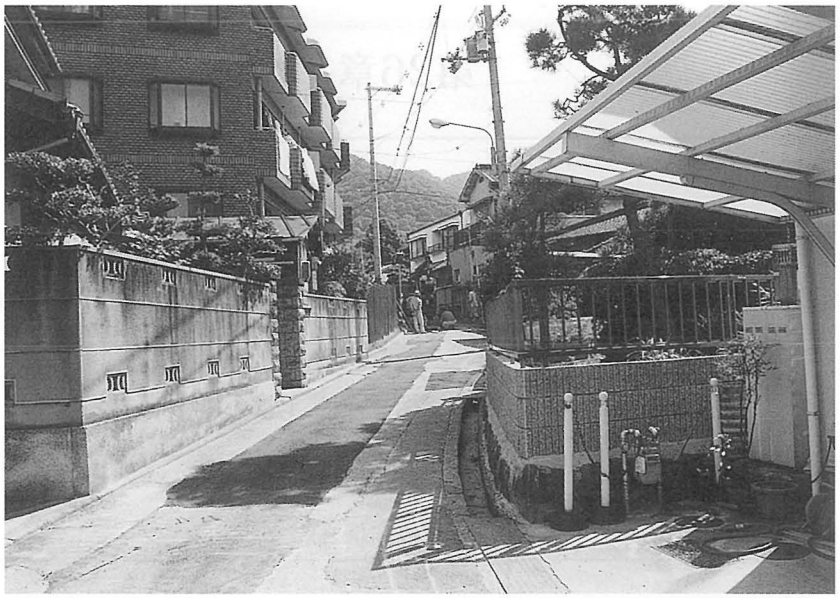
出土した遺物は少量であるが中世の瓦器や土師器がほとんどで、古墳時代、奈良～平安時代のものと思われる須恵器、平安時代前半の黒色土器Ａ類が若干混じる。これらのうち図化しえたものは９点である。Ａ地区出土遺物は(１・２・４)、Ｂ地区出土遺物は(３・５～９)である。以下、概要を記す。

瓦器小皿(１～３)　１・３は内面に暗文をまばらに施すもので、外面はナデ調整である。

土師器皿(４～９)　口径が10cm未満の小皿（４・５）と10～13cmの大皿（６～９）がある。色調は淡黄色～淡黄橙色を呈する。

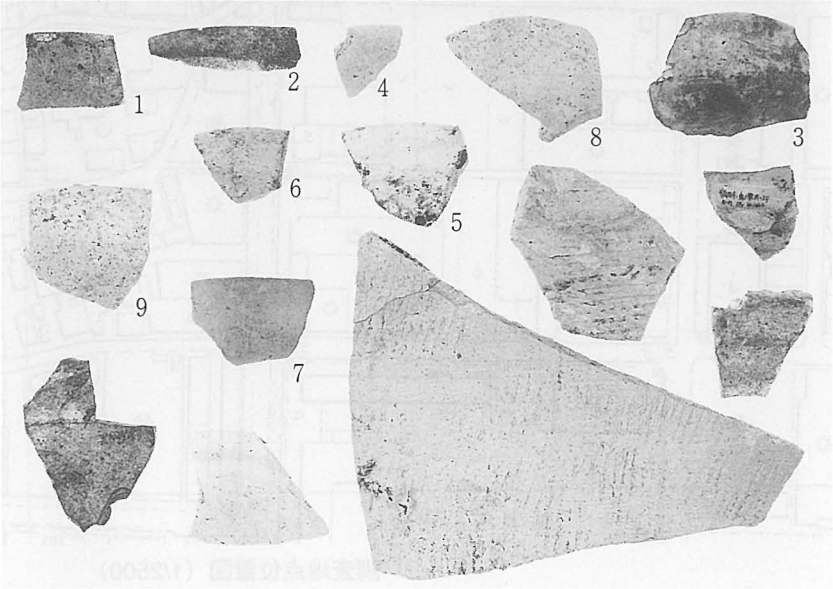
３．まとめ

調査地は鬼塚遺跡の北東端から額田寺跡の南東部にまたがっている。今回の調査では遺構は検出できなかったが、両遺跡にわたって中世の包含層が分布していることがわかった。



B地区遠景

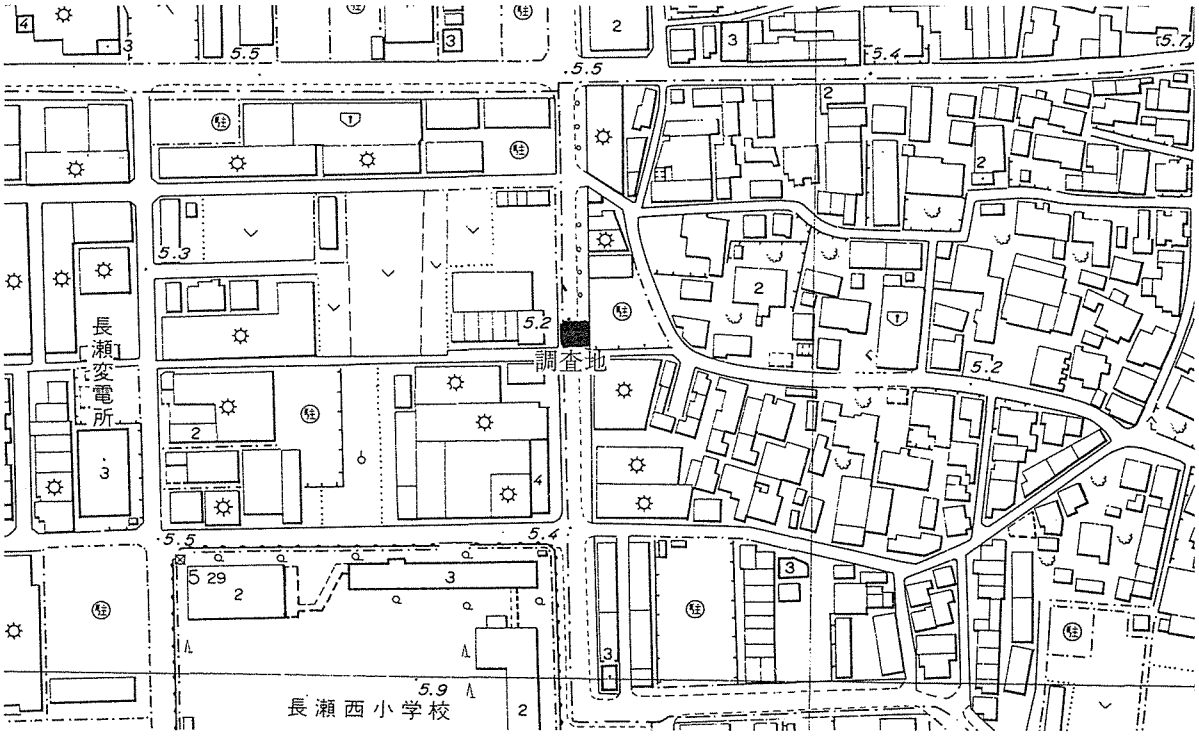
B－2地区土層断面



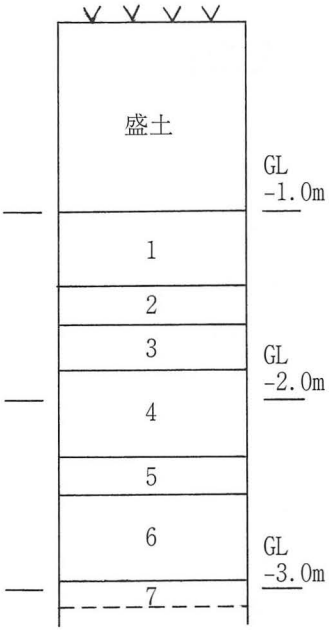
出土遺物

第26章　衣摺（きずり）遺跡の調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第17工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市衣摺３丁目
3	調 査 面 積	50m²
4	調 査 期 間	平成12年12月14日～12月15日（延べ２日）
5	報 告 担 当	木村健明
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は長瀬西小学校の北である。工事は推進工法によっておこなわれ、到達立坑が衣摺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、発掘調査をおこなうことになった。調査範囲は8.4×6.0mである。

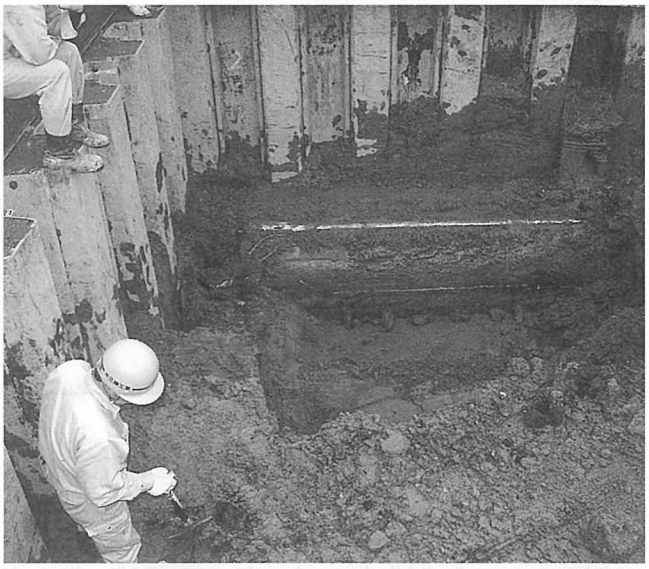


調査地点位置図（1/2500）



土層断面柱状図

掘削風景



掘削風景

土層断面（第５～７層）

１．調査の概要

層序（南壁）

第１層　灰色(7.5Y6/1)粘土。

第２層　灰色(10Y6/1)微砂。

第３層　灰色(10Y6/1)微砂。（３層よりやや黒っぽい。）

第４層　灰色(5Y4/1)粘土。(微細な木片を含む。)

第５層　灰色(5Y4/1)シルト。〔黄灰色(2.5Y6/1)微砂がラミナ状に混じる。〕

第６層　灰色(5Y4/1)粘土。

第７層　灰色(5Y5/1)粗砂。

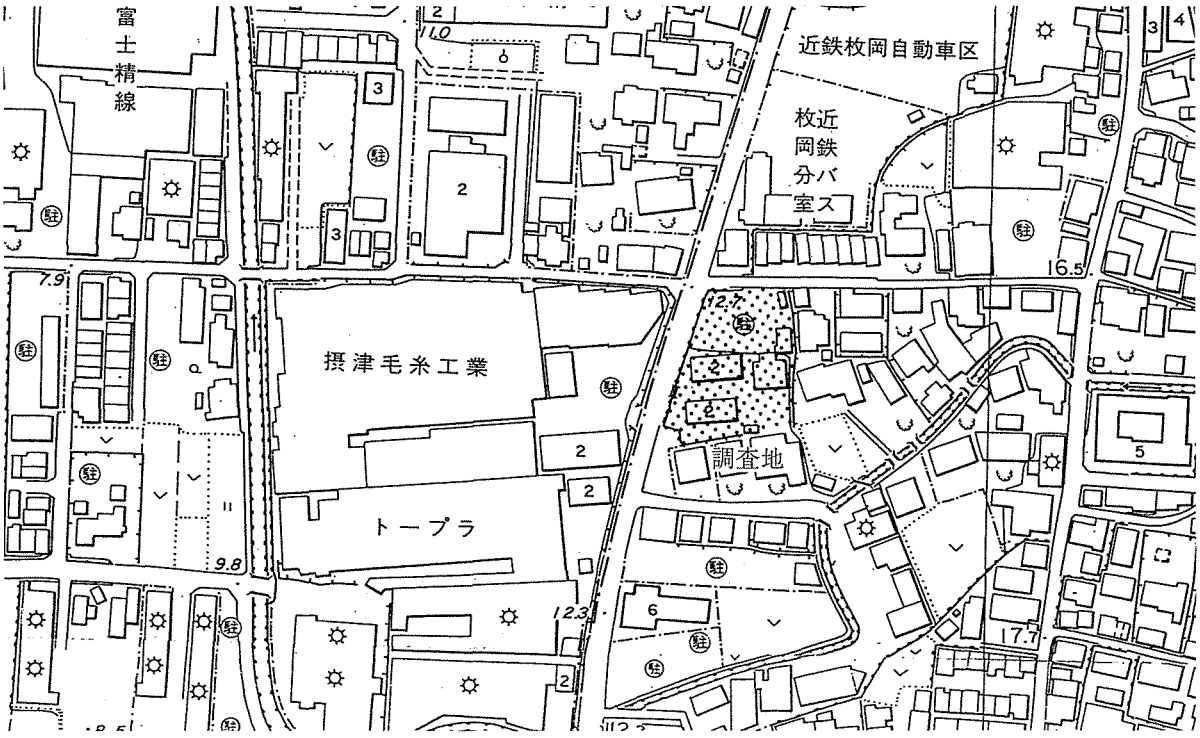
２．まとめ

衣摺遺跡は本格的な調査がほとんど行われておらず、実態が不明な点の多い遺跡である。

今回発掘調査を実施したが、土層の堆積は粘土と砂が交互に堆積している状態であり、かつての河川の跡と考えられる。遺構・遺物とも確認できなかった。

第27章　西ノ辻遺跡の第43次調査

	名　　称	内　　容
1	事　業　名	平成11年度公共下水道第11－１工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市弥生町・東山町
3	調 査 面 積	1555㎡
4	調 査 期 間	平成12年５月９日～10月18日（延べ103日）
5	報 告 担 当	才原(1)・吉田(2・3・4－3・4)・木村(4－2)・松田(4－1)・全員(5)
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄バス枚岡車庫の南に位置する。推進工法で工事を実施する計画であったが竪坑部分の作業ヤードとして調査地を削ることになり、下水道部と協議した結果、発掘調査をおこなうことになった。



調査地点位置図（1/2500）

1．位置と環境

西ノ辻遺跡は奈良県と大阪府の境となる生駒山西麓の扇状地上に立地し、標高７～20mを測る。現在の行制区分では東大阪市東山町、弥生町、南荘町、宝町、西石切町に相当する。遺跡の範囲は東西400m、南北600mに及ぶと推定されている。遺跡の範囲は開発が進んでおり、ほとんどが住宅や工場となっている。

生駒山西麓に人々が住み始めるのは旧石器時代からである。当時代の遺跡は標高100m前後の地点で多く発見されており、草香山、芝坊主山、正興寺山遺跡などが古くより知られている。また、鬼虎川遺跡の発掘調査では縄文時代前期の海食崖に落ち込んだ状態で旧石器時代の遺物であるナイフブレードや翼状剥片が出土している。

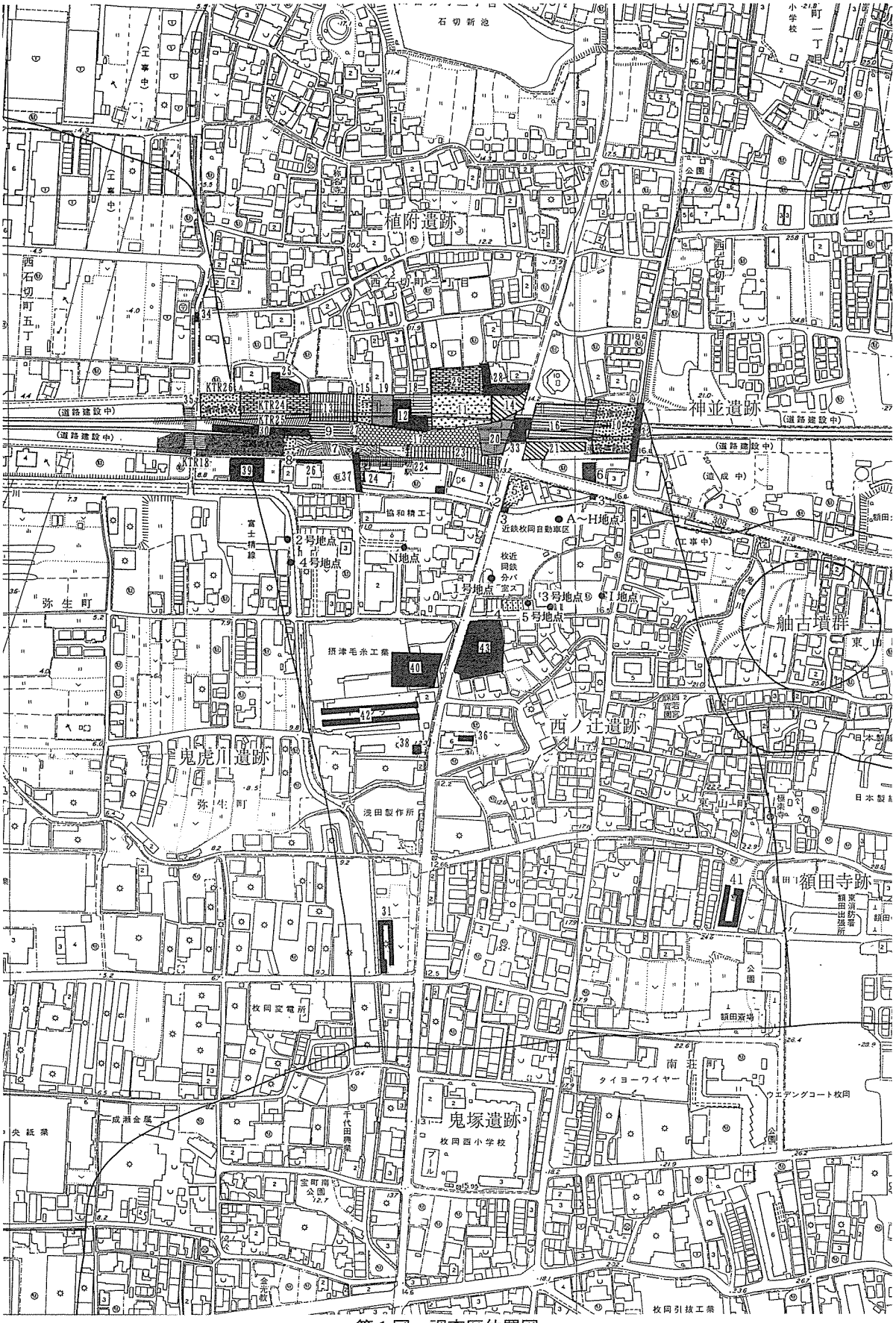
縄文時代になると当遺跡の東に神並遺跡が出現する。神並遺跡は早期の遺跡であり、多量の押型文土器と土偶、石鏃、石匙、有舌尖頭器などが出土している。前・中期の遺跡は前述した鬼虎川遺跡があり、当遺跡の西に位置する。後・晩期になると日下、鬼塚、縄手、馬場川遺跡などが出現する。日下遺跡は府下でも数少ない貝塚として著名な遺跡である。環状列墓や石室に炉を有する竪穴住居などが検出されている。縄手、馬場川遺跡では集落関係の遺構が発見されており、土器や各種の土製品、石器などが出土している。

弥生時代の遺跡は前代に引き続き扇状地上に立地するもの、標高100m前後の高所に立地するものがある。また、平野部にも出現し、自然堤防上に集落を形成している。前期の遺跡は中垣内、鬼虎川、鬼塚、縄手、瓜生堂、山賀、高井田遺跡などがある。前期に出現した遺跡は中期にも継続し、大集落を形成するものが多い。中期になると新たに当遺跡や植附、山畑遺跡などが出現する。当遺跡では自然河川の谷や方形周溝墓、甕棺、溝などが検出されている。当遺跡の西に位置する鬼虎川遺跡でも方形周溝墓や木棺墓などが検出されており、隣接して墓域があったことが明らかになってきた。一方、平野部には瓜生堂遺跡があり、調査成果から大集落を形成していたことが明らかになっている。
山畑遺跡は高地性集落であり、遺跡の範囲は大きくない。また、当遺跡は後期に継続するが、周辺には新たに北鳥池、岩滝山、馬場川、上小阪遺跡などが出現する。前・中期の遺跡は大集落を形成するものが多いが、後期の遺跡は小規模となる。

古墳時代の遺跡は芝ヶ丘、神並、鬼虎川、鬼塚、縄手、西岩田遺跡などがある。また、生駒山西麓の各尾根筋には古墳が多く造られるようになる。西ノ辻遺跡では自然河川の谷に木組暗渠や石組貯水施設などが造られている。神並遺跡では掘立柱建物が検出されている。鬼虎川遺跡でも方形の竪穴住居と掘立柱建物が発見されている。古墳時代の集落が除々ではあるが明らかになってきている。古墳は中期の時期のものが東大阪市域では最も古く塚山、えのき塚、大賀世古墳などがある。えのき塚や大賀世古墳からは多量の埴輪が出土している。後期になると古墳数は急激に増加し、群集墳を形成している。十基前後から数十基単位で構成されており、墓尾、神並、みかん山、出雲井、客坊山、山畑、花草山、五里山古墳群などがあげられる。また、近年の調査では削平された古墳も多く発見されてきている。

奈良時代以降になると当遺跡では掘立柱建物、井戸、土坑、土坑墓などが検出されている。当遺跡周辺には神並、水走遺跡などの集落がある。平野部には若江、瓜生堂遺跡などがある。若江遺跡は寺跡や郡衙と考えられている。また、東には法通寺、西には河内寺などがある。法通寺からは建物基壇などの遺構が検出されている。

当遺跡周辺は旧石器時代より今日に至るまで生活に適した場所であったらしく、各時代の遺構、遺物が多く存在する。


石切新池
植附遺跡
神並遺跡
(道路建設中)
(工事中)
(造成中)
西石切町五丁目
西石切町一丁目
協和精工
近鉄枚岡自動車区
A～H地点
N地点
1号地点
2号地点
3号地点
4号地点
5号地点
I地点
弥生町
摂津毛糸工業
西ノ辻遺跡
鬼虎川遺跡
浅田製作所
額田寺跡
枚岡変電所
鬼塚遺跡
枚岡西小学校
タイヨーワイヤー
ウエデングコート枚岡
成瀬金属
枚岡引抜工業
日本製鋼
額田競場
額田出張所
東消防署
宝町南公園
金光教
千代田興業
富士精線
舳古墳群
公園

第1図　調査歴位置図

表１　西ノ辻遺跡調査歴一覧

次数	事業名	調査地	調査団体	調査面積	調査期間	調査成果	文献
		東山町1172他	山本博氏・木村武夫氏他		1941・2・17 ～1941・4・19	井戸状土坑から石器、多量の土器出土	『陰陽道と猿田歴代組附額田町石器時代遺跡』　1957　山本博 荻田昭次「西ノ辻遺跡」(『東大阪市文化財協会ニュースNo１』1986)
		東山町1260他	大阪府史蹟調査委員会 京都大学考古学研究室		1941・4・26 ～1942	井戸状土坑などから多量の土器出土 出土土器は近畿における弥生時代後期の標識資料になる	小林行雄　「枚岡市額田町西ノ辻各地点の土器」　(『弥生式土器集成資料編Ｉ』　1958) 荻田昭次　「西ノ辻遺跡」　(『東大阪市文化財協会ニュースNo１』　1986)
0	下水函渠築造工事に伴う調査	西石切町３丁目143	東大阪市遺跡保護調査会	16㎡	1973・6・1 ～1973・6・30	遺構なし 須恵器、瓦質土器が少量出土	『発掘２０年のあゆみ　市制20周年記念特別展示』　1987　東大阪市教育委員会　(財）東大阪市文化財協会
1	下水道管埋設工事に伴う調査	西石切町３丁目	東大阪市遺跡保護調査会	20㎡	1976・3・4 ～1976・3・11	室町時代後半の溝状遺構１条検出 室町時代後半の土器と瓦、漆器椀が出土	『発掘２０年のあゆみ　市制20周年記念特別展示』　1987　東大阪市教育委員会（財）東大阪市文化財協会　『調査会ニュース　No４』　1976　東大阪市遺跡保護調査会
2	新鬼虎川都市下水路函渠工事に伴う調査	東山町４	東大阪市遺跡保護調査会	25㎡	1977・1・11 ～1977・1・17	遺構なし 室町時代～江戸時代の土器出土	『発掘２０年のあゆみ　市制20周年記念特別展示』　1987　東大阪市教育委員会　(財）東大阪市文化財協会
3	新鬼虎川都市下水路函渠工事に伴う調査	東山町1260	東大阪市遺跡保護調査会	83㎡	1977・11・26 ～1977・12・8	近世の井戸3基と室町時代の自然流路を検出	『発掘２０年のあゆみ　市制20周年記念特別展示』　1987　東大阪市教育委員会　(財）東大阪市文化財協会
4	個人住宅建設工事に伴う調査	東山町1265	東大阪市教育委員会	30㎡	1977・10 ～1977・11	弥生時代中期のピットと土坑を検出	『発掘２０年のあゆみ　市制20周年記念特別展示』　1987　東大阪市教育委員会　(財）東大阪市文化財協会
5	貸しビル建設工事に伴う調査	東山町63他	東大阪市遺跡保護調査会	270㎡	1981・8・25 ～1982・10・28	弥生時代中期～後期の自然流路と室町時代の土坑検出 自然流路内より弥生時代中期の土器が多量出土	『発掘２０年のあゆみ　市制20周年記念特別展示』　1987　東大阪市教育委員会　(財）東大阪市文化財協会
6	鉄道・道路建設に伴う調査 （金沢外科）	西石切町１丁目11	東大阪市教育委員会 (財）東大阪市文化財協会	約170㎡	1982・8・17 ～1982・9・3	土坑、井戸、ピット検出	『西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡ー西ノ辻遺跡第６次、第７次、第８次調査、鬼虎川遺跡第18次調査概要報告書ー』　1988　東大阪市教育委員会　(財）東大阪市文化財協会
7	鉄道・道路建設に伴う調査	弥生町４・５	東大阪市教育委員会 (財）東大阪市文化財協会	2536㎡	1982・11・1 ～1982・3・31	中世の掘立柱建物、弥生時代の方形周溝墓、甕棺を検出	『西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡ー西ノ辻遺跡第６次、第７次、第８次調査、鬼虎川遺跡第18次調査概要報告書ー』　1988　東大阪市教育委員会　(財）東大阪市文化財協会
8	鉄道・道路建設に伴う調査 （道路関係部）	弥生町	東大阪市教育委員会 (財）東大阪市文化財協会	189㎡	1983・11・1 ～1983・11・28	中世の溝、井戸、土坑、ピット群、弥生時代の溝を検出 中世の遺構から犬のかじった痕のあるヒトの左脛骨出土	『西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡ー西ノ辻遺跡第６次、第７次、第８次調査、鬼虎川遺跡第18次調査概要報告書ー』　1988　東大阪市教育委員会　(財）東大阪市文化財協会
9	鉄道・道路建設に伴う調査 （道路関係部）	西石切町３丁目	(財）東大阪市文化財協会	800㎡	1983・12・22 ～1984・5・23	13世紀後半の壮年の木棺墓を２基検出 弥生時代中期の方形周溝墓を検出	『西ノ辻遺跡第９次調査報告』　1996　東大阪市教育委員会　(財）東大阪市文化財協会
10	鉄道・道路建設に伴う調査 （都市関係部）	西石切町１丁目	(財）東大阪市文化財協会	2030㎡	1983・12・1 ～1984.9.17	弥生時代～古墳時代の埋設谷とそれを利用した古墳時代の水利施設、奈良時代～平安時代の谷内の杭列・護岸施設を検出	『西ノ辻遺跡第10次調査概要ー遺物編ー』　1989　東大阪市教育委員会　(財）東大阪市文化財協会
11	鉄道・道路建設に伴う調査 （５７－４工区）	西石切町３丁目	大阪府教育委員会	1994㎡	1983・4・11 ～1983・8・25	弥生時代中期の方形周溝墓、甕棺、中世の集落検出 中世の井戸からこも桁、つちのこなど多量の木製品出土	『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要Ⅱ-東大阪市東石切町・西石切所在ー』1986　大阪府教育委員会
12	鉄道・道路建設に伴う調査 （５８－5工区）	西石切町３丁目	大阪府教育委員会	614㎡	1984・1・20 ～1984・5・10	弥生時代～南北朝時代の自然河川、中世の柱穴群を検出	
13	鉄道・道路建設に伴う調査 （58－2工区）	西石切町３丁目	大阪府教育委員会	1082㎡	1984・2・28 ～1984・6・25	縄文時代～古墳時代の自然河川、弥生時代の甕棺、壺棺検出	

14	鉄道・道路建設に伴う調査 （58−7工区）	西石切町３丁目	大阪府教育委員会	575㎡	1984・3・25 ～1984・6・22	弥生時代中期の方形周溝墓、鎌倉時代～室町時代の井戸検出 鎌倉時代～室町時代の井戸から木簡、石硯出土	
15	鉄道・道路建設に伴う調査 （58−3工区）	西石切町３丁目	大阪府教育委員会	312㎡	1984・3・1 ～1984・7・4	弥生時代の自然河川、鎌倉時代の土坑墓を検出	
16	鉄道・道路建設に伴う調査	西石切町１丁目	（財）東大阪市文化財協会	2060㎡	1984・5・24 ～1985・4・3	弥生時代～古墳時代の埋没谷とそれを利用した古墳時代の水利施設、奈良時代～平安時代の谷内の杭列・護岸施設を検出	『西ノ辻遺跡第16次調査概要－遺物編－』　1990　東大阪市教育委員会　（財）東大阪市文化財協会
17	鉄道・道路建設に伴う調査	西石切町３丁目	（財）東大阪市文化財協会	1731㎡	1984・7・9 ～1985・5・1	自然河川跡から古墳時代中～後期の琴状木製品、弥生時代中期のシカの線刻土器などが出土	『西ノ辻遺跡　第17次発掘調査報告書』　1989　東大阪市教育委員会　（財）東大阪市文化財協会 『西ノ辻遺跡第17次発掘調査報告書』　1999　東大阪市教育委員会　（財）東大阪市文化財協会
18	鉄道・道路建設に伴う調査 （５９－３工区）	西石切町３丁目	大阪府教育委員会	545㎡		中世の井戸、弥生時代中期の方形周溝墓、土坑検出 方形周溝墓の周溝から碧玉製管玉出土	『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅲ－東大阪市東石切町・西石切町所在－』1986　大阪府教育委員会　『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅳ－東大阪市東石切町・西石切町所在－』1987　大阪府教育委員会　『鬼虎川遺跡26次・西 ノ辻遺跡18～20次調査概要報告－東大阪市東石切・西石切町所在－』　1995　大阪府教育委員会
19	鉄道・道路建設に伴う調査 （５９－２工区）	西石切町３丁目	大阪府教育委員会	625㎡		中世の集落跡検出 中世の井戸から「蘇民将来之住宅也」の木簡出土	『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅲ－東大阪市東石切町・西石切町所在－』1986　大阪府教育委員会　『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅳ－東大阪市東石切町・西石切町所在－』1987　大阪府教育委員会　『鬼虎川遺跡26次・西 ノ辻遺跡18～20次調査概要報告－東大阪市東石切・西石切町所在－』　1995　大阪府教育委員会
20	鉄道・道路建設に伴う調査 （５９－４工区）	西石切町３丁目	大阪府教育委員会	688㎡		古墳時代前期～中期のヒトや馬の足跡を２面検出 縄文時代の自然河川、弥生時代の自然河川、壺棺墓などを検出	『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅲ－東大阪市東石切町・西石切町所在－』1986　大阪府教育委員会　『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅳ－東大阪市東石切町・西石切町所在－』1987　大阪府教育委員会　『鬼虎川遺跡26次・西 ノ辻遺跡18～20次調査概要報告－東大阪市東石切・西石切町所在－』　1995　大阪府教育委員会
21	道路建設に伴う調査	西石切町1丁目	（財）東大阪市文化財協会	975㎡	1985・12・3 ～1986・2・12	近世の土取り穴、鋤跡、中世の井戸、ピット、弥生時代の溝,ピット、縄文時代のガリーなどを検出	『西ノ辻遺跡第21次発掘調査報告』　1990　（財）東大阪市文化財協会
22	鉄道・道路建設に伴う調査	西石切町３丁目 西石切町１丁目	東大阪市教育委員会 （財）東大阪市文化財協会	520㎡	1986・1・16 ～1986・9・5	弥生時代中期の護岸設備、鎌倉時代の木棺墓を検出 奈良時代の河川から小型海獣葡萄鏡などの祭祀遺物出土	『西ノ辻遺跡第22次発掘調査報告書』　1995　東大阪市教育委員会　（財）東大阪市文化財協会
23	鉄道・道路建設に伴う調査	西石切町３丁目	東大阪市教育委員会 （財）東大阪市文化財協会	682㎡	1987・10・1 ～1988・9・30	弥生時代中期の甕棺墓（小児）、壺棺墓（新生児）、貯蔵穴、鎌倉時代の井戸検出	『西之辻遺跡第23次発掘調査概要』1991　東大阪市教育委員会(財）東大阪市文化財協会 『西之辻遺跡第23次発掘調査報告』1992　東大阪市教育委員会(財）東大阪市文化財協会
24	共同住宅建設に伴う調査	西石切町３丁目 151－１	（財）東大阪市文化財協会	35㎡	1987・8・4 ～1987・8・12	弥生時代中期の溝・柱穴などを検出	『(財）東大阪市文化財協会概報集　1988年度』　1989　（財）東大阪市文化財協会
25	共同住宅建設に伴う調査	西石切町３丁目 170	（財）東大阪市文化財協会	330㎡	1987・9・7 ～1987・10・28	鎌倉時代の掘建柱建物、平安時代末頃の掘建柱建物、古墳時代後期の溝を検出	『埋蔵文化財発掘調査概報集　1998年度(２)』　1999　(財)東大阪市文化財協会
26	ビル建設に伴う調査	西石切町３丁目 155-１	(財)東大阪市文化財協会	67㎡	1989・7・4 ～1989・7・27	中世の溝、落ち込み、弥生時代中期の方形周溝墓を検出 方形周溝墓の周溝から石包丁や蛸壺出土	『(財）東大阪市文化財協会概報集　1989年度』　1990（財）東大阪市文化財協会

27	第二阪奈有料道路建設に伴う調査	西石切町３丁目	(財) 東大阪市文化財協会	110㎡	1989・6・26 ～1989・8・11	弥生時代中期の旧河道、土器棺墓、14世紀の鋤跡を検出	『西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書』 1994 (財) 東大阪市文化財協会
28	ビル建築・道路建設に伴う調査	西石切町３丁目 76－1	(財) 東大阪市文化財協会	390㎡	1989・11・14 ～1990・1・27	中世の井戸、弥生時代中期の方形周溝墓2基検出 6世紀後半の円筒埴輪片出土	『西ノ辻遺跡第28・29次発掘調査報告書』 1999 (財) 東大阪市文化財協会
29	住友銀行西石切支店建築工事に伴う調査	西石切町３丁目 135－1	(財) 東大阪市文化財協会	364㎡	1990・2・8 ～1990・3・30	弥生時代中期の方形周溝墓の周溝部分の延長部を確認 13世紀の土坑墓検出	『西ノ辻遺跡第28・29次発掘調査報告書』 1999 (財) 東大阪市文化財協会
30	第二阪奈有料道路建設に伴う調査	西石切町３丁目	(財) 東大阪市文化財協会	710㎡	1990・6・13 ～1990・10・31	鎌倉時代～室町時代の井戸、土坑、土坑墓、溝、弥生時代中期の溝を検出	『西ノ辻遺跡第30次調査発掘調査報告』 1995 (財) 東大阪市文化財協会
31	工場新築に伴う調査	宝町1615－1	(財) 東大阪市文化財協会	約480㎡	1990・9・10 ～1990・10・20	中世～近世の溝、古墳時代の河川跡、溝、縄文時代晩期の溝検出	『東大阪市文化財協会概報集－1996年度（１）－』 1997 (財) 東大阪市文化財協会
32	第二阪奈有料道路建設に伴う調査	西石切町３丁目	(財) 東大阪市文化財協会	178㎡	1991・1・8 ～1991・6・19	鎌倉～室町時代の集落が東西約350mに拡がることを確認 谷内に古墳時代の水利施設と弥生時代の貯木場検出	『西ノ辻遺跡第32次発掘調査報告』 1996 (財) 東大阪市文化財協会
33	道路建設に伴う調査	西石切町３丁目	(財) 東大阪市文化財協会	542㎡	1992・5・18 ～1993・1・26	弥生時代中期の流路と土器溜りを検出 砂層から滑石製白玉を内蔵した布留式土器の甕出土	『西ノ辻遺跡第33次発掘調査報告』 1996 (財) 東大阪市文化財協会
34	下水管渠築造工事に伴う伴う調査	西石切町３丁目	(財) 東大阪市文化財協会	30㎡	1992・2・10	遺物、遺構なし	『東大阪市下水道関係発掘調査概要報告書－1991年度－』 1992 (財) 東大阪市文化財協会
35	第二阪奈有料道路建設に伴う調査	西石切町５丁目	(財) 東大阪市文化財協会	413㎡	1992・6・15 ～1992・11・10	中世の井戸、縄文時代前期以前のピット検出	『西ノ辻遺跡第35次発掘調査報告』 1993 (財) 東大阪市文化財協会
36	共同住宅建築における排水貯留施設建設に伴う調査	東山町1450－１	(財)東大阪市文化財協会	36㎡	1993・4・19 ～1993・4・30	弥生時代の井戸と古墳時代の掘立柱建物を検出 包含層から滑石製紡錘車出土	『西ノ辻遺跡第36次発掘調査報告』 1994 (財) 東大阪市文化財協会
37	公共下水道管渠築造工事に伴う調査	西石切町３丁目	(財) 東大阪市文化財協会	28㎡	1994・6・8 ～1994・6・13	弥生時代中期のピット群を検出	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告書－1994年度－』 1996 (財) 東大阪市文化財協会
38	共同住宅建設に伴う調査	弥生町1453-４	東大阪市教育委員会	75㎡	1994・10・31 ～1994・11・11	弥生時代の柱穴、溝を検出 弥生時代中期の土器出土	
39	共同住宅建設に伴う調査	西石切町３丁目 175-１他	(財) 東大阪市文化財協会	340㎡	1997・1・6 ～1997・2・21	中世の井戸、溝、弥生時代の溝、ピットを検出	
40	ショッピングセンター建設に伴う調査	弥生町1415－１他	東大阪市教育委員会	対象 1000㎡	1999・5・31 ～1999・6・11	古墳時代のピットと弥生時代の土坑検出 弥生時代中期の土器出土	
41	賃貸共同住宅建設に伴う調査	南荘町507－１他	東大阪市教育委員会	150㎡	1999・11・2 ～1999・11・25	室町時代後半のヒト及び有蹄動物の足跡群、奈良時代～平安時代前半の柱穴群を検出	『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成11年度－』 2000 東大阪市教育委員会
42	賃貸共同住宅建設に伴う調査	弥生町1415-３他	東大阪市教育委員会	855㎡	2000・1・17 ～2000・2・26	弥生時代の方形周溝墓、大溝、柱穴群検出	
43	下水管渠築造工事に伴う調査	東山町1428他	東大阪市教育委員会	1555㎡	2000・5・9 ～2000・10・18	弥生時代の竪穴住居、井戸、奈良時代～平安時代の井戸検出 奈良時代～平安時代の井戸より墨書土器出土	

2．　遺跡の概略

西ノ辻遺跡は弥生時代～室町時代の複合遺跡である。昭和16年に現在の近鉄バス枚岡営業所地点で土器が採集されたことをきっかけに発掘調査が行われた。昭和16～17年に京都大学の小林行雄氏らによって行われた調査で出土した土器は、弥生時代中期末から後期の近畿地方における代表的な資料として取り上げられ、この遺跡は弥生時代後期の標識遺跡として学史的に著名となった。以来今日までに、遺跡の北端を東西に横切る近鉄東大阪線に沿った区域を中心に43回に及ぶ調査が行われている。

その結果、本遺跡は扇状地の性格をもつ低位段丘面及び中位段丘面のうえに形成されたと考えられ、遺跡の北部では東から西にゆるく蛇行する谷状地形が存在していたことがわかった。幅10m、深さ３～５mの谷は縄文時代以降しだいに埋積され、奈良時代には浅い谷になり、中世には消滅することが明らかになっている。

本遺跡で最も古い遺構・遺物は、縄文時代前期以前と考えられる土坑や石器である。また谷内からは縄文時代後期、晩期の土器が出土しており、本遺跡の南端からは縄文時代晩期後半～末期の溝が検出されている。

弥生時代の遺構は遺跡の北側に集中しており、なかでも中期の方形周溝墓や甕棺墓、壷棺墓などが多数検出されている。方形周溝墓の主体部はいずれも後世の削平により残っていないが、周溝からは碧玉製管玉などが出土している。当時の墓域は東西約65m、南北30m以上と推定されており、本遺跡の西側に隣接する鬼虎川遺跡や北側に隣接する植附遺跡とは墓域を接していたことがわかっている。このほかに谷内から中期の貯木場が検出されており、また柱穴や大溝、貯蔵穴、護岸設備などが検出され、多量の弥生土器と石鏃、石包丁などの石器が出土している。これらのことから弥生時代中期～後期にかけて大集落が存在していたことが明らかになっている。

古墳時代以降，平安時代までの遺構は減少する。古墳時代前期～中期のヒト及び馬の足跡や古墳時代末の掘立柱建物が検出されている。また古墳時代中期では、谷内を流れていた河川内から木組暗渠・石組貯水施設及びこれに平行した側溝などの水利遺構が検出されている。この遺構は比較的短い時間で廃絶されたようである。奈良時代には、同じく谷内を流れていた河川に杭を約100本打ち込んだ水流調節の遺構が検出されている。この遺構の付近からは、小型の竈、甕、甑のセットや小型海獣葡萄鏡、人形などの祭祀遺物が散在した状況で出土した。遺構の位置から見て本遺跡の東に隣接する神並遺跡の祭祀場と推定されている。また奈良時代～平安時代前半の柱穴群や平安時代末頃の掘立柱建物が検出されている。柱穴群や掘立柱建物は遺跡の中央から東側にかけて見られることから、集落の中心が遺跡の北側から移動したとも推測できるが、今のところ明らかではない。

鎌倉時代～南北朝時代になると遺跡全体に遺構が見られ、集落の東西が約350mあったことが確認されている。掘立柱建物やヒト及び有蹄動物の足跡群、粘土採掘坑と思われる方形土坑などを検出している。中世の土坑墓・木棺墓も数基検出されており、南北朝時代の木棺墓からは、40歳代の女性の人骨と中国製青磁碗、土師器皿が出土している。その東隣に位置する木棺墓からは40歳代の男性の人骨と土師器皿が出土している。この２基の木棺墓は近親者の墓と推測され、これらの墓は居住域の中か住居に隣接して営まれた屋敷墓と考えられている。また井戸からは「蘇民将来之住宅也」などの木簡や包丁、完形の土器などが出土し、中世の井戸における祭祀を考える資料といえる。

近世以降、遺物の出土は減少し、棚田や畦畔などの耕作関連の遺構が多く検出されている。近世から近代にかけては耕作地として利用されていたようである。以上のような調査成果から、西ノ辻遺跡は縄文時代以降、比較的継続して発展してきた地域と言える。

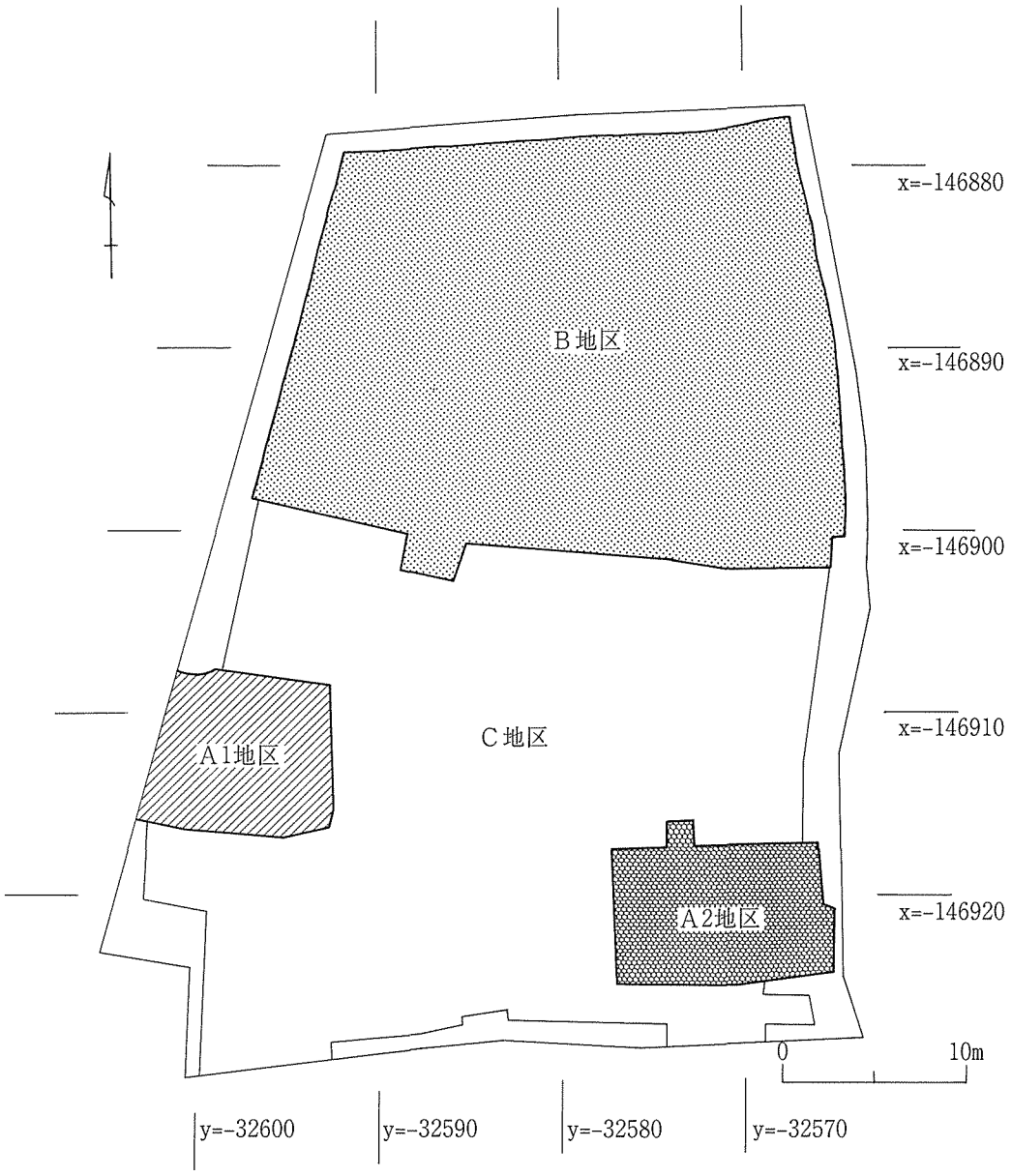
3．　調査の概要

1）　地区割

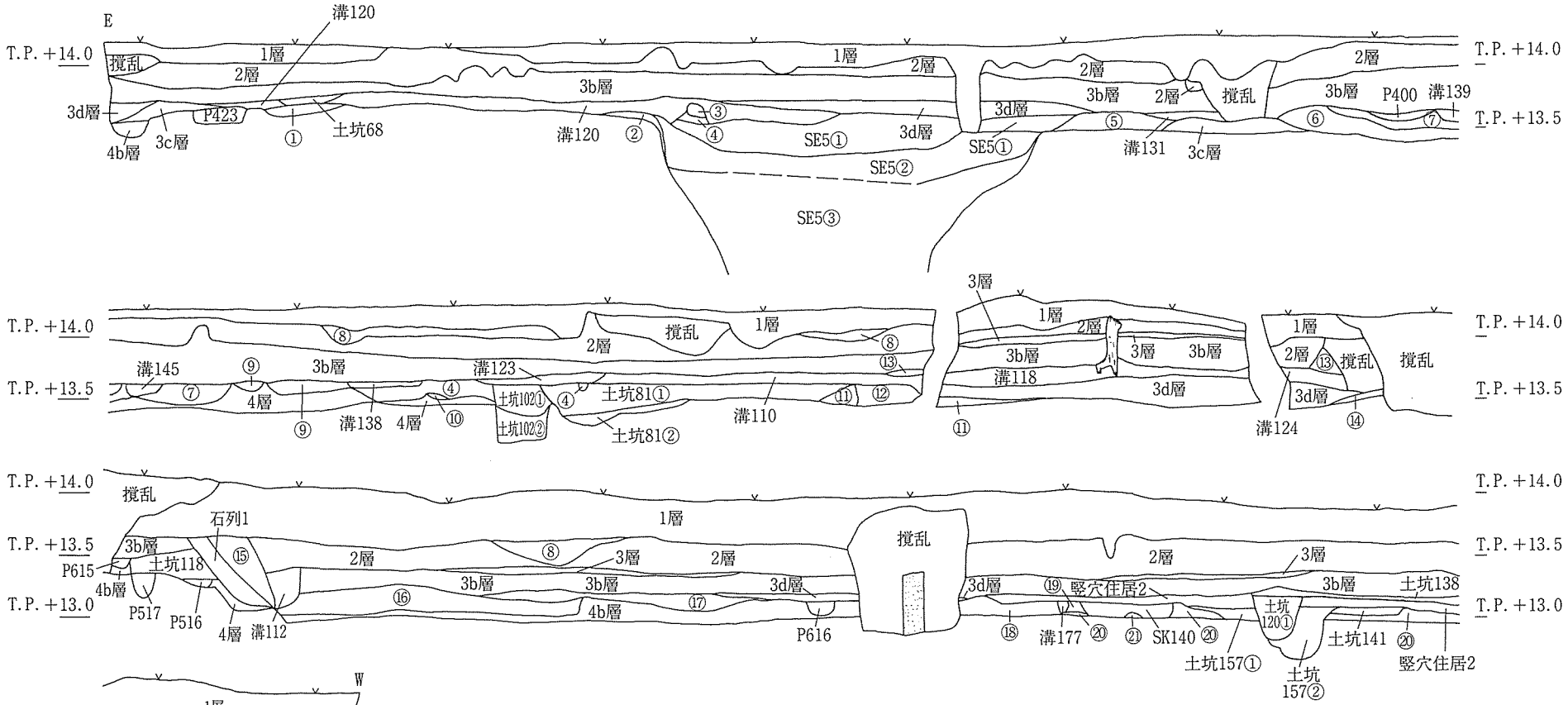
今回の調査は、東西25～38m、南北47mの台形の調査範囲が設定された。調査面積は約1,550㎡である。工事の都合上、調査地の西南にＡ１地区を、南東隅にＡ２地区を設定したのち、調査地の南北でＢ地区、Ｃ地区に分断した。Ａ１、Ａ２地区を調査終了後、Ｂ地区、Ｃ地区の順に調査を行った。なおＢ、Ｃ地区に関しては既往の調査成果と勘案するため、国家座標に基づく基準杭と調査杭を打設し、10mメッシュで遺物の取り上げなどを行った。調査地での各トレンチの位置及び座標位置は、第２図の通りである。

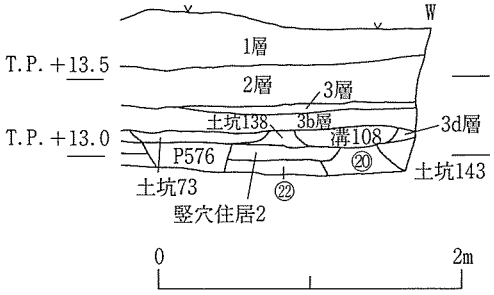
2）　調査の方法

機械掘削を現地表面から調査区西側では0.9m、東側では0.3mまで行った。その後、0.2～0.5mほど人力による掘削を行い、各層ごとに遺物、遺構の検出を行った。また一部では、下層確認のためサブトレンチを設け、４層上面から0.8mほど掘削した。



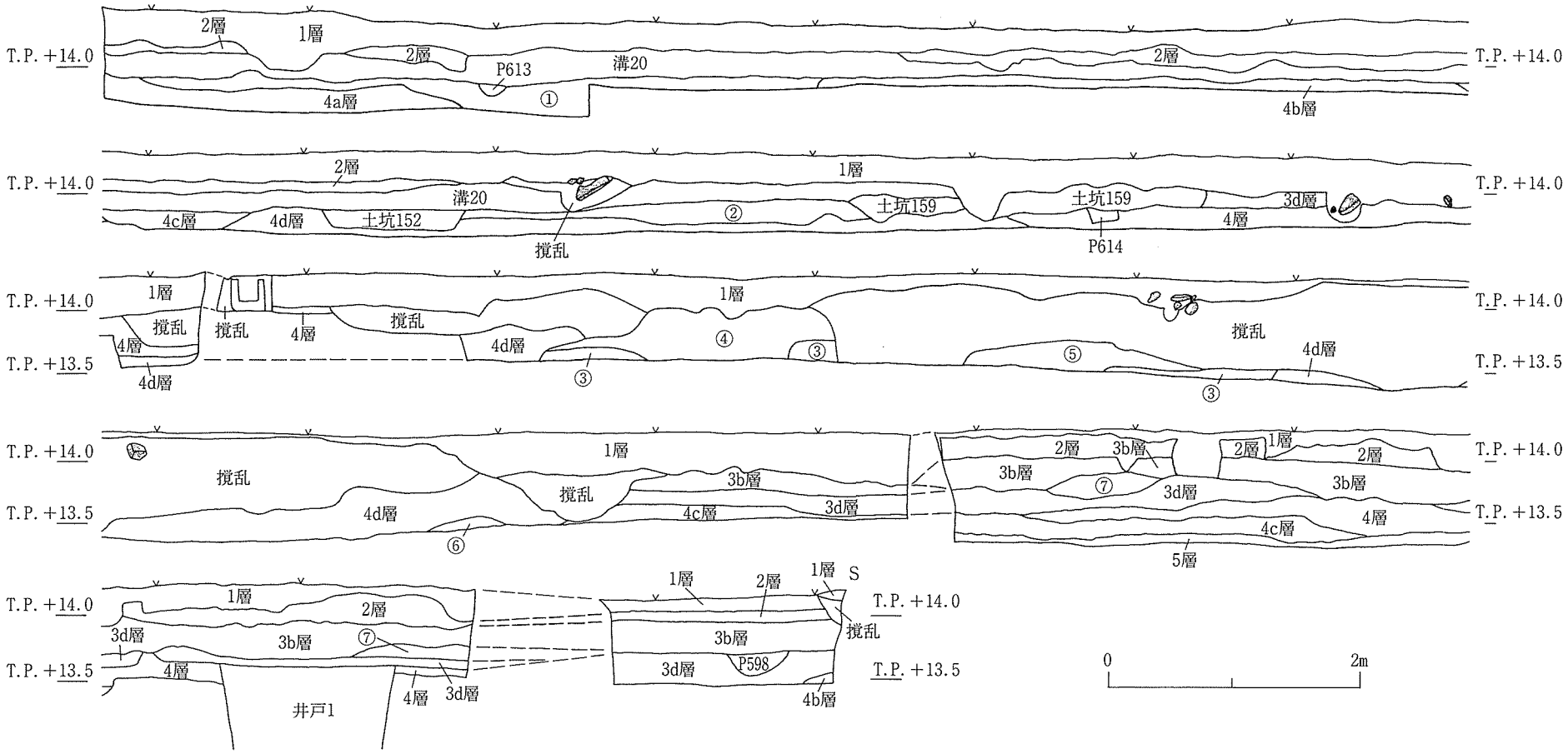
第２図　調査地区割図





第3図　南壁断面実測図

第1層　表土。土管やコンクリートを一部含む。
第2層　にぶい黄褐色（10YR4/3）小礫混じり砂質土。小礫を少量含む。
第3b層　灰黄褐色（10YR4/2）小～中礫混じり砂質土。
第3c層　黒褐色（10YR3/2）小～中礫混じり砂質土。小～中礫を少量含む。
第3d層　黒褐色（2.5Y3/2）小～中礫混じり粘質土。
第4層　褐色（10YR4/4）中～大礫混じり粘質土。黒褐色（10YR3/2）粘質土を含む。中～大礫を多量に含む。
第4b層　黒褐色（10YR3/2）小～中礫混じり粘質土。黒色（2.5YR2/1）粘質土をブロック状に含む。
① 黄灰色（2.5Y4/1）小礫混じり砂質土。粗粒砂を多量に含む。
② 黄灰色（2.5Y4/1）礫混じり砂質土。粗粒砂を多量に含む。小～直径2cm大の礫を含む。
③ 暗褐色（10YR3/3）細粒砂。
④ 黒褐色（10YR3/2）シルト。
⑤ 暗灰黄色（10YR4/1）砂質土。
⑥ 暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土。黒褐色（10YR2/2）砂質土を含む。
⑦ 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）礫混じりシルト。礫を多量に含む。
⑧ オリーブ褐色（2.5Y4/4）小～中礫混じり砂質土。小～中礫を少量含む。
⑨ 暗灰黄色（2.5Y4/2）小礫混じり粘質土。小礫を少量含む。
⑩ 灰黄褐色（10YR4/2）粘質土。
⑪ 黄褐色（2.5Y5/6）シルト。暗灰黄色（2.5Y4/2）シルトをブロック状に含む。
⑫ 黒褐色（2.5Y3/2）小礫混じりシルト。小礫を少量含む。
⑬ 黄褐色（2.5Y5/3）砂質土。褐色（10YR4/4）砂質土を含む。
⑭ 黄灰色（2.5Y4/1）小礫混じりシルト。黄褐色（2.5Y5/4）シルトと小礫を少量含む。
⑮ オリーブ褐色（5Y3/2）砂質土。黄褐色（2.5Y5/6）砂質土を少量含む。
⑯ 黒褐色（2.5Y3/2）小礫混じりシルト。褐色（10YR4/4）シルトを少量含む。
⑰ 黒褐色（10YR3/1）小～中礫混じりシルト。オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルトを含む。小～中礫を少量含む。
⑱ 黒褐色（10YR2/2）小～中礫混じりシルト。小～中礫を多量に含む。
⑲ 黒褐色（2.5Y3/1）粗粒砂混じりシルト。粗粒砂を多量に含む。
⑳ 黄褐色（2.5Y5/3）小礫混じりシルト。黒褐色（2.5Y3/2）シルトを含む。小礫を少量含む。
㉑ 黒褐色（10YR3/1）小礫混じりシルト。
㉒ オリーブ褐色（2.5Y4/3）中礫混じりシルト。黒褐色（10YR3/1）シルトを少量含む。中礫を多量に含む。
ピット423　黒褐色（10YR3/1）小礫混じり粘質土。小礫を少量含む。
土坑68　黒褐色（2.5Y3/2）小礫混じりシルト。小礫は少量含む。
溝120　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土。
井戸5①　黒褐色（10YR3/2）小礫混じりシルト。
②　黒褐色（10YR3/1）小礫混じりシルト。黄褐色（2.5Y5/4）粘土を少量含む。
③　黒褐色（10YR3/1）シルト。一部オリーブ褐色（2.5Y4/6）に変色している。
ピット400　灰黄褐色（10YR4/2）中礫混じり粘質土。オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土を含む。
溝131　オリーブ褐色（2.5Y4/3）小礫混じり砂質土。小礫を少量含む。
溝139　黒褐色（2.5Y3/2）細粒砂混じり粘質土。
溝145　黒褐色（2.5Y3/2）小礫混じり粘質土。細粒砂を多量に含む。
溝138　暗灰黄色（2.5Y4/2）小～中礫混じり粘質土。小～中礫を少量含む。
溝123　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土。
土坑102①　オリーブ黒色（5Y3/2）シルト。
②　オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト。
土坑81①　黒褐色（2.5Y3/1）小礫混じりシルト。オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土を含む。
②　黒褐色（2.5Y3/1）シルト。オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土を多量に含む。
溝110　黒褐色（10YR3/2）砂質土。
溝118　黒褐色（10YR3/2）砂質土。暗褐色（10YR3/4）砂質土をブロック状に含む。
溝124　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土。褐色（10YR4/4）砂質土を少量含む。
ピット615　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土。
土坑118　黒褐色（10YR3/2）シルト。黄褐色（2.5Y5/4）粘質土を含む。
ピット517　黒褐色（10YR2/2）粘質土。暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土をブロック状に含む。
ピット516　黒褐色（10YR2/2）粘質土。炭化物を少量含む。
石列1　暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土。
溝112　オリーブ褐色（5Y3/2）砂質土。
ピット616　黒褐色（10YR3/1）小礫混じりシルト。
竪穴住居2　2　黒褐色（10YR2/2）小礫混じりシルト。
溝177　黒褐色（10YR2/2）小礫混じりシルト。
土坑140　黒褐色（10YR2/2）シルト。黄褐色（2.5Y5/4）粘質土を含む。
土坑157①　黒褐色（2.5Y3/1）小礫混じりシルト。黄褐色（2.5Y5/3）シルトを少量含む。
②　黒褐色（2.5Y3/1）粗粒砂混じりシルト。黄褐色（2.5Y5/3）シルトと粗粒砂を多量に含む。
土坑120　①　黒褐色（10YR2/2）シルト。
②　黒褐色（2.5Y3/2）シルト。褐色（10YR4/4）を含む。炭化物を少量含む。
土坑141　黒褐色（10YR3/1）シルト。
土坑138　黒褐色（10YR2/2）細粒砂混じり粘質土。
ピット576　黒褐色（10YR3/1）小礫混じりシルト。黄褐色（2.5Y5/3）シルトを含む。小礫を少量含む。
土坑73　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土。
溝108　暗灰黄色（2.5Y4/2）小礫混じり砂質土。小礫を少量含む
土坑143　黒褐色（10YR3/1）シルト。黄褐色（2.5Y5/4）シルトをブロック状に含む。



第４図　東壁断面実測図

第１層　表土。土管やコンクリートを一部含む。
第２層　にぶい黄褐色（10YR4/3）小礫混じり砂質土。小礫を少量含む。
第3b層　灰黄褐色（10YR4/2）小礫混じり砂質土。
第3d層　黒褐色（2.5Y3/2）小～中礫混じり粘質土。
第４層　褐色（10YR4/4）中～大礫混じり粘質土。黒褐色（10YR3/2）粘質土を含む。中～大礫を多量に含む。
第4a層　黒褐色（7.5YR3/2）小～中礫混じり粘質土。小礫を多量に含む。中礫を含む。
第4b層　黒褐色（10YR3/2）小～中礫混じり粘質土。黒色（2.5YR2/1）粘質土をブロック状に含む。
第4c層　黒褐色（7.5YR3/2）小～中礫混じり粘質土。褐色（7.5YR4/6）砂質土を含む。
第4d層　黒褐色（2.5Y3/2）細粒砂。黒褐色（10YR3/2）シルトをブロック状に含む。
第５層　黒褐色（5YR3/1）小～中礫混じりシルト。小～中礫は多量に含む。
①　黒褐色（2.5Y3/1）小礫混じりシルト。暗褐色（10YR3/4）砂質土と小礫を少量含む。
②　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）小礫混じり粘質土。小礫は少量含む。
③　黒褐色（2.5Y3/2）細粒砂。
④　黒褐色（2.5Y3/1）礫混じり粘質土。0.5～1.5cm大の礫を多量に含む。
⑤　黒褐色（2.5Y3/1）中礫混じり細粒砂。
⑥　黄褐色（10YR4/2）小礫混じり細粒砂。黒褐色（10YR3/1）シルトを少量含む。
⑦　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）礫混じり粘質土。中～大礫を多量に含む。
溝20　黒褐色（2.5Y3/2）小～中礫混じり粘質土。小礫を多量に含む。
ピット613　黒褐色（10YR2/2）シルト。灰黄褐色（10YR4/2）砂質土を少量含む。
土坑152　黒褐色（2.5Y3/2）中礫混じりシルト。中礫と炭化物を少量含む。
土坑159　黒褐色（2.5Y3/2）小礫混じり粘質土。炭化物を少量含む。
ピット614　黒褐色（7.5YR3/2）小礫混じりシルト。小礫を少量含む。
井戸１　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土。
ピット598　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土。

3） 層序

今回の調査で確認した層位は以下の通りである。

第１層　表土。土管やコンクリートを一部含む。厚さは調査区西側で50cm、東側では10cmである。

第２層　にぶい黄褐色(10YR4/3)小礫混じり砂質土。小礫を少量含む。厚さは10～30cmである。

第３層　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土。調査区西側で厚さは５～30cmである。調査区東南隅では堆積が見られない。

第3a層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)小礫混じり粘質土。暗褐色(10YR3/3)砂質土と黄褐色(2.5Y5/4)砂質土を含む。調査区北西で10～20cmほど堆積している。

第3b層　灰黄褐色(10YR4/2)小礫混じり砂質土。調査地のほぼ全面に堆積しており、厚さは５～20cmである。わずかな中世の遺物に混じって弥生時代～平安時代の遺物が出土している。下面では中世の遺構を検出。

第3c層　黒褐色(10YR3/2)小～中礫混じり砂質土。小～中礫を少量含む。調査区の西端でわずかに見られる。厚さは10～20cm。弥生時代～平安時代の遺物を含む。

第3d層　黒褐色(2.5Y3/2)小～中礫混じり粘質土。調査区の東側に堆積し、南にいくと薄くなる。調査区北東隅で10cm、南東隅で20cmである。弥生時代～平安時代の遺物を含む。

第４層　褐色(10YR4/4)中～大礫混じり粘質土。黒褐色(10YR3/2)粘質土を含む。中～大礫を多量に含む。弥生時代～平安時代の遺構検出面である。調査区の北東隅から南東隅にかけて低くなっている。

第4a層　黒褐色(7.5YR3/2)小～中礫混じり粘質土。小礫を多量に含む。中礫を含む。調査区北西で見られ、厚さは10cmほどである。

第4b層　黒褐色(10YR3/2)小～中礫混じり粘質土。黒色(2.5YR2/1)粘質土をブロック状に含む。調査区東側に堆積する。

第4c層　黒褐色(7.5YR3/2)小～中礫混じり粘質土。褐色(7.5YR4/6)砂質土を含む。調査区北東に堆積する。

第4d層　黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂。黒褐色(10YR3/2)シルトをブロック状に含む。

第５層　黒褐色(5YR3/1)小～中礫混じりシルト。小～中礫を多量に含む。

第5a層　オリーブ黒色(5Y2/2)細粒砂混じりシルト。細粒砂を多量に含む。

第5b層　黒褐色(2.5Y3/2)小礫混じりシルト。小礫を少量含む。

第６層　暗褐色(10YR4/3)シルト。黒褐色(10YR2/2)シルトを少量含む。

4） 遺構

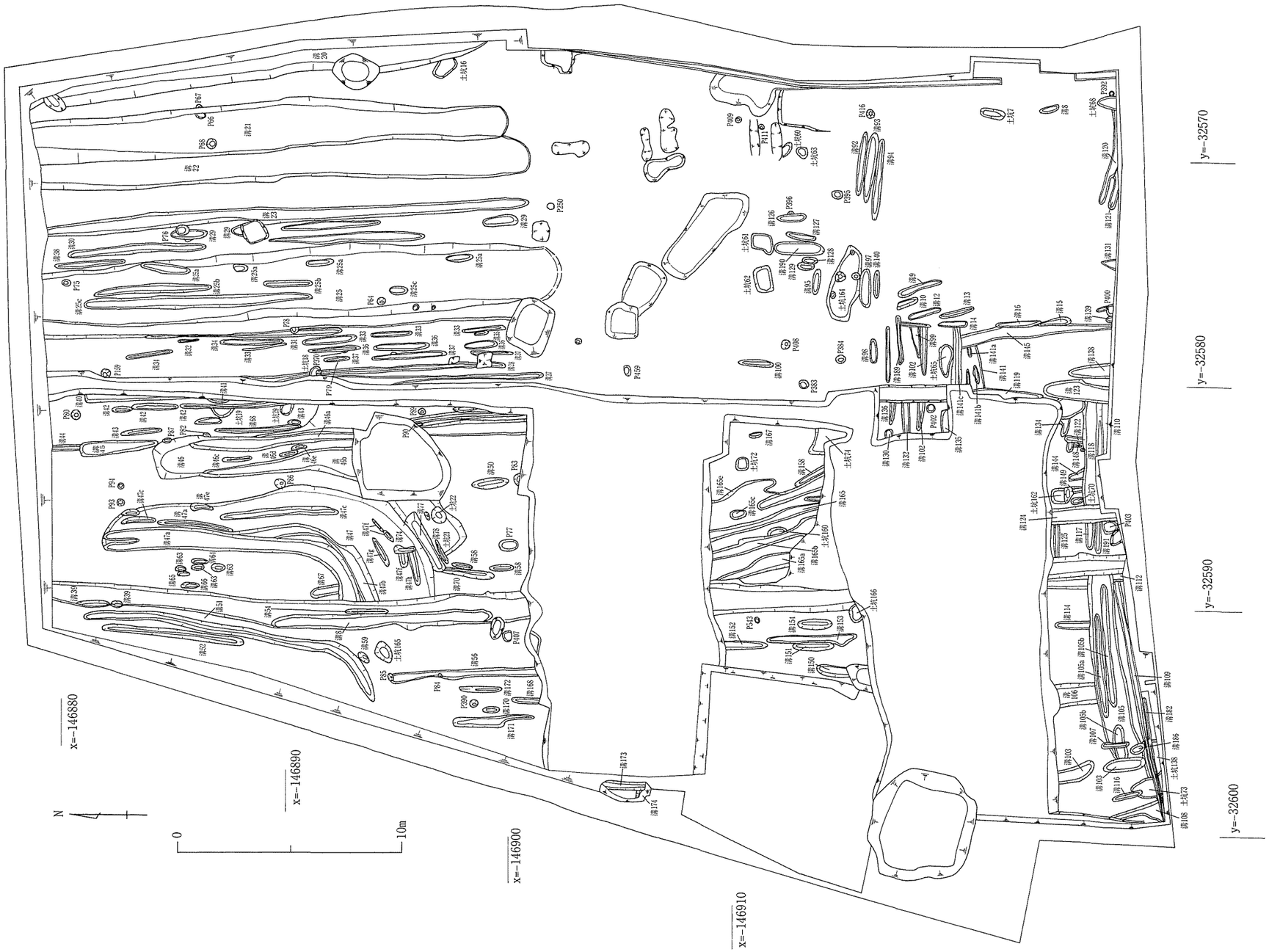
今回、中世の遺構及び弥生時代～平安時代の遺構を検出した。ここでは代表的な遺構について述べることとし、土坑やピットに関しては表２に記す。なお調査の都合上、遺構番号と遺構の該当時期が逆転するが、ここでは現地調査の遺構番号のまま用いることとする。

中世の遺構

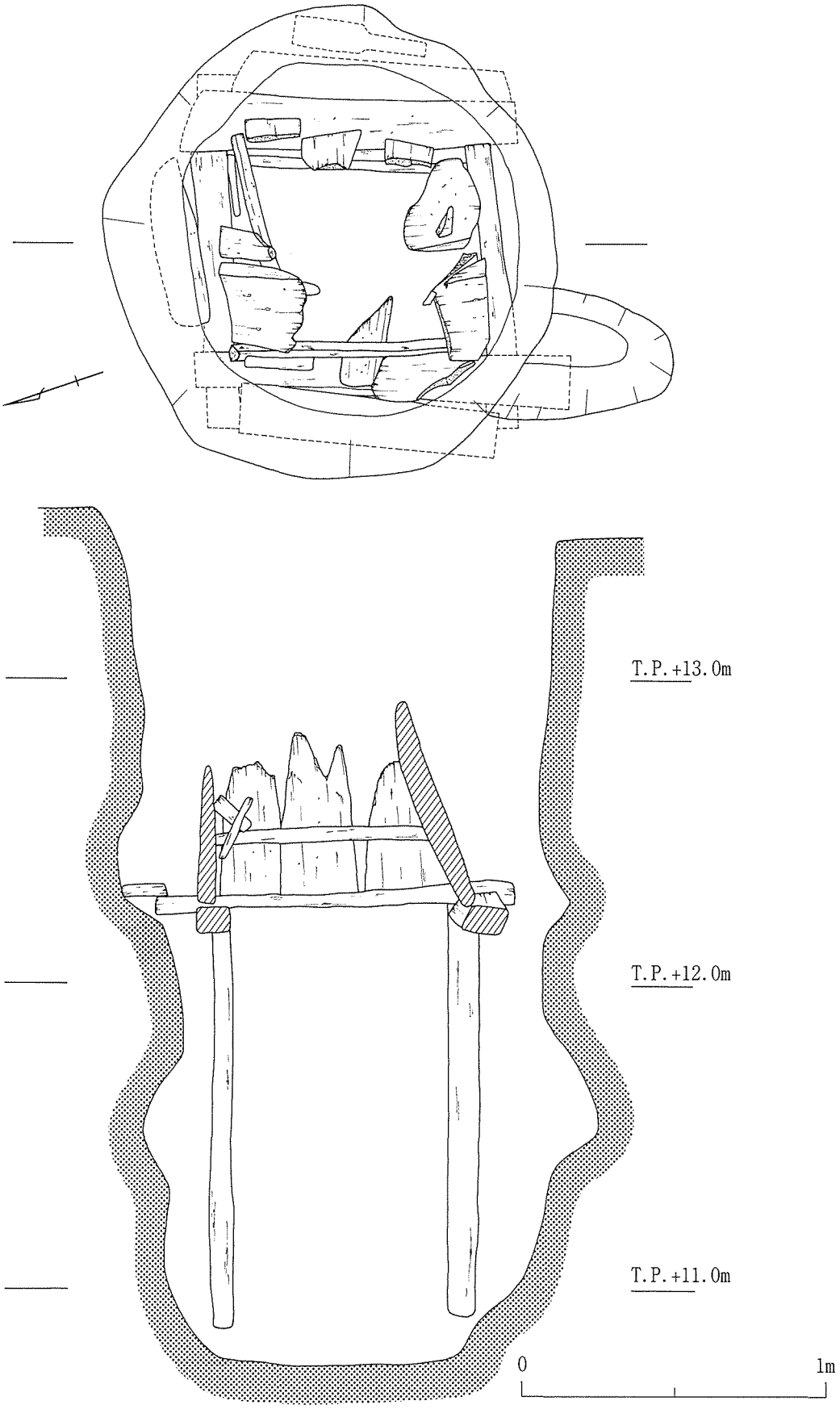
第3b層下面で多数の鋤溝と思われる溝と石列、土坑、ピットなどを検出した。また落ち込みを調査区北側で検出したが、おそらく耕作に伴うものと思われる。

溝

ほとんどが南北方向に走るが、調査区南端になると東西に走る溝も見られる。幅30～50cmほどで、深さは10cmほど、断面は幅広いＵ字形を呈する。耕作に伴う鋤溝と思われる。また中には幅1.5ｍを越すものが数条ある。おそらくこれらも耕作に伴う溝と思われる。弥生土器、土師器、須恵器を含む



第５図　遺構平面実測図（中世）



第6図　井戸1実測図

溝が多いが、中には瓦器片を含むものもある。

石列１

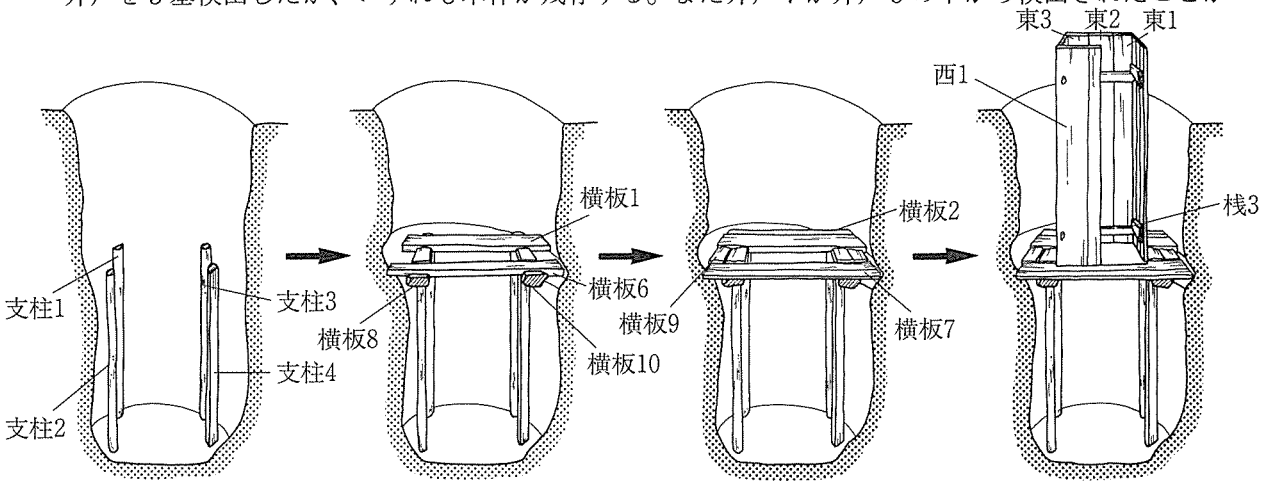
調査区を北から南に走る石列１を検出した。石列は川原石を１～２段積み上げた状況で残存していたが、調査の都合上、機械掘削時に撤去した。石列の東側と西側ではおよそ30cmの高低差があるため、この石列は棚田を区画するためのものと思われる。瓦器、中世土師皿、近世灯明皿、磁器の破片がわずかに出土している。

奈良時代～平安時代の遺構

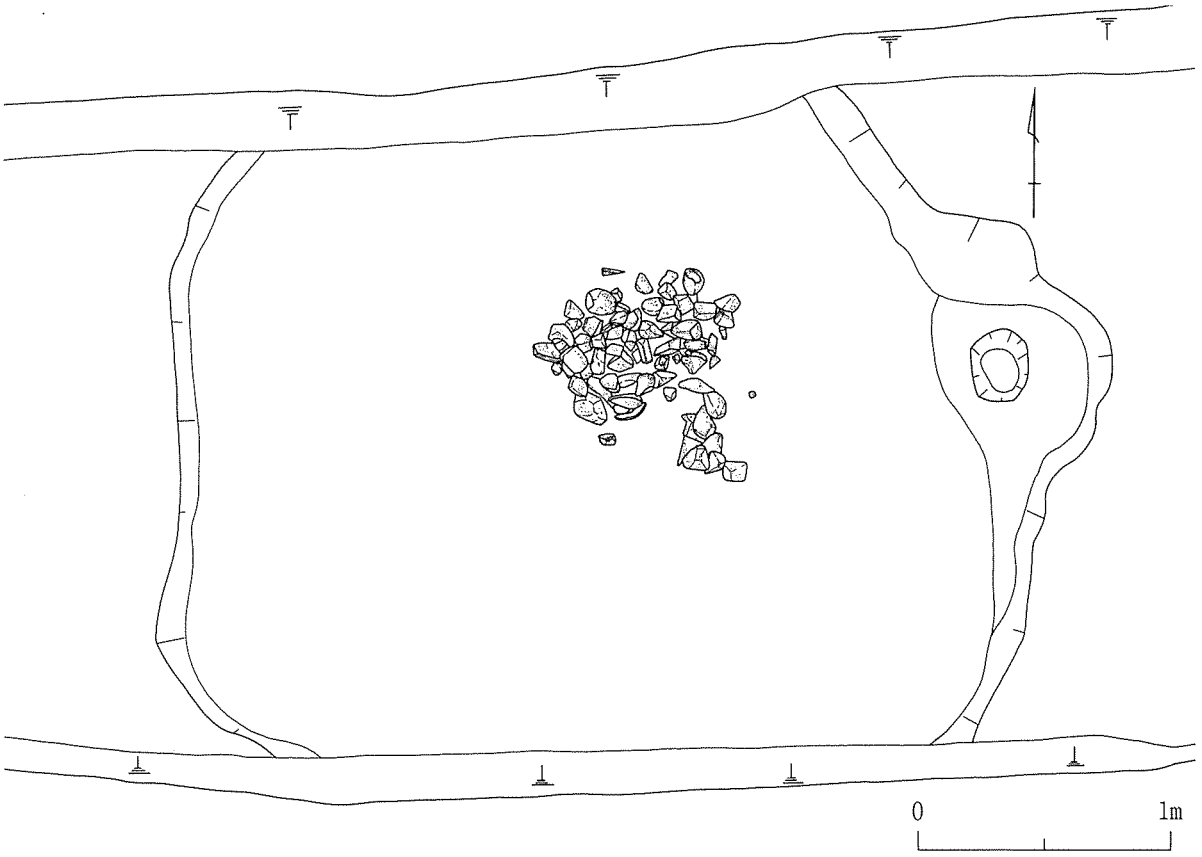
４層上面で、土坑、ピットなどを検出した。また調査区東南隅では井戸を３基検出した。土坑やピットは、検出数は少ないが調査区の南側にやや集中する傾向が見られる。

井戸

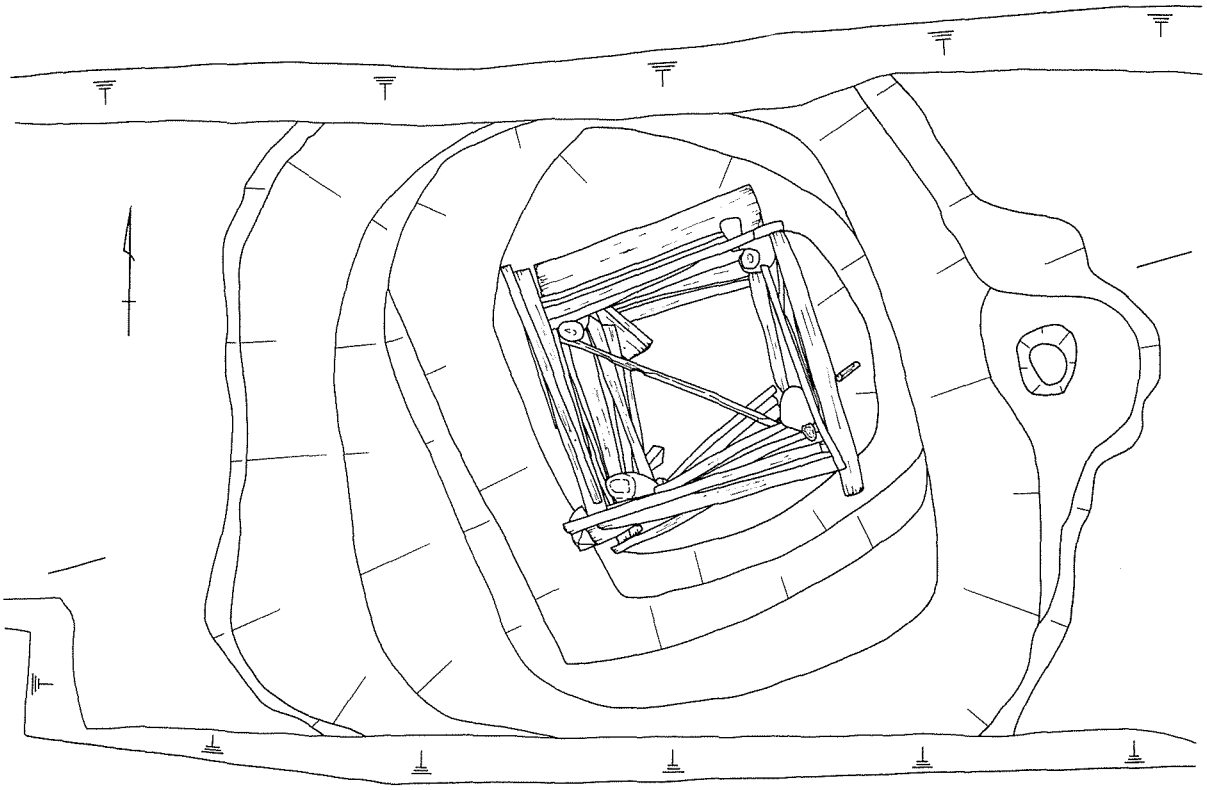
井戸を３基検出したが、いずれも木枠が残存する。また井戸７が井戸５の下から検出されたことか

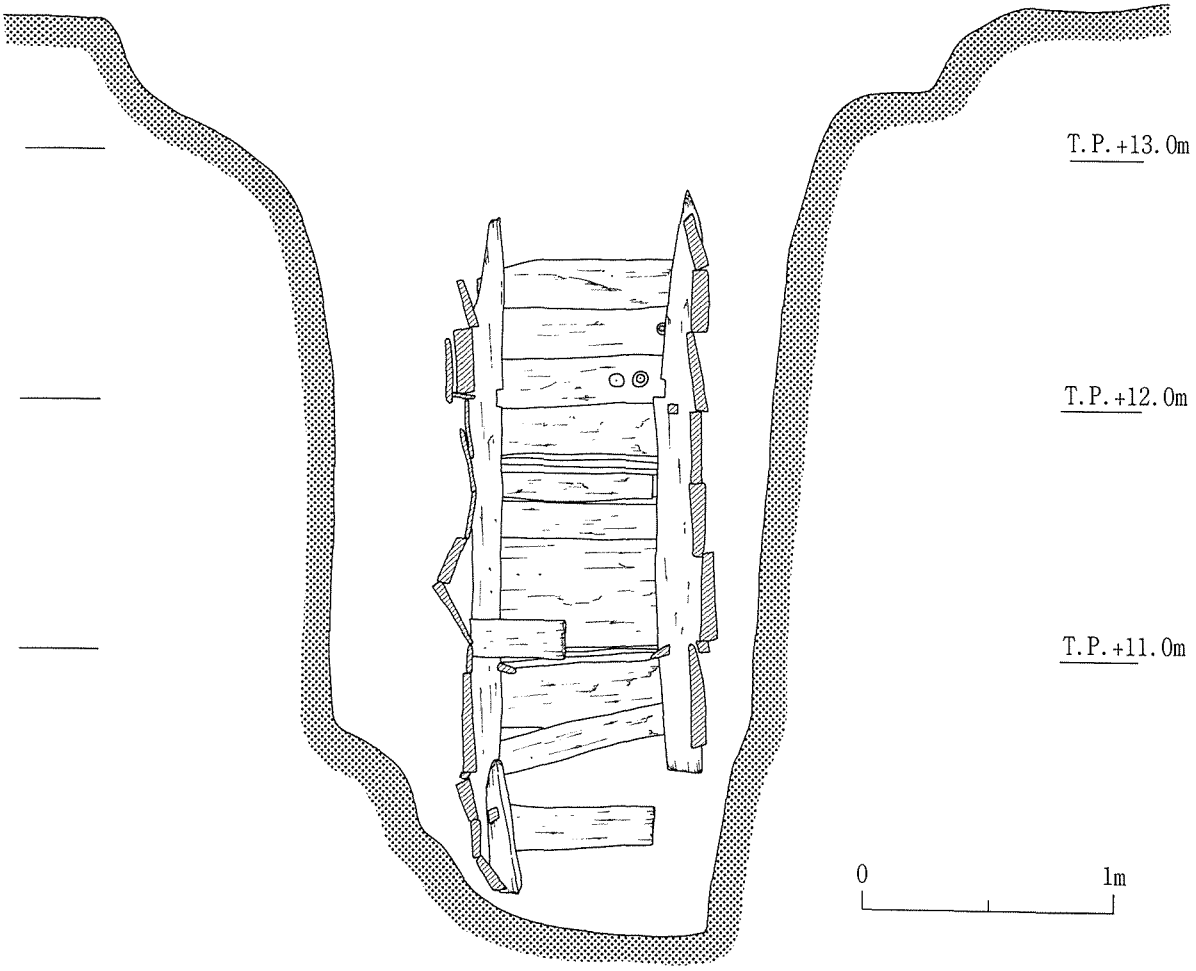


第７図　井戸１構築復元図



第８図　井戸５集石状況実測図





第9図　井戸5・7実測図

ら井戸５は井戸７を造り直し使用した井戸であることがわかった。

井戸１は調査区南東隅で検出した。直径約1.6m、深さ2.5mの円形の井戸である。井戸枠は、まず井戸の底に４本の支柱を打ち、その上に組み板を用い横に板を並べ、さらにその上部に板を縦方向に組んだ約0.7m四方の縦板組横桟どめの井筒になっている(図７)。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)粘質土である。井戸枠内は2層に分かれる。上層は埋土で黒褐色(2.5Y3/2)粘質土、下層は堆積土と思われ、黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂混じり粘質土で、細粒砂を多く含む。上層から土師器の甕や竈が、井戸の底からは十数点の土師器甕や口縁を打ち欠いた須恵器壷、曲物などが出土している。また下層から斎串が出土していることからも、井戸１では何らかの祭祀が行われていたと推測される。このほかに下層からはモモなどの種や小動物の骨などが出土しており、出土遺物から奈良時代末～平安時代初めに属する遺構である。

井戸５、７は井戸１から西南に３ｍほど離れたところで検出した。平面は一辺約３ｍの隅丸方形を呈し、深さは約3.7ｍになる。井戸５は３層に分層でき、①、②層は井戸の埋土、③層は掘り方の埋土と考えられる。①層は黒褐色(10YR3/2)小礫混じりシルト、②層は黒褐色(10YR3/1)小礫混じりシルトで、黄褐色(2.5Y5/4)粘土を少量含む。③層は黒褐色(10YR3/1)シルト、一部オリーブ褐色(2.5Y4/6)に変色している。②層上面から集石を検出し、その下面からは井戸枠を検出した。おそらくこの集石は井戸を埋めた時に伴うものと思われる。集石内から平瓦と土師器皿が出土している。①～②層からは土師器や須恵器、③層からは土師器のミニチュア土器などが出土している。井戸枠は４本柱を立てそれに横板を添わす横板組隅柱どめである。隅柱がずれないように途中２箇所、四方に桟を入れ、最上面の木枠から深さ1.6ｍのところの木枠内に斜め方向のかましが入っていた。また南側の横板を補強するために木枠の外側に縦板を立てかけている。井戸枠内は２層に分層でき、①層はオリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂混じりシルトで、細粒砂をブロック状に含む。②層はオリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂混じりシルトで細粒砂を多量に含み、また小～大礫含む。井戸枠内①層からは土師器や須恵器が出土している。また墨書土器が数点出土しているが、これらは井戸７にともなう可能性がある。これらの遺物から平安時代初頭、井戸１よりやや新しいものと推測する。井戸７は井戸５の下面から検出した。埋土は掘り方が井戸５③層と、井戸枠内が井戸枠内②層に相当する。現存した木枠から井戸５同様横板組隅柱どめと考えられる。ただ隅柱と東側の横板は残っておらず、隅柱には短い支柱に桟を渡し西側の横板を支えていた。このことから、井戸７を造り替える際、井戸７の木枠は一部再利用されたと考えられる。また造り替える際に、井戸を一回り大きくしたことが木枠と掘り方からわかる。

土坑

0.7～1mほどの方形の土坑を検出した。これらは柱穴の可能性が高いが、建物の復元には至らなかった。

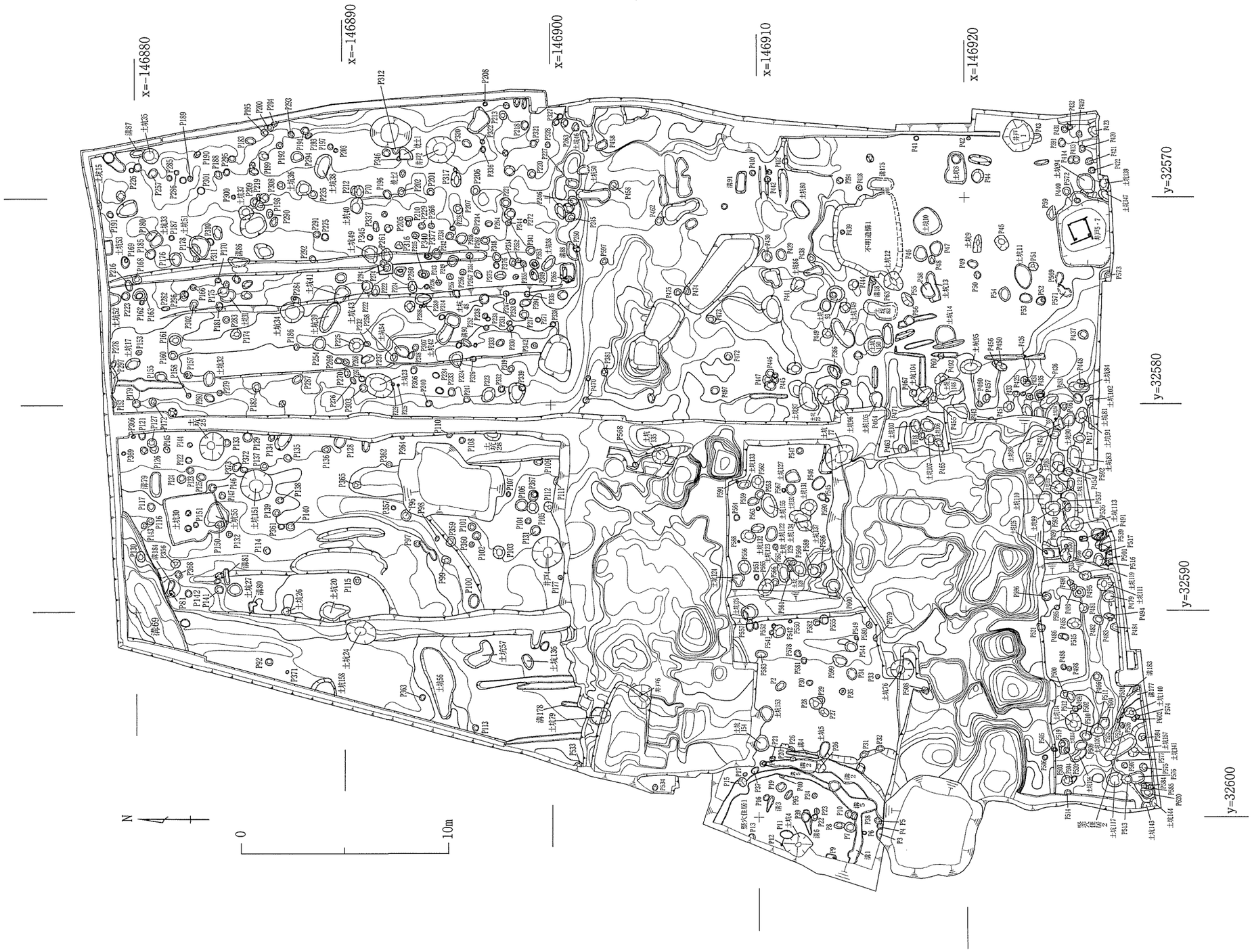
土坑126を調査区南側で検出した。撹乱による一部切断されているが、長さ1m、幅0.6mの方形を呈すると思われる。底面が10cmほど落ち込む所に、２個の焼石を検出した。方形の焼石は上面のみ、円形の焼石は全面的に火をうけているが、土坑の壁には焼けた痕跡が見られなかった。

古墳時代の遺構

溝や土坑、ピット、不明遺構を検出した。

溝

溝69を調査区北西隅で検出した。東西7.5m以上、幅3m以上で、調査区北西隅に向かって緩やかに落ち込む。埋土は２層に分層でき、①層は黒褐色(2.5Y3/2)少礫混じり粘質土で、暗褐色(10YR4/3)粘質土を含む。②層は黒褐色(10YR3/2)小～中礫混じり粘質土で、暗褐色(10YR4/3)粘質土を含む。土師



第10図　遺構平面実測図（弥生～平安時代）

器、須恵器、弥生土器などが多量に出土した。

土坑

調査区の南側でややまとまって検出した。0.7～1mほどの土坑が多く、柱穴の可能性があるが、建物の復元には至らなかった。土師器、須恵器、製塩土器などが出土しており、主に古墳時代中期～後期のものである。

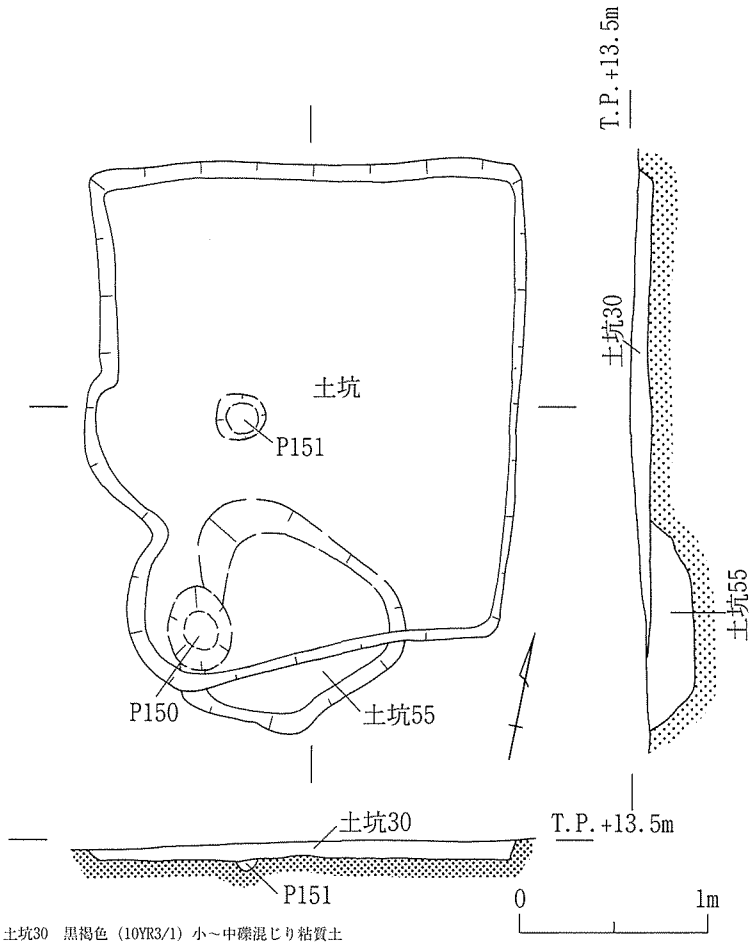
土坑30は、調査区北西で検出した、長さ約2.6m、幅約2.3mのほぼ方形の土坑である。深さも7cmと浅い。土師器や須恵器の破片が出土しているが、性格などは不明である。

ピット

柱根などをもつピットは検出できなかった。土師器、須恵器、製塩土器などが出土しており、多くが古墳時代中期～後期に属す。

不明遺構

調査区東南で1基検出した。平面は隅丸の台形を呈すると思われる。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)小～中礫混じりシルトで、褐色(7.5YR4/6)砂質土を含む。遺構内からは土師器片や製塩土器がわずかに出土した。その性格・時期などは不明である。



土坑30　黒褐色（10YR3/1）小～中礫混じり粘質土
土坑55　黒褐色（10YR2/2）小礫混じりシルト。灰黄褐色（10YR4/2）砂質土や炭化物を含む。
ピット150　黒褐色（10YR2/2）シルト。にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土を含む。
ピット151　黒褐色（10YR2/2）シルト。褐色（10YR4/6）粘質土と炭化物を含む。

第11図　土坑30実測図

弥生時代の遺構

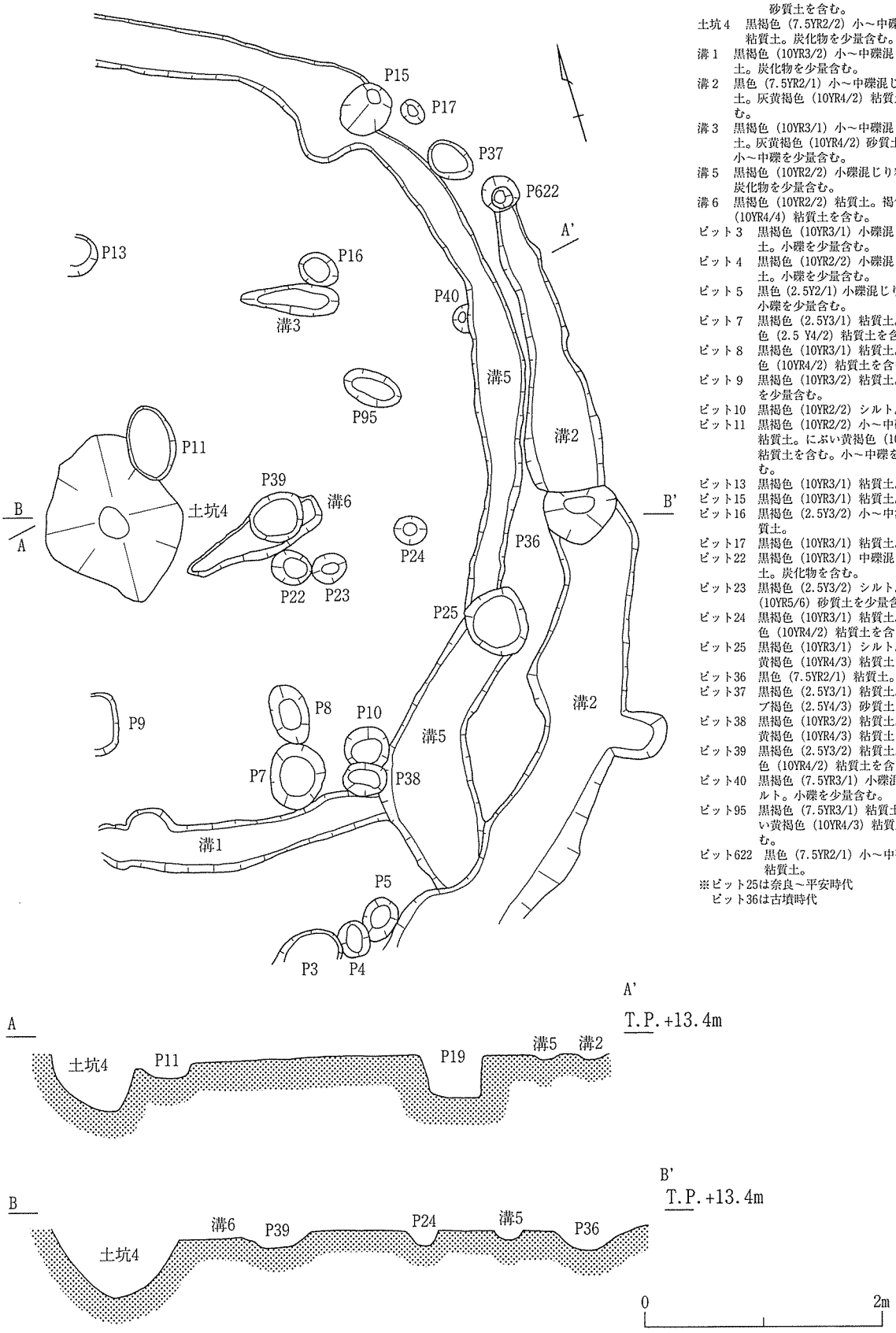
4層上面で竪穴住居、井戸、土坑、溝、焼土、ピットなどを検出した。

竪穴住居

調査地西南隅で円形の竪穴住居を2棟検出した。竪穴住居1は住居の東半分を検出した。残念ながら西半分は調査区に隣接する道路によりすでに削平されている。中央に炉穴があり、周溝が二重に巡ることから、一度拡張していることが推測できる。当初は直径約7.6m、拡張時には直径10mほどになる。住居跡からは壷、甕、高坏、器台などの多量の弥生土器とともに砥石、石鏃、削器、石槍などが出土しているが、この住居は弥生時代後期のものと思われる。竪穴住居2は住居の北端をわずかに検出した。古墳時代の土坑により壊され、周溝もわずかに検出できたのみである。直径は7mほどになると思われる。遺物はあまり出土しておらず、時期の確定は難しい。

井戸

弥生時代の井戸も3基検出している。いずれも素掘りで、円形の井戸である。井戸2は直径1.2m、深さ1.3mほどである。3層に分層でき、①、②層は井戸の埋土、③層は井戸の堆積層と思われる。②層の下面では井戸に敷き詰められたかのような集石状況が見られた。①層～②層にかけて多量の弥



竪穴住居１　黒褐色（7.5YR3/1）小～中礫混じり粘質土。暗褐色（10YR3/3）砂質土を含む。
土坑４　黒褐色（7.5YR2/2）小～中礫混じり粘質土。炭化物を少量含む。
溝１　黒褐色（10YR3/2）小～中礫混じり粘質土。炭化物を少量含む。
溝２　黒色（7.5YR2/1）小～中礫混じり粘質土。灰黄褐色（10YR4/2）粘質土を含む。
溝３　黒褐色（10YR3/1）小～中礫混じり粘質土。灰黄褐色（10YR4/2）砂質土を含む。小～中礫を少量含む。
溝５　黒褐色（10YR2/2）小礫混じり粘質土。炭化物を少量含む。
溝６　黒褐色（10YR2/2）粘質土。褐色（10YR4/4）粘質土を含む。
ピット３　黒褐色（10YR3/1）小礫混じり粘質土。小礫を少量含む。
ピット４　黒褐色（10YR2/2）小礫混じり粘質土。小礫を少量含む。
ピット５　黒色（2.5Y2/1）小礫混じり粘質土。小礫を少量含む。
ピット７　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土。暗灰黄色（2.5 Y4/2）粘質土を含む。
ピット８　黒褐色（10YR3/1）粘質土。灰黄褐色（10YR4/2）粘質土を含む。
ピット９　黒褐色（10YR3/2）粘質土。炭化物を少量含む。
ピット10　黒褐色（10YR2/2）シルト。
ピット11　黒褐色（10YR2/2）小～中礫混じり粘質土。にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土を含む。小～中礫を少量含む。
ピット13　黒褐色（10YR3/1）粘質土。
ピット15　黒褐色（10YR3/1）粘質土。
ピット16　黒褐色（2.5Y3/2）小～中混じり粘質土。
ピット17　黒褐色（10YR3/1）粘質土。
ピット22　黒褐色（10YR3/1）中礫混じり粘質土。炭化物を含む。
ピット23　黒褐色（2.5Y3/2）シルト。黄褐色（10YR5/6）砂質土を少量含む。
ピット24　黒褐色（10YR3/1）粘質土。灰黄褐色（10YR4/2）粘質土を含む。
ピット25　黒褐色（10YR3/1）シルト。にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土を含む。
ピット36　黒色（7.5YR2/1）粘質土。
ピット37　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土。オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土を含む。
ピット38　黒褐色（10YR3/2）粘質土。にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土を含む。
ピット39　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土。灰黄褐色（10YR4/2）粘質土を含む。
ピット40　黒褐色（7.5YR3/1）小礫混じりシルト。小礫を少量含む。
ピット95　黒褐色（7.5YR3/1）粘質土。にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土を含む。
ピット622　黒色（7.5YR2/1）小～中礫混じり粘質土。
※ピット25は奈良～平安時代
　ピット36は古墳時代

第12図　竪穴住居１実測図

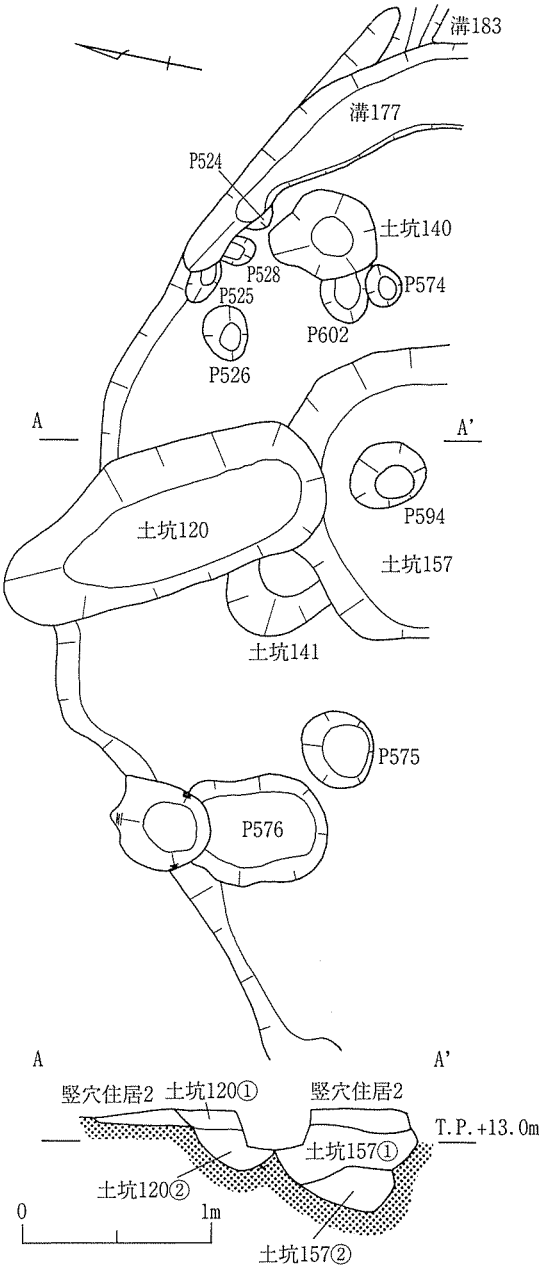
生土器が出土したが、③層ではあまり遺物は見られなかった。またイノシシの顎骨も出土している。出土遺物から弥生時代中期の井戸と思われる。井戸４は直径1.5m、深さ1.6mほどの井戸である。埋土は単層であったが、多量の弥生土器や石槍が出土しており、弥生時代中期の属す。井戸６は直径約１m、深さ1.8mほどの井戸だが、上部を現代の撹乱により削平されており、本来の深さは2.1mほどではないかと推測する。この井戸も３層に分けられ、③層は井戸の堆積土と思われる。②層からは多量の弥生土器の壷、甕、高杯などが出土した。同じく弥生時代中期に属す。

土坑

多数の土坑を検出したが、ここでは直径と深さが１m前後の円形土坑について取り上げ、便宜上、「井戸状土坑」と呼ぶことにする。この「井戸状土坑」は調査区内で10基検出されている。

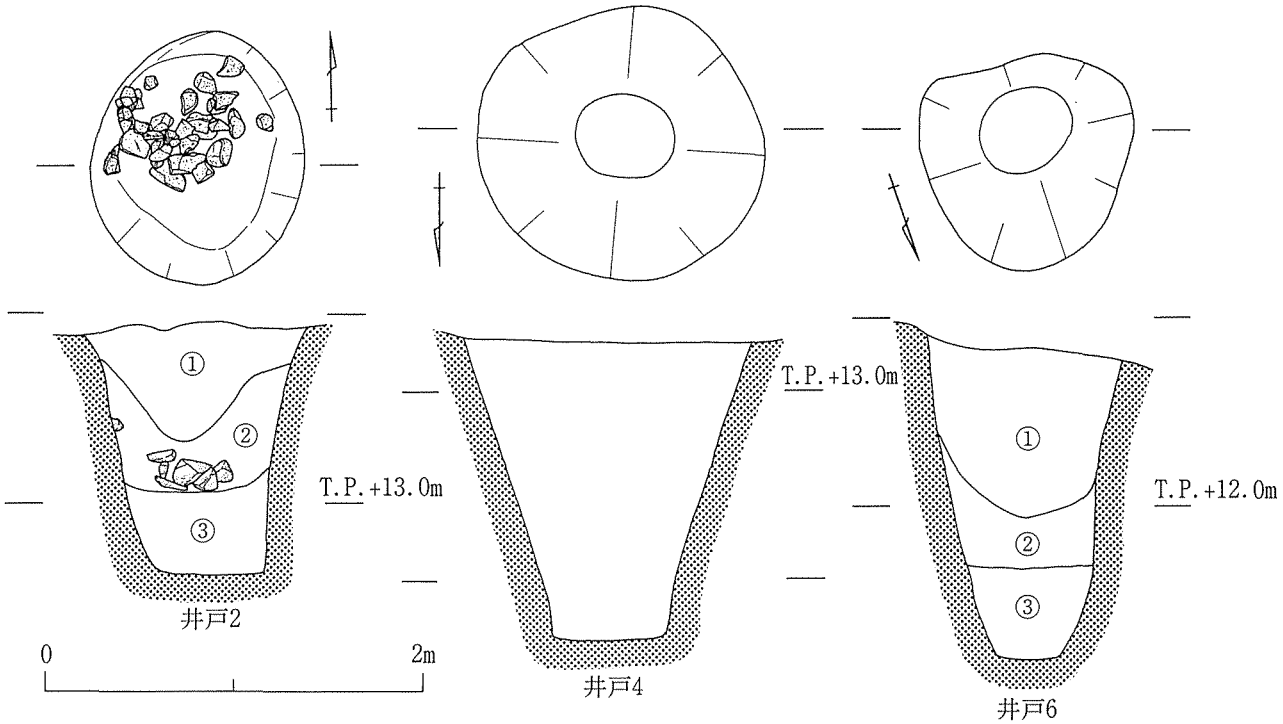
土坑23は長径1.3mの楕円形を呈し、深さは0.8mほどである。単層だが、検出面より20cmほどのところで弥生土器の高杯、鉢、壷などがまとまって出土した。土坑24は、「井戸状土坑」に分類した中では最も大きく、平面が長径1.5mの楕円形を呈し、深さは約1.5mである。埋土は２層に分層できる。打製石槍や動物の骨が出土している。土坑25は直径約1.3mで、深さ約0.8m。埋土は2層に分層できる。土坑34は直径約１mで、深さ約1.1mで単層である。土坑35は直径0.8mほどで、深さは約0.8mである。弥生土器とともに石鏃が出土している。土坑76は長径1.1mの楕円形で、深さは約0.9m。埋土は２層に分層できる。土坑77は、遺構の東側と西側を現代の撹乱によって削平されているが、平面形は直径1.4mほどの円形に復元できる。深さは約1.1m。埋土は2層に分層でき、①層からは多くの弥生土器が出土したが、②層はあまり遺物を含まなかった。土坑79は直径約0.9mで、深さは約0.9m。埋土は３層に分層できる。イノシシの顎骨が出土している。土坑113は直径0.8mで、深さ0.7m。単層で、弥生土器とともに磨製石包丁が出土している。土坑135は直径、深さともに約0.8mである。単層で、動物の骨が出土している。土坑151は直径1.5mで、深さ1.1mである。埋土は３層に分層でき、①層と③層より動物の歯や骨が出土している。

これら「井戸状土坑」はほぼ炭化物を含み、多量の弥生



竪穴住居２　黒褐色（10YR2/2）小礫混じりシルト。
土坑120①　黒褐色（10YR2/2）シルト。
②　黒褐色（2.5Y3/2）シルト。褐色（10YR4/4）シルトを含む。炭化物を少量含む。
土坑140　黒褐色（10YR2/2）シルト。黄褐色（2.5Y5/4）粘質土を含む。
土坑141　黒褐色（10YR3/1）シルト。
土坑157①　黒褐色（2.5Y3/1)小礫混じりシルト。黄褐色（2.5Y5/3）シルトを少量含む。
②　黒褐色（2.5Y3/1）粗粒砂混じりシルト。黄褐色（2.5Y5/3）シルトと粗粒砂を多量に含む。
溝177　黒褐色（10YR2/2）小礫混じりシルト。
溝183　黒褐色（2.5Y3/1）小礫・細粒砂混じりシルト。
ピット524　黒褐色（2.5Y3/2）礫混じり粘質土。
ピット525　黒褐色（10YR3/1）粘質土。
ピット526　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土。炭化物を少量含む。
ピット528　黒褐色（2.5Y3/1）シルト。
ピット574　黒褐色（2.5Y3/1）シルト。炭化物を少量含む。
ピット575　黒褐色（10YR3/1）小礫混じりシルト。にぶい黄褐色（10YR4/3）シルトを含む。
ピット576　黒褐色（10YR3/1）小礫混じりシルト。黄褐色（2.5Y5/3）シルトを含む。小礫を少量含む。
ピット594　オリーブ黒色（5Y3/1）シルト。
ピット602　黒褐色（2.5Y3/2）小礫混じりシルト。
※土坑120は古墳時代

第13図　竪穴住居２実測図



井戸2① 黒褐色（10YR2/2）小礫混じりシルト。炭化物を少量含む。
② 黒褐色（10YR2/2）シルト。灰黄褐色（10YR4/2）粘質土をブロック状に含む。
③ オリーブ黒色（5Y3/1）シルト。オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土を多量に含む。炭化物も含む。

井戸4 黒褐色（10YR2/2）小礫混じりシルト。褐色（10YR4/4）粘質土をブロック状に含む。炭化物・小礫を少量含む。

井戸6① 黒褐色（10YR3/1）シルト。
② 黒褐色（5Y2/1）粘土。
③ オリーブ褐色（5Y3/1）小礫混じり細粒砂。黒褐色（5Y2/1）粘土を多量に含む。

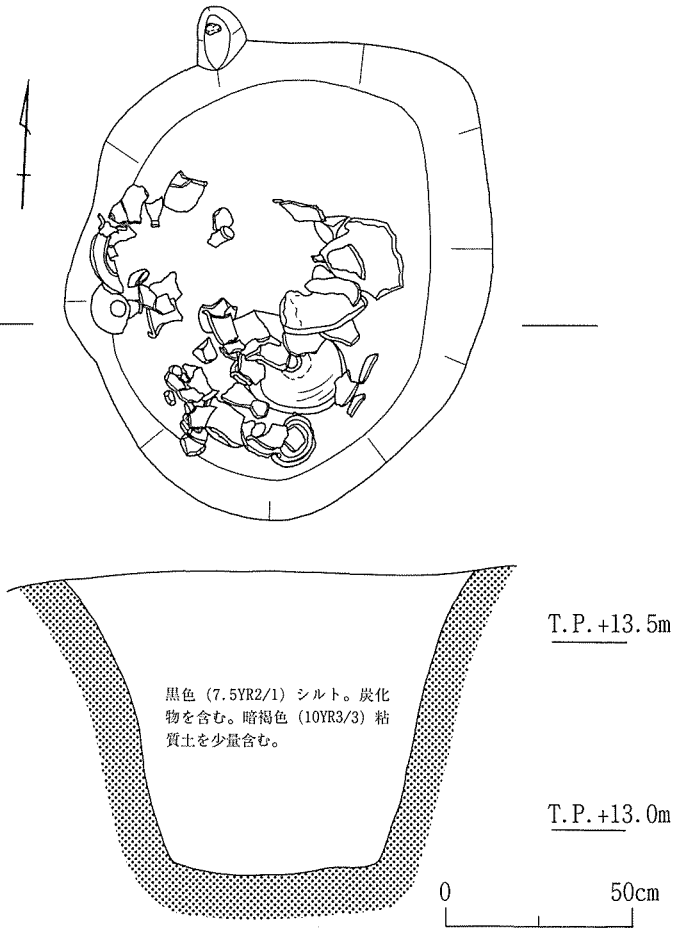
第14図　井戸２・４・６実測図

土器が出土することが共通している。出土土器よりいずれも弥生時代中期のものと思われる。これら遺構の形状はきわめて井戸に近く、土坑24のように井戸の可能性が高いものもあるが、ほとんどが井戸にするにはやや深さが足りないように思われる。このような土坑は昭和16～17年の調査や第23次調査、鬼虎川遺跡第７次調査でも検出された土坑に酷似しており、鬼虎川遺跡第７次調査では土坑内から未成品の木製品が出土したことから貯蔵穴と考えられている。

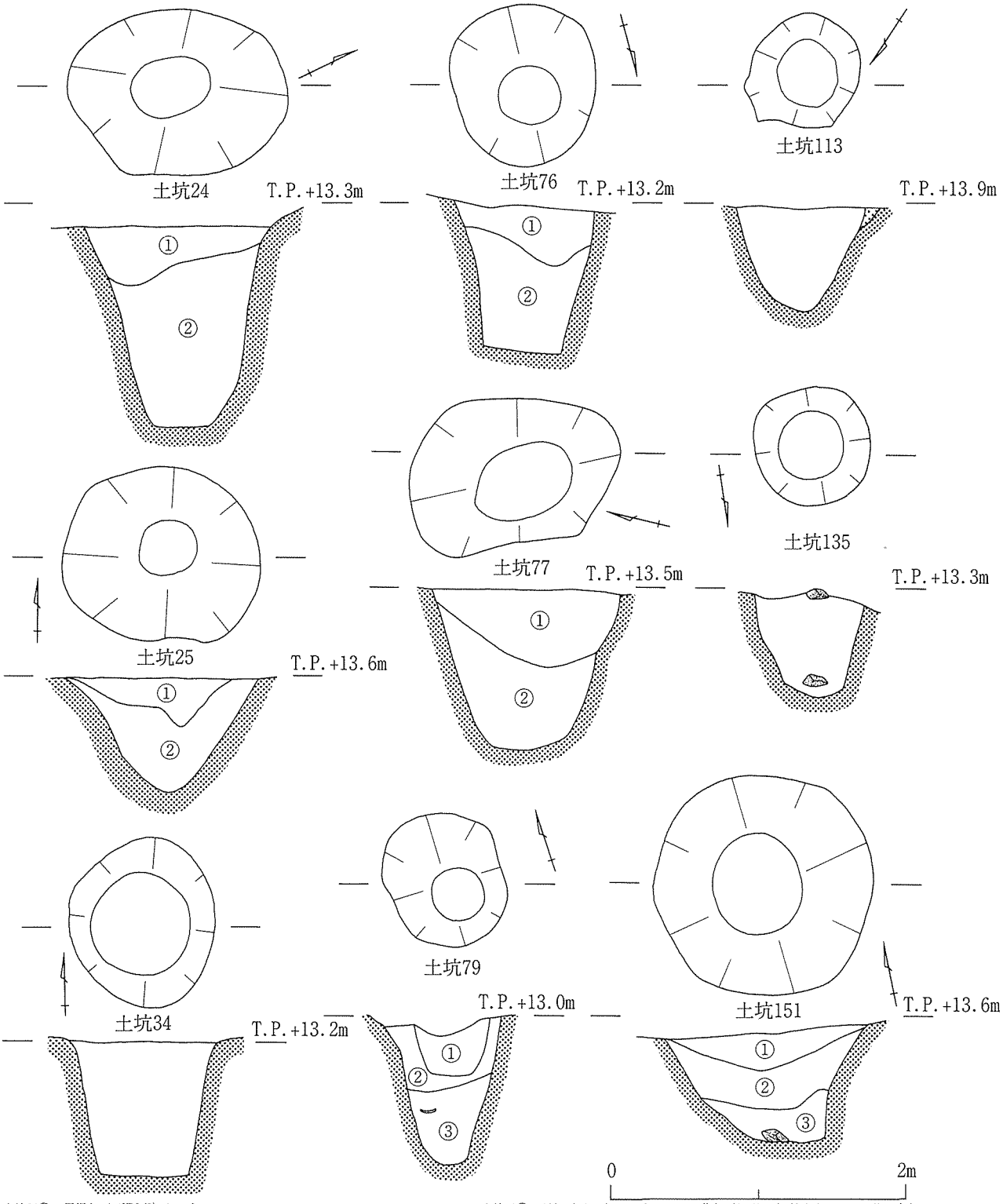
土坑12は、長径１ｍ、短径約0.8ｍの楕円形土坑である。断面は台形を呈し、深さは約0.7ｍである。土坑37は直径0.6ｍほどの円形土坑で、深さは40cmほどである。ともに大量の弥生土器が出土し、弥生時代中期に属すと思われる。

ピット

400以上のピットを検出した。

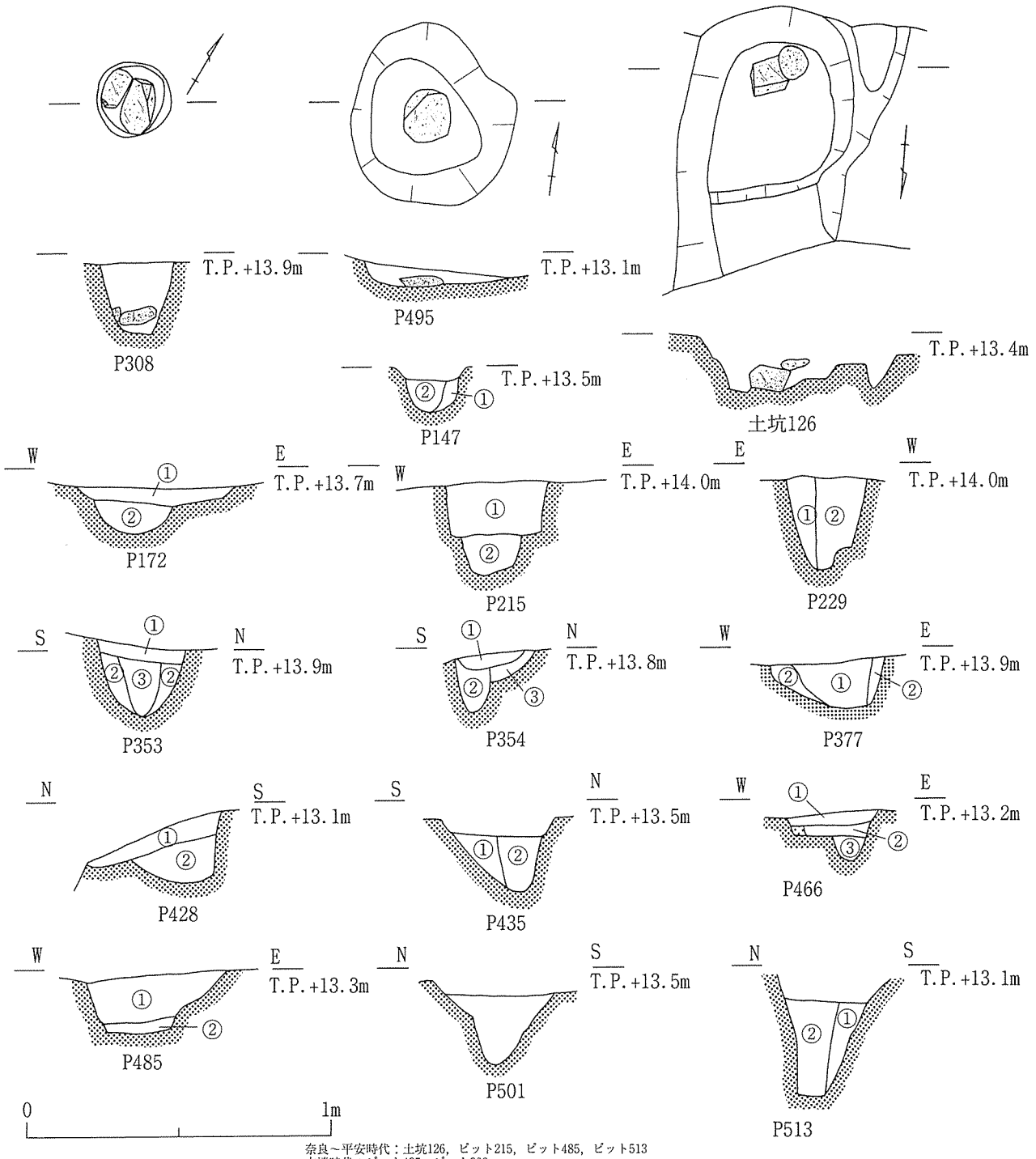


第15図　土坑23実測図



土坑24① 黒褐色（10YR2/2）シルト。
② 黒褐色（10YR2/2）シルト。灰黄褐色（10YR4/2）粘質土をブロック状に含む。炭化物を多量に含む。
土坑25① オリーブ黒色（5Y2/2）小礫混じり粘質土。暗黄灰色（2.5Y4/2）砂質土をブロック状に含む。小礫と炭化物を少量含む。
② 黒褐色（10YR2/2）シルト。暗黄灰色（2.5Y4/2）砂質土を少量含む。
土坑34 黒褐色（10YR3/2）シルト。炭化物を含む。
土坑76① 黒色（10YR2/1）小礫混じりシルト。小礫を少量含む。
② 黒褐色（10YR2/2）小～中礫混じりシルト。オリーブ褐色（2.5Y4/2）粘質土と炭化物を少量含む。
土坑77① 黒褐色（10YR3/1）礫混じりシルト。炭化物と径10cm大の礫を含む。
②灰黄色（2.5Y6/2）粘土。
土坑79① 灰色（5Y4/1）シルト。にぶい黄色（2.5Y6/4）粘土をブロック状に含む。
② 褐色（10YR3/1）シルト。
③ 黒色（10YR2/1）シルト。炭化物を含む。
土坑113 黒色（10YR2/1）小礫混じりシルト。炭化物を多量に含む。黄褐色（2.5Y5/4）粘質土を少量含む。
土坑135 黒褐色（10YR2/2）シルト。にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土と炭化物を少量含む。
土坑151①黒褐色（10YR2/2）小礫混じり粘質土。灰黄褐色（10YR4/2）砂質土と炭化物を含む。
②黒褐色（2.5Y3/1）シルト。炭化物を含む。
③黒褐色（2.5Y3/1）シルト。灰黄褐色（10YR4/2）砂質土をブロック状に含む。炭化物を少量含む。

第16図　土坑（弥生時代）実測図



奈良～平安時代：土坑126，ピット215，ピット485，ピット513
古墳時代：ピット435，ピット308
弥生時代：ピット495，ピット147，ピット172，ピット229，ピット353，
ピット354，ピット377，ピット428，ピット466，ピット501

土坑126　黒褐色（2.5Y3/1）シルト。にぶい黄色（2.5Y6/3）シルトをブロック状に含む。
ピット308　黒褐色（2.5Y3/2）シルト。
ピット495　黒褐色（10YR3/1）シルト。黄褐色（2.5Y5/4）粘質土を含む。
ピット147①　黒褐色（10YR3/2）粘質土。
②　黒褐色（2.5Y3/2）小礫混じり粘質土。炭化物と小礫を少量含む。
ピット172①　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土。
②　オリーブ黒色（5Y3/2）小礫混じり粘質土。暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土と小礫を少量含む。
ピット215①　黒褐色（10YR3/2）粘質土。にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土を多量に含む。
②　黒褐色（2.5Y3/2）シルト。
ピット229①　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土。暗い灰黄色（2.5Y5/2）砂質土を含む。
②　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土。
ピット353①　黒褐色（10YR3/1）シルト。
②　暗褐色（10YR3/3）中礫混じり粘質土。炭化物を含む。
③　黒褐色（10YR3/1）シルト。
ピット354①　黒褐色（2.5Y3/2）小礫混じり粘質土。炭化物と小礫を少量含む。
②　黒褐色（2.5Y3/2）シルト。
③　暗褐色（10YR3/3）中礫混じり粘質土。炭化物を含む。
ピット377①　黒色（2.5Y2/1）シルト。
②　黒褐色（10YR3/2）粘質土。暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土を含む。
ピット428①　黒褐色（2.5Y3/2）中礫混じりシルト。褐灰色（10YR4/1）粘質土を含む。中礫を少量含む。
②　黒褐色（2.5Y3/1）小礫混じりシルト。にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂を含む。
ピット435①　黒褐色（10YR3/2）粘質土。
②　黒褐色（10YR3/1）小礫混じり粘質土。小礫を少量含む。
ピット466①　黒褐色（10YR3/1）シルト。黄褐色（2.5Y5/4）粘質土を多量に含む。
②　黒褐色（10YR3/1）シルト。黄褐色（2.5Y5/4）粘質土をブロック状に少量含む。
③　黒褐色（10YR3/1）シルト。
ピット485①　暗褐色（10YR3/3）中礫混じり粘質土。中礫を少量含む。
②　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト。にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土を含む。
ピット501　黒褐色（2.5Y3/2）粘質土。黄褐色（2.5Y5/4）粘質土を含む。
ピット513①　黒褐色（10YR2/2）シルト。黄褐色（2.5Y5/4）粘質土をブロック状に含む。
②　黒褐色（10YR2/2）シルト。

第17図　土坑126・ピット実測図

特に調査区東側中央部分に集中する。ピット308やピット495では底面で石を検出している。いずれのピットも柱根が残っておらず、建物の復元は難しい。また、ピット316では小型の甕が逆さまの状態で出土した。

表2　遺構一覧表

土　坑

	平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期
1	楕円形	100×70	6	弥	古墳	46	楕円形	100×30以上	20		古墳	97	楕円形	46以上×45	19		弥生
2	楕円形	65以上×60	7	弥、土、須、骨	中世	48	円形	49	24	弥、石	弥生	98	楕円形	54×33	13		弥生
4	円形	144×114	55	弥、土、石、骨	弥生	49	卵形	88×70	38	弥	古墳	99	円形	74×66	38	須、土、製塩	古墳
5	卵形	82×42	48	弥、土、石、骨	弥生	50	楕円形	35以上×44	5	弥	弥生	100	楕円形	98×56	26	弥	古墳
7	楕円形	110×43	13	弥	中世	51	楕円形	112×94	12	弥	古墳	101	楕円形	68？×48	22		古墳
8	方形	152×100	47	弥、土、須、製塩	奈良～平安	52	楕円形	95？×66	13	弥	弥生	102	円形	50×35以上	30	土、須、製塩	古墳中期
9	楕円形	89×35	39	弥、土、須、製塩	古墳	53	方形	70？×68	13	土、須、製塩	古墳中期	103	楕円形	80×62	30	弥、土、須	古墳
10	円形	142×135	7		弥生	54	楕円形	81×54	12		古墳	104	楕円形	100×86	30		古墳
11	楕円形	127×80	23	土、須、製塩、弥	古墳中期	55	円形	130×122	19	弥	弥生	105	卵形	86？×50	31	弥、土、須	古墳
12	楕円形	102×85	65	弥、石、骨	弥生中期	56	楕円形	356×126	20		弥生	106	楕円形	67×58	27	弥、土、須	古墳
13	楕円形	144×50	16	弥、土、須、製塩	奈良～平安	57	長靴形	146×74	9	弥	弥生	107	円形	54×48	39	弥、土、須、製塩	古墳
14	円形	98	18	弥、土、石	古墳	58	楕円形	86×44	24	弥	奈良～平安	108	楕円形	66×47	28	弥、石	奈良～平安
15	円形	74×56以上	20	弥、土、須	古墳	60	楕円形	47以上×43	3		中世	110	楕円形	64以上×80	21	弥、土、須	古墳
16	不定形	120×71	13	土	中世	61	方形	97×77	5	土	中世	111	楕円形	85？×60	16	弥、土、須	奈良～平安
17	楕円形	69×38	11	弥、土	奈良～平安	62	長方形	119×82	12	弥、土	中世	113	円形	78	71	弥、石、焼土塊	弥生中期
18	楕円形	52×39以上	6	弥	中世	63	円形	53×51	3	弥、土、瓦器	中世	114	円形	87×72	25	弥、土、製塩	奈良～平安
19	楕円形	60×41以上	3		中世	65	卵形	146×57	5	弥、土、須	中世	115	楕円形	76×49	12	弥、土、製塩	中世
20	卵形	147×83	23	弥、土、須	古墳	68	楕円形	89×59以上	12	弥、土、須	中世	117	楕円形	72×63	21	弥、土、須	奈良～平安
21	方形	373以上×182	5	弥、土、須、瓦器	中世	70	楕円形	53×31	8	弥、土	中世	118	方形？	71×36以上	23	弥	奈良～平安
22	円形	77×59	3	弥、土、須、瓦器	中世	72	方形	58×57	17	弥、土、須	古墳	119	方形	123×82	53	弥、土、須	古墳
23	楕円形	136×112	82	弥、石、骨	弥生中期	73	楕円形	133×106	6		中世	120	楕円形	178×76	30	弥、土、須、石	古墳
24	楕円形	151×110	146	弥、石、骨	弥生中期	74	方形	140以上×117	14		中世	121	楕円形	120×38	10	弥、土、石	古墳
25	円形	136×118	80	弥、石	弥生	75	方形	83×76	12		古墳	122	楕円形	69×51	16	弥、須	古墳
26	円形	48×41	7	土	古墳	76	円形	110×85	2	弥、石、製塩	弥生中期	123	楕円形	91×52	42	土、須	古墳後期
27	円形	72×62	17	弥	奈良～平安	77	円形	144×100以上	119	弥、石	弥生中期	124	卵形	62×60	32	弥、土	古墳
28	楕円形	82×38以上	34	弥、石	弥生	79	円形	92×82	102	弥、石、骨	弥生中期	125	円形	80×64	34	弥、土、須、製塩	古墳中期
29	楕円形	90以上×66	23	弥	中世	80	楕円形	95×68	22	弥、土、須、製塩	古墳	126	方形	82以上×70	22	弥、土、石	奈良～平安
30	方形	258×227	7	弥、土、須、石	古墳	81	楕円形	121×26以上	16	弥、土、須、製塩	奈良～平安	127	方形	66×60	29	弥、土、須、製塩	古墳中期
31	楕円形	80×46	5	弥	弥生	82	楕円形	135？×84	19	弥	弥生	128	円形	70×64	52	弥、土、須、製塩	古墳中期
32	楕円形	74×52	26	弥	弥生	83	楕円形	105×67	12	土、須	古墳	129	円形	64	19		弥生
33	楕円形	72×46	13	弥	古墳	84	楕円形	98×48	23	弥	弥生	130	楕円形	55×46	11	弥、土、須、製塩	古墳中期
34	円形	100×96	108	弥、石	弥生中期	85	楕円形	112×70	55	弥、土、製塩	奈良～平安	131	円形	77×72	37	弥、土、須、製塩、石	古墳中～後期
35	円形	78	76	弥、石	弥生中期	86	楕円形	96×28	20	弥、須、製塩	古墳中期	132	楕円形	74×56	40	弥、土、須、製塩	古墳～後期
36	円形	74	30	弥	弥生	87	楕円形	139×78	19		古墳	133	楕円形	65×41	20	弥	奈良～平安
37	円形	65	34	弥	弥生	88	楕円形	106×65	19	弥、土、須	古墳	134	楕円形	103×62	30	弥、須、製塩	古墳
38	楕円形	120×68	23	弥	奈良～平安	89	楕円形	64×53	41	弥、土	古墳	135	円形	79	77	弥、骨	弥生中期
39	楕円形	158×67	33		弥生	90	円形	66×60	15	弥、土、須	古墳	136	方形	75×28	15		弥生
40	楕円形	74×58	35		弥生	91	楕円形	75×52	36	土、須、製塩	奈良～平安	137	方形	70×58	28	弥、土、須、製塩	古墳中期
41	卵形	85×56	15	弥	弥生	92	楕円形	61×51	14	弥、土、製塩	古墳	138	卵形	310×88以上	7	弥、土、須、瓦器、石	中世
42	長方形	105×60	20	弥	弥生	93	円形	88×80	42	弥	弥生	139	楕円形	63以上×43	17	土、須	古墳
43	円形	58×52	47	弥	弥生	94	円形	92×75	17		弥生	140	円形	46	20		弥生
44	方形	74×64	14		古墳	95	楕円形	104×38	21	弥、土、須	古墳	141	円形	54？	2	弥	弥生
45	円形	46	36	弥	古墳	96	楕円形	88？×71	32	弥、石、須、骨	古墳	143	楕円形	59？×20以上	20		奈良～平安

	平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期
144	円形	42以上	23	弥、土、須	奈良～平安	153	円形	65以上×62	19	弥、石	弥生	160	楕円形	82×30以上	2		中世
147	楕円形	54以上×41	18		弥生	154	円形	78×70	44	弥、製塩、骨	古墳	162	方形	68×60？	20	石	中世
148	楕円形	137×87	37	弥	弥生	155	楕円形	120×75	33	弥、土、須	古墳	163	楕円形	100以上×74	8		中世
149	楕円形	160×59	20	弥、土、須、製塩	奈良～平安	156	楕円形	89×37	11	須	古墳	164	楕円形	330×132	8	土、須、瓦器	中世
150	楕円形	99×82	22	弥、土、須、製塩	奈良～平安	157	円形	157×79以上	45	弥	弥生	165	楕円形	105×68	45		中世
151	円形	151	110	弥、石	弥生中期	158	円形	127×56以上	9		弥生	166	方形	29以上×40	4		中世
152		114	16		弥生	159		28	18		中世						

ピット

	平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期
2	楕円形	5×36	16	弥、土	奈良～平安	44	円形	67×60	14	弥	弥生	93	楕円形	36×24	9	弥、焼土塊	中世
3	円形	57×26以上	12		弥生	45	方形	76×51	35	弥、土、須	奈良～平安	94	楕円形	42×27	15	弥、土、焼土塊	中世
4	円形	31×25	9		弥生	46	円形	80×70	10	弥	弥生	95	楕円形	51×28	7	弥	弥生
5	楕円形	38×27	17	弥	弥生	47	楕円形	75×60	20		弥生	96	円形	55×48	8	弥	弥生
6	円形	22×18	21		弥生	48	楕円形	41×32	18		弥生	97	円形	31	6		弥生
7	楕円形	55×47	23	弥	弥生	49	楕円形	52×40	23	弥、製塩	古墳	98	楕円形	28×20	7		弥生
8	楕円形	53×33	46	弥、石	弥生	50	円形	36	23	弥	古墳	99	円形	50×38	20	弥	弥生
9	方形	51×20以上	14	弥	弥生	51	円形	49×45	29	弥、土	古墳	100	楕円形	68×50	13		弥生
10	円形	37	43	弥	弥生	52	円形	48×44	10	弥、土、須、製塩	古墳中期	101	円形	38	20	弥	弥生
11	楕円形	65×41	21	弥、石、焼土塊	弥生	53	楕円形	60×47	12	弥、土、須	古墳	102	円形	41	14	弥	古墳
12	楕円形	13×9	5		弥生	54	楕円形	72×59	18	弥、土、須	古墳	103	円形	62×56	8	弥、土	古墳
13	円形	39？×34	23	弥	弥生	55	楕円形	84×46	23	弥、土、須	古墳	104	円形	31×28	20		弥生
15	楕円形	45×39	38	弥	弥生	56	円形	48	22	弥	古墳	105	円形	58	14		弥生
16	楕円形	35×27	7	弥	弥生	58	円形	77×68	29	弥、製塩	古墳	106	円形	64×58	11	弥	弥生
17	楕円形	22×17	14		弥生	59	楕円形	70×56？	28	土、須	古墳	107	円形	23	12		弥生
19	方形	50×41	40	弥、土、製塩	古墳	60	円形	60	14		古墳	108	円形	30	20		古墳
20	楕円形	27×19	18		弥生	61		41	20	土	古墳	109	楕円形	42×28	28		弥生
21	楕円形	28×20	23	弥	弥生	62		16	7		弥生	110	円形	32	14		弥生
22	円形	34×28	42	弥	弥生	63	楕円形	42×20	20	土	古墳	111	楕円形	42×23？	24		古墳
23	円形	30×25	13		弥生	64	円形	55×49	6	弥	中世	112	円形	68	18	弥	古墳
24	円形	29×24	13		弥生	66	楕円形	47×33	9	須	中世	113	円形	29	8	弥	弥生
25	円形	53	34	弥、土	奈良～平安	67	円形	28	23	土	中世	114	円形	35	17	弥	弥生
26	楕円形	35×16	16	弥	古墳	68	楕円形	46×23	18	弥、土、須	中世	115	円形	37	7	弥	弥生
27	楕円形	50×37	20	弥、土、須	古墳	70	円形	46×43	18	弥	弥生	116	円形	36×33	7	弥	古墳
28	円形	65×52	13	弥	弥生	75	楕円形	35×28	7		中世	117	円形	42×37	9		弥生
29	円形	40？	11	弥、土	古墳	76	楕円形	59×46	7	土	中世	119	円形	31	9		中世
30	円形	29	9		弥生	77	楕円形	53×34	8	土、黒	中世	120	円形	28	17	弥	中世
31	楕円形	43×30	6	土、須	古墳	78	楕円形	36×27	21		中世	121	楕円形	48？×34	9		弥生
32	楕円形	44×30	8	土	古墳	79	円形	16	41		中世	122	円形	32	12	弥	弥生
33	円形	20	8	弥	弥生	80	円形	43	11	弥、須、瓦器	中世	123	円形	34	6		弥生
34	楕円形	47×24以上	11	土	古墳	81	楕円形	32×19	16		弥生	124	円形	41	9	弥	古墳
35	円形	31	13	土、須	古墳	82	円形	34	7	弥	中世	125	円形	46×37	12	弥	古墳
36	円形	62×54	27		古墳	83	円形	67？	5	弥	中世	126	円形	42	15	弥	古墳
37	楕円形	40×29	4	弥	弥生	84	楕円形	22×13	3		中世	127	円形	43	17		弥生
38	楕円形	38×28	11		弥生	85	円形	35×21	5	弥	中世	128	楕円形	62以上×56	10		弥生
39	円形	50×43	10		弥生	86	円形	46×39	7	弥	中世	129	円形	44	21	弥	古墳
40	円形	24	11	弥	弥生	87	楕円形	39×23	9	土、須	中世	130	楕円形	51×40	18		弥生
41	円形	26×22	14		古墳	89	円形	32	44	弥、土、製塩	中世	131	円形	50	13		弥生
42	円形	18	9		弥生	90	楕円形	22以上×18	25	土	中世	132	円形	30	8		弥生
43	楕円形	38以上×43	29	弥	弥生	92	円形	37×35	5		弥生	133	円形	36	11	弥	弥生

	平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期
134	楕円形	36×26	19		弥生	192	円形	32	22	弥、石	弥生	245	楕円形	50×41	19		弥生
135	円形	37	13	弥	弥生	193	楕円形	35×22	17		古墳	246	楕円形	52×42	22		弥生
136	楕円形	42×25	19	弥、石	弥生	194	円形	40	19		弥生	247	円形	27	13		弥生
137	円形	39	16		弥生	195	円形	34	16	弥	弥生	248	楕円形	40×28	37	弥	弥生
138	円形	40×32	12	土	古墳	196	楕円形	49×36	14	弥、製塩	奈良～平安	249	円形	55×46	16	弥	弥生
139	円形	38×34	10		弥生	197	円形	28	16	弥	弥生	250	円形	38？		弥	中世
140	円形	40	9		弥生	198	円形	47×42	19	弥	古墳	252	円形	28×25	16	弥、石	古墳
141	円形	40	18	弥	弥生	199	楕円形	49×41	34	弥	古墳	253	円形	31×26	15		弥生
142	円形	34	10	弥	古墳	200	円形	30	22		弥生	254	円形	68×60	16	弥	弥生
143	円形	31×26	6		奈良～平安	201	円形	36	14		古墳	255	円形	34×29	32	弥、土	古墳
144	円形	24	6		古墳	202	楕円形	46×36	13		弥生	256	円形	30	26	弥	古墳
145	円形	31	27	弥、石、焼土塊	弥生	203	円形	22	17		弥生	257	楕円形	54×38	17	弥	古墳
146	円形	38	10	弥	古墳	204	円形	32×27	29		古墳	258	円形	41×39	29	弥	弥生
147	円形	35×32	10		弥生	205	円形	30	26	弥、土、製塩	古墳	259	楕円形	20×16	14		中世
150	楕円形	44×33	19	弥	弥生	206	円形	45	22	弥、石	古墳	260	卵形	68×46	40	弥、土、石	古墳
151	円形	25	4	弥	弥生	207	円形	46×44	22		古墳	261	楕円形	66×56	40	弥	古墳
152	楕円形	82×53？	17	弥	弥生	208	円形	23×19	10		弥生	262	楕円形	43×35	23	弥	奈良～平安
153	円形	31×4	18	弥、土	古墳	209	円形	40×32	12		弥生	263	楕円形	42×36	13	弥	弥生
155	楕円形	58×44	17	弥、須、焼土塊	古墳	210	楕円形	38×23	24		古墳	264	楕円形	35×28	28	弥、石、骨	弥生
157	円形	40×34	24		弥生	212	楕円形	46×30	27		弥生	265	円形	39×33	32	弥	弥生
158	円形	23	16	弥	弥生	213	楕円形	42×36	20		弥生	266	楕円形	36×26	9		弥生
159	円形	42	24		中世	214	円形	36×31	24		弥生	267	楕円形	44×38	29	弥	弥生
160	円形	43	10		古墳	215	楕円形	54×38	25	弥、石	奈良～平安	268	円形	33	21	弥	弥生
161	円形	54×47	14	土	古墳	216	楕円形	54×33	29	弥	弥生	269	楕円形	41×28	12	弥	弥生
162	円形	24×20	14	弥	古墳	217	円形	46×38	29	弥	弥生	270	楕円形	43×28	24	弥、石	古墳
163	楕円形	70×56	42	弥、土、須、製塩、石	古墳中期	218	楕円形	45×36	18	弥	奈良～平安	271	円形	25	10	弥	奈良～平安
166	円形	29	18	弥	弥生	219	楕円形	35×16	12		弥生	272	円形	18	7		弥生
168	円形	46×38	13	弥	弥生	220	円形	42	20	弥	奈良～平安	274	円形	37	37	弥、石	古墳
169	楕円形	57×40	28	弥	弥生	221	円形	46	18	弥	古墳	275	円形	36	14	弥	古墳
170	円形	26	14	弥	弥生	222	楕円形	53×36	19		弥生	276	楕円形	38×23	21	弥	古墳
172	円形	35	12	弥	弥生	223	円形	42	23		弥生	277	楕円形	136×76以上	20	弥	古墳
174	円形	52×48	15	弥	弥生	224	楕円形	56×41	29		弥生	278	楕円形	43×24	11		弥生
175	円形	56×47	20	弥	弥生	225	円形	70	30	弥、石	弥生	279	円形	27	16		弥生
176	楕円形	66×56	6		弥生	226	円形	24	34	弥	弥生	280	楕円形	50×36	16	弥	弥生
177	円形	21	12		弥生	227	方形	64×45	16	弥	弥生	282	楕円形	41×22	15		弥生
178	楕円形	60×50	21	弥、石	弥生	228	円形	26×21	25	弥、土	古墳	283	円形	33	12		古墳
179	円形	39	19	弥	古墳	229	円形	34	31	弥	弥生	284	楕円形	53×34	39	弥	古墳
180	楕円形	63×42	9		弥生	231	円形	22	17		古墳	285	円形	28×24	13		弥生
181	楕円形	44×34	18	弥	弥生	232	楕円形	32×24	4	弥	弥生	286	円形	24	12		弥生
182	円形	46×40	10		古墳	233	楕円形	41×36	20	弥	弥生	287	楕円形	60×36	17		弥生
183	楕円形	52×34	5	弥	古墳	234	楕円形	36×28	20	弥	弥生	288	楕円形	18×14	14		弥生
184	楕円形	36×28	17	弥、土	古墳	235	円形	46×38	16	弥	弥生	289	楕円形	18×14	9		弥生
185	円形	52×44	19		弥生	236	円形	22	22	弥	弥生	290	楕円形	44×31	22	弥	古墳
186	楕円形	32×26	20		弥生	237	楕円形	68×34	45	弥	弥生	291	円形	34	15		古墳
187	円形	26	6		弥生	238	円形	29	36	弥、石	弥生	292	楕円形	37×30	22	弥	弥生
188	楕円形	44×33	29	弥	古墳	240	円形	31	8	弥	弥生	293	楕円形	34×28	15		古墳
189	円形	27	13		古墳	241	円形	32	10	弥	弥生	294	方形	60×50	18		弥生
190	楕円形	32×25	22		弥生	242	円形	52×44	13	弥	弥生	295	円形	39×32	13	弥	弥生
191	円形	35×30	15		弥生	243	円形	29×26	10	弥	弥生	296	楕円形	50×40	39	弥、土	古墳

	平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期
297	円形	36×28	21		弥生	353	楕円形	52×42	27	弥	弥生	412	円形	29	18		古墳
299	円形	39×33	21	弥	弥生	354	楕円形	41×32	36		弥生	413	円形	39×31	18		弥生
300	円形	22×19	11		弥生	355	楕円形	34×28	25		弥生	414	円形	38	15	弥	弥生
301	円形	36	18	弥	弥生	356	円形	46×43	15		古墳	416	円形	40×36	7		中世
302	楕円形	54×34	21	弥	弥生	357	円形	22	8		古墳	417	楕円形	58×48	17	弥、須	古墳
303	円形	38	25	石	弥生	358	楕円形	38×23	14		中世	418	円形	27	9		弥生
304	円形	37	22	弥、石	弥生	359	円形	45	31	土	奈良～平安	419	円形	29	12		弥生
306	楕円形	37×30	17	弥	弥生	360	円形	26	5		弥生	420	楕円形	29×18	19	弥	弥生
307	楕円形	34×29	34	弥	弥生	361	円形	30×25	18		古墳	421	円形	36	8		弥生
308	円形	38	23	弥	古墳	362	円形	28	7		弥生	422	円形	31	14	弥	弥生
310	円形	36×30	22		弥生	363	円形	30	14		弥生	423	円形	51×43？	14	土、須、製塩、石	古墳
311	円形	33	9		弥生	364	円形	28？×21	5		弥生	424	楕円形	38以上×26	64	弥	奈良～平安
312	楕円形	36以上×40	5		弥生	365	円形	41×36	27	弥	古墳	425	円形	36	14	土	奈良～平安
314	円形	32×25	13		弥生	366	円形	20×16	8	弥	古墳	426	円形	38×30	18		弥生
316	円形	37	25	弥	弥生	367	円形	52×46	15	弥	古墳	427	円形	46	15		弥生
317	円形	19	3		弥生	368	円形	35×31	26	弥	古墳	428	楕円形	50以上×57	23	弥	弥生
318	円形	56×51	29	弥、土	古墳	369	円形	19	11		古墳	429	楕円形	58×48	13	土、須	古墳中～後期
319	円形	33	23	弥、土	古墳	370	楕円形	42×32	13		中世	430	楕円形	58×50	12		弥生
320	楕円形	48×36	7	弥	奈良～平安	371	円形	18×14	9		弥生	431	楕円形	36×29	23		弥生
321	円形	35	9		奈良～平安	372	楕円形	38×28	10		弥生	432	円形	28×23	8		古墳
322	円形	22	14	弥	奈良～平安	373	楕円形	51×35	13		古墳	433	楕円形	34×27	5	弥	弥生
323	楕円形	77×39	17		弥生	374	楕円形	55×35	17	弥	弥生	434	楕円形	26×19	24		弥生
324	円形	73×62	24		弥生	375	楕円形	56×41	28		弥生	435	楕円形	34×30	24	弥、土、須	古墳
325	円形	12	10		弥生	376	円形	32×28	25		弥生	436	円形	48	19	弥、石	古墳
326	円形	26	36	弥	古墳	377	楕円形	38×30	23		弥生	437	円形	49×44	3		弥生
327	円形	28	11	弥	弥生	378		14	10		弥生	438	楕円形	43×36	25	弥、土	奈良～平安
328	円形	27	9		弥生	379		45	8		弥生	439	円形	22	7		古墳
329	円形	16	9	弥	弥生	381	円形	30×23	14		弥生	440	円形	38	6	弥	弥生
330	円形	33×29	16	弥	弥生	383	円形	42	16	弥	中世	441	楕円形	72×59	35	弥	奈良～平安
331	円形	26	9		弥生	384	楕円形	40×36	10		中世	442	楕円形	33×28	10	弥	弥生
332	円形	32	10		弥生	386	楕円形	78×50	7		弥生	443	円形	36？	4		弥生
333	楕円形	44×33	26	弥	弥生	388	楕円形	36×29	17		中世	444	円形	51	14		弥生
334	円形	39×34	9		弥生	390	円形	38×31	3		中世	445	円形	34×28	11	弥、土	古墳
335	円形	29	14		古墳	391	卵形	30×24	11		弥生	446	円形	44×36	13	弥	奈良～平安
336	楕円形	31×24	13		古墳	392	円形	23	7	弥、土、須	古墳	447	円形	49×38	14	弥	古墳
337	楕円形	51×28	11		弥生	394	円形	32	18		弥生	448	円形	42	18		弥生
338	円形	24	12	弥	古墳	395	楕円形	48×37	8	弥	中世	449	円形	47	20	土、須	古墳
339	円形	33	19	弥	弥生	396	円形	32	8		中世	450	楕円形	53×39	22	弥、土	古墳
340	円形	36×36	19	弥	弥生	397	円形	40	9	弥、土	奈良～平安	451	円形	53	25	弥	弥生
341	円形	44	6		奈良～平安	399	楕円形	30×26	4		弥生	452	円形	39	15	弥	弥生
342	円形	29	33	弥	弥生	400	方形	55×28以上	8	土、須	中世	453	円形	49×44	39		弥生
344	円形	26	17	弥	古墳	402	円形	39×36	5	弥、須	中世	454	円形	44×40	8		古墳
345	円形	28	14	弥	古墳	403	円形	70×62	29		中世	455	円形	48×44	29		弥生
346	円形	20	10		奈良～平安	404	楕円形	50？×29	20	弥、須、製塩	中世	456	円形	39	19		弥生
347	円形	36	42	弥	弥生	407	円形	46×43	6	弥、土、瓦器	中世	457	楕円形	42×33	19	土	古墳
348	円形	47×40	20	弥	弥生	408	楕円形	45×35	16		中世	458	円形	48×45	10		古墳
349	楕円形	55×40	24	弥	弥生	409	円形	27	2		中世	459	楕円形	44×32	14	瓦器	中世
351	円形	37×29	26	弥	弥生	410	円形	29	19		弥生	460	円形	28×24	28	弥	弥生
352	円形	36	35	弥	弥生	411	円形	28×24	12		中世	461	円形	38×32	38	弥	奈良～平安

	平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期		平面形	規模	深	出土遺物	時期
462	円形	43×38	24	弥	弥生	516	楕円形	24以上×22	6	弥	弥生	574	円形	20	5	弥	弥生
463	楕円形	60？×40	21	弥、土、須	古墳	517	楕円形	26以上×23	25	弥	奈良～平安	575	円形	39	9	弥	弥生
464	円形	54？	22	弥	弥生	518	円形	38×28	28		古墳	576	楕円形	73×57	38	弥、石	弥生
465	楕円形	46×36	29	弥、土、須	奈良～平安	519	円形	30	30	弥	古墳	577	円形	11	4		古墳
466	円形	44×40	9	弥、石	弥生	520	円形	28	21	弥	弥生	578	円形	32	10		古墳
467	円形	36	26	弥	弥生	521	楕円形	58×39	41	弥、土、須	古墳	579	円形	36？	19		古墳
470	円形	30	14		弥生	524	円形	19	5		弥生	580	円形	30	20		弥生
471	楕円形	52×35	14		弥生	525	楕円形	28×15	5		弥生	581	楕円形	32×20	15		弥生
472	円形	38	11		奈良～平安	526	楕円形	30×24	9		弥生	582	円形	32	28		古墳
473	楕円形	46×34	10	弥	弥生	528	円形	21？×15	5		弥生	583	楕円形	60×33	17		弥生
474	楕円形	40×34	34		弥生	530	円形	20×15	10		古墳	584	円形	26	12	弥	古墳
475	円形	38×34	10	弥	弥生	533	円形	43×35	14		古墳	585	円形	27	8	弥	古墳
478	方形	40×26	6		弥生	534	楕円形	31×26	26	弥	弥生	586	楕円形	82×42	34	弥、土	古墳
479	楕円形	70×52	26	弥、土、須	奈良～平安	535	楕円形	56×44	14	弥	弥生	587	円形	28×24	6		弥生
480	円形	30	15		弥生	536	円形	32	15		弥生	588	円形	12	7	弥	古墳
481	円形	43	17		弥生	537	円形	64×48	40		弥生	589	円形	62	27	弥、土、製塩	奈良～平安
482	楕円形	50×44	22		古墳	539	円形	38	15	土	古墳	590	円形	22	8		弥生
483	円形	24×18	8		弥生	540	円形	46×40	22	土、石	奈良～平安	591	円形	14	9	弥	古墳
484	楕円形	38以上×42	19	弥、石	弥生	541	円形	24	17		弥生	592	円形	16	20		古墳
485	楕円形	69×50	20	弥、土、須	奈良～平安	542	円形	66×58	33	土、須、骨	古墳後期	593	円形	16	16		弥生
486	円形	24	15		弥生	543	円形	22	16		中世	594	円形	39×34	5	弥	弥生
488	円形	27	9	須	古墳	544	楕円形	49×31	15	弥、土、製塩	古墳	595	円形	24	6	弥	古墳
490	円形	50	35		弥生	545	楕円形	42×36	5	弥	弥生	596	楕円形	39×23	19	弥、土、須	古墳
491	円形	18	18		弥生	546	楕円形	74×55	10	弥、土、須	古墳	597	楕円形	39×30	14		弥生
492	楕円形	6×36	30	弥	弥生	547	円形	34×30	15	弥、製塩	古墳	598		25	16		古墳
493	円形	32	19	弥	弥生	549	円形	21	15	弥	弥生	599	楕円形	70×56	35		弥生
494	楕円形	26	17	弥、土	古墳	550	円形	16	13		古墳	600	円形	65	36	弥、土、須	古墳
495	円形	60×53	3	弥	弥生	551	楕円形	28×23	22	弥	古墳	601	円形	40	12	弥	弥生
496	円形	43	11	弥、石	古墳	552	楕円形	38×26	13	弥、土、須、製塩	古墳中期	602	楕円形	36？×25	9		弥生
497	円形	40	10		古墳	553	楕円形	49×40	22	弥	古墳	604	円形	58	7		弥生
498	円形	23	5		古墳	555	円形	48×41	32	土、須、製塩	古墳中期	606		7	10		弥生
500	円形	38	18	弥	古墳	556	円形	69×60	33	弥、土、須、製塩	奈良～平安	607		27	7		弥生
501	楕円形	62以上×56	65	弥	弥生	557	楕円形	58×36	24	土、須	古墳	608		12	5		弥生
502	円形	21	6		古墳	559	楕円形	57×36	22	弥	弥生	609		27	8		中世
503	円形	50	27	弥	奈良～平安	560	楕円形	37×26	20		古墳	610		18	5		中世
504	楕円形	41×23	15	土	古墳	561	楕円形	40×25	28		弥生	611		33	8		中世
505	楕円形	30×21	5		弥生	562	円形	66×60	20	弥	弥生	612		24	8		中世
506	円形	25	20		古墳	563	円形	20	7		弥生	613		20	10		弥生
507	円形	38	5		弥生	564	円形	30	21	弥、土	古墳	614		25	11		弥生
508	楕円形	36×30	13	弥	奈良～平安	565	楕円形	83×64	40	土、須、製塩、骨	古墳中～後期	615		42	8		中世
509	楕円形	63×45	10	弥	中世	566	円形	36	4	弥	古墳	616		22	12		弥生
510	楕円形	54×45	12		弥生	567	楕円形	22×18	6		弥生	617		27	16		弥生
511	円形	62	30	弥、石	弥生	568	楕円形	34×26	12	弥	弥生	618		15	6		弥生
512	楕円形	29×24	9		弥生	569	楕円形	53×14以上	5	弥	弥生	619		52	7		弥生
513	円形	42	25	弥、石	奈良～平安	571	楕円形	50×20以上	12	土、須	古墳	620	楕円形	63×41	29	弥、土	古墳
514	楕円形	41？×26	38	弥、瓦器	奈良～平安	572	円形	29	8	土	古墳	621	円形	20×16	6		中世
515	楕円形	35×29	13		弥生	573	円形	24以上	9	弥、土、須	古墳	622	円形	28	30		弥生

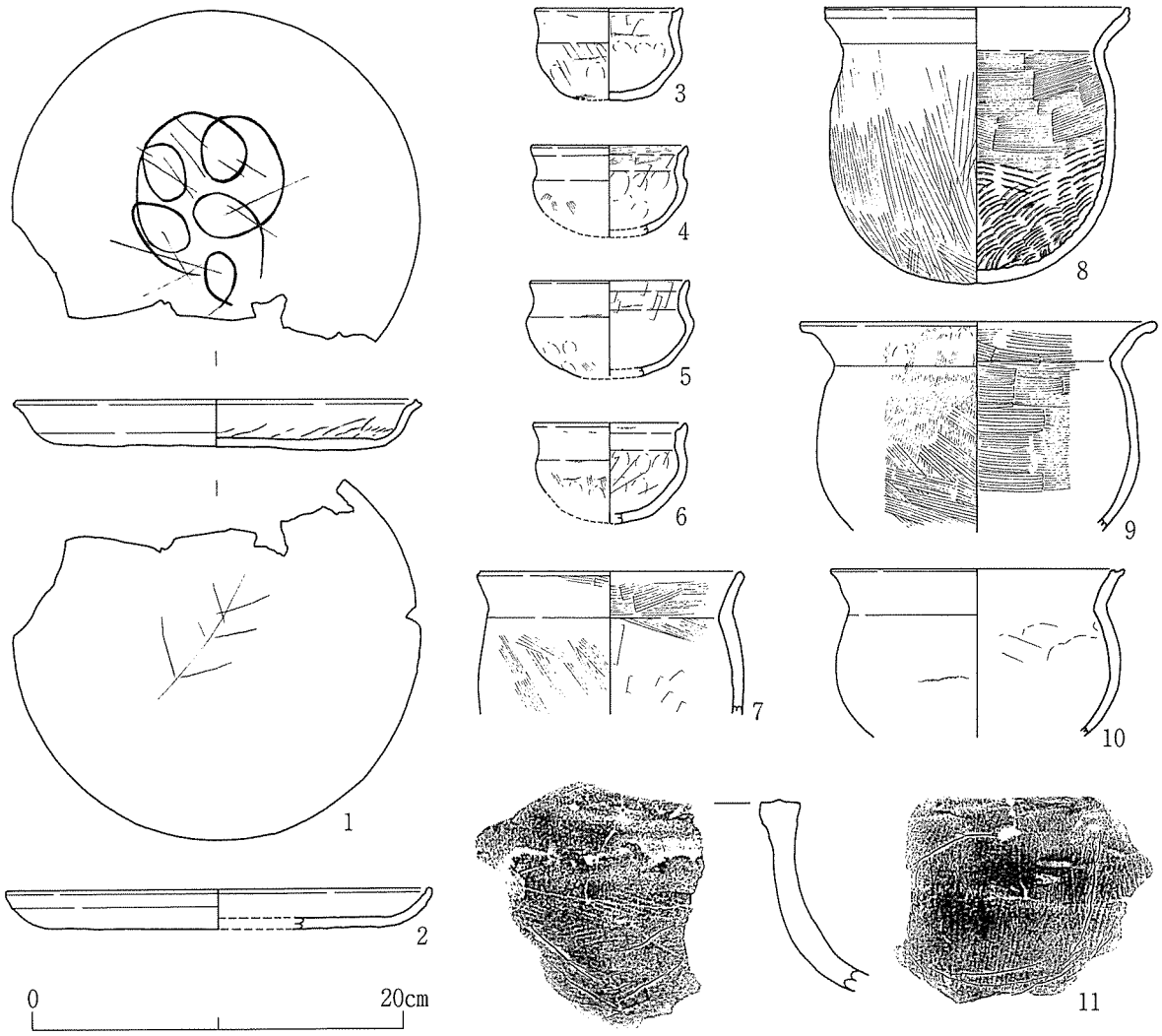
出土遺物；弥－弥生土器，土－土師器，須－須恵器，製塩－製塩土器，石－石器，骨－動物遺体

4．出土遺物

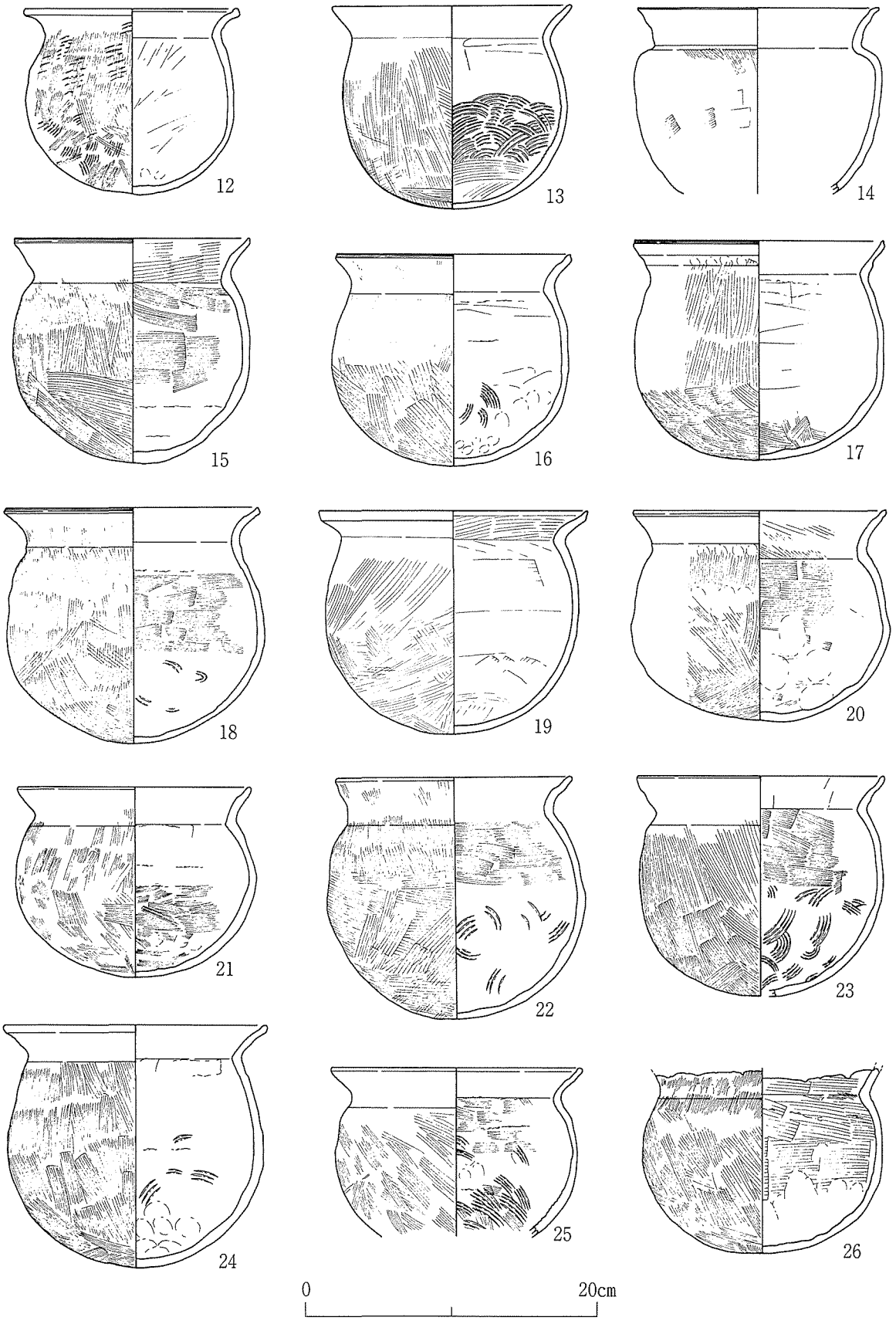
1)　奈良～平安時代の土器

当該期の遺物は井戸、溝、土坑、ピットから出土している。井戸以外の遺構から出土したものは小片のため図化し得なかった。このため井戸１と井戸５から出土した遺物について記述する。井戸１と井戸５から出土した遺物には土師器、須恵器、墨書土器、製塩土器、瓦がある。井戸１の埋土は上層と下層に分けられ、上層では完形に近い土師器壷とともに皿、甕、竈が出土している。壷は小型のもので人面を墨書することがあるが、今回出土したものには墨書はない。下層では完形に近い土師器甕とともに土師器坏、須恵器壷などが出土し、甕は煮炊きに使用後、あるものは口縁を打ち欠いて廃棄している。これらの土器は祭祀に使用されたものと思われ、良好な一括資料である。時期は奈良時代末～平安時代初頭。井戸５では墨書土器が５点出土し、吉祥句と思われる「富益」と記されたものもある。また祭祀具として竈とセットになるミニチュア甕が出土した。井戸５の下から井戸７を検出しており、墨書土器は最初に作られた井戸７に伴う可能性が高い。時期は平安時代初頭。これらのものは律令期の集落における井戸祭祀の形態を考えるうえで興味深い。

以下、遺構ごとに遺物の概要を記す。８世紀代の土器の分類および調整の技法の表記については、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ、ＸＩ』に準ずる。



第18図　井戸１上層出土遺物実測図



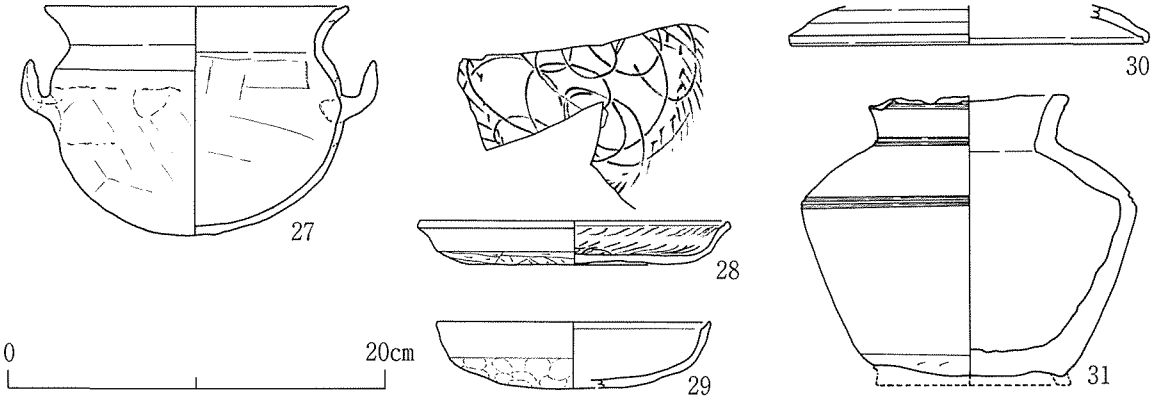
第19図　井戸１下層出土遺物実測図

井戸１上層（第18図）

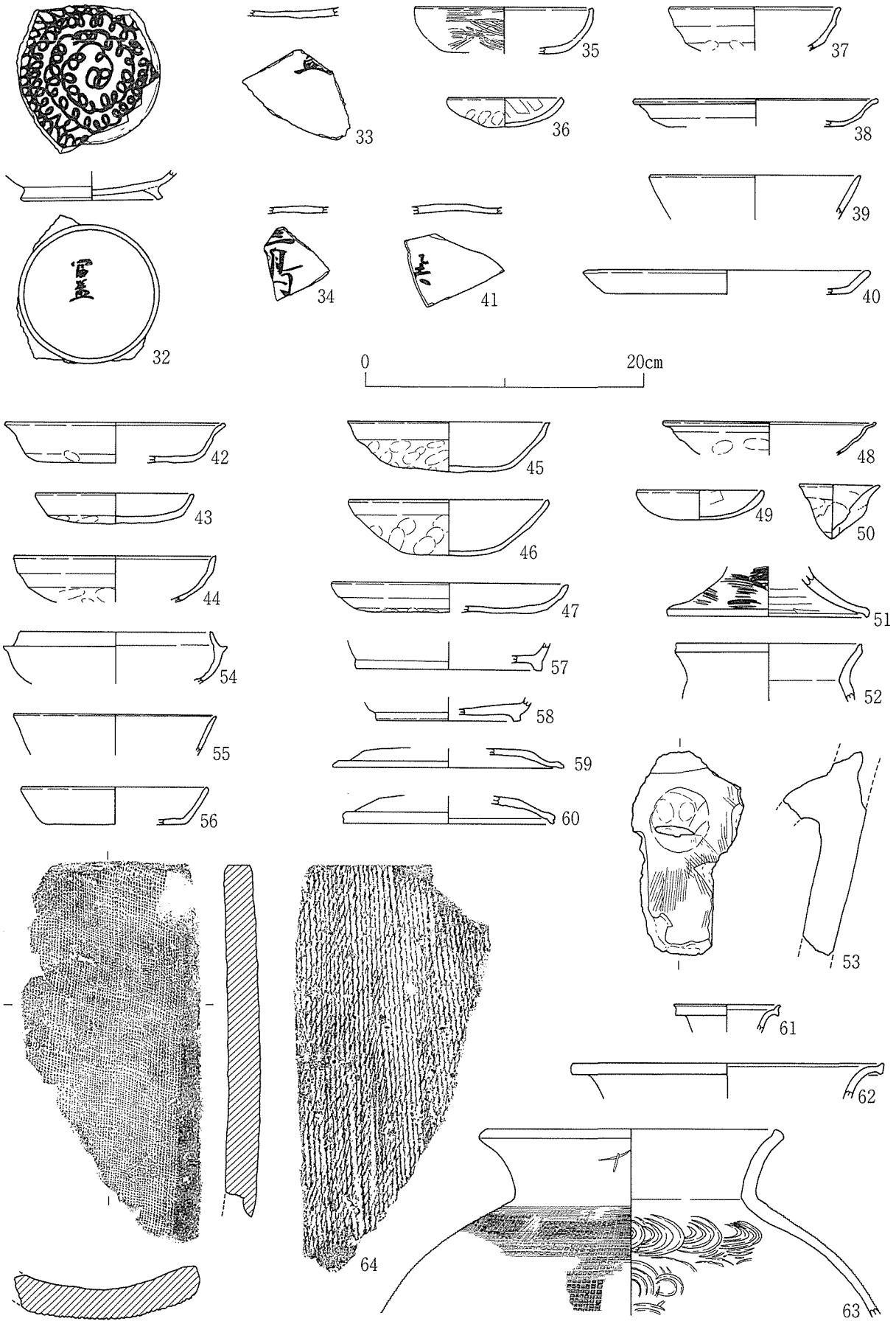
土師器（１～11）１・２は皿Ａである。１は平底から斜め上に内弯して立ち上がり、上端がわずかに外弯する口縁部からなり、端部を内側に折りかえす。口縁部内面には１段の斜放射文、底部内面には螺旋文の暗文をもつ。底部外面には焼成後に葉脈状の線刻、底部内面には不定方向の線刻がある。外面調整はｂ０手法である。２は平底から内弯して斜め上方にたちあがる口縁部をもち、端部は丸く肥厚する。外面調整は口縁部がヨコナデ、以下は表面が剥離のため不明である。内面は表面が剥離のため不明である。３～６は壷Ｂである。丸底と球形に近い体部から口縁部が短く直立するもの。口縁端部は内傾し、少し凹む。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部は指オサエ後刷毛調整を施し、指頭痕がわずかに残る。内面は指オサエ後板状工具でナデ調整を行うが、４は口縁部を刷毛調整する。３は底部付近に黒斑がある。色調は橙色を呈する。７～10は甕Ａである。７～９は体部の内・外面を刷毛調整するもので、８は内面の体部下半に同心円の当て具痕が残る。10は体部の内・外面とも調整はナデで、外面には指頭痕が残る。球形に近い体部から斜め上方に広がる口縁部を持つもの（８・９）、肩の張らない体部から斜め上方に広がる口縁部を持つもの（７）があり、７は生駒西麓産の胎土である。前者は口縁端部の形態により３つに分けられる。①口縁端部を上につまみあげ、強いヨコナデのため外面が凹線状に凹むもの（８）、②外反して丸く肥厚するもの（９）、③端部上面が水平な面をもち、やや凹むもの（10）である。11は竈である。外面を刷毛調整、内面は刷毛調整後ナデ調整する。生駒西麓産。

井戸１下層（第19～20図）

土師器（12～29）12～26は甕Ａである。球形に近い体部から斜め上方に広がる口縁部をもつもので、12・13・15～26は体部外面を刷毛調整、14は刷毛調整後ナデを施すが、指頭痕が明瞭に残る。全部で16点出土した。口縁部や底部が欠損しているものが若干あるが、ほとんどが完形である。口径は最小の12が14.4cm、最大の19が18.4cmを測り、16.0～17.0cm代のものが多い。12は体部外面に叩き目が残る。内面は刷毛調整するものが大半で、体部下半に同心円の当て具痕が残るもの（13・16・18・22～25）、ヘラ削りするもの（12）、板状工具でナデ調整するもの（14・16・19・24）がある。26は口縁部を故意に打ち欠いている。外面や内面に炭化物が付着しているものがほとんどであるが、12・20・23・26には付着がみられない。また23・26は体部外面に黒斑がある。口縁端部の形態により①内側に丸く肥厚するもの（12）、②端部上部に水平な面をもつもの（13・14）、③口縁端部を上につまみあげ、強いヨコナデのため外面が凹線状にくぼむもの（15～17）、④外傾する面をもつもの（18・20）、⑤口縁端部を上につまみあげるもの（19）、⑥口縁端部が内弯して丸くおわるもの（21～25）の６つに分けられる。27は甕Ｂである。器形は甕Ａと同じで、肩部の相対する位置に把手をもつものである。把



第20図　井戸１下層出土遺物実測図



第21図　井戸５出土遺物実測図

手は肩部に差し込んで取り付けている。体部はほぼ完形で口縁部が１／２残る。内・外面とも工具によりナデ調整を行い、体部から底部外面にかけて指頭痕が残る。口縁部内面、体部外面に炭化物が付着する。また体部外面に黒斑がある。28は坏Ａである。平底から外弯して口縁部が立ちあがり、端部が丸く肥厚する。底部内面には螺旋文、体部には１段の斜放射文の暗文を施す。外面調整はｂ０手法である。29は坏Ｃである。丸みを帯びた底部から直立気味に立ちあがる口縁部を持ち、口縁端部が内傾する。外面調整は口縁部をヨコナデ、以下は不調整、内面はナデ調整である。

須恵器（30・31）30は坏Ｂ蓋の口縁部である。黒色粒が墨を流したように流れる胎土を持つ。31は壷である。頸部および肩部に２条ずつ沈線が巡る。肩～頸部にかけて自然釉が付着する。底部外面には高台が剥離した痕跡が残る。口縁部を意図的に打ち欠いている。

井戸５（第21図）

32～41は井戸枠内埋土、42・43・45・46・48・52・56・57・61～64は井戸の最終埋土である第１層、47・49・53・58は第２層、45・59は第１～２層、44・50・51・54・55・60は井戸掘り方の埋土である第３層から出土したものである。

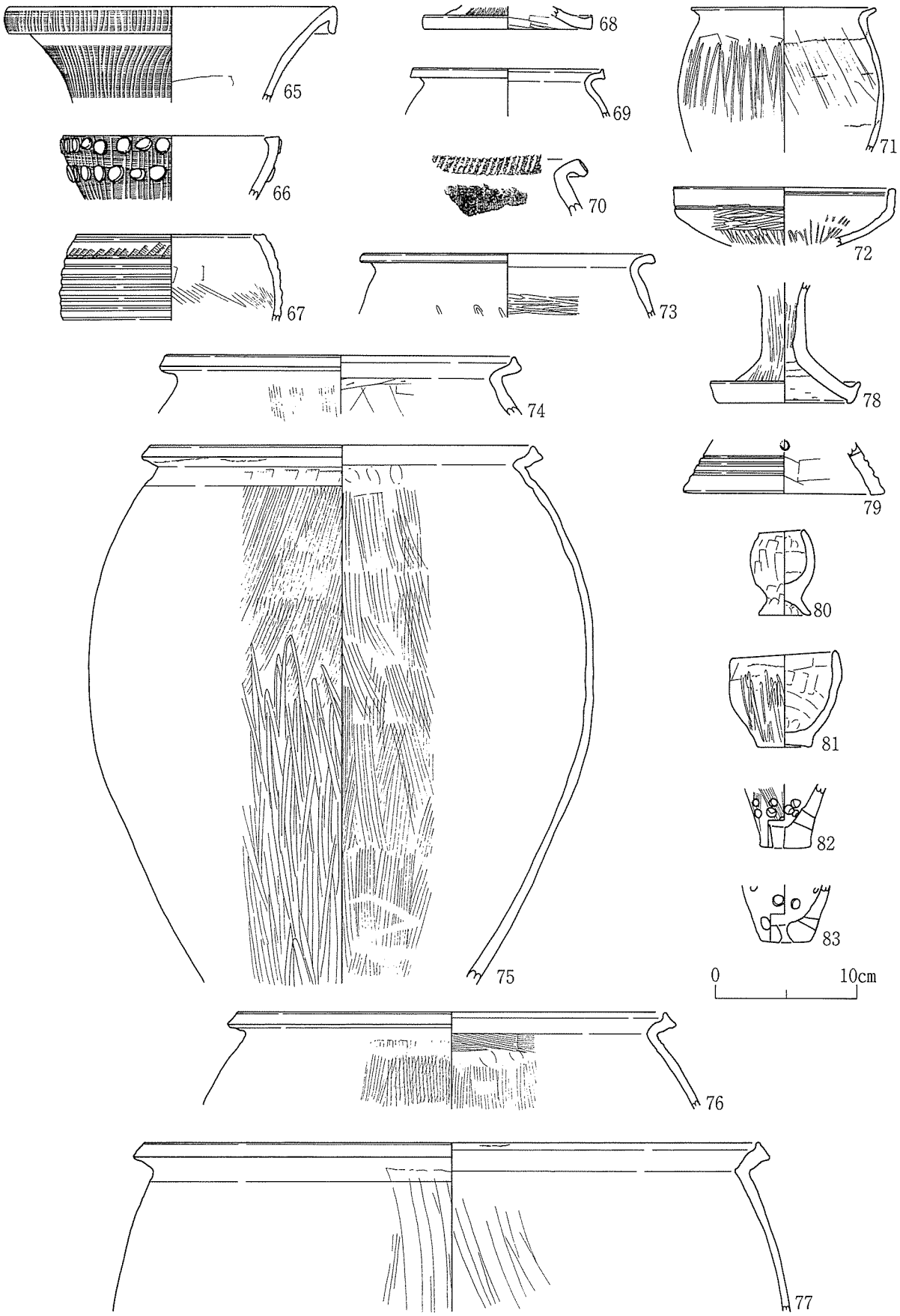
墨書土器（32～34・41）32は土師器坏Ｂ底部である。内面に螺旋文の暗文を密に施し、外面には「富益」の墨書がある。33・34は土師器坏ないし皿の底部である。外面に33は「益」、34は「三嶋」の墨書がある。これらのほかに土師器坏ないし皿の底部で、外面に判読不明の墨書が記されたものが1点ある。41は須恵器坏ないし皿の底部である。外面に「乙□□」の墨書がある。

土師器（35～38・42～53）35・42は坏Ａである。35は外面調整がｂ１手法で、ヘラ磨きをまばらに施す。内面はナデ調整である。42は外面調整がａ０手法で、内面はナデ調整である。36・49は小皿である。手づくね成形である。36は完形である。37・44～46は椀Ａである。口縁部外面をヨコナデ、以下は不調整で指頭痕が残るものである。37・44は口縁部外面を２段のナデで調整する。45は完形である。38・47は皿Ａである。47は口縁部外面を２段のナデで調整する。43は皿Ｃである。外面調整はａ０手法である。48は皿である。「て」字状口縁をもつ。口縁部外面をヨコナデ、以下は不調整のため指頭痕が残る。50はミニチュア甕である。外面に指頭痕、内面には粘土紐を巻き上げた痕跡が明瞭に残る。ほぼ完形。51は高坏の脚部である。裾部外面をヘラ磨きする。52は甕である。口縁端部を上につまみあげ、強いヨコナデのため外面が凹線状にくぼむ。生駒西麓産。53は竈である。生駒西麓産。

須恵器（39・40・54～63）39・55は坏、56は坏Ａである。39は外面に重ね焼き痕がある。57・58は坏Ｂである。底部外面には断面四角形のしっかりした高台がつく。40は皿Ｃである。平底から斜め上方にひらく短い口縁部からなる。口縁端部は外傾する面をもつ。54は坏Ｈである。６世紀末。混入品である。59・60は坏Ｂ蓋である。59は口縁部外面に重ね焼き痕がある。61・62は壷である。63は甕である。頸部外面にヘラ記号「十」がある。体部外面には格子叩き後カキ目を施し、内面には同心円の当て具痕が残る。

瓦（64）平瓦である。凸面に縄目叩き、凹面に布目が残る。桶巻き作りである。生駒西麓産の胎土を持つ。

製塩土器（図版27下段）井戸枠内埋土および第１～３層から出土した。小片のみで、図化し得なかった。内面に粗い布目痕や、細かい布目痕、ハケメのあるものが少数みられる。色調は淡黄色～にぶい橙、灰色を呈する。胎土に１～４㎜の砂礫を多く含む。



第22図　井戸２出土遺物実測図

2）弥生時代の土器

今回の調査で出土した弥生土器はコンテナ約70箱分である。整理期間の都合により、遺構出土の遺物を報告対象としており、包含層出土遺物は報告対象に含めていないことを明記しておく。

遺物を掲載した遺構の内、竪穴住居1以外は弥生時代中期後半に属する遺構であるため基本的に遺構の種類ごとかつ番号順に記述していくこととする。また、所謂「生駒西麓」の胎土についてはこの胎土の土器の方が多くを占めているので、文中では特に触れずにそれとは明らかに異なる胎土の土器についてのみ文中に「非生駒西麓」と記す。

弥生土器の記述および分類は、中期の遺物については『河内平野遺跡群の動態Ⅵ』((財)大阪文化財センター　1993)に、後期の遺物については『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』((財)大阪府文化財調査研究センター　1999)にそれぞれ従っている。

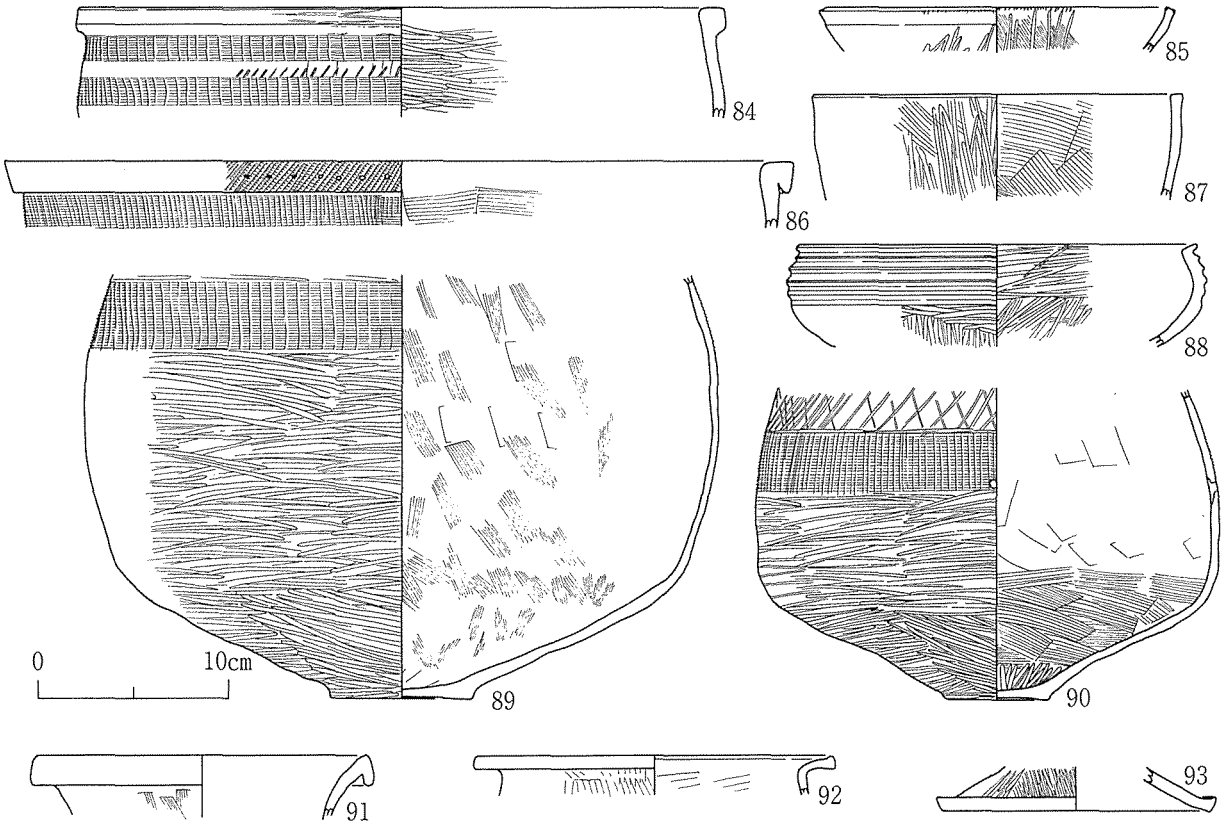
井戸２(第22～23図)

26点を図示した。器種は壺(65・89・90)、細頸壷(66・67)、甕(69～71・73～77)、蓋(68)、高杯(72・78・88)、鉢(79・84～87)、ミニチュア土器(80・81)、多孔土器(82・83)である。

壺　65はＡ１形態で端部を下方に拡張し端面と頸部に簾状文を施す。頸部の簾状文は幅広のものである。89・90はＡ２形態で下半は共にミガキ調整され、上方に簾状文を施す。90には簾状文の上に斜格子文も施している。また胴部に１ヶ所外側から開けられた穿孔(直径４㎜)が存在する。

細頸壷　66は口縁端部が面をなし、外面に簾状文を施し、円形浮文を２帯貼り付けている。67は頸部上端に列点文、口縁部～頸部にかけて凹線文を施している。非生駒西麓の胎土である。

甕　Ａ１(71・73)・Ｂ(70)・Ｃ(69)・Ｄ(74～77)の各形態がある。71の端部は外側へつまみ出したような形態である。70は端部を下方に拡張し、端面に刻み目を施している。69は端部を上方に拡張す



第23図　井戸２・４出土遺物実測図

る。D形態の4点はいずれも端部が肥厚し、上下方に拡張されて面をなし、ナデ調整がなされている。

蓋　68はB形態で裾端部が上方に拡張され、その上端に刻み目が施されている。煤の付着は認められない。

高杯　72・88はA2形態の椀状の杯部である。72は内外面にそれぞれ1条の凹線文を施す。88は外面に凹線文を5条施し、上端は面をなす。78は筒状の柱状部から裾部が大きく広がる脚部である。柱状部の内面にはシボリメが残り、裾部内面はケズリ調整され端部は上下に拡張される。非生駒西麓の胎土である。

鉢　A1(85)、A2(87)、B2(84・86)の各形態がある。84・86は口縁端部が共に段状をなしているが84は体部と接しており、86は若干の隙間が存在する。文様は84では体部に簾状文と列点文、86では体部に簾状文、端面に列点文と刺突文を施す。85は端部に細かい刻み目を施す。おそらく把手付鉢になると思われる。87は無文で、バケツ状の深い器形となるのであろうか。非生駒西麓の胎土である。79は台付鉢の脚部で凹線文3条と円形透かし穴が2個残存している。

ミニチュア土器　台付鉢もしくは台付無頸壷を模したもの(80)と鉢を模したもの(81)とがある。いずれもユビオサエ・ユビナデなどの痕跡を残したままで、口縁端部の調整もなされていない。

多孔土器　82・83は土器の底面及び側面に多くの穿孔がなされている。この土器については角南聡一郎氏によって分析がなされている（角南聡一郎「弥生時代多孔土器初論」　『滋賀考古　第21号』　滋賀考古学研究会　1999.8)。孔は82には19個、83には8個が残存している。いずれも焼成前穿孔である。共に平底で底に1つ、側面に残りの孔が開けられている。また83には白色の物質が外面の一部と内面の全体に付着している。孔の内側にも付着していることから孔から中のもの(おそらく液体)が外に出ていたのであろう。82には付着物は認められない。共に非生駒西麓の胎土である。この他に底部に穿孔された小型甕が2点出土している(図版31　296・297)。297は非生駒西麓の胎土である。

井戸4(第23図)

3点を図示した。器種は壷(91)、甕(92)、蓋(93)である。

壷　A1形態で内外面とも無文であり、口縁端部は下方に拡張される。

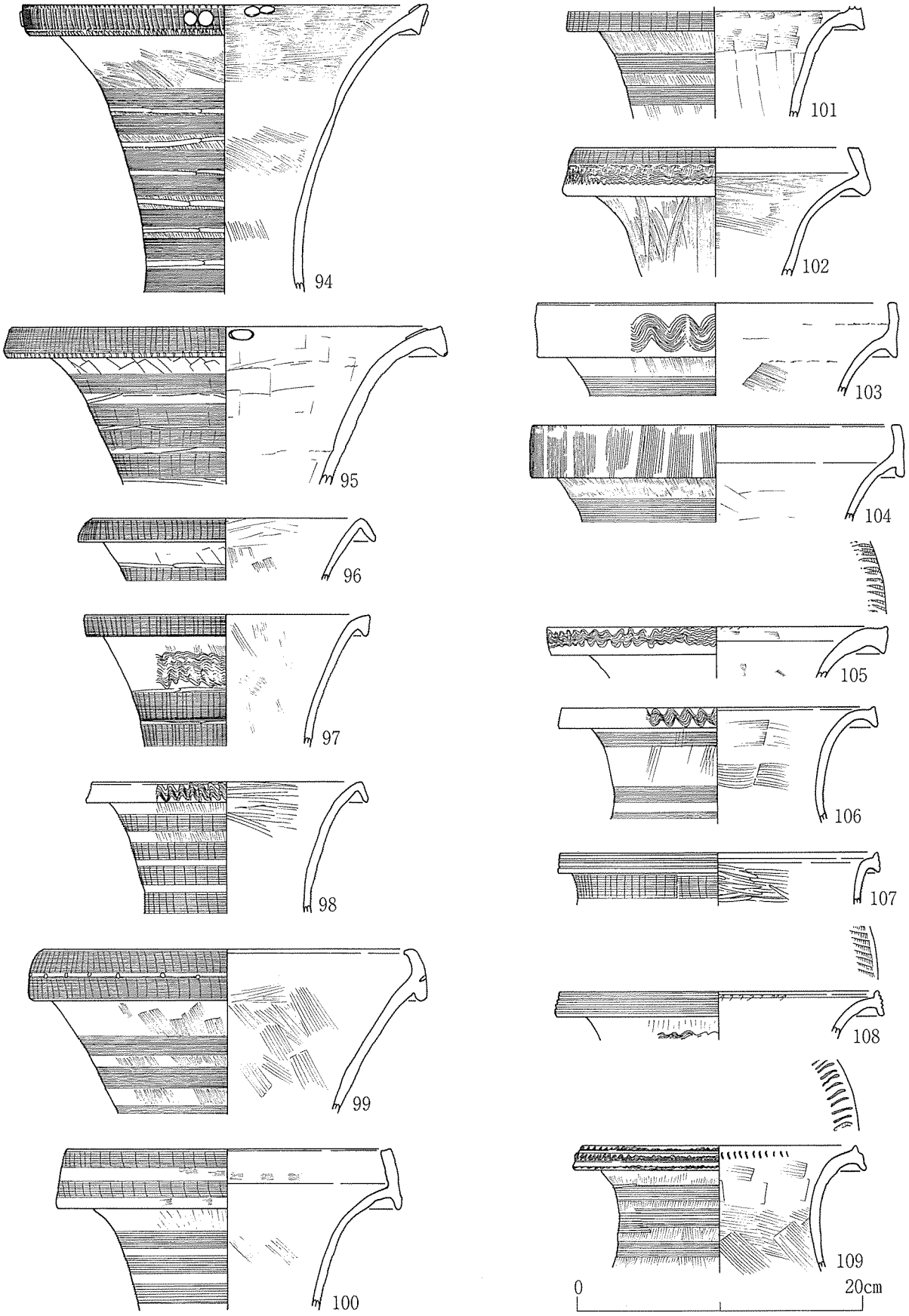
甕　A1形態で、直立する体部から口縁部が直角に外反し、口縁端部は上方に拡張される。

蓋　B形態で、裾部が上方に拡張され端面をもつ。煤の付着は認められない。

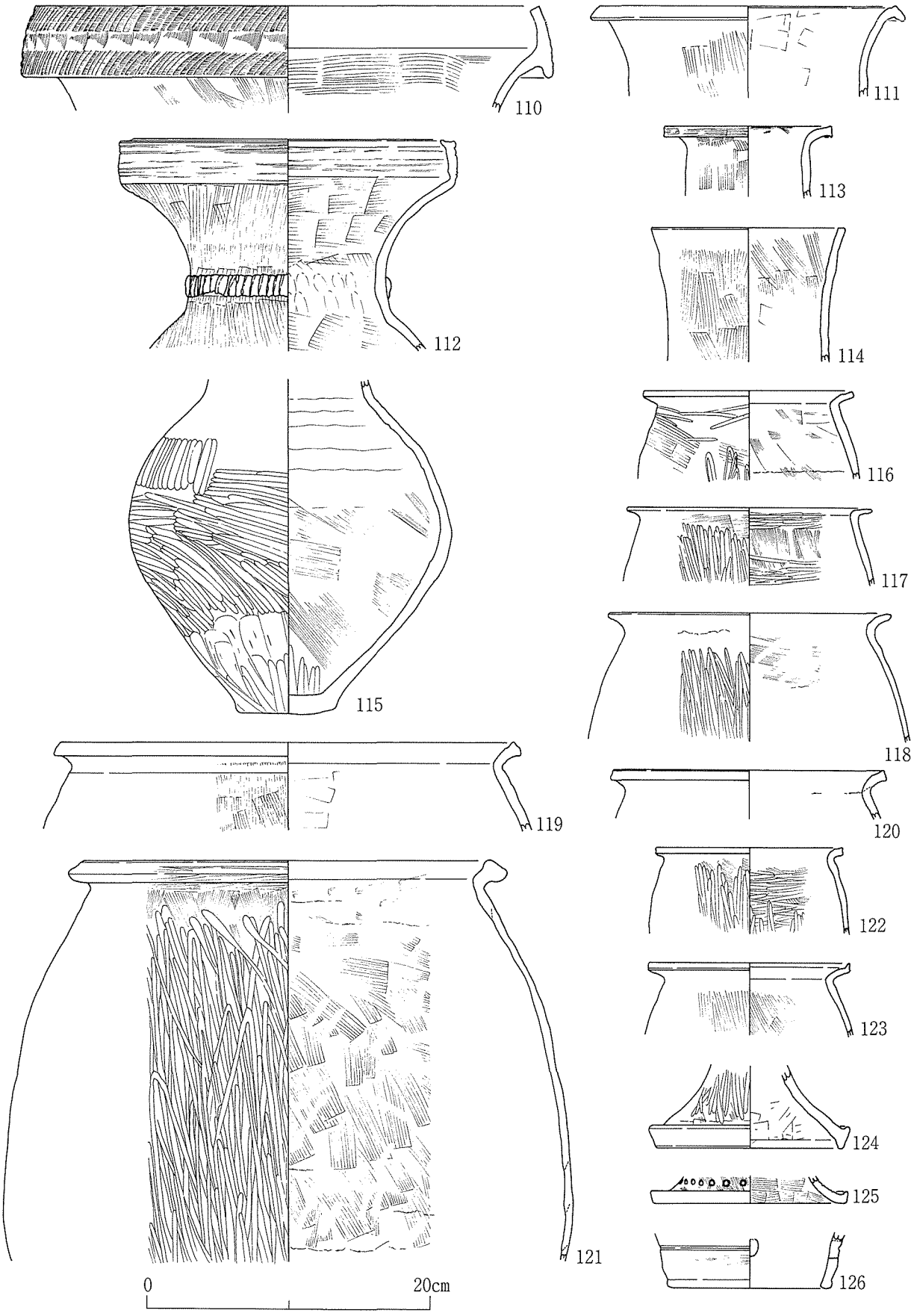
井戸6(第24～26図)

39点を図示した。器種は壷（94～113・115)、長頸壷(114)、甕(116～123・127)、高杯（124)、鉢(125・128～132)、脚部(126)である。

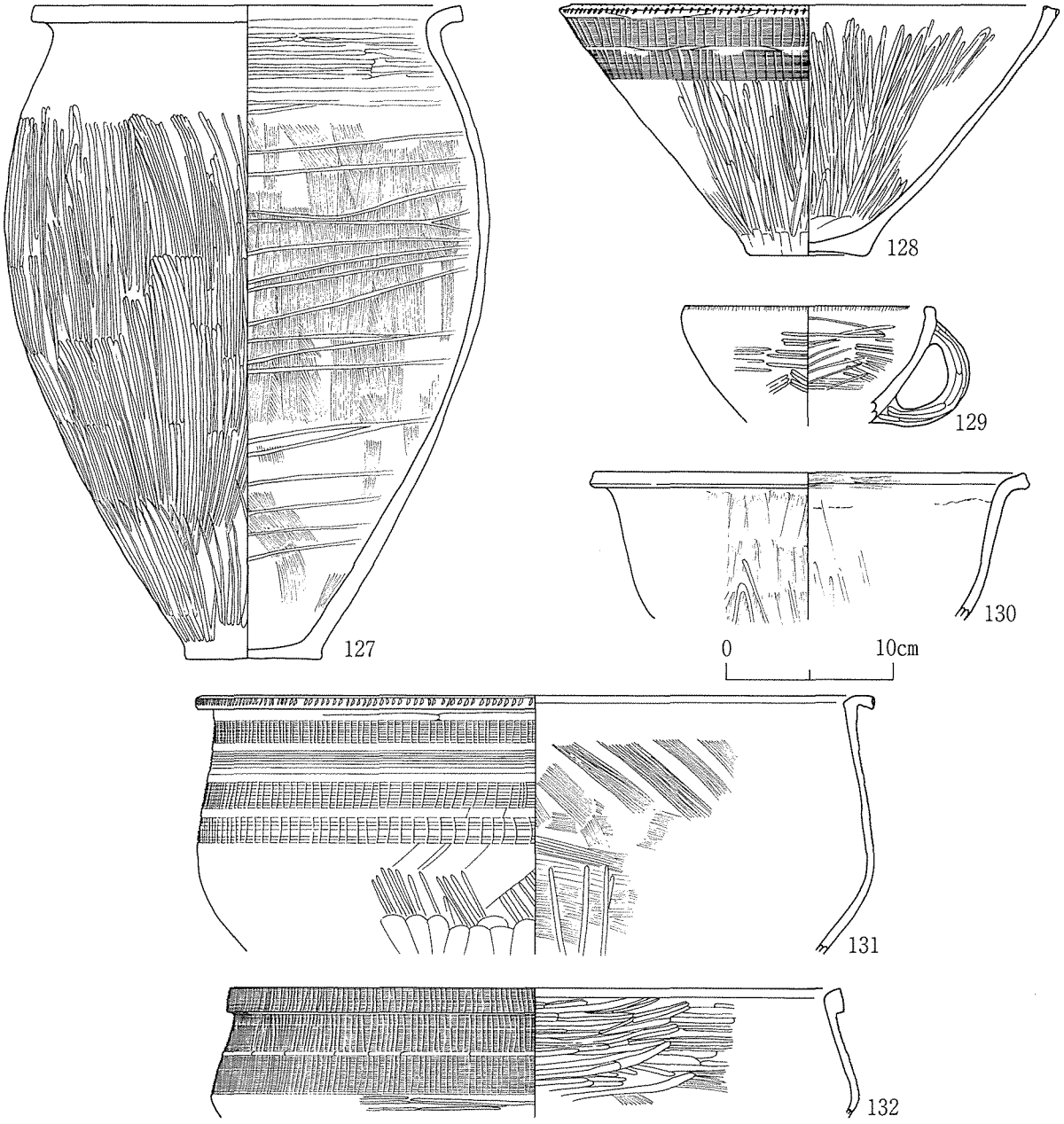
壷　A1（94・95・115)、A2(96～98・111)、A3(99～104・110)、C(105～109)、D(113)、F(112)の各形態がある。94は端面に簾状文と刻み目、頸部に直線文と簾状文を施しており、端面と口縁内面のそれぞれ対応する位置に円形浮文を2個1組(内外とも4組ずつ)で貼り付けている。95は端面に簾状文と刻み目、頸部に直線文と簾状文を施し、口縁内面に円形浮文を1個貼り付けている。115は体部で口縁部～頸部を欠く。肩部内面に粘土の接合痕が明瞭に認められる。96は端面および頸部に簾状文を、97は端面に簾状文、頸部に波状文と簾状文を、98は端面に波状文、頸部に簾状文を施している。111は内外面とも無文である。99は立ち上がった端面がやや内彎して上端がやや丸くなっている。端面に刺突文と簾状文、頸部に直線文を、100は端面と頸部に簾状文を施している。101は端面の拡張された部分が粘土の接合部分から剥離している。端面に簾状文、頸部に直線文を施している。



第24図　井戸６出土遺物実測図



第25図　井戸６出土遺物実測図

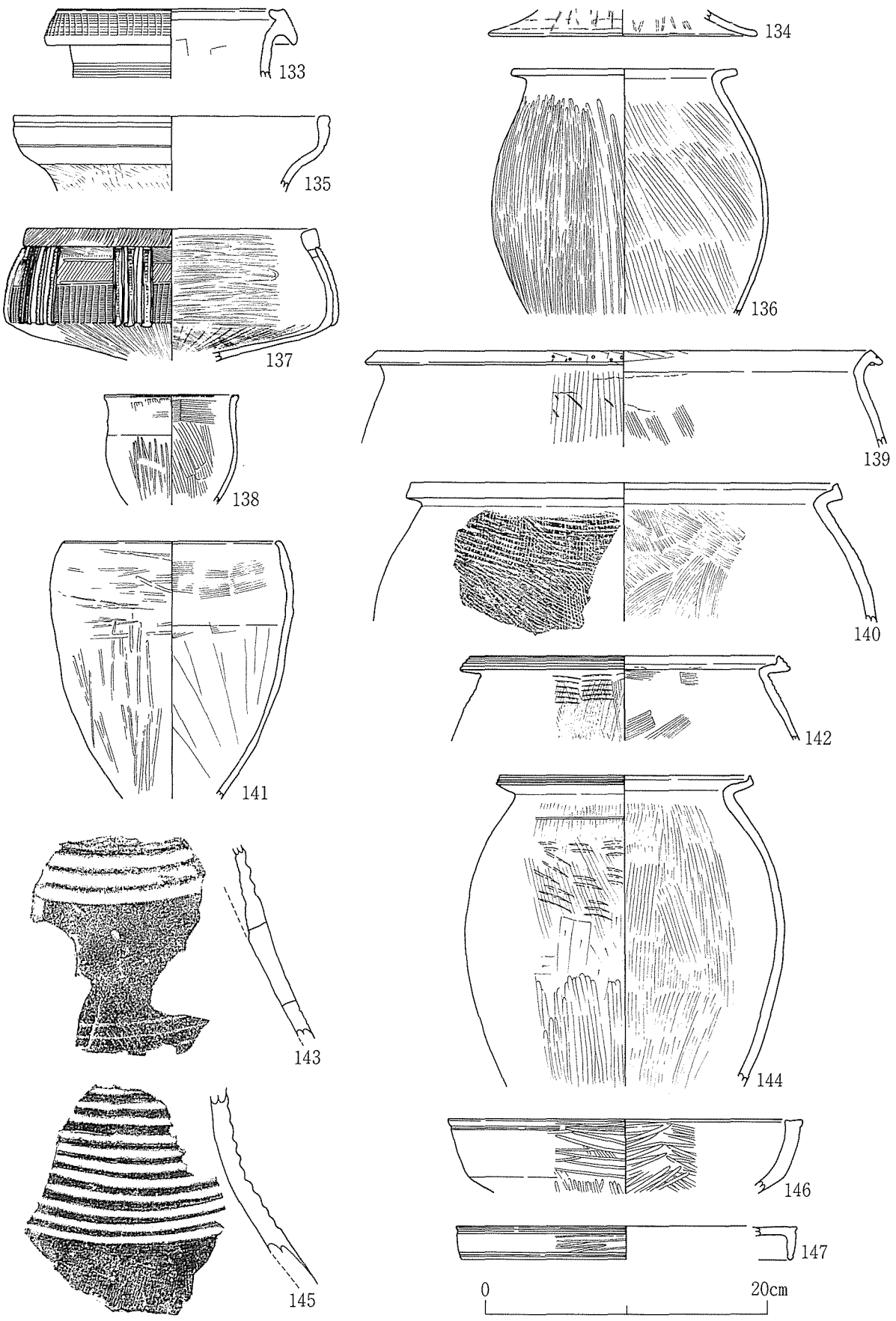


第26図　井戸６出土遺物実測図

102は端面に簾状文、波状文、扇状文を、103は端面に波状文、頸部に直線文を、104は端面に縦位直線文、頸部に直線文を施す。110は他のものより大型の壷で、端面に列点文、簾状文、扇状文を施している。105は端面に波状文、口縁内面に列点文を、106は端面に波状文、頸部に直線文を、107は端面に凹線文、頸部に簾状文を、108は端面に凹線文、頸部に波状文、口縁内面に列点文を施している。106～108は非生駒西麓の胎土である。109は端面に波状文と凹線文、頸部に直線文、口縁内面に刻み目を施している。113は直立する頸部から外反する口縁をもち、端面を作り出すが文様は施されない。112は端部上端が面をなし、内側が若干つまみ上げられる。頸部に貼付突帯がつけられている。

長頸壷　114は筒型の頸部から口縁部が若干外反し上端部は面をなす。非生駒西麓の胎土である。

甕　Ａ１(116～118・120)、Ａ２(122)、Ｂ(119・121・127)、Ｃ(123)の各形態がある。116・120・122・123は端部が面をなし、117・118は端部を丸くおさめている。119・121・127は端部を下方に拡張している。



第27図　土坑12出土遺物実測図

高杯　124は脚部である。「ハ」の字状に開き、裾端部を上下方に拡張する。内面はケズリ調整されている。

鉢　Ａ２(128・129)、Ｂ１(130・131)、Ｂ２(132)の各形態がある。128は体部が底部からまっすぐに広がるもので、口縁部が肥厚し端面をつくる。端面には内外両面に刻み目、口縁直下に簾状文を施す。129は把手付鉢で端部は面をなし、内外両面に細かい刻み目を施す。130は椀状の体部から短く外反する口縁をもつ。文様は施されていない。131は内彎する体部と短く外反する口縁をもつ。端面に刻み目、体部に簾状文と直線文を施している。体部下半にはケズリ調整が、内面見込みには放射状ミガキがなされている。132は内彎した体部と段状の口縁をもつ。端面および体部に簾状文を施す。125は台付鉢の脚部で裾端部は上方に拡張され、外面には竹管文を施している。

脚部　126は台付鉢もしくは台付無頸壷の脚部で、凹線文を２条施し円形透かしが１個残存する。

土坑12(第27図)

15点を図示した。器種は壺(133・135)、蓋(134)、甕(136・138～142・144)、台付無頸壷（137)、高杯(146・147)、器台(143・145)である。

壷　133はＡ３形態で端部を上下に拡張する。端面に簾状文、頸部に直線文を施す。端部上面は潰れて歪になっている。135はＦ形態で外面に２条の凹線文を施す。非生駒西麓の胎土である。

蓋　134はＣ形態である。端部は丸くおさめられる。裾部に粘土の接合痕が認められる。内面に煤が付着している。

甕　Ａ１(136)・Ａ２(138)・Ｂ(139)・Ｃ(142・144)・Ｄ(140)の各形態がある。136は口縁部が水平に外反し端部を丸くおさめる。138は口縁端部の内外両面に細かい刻み目を、139は口縁端部を下方に拡張し端面に刺突文を施している。142・144は端部を上方に拡張し端面に凹線文を施す。140は端部を上方に拡張する。140・142・144の外面調整はいずれもタタキ調整の後にハケ調整を施している。140・144は非生駒西麓の胎土である。141は口縁部が作られておらず、上部に向かうにつれて内彎し、端部の調整は非常に粗く場所によって成形に差が見られる。外面に煤の付着が認められるので使用していたことは間違いない。

台付無頸壷　137は体部が内彎して立ち上がり口縁端部が段をなし端面をもつ。外面下半に簾状文を施し、棒状浮文が貼り付けられる。浮文は３本１組と４本１組が交互に貼り付けられ、細かい刻み目を施している。２孔１対の紐穴が開けられており、内面見込みには放射状ミガキがなされている。

高杯　146はＡ２形態で杯部の形態が椀状で口縁上端が面をなすものである。外面の口縁付近に１条の凹線文を施す。147はＢ１形態で端部が大きく垂下するものである。端面の上下端に１条ずつ凹線文を施す。共に非生駒西麓の胎土である。

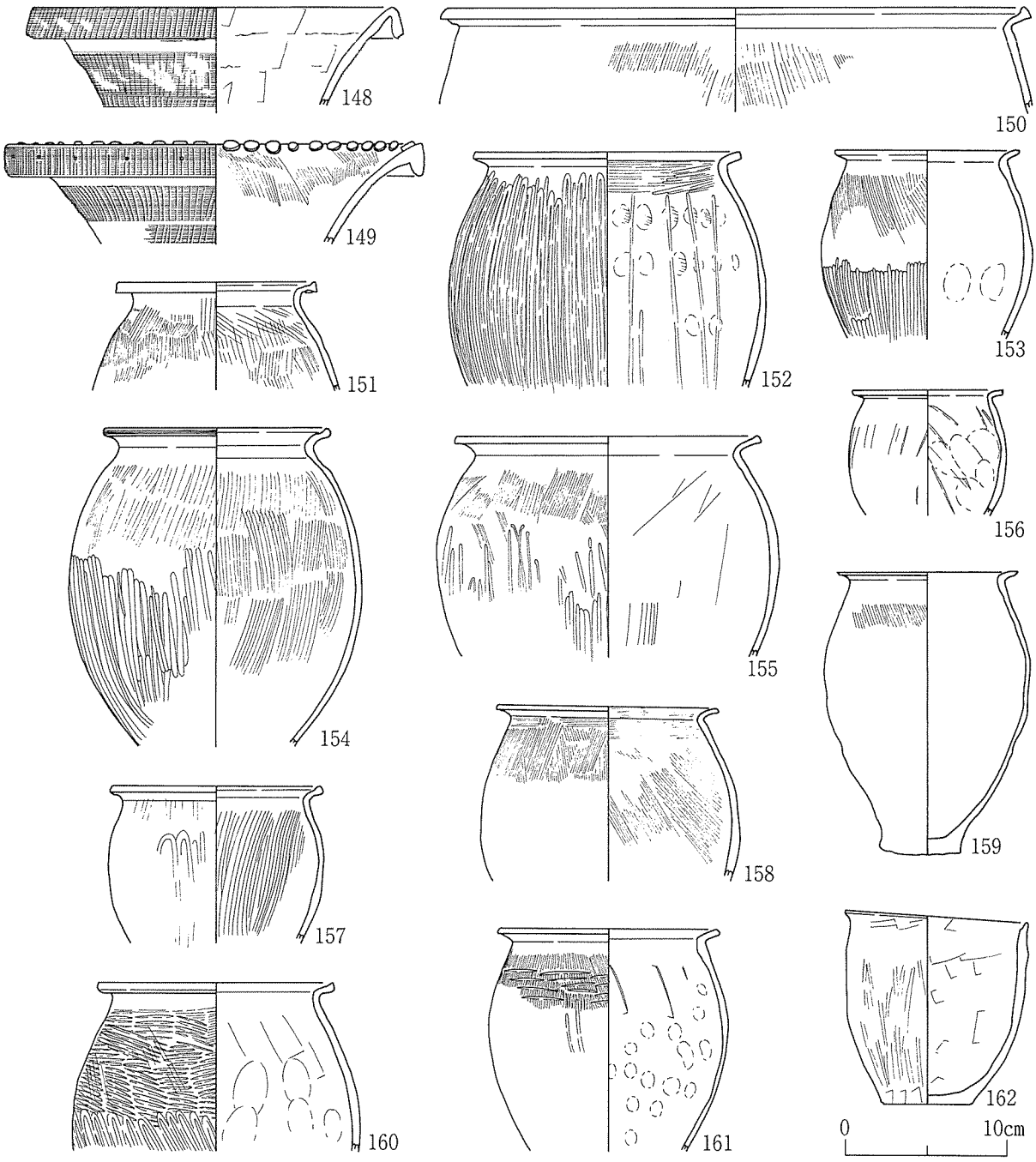
器台　143・145は共に体部の破片である。共に幅広の凹線文を施しており、円形透かしが143には２個、145には１個部分的に残存している。

土坑23(第28～29図)

21点を図示した。器種は壷(148・149)、甕(150～162)、蓋(163)、高杯(164・166)、鉢(165・167・168)である。

壷　共にＡ１形態である。148は端面と頸部に簾状文を施す。頸部の簾状文は幅が広いものである。149は端面に簾状文と刺突文、頸部に簾状文を施す。口縁内面に円形浮文を貼り付けている。

甕　Ａ１(152・153・155・158・161)、Ａ２(159・162)、Ｃ(151・154・156・157・160)・Ｄ(150)の各形態の甕がある。159は器表面の剥落が著しい。162は頸部のくびれがほとんど認められず、口縁部は若干上外方に外反しているようである。Ｃ形態・Ｄ形態の６点はいずれも口縁端部を上方に拡張



第28図　土坑23出土遺物実測図

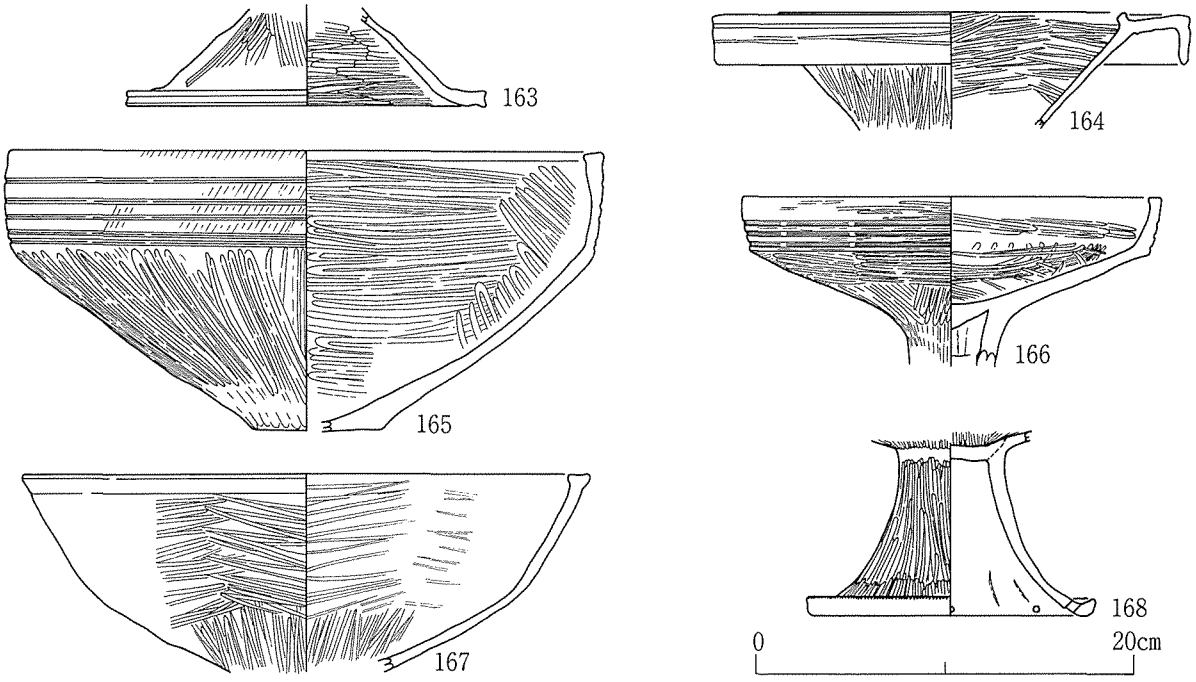
する。156は端面に刻み目を施している。155は非生駒西麓の胎土である。

蓋　163は「ハ」の字状に広がり、裾部が外反するものである。内面に煤の付着が認められる。

高杯　Ｂ１形態(164)とＡ２形態(166)がある。外面に凹線文を164には１条、166には３条施す。166は柱状部にシボリメが認められる。

鉢　共にＡ２形態である。165は口縁部がやや内彎して頸部に凹線文を５条施している。体部下半および内面はミガキ調整がなされる。167は無文で内外面ともミガキ調整されている。168は台付鉢脚部で「ハ」の字状に広がり裾部を上方に拡張する。裾付近に円形透かし穴が８個存在し、端部上面に刻み目を施している。

土坑24(第30図)



第29図　土坑23出土遺物実測図

9点を図示した。器種は壷(169)、甕(170・171・173)、高杯(174)、鉢(175～177)、蓋(172)である。

壷　169はＡ３形態で、口縁端面に波状文を施している。

甕　Ｃ形態が171・173、Ｄ形態が170であり、173は体部のふくらみが小さく、口縁部は短くほぼ水平に外反する。171は口縁端部を上方に拡張し、170は端面を上下に拡張する。

高杯　174はＡ２形態で口縁部がゆるやかに立ち上がる。外面に凹線を５条施している。

鉢　Ａ２形態(176)、Ｂ１形態(175・177)の２種類がある。176は体部が内彎して端面をもつ。175は体部が上外方に広がり口縁部は下方に折り曲げられる。177は体部が内彎して口縁上面が面をなし、無文である。非生駒西麓の胎土である。

蓋　172は「ハ」の字状に広がり、裾部を上下方に拡張して面をもつ。２孔１対の紐穴が上部に残存している。内面はケズリ調整される。

土坑34(第31図)

12点を図示した。器種は壺(178・179・181)、長頸壷(180)、甕(182～184)、水差形土器(185)、蓋(188)、鉢(186・187)、高杯(189)である。

壷　178はＡ３形態で端部を上下に拡張し端面に簾状文を施している。179はＦ形態で端部を上方に拡張し端面に波状文、頸部に凹線文を５条、更に間隔を開けて1条が残存している。 181はＣ形態で、端部を上下に拡張し上端部に刻み目を施している。179・181の胎土は非生駒西麓の胎土である。

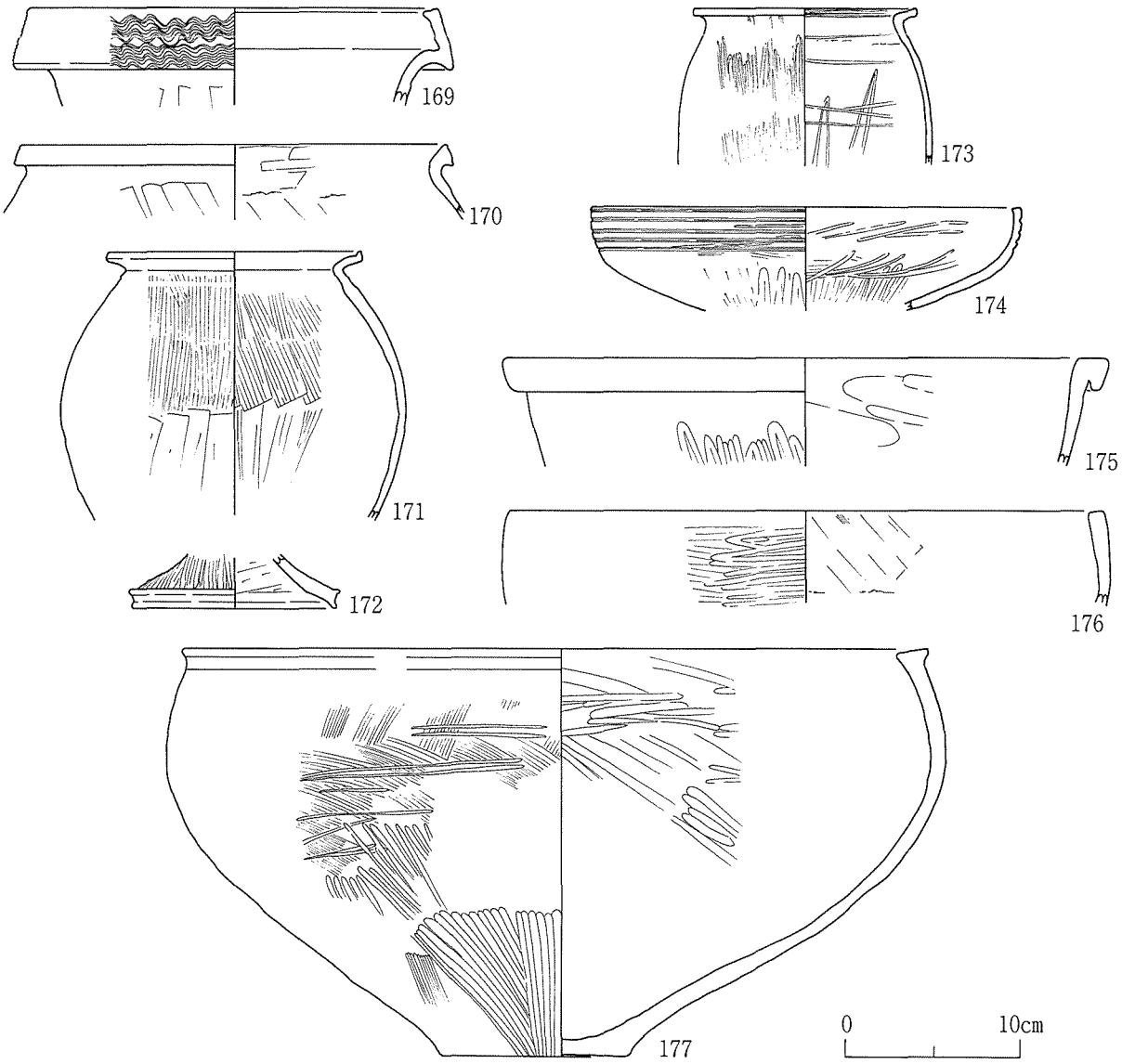
長頸壷　180は内外面ともハケ調整がなされ上端は面をなす。頸はほぼまっすぐに立ちあがる。

甕　182・183はＡ１形態で同一個体の可能性もある。184はＤ形態で、口縁は肥厚し、端面に刻み目を施している。

水差形土器　185はＡ形態で口縁部が把手側に低くなるよう斜め方向に傾斜している。把手は欠損している。外面上半には簾状文を施し、下半はミガキ調整がなされている。

蓋　188はＣ形態で、「ハ」の字状に大きく開くもので、端部は面をなす。内面に煤が付着している。

鉢　186・187はＢ１形態である。186は最大径が体部下半にあり、内彎する体部と短く外反する口縁をもつ。端面と体部に簾状文を施す。187は椀状に広がる体部と短く外反する口縁をもつ。端部は



第30図　土坑24出土遺物実測図

丸くおさめられ、体部に簾状文を施す。

高杯　189はＡ２形態でやや内彎しており、端部は面をなす。外面に凹線文を５条施す。

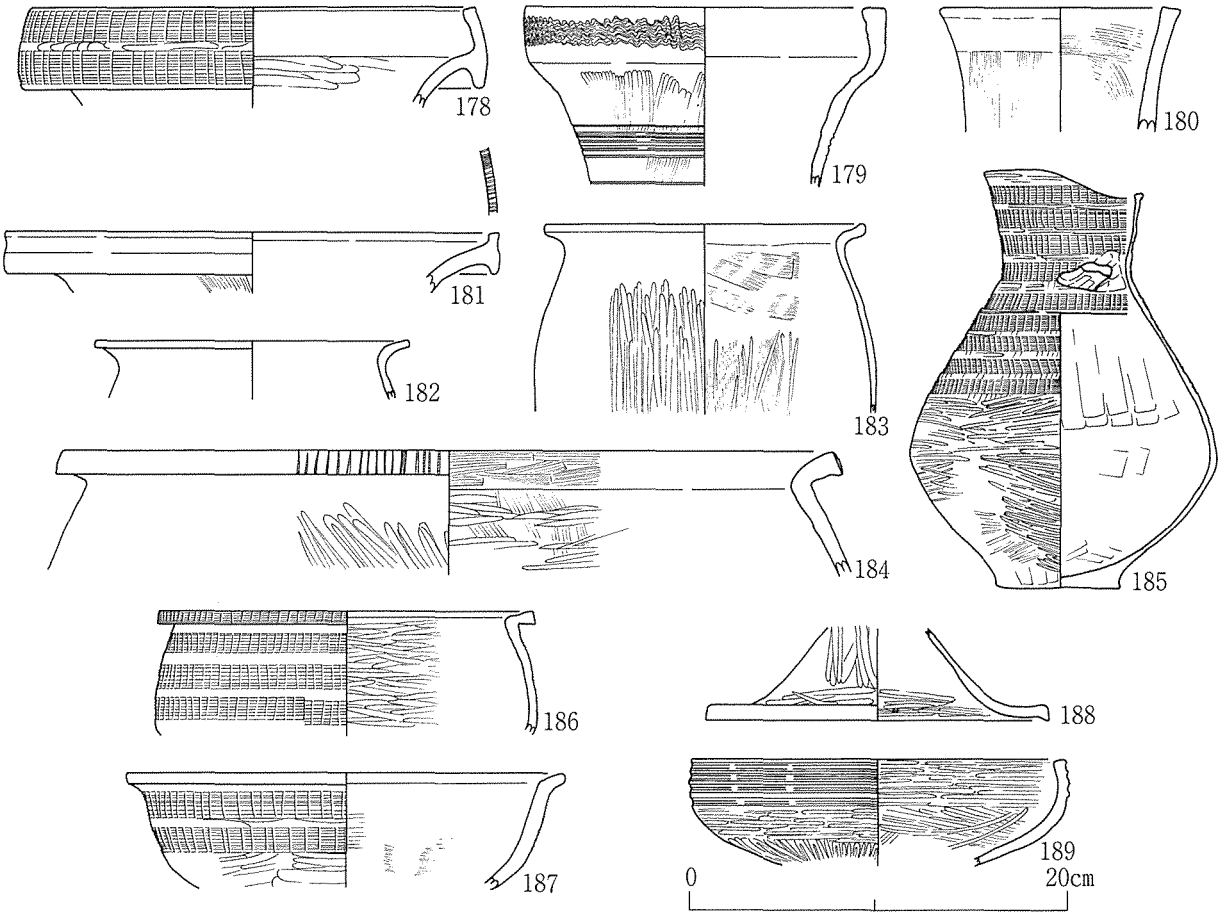
土坑77(第32図)

22点を図示した。器種は壷(190・191・194・195・197)、細頸壷(192)、甕(198～206・208)、鉢(207・209・211)、蓋(196)、高杯(193・210)である。

壷　Ａ２(191・197)、Ａ３(190・194・195)の各形態がある。191は端面に簾状文、197は刺突文を施す。190は口縁を上下に拡張するが特に上方に大きく拡張し、端面に列点文、簾状文と刺突文２帯を施し、円形浮文が１列４個のもの２列を１組として貼り付けている。頸部には簾状文を施している。194・195は端面に刻み目を施す。

細頸壷　192は凹線文８条と直線文を施している。

甕　Ａ１(198・199・201・206)、Ｂ(200・202・203)、Ｃ(204)、Ｄ(205・208)の各形態がある。198・201は端部を丸くおさめている。199は端部に「Ｏ」字状の刻み目を施す。非生駒西麓の胎土である。206は端部に粘土を足して拡張している。200・202は端部を大きく下方に拡張し、202は端面に刺突文を施す。203は端部を上方に拡張する。204は球形の体部をもち端部を上方に拡張し、体部中央



第31図　土坑34出土遺物実測図

以下はケズリ調整がなされる。205は口縁を下方に拡張し、端面に凹線文を２条施す。208は端部を上方に拡張し、文様なのかは不明であるが体部に爪状の圧痕が複数、不規則につけられている。

鉢　Ａ１(207)、Ａ２(209)、Ｂ２(211)形態がある。207は口縁内面に細かい線状の刻み目、外面に簾状文を施す。209は体部が内彎して立ち上がり上端が面をなす。外面に刻み目、簾状文、波状文を施す。いずれも非常に細かい施文である。211は口縁が段状をなし端面に列点文、体部に幅広の簾状文を施す。

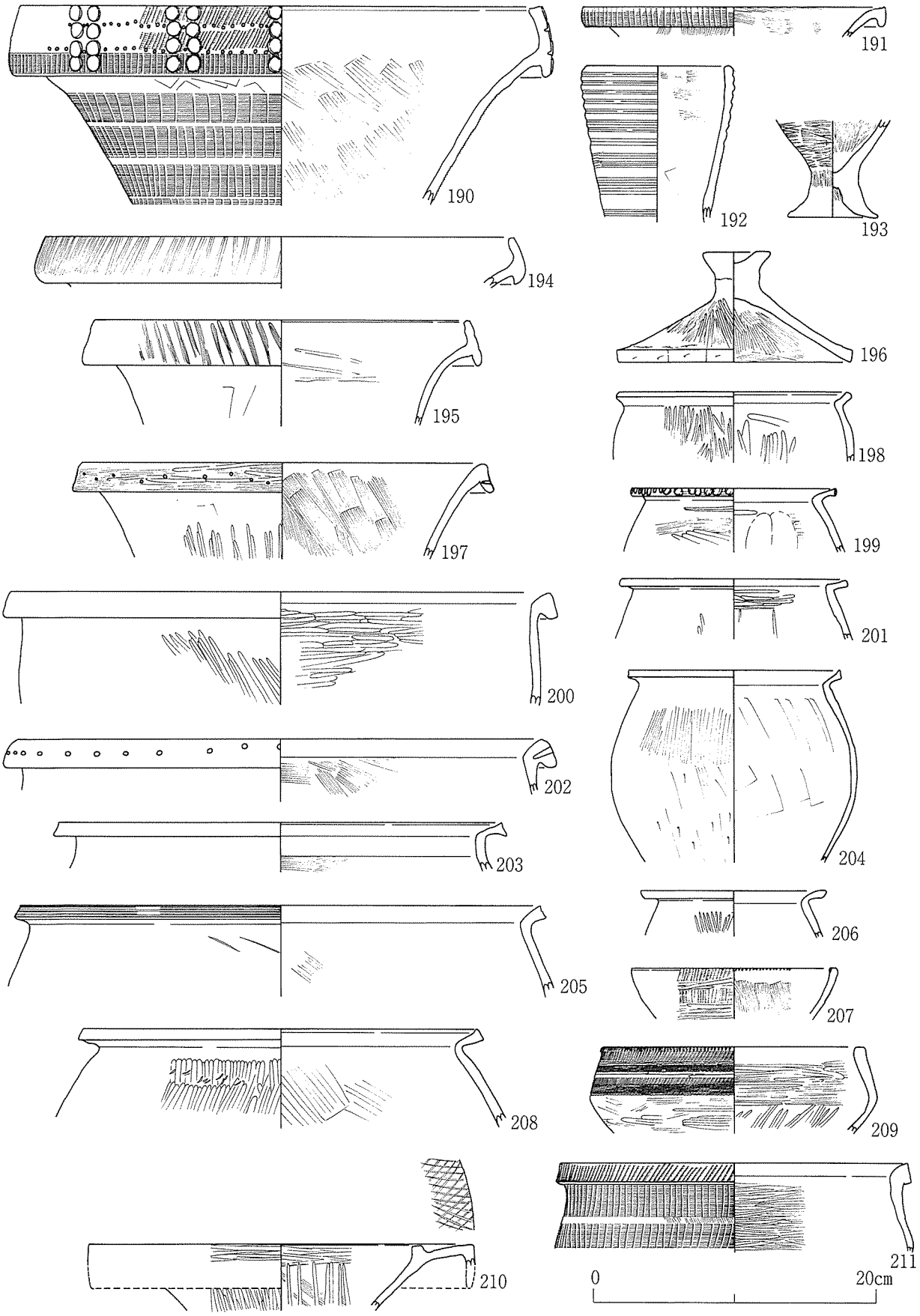
蓋　196は「ハ」の字状に広がり端部が面をなす。つまみは大きく、頂部を丸く窪ませ上端部を広げて握りやすくしている。裾端面はケズリ調整される。裾の周縁部は赤変しており煤も付着する。

高杯　210はＢ１形態で口縁部上面に暗文風斜格子ミガキを施す。脚部(193)は裾部が短くて脚高が低く、脚部の器壁も厚い。

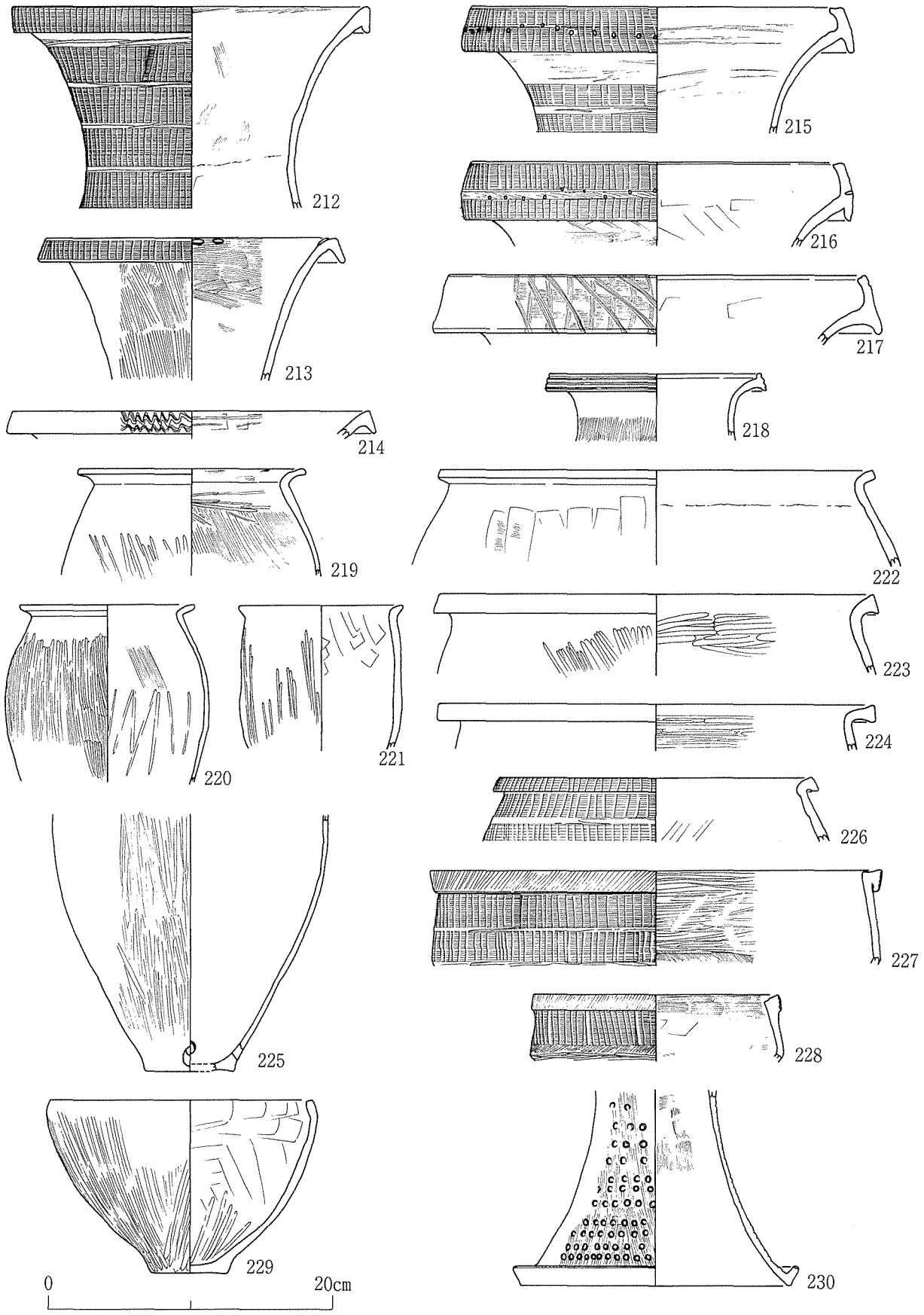
土坑79（第33図）

19点を図示した。器種は壷(212～218)、甕(219～225)、鉢(226～230)である。

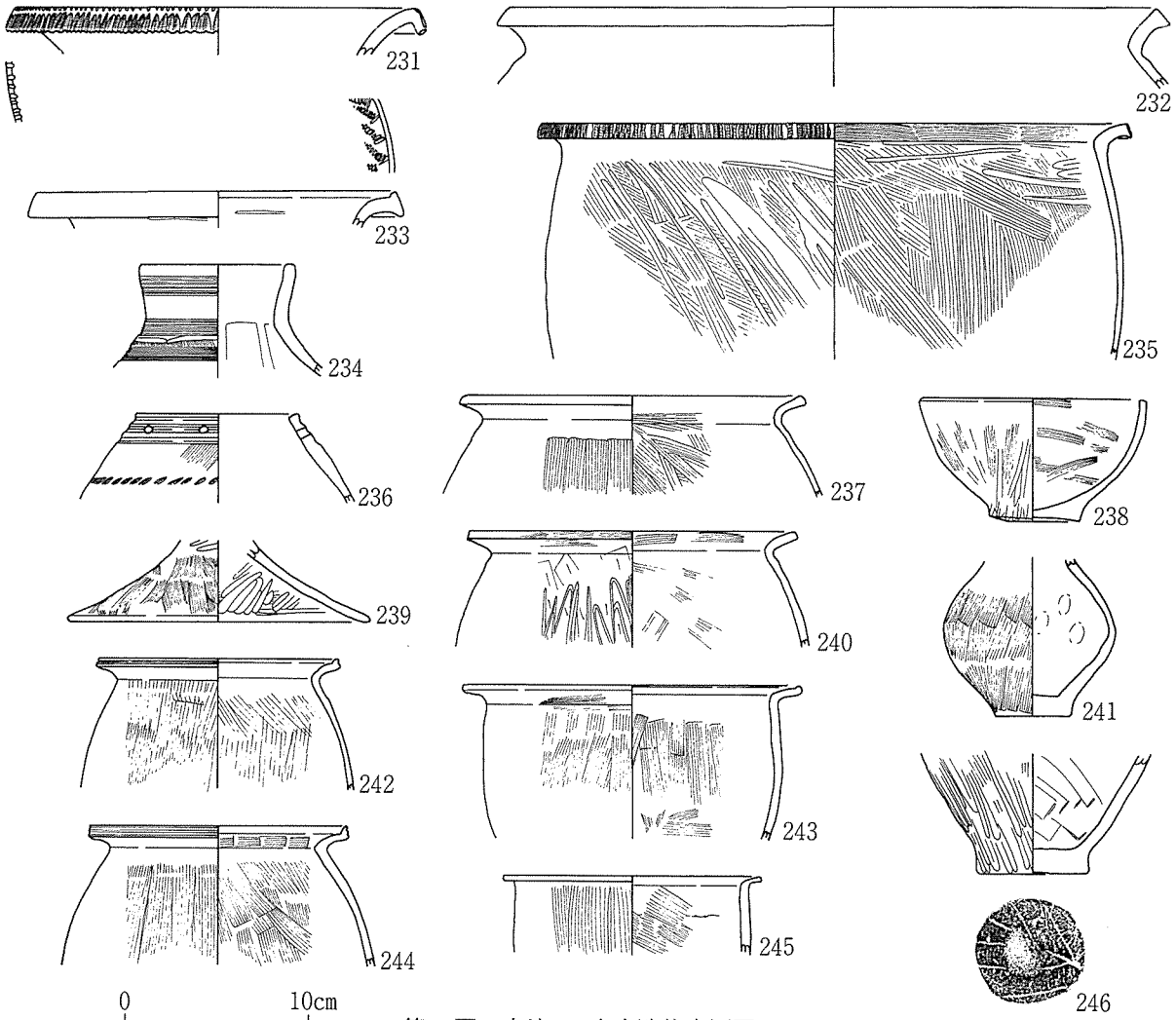
壷　Ａ１(213・214)、Ａ２(212)、Ａ３(215・216)、Ｂ２(217)、Ｄ(218)の各形態がある。213は端面に簾状文を施し、口縁内面に円形浮文を２個１組として貼り付けている。214は端面に波状文、212は端面および体部に簾状文を施す。簾状文の幅はかなり広く、頸部は太く筒状を呈する。215・216は口縁を上下方に拡張し、共に端面の上下に簾状文、中央に刺突文を、215は頸部にも簾状文を施す。217は端部を上下に拡張し、端面に斜格子文を施す。218は頸部が短く直立し、筒状を呈する。口縁を上下方に拡張し端面に凹線文を３条施す。非生駒西麓の胎土である。



第32図　土坑77出土遺物実測図



第33図　土坑79出土遺物実測図



第34図　土坑151出土遺物実測図

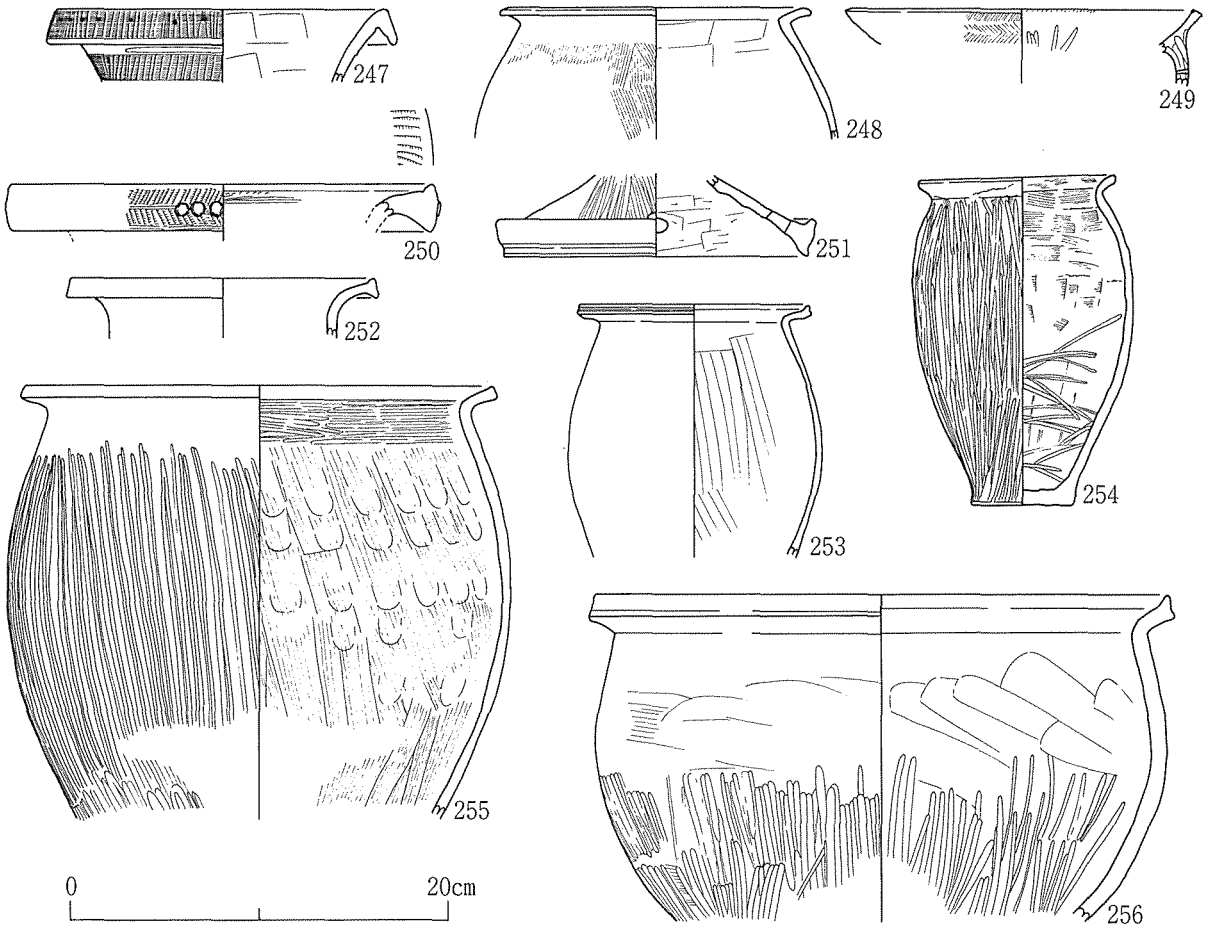
甕　Ａ１(219・220・221)、Ｂ(222)、Ｄ形態(223・224)がある。219は端部が若干面をなし、220・221・222は端部を丸くおさめる。221は直立する体部から短い口縁部が外反する。223・224はいずれも端部を上下に拡張し面をなす。225は底部で、焼成後外面から穿孔を１ヶ所開ける。298(図版44)は著しく歪んでいるが、短く外反して厚い口縁をもち、端面をつくる。この器形の歪みは土圧によるものではなく、焼成前に既に歪んでいたと考えられるものである。

鉢　Ａ２(229)、Ｂ１(226)、Ｂ２(227・228)の各形態がある。229は内外面とも無文で、口縁部は内彎して、端部は面をなす。226は内彎する体部と短く外反する口縁をもつ。端面および体部に簾状文を施す。227・228はＢ２形態で口縁部が段をなすが、228の段は退化し痕跡に過ぎなくなっている。共に端面に列点文、体部に簾状文を施す。228は体部にも列点文を施す。230は台付鉢の脚部で「ハ」の字状に広がるものである。外面にびっしりと竹管文を施すが、上方に行くにつれて文様の間隔が開いてくるようである。さらに上方に拡張された端部の上面に部分的に刻み目を施す。

土坑151(第34図)

16点を図示した。器種は壷(231・233・241)、無頸壷(236)、甕(232・235・237・240・242～246)、水差形土器(234)、蓋(239)、鉢(238)である。

壷　231はＡ１形態で端面に刻み目を施す。いずれの刻み目も深くはっきりと施している。233はＣ形態で端部を上下に拡張し、口縁内面に扇状文を施す。241は小型壷で口頸部を欠いている。



第35図　土坑25・35・37・76・ピット316出土遺物実測図

無頸壷　236はＢ２形態で凹線文と刻み目を施し、２孔１対の紐穴が開けられている。

甕　Ａ１(237・240・243・245)・Ｂ(232・235)・Ｃ(242・244)の各形態がある。237は端面をもち、240は端部を丸くおさめる。243・245は直立する体部から口縁部が直角に外反する。243は若干端部が肥厚する。232・235は共に端部が面をなす。232は無文、235は端面に刻み目を施す。242・244は端部を上方に拡張し、端面に凹線文を施す。246は底面に木の葉圧痕が残っている。

水差形土器　234は頸部および体部に直線文を施している。

蓋　239はＣ形態で、外面にハケ調整、内面にミガキ調整がなされる。非生駒西麓の胎土である。内面に煤が付着する。

鉢　238はＡ２形態で、内外面ともハケ調整がなされ無文である。平面形態は非常に歪んでいる。

土坑25(第35図)

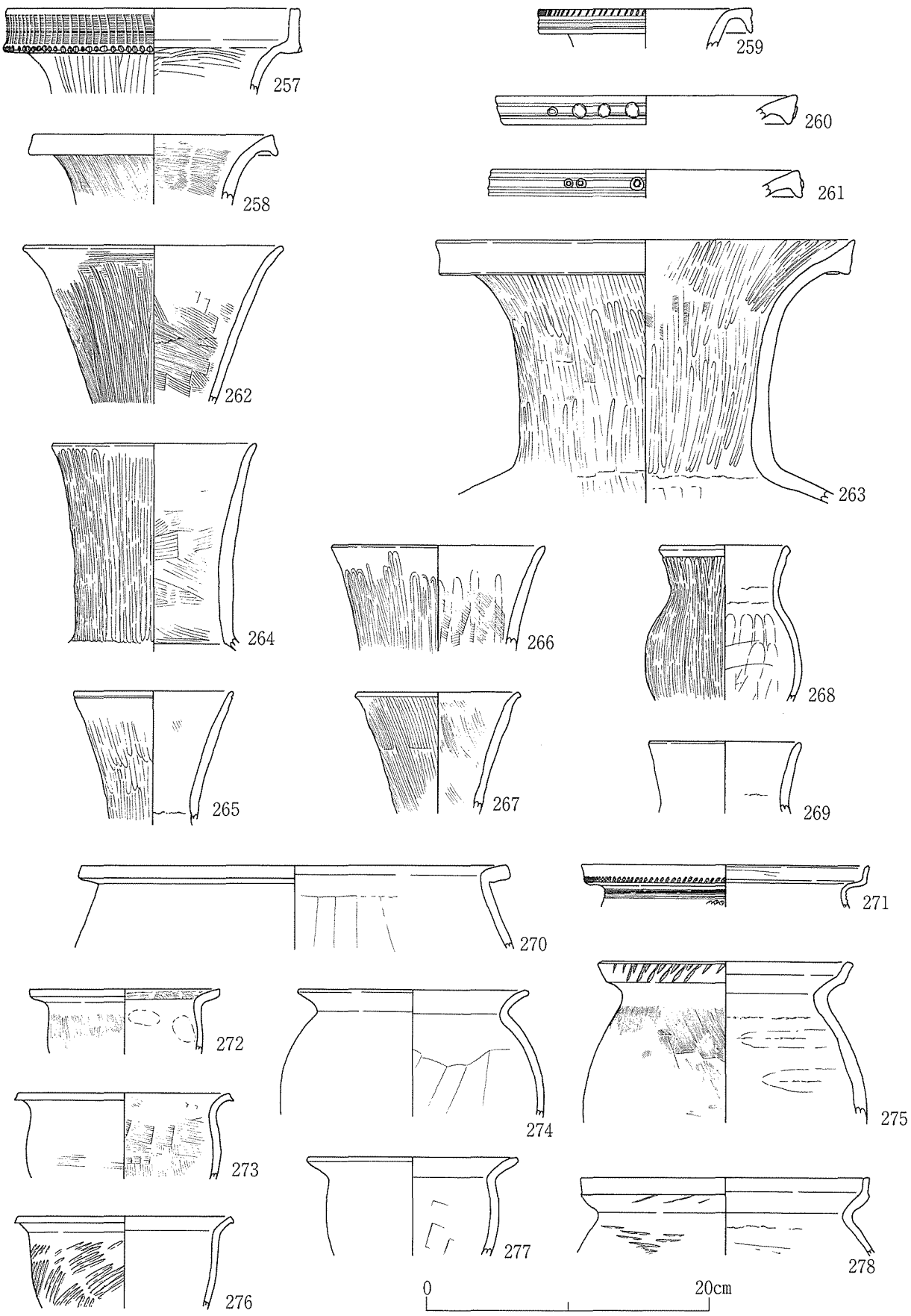
６点を図示した。器種は壷(247・250・252)、甕(248)、鉢(249)、脚部(251)である。

壷　Ａ１形態(247)、Ｃ形態(250・252)であり、247は端面に簾状文と刺突文、頸部に簾状文を施す。250は口縁端面に羽状列点文、内面に列点文を施し、口縁端面には円形浮文が貼り付けられる。252は内外面とも無文で、端部を上方に拡張する。250・252は非生駒西麓の胎土である。

甕　248はＡ１形態で口縁は一度外反した後若干下方に下がる。端部は丸くおさめる。

鉢　249はＡ２形態で把手付鉢である。体部外面に綾杉文状の刻み目、口縁内面に刺突文を施す。把手に直径１㎜の極小さな穿孔が１ヶ所存在する。

脚部　251は「ハ」の字状に広がるもので、端部は上下方に拡張される。端面下方に凹線文を１条施し、円形透かし穴も残存する。内面はケズリ調整される。



第36図　竪穴住居１出土遺物実測図

土坑35(第35図)

甕C(253)1点を図示した。端面に凹線文を1条施し、端部は上方に拡張される。外面は著しく剥離している。

土坑37(第35図)

鉢B1(256)1点を図示した。端部を強く上方に拡張する。端面下端に鋭い稜をもつ。口縁部形態だけでは甕との区別がつき難いが、器高よりも胴部最大径の方が大きくなるようなので鉢とした。

土坑76(第35図)

甕C(255)1点を図示した。端部を上方に拡張し、面をなす。

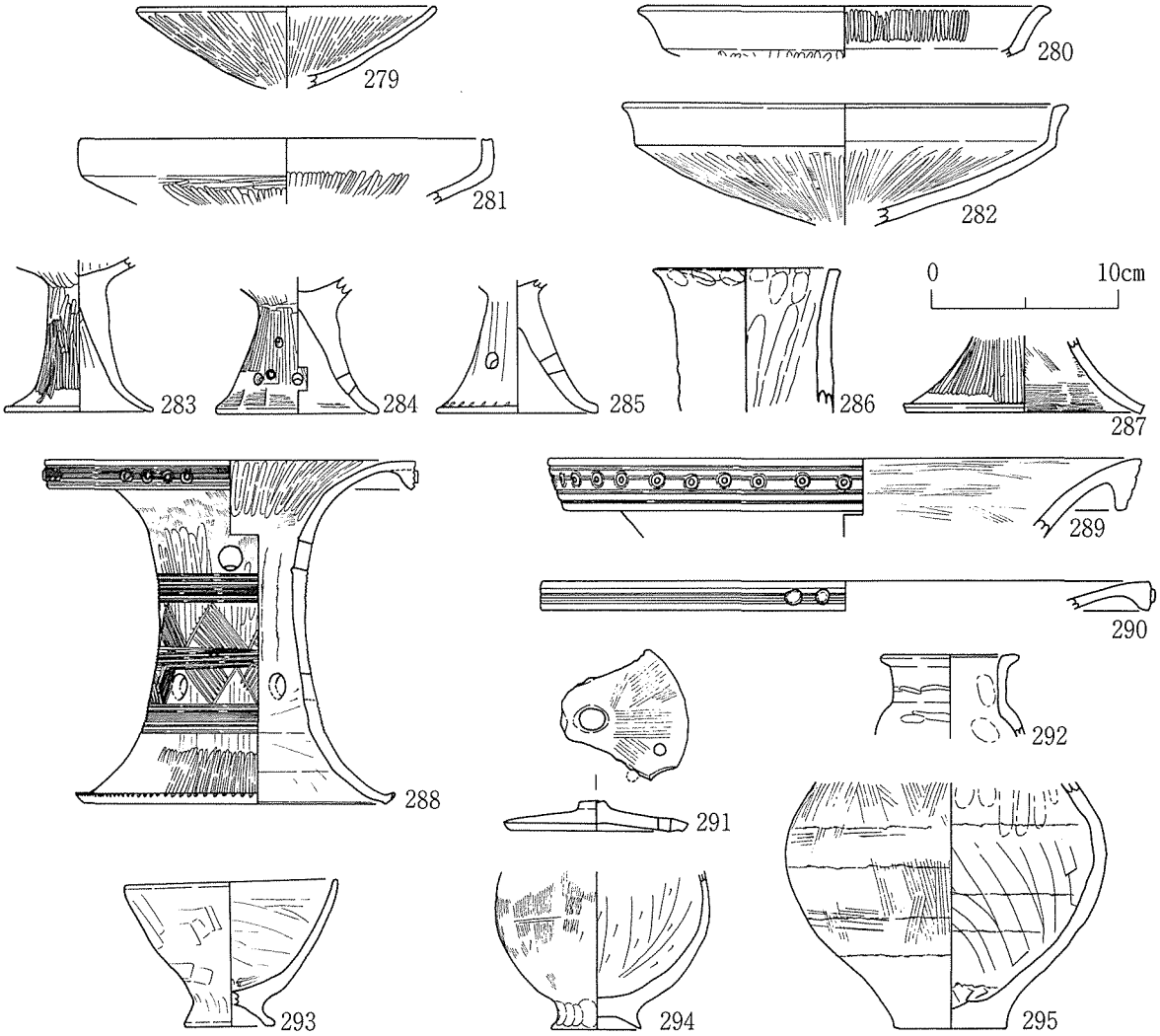
ピット316(第35図)

甕A1(254)1点を図示した。完形で出土した細身の甕で、端部は丸くおさめる。

竪穴住居1(第36～37図)

39点を図示した。器種は広口壷(258～261・263)・長頸壷(262・264～267・286)・短頸壷(268・269)、壺底部(294・295)、甕(271～278)、高杯(279～285)、器台(288～290)、蓋(291)、椀形鉢(293)、ミニチュア土器(292)、脚部(287)である。

遺構の時期としては弥生時代後期に属するが、若干中期の遺物も含まれている(257・270)。周囲か



第37図　竪穴住居1出土遺物実測図

らの混入と考えられる。257は壷Ｆで端面に簾状文と刻み目を施している。270は甕Ｂで無文である。

広口壷　259～261の３点は端面に凹線文と刻み目(259)・円形浮文(260)・竹管文(２個１組)(261)を施している。260は端面および口縁内面に、261は竹管文内に赤色顔料の痕跡が認められる。263は肩部までほぼ完形の状態で出土した大型壷で、口縁内面に赤色顔料の痕跡が認められる。

長頸壷　いずれも無文であるが、頸部から口縁部にむかって外反するもの(262・265・267)とほぼまっすぐに伸びるもの(264・266・286)の２種類が認められる。286は非常に成形が雑で、内面や口縁には成形時のユビの跡が残り、器形にも大きな歪みが認められる。

短頸壷　共に無文である。269の外面は丁寧にミガキ調整されている。294・295は壷の底部である。294は外面に高台状のものを付け足している。内面はケズリ調整がなされている。295は粘土の接合痕が明瞭に認められる。

甕　272・273・276・277の４点は外反口縁鉢に分類される可能性もあるが、とりあえず甕に含めておく。いずれも無文であるが、276は外面にタタキ調整がなされている。非生駒西麓の胎土である。271はいわゆる近江型の甕で、口縁端面に刻み目を施す。ただし、胎土は生駒西麓のものである。275は端面に刻み目を施す。275・278は口縁が受け口状に立ち上がる。

高杯　杯部には椀形の279と立ち上がりを持つ280～282の２種類が認められる。脚部はいずれも「ハ」の字状に開く形態のものであり、284・285には円形透かし穴がある。284には図上では４個あるように見えるが、内側まで貫通しているのは１個のみであり、残りは竹管文風の窪みになっているだけである。285には透かし穴は３個開けられ、裾部に刻み目を施している。

器台　いずれも装飾を施しており、端面に凹線文と竹管文(288・289)または円形浮文(290)を施している。特に288は全体の形状を知ることができ、凹線文、竹管文、円形透かし穴、直線文、鋸歯文、刻み目を施す。鋸歯文は播磨以西でよく用いられている施文である。ただし、胎土は生駒西麓のものである。また288には端面と口縁内面、289には竹管文内と凹線文内及び口縁内面、290には円形浮文と口縁内面にそれぞれ赤色顔料の痕跡が認められる。

蓋　291は低いつまみを持ち、２孔１対の紐穴を開けている。煤の付着は認められない。

椀形鉢　293は鉢に低い高台がつくもので内外面共にナデ調整がなされている。

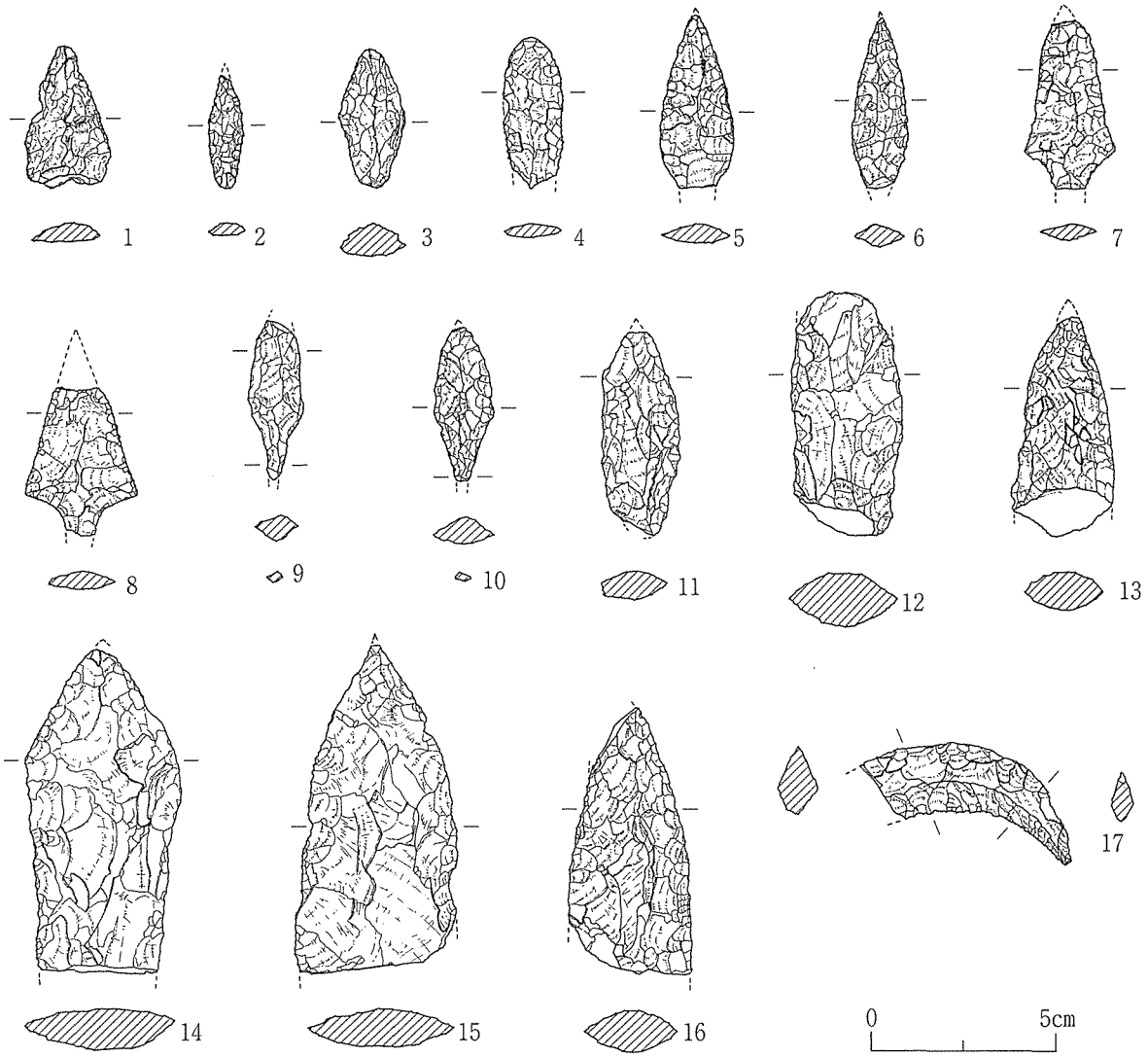
ミニチュア土器　292は短頸壷もしくは長頸壷を模したものと思われる。ユビオサエの痕跡が内面に残り、口縁端部が肥厚して外反する。

脚部　287はどの器種に付くものか不明であるが「ハ」の字状に開き端部が面をなす。

３）石器(第38・39図)

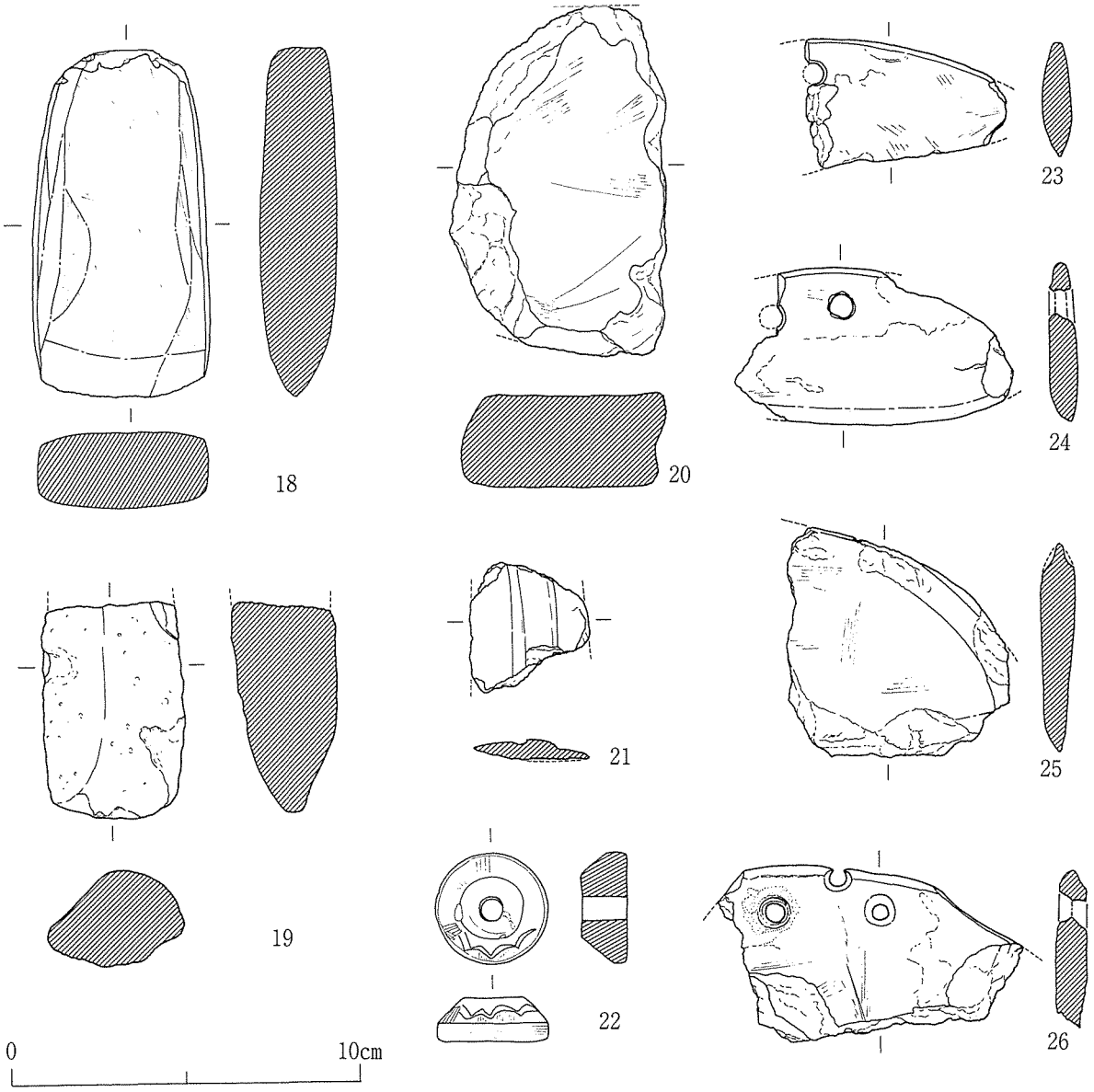
打製石器では、石鏃(32点)、石槍(10点)、削器(17点)、石剣(７点)、石錐(２点)、石小刀(１点)と多量の剥片が出土している。

１～８は石鏃である。１は、３層出土で、凹基式で、縦型剥片である。長さ3.85cm、幅2.3cm、厚さ0.5cm、重さ4.05gである。製作途中品と思われる。溝46から出土した２は、凸基式で、横型剥片である。先端部が欠損しており、残存長3.05cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.04ｇを測る。３は土坑35から出土した。縦型剥片で、製作途中品である。長さ3.8cm、幅1.8cm、厚さ0.9cm、重さ5.01ｇを測る凸基式である。４は3b層から出土した。凸基式だが、基部が欠損している。残存長4.1cm、幅1.6cm、厚さ0.35cm、重さ2.54ｇ。3c層から出土した５は、横型剥片で、サヌカイト製の凸基式である。両端が欠損しており、残存長4.7cm、幅1.95cm、厚さ0.5cm、重さ3.90ｇを測る。６は溝46から出土した。凸基式だが、両端は欠損している。残存長4.65cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、重さ3.36ｇ。７は土坑35出土で、凸基有茎式である。両端を欠損しており、残存長は4.6cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm、重さ4.71ｇ



第38図　打製石器実測図

を測る。４層上面出土の８も凸基有茎式である。両端を欠損しており、残存長4.0cm、幅3.0cm、厚さ0.5cm、重さ5.68ｇ。９は石錐である。３～４層で出土した。錐部が細長く、頭部と錐部の境が明瞭である。先端が欠損しており、残存長4.3cm、幅1.5cm、厚さ0.65cm、重さ3.80ｇを測る。10も石錐で、3b層下面で出土した。平面形は菱形を呈し、基部に回転穿孔による擦過痕がみられることから両端を錐部にしたと思われる。両端が欠損しており、残存長4.15cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ3.93ｇ。11～16は石槍である。11はピット436から出土した。平面形は側辺に最大幅があり先端部と基部に向かって幅を減じ、断面形は菱形を呈する。基部には原面が見られ、製作途中品と思われる。先端が欠損しており、残存長5.5cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm、重さ11.38ｇ。撹乱から出土した12は、平面形は両側辺が平行し、断面形は菱形を呈する。両端が欠損しており、残存長6.65cm。幅3.0cm、厚さ1.5cm、重さ37.52ｇである。13は溝118から出土した。横型剥片で、断面は菱形を呈す。両端が欠損しており、残存長5.95cm、幅2.8cm、厚さ1.05cm、重さ17.53ｇを測る。14は井戸4から出土しており、片面が製作途中と思われる。両端が欠損しており、残存長8.8cm、幅4.2cm、厚さ1.1cm、重さ58.47ｇ。3b層出土の15も両端が欠損しており、残存長8.9cm、幅4.4cm、厚さ1.0cm、重さ43.60ｇを測る。16は４層上面から出土した。縦型剥片で、断面は菱形を呈する。基部が欠損しており、残存長7.3cm、幅3.3cm、厚さ1.1cm、重さ33.83ｇである。裏面に研磨痕と思われる痕が見られる。17は残土出土の石小刀で、

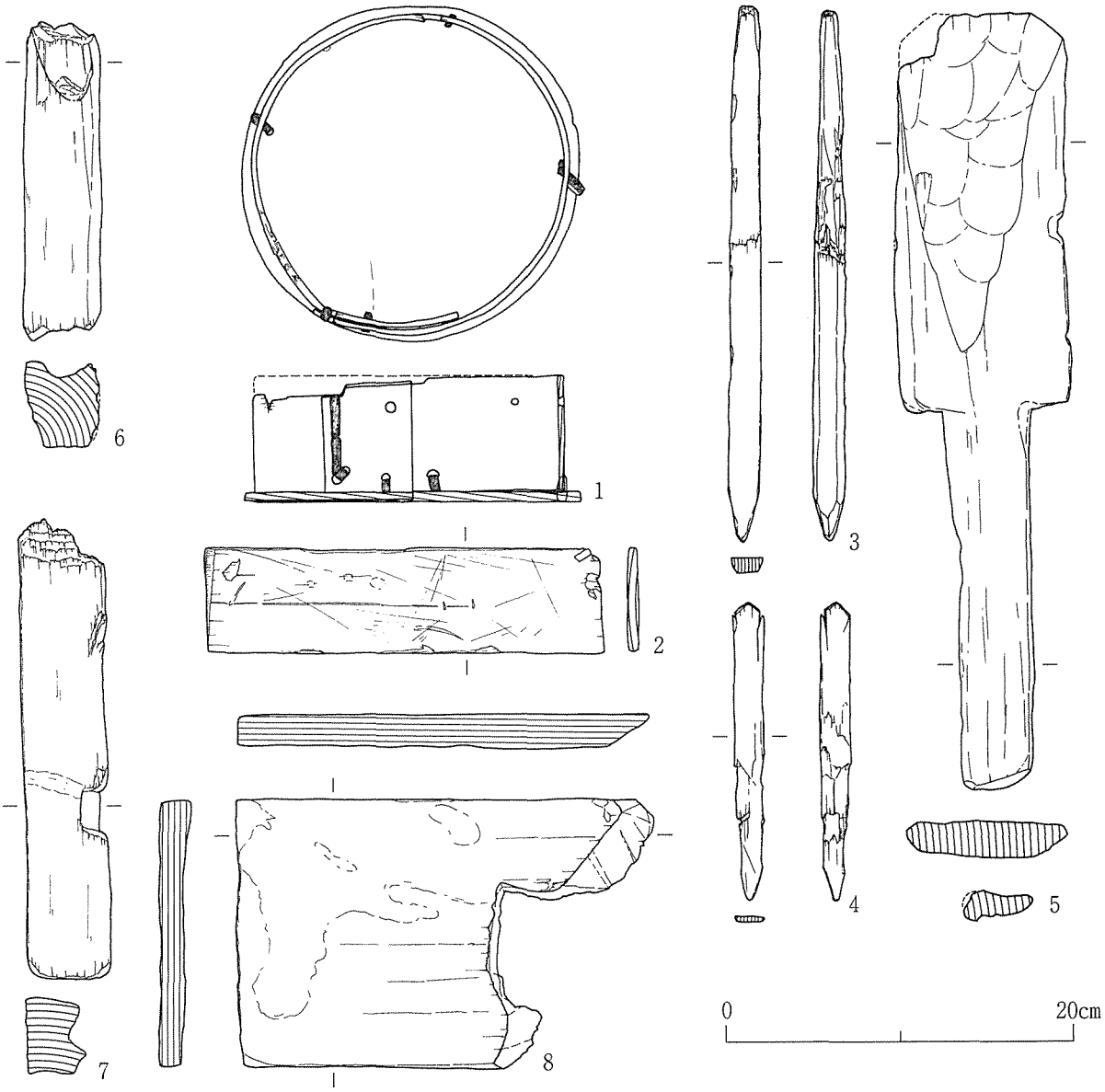


第39図　磨製石器実測図

サヌカイト製である。平面形は全体的に弧を描き、両面調整が丁寧である。両端が欠損しており、残存長5.7cm、幅1.8cm、厚さ1.05cm、重さ10.60ｇである。

磨製石器では石包丁(５点)、石斧(４点)、石剣(1点)、紡錘車(1点)、砥石(５点)などがある。

18は太型蛤刃石斧である。北側溝掘削時に出土した。平面形は基部が弧を描き刃部が広くなる長台形を呈し、断面は扁平である。刃部に刃こぼれが見られる。長さ10.1cm、幅5.05cm、厚さ2.2cm、重さ216.34ｇである。19は閃緑岩の太型蛤刃石斧で、２層から出土した。基部は欠損しており、残存長6.2cm、幅4.0cm、厚さ2.8cm、重さ120.74ｇである。20は砥石で、3層から出土した。砥面は２面で、残存長10.1cm、残存幅6.3cm、厚さ3.6cm、重さ279.03ｇである。21は石剣である。3b層から出土した。黒色粘板岩製の有樋式と思われる。残存長3.7cm、残存幅3.4cm、厚さ0.6cm、重さ7.65ｇである。22は滑石製紡錘車で、3d層から出土した。縦断面形は台形を呈し、上面の直径1.8cm、下面の直径3.2cm、厚さ1.3cm、重さ20.10ｇを測る。全体に砥石による擦過痕が見られ、側面には波状文の線刻が施されている。23～26は石包丁である。23は２～3d層出土である。半月形を呈し、両刃である。残存長



第40図　木製品実測図

5.8cm、幅3.7cm、厚さ0.8cm、重さ22.77ｇである。24は3b層下面で出土した。片刃で、外湾刃半月形と思われる。紐孔は外転穿孔である。残存長8.0cm、幅4.6cm、厚さ0.8cm、重さ34.74ｇ。25は溝47aから出土した。片刃で、直線刃半月形である。残存長7.15cm、残存幅6.3cm、厚さ1.0cm、重さ74.25ｇを測る。大型の石包丁と思われる26は土坑113から出土した。全体に使用による欠損が見られ、砥石による線条痕が裏表に見られる。紐孔は３ヶ所あり、上部の紐孔は最初の加工時のもので、下部の紐孔は再加工時に穿ったものと考えられる。紐孔は回転穿孔である。残存長8.8cm、残存幅5.2cm、厚さ0.8cm、重さ56.77ｇである。

４）　木製品　(第40図)(図版56～68)

今回の調査では、井戸１、５、７から木枠が出土した。木枠に関する詳細は表３に記しているので、ここでは割愛するが、井戸５からは組上げ順を記したであろう墨書の入った木枠板が出ていることに注目しておきたい。

木枠のほかに、井戸１、５から曲物、斎串、用途不明品などが出土した。1は、井戸１の下層から

表３　井戸枠計測表

井戸１

板番号	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	形状	木取り	備考
縦板東１	48.5	24.5	6.0	板	板目	枘穴1箇所（貫通）　上部腐食
東２	53.5	17.5	8.0	板	板目	上部腐食
東３	45.0	30.0	5.5	板	板目	枘穴1箇所（貫通）　上部腐食
縦板西１	40.5	24.0	6.0	板	板目	枘穴1箇所（貫通）　上部腐食
西２	57.5	18.5	6.0	板	板目	上部腐食
西３	43.5	27.0	4.5	板	板目	枘穴1箇所（貫通）　上部腐食
縦板南１	56.0	30.5	7.5	板	板目	枘穴1箇所(貫通)　上部腐食
南２	25.5	9.5	3.5	板	板目	上部腐食
南３	72.5	26.5	8.0	板	板目	枘穴1箇所(貫通)　上部腐食
縦板北１	68.0	30.5	8.5	板	板目	枘穴1箇所（貫通）　上部腐食
北２	44.5	11.0	4.5	板	板目	上部腐食
北３	46.0	26.5	9.0	板	板目	枘穴1箇所（貫通）　上部腐食
桟1	60.0	4.5	5.0	角材		両端に枘があった可能性あり　南側の桟？
桟２	60.0	5.5	5.0	角材		一方の端に枘あり（片方は欠損）
桟３	76.5	6.5	4.0	板	板目	一方の端に枘あり（片方は欠損）　東側
桟４	77.0	7.5	3.5	板	板目	両端に枘あり　北側
桟５	83.5	8.0	5.0	板	板目	両端に枘あり　西側
枠板	38.0	9.5	5.5	板	板目	上部腐食
枠板	50.0	9.5	5.5	板	板目	上部腐食
横板１	119.0	20.5	5.5	板	板目	片面に加工あり
横板２	85.0	13.0	3.5	板	柾目	
横板３	45.0	長10.0	短5.0	3.0	柾目	叩き板状用途不明品
横板６	121.5	14.0	6.5	板	板目	片面に加工あり
横板７	87.0	17.0	3.5	板	板目	
横板８	117.0	14.0	7.0	板	柾目	片面に加工あり
横板９	61.5	16.0	2.5	板	板目	
横板10	115.0	15.0	8.0	板	柾目	片面に加工あり
横板11	78.0	10.5	4.5	板	板目	片面に加工あり
支柱１	133.0	10.0		柱状（半円形）		北東隅　加工痕あり
支柱２	135.5	6.5		丸太材		北西隅　樹皮残る
支柱３	139.0	8.0		丸太材		南東隅　樹皮残る
支柱４	139.5	10.0		柱状（半円形）		南西隅　加工痕あり

井戸５

板番号	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	形状	木取り	備考
横板東８	100.0	20.0	5.8	板	柾目	腐食著しい
東７	110.5	24.3	7.2	板	板目	外面やや腐食
東６	95.5	31.2	3.6	板	板目	外面腐食著しい
東５	97.0	28.5	5.8	板	柾目	外面やや腐食
東４	94.4	28.0	5.0	板	板目	外面加工痕あり　外面やや腐食
東３	96.1	34.0	5.0	板	板目	腐食著しい　「東二」の墨書あり
東２	87.5	5.0	3.6	角材		枘穴１箇所（貫通）　やや腐食（補強材）
東1	97.7	42.0	5.2	板	板目	外面腐食著しい
横板西10	108.0	17.2	4.8	板	柾目	
西９	117.0	24.6	6.8	板	板目	加工痕あり
西８	71.5	10.0	1.0	板	板目	
西７	94.0	18.0	1.0	板	板目	
西６	95.8	28.0	1.8	板	板目	
西５	96.7	18.0	2.2	板	板目	「西五」の墨書あり　墨書は不明瞭
西４	98.8	19.0	4.3	板	板目	加工痕明瞭　「西四」の墨書あり
西３	101.0	24.5	2.2	板	柾目	加工痕明瞭　「西三」の墨書あり

西２	100.7	10.0	2.8	板	板目	
西１	97.0	41.0	4.8	板	板目	加工痕明瞭
横板南10	73.7	21.5	5.0	板	柾目	腐食著しい
南９	110.0	27.0	5.6	板	柾目	腐食著しい
南８	95.8	18.0	2.6	板	板目	枘穴1箇所(貫通・栓状の別材あり)　外面加工痕あり
南７	113.5	30.5	6.2	板	板目	加工痕あり　片方の小口に切断加工痕あり
南６	96.0	12.8	3.0	板	板目	
南５	95.0	15.0	2.7	板	板目	外面やや腐食
南４	99.0	28.0	2.4	板	板目	
南３	99.5	38.0	2.4	板	板目	腐食著しい
南２	96.5	18.2	4.7	板	板目	外面加工痕明瞭
南１	99.7	41.2	3.7	板	板目	
横板北11	110.0	18.5	6.3	板	柾目	内面加工痕あり
北10	98.5	19.2	3.9	板	板目	枘穴1箇（貫通・栓状の別材あり）
北９	91.5	17.5	2.2	板	板目	節残る　枘穴２箇所(貫通・一方には、栓状の別材あり)
北8a	95.5	18.5	3.8	板	板目	外面腐食著しい
北8b	95.5	18.7	2.1	板	板目	腐食著しい
北７	95.5	15.0	1.8	板	板目	やや腐食
北６	94.0	16.0	2.3	板	板目	外面やや腐食
北５	100.0	11.7	1.5	板	板目	外面やや腐食　節残る
北４	94.5	18.0	2.2	板	板目	外面やや腐食
北３	96.0	14.6	2.5	板	板目	
北２	97.4	48.0	3.0	板	板目	外面やや腐食
北１	99.0	35.0	3.8	板	板目	外面やや腐食
桟１	73.0	3.5	2.0	角材		枘あり　上部支持
桟２	73.0	5.5	4.0	角材		上部支持
桟３	74.5	5.8	5.2	角材		両端に枘あり　枘穴２箇所(片方は貫通)　上部支持
桟４	66.5	6.5	6.0	角材		両端に枘あり　枘穴1箇所(貫通)　上部支持
桟５	79.8	4.3	3.0	角材		両端加工あり　下部北側
桟６	68.0	5.0	5.0	角材		枘穴２箇所(貫通せず)　下部南側
桟７	58.0	6.0	4.6	割材		枘穴１箇所（貫通せず）　下部東側
桟８	80.0	5.7	3.2	角材	板目	両端に枘あり　下部西側
支え1a	148.3	41.0	4.5	板	板目	腐食著しい　南側の横板を木枠外から支えていた
支え1b	118.5	21.0	3.2	板	板目	南側の横板を木枠外から支えていた　支え１aの西側にあり
支え２	106.0	8.5	2.2	板	板目	加工あり　木枠内を南西隅から北東隅にわたる支持
隅柱１	231.0	14.5		柱	丸太	枘穴３箇所　北東隅
隅柱２	246.2	12.3		柱	丸太	枘穴2箇所　北西隅
隅柱３	247.0	11.0		柱	丸太	枘穴8箇所　南東隅
隅柱４	241.5	15.0		柱	丸太	枘穴3箇所　南西隅

井戸７

板番号	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	形状	木取り	備考
横板西３	77.0	17.5	6.5	板	板目	節残る
西２	77.7	17.0	2.6	板	板目	節残る　加工痕あり
西１	76.3	13.3	6.0	板	柾目	外面やや腐食
横板南３	76.0	20.0	5.0	板	板目	節残る
南２	76.7	12.0	5.0	板	柾目	外面加工痕あり　節残る
南１	76.0	13.0	4.5	板	柾目	外面に傷あり
横板北２	76.0	10.3	1.0	板	板目	
北１	72.5	17.7	3.0	板	板目	節残る
桟１	46.0	4.5	2.3	角材	板目	枘あり
桟２	74.8	3.8	3.3	角材		両端に加工あり　西側
桟３	73.0	3.2	2.0	角材		両端に枘あり　井戸７西３と井戸５西１の間をかますのに転用している
支柱１	52.0	6.5	4.0	角材	柾目	西南西隅
支柱２	57.0	8.1	5.5	割材		枘穴1箇所（貫通せず）　南南西隅
支柱３	67.5	9.0	3.7	板	柾目	枘穴1箇所(貫通せず)　北西隅

出土した円形曲物である。ヒノキの薄板を円筒形に曲げ、底板とは桜の皮で５ヶ所留めている。底は「カキイレゾコ」で、側板は重なり部分の最後５cmのところに0.8～1.1cm間隔で５本の刻み目を入れ、桜の皮で１列内２段綴じにしている。側板の上部に５ヵ所穴があいていることからさらに上につながっていたことがわかる。底板の外面には、数条の切り傷があるが、漆の痕跡は見られない。底部径19.4cm、残存高7.2cm。２は方形曲物の部材である。井戸５井戸枠内②層から出土した。材質はヒノキで、縦木取り、つなぎには桜の皮を使用している。小口を刃物による切り目を入れて割っていることや、刃物による切り傷が多数あることから、のちに転用していることが推測できる。長さ22.8cm、幅6.0cm、厚さ1.2cmである。

３は斎串である。長さ30.9cm、幅1.8cm、厚さ0.9cm。カンナによる縦方向のケズリ調整が見られ、下部は一面を残し鋭角に削っている。４も斎串である。長さ17.2cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmである。縦木取りで、上部は圭頭状をなし、そのすぐ下に左右の切り掛けを施す。また刃物による切り傷痕が２条見られる。３、４ともに井戸１下層から出土している。

５～８は用途不明品である。５は叩き板状をしており、体部と細長い柄部からなる。体部の片面は平らに、もう一面は体部中央から斜め方向にノミで荒く削っている。体部と柄部の境は段をなさず、なだらかに仕上げる。長さ44.5cm、体部幅9.9cm、柄部幅4.3cm、厚さ2.1cm。材質はカシで、縦木取りをしている。井戸１の横板材に転用している。６は棒状の用途不明品である。長さ18.3cm、幅4.6cm、厚さ5.2cm。一面は樹皮を向いた状態のままだが、残りの三面を縦方向に削っている。縦木取りで節が残る。小口の一方は四方を各３回刃物で切込みを入れたのち折っている。枘穴が１ヶ所あるが、貫通はしていない。７も棒状の用途不明品で、長さ27.2cm、幅4.8cm、厚さ4.8cm。一面は樹皮を向いた状態のままだが、残りの三面を縦方向に削っている。小口の一方は焼いた痕跡があり、もう一方は三方を各３回刃物で切込みを入れたのち折っている。枘穴があるが、貫通はしていない。６と７は井戸５③層から出土しており、転用材の可能性もある。８は長さ24.0cm、幅15.4cm、厚さ1.8cmで、板状をしている。材質は針葉樹で、縦木取りである。抉りが１ヶ所ある。縦方向にケズリ痕が見られ、抉りのある小口は斜め方向にケズリ、尖らしている。

５．まとめ

今回の発掘調査で得られた知見を列記してまとめとしたい。

１．調査で検出した遺構・遺物は弥生時代中期～中世期の時期がある。遺構は弥生時代中期・後期、古墳時代、奈良時代末～平安時代初め、中世期のものが確認された。遺構面は２面あり、弥生時代中期～平安時代初めと中世期がある。弥生時代中期・後期、古墳時代、奈良時代末～平安時代初めの遺構は同一面で検出されており、中世期以降に削平を受けている可能性が高い。また、中世期の遺構は上面で検出した。

２．弥生時代の遺構は中期と後期のものが確認され、井戸、土坑、ピット、竪穴住居などがある。井戸は３基あり、すべて素掘りである。竪穴住居は２棟が検出され、竪穴住居１が後期初頭の時期であり、竪穴住居２は遺構が重複しているため詳細な時期が不明である。いずれの遺構も中期末～後期初頭の集落関係のものと考えられる。西ノ辻遺跡の第12・13次調査などでは自然流路になっている谷筋、第26・42次調査では方形周溝墓を主体とする墓域が確認されている。今回の調査地と照らして考えると北に大きな谷筋があり、西及び西北に墓域が広がっていたと思われる。また、当調査地及び東と東南に住居などの集落関係遺構があったことが推定される。

３．竪穴住居１は当初の規模が径約7.6mあった。その後、1回の建替えがあり、径約10mに拡張して

いる。土器の出土状況より拡張時の床面は、当初より上にあると思われるが、調査では明確には確認できなかった。また、出土遺物より、後期初頭に廃絶したと考えられる。

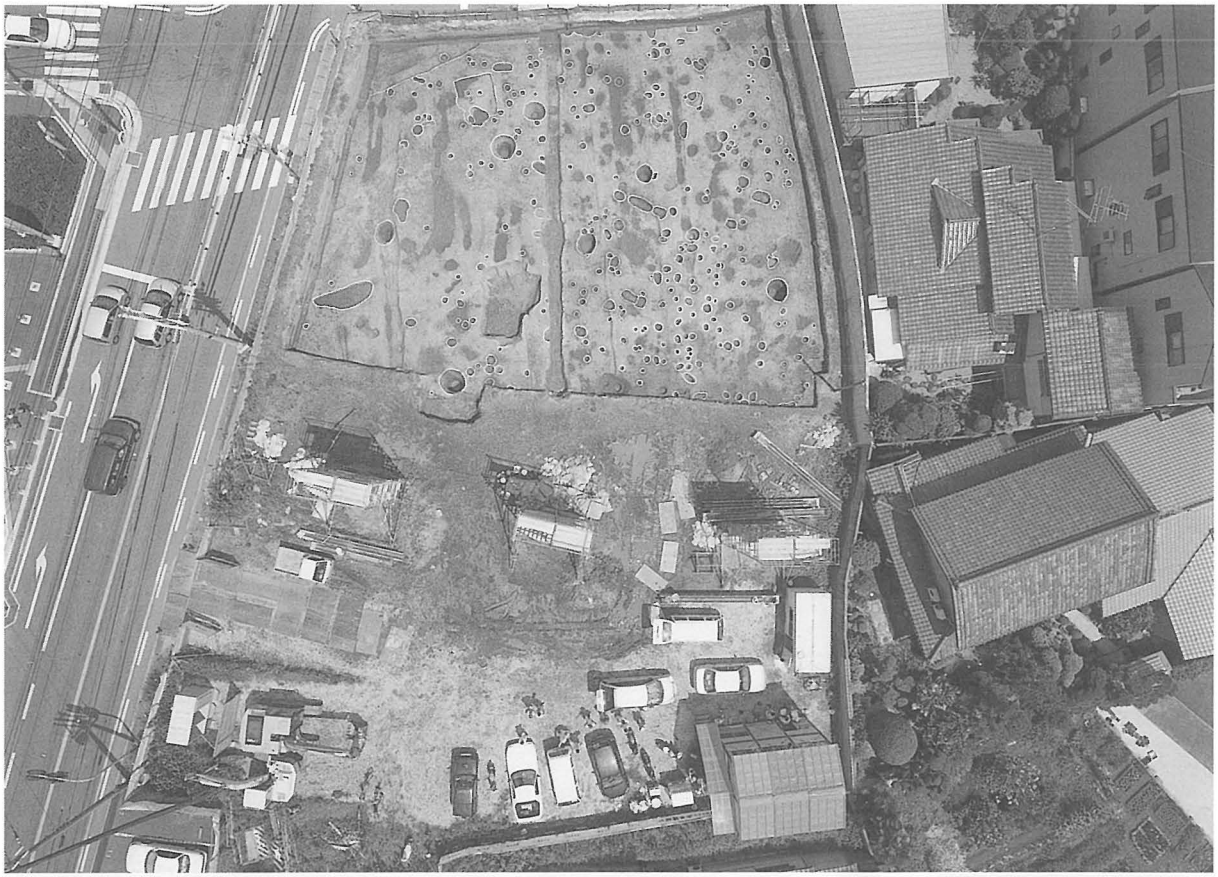
４．古墳時代の遺構は土坑、ピットなどが確認された。ピットは大きさなどから掘立柱建物などの柱穴と考えられるが撹乱が著しく明確な建物規模を確認できるものはなかった。調査地周辺に集落が広がっていたと推定される。

５．奈良時代末～平安時代初めの遺構は井戸、土坑、ピットなどが確認された。土坑及びピットは掘立柱建物の柱穴と考えられるが、明確な建物規模を確認できるものはなかった。調査地周辺に集落が広がっていたと推定される。

６．奈良時代末～平安時代初めの井戸は３基確認した。いずれも木枠を使用する。井戸１、５、７がある。井戸１は類例の少ない形状のものであり、下部に４本の支柱を打ち、その上に横板を組み、さらに上部は縦板組横桟どめである。下部は精査したが井筒の痕跡はなく、当初より素掘りであったと考えられる。当時期の井戸の形態を知る上では興味深い例である。井戸内より土師器甕や須恵器壷などの完形品が多く出土している。意図的に投入されたと考えられ、祭祀がおこなわれていた可能性が高い。また、井戸５と７は同一位置に造られており、造り替えがおこなわれたと思われる。本来の井戸は７であり、枠の基底部のみが残っていた。井戸５は造り替えの際に規模を一回り大きくしていることが確認できた。井戸枠は４本柱を立てた横板組隅柱どめである。東の横板は基底部より２番目に東二、西の横板は基底部より３・４・５番目に西三・西四・西五の墨書が残っていた。同様の類例は奈良県の平城京発掘報告ⅡのSE168－Ａがあり、組上げ番付の墨書と考えられている。西ノ辻遺跡の墨書も横板の位置と番号が一致していることから組上げ番付と考えられ、当初より、組立の順番が決まっていたと推測できる資料である。

７．弥生時代～平安時代初めの時期は集落を形成していた当地点も中世期には耕作地に変化しており、鋤溝が多数検出された。

８．弥生時代の土器が井戸２・６や土坑12・23・77・79などから多量に出土している。櫛描文と凹線文より構成されている土器群であり、中期末の一括資料と考えられる。

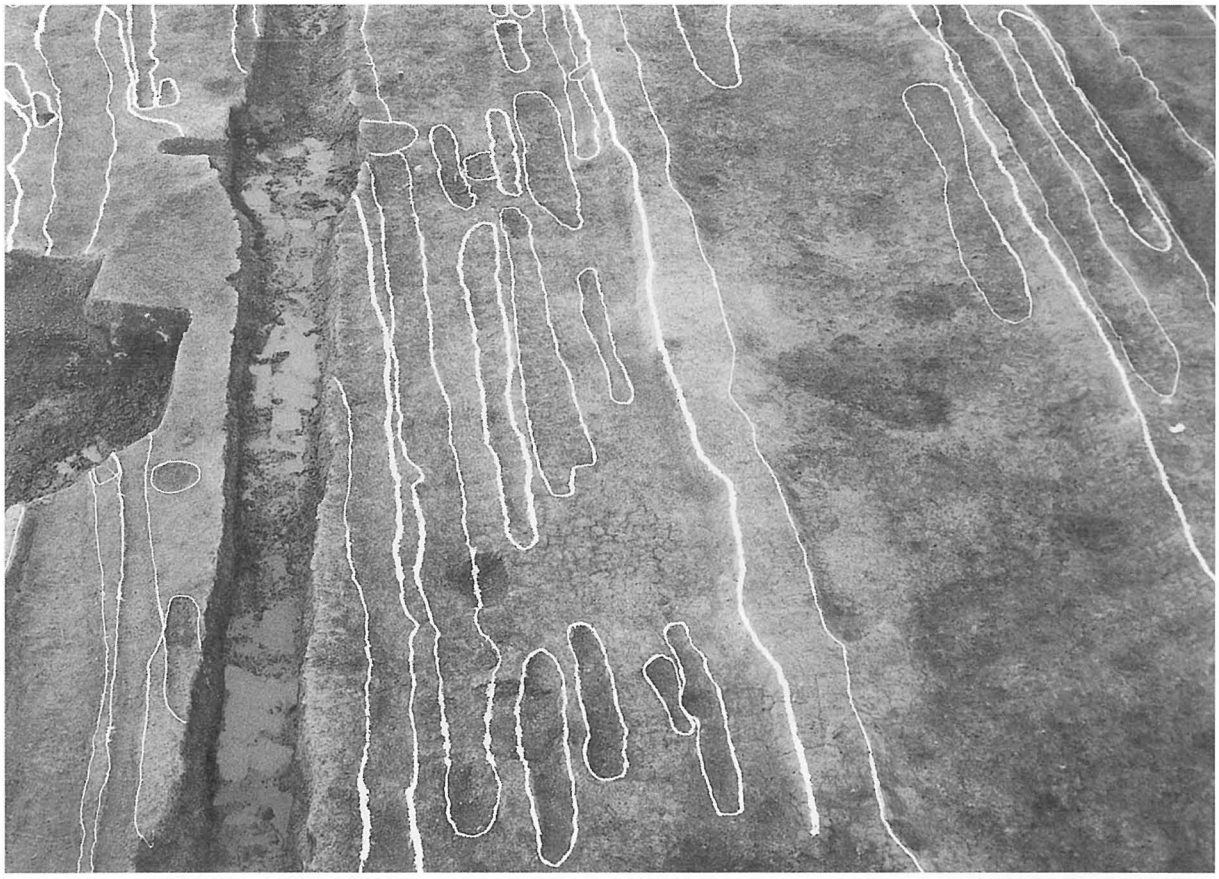


調査地全景

遺構全景（B地区）（弥生～平安時代）

遺構全景（C地区）（弥生～平安時代）

鋤溝検出状況（中世）



鋤溝検出状況（中世）

鋤溝検出状況（中世）

井戸１井戸枠検出状況

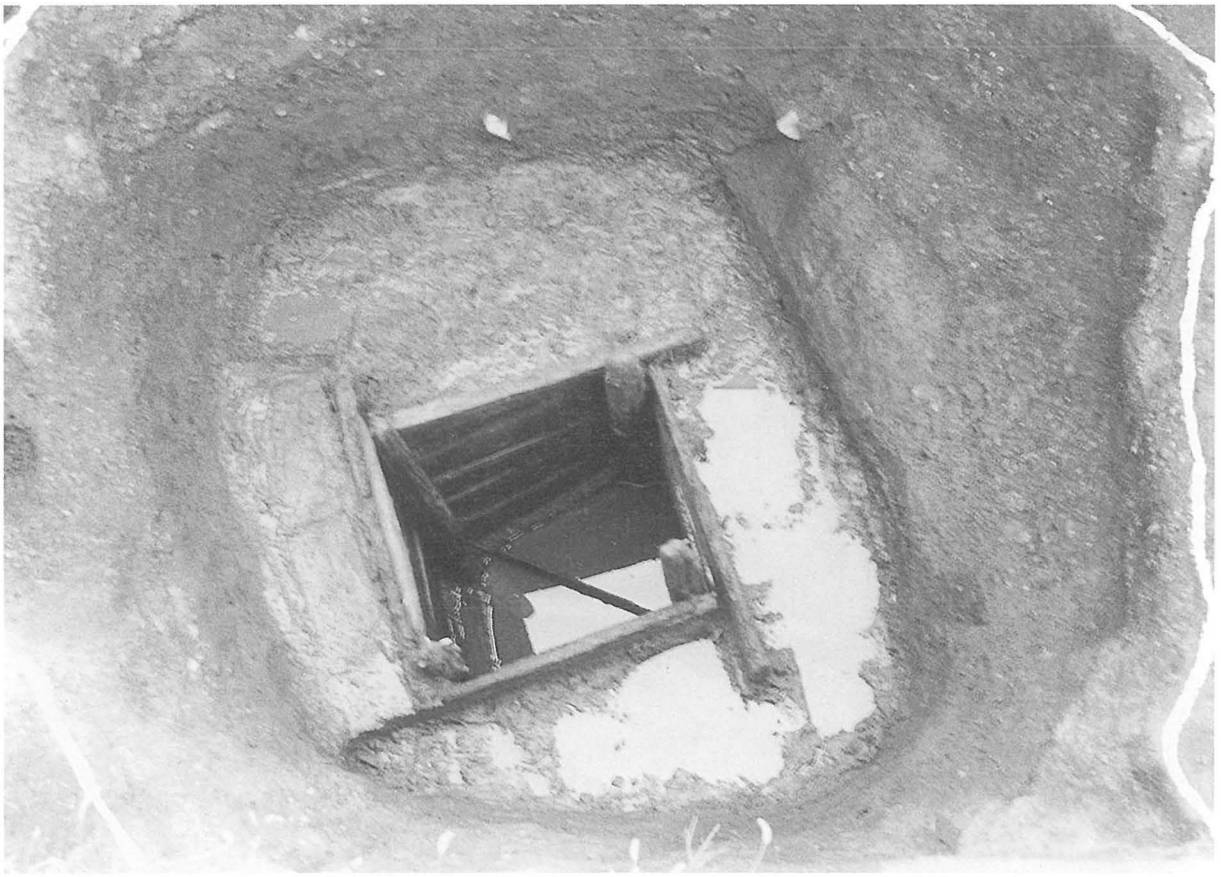
井戸１横板検出状況

井戸１支柱検出状況

井戸１掘削後状況

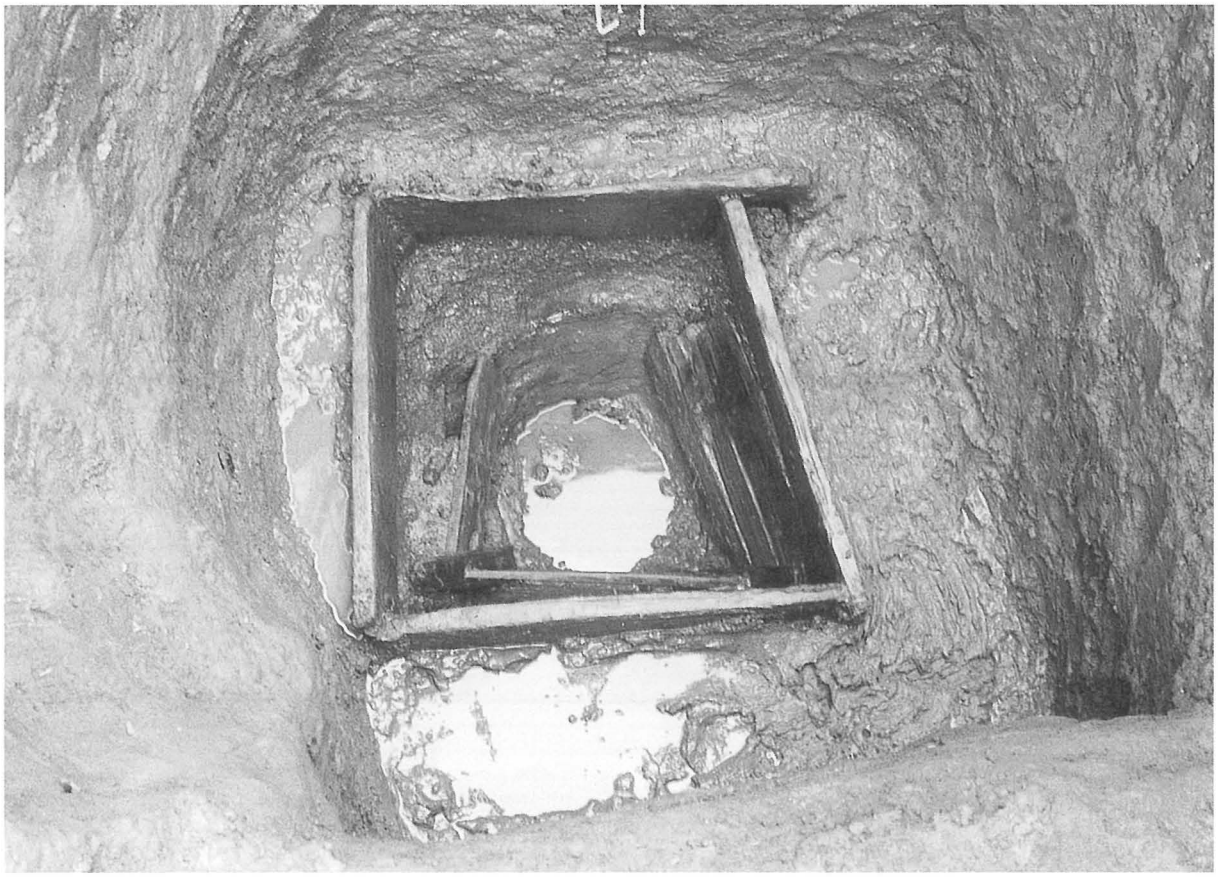
井戸５集石検出状況

井戸５井戸枠検出状況



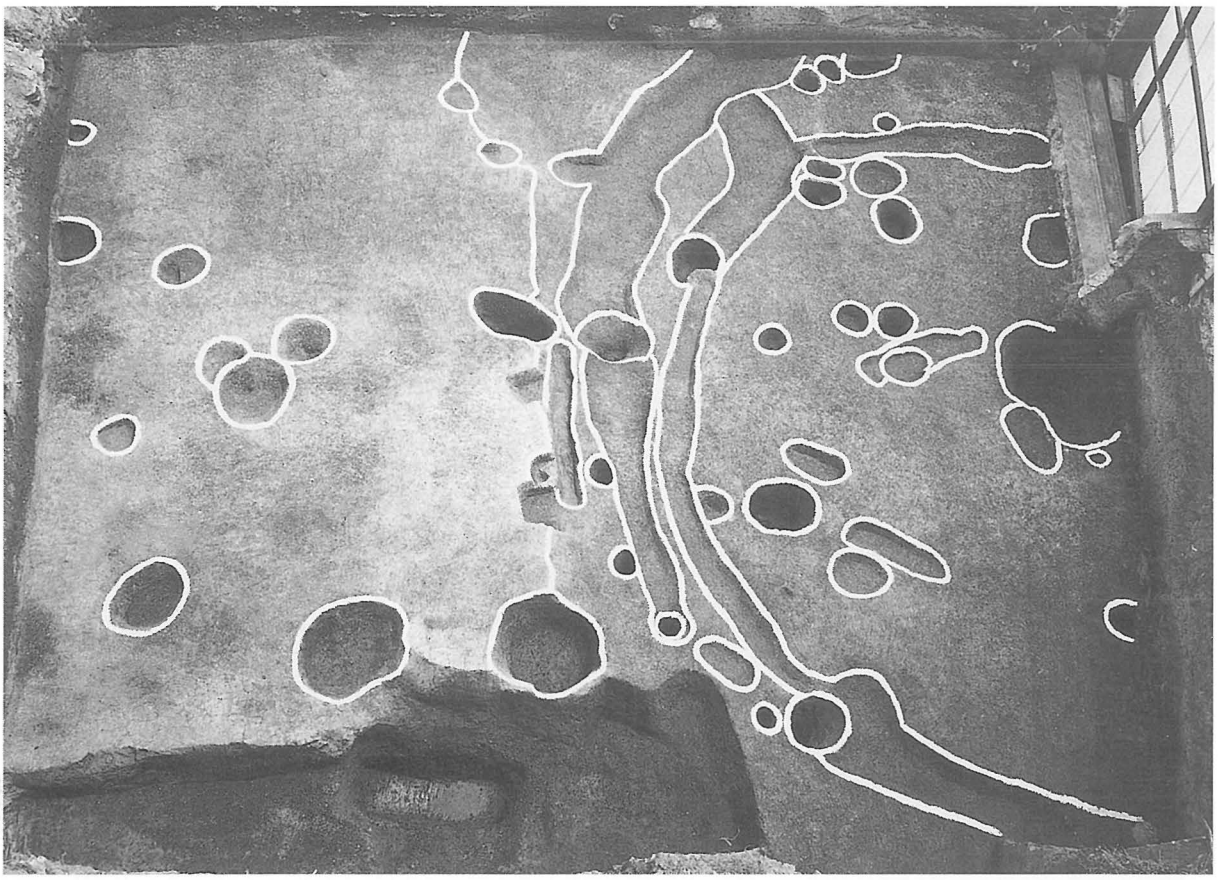
井戸5井戸枠検出状況

井戸5下部横桟検出状況

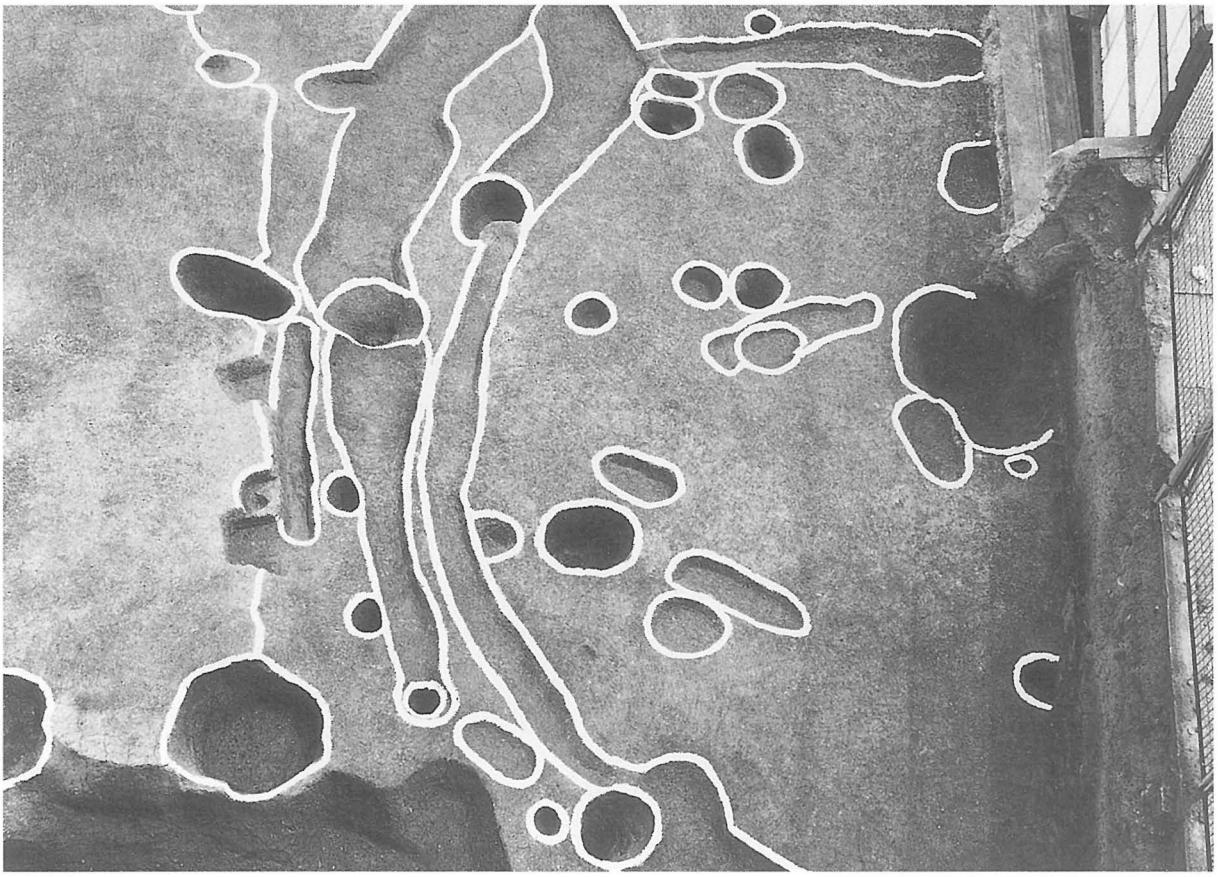


井戸５最下部井戸枠、井戸７井戸枠検出状況

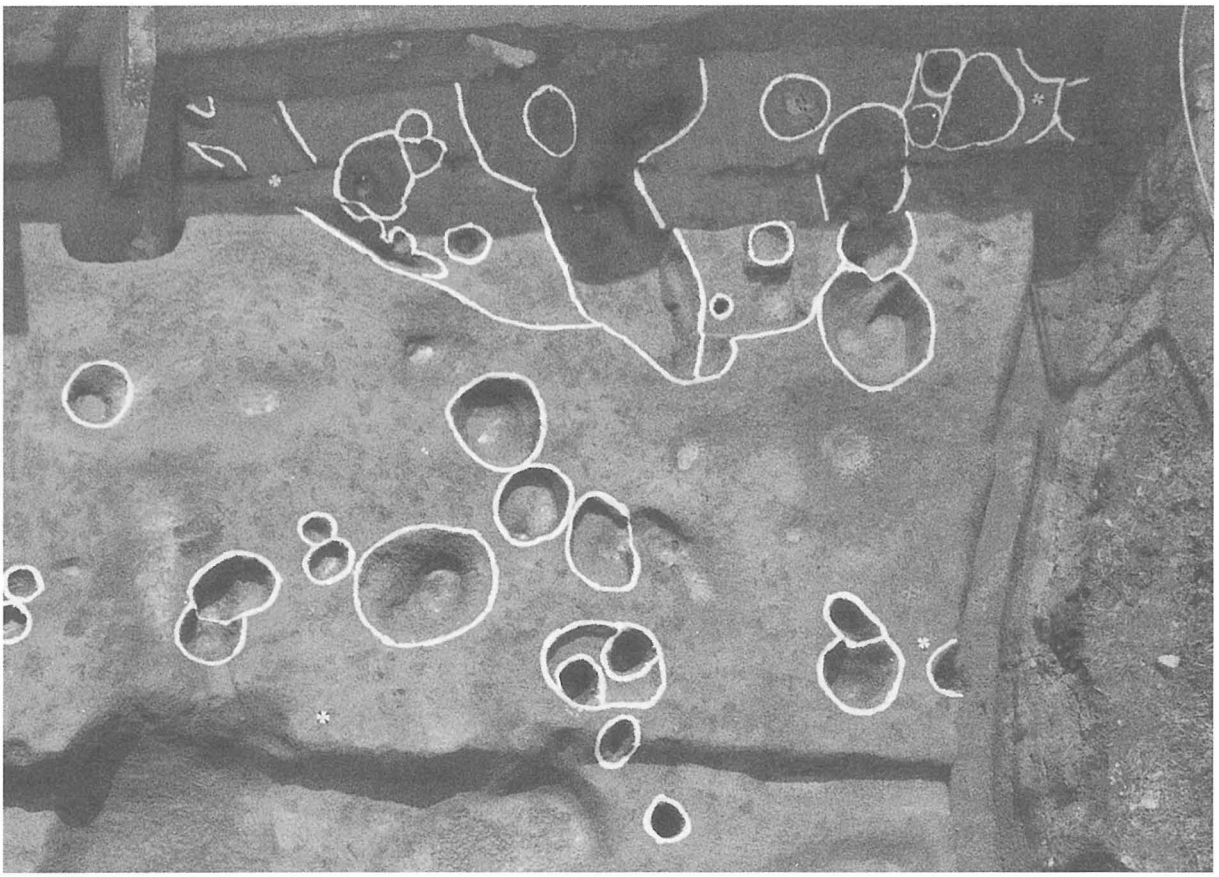
井戸５・７掘削後状況



竪穴住居１検出状況



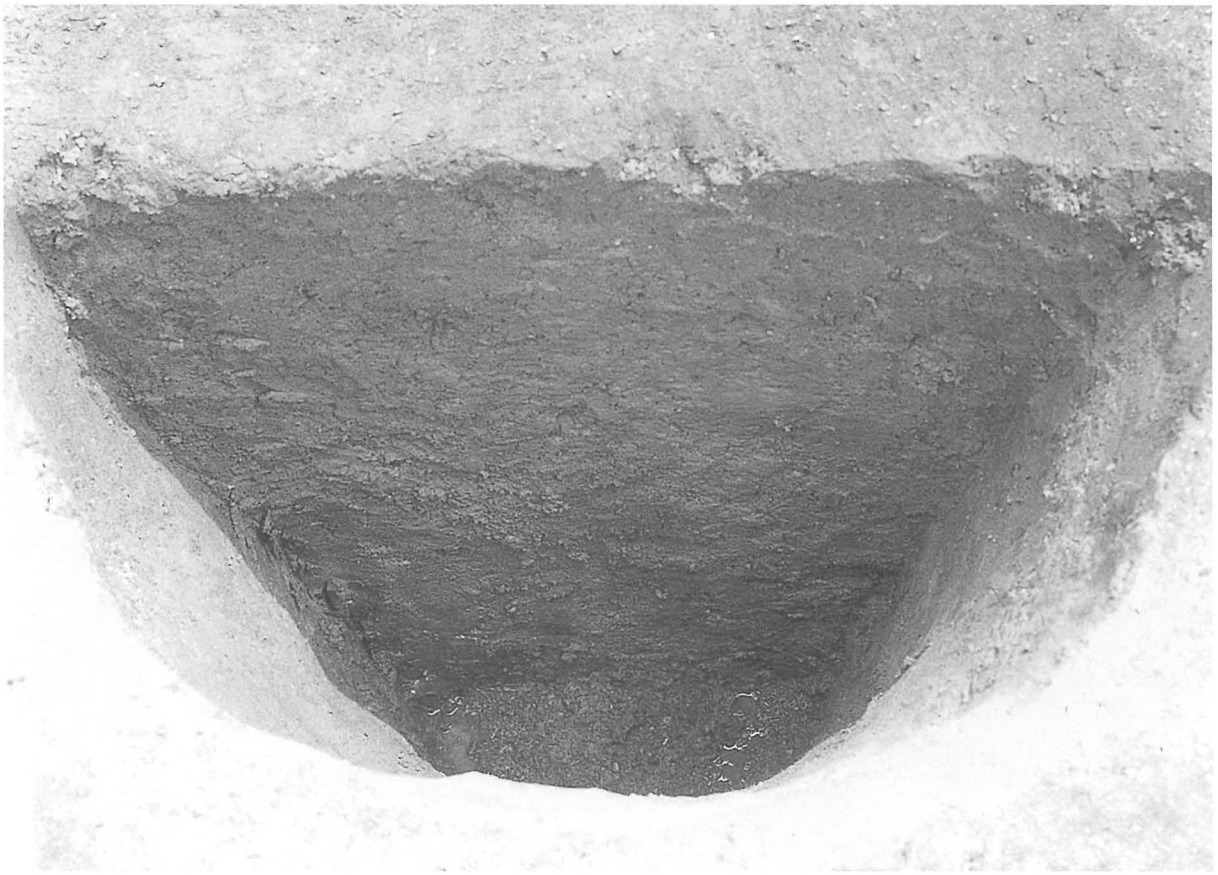
竪穴住居１検出状況



竪穴住居２検出状況

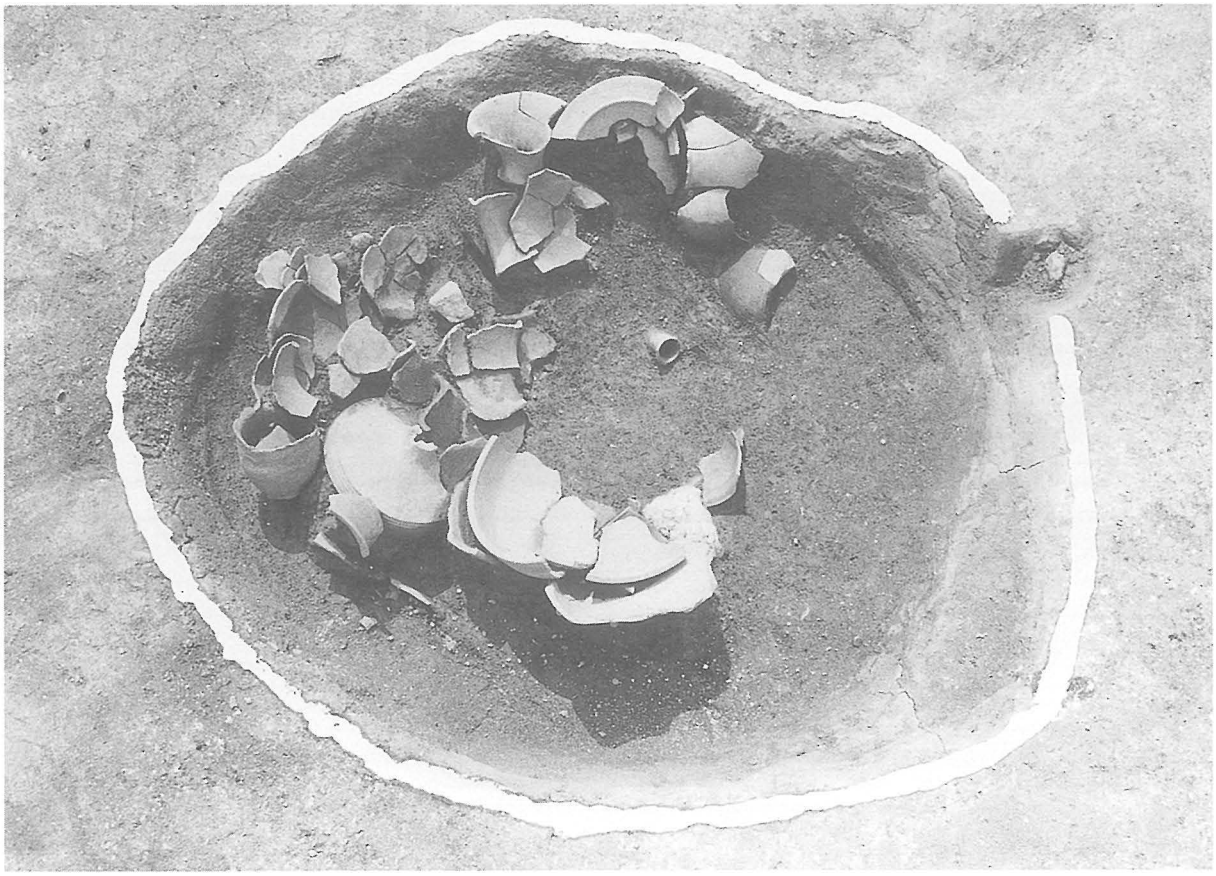
竪穴住居２土層断面

井戸２集石検出状況

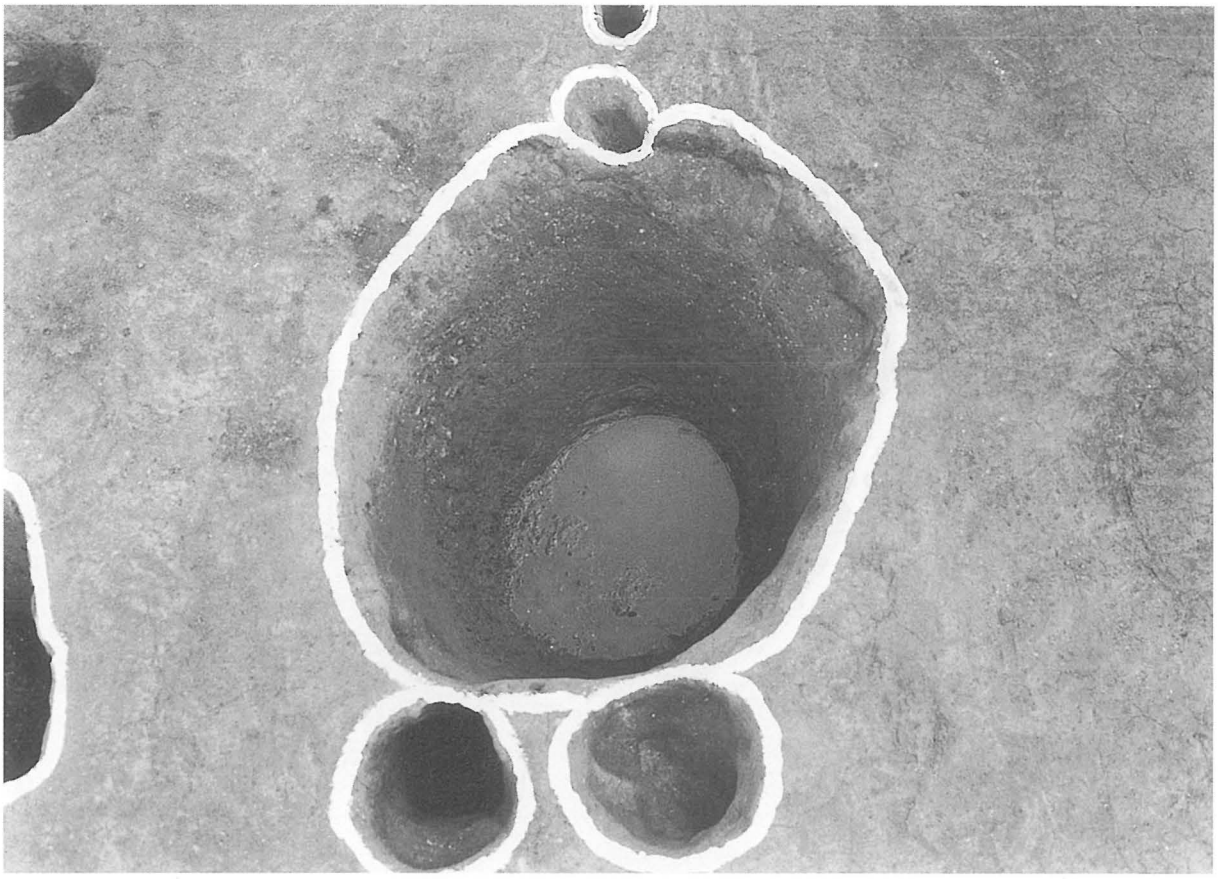


井戸４土層断面

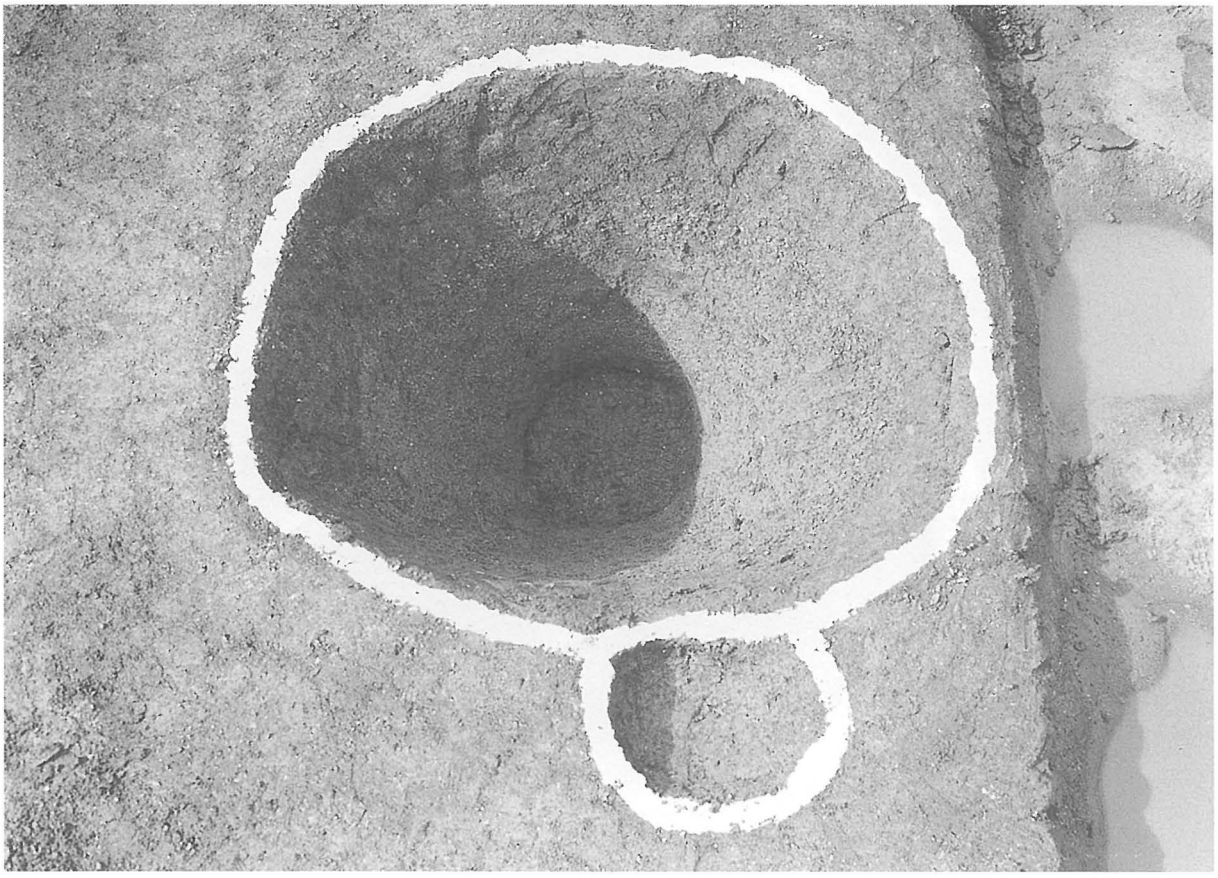
井戸６検出状況



土坑23遺物出土状況



土坑23掘削後状況



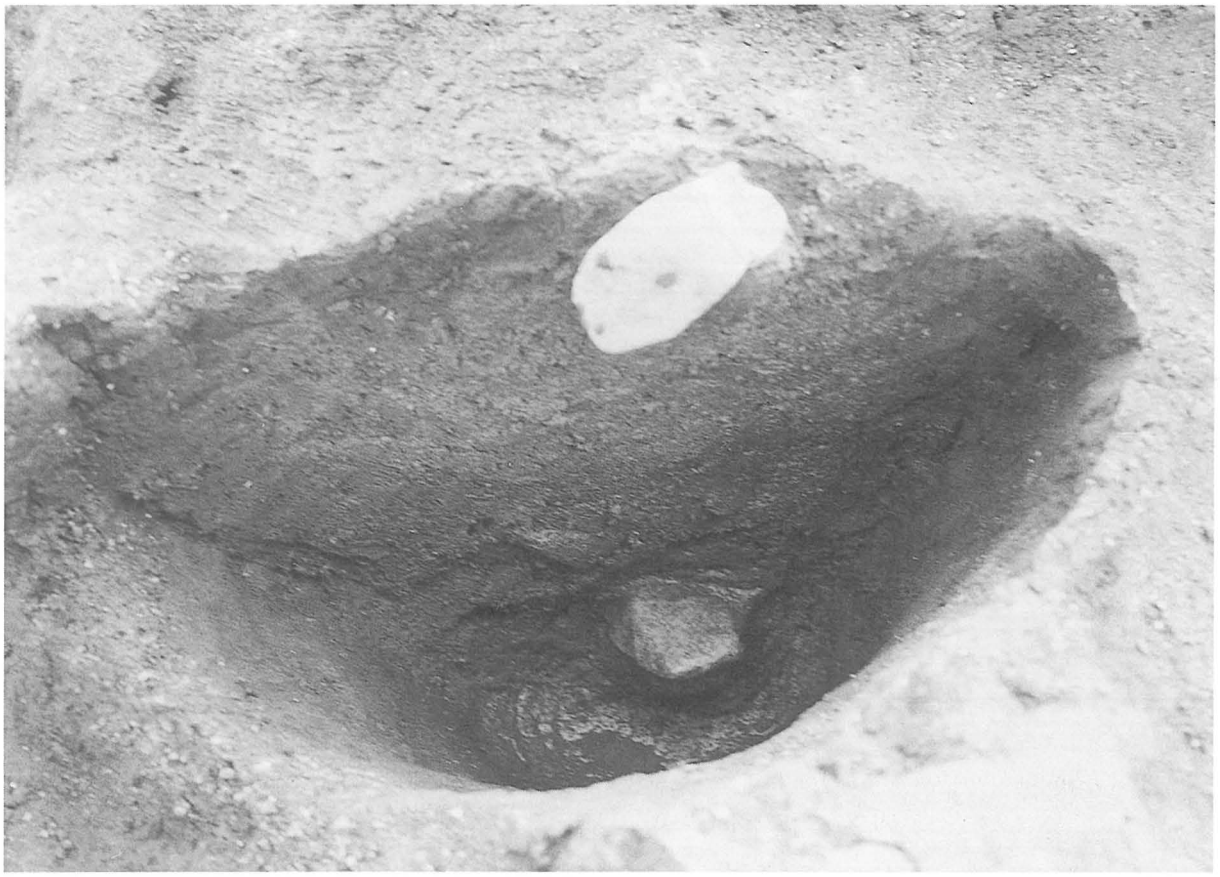
土坑25検出状況

土坑76検出状況

土坑77検出状況

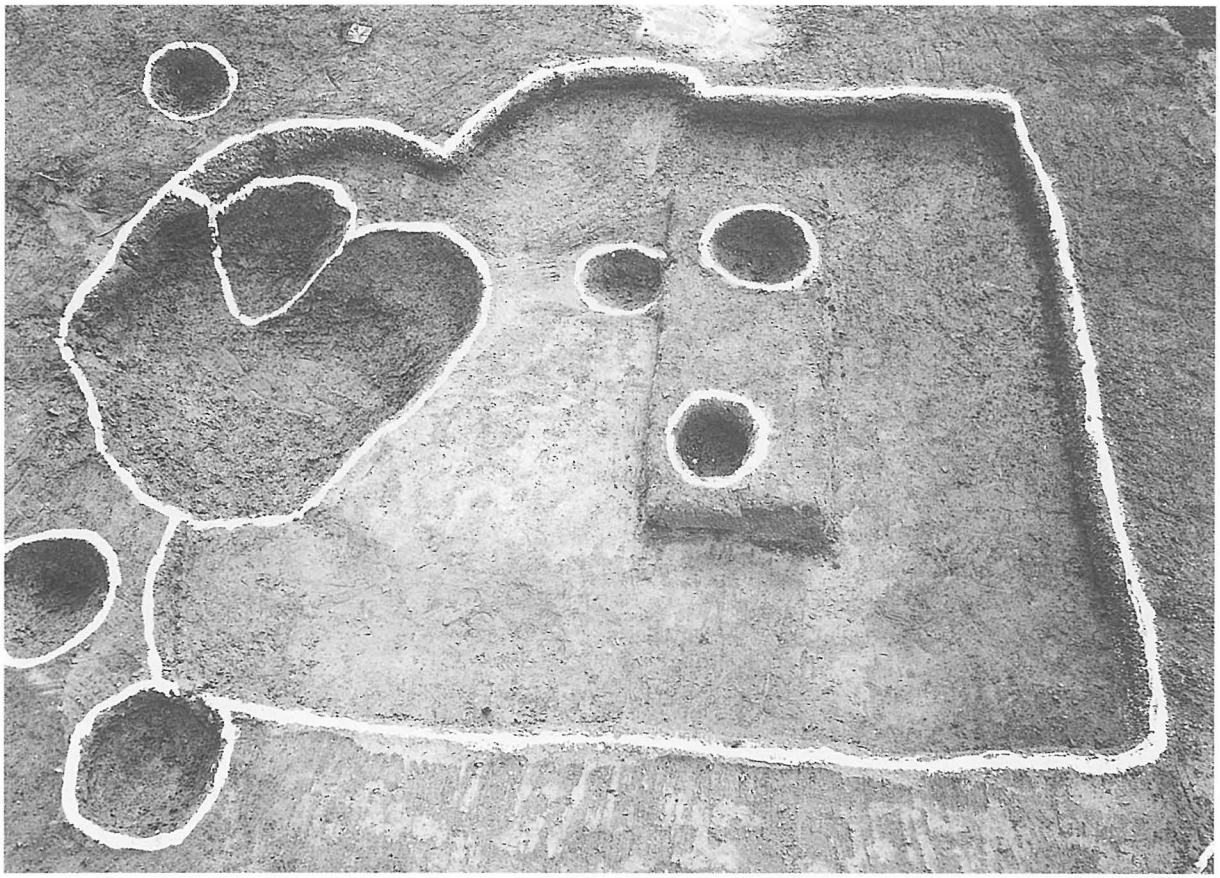
土坑79検出状況

土坑113土層断面

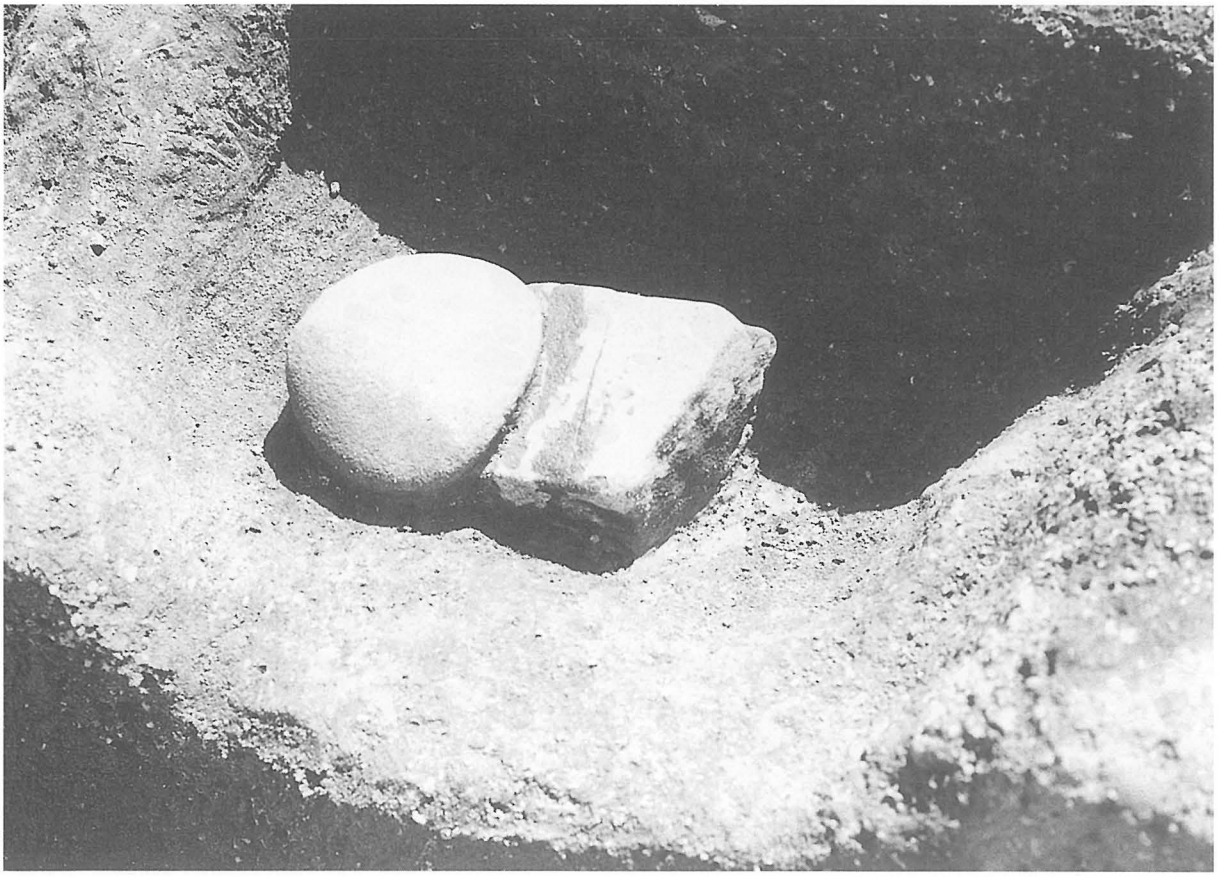


土坑135土層断面

土坑151検出状況

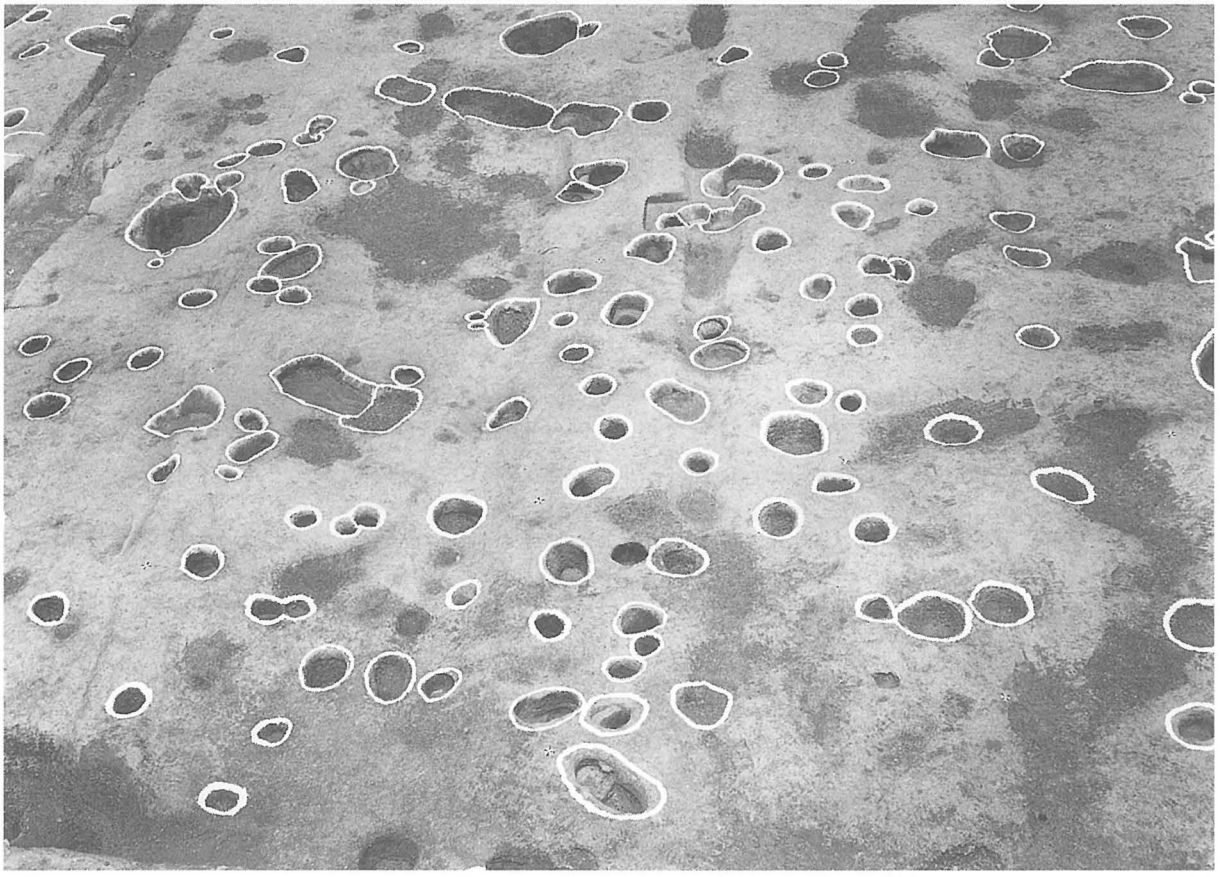


土坑30検出状況



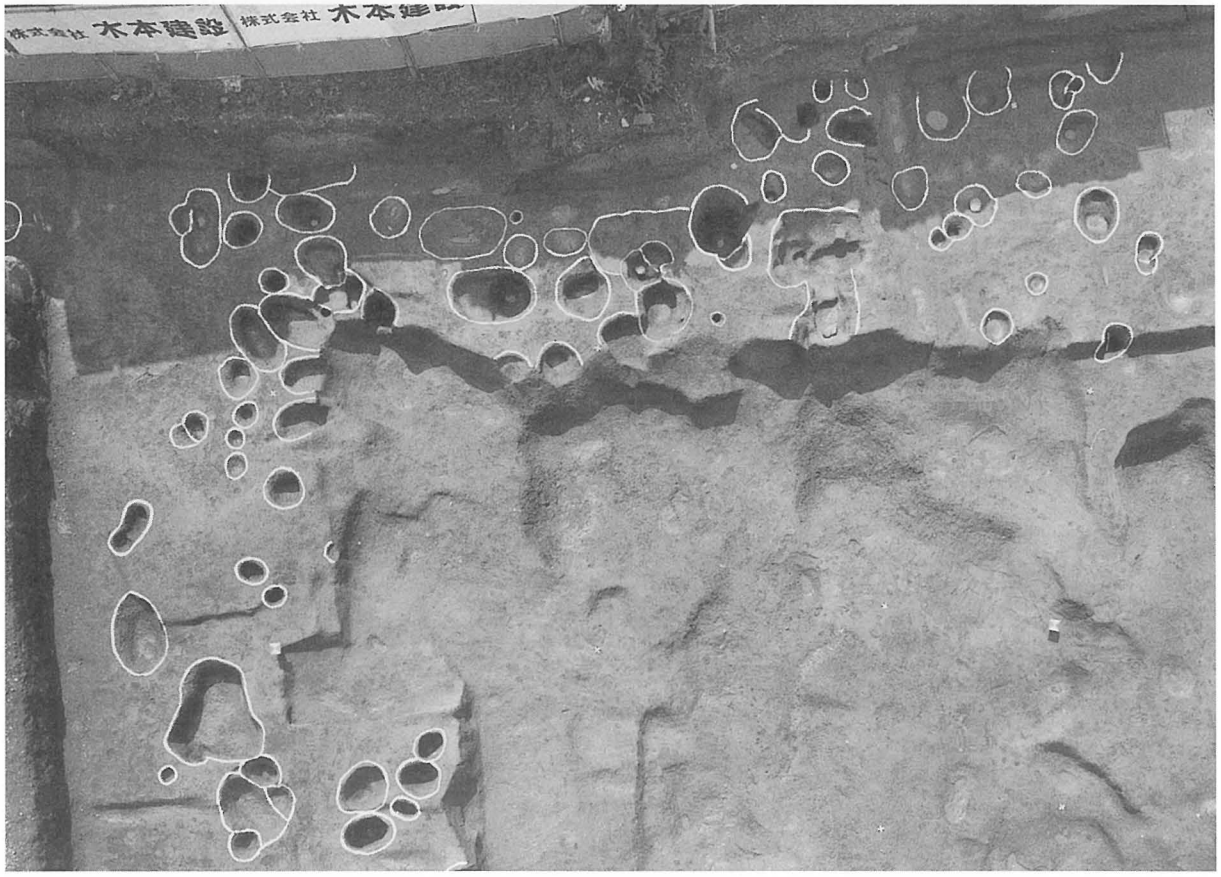
土坑126焼石検出状況

ピット308石検出状況



土坑・ピット群検出状況（弥生～平安時代）

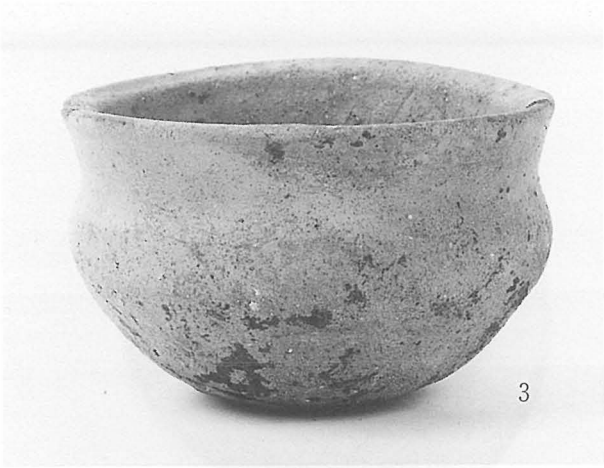
ピット群検出状況（弥生～平安時代）

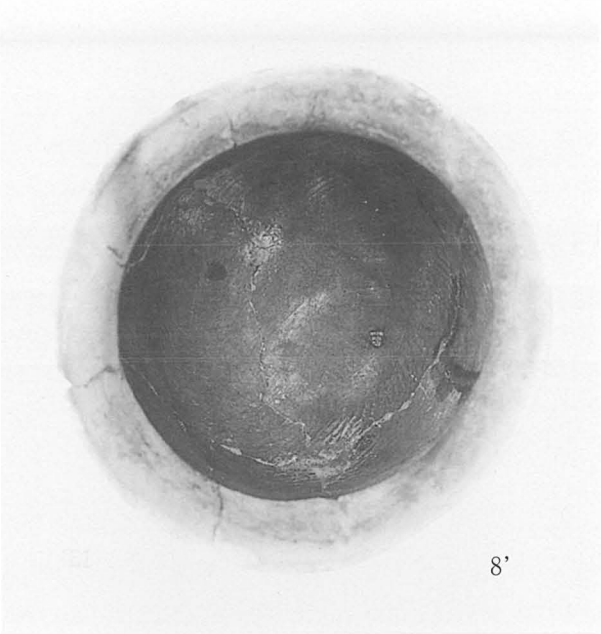


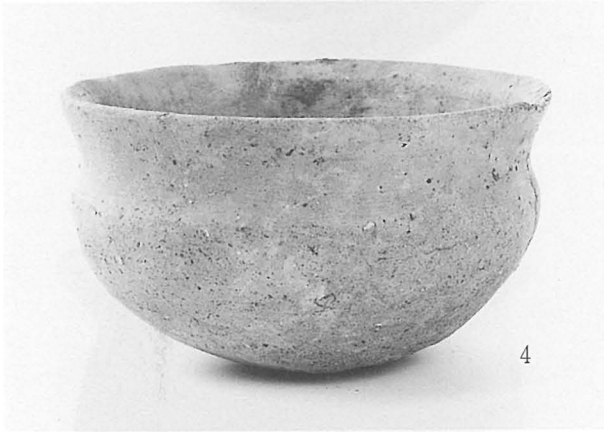
ピット群検出状況（弥生～平安時代）

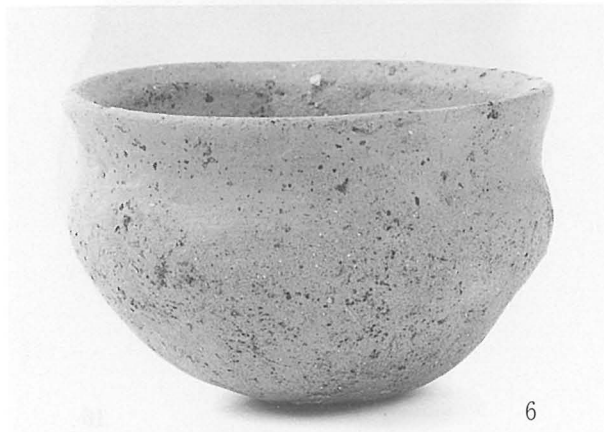
調査区東壁土層断面

調査区南壁土層断面

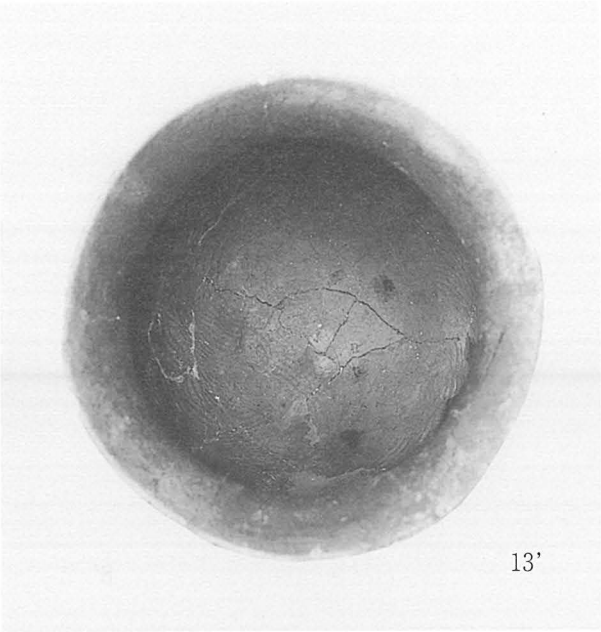


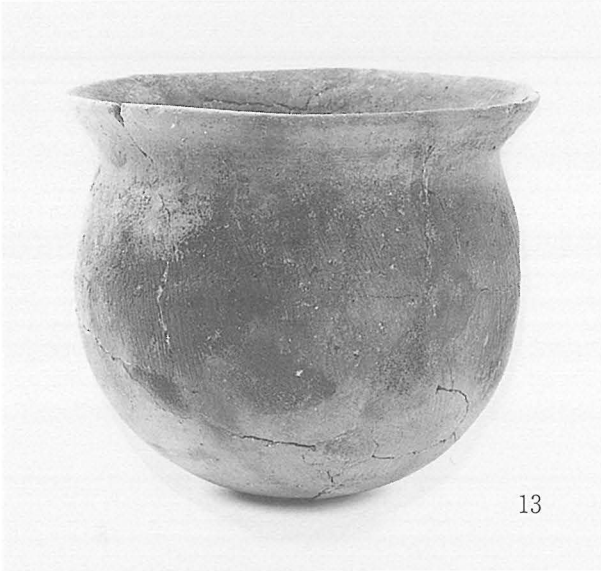


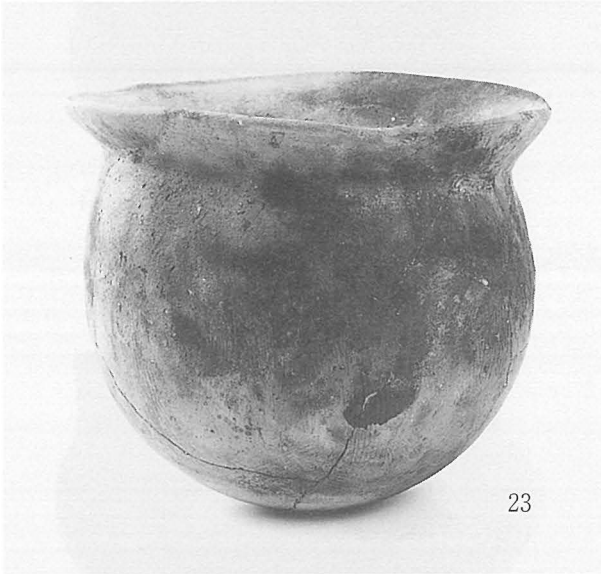


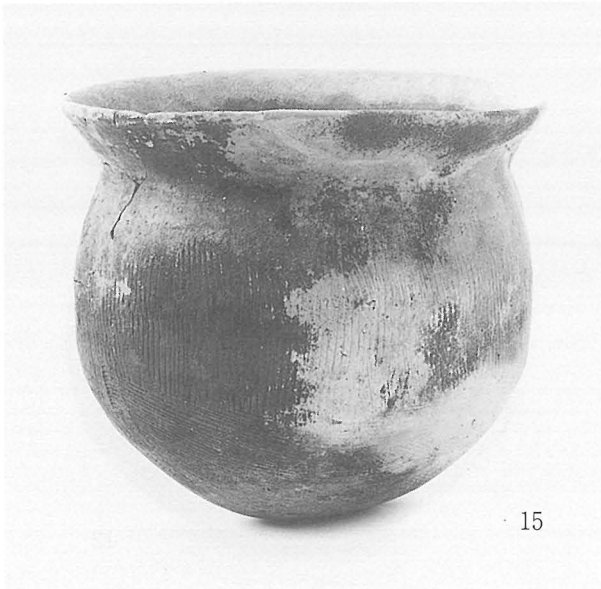


井戸１出土土師器　壷（３～６）、甕（８・12）



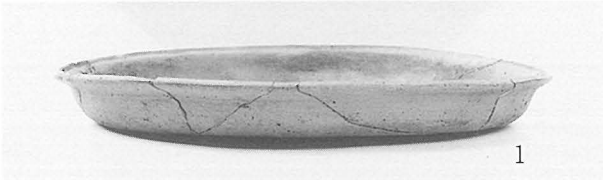


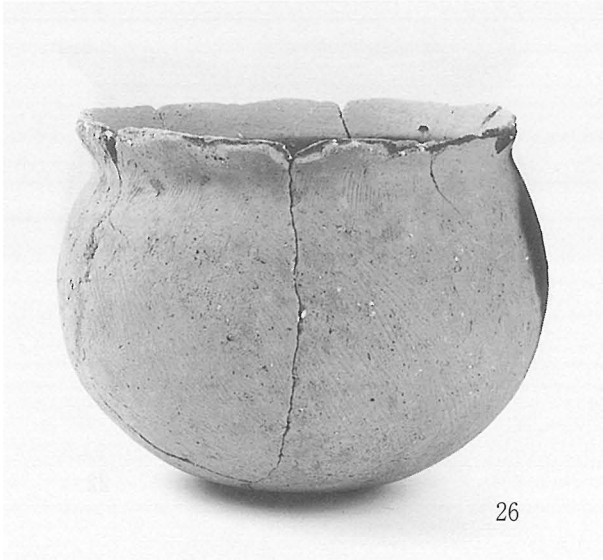


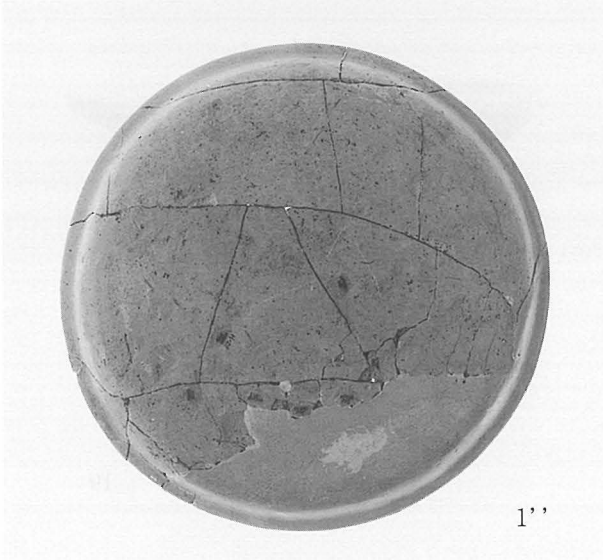


井戸１出土土師器　甕（13・15・16・23）

井戸１出土土師器　甕（17～22）

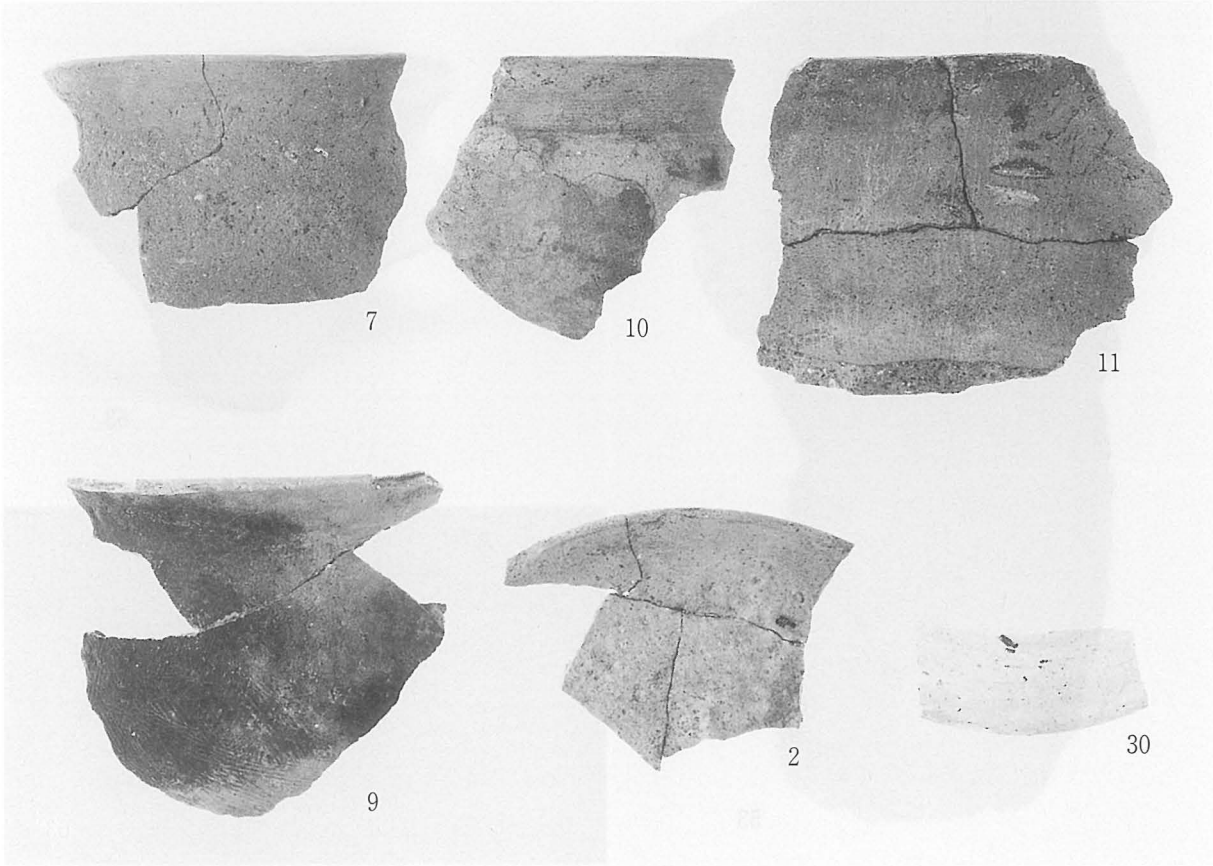






井戸１出土土師器　皿（1）、甕（24～27）

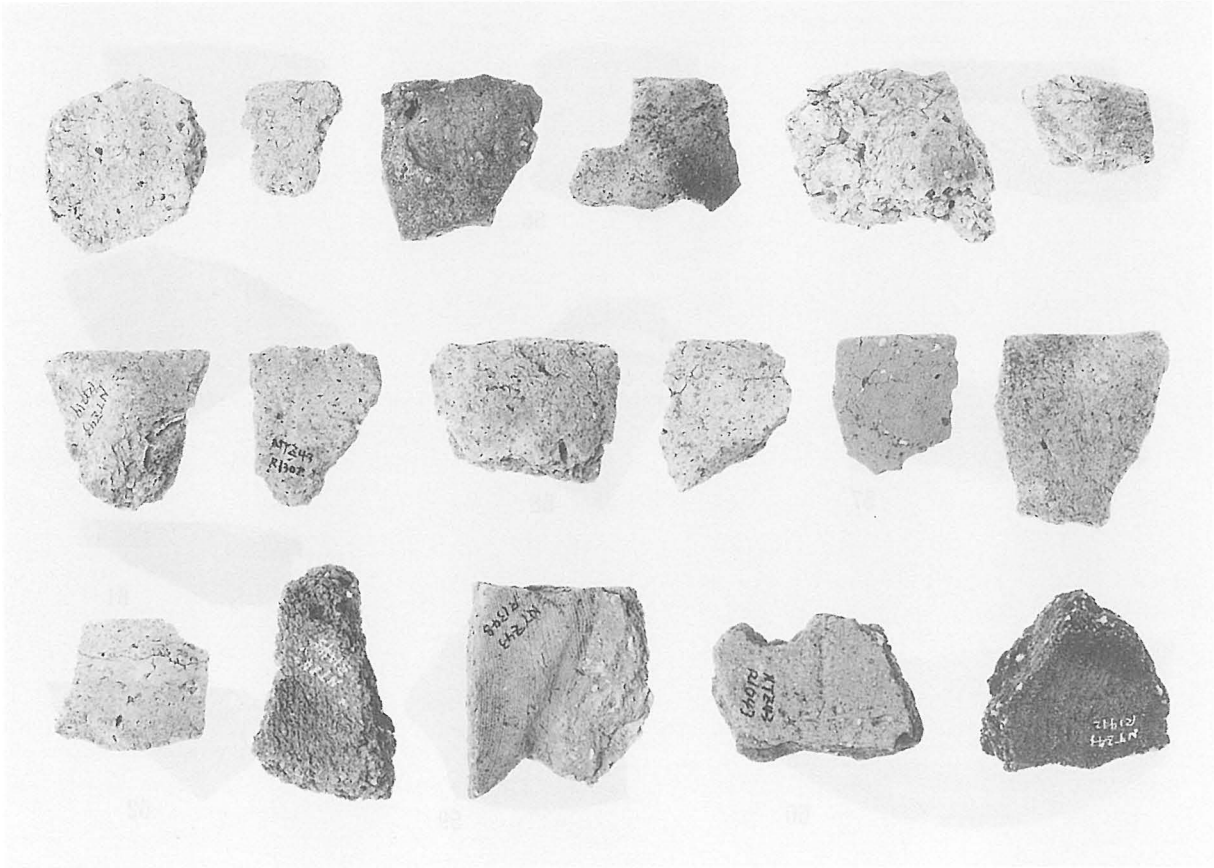
井戸１出土土器　土師器坏（28・29）、須恵器壷（31）



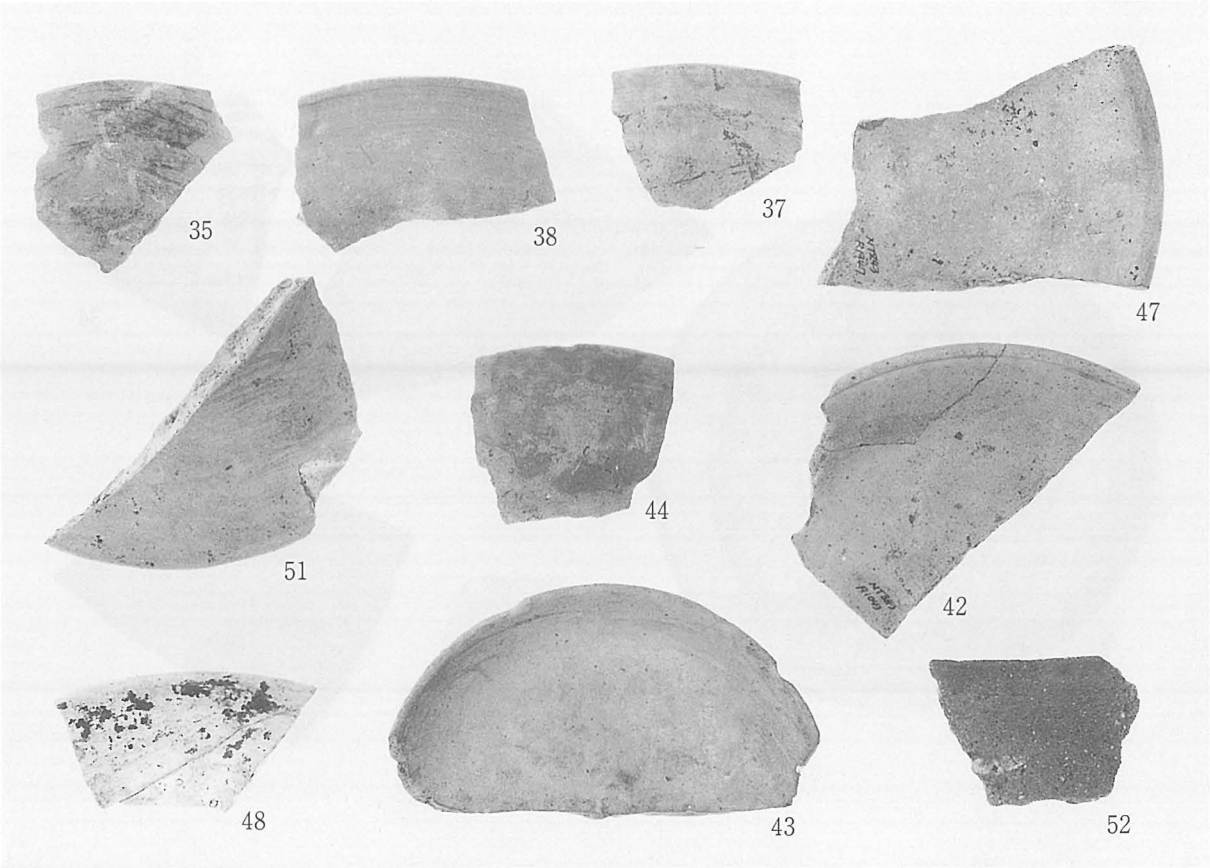
井戸１出土土器　皿（2）、甕（7・9・10）、竈（11）、坏Ｂ蓋（30）

井戸５出土土器　土師器小皿（36・49）、椀（45・46）、ミニチュア甕（50）、竈（53）、須恵器甕（63）

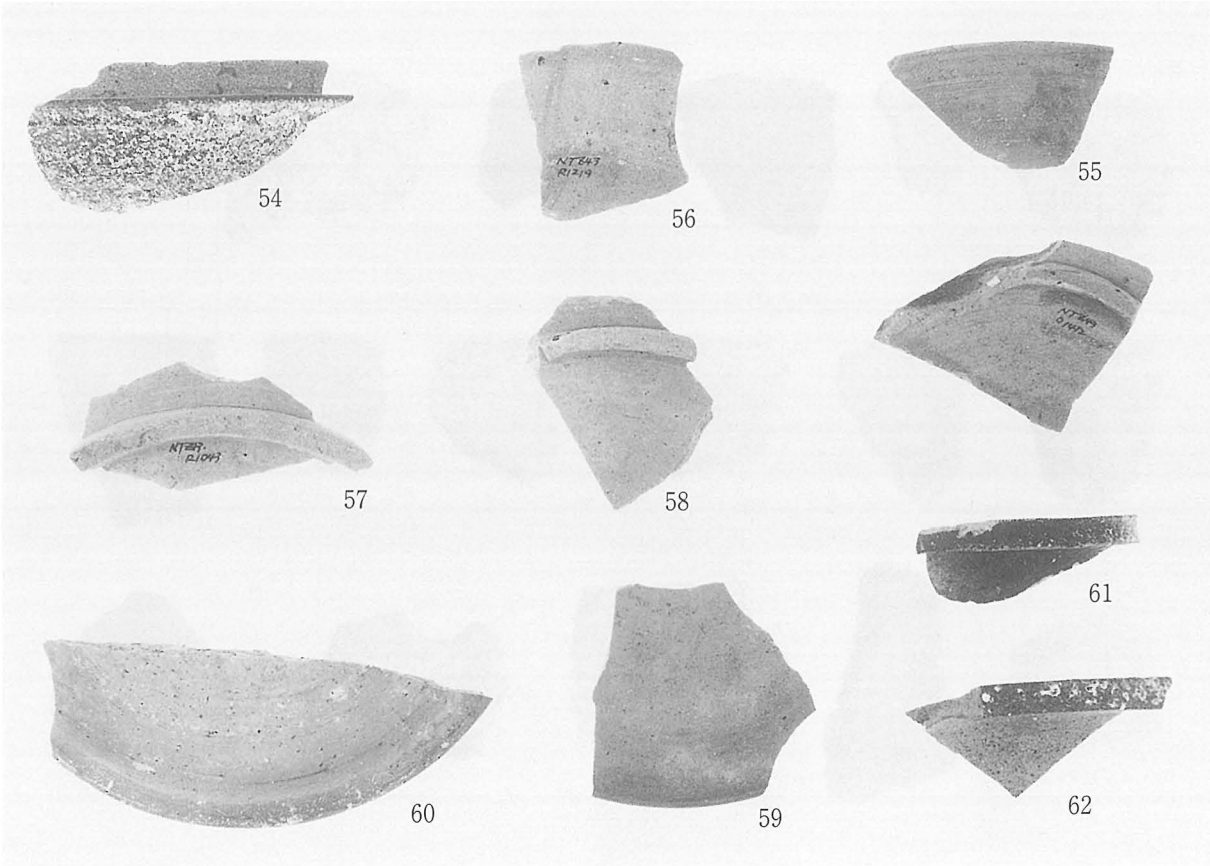
井戸５出土墨書土器　土師器（32～34）、須恵器（41）



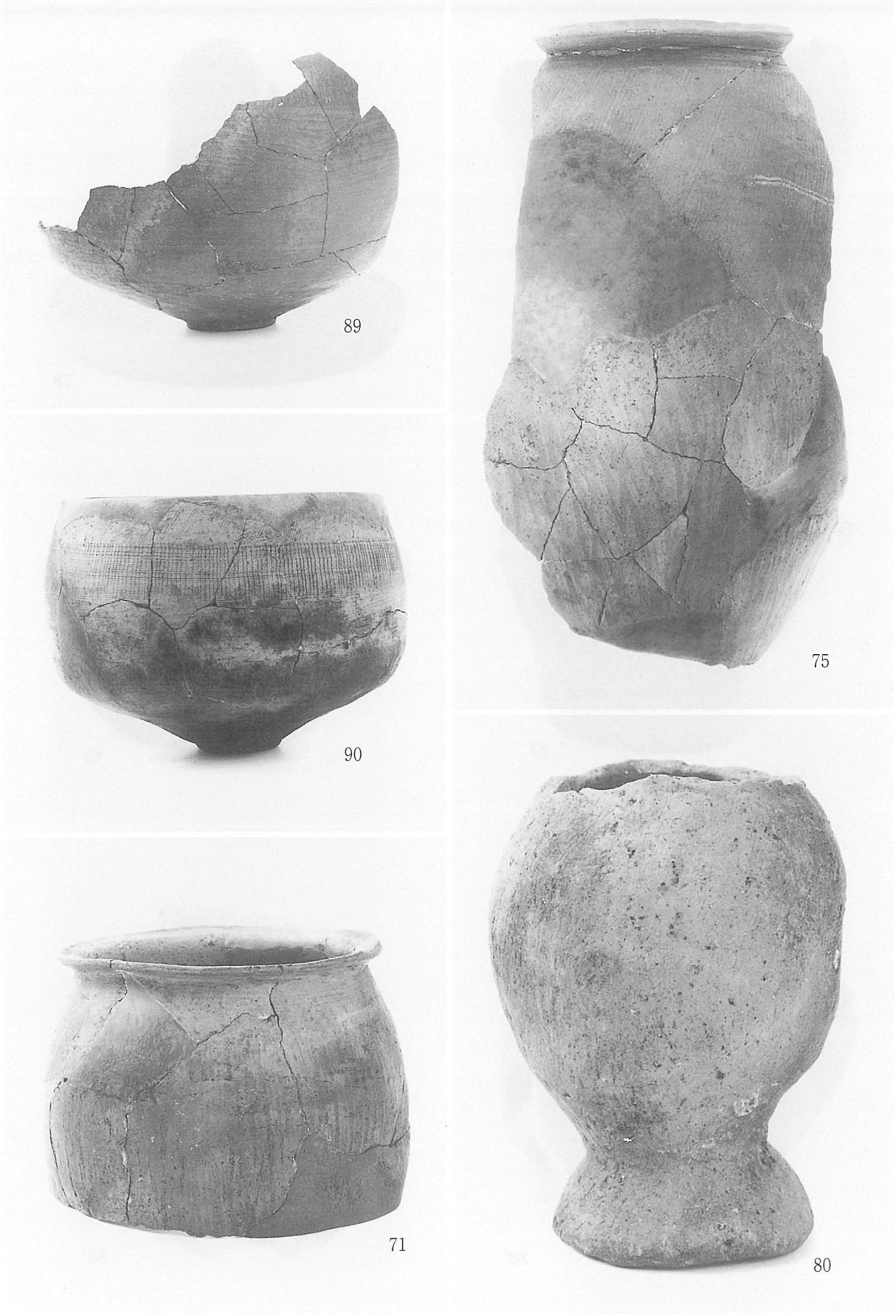
井戸５出土製塩土器



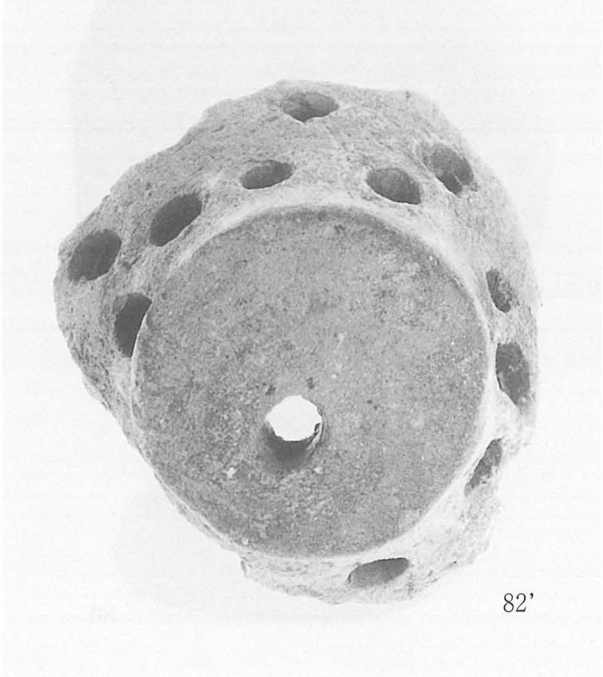
井戸５出土土師器　坏（35・42）、皿（38・43・47・48）、椀（37・44）、高坏（51）、甕（52）

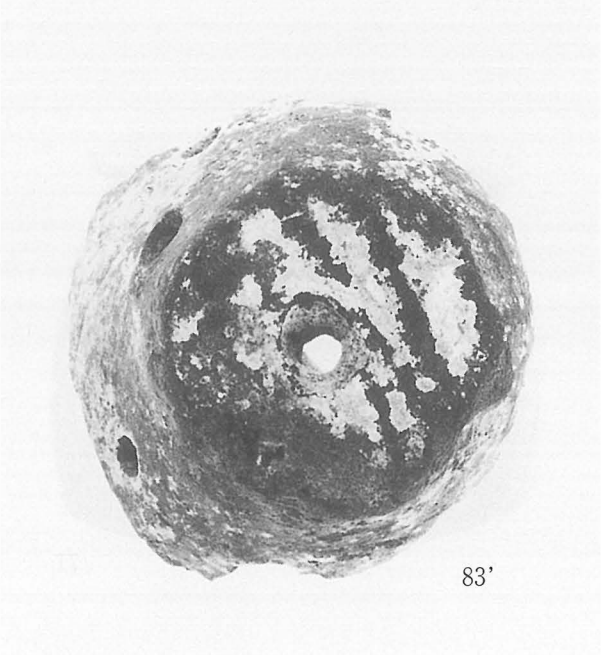


井戸５出土須恵器　坏（54～58）、坏Ｂ蓋（59・60）、壷（61・62）

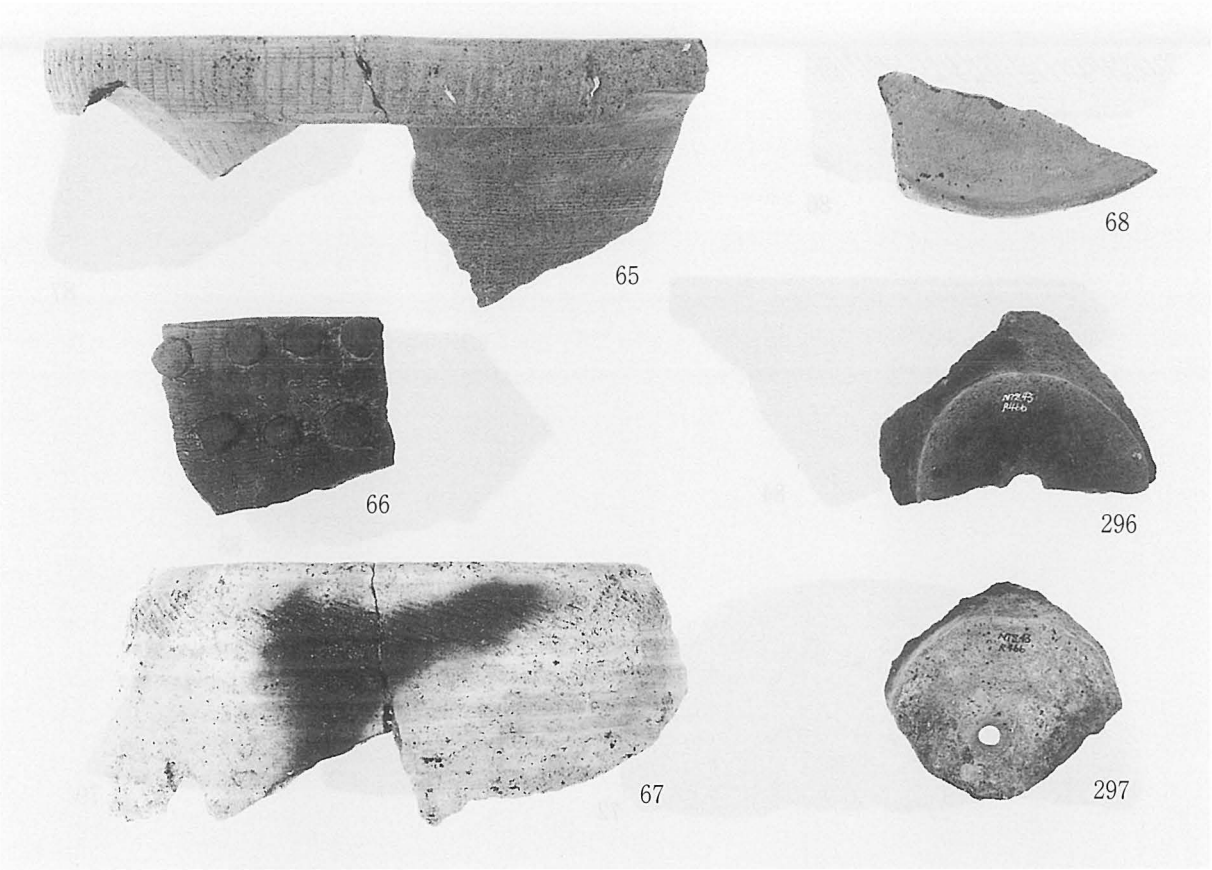


井戸２出土弥生土器　壷（89・90）、甕（71・75）、ミニチュア土器（80）

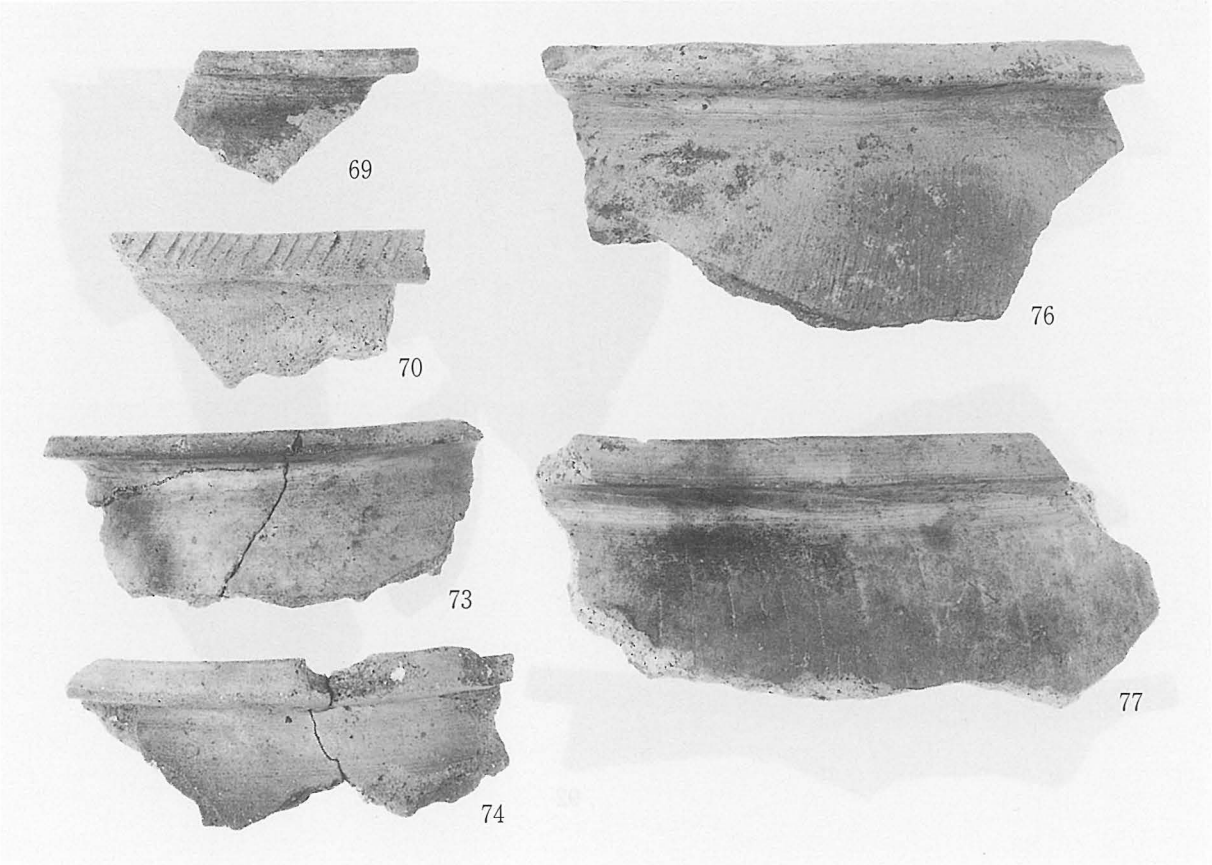




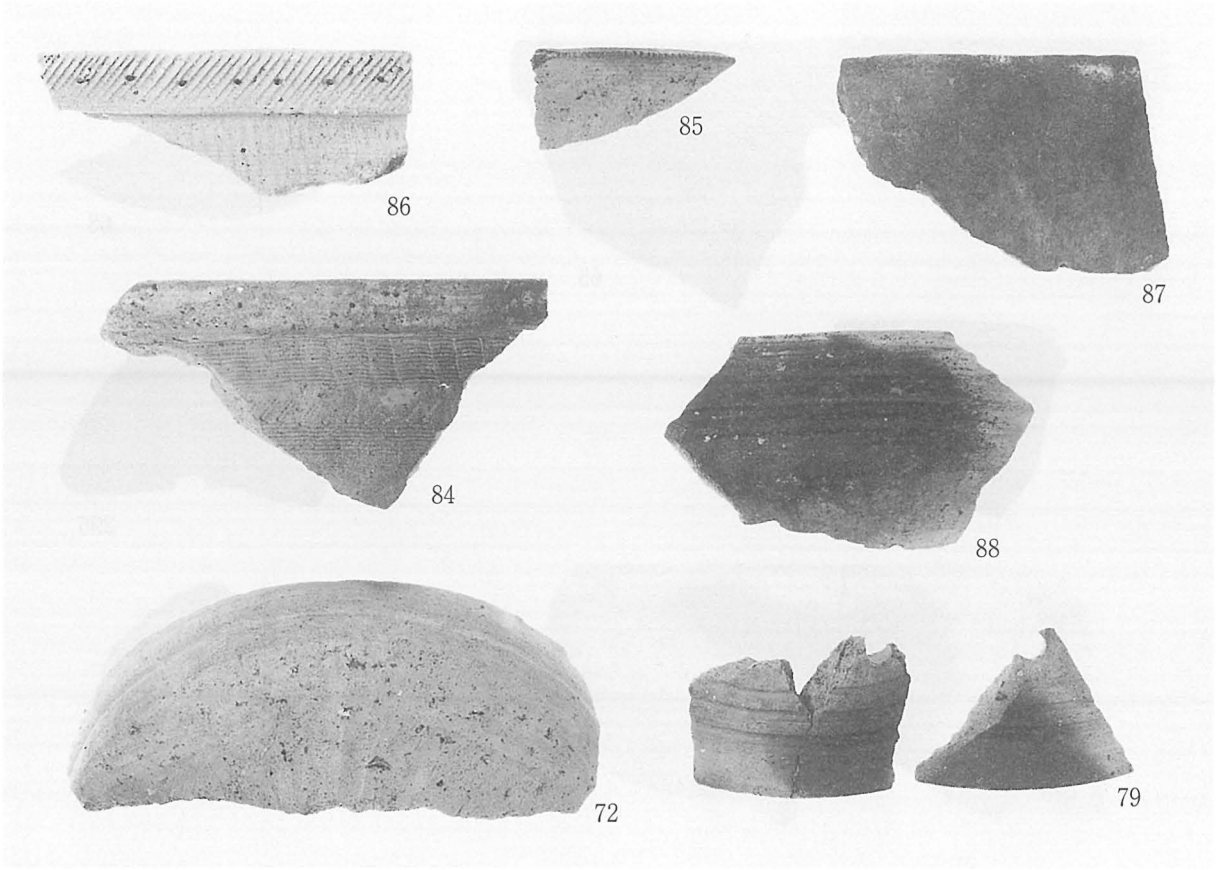
井戸２出土弥生土器　高坏（78）、ミニチュア土器（81）、多孔土器（82・83）



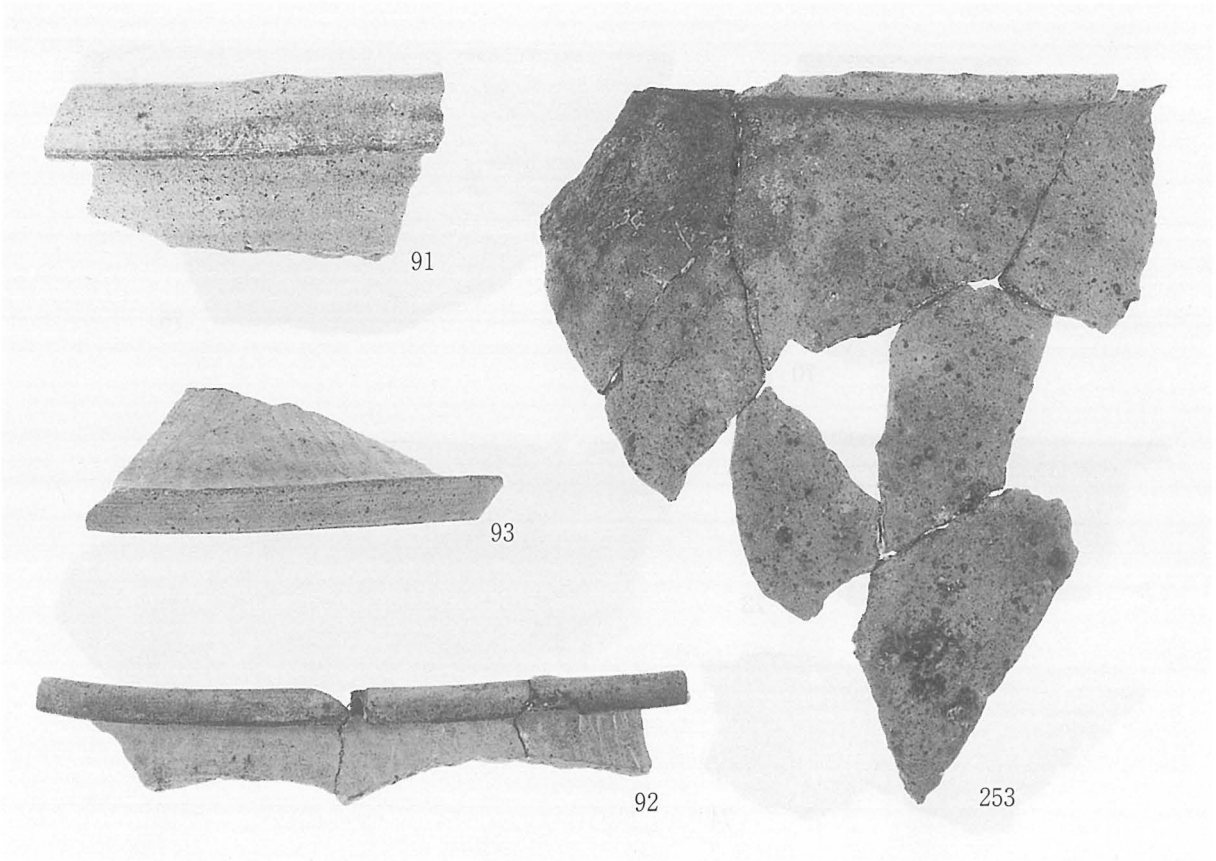
井戸２出土弥生土器　壷（65）、細頸壷（66）、無頸壷（67）、蓋（68）、甕（296・297）



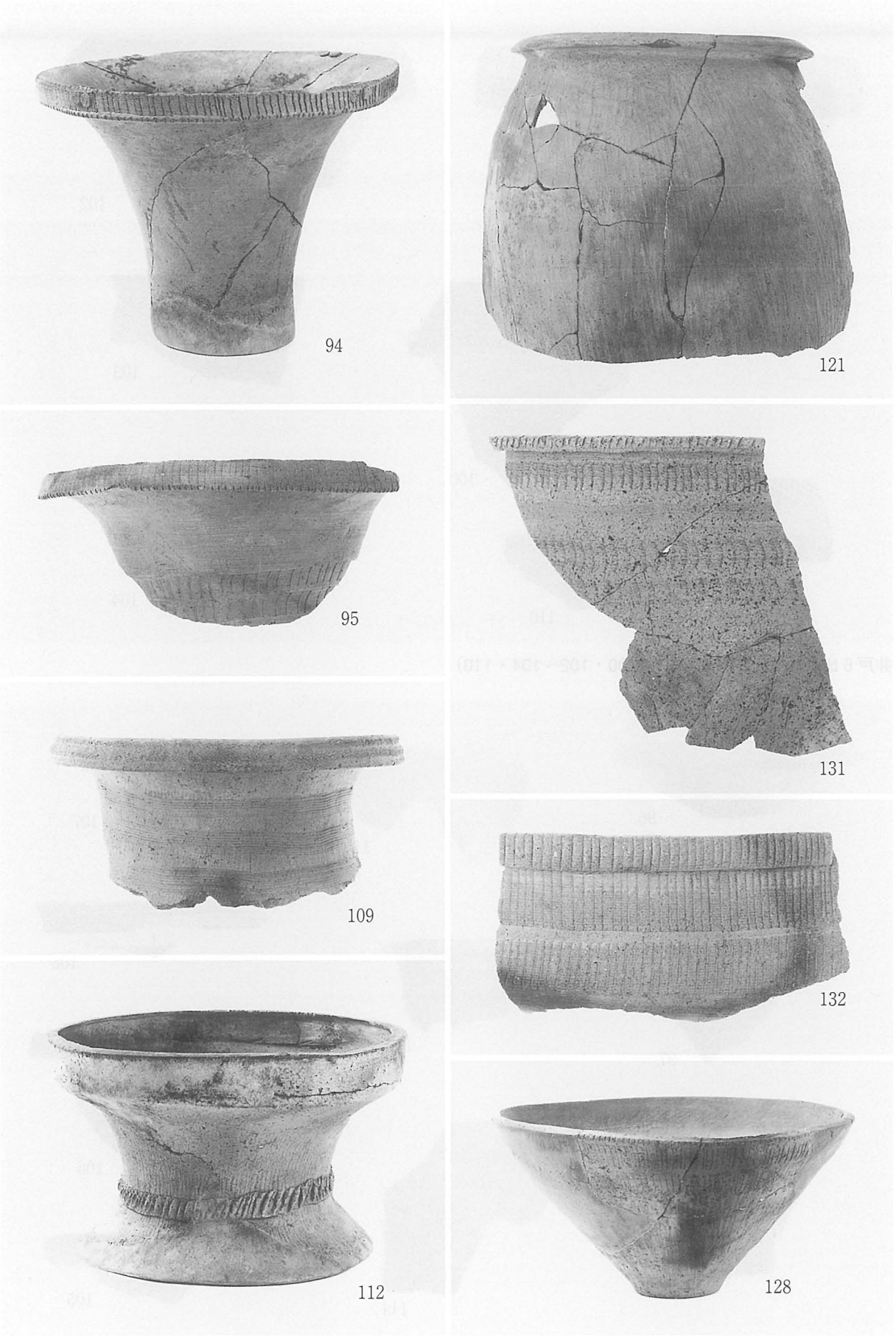
井戸２出土弥生土器　甕（69・70・73・74・76・77）



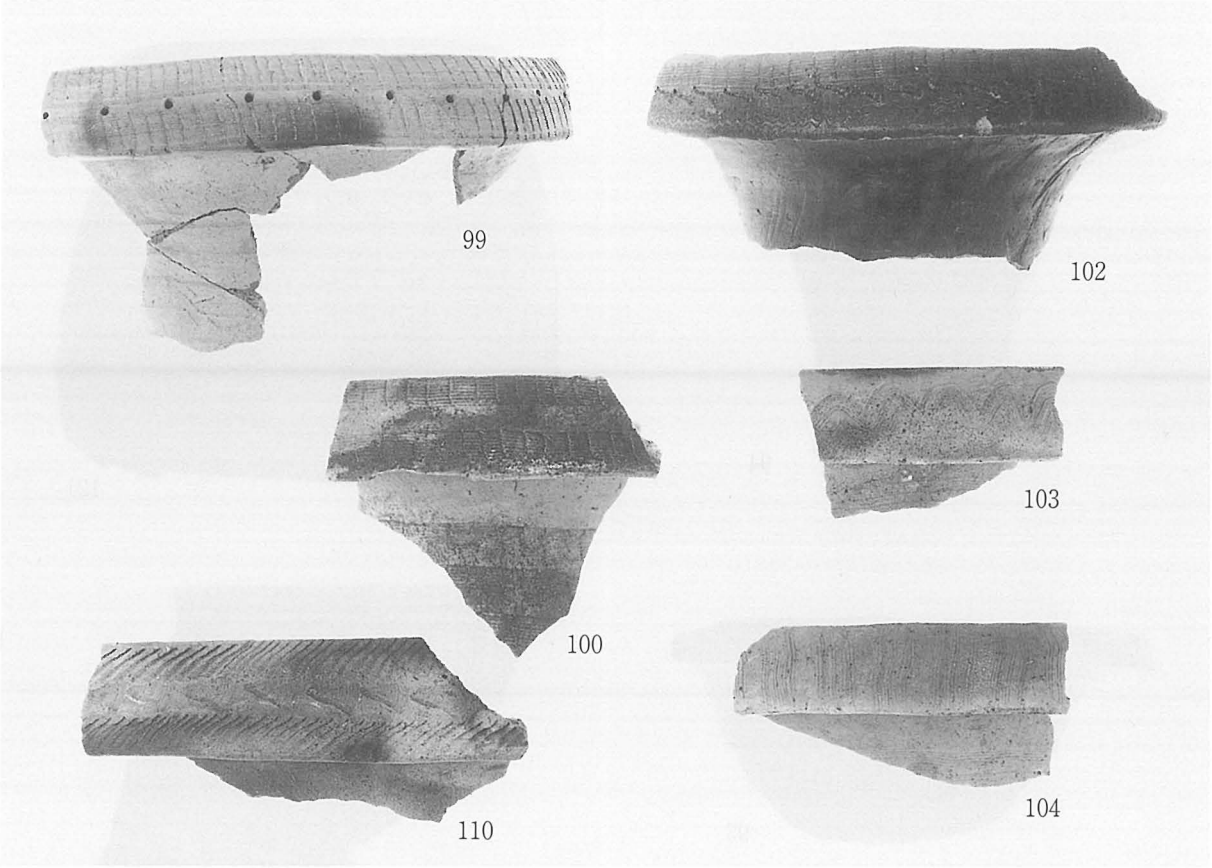
井戸２出土弥生土器　鉢（79・84～87）、高坏（72・88）



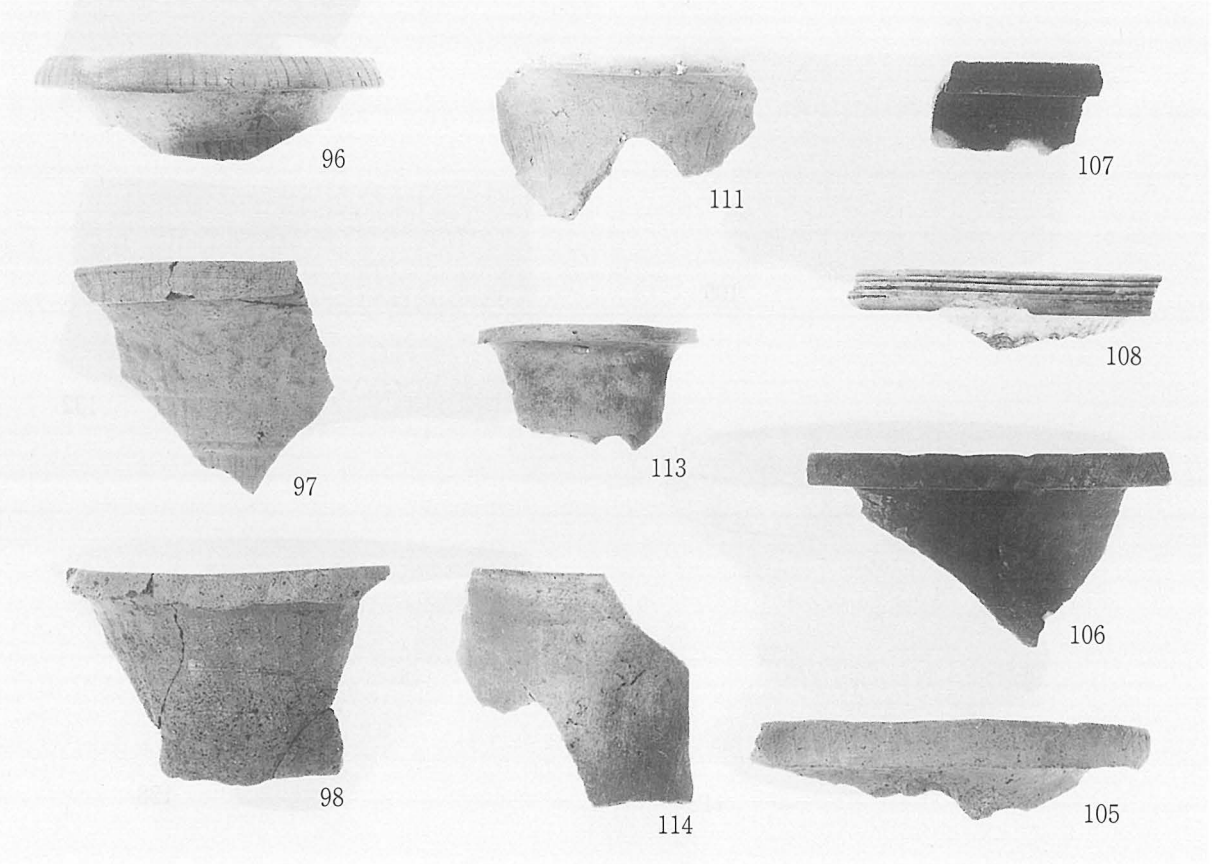
井戸４出土弥生土器　壺（91）、甕（92）、蓋（93）　土坑37出土弥生土器　甕（253）



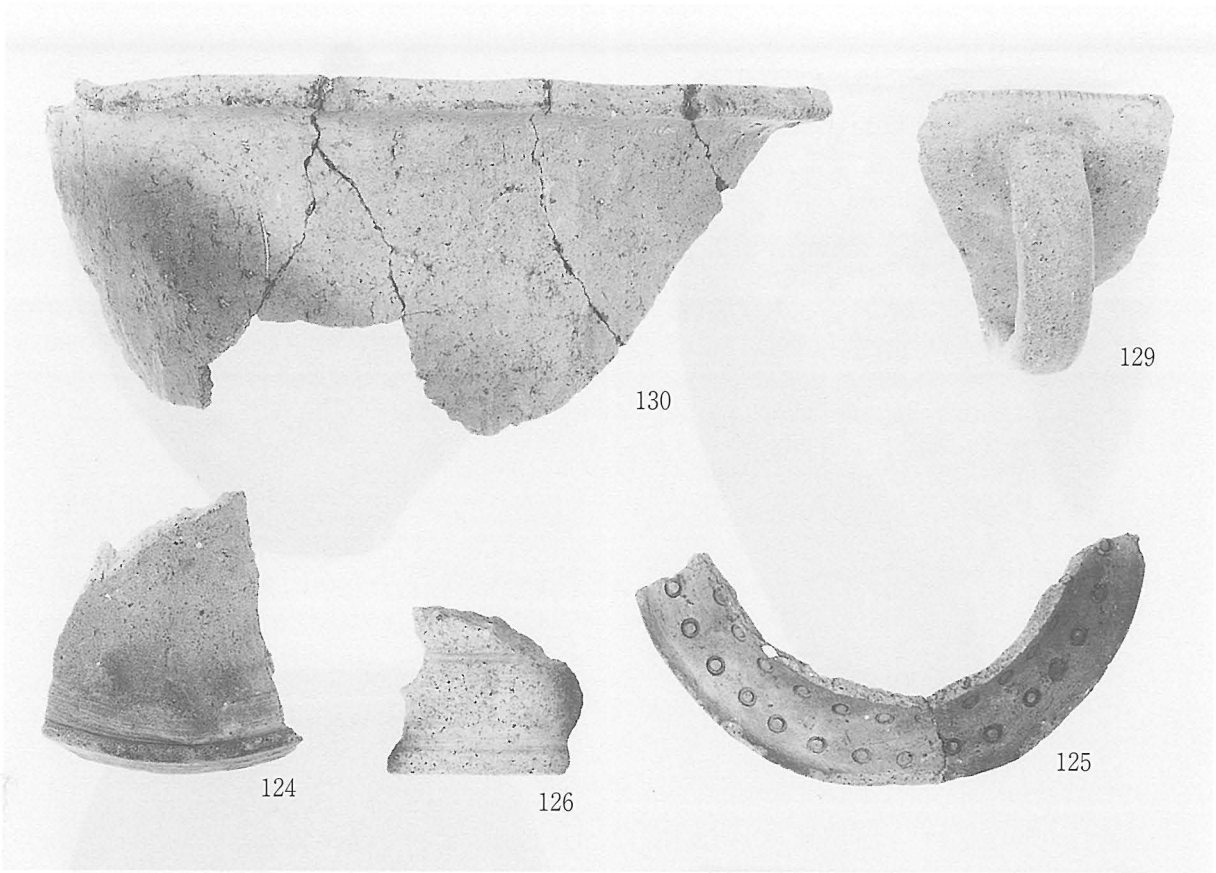
井戸6出土弥生土器　壺（94・95・109・112）、甕（121）、鉢（128・131・132）



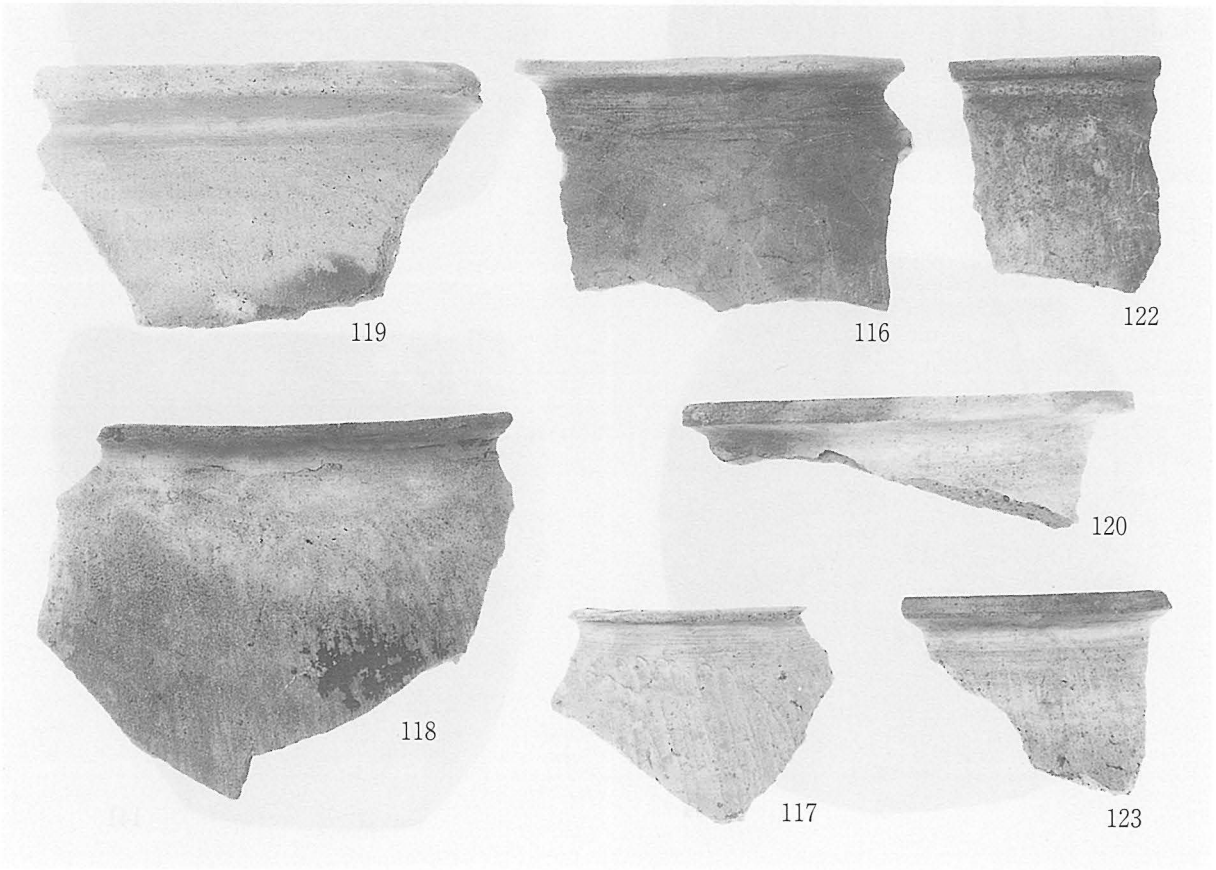
井戸6出土弥生土器　壷（99・100・102～104・110）



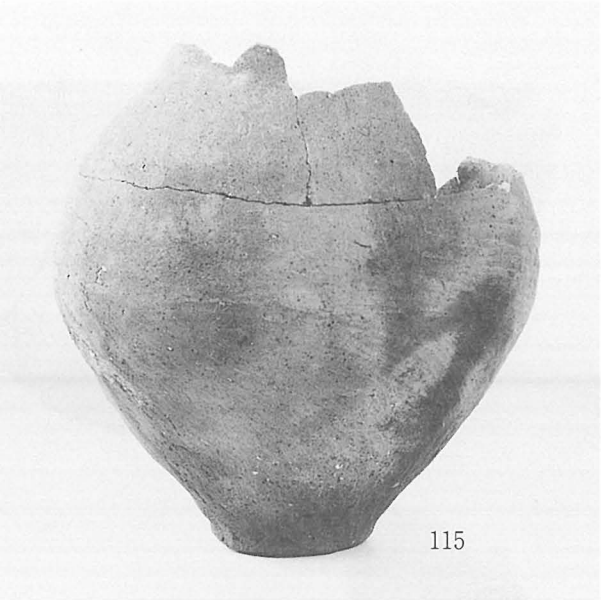
井戸6出土弥生土器　壷（96～98・105～108・111・113・114）



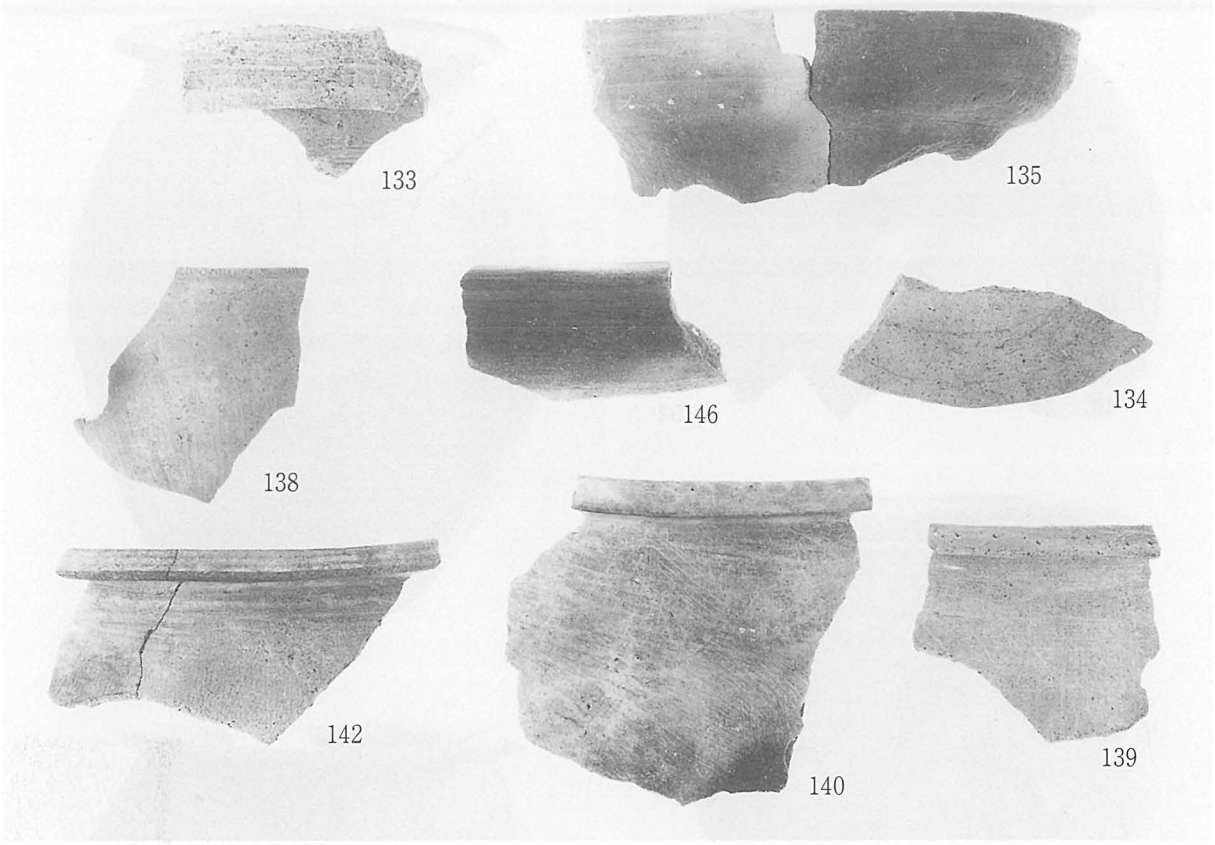
井戸６出土弥生土器　鉢（125・126・129・130）、高坏（124）



井戸６出土弥生土器　甕（116～120・122・123）

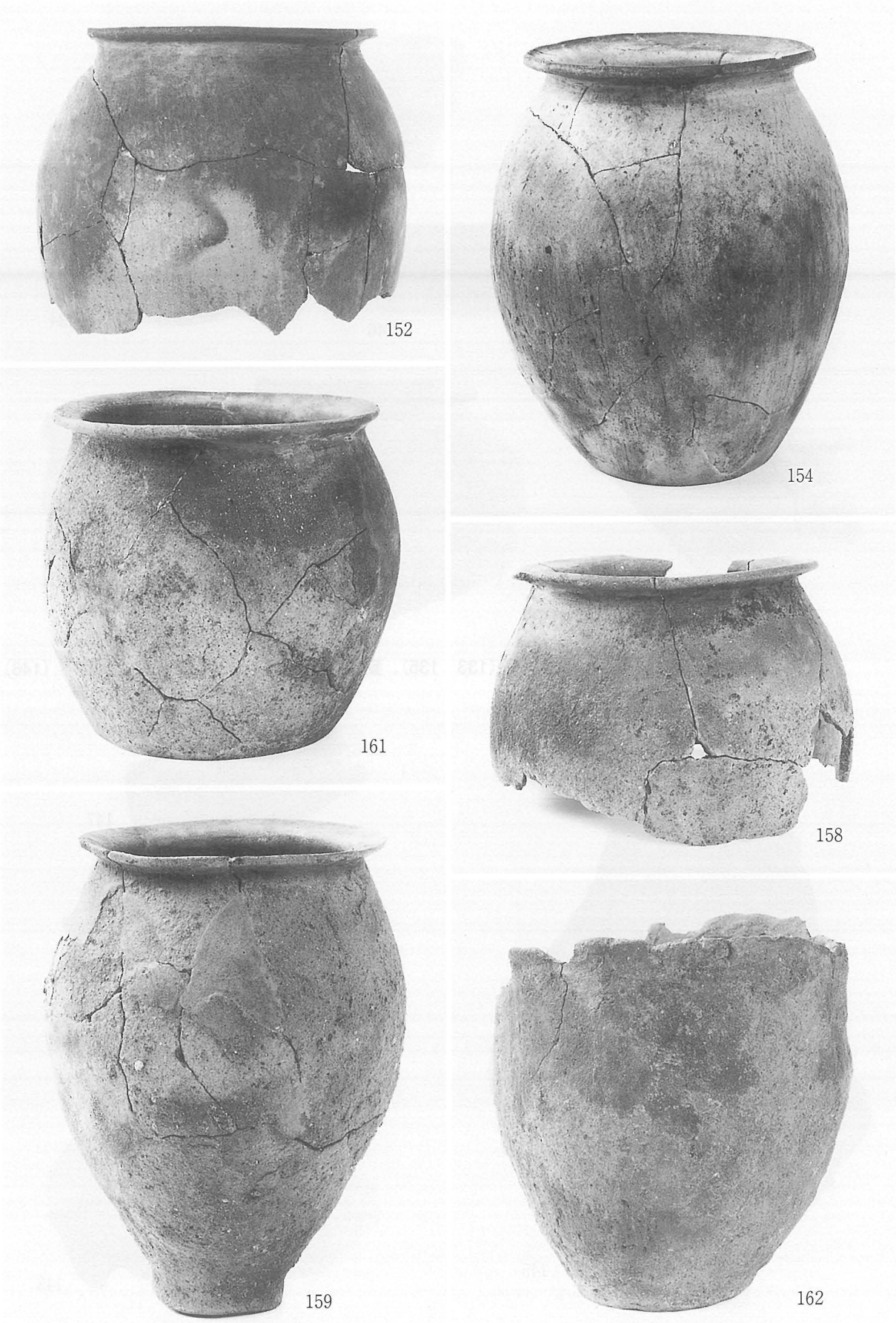


井戸６出土弥生土器壷（115）、甕（127）　土坑12出土弥生土器　台付無頸壷（137）、甕（136・141・144）

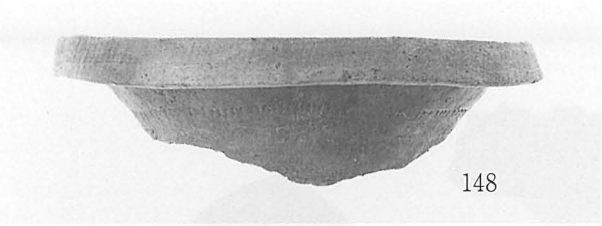


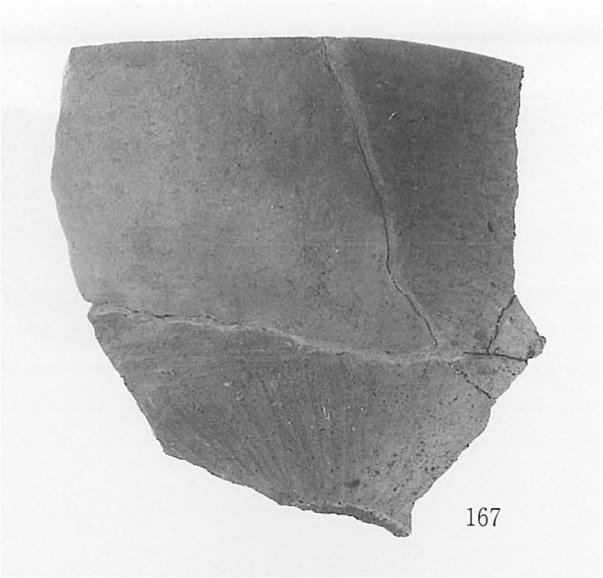
土坑12出土弥生土器　壷（133・135）、甕（138～140・142）、蓋（134）、高坏（146）

土坑12出土弥生土器　器台（143・145）、高坏（147）



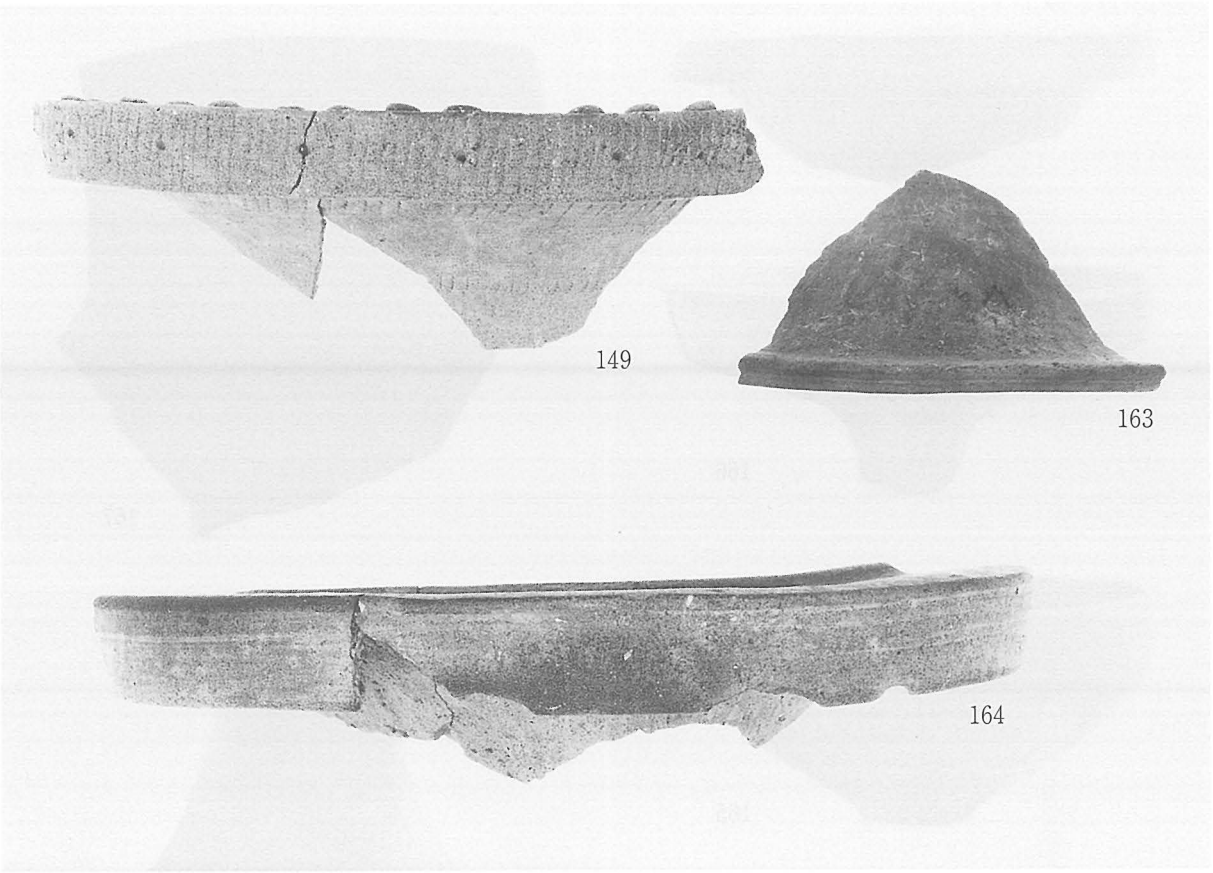
土坑23出土弥生土器　甕（152・154・158・159・161・162）



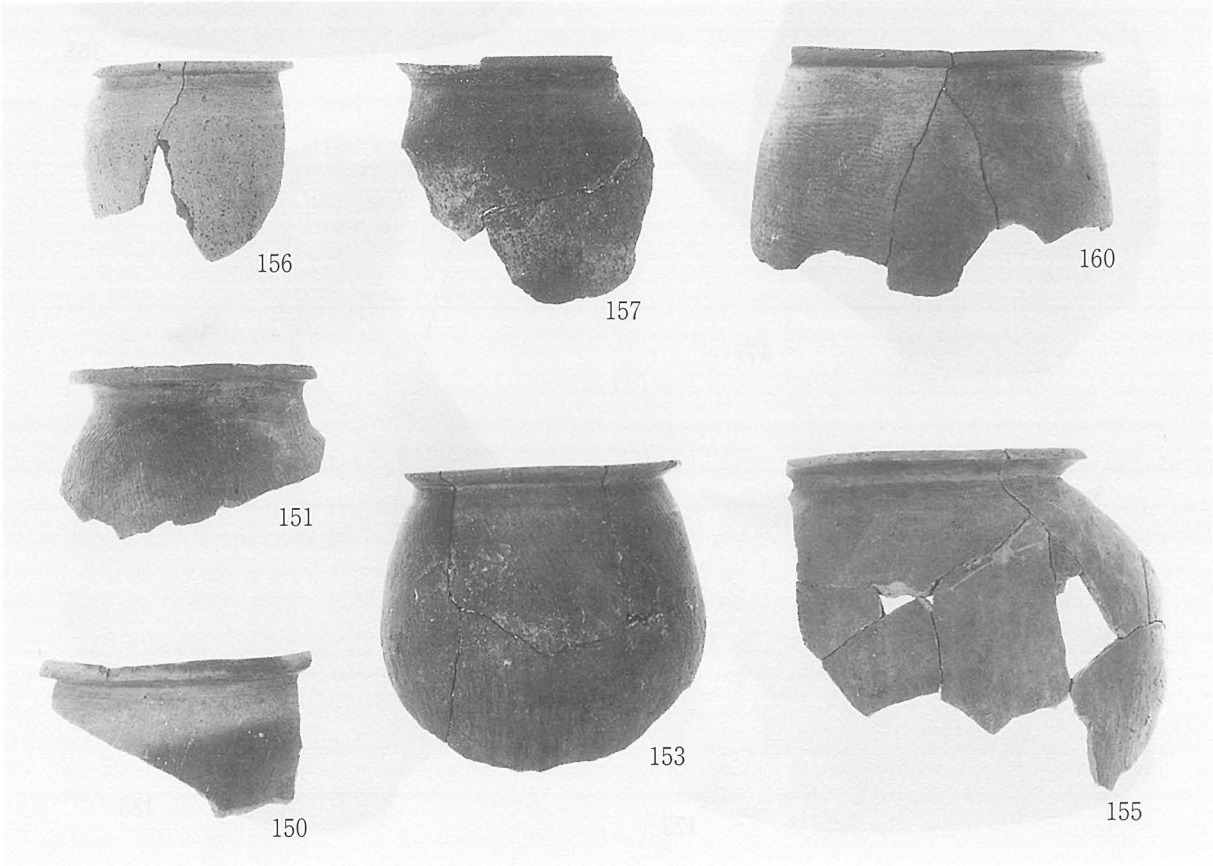


土坑23出土弥生土器　壷（148）、鉢（165・167・168）、高坏（166）

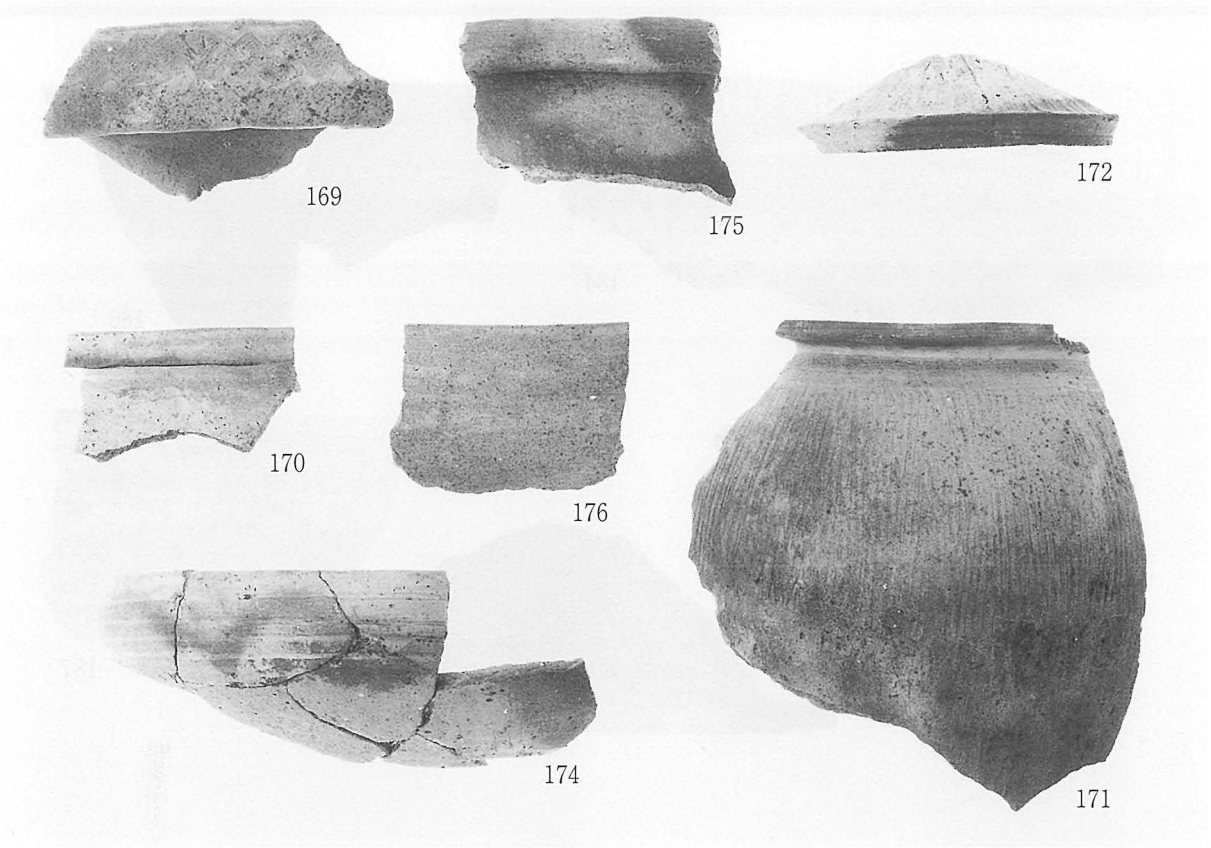
土坑24出土弥生土器　甕（173）、鉢（177）
土坑34出土弥生土器　水差形土器（185）



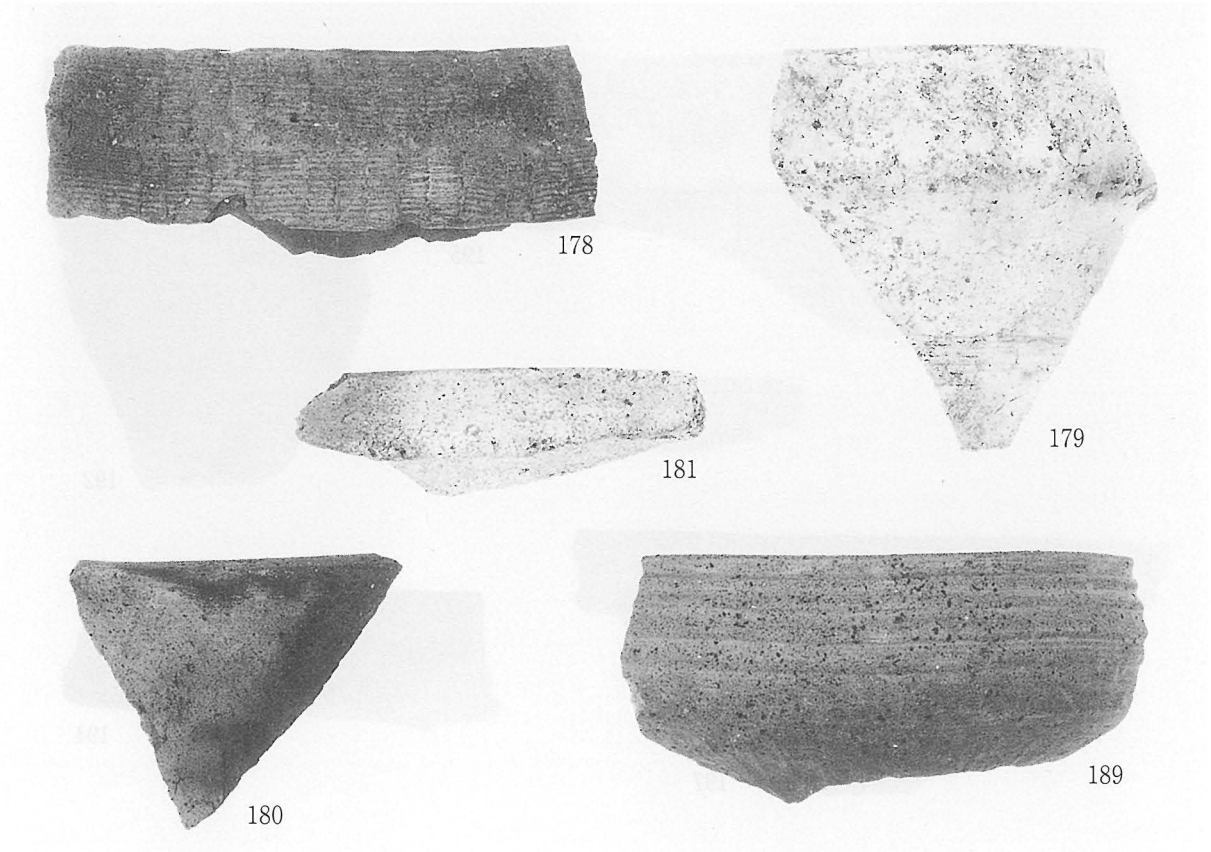
土坑23出土弥生土器　壷（149）、蓋（163）、高坏（164）



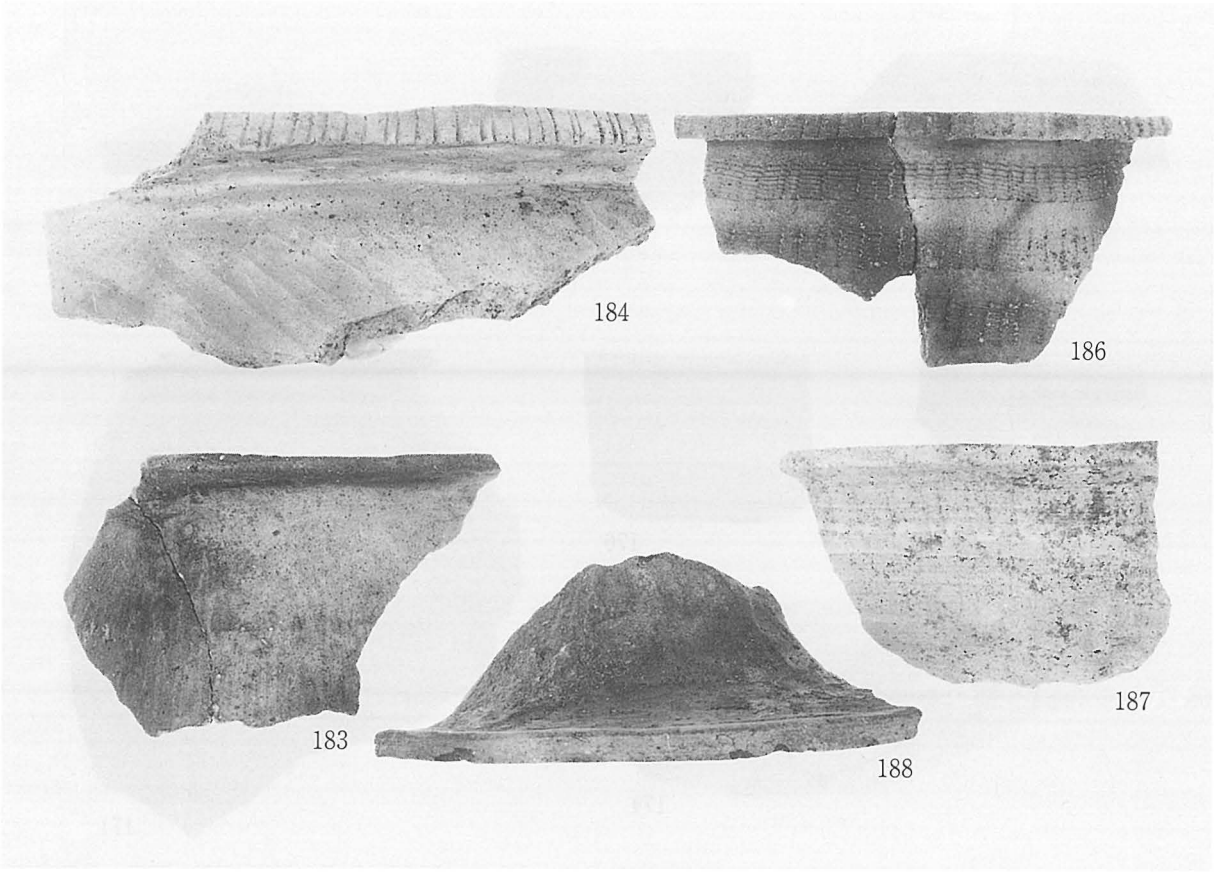
土坑23出土弥生土器　甕（150・151・153・155～157・160）



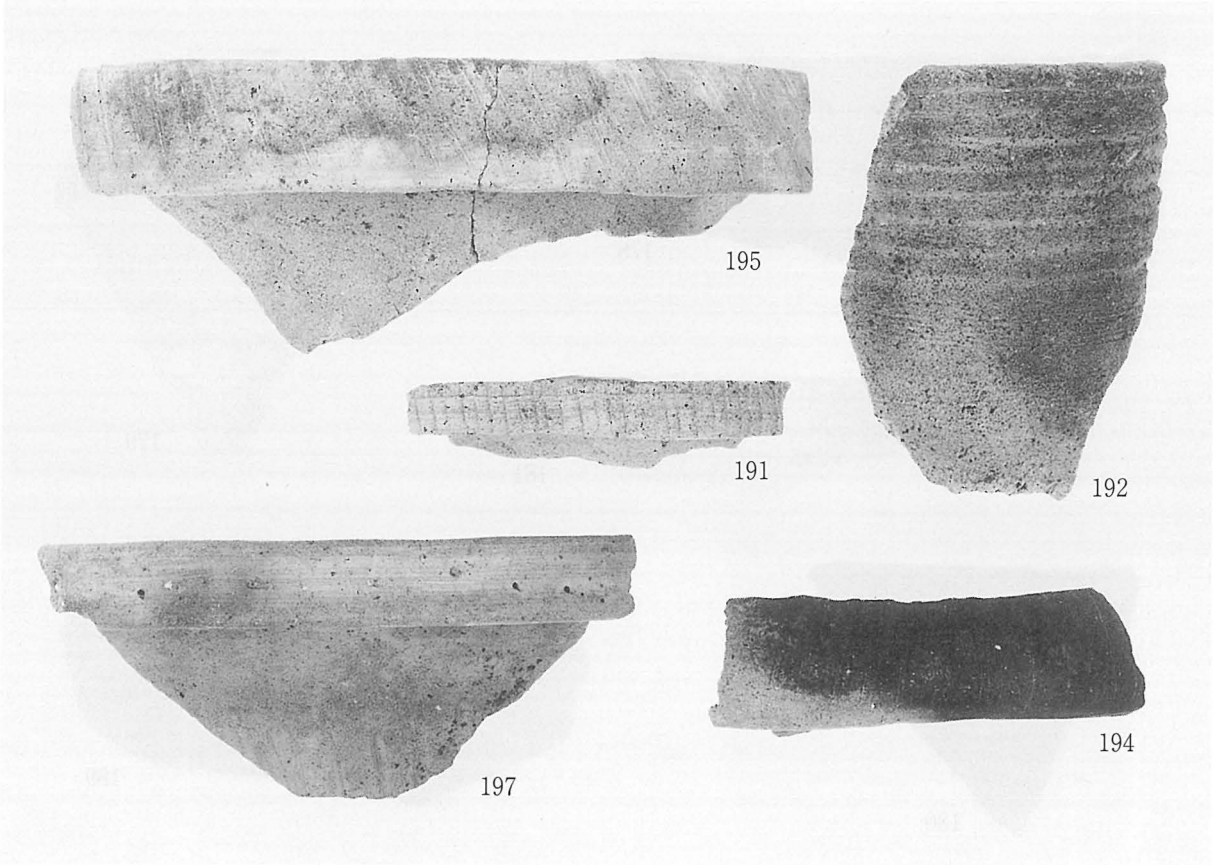
土坑24出土弥生土器　壷（169）、甕（170・171・175）、蓋（172）、高杯（174）、鉢（176）



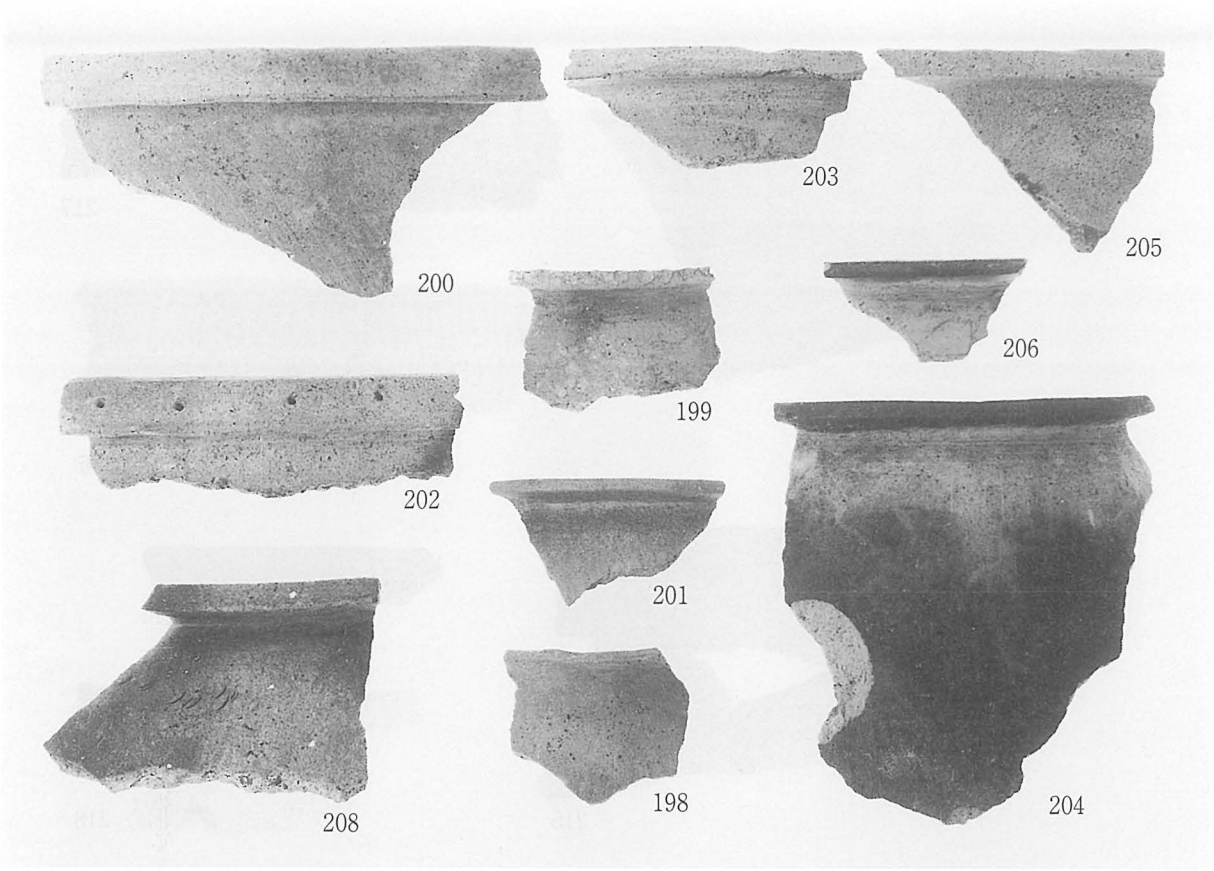
土坑34出土弥生土器　壷（178～181）、高杯（189）



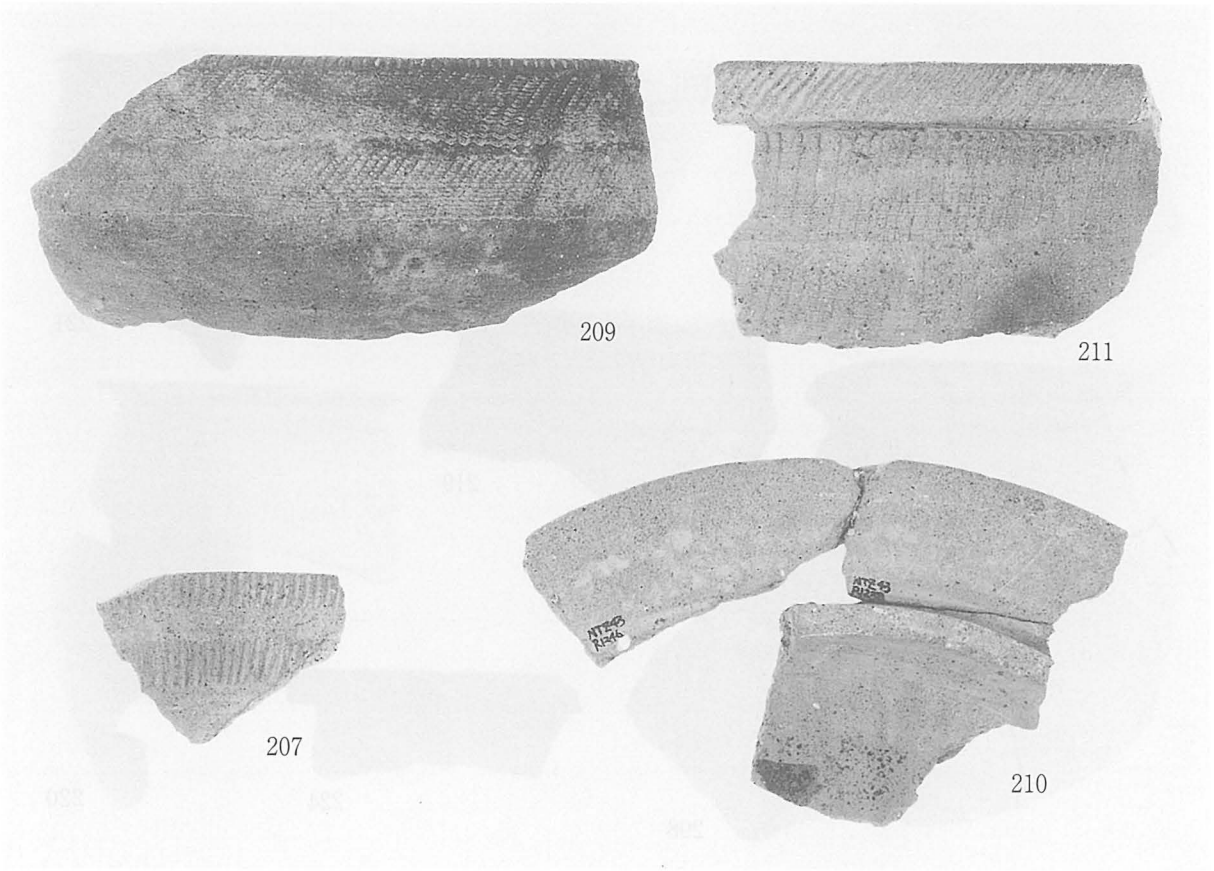
土坑34出土弥生土器　甕（184）、鉢（183・186・187）、蓋（188）



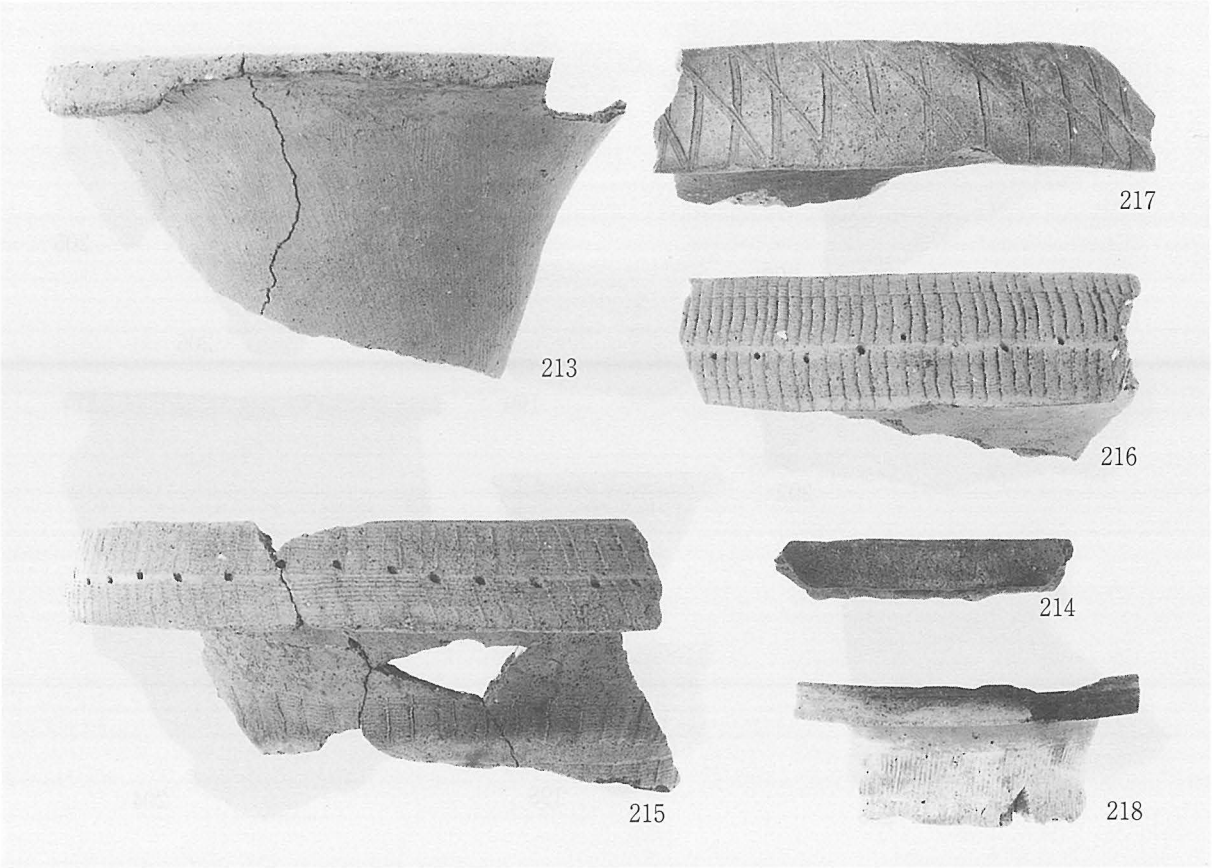
土坑77出土弥生土器　壷（191・192・194・195・197）



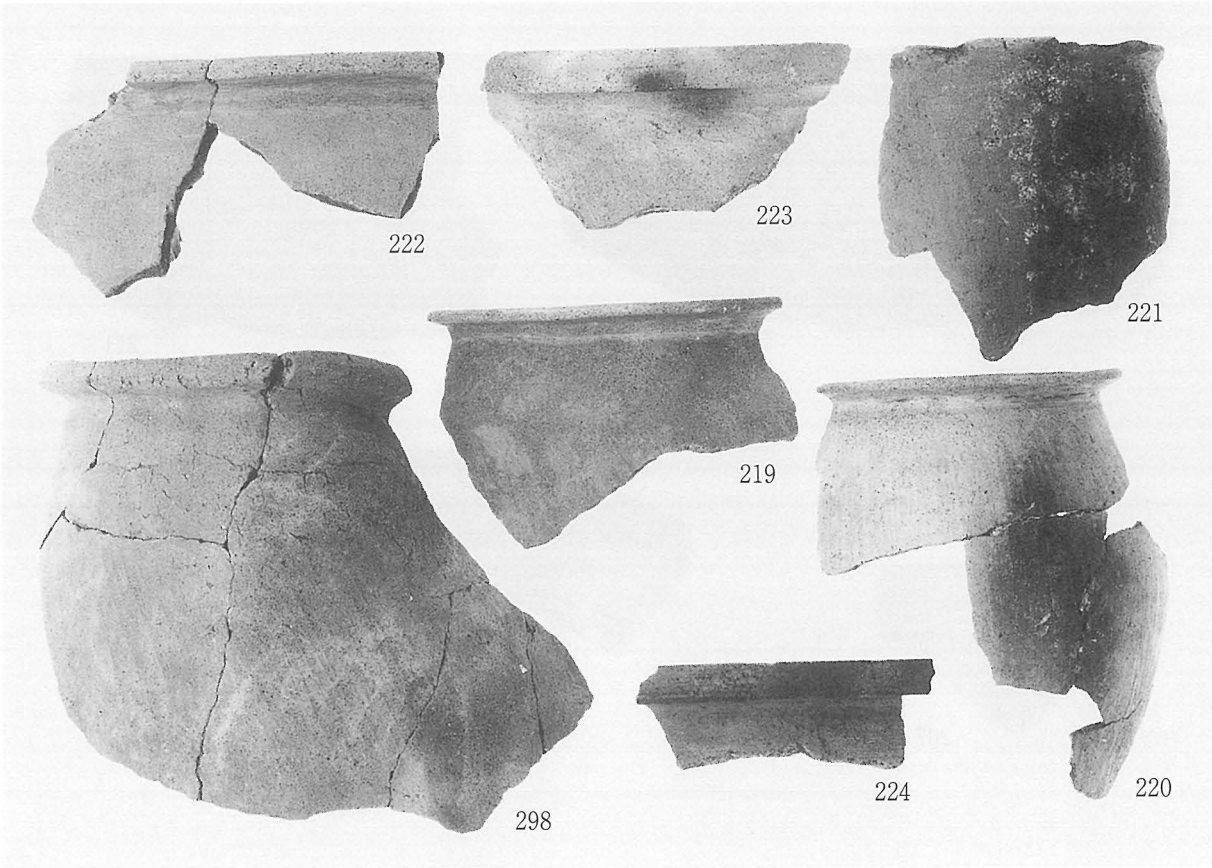
土坑77出土弥生土器　甕（198～206・208）



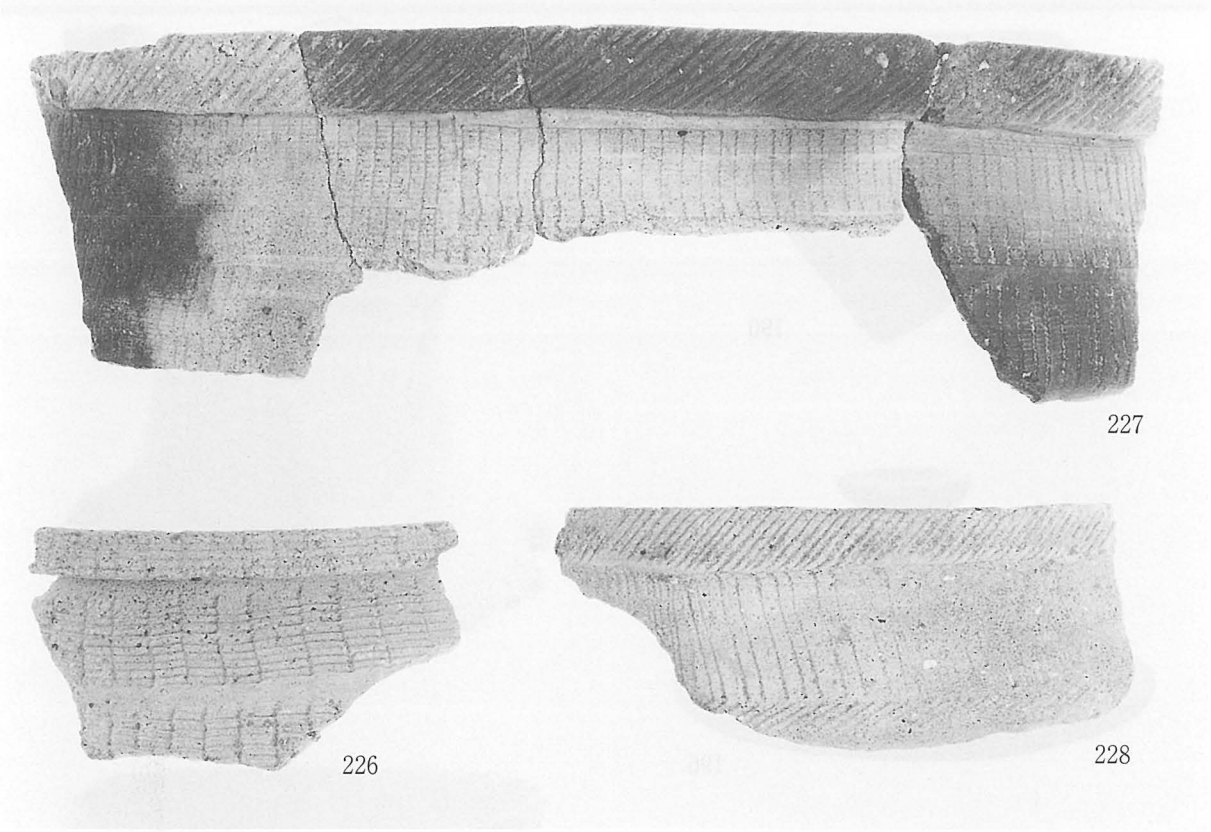
土坑77出土弥生土器　鉢（207・209・211）、高杯（210）



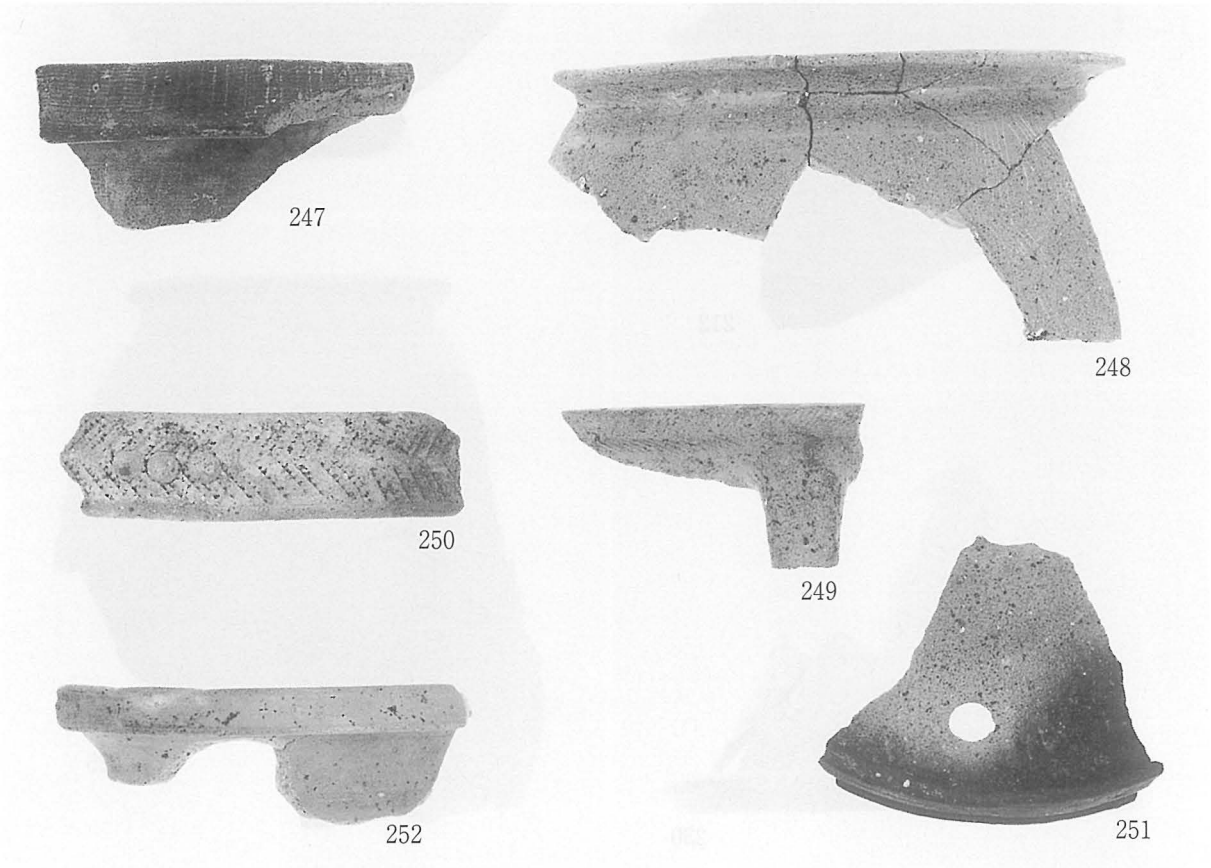
土坑79出土弥生土器　壷（213～218）



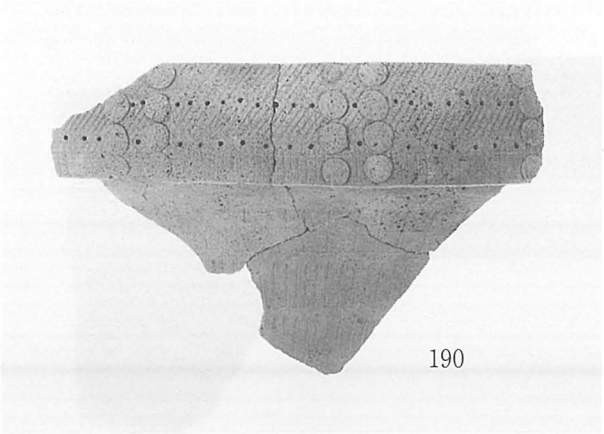
土坑79出土弥生土器　甕（219～224・298）

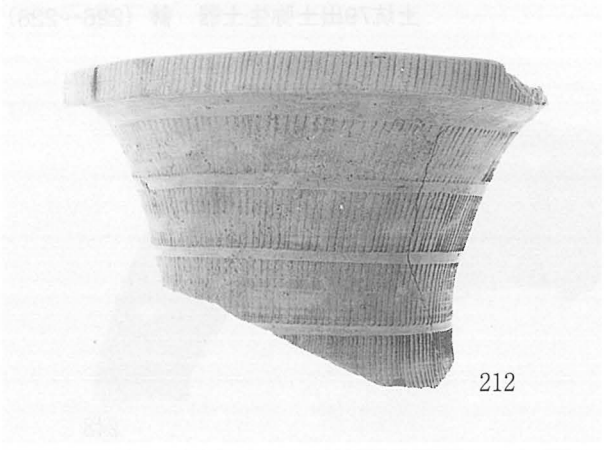


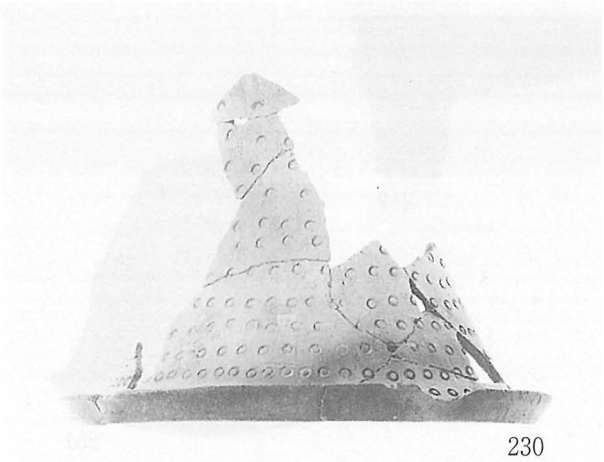
土坑79出土弥生土器　鉢（226～228）



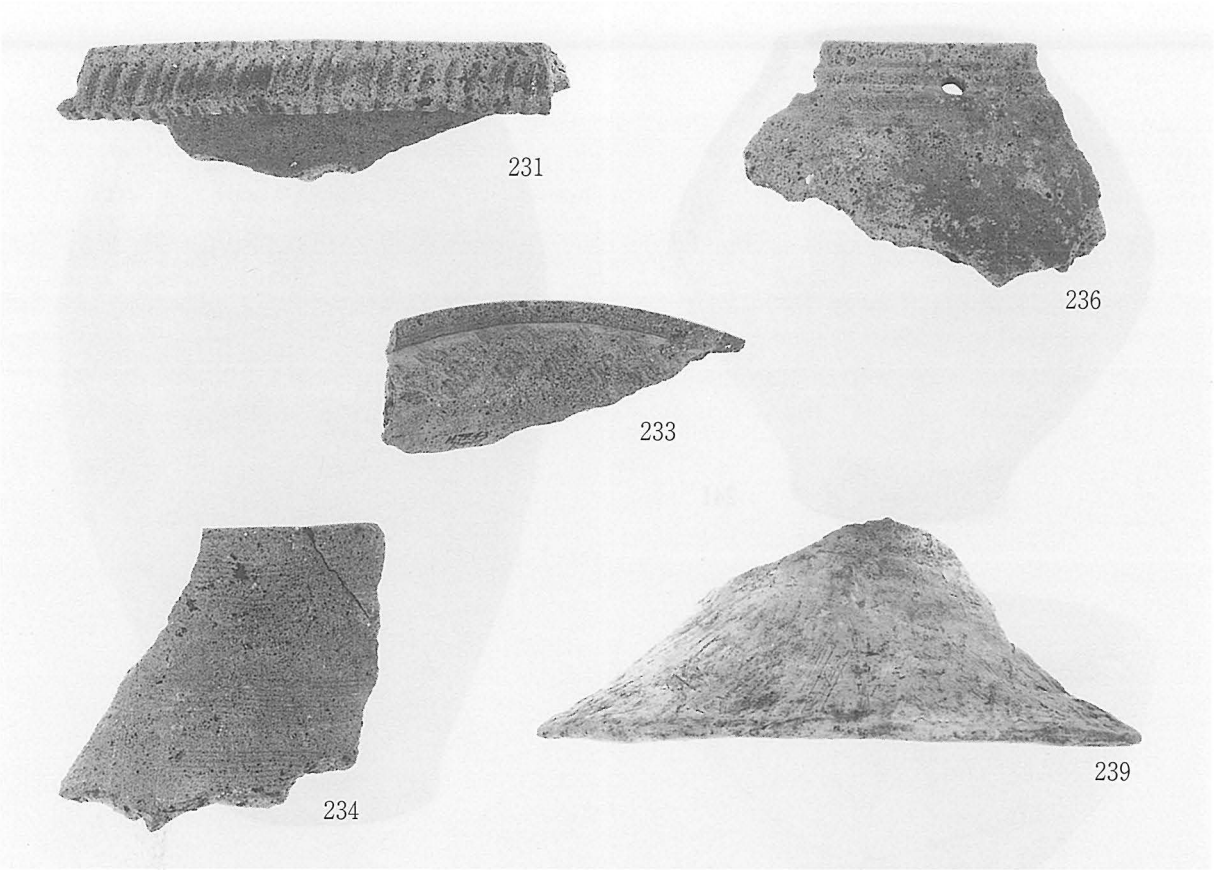
土坑25出土弥生土器　壷（247・250・252）、甕（248）、鉢（249）、脚部（251）



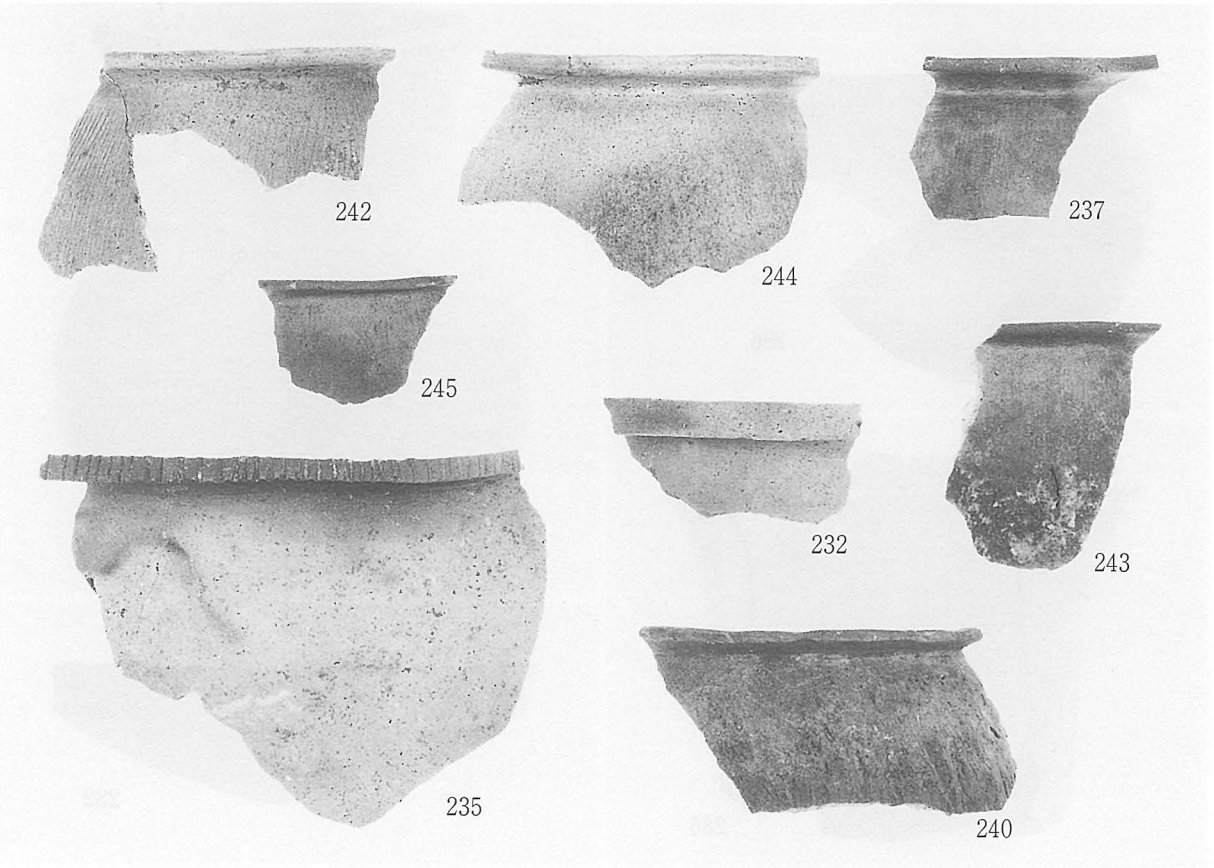




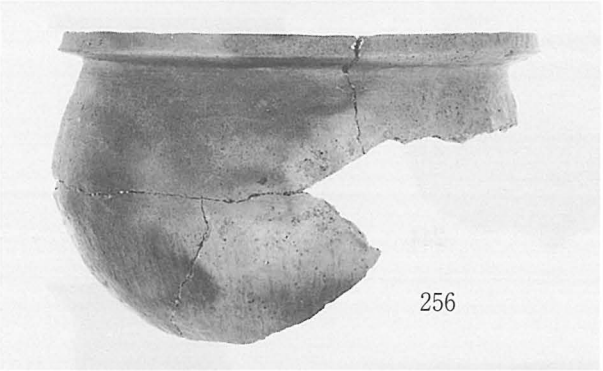
土坑77出土弥生土器　壷（190）、高坏（193）、蓋（196）　土坑79出土弥生土器　壷（212）、鉢（229・230）
土坑76出土弥生土器　甕（255）

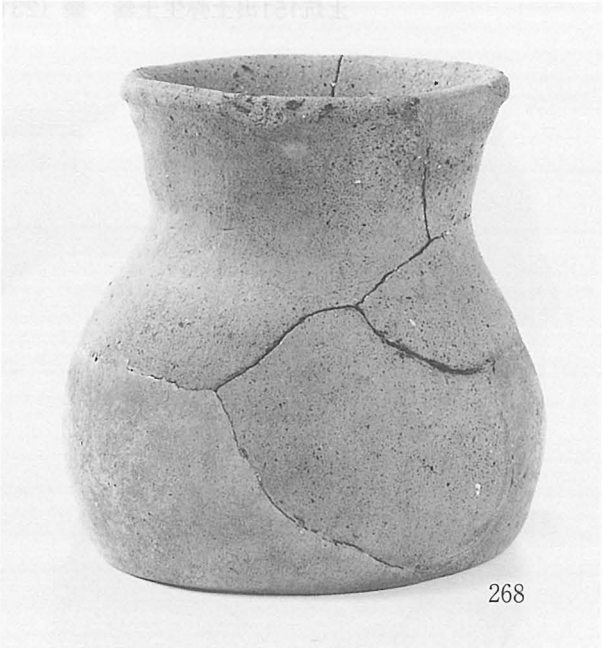


土坑151出土弥生土器　壷（231・233）、水差形土器（234）、無頸壷（236）、蓋（239）



土坑151出土弥生土器　甕（232・235・237・240・242～245）





土坑36出土弥生土器　鉢（256）　土坑151出土弥生土器　鉢（238）、壷（241）　ピット316出土弥生土器　甕（254）
竪穴住居１出土弥生土器　短頸壷（268）、高坏（282）、長頸壷（286）

263

293

295

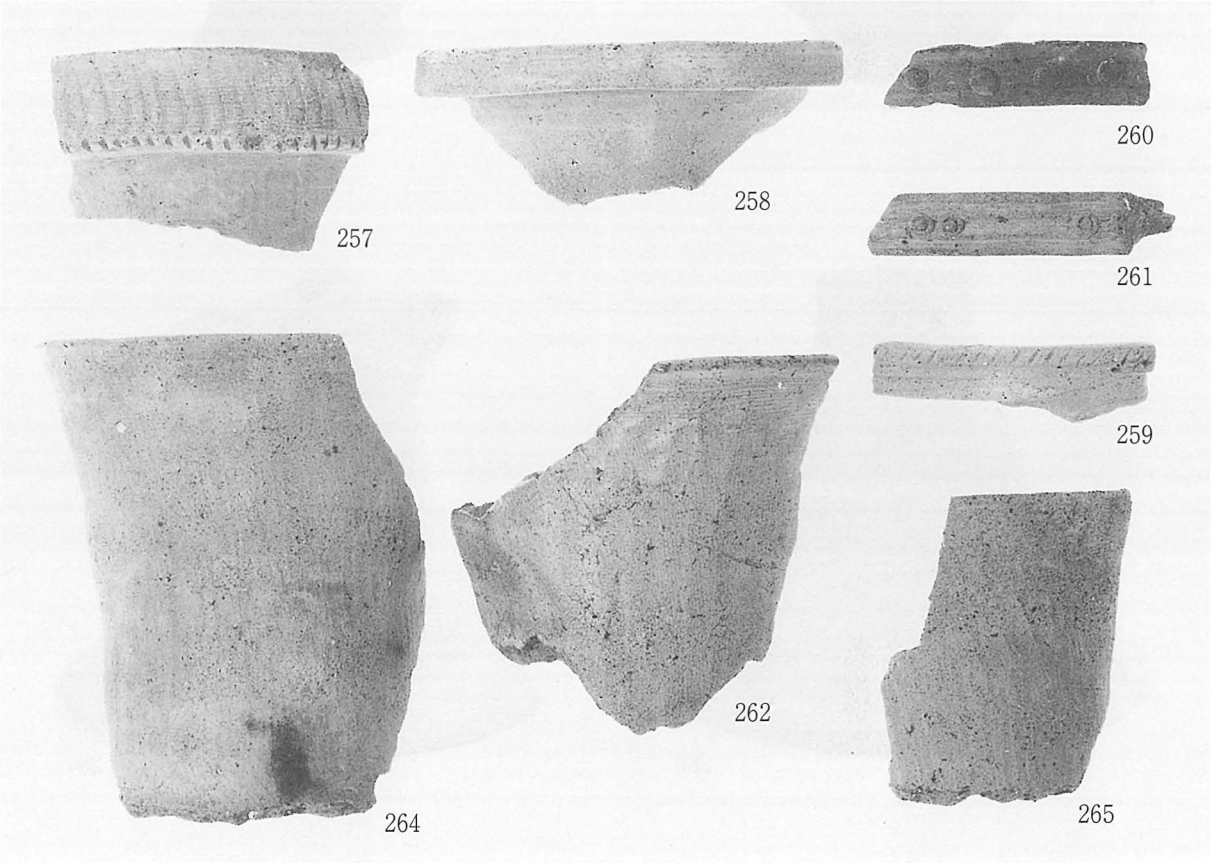
294

285

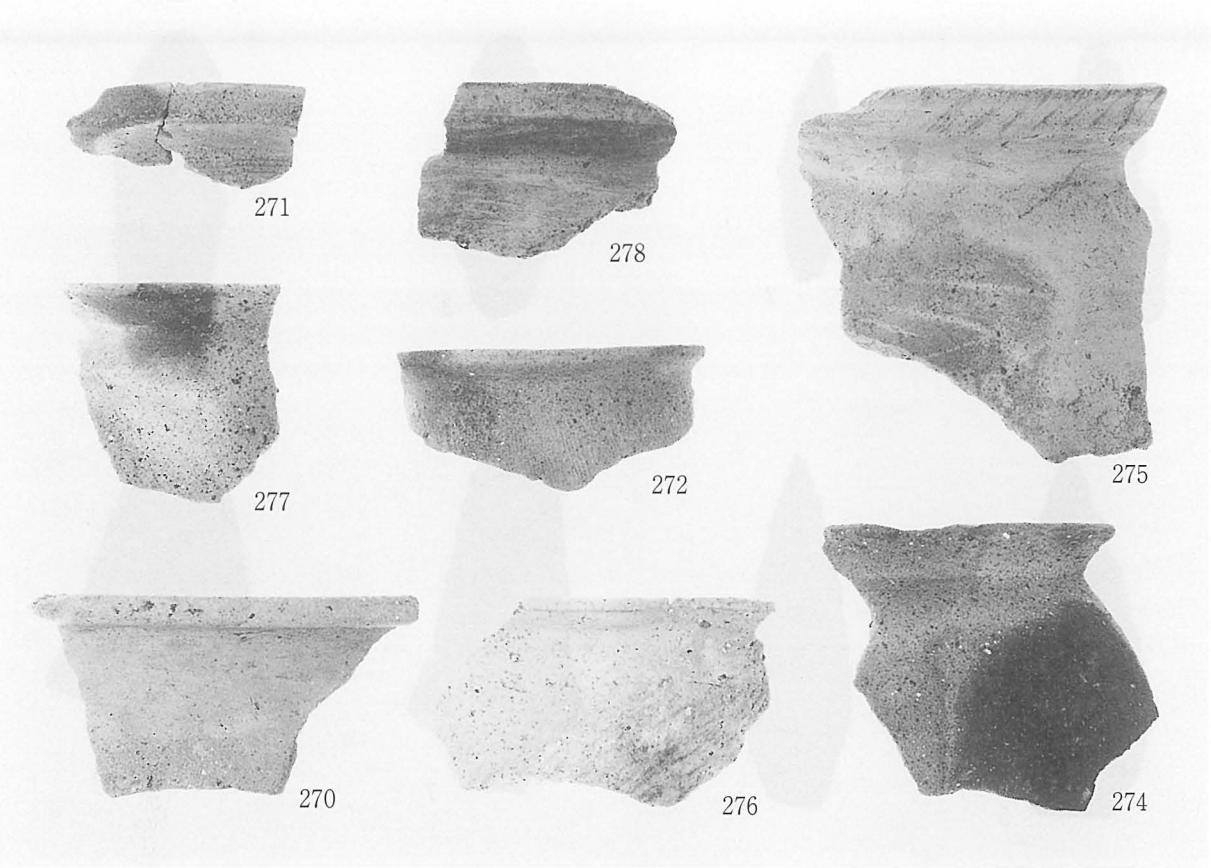
284

竪穴住居１出土弥生土器　壷（263・294・295）、椀形鉢（293）、高坏（284・285）

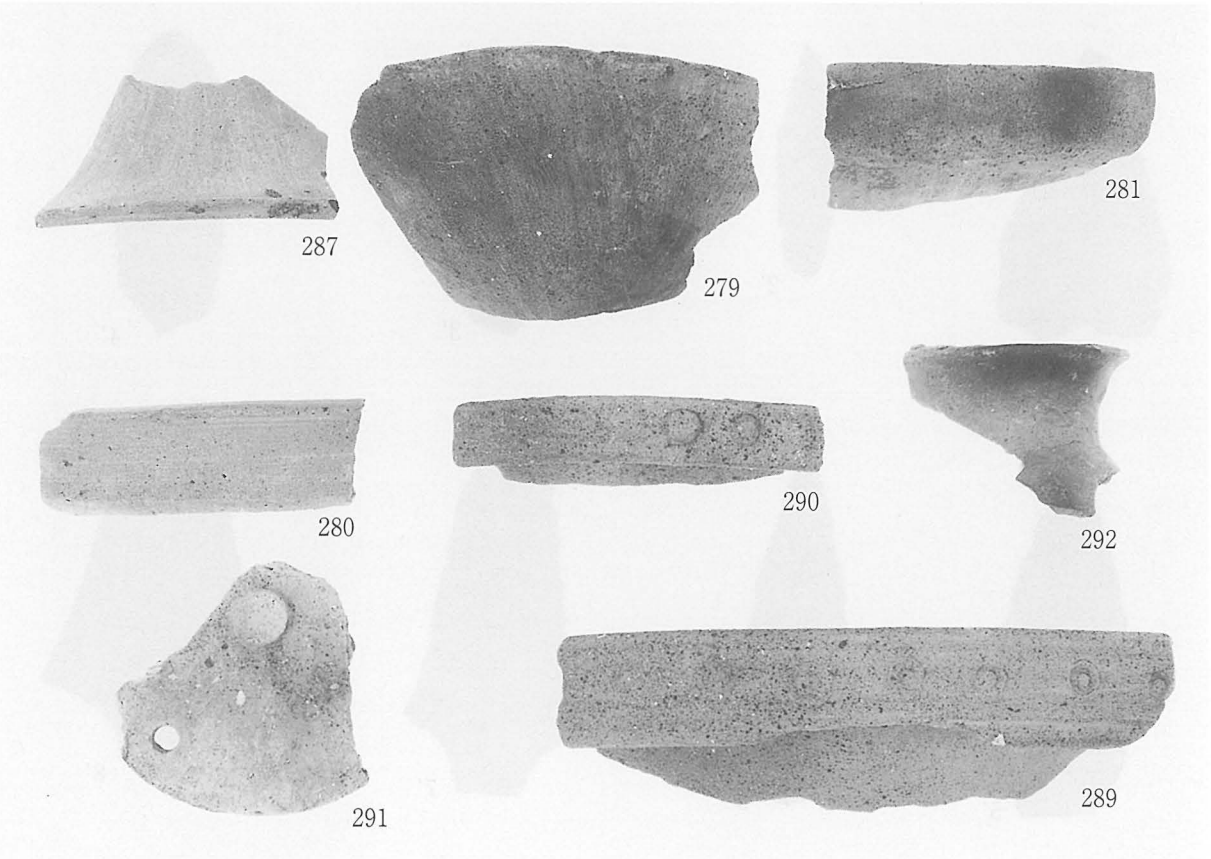
竪穴住居１出土弥生土器　高杯（283）、器台（288）



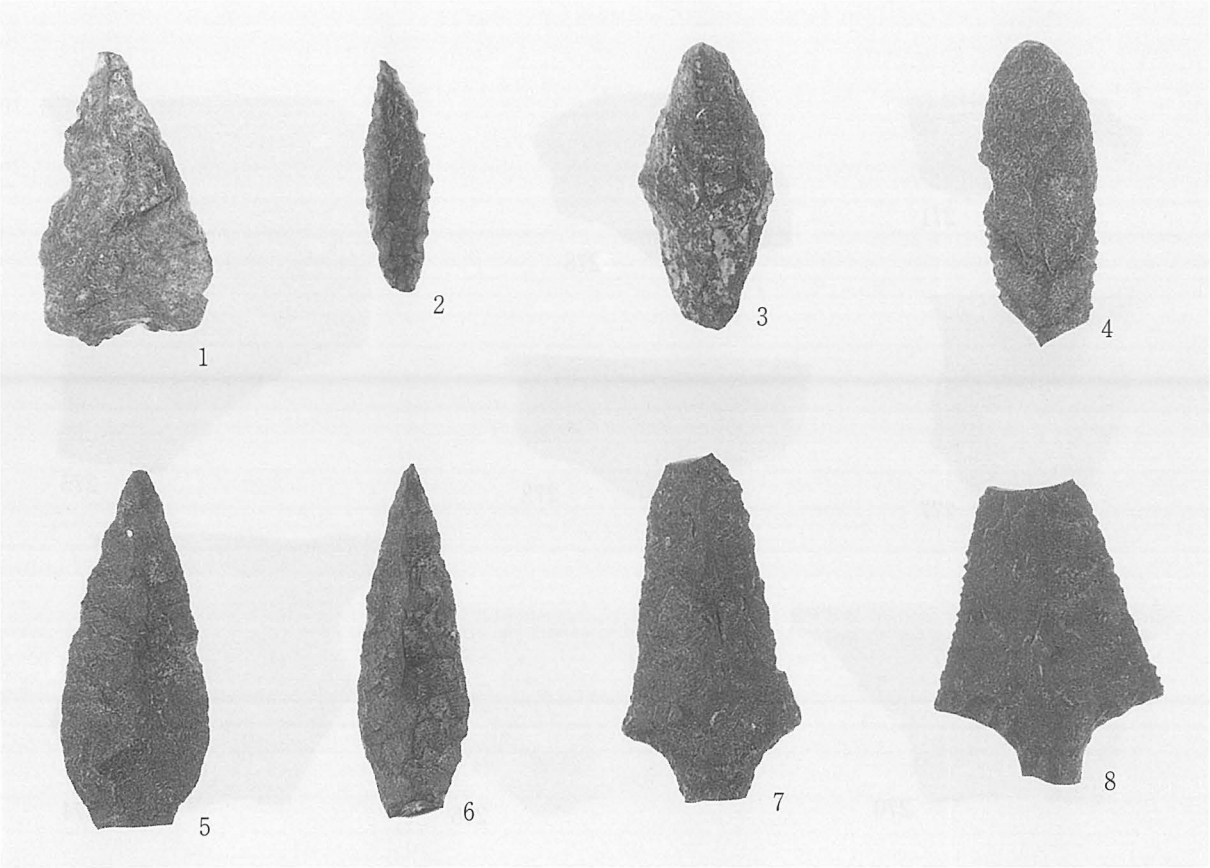
竪穴住居１出土弥生土器　壷（257～262・264・265）



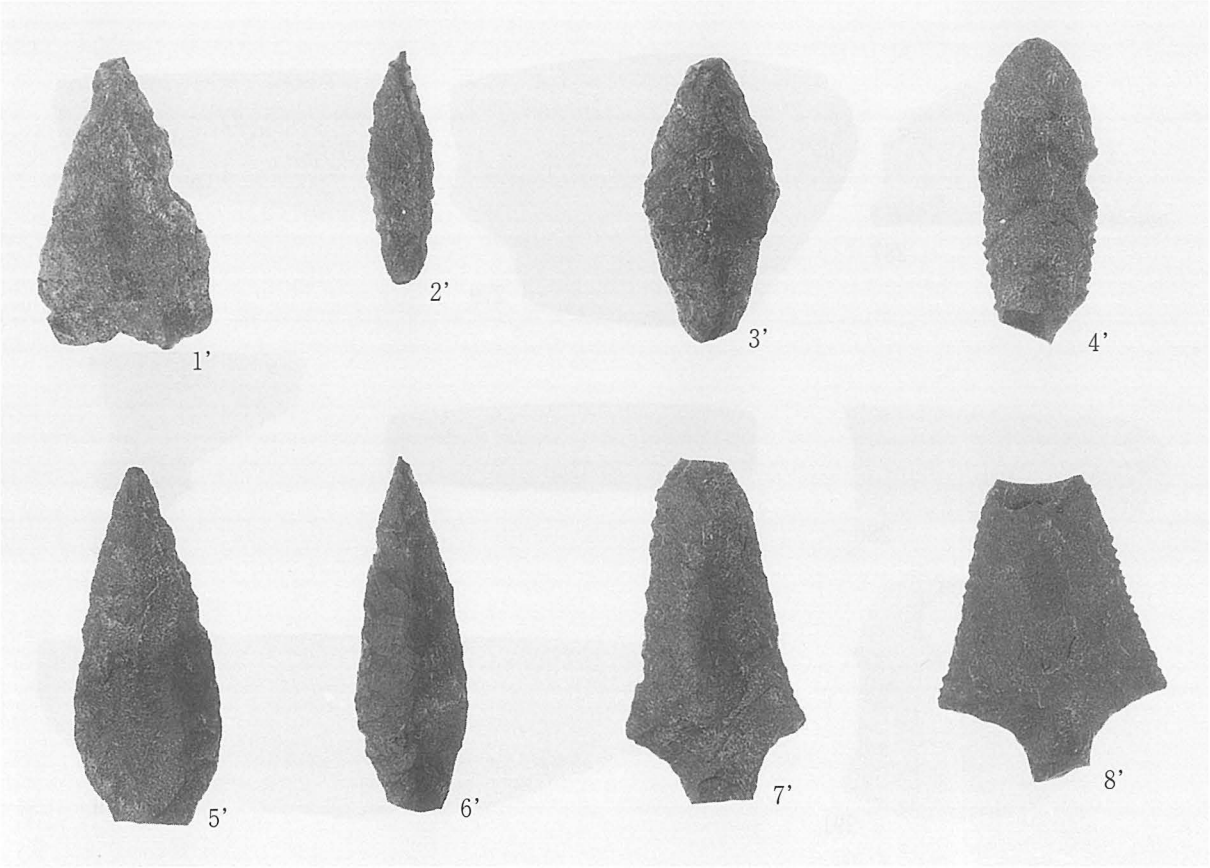
竪穴住居１出土弥生土器　甕（270～272・274～278）



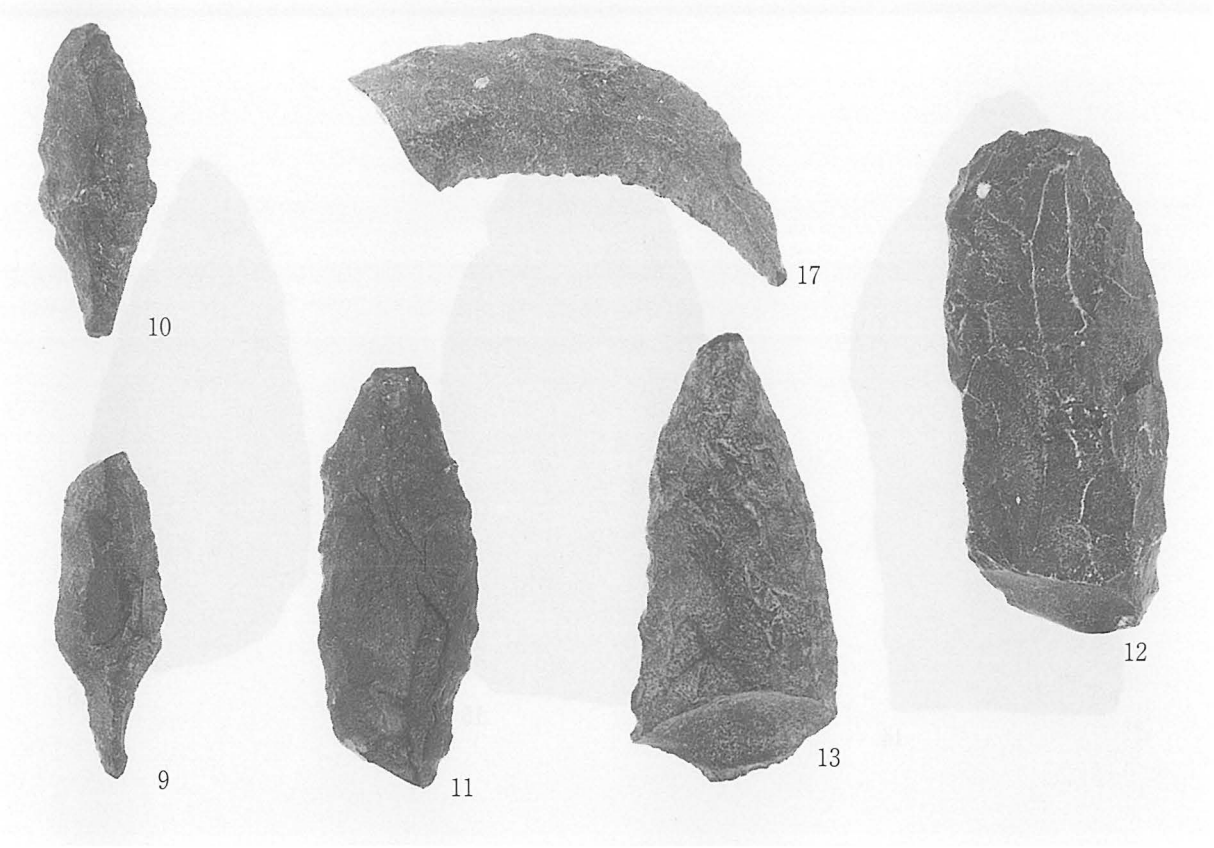
竪穴住居１出土弥生土器　高坏（279～281）、器台（289・290）、蓋（291）、ミニチュア壷（292）、脚部（287）



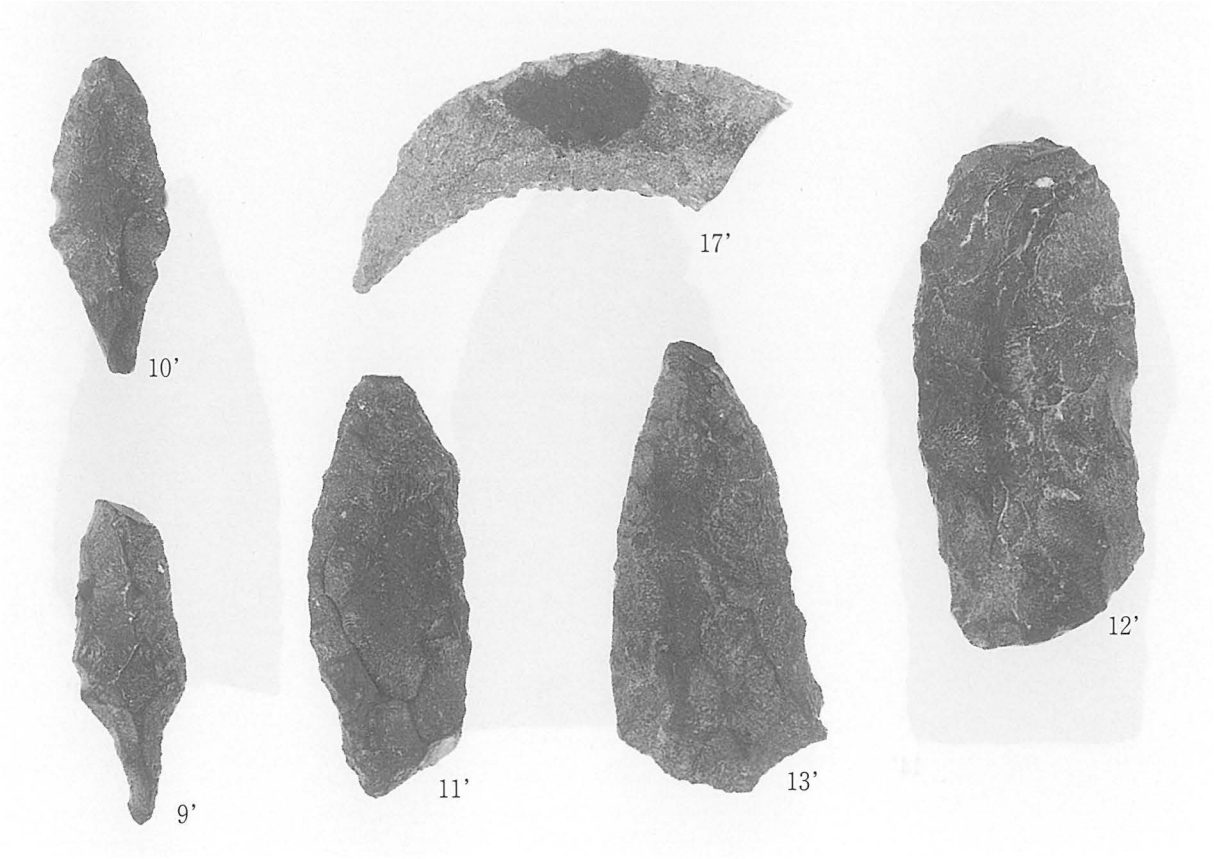
石器　石鏃（1～8）



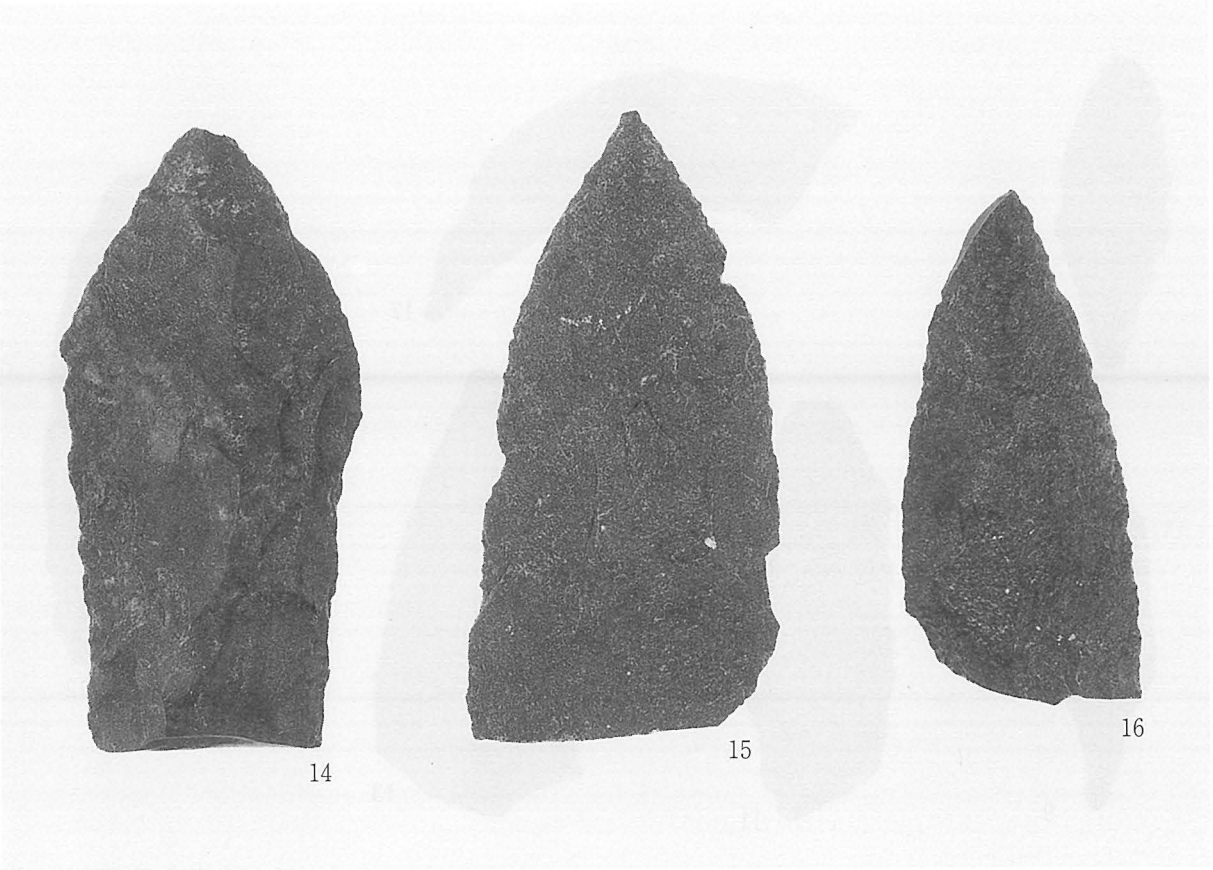
石器　同上（裏面）



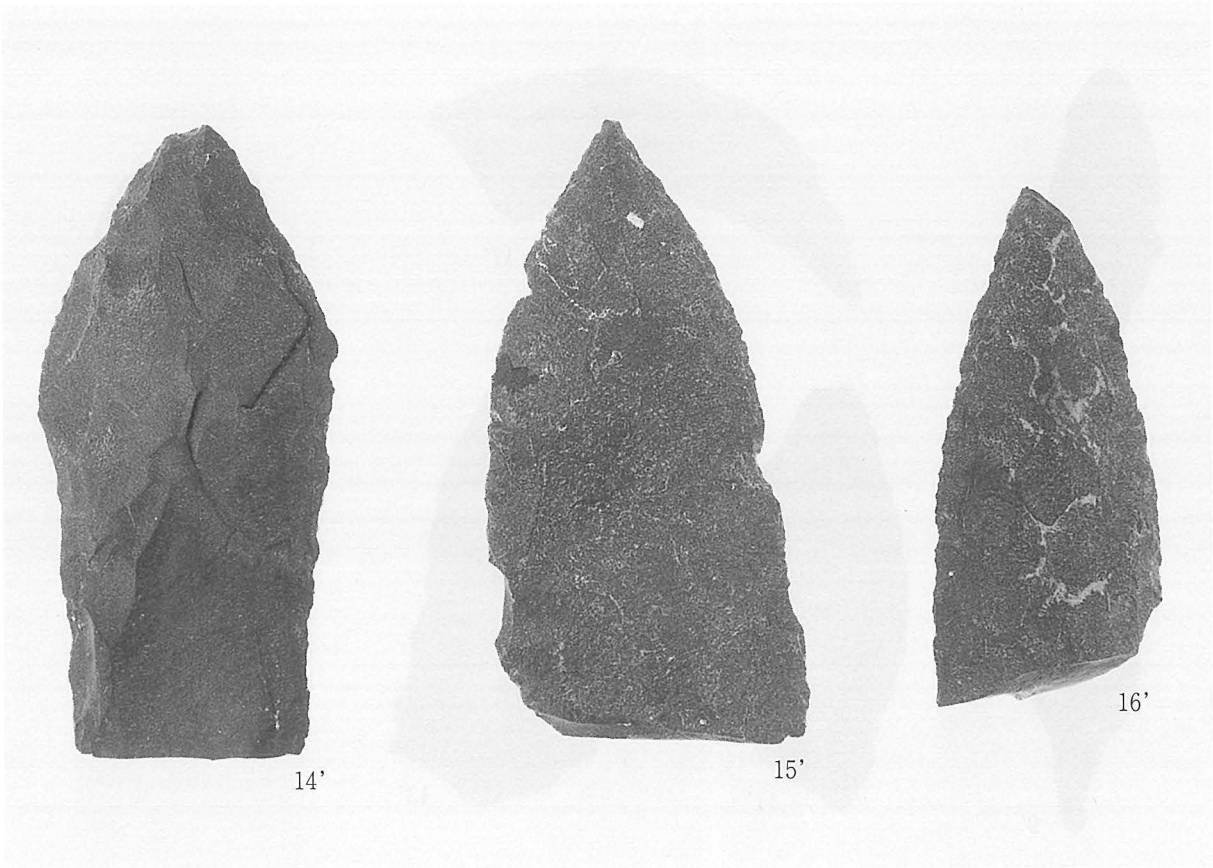
石器　石錐（9・10）、石槍（11～13）、石小刀（17）



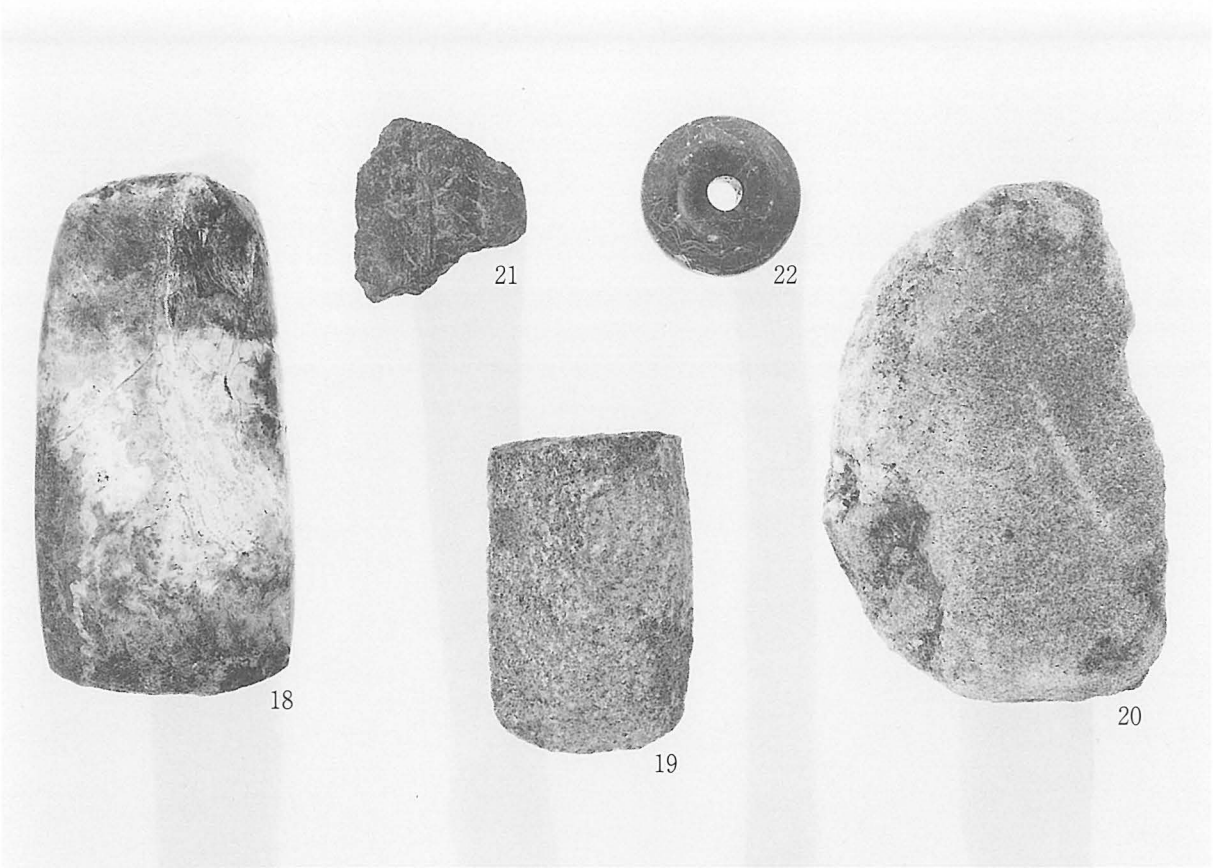
石器　同上（裏面）



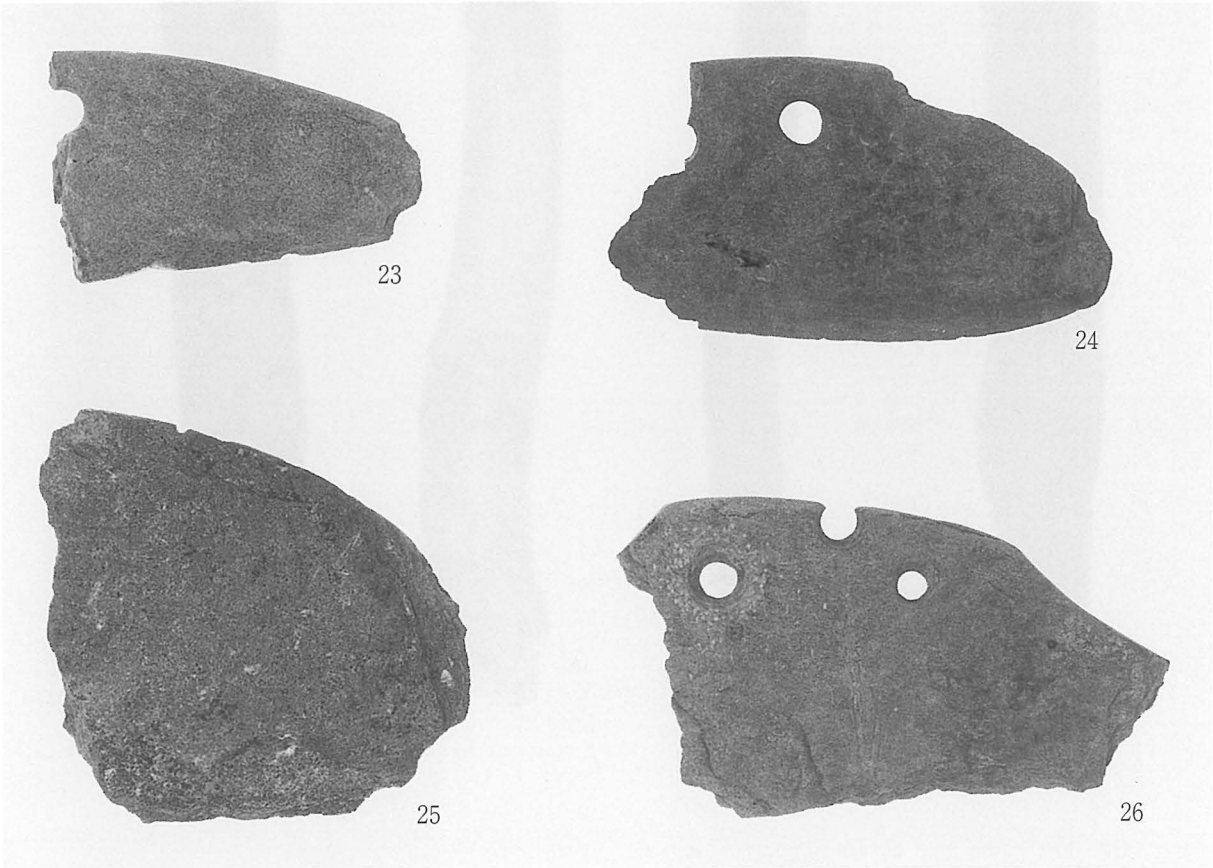
石器　石槍（14～16）



石器　同上（裏面）

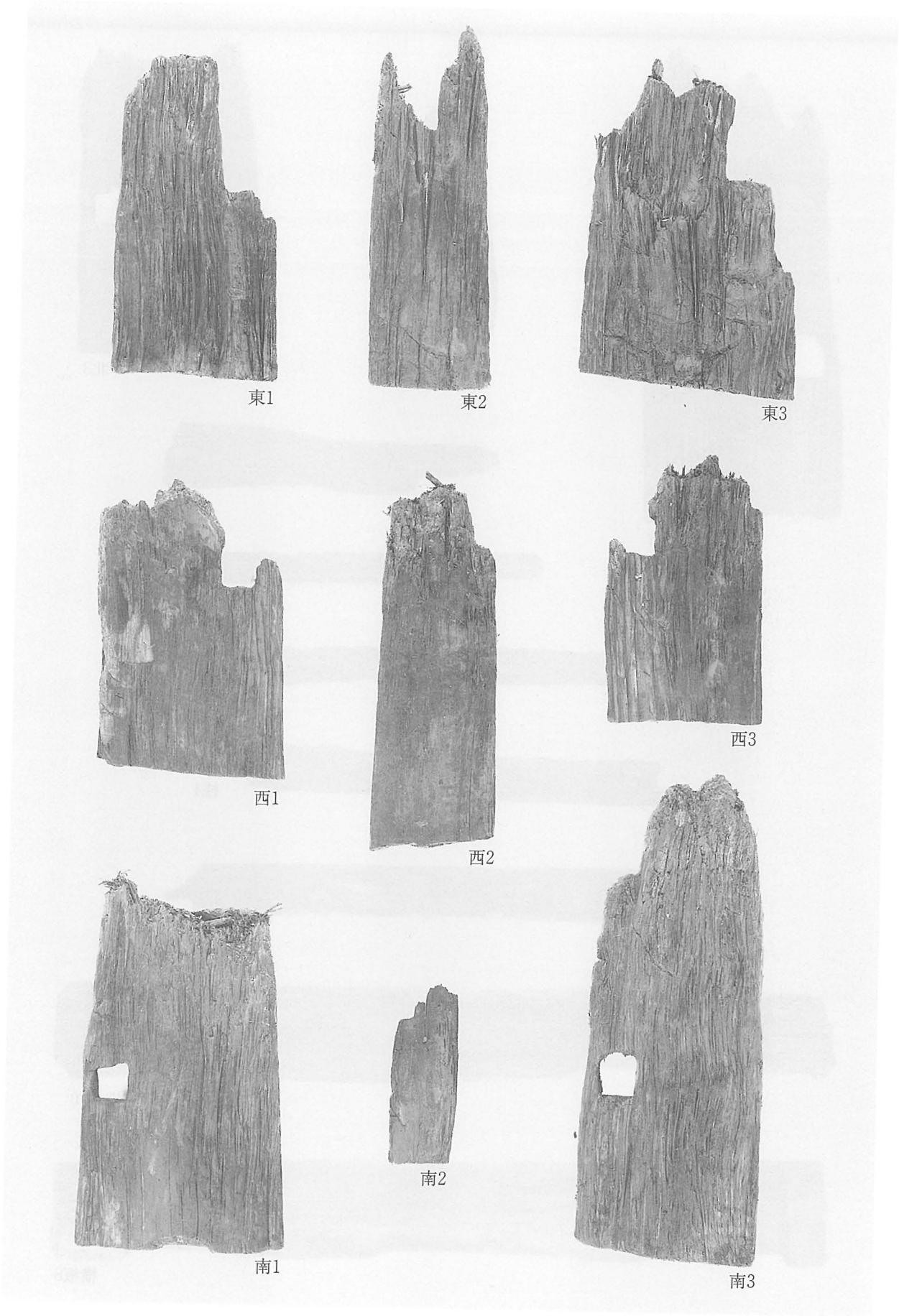


石器　石斧（18・19）、砥石（20）、石剣（21）、紡錘車（22）

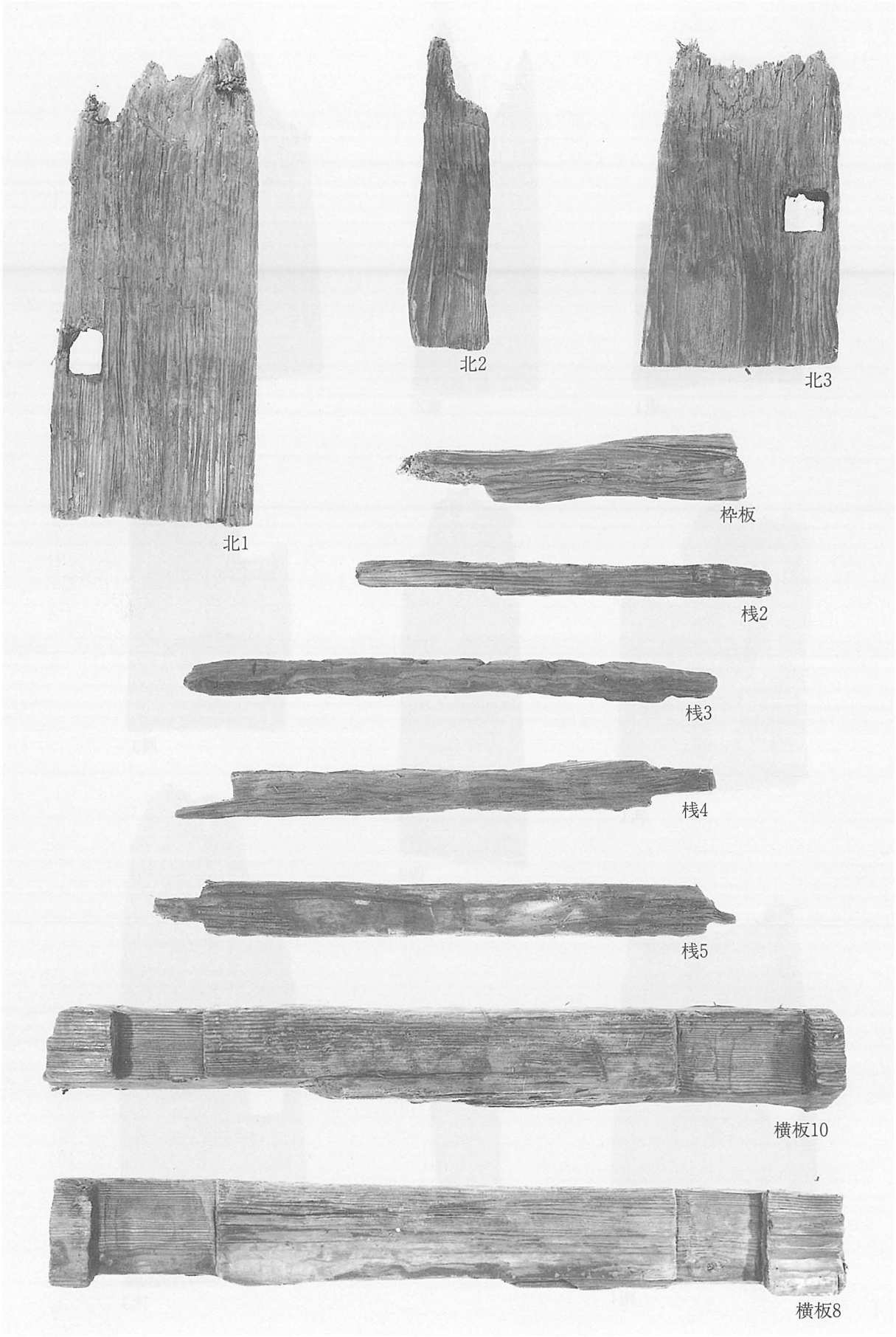


石器　石包丁（23～26）

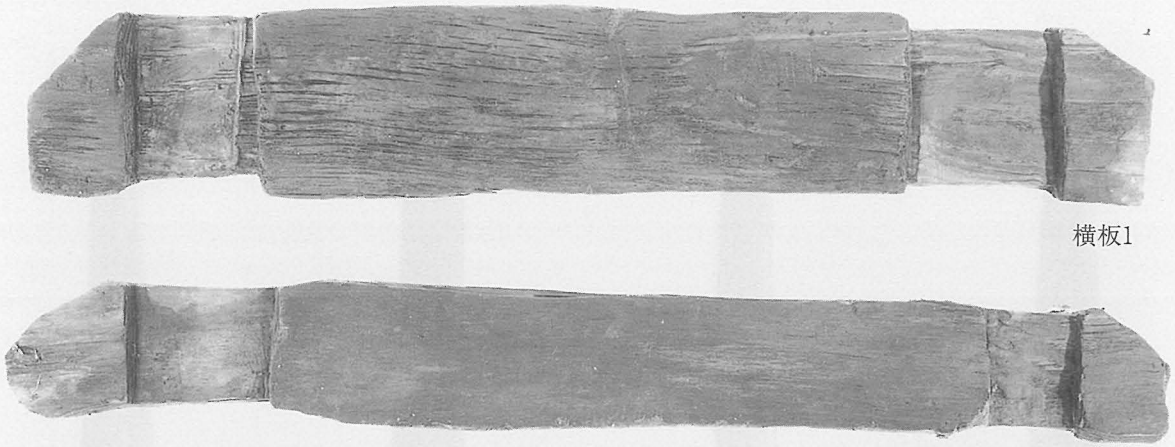
井戸1出土木枠　支柱



井戸１出土木枠　縦板（東1～東3・西1～西3・南1～南3）

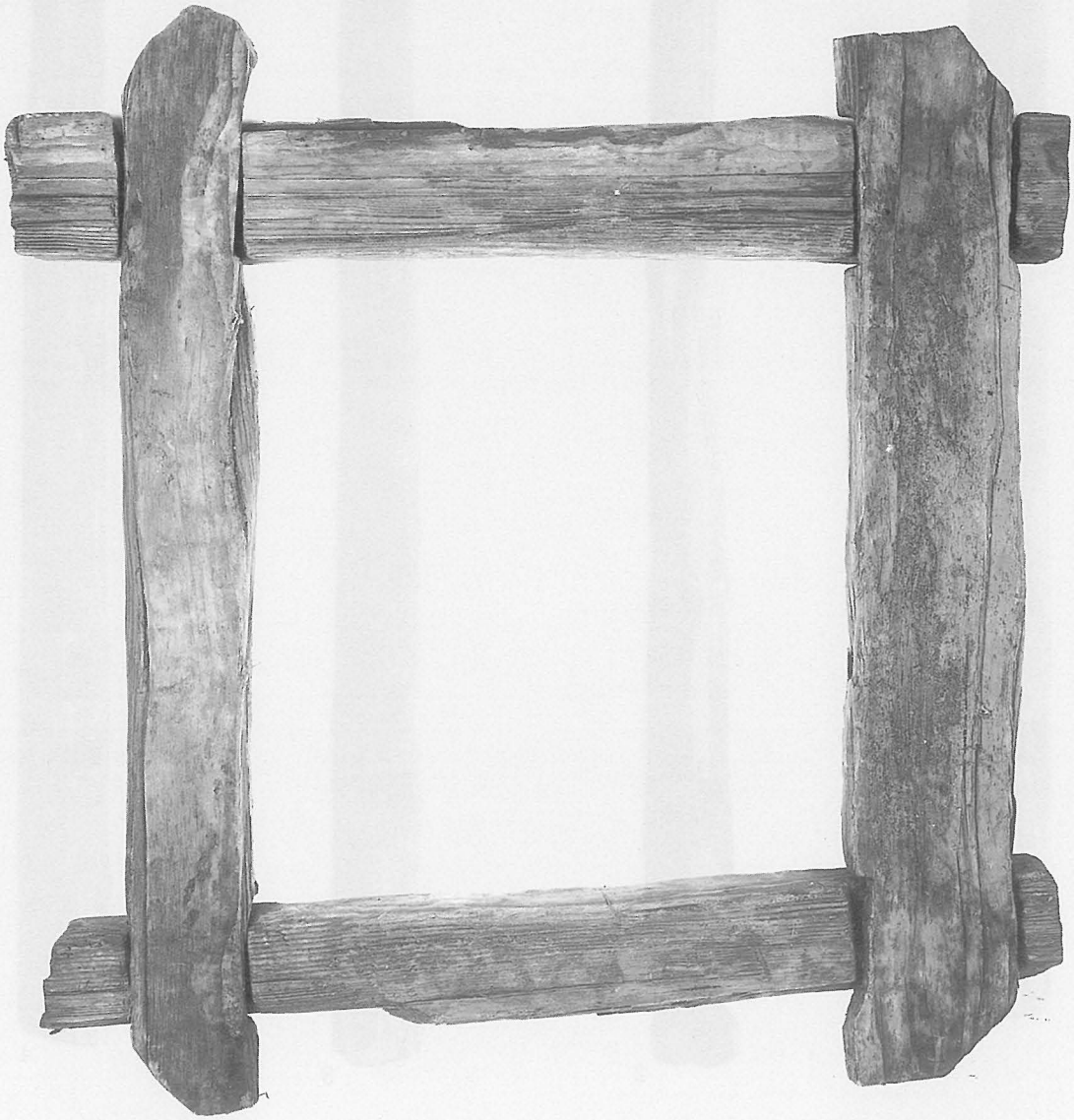


井戸１出土木枠　縦板（北1～北3）、枠板、横桟（桟2～桟5）、横板（10・8）



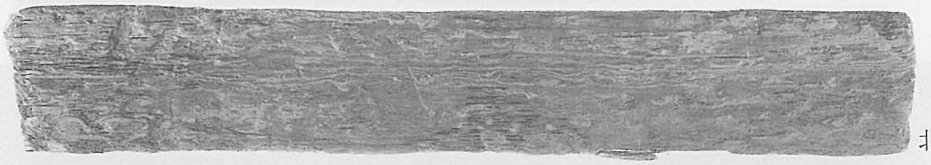
横板1

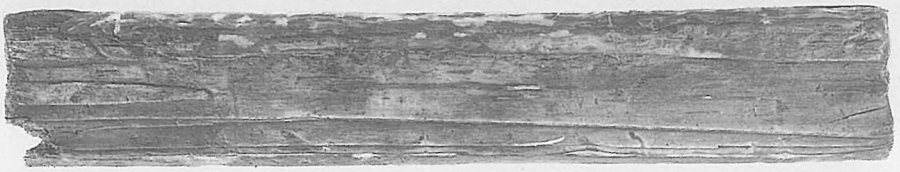
横板6

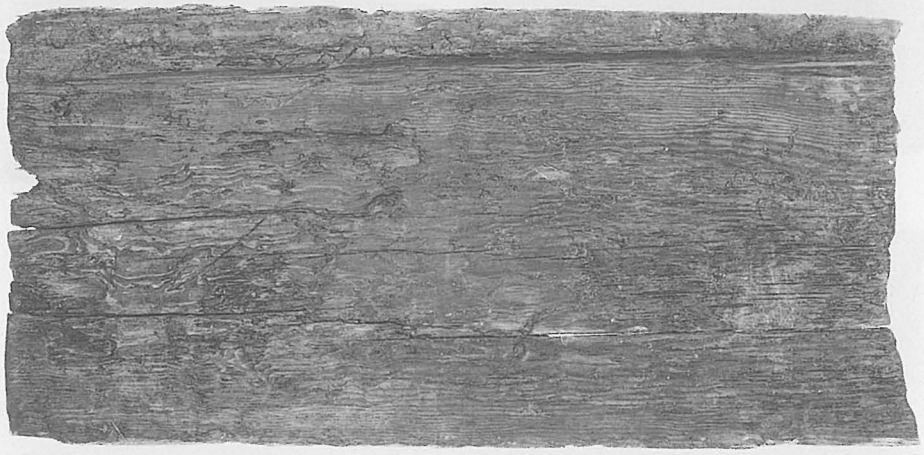


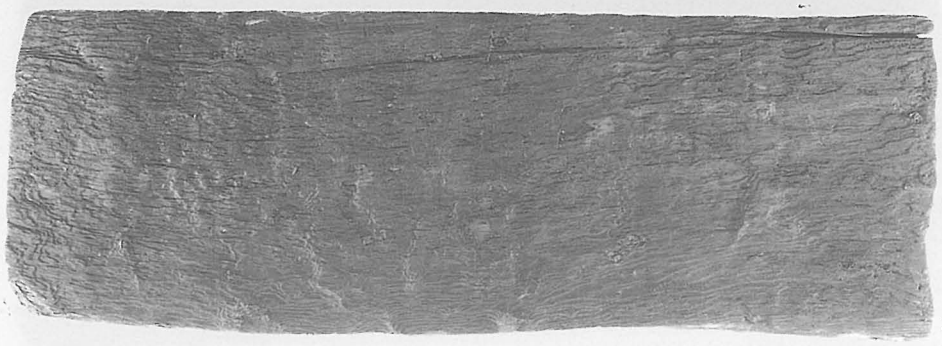
井戸１出土木枠　横板（1・6）、横板組立状況

井戸５出土木枠　隅柱（1～4）

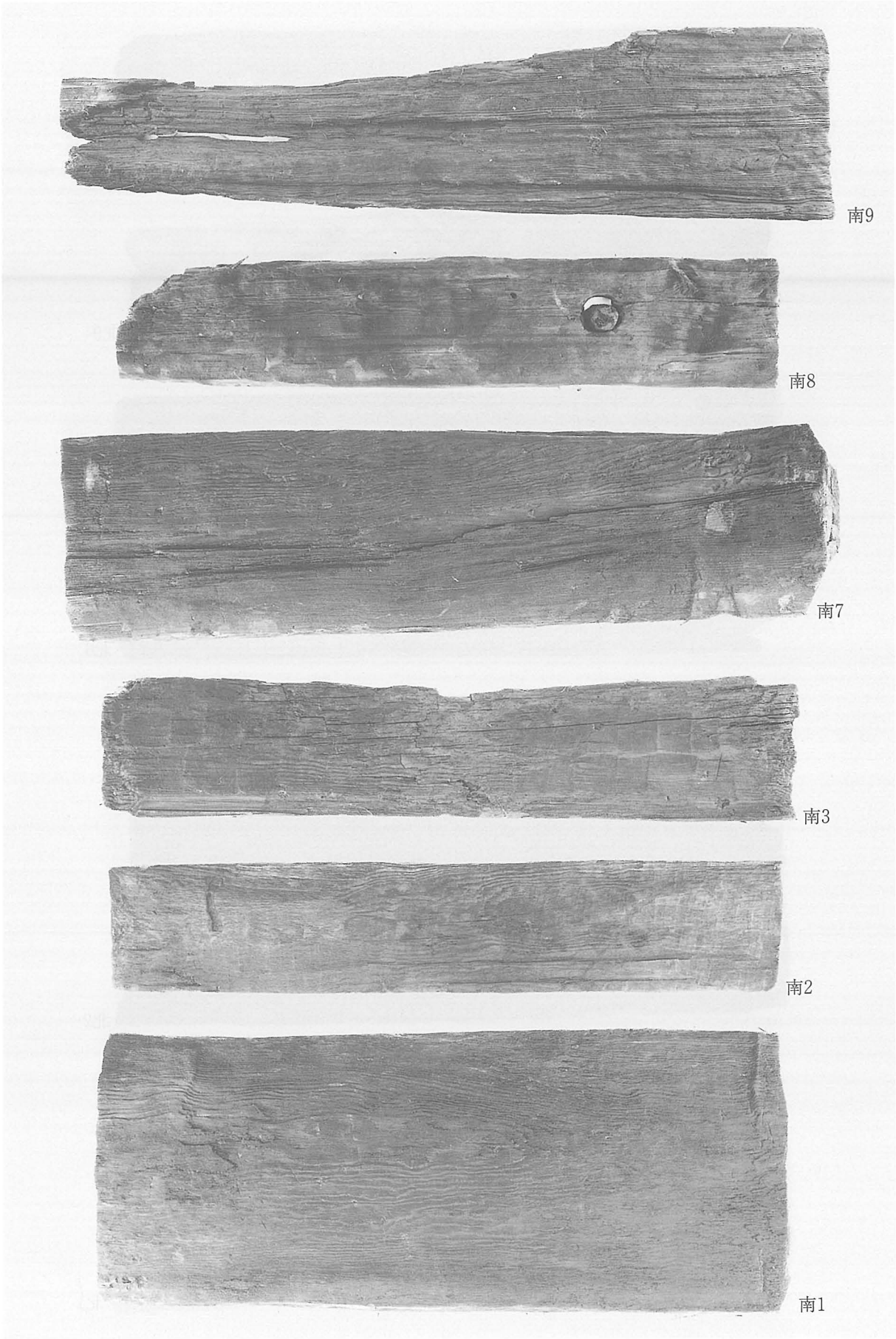




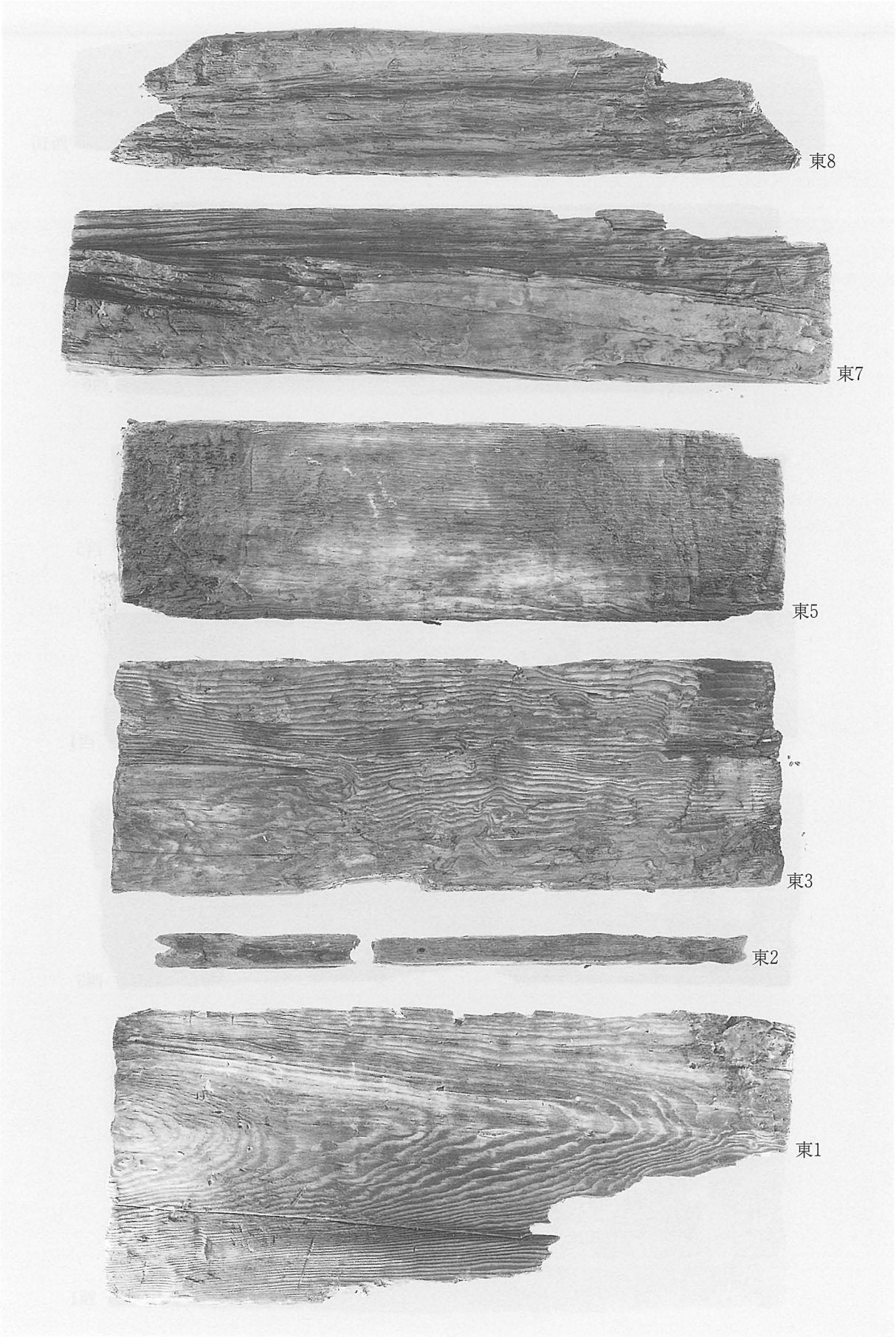




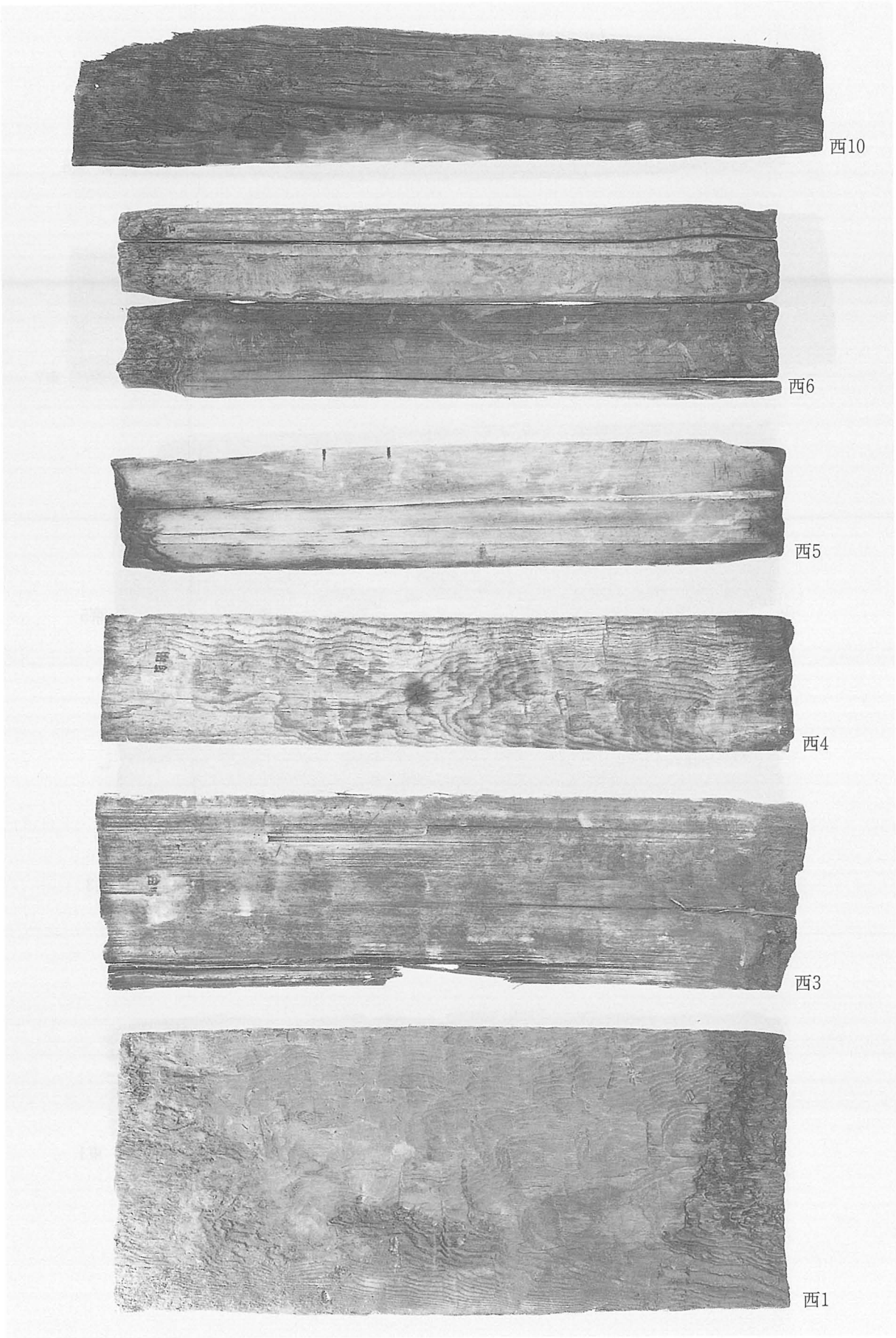
井戸５出土木枠　横板（北1・2・6・7・9・10）



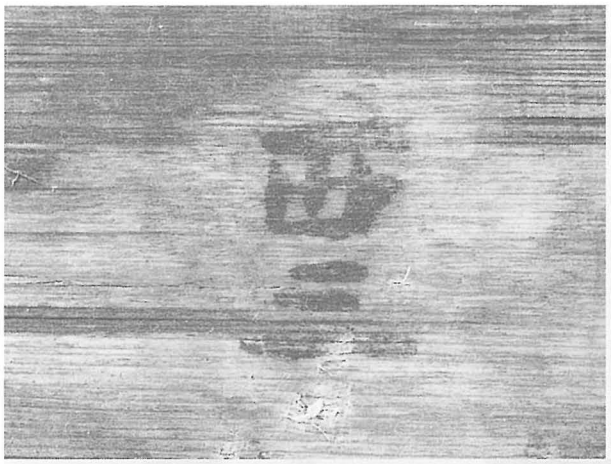
井戸５出土木枠　横板（南1・2・3・7・8・9）



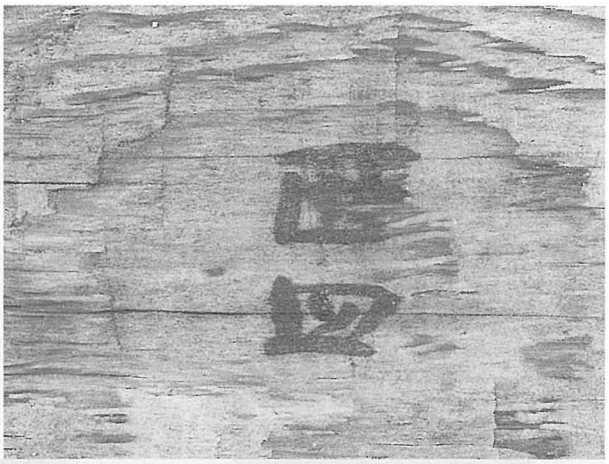
井戸５出土木枠　横板（東1・2・3・5・7・8）



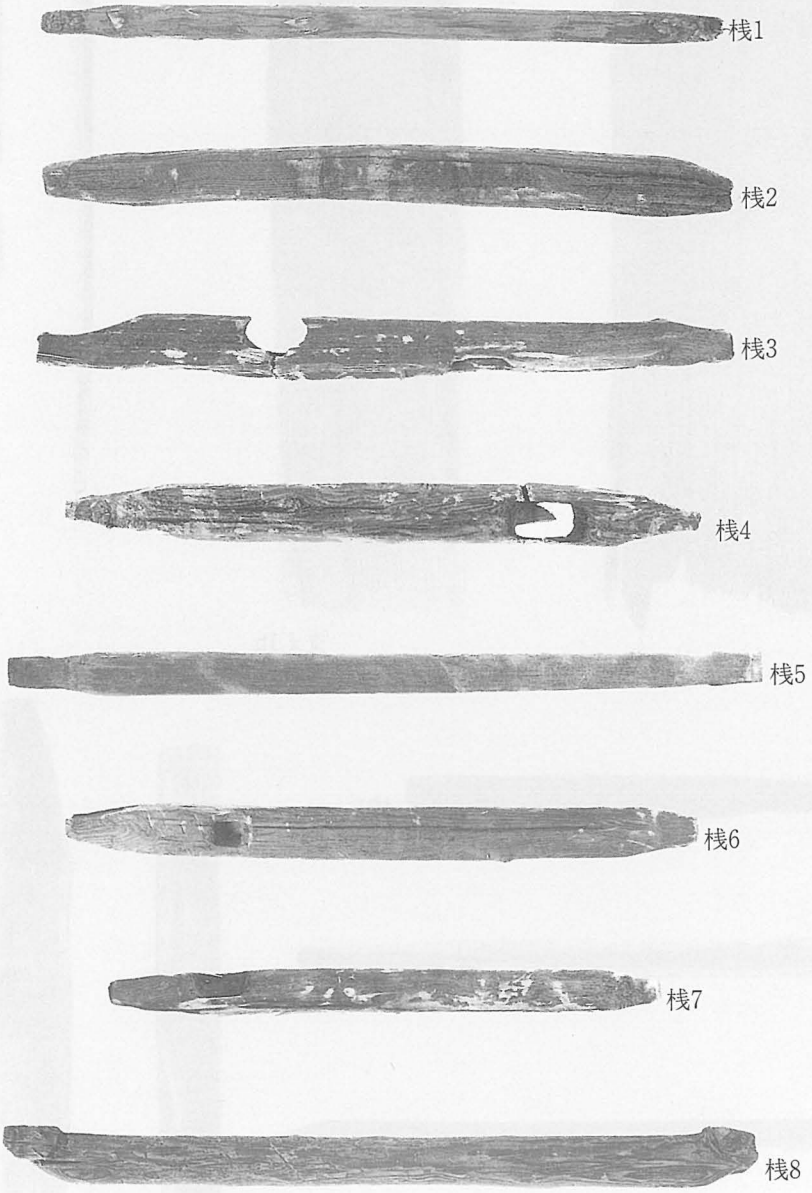
井戸５出土木枠　横板（西1・3・4・5・6・10）



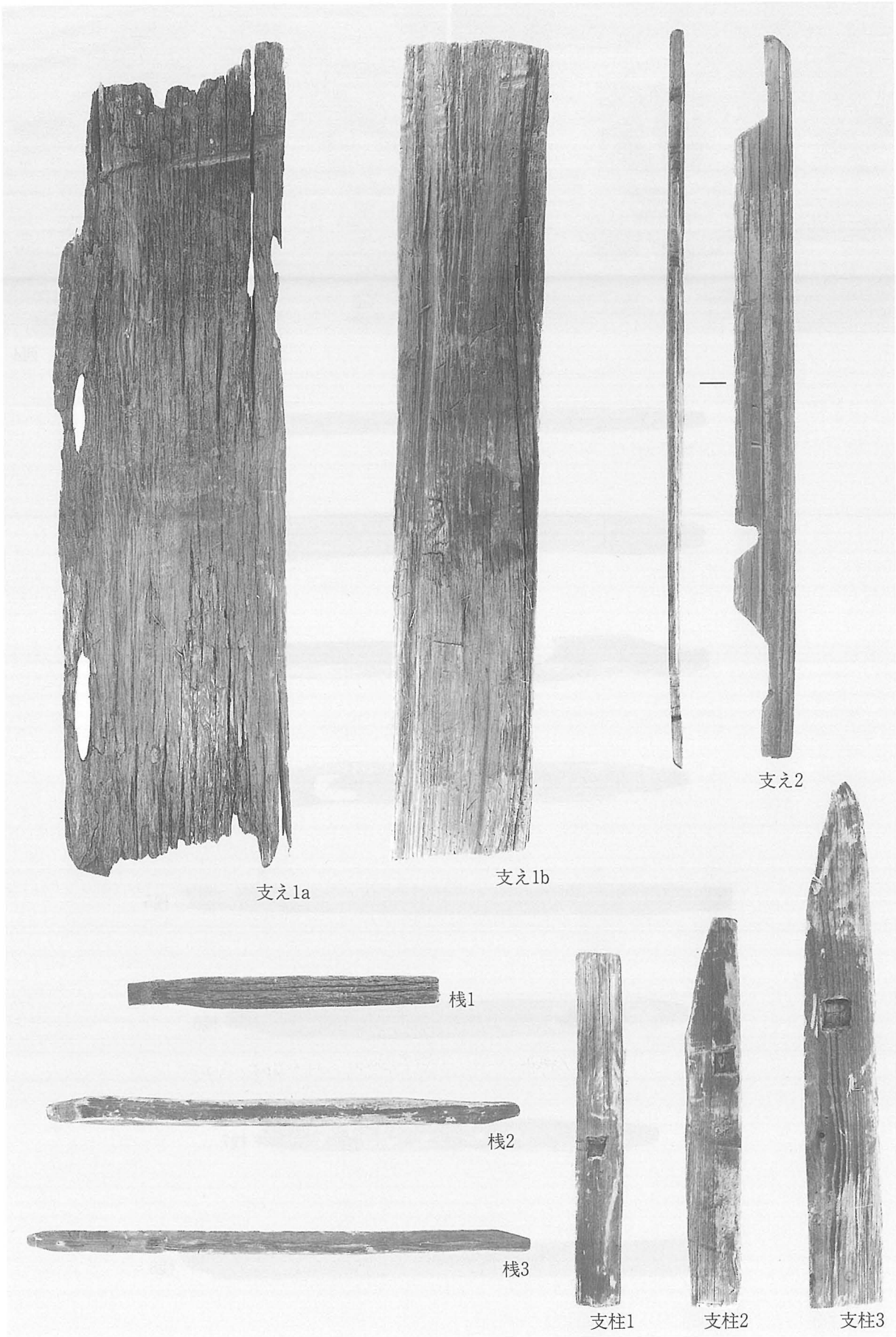
西3



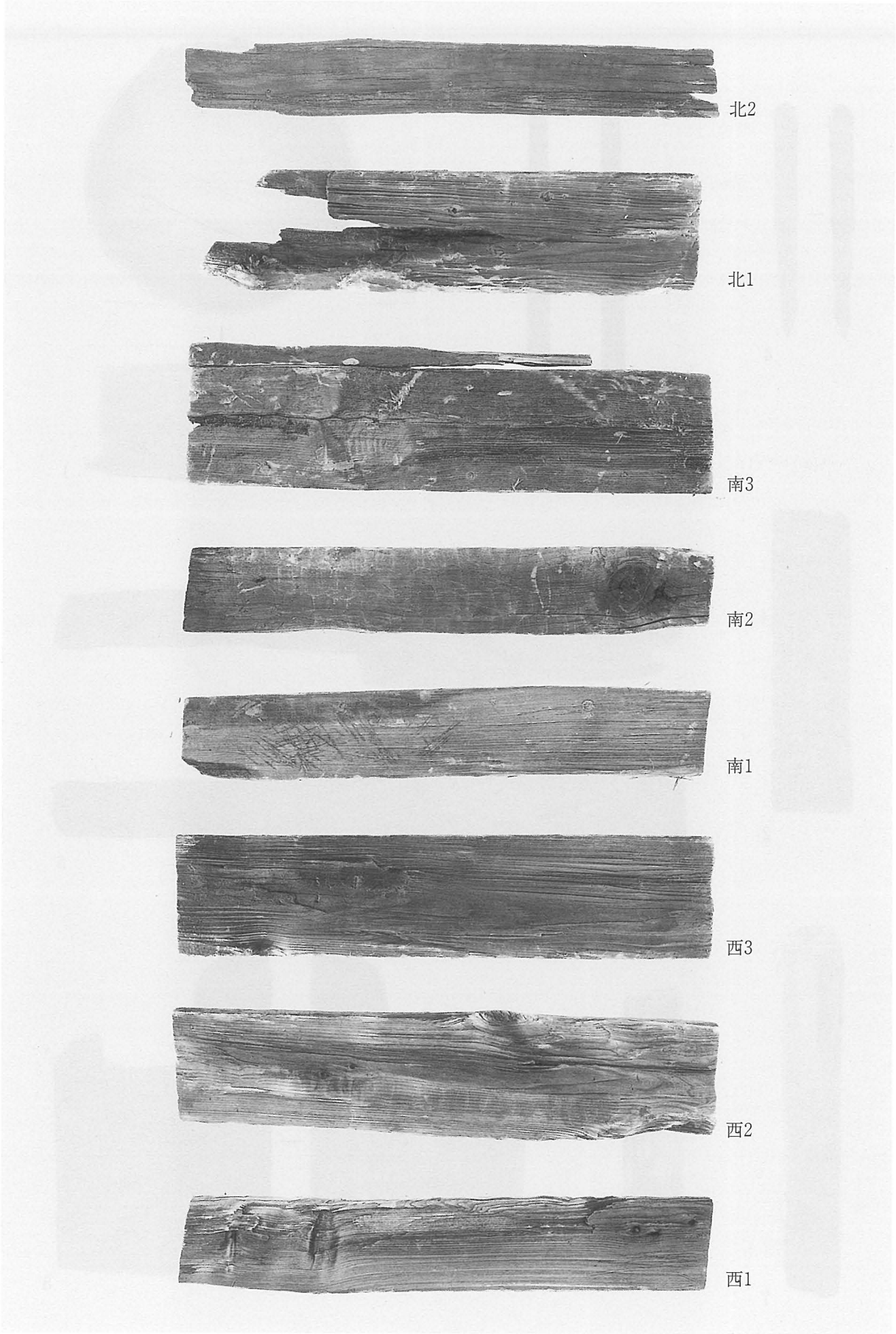
西4



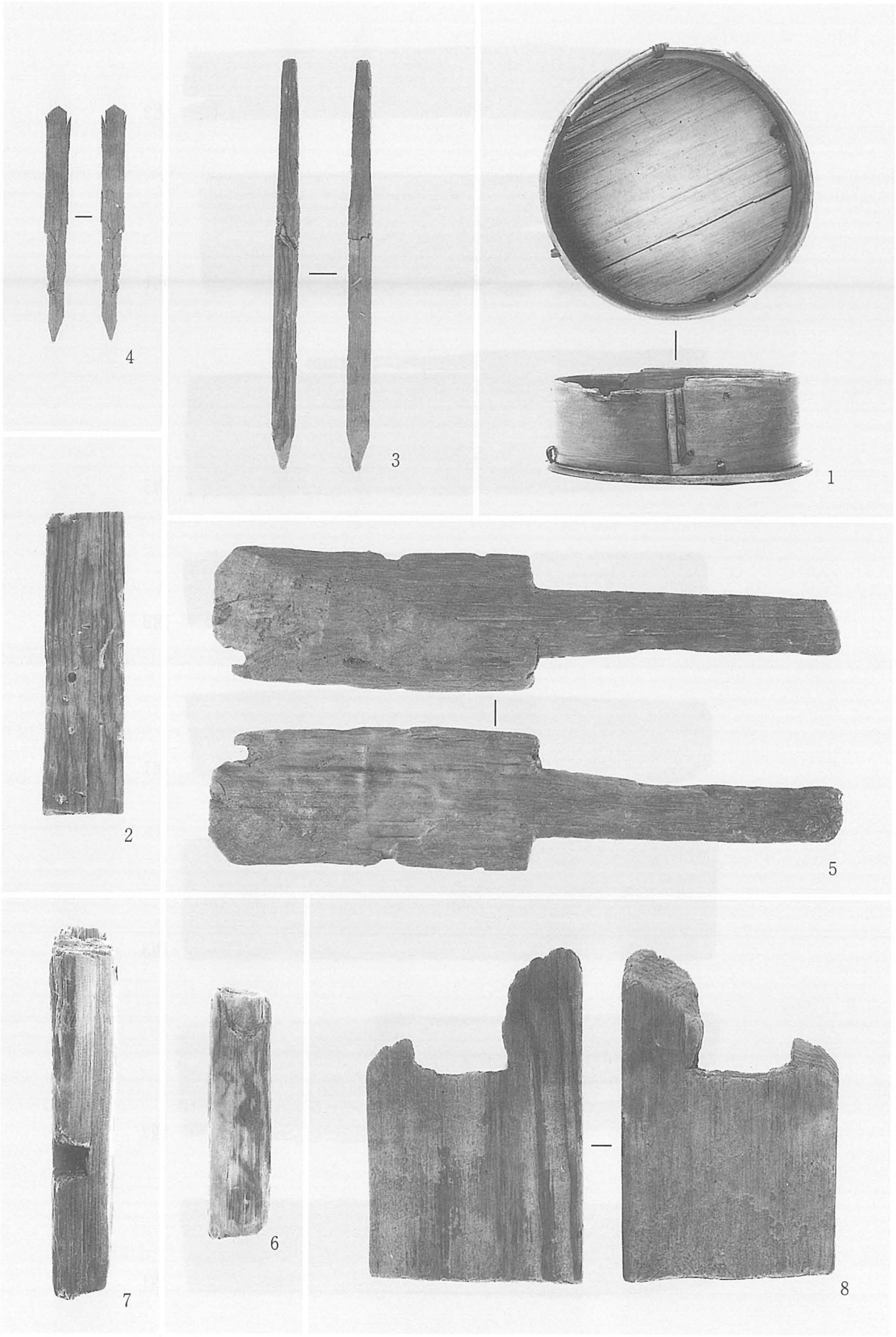
井戸５出土木枠　横板墨書（西3・西4）、上部横桟（桟1～桟4）、下部横桟（桟5～桟8）



井戸５出土木枠　支え（1a・1b・2）　井戸７　横桟（桟1～桟3）、支柱（1～3）



井戸７出土木枠　横板（北1・2　南1～南3　西1～西3）



井戸１出土木製品　曲物（1・2）、斎串（3・4）、用途不明品（5～8）

東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告
－平成12年度－

平成13年３月31日

発行所　東大阪市教育委員会
印刷所　(株)近畿印刷センター